

---

# 紅き翼？七英雄じゃろがいッッ！

ひよっここ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅き翼？七英雄じゃろがイツツ！

### 【Nコード】

N1610T

### 【作者名】

ひよつとこ

### 【あらすじ】

このお話はなんてことない青年が、神様の暇つぶしにいきなりチート能力をもらって『ネギま！』の世界に飛ばされて調子に乗ったり、四苦八苦したり、たまにはっこりしたりするそんなお話。

なお、この小説にはS a ・ G a要素を盛り込んだ小説を普及させる狙いがあります。

だから原作設定を無視、または都合良く解釈、独自の設定をしてい

ます。それに耐えられる人はどうぞお付き合いください。

転生時トラックに挽かれるなり、神様のミスなりでいきなり死ぬのはあんまりだ  
ロマサガとネギまの設定の突拍子の無さって似てんじゃないかね？  
これがこの小説のキツカケだったりします。

二次創作なので原作通りいかない場合や改変される設定がでてきま  
す。

そんな問題だらけの処女作ですがどうぞ。

転生時トラックに挽かれるなり、神様のミスなりでいきなり死ぬのはあんまりだ  
ある遺跡がある。

内壁は蔓や植物の根が突き破り所々剥がれ落ちている事から時間の  
経過を感じさせる。

そして、奥まった広場で佇んでいる男が一人。

名はノエル

七英雄が一人

魔法は使わず己の身と技だけを駆使し闘うバトルスタイル  
また、剣の技量も高い。

そしてテレビの前でゲームをする俺

「ノエルさんよオ、術無し縛りで来たから放っておいたが…もう力  
ウンターは使えまい。」

ゲーム画面には剣を構えるノエルに殴りかかる皇帝達が映っている。

『音速剣でボロボロにされてんだから早く退却しろよ』

なんて思いながらも、サクサク倒してセーブ。

『よし、今日はここまでだなあ……。明日にクリアは取っとく』

そして眠りに就いたんだが……。

俺は周りを見ても森、森、森で夢の世界をさまよっている真っ最中。何故か疲れを感じるし、人っ子一人居やしないからビビりながらだけ……

そんな感じで歩き続けたらついに森を抜けたら、土いじりをしてい  
る第一村人発見！  
バアチャン

「すいませ〜ん。どこか人が居るところ知りませんか？」  
んで、浮かれて近づいた。

「お？や〜と来たかい  
遅っせえよオ。そんじゃまあ……始めようかねえ」  
そのまま『どっころらせ』とのんびり立ち上がりながら俺に話しかけてきた。

え？何いきなり飛ばしてるの？（　　）

「まあ、早え話違う世界やらに行ってみたいと思ったことはないかねえ？」

：  
：  
：「ということは流行りの転生もので私はあなたに殺されたんですか？」  
「？」  
「イラっときたが下手に出ることが今は大事だ。」

「んな訳ねえよ。自分の趣味で人間殺してたらキリがねえよ。あんたは生きてるよ。それから無理やりな敬語もいらねえよ。むず痒くなる。」

言った後、婆さんは少し疲れたようにため息を吐いた…  
もしかしてこのばあちゃん凄いひとなの？  
普通にぶっ殺されたと思ったんだが

「そう思うのも無理ねえわな。殺さなくても夢の中の時間と場所をいじればそれで十分なのに最近の若い衆は面白がってワザと……」

その後にも話は続いたが途中から愚痴になったので省略すると

1：夢の中は、時間の流れが曖昧で人一人の一生を体験させようがカップヌードルが出来上がるまでの時間だろうと関係ない。起きたら次の日になっただけ。

2：今なら自分の意志で起きることができる。送った先でどんな結

果になろうと夢だから大丈夫  
よくある精神が死んで廃人という『ひっかけ』はしない

3：話し合った結果チートを持たすが、それに見合ったハードな世界に送るの3つだった。

ここまで聞いて俺は決めた。

「婆さん、俺を異世界に送ってくれないか？」

俺の答えを聞いた婆さんは一瞬考える素振りを見せる

「能力は何にするんだい？できれば『絶対』とか『因果』がとかそういう概念的なチートつまり宝具は辞めといた方が利口だよ。送った瞬間死にかける、もしくは死ぬ世界でも構わないならいいけどねえ……」

(。。。)

まあ、痛いところ突かれた。無限の剣製したかった…ならばと、ああでもない、こうでもないと話して結局寝る前にやっていたSa・Ga系の全能力、知識で落ち着いた。

「まあ、これならギリギリの酷さだねえ。なら移転先は『ネギま』とかいう世界だよ。じゃあ、頑張んなさい」

そこまで聞いたら急に意識が遠のいて俺は飛ばされた。

Side 婆さん

久しぶりに人間を送ったが、余りにもチート過ぎるから少し世界に手直しを入れたりこれから休みに退屈する暇が無くなるから嬉しい



ねえ…

仕事して土いじりながら様子を見るとしてこの子はどれだけ楽しませてくれるか心躍るよオ。

とにかく、あの子はチートで楽勝なんて思っているから痛い目もみるといつになったら気付くかニヤニヤが止まらないよ。

さあて、あたしもやる事やってこようかね。

## 主要キャラ設定 紹介（前書き）

題名通りの紹介です。

## 主要キャラ設定 紹介

主人公 ノエル 本名不明

この小説の一応メイン主人公。

ロマサガをして寝ていたら謎の婆さんにSa・Gaシリーズの全技、魔法、知識を使用制限無しという酷いチート能力を焼き入れされネギま！？世界に飛ばされた青年。

ただし、ネギま！？世界に関する知識は欠片もない為展開に翻弄される予定。

というより、婆さんがそうやって楽しんでいるが本人自覚無し。

飛ばされた当初は年齢17才程で世の中を知っているようで知らないそんな多感な年頃から幾つもの出会いや事件を通して成長する…  
といいなあ。

容姿も原作に登場するノエルそっくりで、逆立てた短髪

肩当てと手足が武者鎧から切り張りしたような陣羽織を着用

巨大で『モンハンか！？』と突っ込みたくなる大太刀も完全装備で黙っていれば2枚目

口を開けば3枚目。戦闘に関してはロマサガの技、魔法を駆使し、ゲームでは単発行動しかできないが、ここはある意味リアルなので組み合わせでよりえげつ無い攻撃方法に昇華させている。

今は道場主の市民として生活。

ただ、請われて現場に赴く場合もある。

弟子に普通の人間なら殺される程の攻撃をチートな体で受けとめる。新参、古参問わず全ての弟子達からは尊敬されているが一部からは某鉄拳に登場する木人のようなサンドバック扱い

魔法世界でも旧世界でもない別世界の生まれの人間なので、創造主のアレも効かない

慢心しない創造主とガチで殺し合ってもギリギリ勝てるくらいで寿命も無限なまさにチートオブチート

ボクオーン

まず最初にこの小説で無くてはならないキャラだと思い作成。

いきなり放り込まれ右も左も分からない青年が1人生き延びることはできるのか 無理だ、彼には導くポジションの仲間がいる 老練なボクオーンだ！

まさに爆誕したキャラ

この人は本編でこそ語らないがウエスペルタティアの王宮に勤める優れた研究者であったがメガ口の陰謀と同僚の裏切りで全てを失い追放された過去を持つ。

典型的な出る杭は打たれるの人

その為ノエルに会ったばかりはとんでもない人間不信で腹黒い人だったが、その内に主人公を手がかる助手から手が掛かる仲間……という段階と森から抜けた世界を経て昔の情熱と性格を取り戻す。

本来の性格は人情派ツンデレ爺で人を教え導く良い人。

彼には技術チートを担当して貰った。

地上戦艦ならぬ浮遊戦艦が良い例。

建国以来バレンヌ帝国はウエスペルタティアと同じ道に進まぬよう陰日向を選ばず活躍。年寄りの知恵袋。

晩年は研究に没頭し心残りはあるが最終的に満足できる人生を送る。

S a ・ G a 1 (前書き)

ねがまま感ゼロです。

「歩いてても歩いてても終わりが見えにい！  
森を延々さまよってるなう。」

そんな独り言が思わずこぼれた主人公ことノエルです。

婆さんの異世界トンネルを抜けたらそこは樹海だった…。

何言ってるか分からねえが、【夢だけど】夢でも幻覚なんかじゃない紛れもなく現実ツツ！！

第一目標に『人に会いたい』。

作戦は『命大事に』を掲げてとにかく歩き続けている。

それでも木ばかり…

目に優しくとも精神衛生上優しくない。

だが、剣やら軽装鎧やらの装備品にある筈の重量感を感じず、体は全く疲れない。

この体の地味なチートを実感できた。

「ツルが生えすぎだし、ワケの分からない鳴き声もひっきりなし…」

少しでも立ち止まっていると、腹を空かした獣達の餌食になるかもしれない。

そんな不安を吹き飛ばすように、剣を振り回しながら進行の邪魔になる植物をバツサバツサと伐採。

己の直感…野性的本能が指し示す方へ進んでいる。

まあ…起伏がないならかな土地だったのが救いだっただよ。

だから、しつこいようだけど肉体的にはそう苦労しなかった。

だけど、よくよく考えてみて欲しい！

俺の中身というか精神は何処にでも居るシティーボーイ。  
地図無し、水無し、ご飯無しでロンリー山歩きは地獄。

最初に調子扱いて、『山が窪んだ場所…其処には沢がある！！藤岡弘隊長も言ってた！』なんて考え無しに進んだバチが当たったね。

もう日が暮れ始めてきた。

さっきまでは、お日様が見守ってくれたから大丈夫だった。

今は、ひたひたと夜の帳が音も無く忍び寄って来ている。

残念ながら、ノエルの目を持ってしても樹海の暗闇は見通せなんだ。

ていつか、そこらの茂みからガサガサ音が鳴る度に肝が冷える、背筋が凍る。



もうコレは『あ、こりゃダメかも分からんね…』と諦めた矢先。

「やった！休める場所キタ

（。。（

ツ！！」

完璧に日が暮れて真っ暗闇になるギリギリで開けた空間に出た。

そして、やっとのことで雨露、獣を凌いで休息出来る場所…

喜んで駆け寄ったら、ボロ屋を発見できた。

だが、ハッキリ言わせて貰おうか…このボロ屋め！

木で建てられたら造り…コレは良いさ。

けど、すぐ傍の切り株には錆びた手斧が刺さっているし、レンガの煙突からは蔦が巻き付いている。

「なんでき、バアちゃん。

マジでハード過ぎて、俺はもう死にそうです。」

当然、反応する者は何処にも居ない。

『ギヤーギヤー』、『ウォーウ』、『ニクーーーーー』

鳥、獣、それと明らかに聞いた事も無い…想像上のクリーチャって  
いうか、人語みたいな鳴き声が響き渡り、視線を感じるだけ。

……このままだとヤバイよね。

それにもう辺りは真っ暗。月光が照らしているこの開けた空間から、再び危険な森に入るのは嫌だ！

お化けが居そ…ゲフン、ゲフン…歴史を感じる佇まいに、漂う生活感が魅力の物件。

「仕方ないね、仕方ないよね…うん、心細いけど……」

中にナニが居ようが関係無い！  
決心したら即行動。

ダッシュで近づき、入り口を思い切り蹴破る気持ちで突入…素早く中を見回したが幸い、誰も居なかった。

「今日から此処は俺の城じゃー！ー！」

今日の成果は、チートの確認とボロ屋（拠点）に一番大事なことは、むやみやたらに歩かないという教訓だった。

泣ける…

S i d e ? ? ?

今日は面白いものを見つけた。

今日も森の奥地で、霊草の採取や食料をある程度集め終えて帰ってくる途中、1人の男が歩いているのを見つけた。

私はとっさに魔法を唱えて気配を消し、観察を始めた。

薄手の皮鎧に頑丈そうなブーツ、指がでるタイプのグローブ…ナックルガードとやらか？

そして一際私の目を引いたモノは、むやみやたら腰に差したデカイ剣…

それを完璧に操り、まるで剣舞のように木を切り倒しながら進んでいた。

見るからに山歩きや、山の幸を取りに来たという風でもない男がこちらをうろついている。

十中八九、ウザったい正義を押し付けるお偉い魔法使いか腕試しに来たバカか、私の首に懸かった金目当ての傭兵か冒険者だ…

奴は同じ所をぐるぐると周回しているが、近くの沢へ水も飲みに行かない…私が張った罠に気づいて、ルートを選別している証拠だ。これだけでも場数を踏んでいるのが分かる。

加えて夜まで木の実一つ食わず、水分補給無しで歩き続けたのを確認。

とんでもないタフネスと精神力を持っているのが伺える

「……………」

そして日が暮れるまで周囲を十分に歩き回った後、私の小屋が有る場所へと辿り着く。

「慎重になっているな…」

だが、ゆっくり進もうが、素早く進もうが最後に仕掛けた取っ置きトラップ…貴様は食肉植物の餌食に成り果てる。」

場数を踏めば踏むほど人は慎重に…むしろ熟練者はここぞという時、大胆不敵になる。

重力が有る以上は何人も地に足が付く…

空気が有る以上は何人も振動を発生させる…

踏み出したが最後、地面から伸びた蔓が雁字搦めにして、消化管の本体が丸呑みにする。

長年に渡って考えた最強の不意打ちトラップ。

森からの奇襲を警戒しながら、かなりの長考をしていた。そして結局、奴はダッシュで向かった！

「フフフ…あまりに稚拙、あまりに幼稚。」

その程度では届かんよ。」

幾度と無く侵入者を排除した鉄壁のそれで、今回も片が付く。

そう信じて疑わなかった。

あの光景を見るでは……

「バカな……」

どんな瞬動の使い手も捕らえてきた蔓が通じぬ捕らえた!？」

……奴の動きはあまりに速すぎた。

既に次に進んだ後……踏みしめた足跡が有った場所に蔓が殺到していた!

しかも予測する蔓を避けるようにジグザグ移動……スピードが落ちるはずなのに落ちなかった。

いや、瞬動は得てして方向転換が出来ない直線移動スキルだ!

つまり、奴は『只単に、全力疾走しているだけ』これは計算外だ…  
人の可能性は無限大と仮定しても、スペックが桁違い…  
ヒトとして、生物として有り得ないスピード…慣性、作用反作用の  
法則に当て嵌められない。

暫し呆然としてしまったが、次のセリフで引き戻された。

「今日から此処は俺の城じゃー！ー！」

堂々と待ち伏せを宣言するとは…：… 良い度胸だ。

ここまでコケにされたのは久し振りだ。

高い洞察力と出鱈目な能力、その胆力には清々しさすら感じる。

だが貴様の、奴等の思い通りには…研究成果は渡さん。

悪用されるのが目に見えている。

幾ら地の利があろうと今回はかりは相討ちも、覚悟しておくべきか  
もしれん。

ボロ屋にお邪魔して使える物がなにか勝手に漁ってみる。

内装はましな方で鍋とハンモックが1つずつ

どれも蜘蛛の巣が張ってないから、やはり人が住んでいるのだろう。

うーん、ジェイソンみたいな化け物じゃなければ良いなあ。

また、謎の階段を降りた先にはガレージ程度の広さを持ち、ゴミ一つ無いように整頓されてござっぱりとした地下室。

其処には、小さな押し入れみたいな棚があった。中身は水晶玉が5つ。

外側はボロ屋風に偽装されてたんだなあ〜と理解。

そして、今日1日歩き回って何も腹に入れてない事を思い出して、また腹が減るといふ悪循環。

こればかりは魔法で解消できないが食あたりなら消せるわけで……

上のボロ屋階層で見つけた鍋の中に液体が2リットルちょっと。

「今日を乗り切れば…乗り切れば大丈夫な筈。

ノエル、イツキマーす!」

ゴク、ゴク、ゴク…

「はう…げえ!?!」

ゴロゴロ、ゴロ…

「や、ヤバい…元氣、『元氣の水』」

うん、ミントとラズベリーが合体した謎の味を堪能した後に、腹を下すというお約束。

ていうか、腹壊しただけで済んで良かった。

みんなは、変なモノやとっくの昔に消費期限の過ぎたモノを飲んじやダメだよ？

チートのノエル・ボディーに感謝しつつ、気が緩んだのか意識を失うように眠りに就いた。

S i d e ????

「野郎、苦心して靈草を煮詰めて作った原液を飲みおってッ」

此だけでも万死に値するがまだ我慢だ…

何も考えず飲み干した事から場数を踏んだ修羅という線は消えた。

しかしその直後、見たこともない魔法を使っていた……  
こいつのスキルが大したことなければ…八つ裂きだ！

あ、おはようございます。



「……………」

ノエルです。

朝の目覚めはおおむね良好、取り巻く状況が最悪です。

家主さんかな？強面のおっさんに杖っというか、指揮棒っというか…  
…なんか喉元に突きつけられています。

なお、家主さん（仮）はこんな場所で暮らしているからか、栄養状態が悪いらしく痩せぎす。  
だが、全く弱々しい印象はない…

むしろ目は爛々としており、強い意志と生命力が感じられる。

「すみませんが家の主ですか？」

恐る恐る聞いてみる。

顔が一段と険しくなった。

うん…マジ物の家主さんだったらしい。

一応、変な水を飲んだことも謝らなければと考えて口を開こうとした時だった。

「人の家でくつろいでる貴様こそ何様だ？」

そうそう！鍋の靈薬は美味かったか？人の苦勞を無に帰してくれおつて！」

「ひいひい…あわわ」

喋ろうとした途端に

『喉に穴が空けられる』

そう感じるほど力を込めて杖の先を押し付けられた。

しかも返答によってはブツ放すという『凄み』を込めて睨み付けられている。

前の世界じゃこんな映画みたいな尋問方法は、抵抗されるリスクがある。

だからプロは基本的にしないと聞いたことがある…チートの力を使えば何とかなるかもしれないけど、ヘタレな俺は異世界から来たことと能力についてほぼ洗いざらい話した。

「旧世界人か……」

まあいい、面白いスキルを持っているようだ。

手を頭の後ろに組んでゆっくり、ゆっくりと地下へ行け。」

そのまま俺はおっさんに言われるがまま、水晶玉の部屋に連れられた。

バアちゃんはあの時、ちゃんとってた。

『ギリギリのチートと釣り合わせる為、世界はハードに変化する』  
分かっていただけ、こりゃあまりにもハードだったよ…

森というか樹海、丘陵地帯、姿無き獣達のプレッシャーしか堪能して  
ていない！

そんなネギま！とかいう漫画をベースにした世界だけど、もうすぐ  
魔法で頭を吹き飛ばされてたった1日でこの世とオサラバか…

だが怖いから目を瞑ってその時を待っていたら……

「私も鬼ではない。

君はこの世界の常識、魔法の基礎の基礎知識と生き残るために必要  
な知恵は欲しくないか？」

「それは本当ですか？」

いきなり話し始めた内容は、願っても無い内容。

その嬉しさから思わず、頭の後ろに杖を押し付けられてるのも忘れ  
て、振り返ってしまった。

『勝手な真似は許さん！』と、すぐに空いた手で拳骨された…  
自分が悪いのは自覚しているけど酷過ぎですよ〜

「ただし条件がある。  
君の魔法やスキルを見せ、研究させること。  
そして私の役に立ち 満足させることの2つだ。  
どうかね？それで数々の無礼と、鍋の霊薬の件は水に流してやらん  
事も無いぞ？」

依然として、削られた杖先を押し付けられているため痛い。

最初はチクチクくらいだったが、段々とその力も強くなっている。  
今ではズキズキくらいの強さにまでなっているな。

家主さんにとっては自分1人始末するのは造作も無いのだろう…急  
かされている、時間が無いのが分かる。

だけど

今ここにきて天から垂れた蜘蛛の糸を掴むべきか？

そして、掴まなければこの先どうなるか？

正直かなり悩んで…十分に考えた結果

「……わかりました。」

よろしく願いします。」

自分は受け入れた。

答えたと同時に、杖は依然として押し付けられたままだが力が緩み、大分楽になった。

「ほほう、賢い選択だ。まずこれだけは覚える！この世は賢い者が勝つのだ…。」

では自己紹介といこうか私の名はボクオーンだ。」

(・・・)？何…だと…

これは、あまりに出来すぎた偶然？  
それともバアちゃんの仕組んだ運命か？

ボクオーンという名に驚き、不自然な間を開けたのがいけなかった。

「どうした！！殺されたいのかッ！  
私はグズは大嫌いなんだ！！さっさと名乗れ！」

さっきまでの上機嫌が嘘のように激昂した。  
そして今度は頭ではなく、うなじより下…骨で守られていない首筋

に突きつけられた。

慌てて名前を言おうとして、再び驚かされた

「!？ あか ノエルです」

自分の名前を言おうとしたが喉から出てこずパニックになった。

今度は本当に殺される!!

俺はとつさのことで寝る前に倒した存在にして、今のボディーのモデル…【七英雄のノエル】が咄嗟に浮かび上がり、名前を拝借してしまった。

暫しの重い静寂が、コンクリート打ちっぱなしのような地下室を包んだ。

その際に自分は濃厚な死の恐怖から、知らず知らず大量の冷や汗を流して震えていた。

そしてどれだけの時が流れたのかな…

実際はかなり短いのだろうけど、かなり長く感じた無音の時が過ぎ

……

「ノエルか…」

これから覚えることは山ほどあるぞ？

何をつ立つている！早くついて来い！！

まずは貴様が無駄にした霊草の採取からだ。」

慌てて彼の後ろを付いて行くが、こいつが原作通りのボクオーンだとすれば……

霊草は麻薬ですかアアア？

だとしたら、犯罪の片棒を担ぐ事は避けられない…今更ながらに、かなりヤバい橋を渡ってしまったのかもしれないと痛感。

「霊草の外観はこうで、生えている場所の特徴はこうだ…間違えてそっくりな毒草を拾ってくるな。ゴミにしかならん…」

「あれ？毒草は要らないのですか？そのエキスを抽出して麻薬を…」

「……私の機嫌が良いうちに行け。さもなければ、手元が狂って殺してしまいそうだッッ」

「ひいひい！？」

そんな不安を抱えながら俺のネギま！ワールドでの新世界生活は幕を開けた。



## S a ・ G a 1 (後書き)

『ボクオーン』

草原のステップを走る地上戦艦を所有する糞爺。

非常に狡猾な人物で麻薬などを用いた金儲けを目的とする。

得意技は相手を操る『マリオネット』

全く関係無い街でイベントをこなしたら、身包み剥がれて戦艦の奴隷にされる。

玉座に辿り着いても

「す、すまん。私はボクオーンでも何でもないんだ。七英雄と名乗ってみたかっただけなんだ」

許さん！

ここで見逃しちゃう

「バカめ、甘いわ！！」 開幕水鳥剣 たわば！？

こんな感じで背後から奇襲されちゃいます。

通称〓ずる賢いボクオーン

『元氣の水』

状態回復のみで、毒や麻痺などの状態異常を元に戻してくれる術。  
消費術Pも2と少ないが使わない、使えない！  
ただ、この術にはエリクサーでも不可能な「スタン回復」能力が備わっている…らしいです。

作者が小学生の時に

『ヤバい！？HP回復しなきゃ！』

元氣の水

え？毒治ったのに、HPに変化無いじゃん！？なんで！？

あ、殺された…

テーテ、テーテーテー…うわあああ！？」

という感じに絶望の底に叩き落としてくれた魔法。

最強の名前詐欺。

個人的には触手よりもトラウマ。

『ニク！』

うん、ニクは挨拶です。

サイコ・メットでTVの前のアナタも楽々！異文化体験（はあく）と  
なんとお値打ち！仲間一体と引き換えです！

S a ・ G a 2 (前書き)

やったね！魔法の描写があるよ。

あ、どうも！

ボクオーンと男二人：狭いボロ屋で生活しているノエルです。

ボクオーンと出会った日からあつという間に一年が経ちました。

そして自分に科されたことの1つ：ボクオーンを満足させること。

霊草をしこたま採りに行かされた次の日から：早速、S a ・ G a の魔法を見せて、弱いモノを教えさせられた。

その時の反応はアレだったね。

それまでは如何にもな老練魔法使いオーラを出してたのに、『ウヒヨオオオオ！』って感じに喜んでたのを覚えてる。

尚、その時ボクオーンが語った感想ですが

『便宜上、私の魔法を従来型とする。

貴様の魔法は詠唱が要らん、魔法が不得手な私でも高い威力：

魔法媒体も不要で消費するエネルギーの感覚も違う。

なかなかどうして、興味深い。』

覚えてる風だとこんな感じでした。

因みにボクオーンが集めてる霊草は傷薬の原料。

大半は自分が使ったり、売ってるけど、金が無くてどうしようも無

い子供達に配るらしい。

一度、冗談半分で麻薬の材料？って言ったら、きつと本気でブン殴られました。

彼は用法容量を正しく守って、痛み止めに加工して使っています。

はい…ボクオーンさんは見掛けの割にいい人。  
逆に見た目と雰囲気で損するタイプの方でした。

だから僕は、犯罪の片棒は担いでいない清らかな青年ですよ？

そして見返りとしてこのネギま！世界：魔法世界での一大勢力メガロメセンブリア、従来型魔法の知識とサバイバル技術。

サバイバル技術は本当に役に立ってる。

たまに森の中で見つけたデカイ鳥をシメて晚餐に使うから。

ただし魔法の中でも仮契約バクティオー？だったっけ…そんな名前の技術には心底呆れた。

仮契約バクティオー

簡単に言つと本命のパートナー…命を賭けるからバディの方が近いのかな？

そんな存在が見つかるまでの一定期間をしのぐため、この人で良い

か確かめるためのお試し期間契約。

コレがまた酷い！

契約方法は…まさかのキス。

触れるだけのバードキスでも良いらしいからそれが主流派だけどさ

バカなの？

アホなの？

ふざけてんの？

この魔法を最初に考え付いたウエスペルティア伝説の女王様アマテルは、ロイヤル・ビッチなの？

ビッチだ！紛うこと無き真性のビッチ！

ホントさ、キスって何なのよ？

お前のせいで2千年間…魔法世界の津々浦々で、愛無きキスが繰り広げられてきたんだぞ。

もっと魔法っていうのははさ、羊皮紙に当時者達の血文字で名前書いた後うんたらかんたら…

魔法陣の中で互いに宣誓してうんたらかんたらの後、厳かに契約するモノなんだよ。

それがさ…

「はあい！ イン。」

「んにゃあ！ ヤサン！

朝から浮かない顔して…んんん…どうしたんだい？

「実は今…スツゴい困ってるの…」

「キサリ、キミにはそんな顔…似合わないさ！」

「デラ…」

「そうだ！ 仮契約しよう！

キミの悩みは…んんん…僕の悩みさ！」

「…」

「……………！」

『ブチユーーー（はあと）』



きつとこんな感じに違いない…ぶっちゃけ、かなり俗っぽいね。

想像の斜め上に行くはっちゃんけぶり。

他にも仮のクセに出てくる魔道具は、本契約のそれと性能を比べても何ら変わらない。

仮契約期間っていつまで？ マスターが契約を解くまでか、死ぬまでよ（はあと）。

うん…欠点が無いね。こりゃ仮契約を横行するワケだわ。

尚、ボクオーン曰わく

『金にモノを言わせて従者を増やす輩の増加が止まらない…人攫いによる素養の高い子供の拉致も一向に無くならない。』

これは両者に密接な関係があるからで、反抗的な者には無理矢理契約した後洗脳は良くある話し』

酷い話しを丸1日聞かされた…

それと、貴様は基本スペックからして桁違いだからどんな魔道具が

出るか分からん…気を付けるよなんてデレられた。

色々、語りたいがひとまず置いてこう。

そして一番大事な事は…ボクオーンの研究、生活費の足しになることをしる！

当たり前ですね…食い扶持が増えるんだし。

魔法教えたから働きたくないでござる！なんて言えない。

だから、ダメ元で近場に転がってる石つところに『タッチゴールド』をしました。

結果…

岩に使ったら体積の殆どを金塊に変えることに成功しました！！

ハツハツハツハ、金塊ゴロンゴロン…これでウツハウハやでええ！

死ぬまで楽に暮らせる！

そう考えてた時期が自分にもありました……

「どっこいらの〜しょーっ」と

軽装鎧にナツクルガード、トレードマークの大剣に【5歳児くらいの巨大な金塊】を背負う。

【5歳児くらいの巨大な金塊】

これで準備は万端。

「何か食材の他に欲しい物はありますか？」

ボクオーンに尋ねてみる。

「一応、家主さんだからね」

「無い。」

「はいはい。」

いつも通りの淡白なお返事でした。

因みにコレは

『美味しいモノを買ってこい』

というサイン…ボクオーンは意外にも我が儘なんです。

「では、今日も街へ行ってきました。」

後ろ手に扉を閉めるとのんびりと歩き出す。

そういえばこの開けた空間はボクオーン曰わく箱庭。

食肉植物まで居るらしいですが、どうやら同系統の植物エキスを体に散布すれば大丈夫らしい。

実際、呆気なく森を抜けることが可能になりました。

ワケ分かんない植物に会わなかっただけでも、あの日はラッキーだったんだね…

「ういせ、ういせ、ういせ…ん？」

今日もあっさり森を抜けて、すったらこったら街に向かって進んでいただけ…

「へへへ、兄ちゃん…随分重そうじゃねえか。」

「なんなら俺達が代わりに換金して来てやるから寄越しな！」

「ただし、テメエにはびた一文渡さねえ！」

俺達が面白いおかしく使い果たしてやるぜエ!!」

「おつよー！これだけありあ、1月は遊んで暮らせるぜー！」

「「「「「「ギヤツハツハツハ」「」「」「」

「……………」

ひ、ふ、み、よ……………今日は行きにまず30人か。

察しの通り野党の皆さんです。

もう、いつもの事だから流石に慣れたよ。

逆に出てこない日なんかは、どんな化け物が現れるか不安な自分は明らかに末期です…

けどさ、元一般シティーボーイとしては、あまり人殺しはしたくないだよね。

だから…

「すみません、退いてもらえますか？」

淡い希望を込めて『お願い』した。

しかし…

「ああ〜？退くわけねだろうが。」

その金塊…大人しく置いてくなら命だけは助けてやらあ！」

「……………良〜く見りゃ、なかなかババア受けしそうな男前だな。  
決めたぜ、今日のノルマはお前だ！」

「「「「「へっへっへっへっへ！！」「」「」

野党達は各々がナイフ、剣、杖、得意とする得物を構えた。  
そして下衆な笑みを浮かべながらプレッシャーを与え、いたぶるよ  
うにじりじりと此方へ距離を詰めてくる。

「あ〜あ、せつかくお願いしたのに全然ダメだな。」

「しゃらくせえ！やっちまえやあああ！！！」

「「「「「うおおおおおおおおお！！！！」「」「」「」

やはり手慣れた奴らなのだろう…親分らしき男の号令一つで一気に  
野党達は走り出した。

「慌てず騒がず…『ウィンドダート』」

従来型の魔法の射手と似ているSa・Gaに登場する風の基礎術。

不可視の風の針…というより槍を無数に創り出すと、野党達の膝からしたを狙って撃ち出す。

理由は簡単。

前の奴らは転けた際に踏みつぶされて死ぬし、後続にもちらほらそういつとろい奴は居る。

向かってくるスピードも一気に落ちるし良いこと尽くめだよ。

「ひいい、魔法使いだ！一気に仲間が殺されたあああ。」

お、あっさり恐慌状態に陥ったね。

魔法1つで優位に立てる…これから力も上手く使おう。

「嫌だ！俺は逃げる！俺…『ウィンドカッター』へべー!？」

逃がしません。

この世界は善良な人達さえも人権が無い世界。悪人ごときに有るはず無いですね。

というワケで……

「『ウィンドカッター、ウィンドカッター、ウィンドダート』。」

真空の刃、真空の槍を手当たり次第、目に付く人型に叩き込んで……

「ん、今日も悪は滅びた……  
うんせ、うんせ、うんせ、うんせ……」

街はもう30分で着く場所…のんびりと歩き出した。

「はいよ…30000Dpだ。」

ボクオーンの家に戻がっていたから勝手に拝借、持参してきた丈夫な革袋。

底の方からジャラジャラとやかましい音を鳴らしながら金貨が入り、パンパンになる。

「あ、どうもありがとうございました。」

腰のベルトに袋を縛り付け、左手で落とさないように…スられないようにしっかりと握ると店を出た。

今の店は怪しい銀行。

換金と言っても地方の金貸し屋だ。



3000Dpなんて大金をポンポン用意出来る訳ない。

だからあの店は手数料と引き換えに金貨、銀貨、銅貨とあらゆるタイプの貨幣を自前で製造する…

表向きは銀行で裏の顔は闇の造幣局。

ここら辺の区長さんも兼ねているらしく、かなりヤバいね…

けど、この街全体がこんな感じだから

『へ〜、貨幣造るなんて器用な機会持つてるねえ。』

という感じで大したこと無いらしい。

そして、大通りから一本中に入った狭い路地を抜けた先に有る。

道は暗い。

目の焦点が明らかにおかしい住人。

ゴミに頭を突っ込んで動かない人…きつと寝てるに違いないよ。

此処で迷ってふらふらし長らく歩いてたら、カモられた果てに何される分らないらしい。

初めて来たときはボクオーンの指示で金塊背負ってたから、太い客認定されてピアスを貰った。

通行手形兼分かり易い大事な客マーク。

たまに『ジイツ』と見られても、すぐに何処かへ行く…効果有るんだろつ。

すぐく中東とか、某ゴッド・シティーな感じで堪らない。

まあ、今日も裏道では何も無かった。

問題は表通り……

食材を買い込んで、ちよつと昼飯を食べて帰ろつとしたら案の定…

「なあなあ、頼むから金貸してくれよオ！」

右に眼帯ハゲの亜人

「……………」

真ん中に自分

「おうおう！あんまり渋るようなら、俺の『お握り』喰わしてやつても良いんだぜ？」

左にはチリチリパーマな亜人

如何にも『ストリートファイトなら任せろ』と全身からアピールするマツチヨマンに肩を組まれている。

この程度の『ゆすり』はこの街では良くある事。

昔は感情の赴くまま再起不能になるまでボッコボコにしてた。

けどそれは間違いなんだ！

周りに迷惑掛かるし………汚いから触りたくないのが本音。

だから、どうすればいいか…考えた。

そして……

「…テメエらの目が気に入らねえ！

俺の名を言ってみろオオ！！」

大抵のチンピラは俺にメンチを切ろうとして後悔する。

「「ひいいい！？」「」

ほらね…情けないくらいに縮み上がっちゃってるよ。

「俺の目を見る！

俺は貴様等のようなチンピラが大ッ嫌エなんだ！」

自分が見る必要は無い。  
ただ対象と目が合うか、目を見られれば効果は出る。」

「「あわわわわわ…」」

こちらで仕上げだ。

「バラバラにされたく無けりゃあ、とつとと失せやがれイ！」

「「ひ、ひえええええー！」」

かなり体格の良い男2人が、まるで子供のようにみっともない悲鳴を上げて転びながら逃げていった。周りで騒動の行方を見ていた見物人に大笑いされているのも構わずに。

「ふう…助かった。」

『凝視』が使えて良かったなあ。」

半年前…遠くからチンピラを眺めたりして実験。  
バアちゃんのチートは拡大解釈されたく、『敵の専用技』も使えた。

それからは対・街のチンピラ、対・少数の野党と幾度となくお世話になってるし、嬉しいっちゃ嬉しいよ？

だけども…

「『粘液』とかは使いたくないなあ…使えるワケないよな？」

試したくないし試さない！

自分は誰が何と言おうと、あくまで『ヒト』なんだから。

そんなある日……

野党が現れないパターンの日が訪れた。

こういう日は竜種が出たり、森からはぐれた食肉植物を見掛けたり  
散々な目に遭う…

嫌なジンクスが有る日

嫌だなあ、嫌だなあ〜とってた、その日の帰り道に案の定さ…

「……………」

「貴様が噂の極悪人だなッッ！」

日頃の悪逆非道の証拠は揃っている！

我等は『正義の魔法使い（マギステル・マギ）』……！！  
大人しく正義の鉄槌を受けるが良い。」

人数はざっと15〜8人くらいで全身黒のローブに身を包んだ男を筆頭に、騎士服や魔法少女風の奇抜なファッションをオサレにこなす集団が現れた。

無駄にカッコいいポージングというオマケ付き。

背景で爆発が起これば……いや、そんな場合じゃない！

何にしても……変態だあああ！

魔法世界の裏側の皆さん変態が此処に居ますよオオ！

変態さん来ないでええ！

自分も胸から肩した守らないで腹丸出しの鎧、ナックルガード、ネタとしては最高のドデカイ剣……

ちょっと変態仲間っぽい所も有るけど違うんです。

自分はコレしかピッタリの服が無いんですうう！

例え変態でも変態という名の紳士ノエルなんです！

ていうか、日頃の悪逆非道って何さ？

野党を殺したのは自己防衛の為…過剰防衛？そんな言葉知りません。  
街中で暴れたことも防衛の為…それに被害を出したのは九割チンピ  
ラ、五分自分、残りが乱入者  
あれ？鼻屑目に見ても9：1で非は無いんだが。

.....

.....

ふむ、日頃の行いに悪なんて文字が見あたらないな。

彼らは野人でない。

理性が有るなら文明人…なら、誤解も解けるはずさ。

だってこの人達は『正義の魔法使い（マギステル・マギ）』！  
腐ってもちびっ子の憧れの職業No.1なんだから！

それに、口はご飯を食べる為だけに有るんじゃない。

言葉を発して心を通わす為の重要な器官…コミュニケーションは大  
事。。

それでは、これ…

「それは誤…「だまらっしゃい！商人ギルドの長からの正式な依頼  
よ！！今更言い逃れなんて出来ると思わないことね。」……………」

ダメだった。

魔法少女風ビッチの一言でなんか攻撃態勢まで取ってるんだが？

「皆の者、今こそ裁きの鉄槌を振り下ろす時！」

『戦いの歌』  
カントゥス・ベラークス

なんだこれ？

『氷神の戦鎚（マレウス・アクイローニス）』

氷の塊が…

『白き雷』  
フルゲラティオー・アルピカンス

雷の束が…

『水精大瀑布』  
マグナ・カタラクタ

とんでもない量の水流が…

『燃える天空』  
ウーラニア・フロコシス



荒れ狂う火炎弾が、リーダー格の黒ローブの号令一発で撃つ魔法使い共

手際も良いからそれなりに場数は踏んでるのが伺えるし、問答無用か…  
なら俺にも考えが有る！！

「『ファイアウォール』！！」

前方に薄い…向こうを視認出来るほどに薄い、縦横の幅はかなりのモノを誇る炎の壁を発生。

ドドーン、ゴシヤ…バリバリバリ！

爆音と砂埃が舞つのを見て、奴らは俺を仕留めたと確信しているだろう。

何せあの速攻…。

普通なら間に合うワケが無いし、仮に間に合っても柔な張りぼてクラスというのが従来型の通説。

だが俺を… Sa・Gaの魔法を、そこらの魔法と一緒にするなよ？

まずは小賢しい魔法をシャットアウトするための防壁を作った。

奴らの魔法はことごとく赤壁に阻まれ俺には届かなかった。

次はこちらの番だ…今日の俺は一味違っぞ！

『練気拳』の恐ろしさ…味わうが良い。

「え？」 「きゃあ！」 「そんな!？」 「ぐうおお!？」

ドカ、バギヤ、グチャ、ドグシャア！

今の攻撃は単純な部類。

気力で引き寄せた魔法使い達を炎の壁で迎え入れ、例外なく鉄拳を浴びせた後…帰りに再び炎に焼かれて、逝く。

ゲームとは違う。

リアルだから出来る戦術。

だがタフな奴が1人くらいは居るもんだ。

「有り得ない…

障壁を完成させ、攻撃に転用するなんて、うう…技術的に有り得ない！」

ただ1人生き残った男に炎で焼かれた様子は無い。

きつとアーティファクトが完全炎耐性だったのだから、肋が刺さったかして臓器にダメージを負ったらしく半死半生…血反吐を吐いている。

「悪いな…俺もみすみす殺される気は無いんだ。

アンタの身体はただ朽ちない。再利用してやる。」

「……ゲホ、ゲホ」

「じゃあな。」

ウィンドダートを倒れ伏す男の背中へ幾つも撃ち、始末……ボクオ  
ーンが研究材料を欲しがっていた為、持って帰った。

その日はいつに無く、腰にぶら下げた金貨と足取りが重かった。

Side 商人（盗賊）ギルドの長

この一年…妙な若造がほぼ毎日、欠かすことなく街へやってくる。

ただの若造なら捨て置いた。

来る場所、帰る場所が問題だ…街から1時間ばかり行った先に広がる『化け物の森』。

あそこから歩いて来て歩いて帰る。

行きは大なり小なり、日によって違いは有るが金塊を携えて。

帰りは、革袋をギチギチになるまで詰め込んで、食材を買い込んで

……

どうにかして若造から取り上げられないかと…部下の盗賊共を何度かけしかけた。

結果は例外なく失敗。

僅かばかりの生き残り共から得た情報は

かなりの魔法の使い手

普段は惚けているが、恐ろしい眼力を秘めている

だから今回は正式な野党の討伐として、魔法使い達に依頼を出した。

それも、犯罪者がたむろするこの街にて腕利きと名高い魔法使い達に依頼した。

報酬は取り上げた金貨からで良い…まあ、そんなモノは端金。

化け物の森には金脈が眠っている。

でなければ、金塊の量に説明がつかない。

この仕事が終わった暁には本国の役人に金を握らして、泥臭い稼業から抜け出すのも…

この街の支配者として君臨するのも…俺の自由

だが世の中上手く行かねえモンだ…

大枚叩いて雇ってやったのに、あっさり返り討ちにされやがった！！

糞忌々しいッツ!!

机上には赤字だらけの帳簿、  
葉巻からは紫煙が立ち上り、部屋中を満たす。

「世の中は金、金、金だ…それも大金が必要だ。  
亜人の奴隷はいい金になる…久しぶりに現場で憂さア晴らすか。」

丁度、シーズンだ。遠出するのも悪くない。

「ふう……………」

力を蓄えるから見逃すが、必ずコケにしてくれた借りは返すぞ。若造!

## S a ・ G a 2 (後書き)

### 『練気拳』

気の力で引力を操り敵を引き寄せ、気で強化した拳と斥力を込めてぶん殴る。

その際に遠くに飛ばしてもよし。引き寄せ続けてオラオラするもよし。

きつとリアルで有ったら、移動しないでチャンネルとかが取れるからロマンと実益を兼ねたオイシイ技

### 『タッチゴールド』

触れたモノを主に石化、副作用で金に変わる部分がある。

日常生活だけでなく、戦闘にも使えるナイスな奴

覚えてたてでは車のタイヤほどの体積のモノに使って小指ほどの金が採れる…そんな設定。

### 『ファイアウォール』

前面に巨大な炎の壁を作り出し、冷気と高熱の攻撃を無効化する。レベルが上がると壁が炎を噴出し、敵全体を包んでダメージを与える効果もある。

攻撃よりも防御に重点を置いた術。

『ウインドダート、ウインドカッター』

風の針、風の刃を作り出し、敵一体に飛ばして攻撃する風の基本術。術レベルが上がると攻撃回数が増え、威力も飛躍的に上昇する。

『正義の魔法使い』

マギステル・マギ

ネギま！設定では有名なNGOは勿論のこと、国連にも支部が有る方々。

腐ってやがる……

貧弱一般魔法使いの憧れの職業。

分かりやすく例えるなら…アメリカ人のポリスマンやファイヤーマンに対する認識と同じ。

成るだけでステータス。

けど、メガロメセンブリアの手駒

当たり前だけど極右、極左な人達も中には存在している。要はバランスが大事。



S a ・ G a 3 (前書き)

ぼちぼち行きますか。

散々な目に遭ったけど今は夕食時…

「ノエル、今日はやけに静かじゃないか。  
何があった… 仏の事も気になる。話してみる。」

肉と野菜のスープをスプーンで掬い、冷ましてから啜るボクオーンが問い掛けてきた。

「実はな… 今日の帰り道に正義の魔法使い（マギステル・マギ）って奴らから襲われた。」

何気なく話したが、ボクオーンがピタリと動きを止めた。  
しかも、初めて出会ったあの日以来見たことが無いくらい険しい顔をしている。

部屋中には重い沈黙。

「正義の魔法使いと確かに言ったのだな？」

「え、ああ、くどいくらい言ってたから間違い無いけど… どうしたんだ？」

ボクオーンは険しい顔のまま目を瞑り、溜め息を1つ吐いた。

「そうだな…まだまだ先だと考えていた。

だから【正義の魔法使い】については、教えていなかったな。メガロメセンブリアについては話したな？」

「おう…」

「本国はそこだ。

其処から各地に派遣、統括されている。

表向きは犯罪者の取締りと紛争への介入、弱者の救済を掲げている。

」

「ボクオーンが言うからには裏が有るんだろ？」

「……大半の者達は気付いてないから、懸命に活動している。

しかし、本国のエリート達は違う。」

「……………」

ボクオーンは淡々とした調子で語ってはいるが、言葉の節々からは隠しきれない怒りのようなものを感じずにはいられない。

「活動自体は如何にも素晴らしい存在だ。

だが、実際に動く者達は体の良い駒。

エリートは利益になると思えば白を黒に変え、逆もまた然り…」

はあ！？そんなモン、野党やチンピラと大して変わらないじゃないか！

むしろ、権力が有る分よっぽど質が悪いだろ！

「そして、一度でも邪魔者と見做されたが最後…何処までも執拗に追い詰める。

これがこの世界を席卷する『揺るぎない正義』だ…」

ボクオーンはそこまで語ると、まだメシは残っているが切り上げて魔法のトランクを取り出した。

そして黙々と身の回りの物を詰め込み始める。

ここまで聞かされたら鈍い自分でも理解できる。

そして、ボクオーンのような切れ者が隠者のような生活をする理由も…

きつと過去に何かしらで目を付けられたからこそ、今のボクオーンが生まれたのだろうか……

だが、この世界の在り方に疑問を持ち、憤りを抱いているのは間違いない。

「ボクオーン。

アンタほどの男なら、中枢に忍び込んで倒せるんじゃないのか？」

「その道は遙か昔に考え行動した。

仮に本丸を陥としても、旧世界にも勢力は居る！あまりに時が足りないのだ！！

だから、私は無駄な労力は使わん…ノエル、貴様はどうするんだ？」

それでも淡々とトランクに詰め込む作業は止めず、ボクオーンは振り返らずに尋ね返す。

その背中からは『お前が付いてきても構わん、今すぐ決断しろ。』と、声無き声が発せられている。

正直悩んだ…

このままボクオーンに付いて行くのも間違いない。  
多分、自分も目を付けられたのだろっから……

『昔の』自分だったら、きっと流されて決断していた……

だけど、『今の』自分には不可能を可能にする力が有る!!

だから決断した。

「時間が、寿命が足りないとアナタは言った。

だけど知識、経験……己の全てを次代に託し、可能にする技法を知っている!!」

意を決して打ち明けた選択肢……『正義の魔法使い』への反抗と世界の  
の变革。

それまで黙々と荷詰めをしていたボクオーンの動きがピタツと止まり、ゆっくりと振り返った。

驚き、怒り、色々な感情が緋い交ぜになったような表情で目を見開いている

ボクオーンの中で、未だにくすぶり続ける正義の火種に訴えたが失敗だったか？

彼の形相を目にし、心は不安一色で塗り潰されたが…

訪れた沈黙、『じいつ』と瞬き1つせず凝視する彼の瞳、興奮した息遣いから息を呑むのも躊躇われる重い空気…

暫しの間を空けて、ゆっくりとボクオーンは口を開いた。

その答えは…

「その技法について詳しく話してみる…」

「ボクオーン！」

紛れもない肯定の意思だった。

きつとこの決断はボクオーンの今後の生涯を、次代の関係者を狂わせるかも知れない。

だから自分も腹を括ろう…地獄に堕ちる覚悟を。

「その技法とは…何なのだ!？」

「……『伝承法』」

その夜：全ての知識を打ち明けた。

そしてこれから何処に逃げるか、どんな手段を以て反逆するか…いつまでも話しは尽きなかった。

自分勝手な正義を押し付けるようと魔法世界を変えようと決意したノエルです。

ただ今いる街は、ウエスペルタティアの端に位置する田舎。

それでも本国……空に浮いてる首都『オスティア』。

ラピユタみたいな魔法都市からゲートを使われれば、あっという間に包囲されてしまう危険な場所には違いない。

尚、ウエスペルタティアが属するメガロメセンブリア側。

そして、世界の中間あたりに存在しており人間が幅を利かせている北部連合。

南には亜人達…少しばかり動物的外観や特徴、身体能力がずば抜け



ているが魔法は不得手な傾向。

力が強いから奴隷として誘拐される亜人も存在し、魔法使いからの支配に反抗する人も多いらしい。

だから、こんなに極端な住み分けに……その分、結束力が強い。

そこまで、聞いたら南に行くしか無いよなあ。

その日の夜…空が白む前にボクオーンを背負い全力で街へ。

いつも力になってくれてる金貸しの店に駆け込んだ。

そして望むだけ金を提供する代わりに、大至急で『足』を調達してもらった。

店の主人は流石、裏道で金貸しを構えるだけあった。

次の日には誰にも気付かれず、指定された場所へと行けば『足』が待っていた。

『足』というのは馬をベースに鳥を掛け合わせたような生物。

人懐っこさとエネルギーの調達から気を利かせてくれたらしい。

因みにあの日返り討ちにし、拾ってきた魔法使い。

彼は口元しか見えないローブを着せて、死体を操る魔法『イーブル・

スピリット』を発動。

可能な限り時間稼ぎをするよう指示して置いてきた。

俺も、本格的に容赦しなくなったなあ。

「ボクオーン、今から行くとして、袋一つとトランクしか持ってないけどいいのか？」

「これは、奴隷商が使う中は別空間になっている袋だ。お前の考えつく問題は解決している。」

「ふん、従来型の魔法は便利だなあ……」

「小賢しい魔法が多いだけだがな…行くぞ。」

それだけ言うと俺達は馬鳥に跨り朝焼けが見える前に出発。

夕方までノンストップ、走らせ、次の日も同じようになる…

それにしてもこの馬鳥…飛ぶことは出来ないが、跳ぶことは出来る。

そして、彼等の脚はダチヨウのような柔軟さと、山羊のような逞しさを兼ね備えた剛脚。

山や谷も問題無くスイスイと、素晴らしいスピードで進んでくれた。

南の大陸へ行く船に金塊を握らせ密航、順調に逃げ切って腰を落ち着ける場所を探していたある日：

「どうした？急に止まったりして」

「いや、うっすらだけど集団に追われている人が見えるんだ。」

このノエル・ボディの超視力には10人ばかりの人間に追われる人が見えた。

「ボクオーン、移動スピードが落ちるが助けてもいいか？  
もし近くの村出身なら融通を利かせてくれるだろ？  
どうだ？」

実際は融通なんて期待していない。

ボクオーンは現実主義者だが、静かに燃える人間だ。

大義名分と利点をだせば大抵折れてくれる。

「そうだな、あの国をでてから大分経つ…  
巫人の領域に入っただろうから急ぐ事も無い。  
山ばかり越えて来た馬鳥にも、ここらで休憩もさせてやりたい。  
お前の好きにしる。」

「すまないな…」

「ふん……」

ボクオーンも賛成らしい。

跨っていた馬鳥の背中から鞍を外すと優しく撫で始めた。

まあ、戦闘にこの子を巻き込むワケにはいかないよな。

「ならこの子の面倒も任せた…『クイツクタイム』」

悠長にやって民間人Aが死んだら元も子もない。時を一時的に止めながら、全力で駆け出した。

Side 民間人A

いつものように狩場に着いて一仕事。

今日もいい仕事をやり終えた充足感と成果を得た…日も暮れるから帰ろうと歩き出した時、傍の大木に矢が刺さった。

慌てて屈んで身を隠しながら走ったから助かったが、相手は1人で無く集団。

だから村とは反対方向へ走る。

奴等がただの追い剥ぎなら自分1人で済むが、人攫いなら時間を稼がなくてはならない。

妻には契約カードから念話を飛ばして伝えた。

多少の心配と心残りはあるが、仲間に情報も渡すこともできた。

後はできる限りの時間稼ぎをしようと走り続けていたら、前方から巨大な剣を持った青年がすごいスピードで向かって来た。

『ここまでか…』と覚悟したがそのまま通り過ぎ、集団から私を護るように立ちはだかった。

そこからはまさに圧巻の一言だった！

彼が何がしか呟けば、目の前の大地が2つに割れて飲み込んだ。

集団の中には魔法使いらしい生き残りが居たようで、空を飛び襲って来た。

流石に『危ない気を付ける』と声を掛けようとしたが、両手足が吹き飛んでいた。

そのまま魔法使いの1人に近寄り、千切れた箇所には火の魔法をかけて強引に止血。

残りの魔法使い達は空中に投げ飛ばして、再び魔法を放つことで跡形も無く消し去った……

これで助かった！

恩人たる彼に礼を言おうと声を掛けて、振り返った彼の表情を見て背筋が凍った……

まるで魔獣が獲物を見つけた時のような笑みを向けた。

あの足からは逃げられない。

やはり、今日は私の命日だったのかも知れないなあ…

この集団は明らかに野党や人攫いの集団…だから皆殺しはしない。

救出対象はスマートに守る。

この2つを同時にやらなきゃなんねーのがイイ男の辛い所だ。

まあ、サクツと片付いたからコイツを情報源に炙り出す…ボクオーンはこういう作業に手慣れてそうだしね！

それは追々やるとして…今は民間人Aに敵意が無いことをアピールすることだね。

まずは軽く微笑みながら近づく。

やっぱり仏頂面の人間よりも、スマイルが似合う人の方が良いでしょ？

そう思って会心のスマイルを浮かべた筈なのに…肝心の彼は目を見開いて口をパクパクしながら腰を抜かして、後ずさりしている。

歩いててもその分下がるから近づけない…俺ってもしかして怖がられてる？もしかしなくても、そうだよな？

ああん？なんで！？

それから一悶着あったがなんとか誤解を解き、互いに自己紹介をすることができた。

彼の名はバリー。

妻帯者にして子供アリ。

日々、山に分け入り獣な山菜など大地の恵みを分けて貰い、慎ましく生活。

村では若者を纏める若大将のような仕事も任されていると…

もしかしたら、ホントに融通をつけてくれるかも知れない！  
やっぱり情けは人の為ならず…人助けは大事ですね！

そんなこんなでバリーに案内されて村に到着。



最初は見ず知らずの怪しい余所者である自分達を警戒していた村人達だった。

こればかりは仕方無かったが、バリーが日頃から積み重ねた信頼と必死な説明を聞いて解決。

弓まで向けていた人々も嘘のように軟化して、ささやかながら宴を開いてくれた。

ワイワイガヤガヤと村の広場で宴は開催。

酒を飲んで上機嫌に踊る人達、手拍子やら木管で曲を奏でる人々と様々。

そんな人達の様子を眺めながらも、箸を持つ手が止まらない。

長旅の間は旅立ちの街で買い込んだ不味い保存食や、木の実などの粗食中心で来たんだ…

キッチンと調理されたウサギの肉や、山菜の盛り合わせが美味すぎて泣ける。

大事な旅のパートナーの馬鳥達も、落ち着ける環境と美味しい餌を堪能している。

「ボクオーン、やっぱり世の中義理人情だよな！  
村にも招待して貰って、こんなにご馳走まで厄介になって…  
うくん、バリーさんの肉ウマー！」

「全く調子のいい奴だ。  
バリーさん…すまないな。  
連れがこんなにも食い散らかしてしまつて…」

むう…それはボクオーンと言えども聞き捨てならんですな！

口ん中が一杯だから喋れないけど……

そんな自分をよそに話しは進む…

「ハハハ！とんでもありません。  
こちらこそノエルさんに助けられたからこそ、こうして家族に会う  
ことができたのです。  
どうぞ遠慮しないで食べて、飲んでください。」

バリーさんはボクオーンの揚げ足を笑い飛ばして、ジャンジャン食

べると料理が盛られた皿を寄越してくれる！

「そうですか！お心遣いありがとうございます。」

沢山食べて、明日からの活力を付けなければ失礼だよな？

ボクオーンがなんか見てるけど知らないね。

今日はお腹一杯いただきま〜す！

その後も、料理や村の人々との話しも盛り上がった。

それでも夜が更けるに従って、ポツリポツリ脱落する者が出るのは必然。

バリー、ボクオーン、自分の3人もちびちびやってたが、一番少食だったボクオーンが酔っ払って脱落。

とうとうお開きムードになったので、バリーさんにこの村や取り巻く環境について尋ねてみた。

「今日は災難でしたね。この辺りでは、今回のような輩が度々出るのですか？」

その言葉を聞いてほろ酔いだったバリーさんも醒めたらしい。ポツリ、ポツリと語ってくれた。

「そうですね…」

周りには誰もいないから話してもいいかもしれませんが。」

「立ち入った事を聞いてすいません…」

「いえ…この村に限らず、周りの集落は少なからずこの程度の災難に見舞われています。」

困ったように苦笑いをしながら頬を掻くバリー…かなり切羽詰まっているのだろう。

だが、バリーには悪いがこれはチャンスでも有る!!

「バリーさん。」

私達は世直しの旅をしています…村の片隅で構いませんから村の方々へ話しを通して、置いていただけるように取り計らって貰えますんか？

少なからず力になれるでしょう。」

バリーの目を真つ直ぐ、真剣に見つめて訴えたが……

「少し酔いが回って喋り過ぎましたね…

今日はここまでにしましょう。

私の家に案内しますから、ゆっくり休んで旅の疲れを癒やして下さい。  
」

うーん…若大将だからイケるかとも考えたが、やんわりとスルーされてしまったな。

仕方無いっちゃ仕方無い。

時間を掛けてでも受け入れて貰えるように、明日から働き掛けよう

「お〜い、聞いてたんだろっが。

シヤキツとしろ！おっさん」

ボクオーンを担いで寢床に案内してくれるバリーの後を付いて行く。

「年上は敬え！！たく先走りおって…

どうするつもりだ？

逃げてきた私達にできることはそう無いぞ」

「起きてたのか…狸め。だけどなあ…どうすっかなあ。」

その後も自分達にできることは無いか意見を出し合い、夜も更けて  
いるため眠りに就いた。

## S a ・ G a 3 (後書き)

『イーブルスピリット』

ロマンシングサ・ガ

邪霊を対象一人に取り憑かせて「ひょうい（敵の一員として、味方を攻撃する）」状態にする邪の術法の一つ。

仲間がこの術で憑依されると確実に不利な状況に陥ります。

この効果を及ぼす魔法は、敵が使うとイヤな魔法で味方が使うと弱い魔法の筆頭。

ホント、使えないなあ…

『クイックタイム』

自分を含めた仲間以外の時間を止める…というより光よりも早くし相対的に時間が過ぎる前に行動することができるまさに一発逆転の魔法。

正直ザ・ワールドというよりスタープラチナ仕様

燃費の悪さが欠点

覚えたては瞬き程度の時間しか止められないが、練度が上がれば停止する時間も延び燃費も若干上がる。

そんな設定

## S a ・ G a の魔法（前書き）

出た魔法は暇潰しと皆さんのイメージの助けも兼ねて載つけます。



## S a ・ G a の魔法

『ウインドカッター』

『ウインドダート』

真空の風の刃

真空の風の矢

覚えてたてで練度が無い時は弱いカマイタチ程度で単発

練度によって射程距離、威力が伸びる。

『クラック』

地面にクレバス（地割れ）を起こして引きずり込みそのまま元に戻し圧殺する魔法。

飛んでる相手に効果無し。覚えてたてはせいぜいが深めの落とし穴程度

『タッチゴールド』

触れたモノを主に石化、副作用で金に変わる部分がある。

日常生活だけでなく、戦闘にも使えるナイスな奴

覚えたてでは車のタイヤほどの体積のモノに使って拳ほどの金が採れる。

「アニメイト」

死体を魔力で操り私兵と化す邪法

自分で考えることはできるが自意識は持ち合わせず、術者にとって都合良く動く人形

この世界では、マスターピースのアーティファクトがあるうと死んだら効果は消えるのでどんな猛者も防げない設定。

『クイックタイム』

自分を含めた仲間以外の時間を止める…というより光よりも早くし相対的に時間が過ぎる前に行動することができるまさに一発逆転の魔法。

正直ザ・ワールドというよりスタープラチナ仕様

燃費の悪さが欠点

覚えたては瞬き程度の時間しか止められないが、練度が上がれば停止する時間も延び燃費も若干上がる。

超上級魔法に指定され、生半可な魔力では使えず、連発できる物ではないので修得者の割に使用者は少ない。

『○○の水』

状態異常回復の初歩。  
回復魔法の初歩。

覚えたては軽い切り傷、転んだ痕、食あたりを消せる程度。

練度が上がれば半死人も歌って踊り出すほど回復させる。

ただ、空腹は消せない

『ファイアウォール』

炎の壁を作り上げ身を守る壁や目眩ましに使い最後は壁の炎を向かって来るモノに解放し飲み込む。

覚えたてはとにかく維持する為のコントロールが難しい。

練度が上がれば熱量と範囲も成長する

熟練者は逆にコントロールして寒い時小さい壁を出して暖をとることも可能。

「ストーンバレット」

地面をえぐり出し、そのまま相手に当てる。

覚えては小指程度の大きさに近い石くらいでそれもゆっくり飛んでいく。

「火の鳥」

バーン様のアレ

恐ろしいまでの熱量、スピード、威圧感を誇る火の鳥が相手を焼き尽くす。

ただし、使用者の力量によって大きさ、熱量、スピードが変わる。

未熟な者が使うと鳥どころかヒヨコになる場合もある…かもしれない。

「ファイアボール」

マリオのアレ

火球を撃ちだし、相手にぶち当てるこの類の魔法魔法物では鉄板。

小細工無用、術者の技量がそのままです。

「シャドウサーバント」

自分の影に魔力を流して立体化、実際に質量を持たない自由自在の盾や攻撃、人型にしてフォロワーに使える。

戦場、日常のあらゆる場面に臨機応変に対応できる魔法の代表的な一つ

ただ、話し相手が欲しいときに使うと後で思い出して恥ずかしくなるからこれだけはオススメしない。

なお、周りが暗闇で自身の影が無くても使用可能。

覚えたての時に使つと、出力不足でまっくろくろすけのような影しかできないがそれはそれで需要がある。

「霧隠れ」

周りに薄い霧を張り、背景と同化。

晴れても、音を極力出さず攻撃行動に移らなければ目の前に立つてもバレない。

ぶっちやけスネークが着てるアレみたいなモノ

かくれんぼで使うと見つけてもらえずに置いてかれるから使わないのは子供達の間では暗黙の了解。

「ライトボール」

敵に向かって目を閉じてもしばらく見えなくなる程の光の球をぶつけてダメージと視界を奪う。

ぶっちやけマグナムとスタングレネードの合体みたいな感じ。

93

覚えたての時からサーチライトくらいの強さ  
古今東西、節約したい主婦の味方

「超重力」

Sa・Ga3でもっともひどい扱いを受けた魔法の1つかもしれない。

アラケスエ…

計り知れない重力で相手を覆い尽くし、圧殺。  
エグい…

覚えては子供が力一杯押ししてる感じ。

寝転んでマッサージに使う人が続出した。

「エアースクリーン」

空気の膜を張り防御力を上げる魔法。

ゲームSa・Ga2で登場するがきつと使う人がいないだろう可哀  
相な魔法

自分と周りを隔離し、プチひとりぼっちの体験や空気清浄機の代わ  
りに使われる魔法。

「リヴァイヴァ」

FFでいうリレイズ。

Sa・Ga2を代表する魔法の一つ

死ぬ前にかければメメタアな目にあって死んでしまっても完全な身  
体で復活する

寿命には効果無し。

修行時に最悪の事態を避けるため使うがやはり燃費が悪く、戦場では考え物……  
連発して平気なのはノエルだけ……

「妖精光」

本来の使い方は体に不思議な力を宿し体が軽く感じ飛ぶような素早い動きを可能にし魔法防御も上げる魔法。

作中では浮力を極限まで上げたという設定で降下作戦に使用した。

「光の壁」

光の壁を展開し与えられるダメージがどれだけあろうと半減する魔法。

ただし、どれだけシヨボくてもキツカリ半減になる。



「エリクサー」

1人を全回復と状態異常回復

RPGによくある呪文のイイところ取り

これがあるとないとでは難易度が変わるくらい便利な魔法  
覚えてたてでも飛び抜けた性能を誇る。

この作品では燃費は良いがバグキャラレベルのコントロールが無い  
と効果が出る前に維持できず消える鬼設定

## S a ・ G a の魔法（後書き）

ネギま！？系の魔法は最大魔力、（MP）が出生時に決まりますが、ロマサガは使えば威力は勿論、MPも伸びます。

なお、ゲームのような修得制限も無くしました。

## S a ・ G a の技

### 練気拳

気の力で引き寄せ、気で強化した拳でぶん殴る。  
その際に遠くに飛ばしてもよし。  
引き寄せ続けてオラオラするもよし。

家庭では移動しないで物が取れるからロマンと実益を兼ねたオイシイ技

### 「音速剣」

よくあるマツハ切り。

離れた相手にも剣圧が飛ぶから斬撃と遜色なくダメージを与える剣士必睡モノの技

これさえあれば、二度と『銃でイチコロWW』なんて言わせない。

素振りをしてても某マンガに出てくる克巳みたいにはならないから安心して稽古しよう。

なお、発展型の『光速拳』は威力、スピードともに桁違いの技に昇華されている

「気弾」

鳥山神のアレ

全世界共通のロマン技だと私は思います。

さすがに惑星破壊は無理だが、乱射、チャージ、鳥山神のアレ

全世界共通のロマン技だと私は思います。

さすがに惑星破壊は無理だが、乱射、チャージ、殴ったインパクト同時に駄目押しで使用、一点に集中して貫通させるなどのインスピレーションで形も変えられる。

これさえあれば（ry

「稲妻キック」

物凄い速さで蹴りを入れて空気との摩擦で発生したプラズマを帯びているのでキックからより恐ろしい技へ昇華した。

「でたらめ剣」

S a ・ G a にこんな技ありません。

本物は「でたらめ矢」

この技は『正確に狙うより数打ちや当たるし良くね?』という横着な発想から生まれたに違いない。

とにかく撃って撃って撃ちまくる… 『戦いは数だよ』を追求した技。

「超次元ペルソナ」

相手を気の力で作り出したピラミッド型の空間閉じ込めぶん殴り中の空間ごと破壊する必奥義

ゴミ処理に最適だったりする。

相手を気の力で作り出したピラミッド型の空間閉じ込めぶん殴り中の空間ごと破壊する必奥義

「マシンガンジャブ」

某世紀末のKあたりがよく使う拳撃

ジャブだからストレートよりも軽いが手数が違う。

S a ・ G a の 技 ( 後 書 き )

ボクオールの活躍エ

あれからずいぶん話し込んだ。

結果自衛の手段を与えることにした。

まだもうひとつあるけど、それは状況を見てやるつもり。

「何はともあれ、村長さんに話しを通しに行きます…と」

「ノエル、何ブツブツ言ってる？

とうとうバカになったか？」

「いやいや、違うから！気を取り直して……村長さんおはようございます。」

そう言いながら家に入ると慌てて何かを隠したのかあたふたしている。

「私が村長です。」

正直今頃取り繕っても、あたふたしていた所をバッチリ見た後だか



ら台無しだ。

「……昨日、私達で考えたのですが村に道場を造らせて貰えませんか？」

「道場とは何ですか？」

よしよし！村長さんは道場という言葉に食いついてくれたな。

「強くなりたいたいと思う者に自衛の手段を授け、仲間と共に切磋琢磨する場所です。」

私が責任持つて教えますし、十分だと判断するまでは自重してもらい私達が戦います。」

コレが今の精一杯考えた結果だ。

村長さんはニコニコ笑っているが内心どうなのだろう？

「いいですよ。あなた達のような強い人達に守ってもらえる。それだけでなく、自衛の手段まで授けて頂けるなら安心です。」

「ありがとうございます！」

それでは村の外れにさっそく作ります。」

許可も貰えなし、サクサクやるぞ。  
ただ、慌てていたのが何だったのか気になるけど……

考えても仕方無い。

それよりもロマサガが誇る不思議要素の1つ

『人に習ったらすぐモノにできる。』

このチート能力を使って、簡単な技から一気に教える。そして、剣技から始まり格闘術、槍術：適性とも相談しながら、鍛えて鍛えて、鍛え抜く。

その後は、各自の頑張りと閃き次第だと思っ。

道場に関しては外側は形だけ…ボクオーン謹製魔法球の中でやれば、周りの被害も無い。

目一杯動いて、彼らの適性を見つけよう。

## 道場一日目

バリーさんが子供の頃から仲がいい友達夫婦を誘って来てくれた。  
まずは身の守りだと、集気法を教えた。

というのも亜人の方々は先天的に魔法を使うのが苦手らしい。

逆に、身体能力はメガロメセンブリアに多くいる普通の人間タイプとは比べ物にならない！

この事を考慮して勧めたのだがうまくハマってくれた。

4人共、集気法を試したら力が漲ると喜んでおり、そこからも気弾を中心に教えた。

ただ、友達夫婦の成長が異常に早い。

名前を尋ねたら旦那はダンダーグ、偉く筋肉質で凶悪なプレッシャーを撒き散らしながら戦う大男。ぶっちゃけどこの勇次郎だと…

妻はワグナス、体術もイケるが魔法の方に適性が有った。急遽、体術の指導から本職の魔法にシフトして1日で立派な移動砲台に……

かなりの美人サンで双子山の戦闘力も高い。

移動する度揺れる様はウソダ、ドンドコドーン！？の一言に尽きるちなみにワグナスさんの魔法はいきなりエグい威力で、ダンダーグは気弾の威力が飛び抜けていました。

バリーさんも、強いのだがピストルとバズーカでは比べる方がバカだろ？

余りに差が開いたので、名前の加護と、この世界には無慈悲なまでの個人差があるのかと実感した。

妻の前で稽古とはいえ、ダンダーグによってボコボコにされてしまったバリーさんを励まして解散した。

## 二日目

バリーさんは獵師ということで森へ働きに行ったらしい。昨日の事が原因かは不明…

とにかくその日はダンダーグ一家にみっちり教えた。

教えれば教えるほど、とんでもないスピード強くなっていくから、調子に乗ってあれこれ教えてしまった。

最後の締めとして、俺は捌くだけ…ダンダーグ夫婦の動きと技の確認とおさらいを目的とした模擬戦をした。

開幕気弾の嵐、近づけばマシンガンジャブにカウンター、偶に生命波動や稲妻キックを使う攻撃パターン。

集気法も使うから、攻め疲れという言葉が何処かへ旅立ったガン攻め

ワグナスさんは、基本的に相手を寄せ付け無いように動きながらウインドカッターやファイアウォールを展開。

動きを止めれば、溜めの後に特大のファイアボールやストーンバレットを撃ち、また移動砲台と化す。

ようやく近付いても、空気投げや練気拳で距離を取られ、ふりだしに戻る。

ペース配分を知らなかったので、精神力が切れたと同時に無力化するがそれまでが長い

二人共とんでもない逸材だと、この身をもって痛感した…今日ほどチートの体に感謝した日はない。

普通の体だったらミンチより酷い事になってただろうしね。

### 三日目

昨日バリーさんが野獣に襲われていた女性を、気弾や稲妻キックを使って颯爽と助けたいらしい。

その話しが村に広まって嫁にカッコいいところを見せたい村中の旦那、モテたい若者が殺到した。

これは嬉しい誤算だ！

しかし、俺の体は当然1つしかない。一日ずつのローテーションで

回すことにする。

それにしても、あの二人のようなバケモノ級の逸材はいなかったが、皆モテたい一心で真面目に取り組んでいた。

その煩惱が自衛力へと繋がるのだから、自分としては大賛成だ。この調子で頑張つて欲しい。

そして、皆の技の威力を見てホツとした顔のバリーさん……

ダンダーグの気弾を生身で受けたこと、自分の伸びしろが悩みになつてたらしい……

村の男衆の中では五指に入る実力者だから自信を持つて欲しい。

それから一年、また野党のシーズンが来た。

・  
・  
・  
・  
・

あの男達が来てから一年が過ぎた。  
村長として僕は、今までのことを思い出す。  
被害を抑える為、生け贄と少しばかりだが、集められる精一杯の金を渡して安全を買ってきた……

こうでもしなければ、村は滅ぼされていたかもしれなかった。  
皆の安全、仮初めの幸せを手に入れる為だったと言っても、ワシの所業は許されんじやろうて……

だが、もう世代交代かもしれんな。村中のバリーへの信頼も集まりアイツも自信がついたのか昔より、格段に良い面構えになった。

去年までは野生の竜種、それを纏める森の主に為す術なく荒らされた時もあった。しかし彼らの道場によって自衛力を手に入れ、撃退するまで鍛えて頂けた。

後は、ワシが蒔いた種をどうにかすればそれで良い……幸い去年使いそびれた『アレ』がある。ワシの経験や記憶もいつかは……いつかは役立つかもしれんと考え書も残した。

完璧じゃな……思い残す事も無い。

死ぬには良い日じゃ。ケジメを着けに行くとするかの！

『明日の朝、誰にも気付かれないうちに家に来てほしいと言われたが…  
何かあるのかな？』  
そんなことを考えながらバリーは昨日の思い詰めた様子の村長を思い出し早足で急ぐ。

家に着いても返事は無く、最悪の事態を考えて慌ててドアをぶち破る。

入ってすぐの見慣れた食卓の上に手紙が一通

それを読んだバリーは村長が人知れず抱えていた秘密と苦悩、家を空けた理由を知り助ける為に全速力で走り出した。

目の前には100人以上の盗賊、その中でも一歩前に出た男が喋りだす。

「オイオイ、ジイさんよお。去年はやってくれたなあ…  
女二人と大袋に十万Dpで水に流してやると言ったがジジイが手ぶ



ら…っど。

巫人の分際で調子に乗りやがってもう勘弁ならねえ。  
オメエラ、皆殺しにするぞオツツ！…！」

野党の頭の怒声で子分達が一斉に襲って来るが

「甘いんじゃよ。」

重心を杖に預けていた村長がフツと体から力抜き呪文を放つ

「魔法の射手！土の連弾15矢！

こいつはおまけじゃ」

魔法の矢むを撃つと懐からテニスボール程の玉を2つ集団へ投げこむ。

それは、破壊の玉と呼ばれる物の簡易版。それでも主に発破用に使われる破壊力を持っている。

「なあ！？ひ、広がれえええ〜」

誰かが言ったと同時に人波の中で炸裂する。

それは大きな音と光と共に前衛として走って来た20人ばかりを消し、それが親分の怒りを煽る。

「魔法の矢でジジイを穴だらけにしろ。誘爆を恐れて破壊の玉は使えねえ筈だ。」

広範囲に逃げ場を無くすように100どころではない矢が飛んできては避けきれない。

足、手、腕、脇腹が撃ち抜かれたが…胸から上が無事であり、持参してきた破壊の玉が爆発しなかったのは奇跡に近い。

「死に損ないが…なぶり殺してやれ」

親分の命令で子分が近づいて来る。

まだ玉は残っているがもう動くこともできない…限界だった。

村長は我が身の力不足を嘆き、野党の群れは村長の死を確信していた。

野党がとうとう村長の傍に…多くの血を吸った凶刃が振りかぶられた

その時

「ウインドカッター」

子分が真っ二つになり、あの男が走ってくるのが見えた。

「ノエルさん！大変です。これを読んでください。」

朝からバリーさんが血相変えて走ってきた。

持っていた手紙を読んだ俺は、真実を伏せ男衆とボクオーンに村を頼んで森に突入した。

丁度その時大きな爆発音と光が見えたが村からは遠い。

「クイツクタイム」

何度も時間を止めながらやっと着いたその時、半死半生の村長にトドメを刺そうとする男。

「ウインドカッター」

「うう…何故、お主が？」

本当なら今すぐにも治してやりたいが、先にこいつ等を片付けてからだ。

「なんだテメエは！？。どうして貴様がココにいるんだよオ！？」

「黙れッッ！！貴様らには地獄さえ生温い！！焼き尽くせッッ」火の鳥『』」

そのまま集団に向けて巨大な火の鳥を放つ。

「撃て、撃て、撃てエエエ」

魔法使い共がそれぞれの全力の魔法を放つが、それ等全てを飲み込み激突する。

その跡には焦土が広がり爆心地は地面がマグマ状態になっており、完全に倒したことを確認すると村長に駆け寄る。

「村長、今直してやるからな。」

魔法を掛けようとした時首が横に振られる

「もついいのじゃ…  
最期に話せるだけでいい…」

「……………」

時折、咽せて血を吐くもその目には、強い意思が灯っている。

「ありがとう…  
君達は村に新しい風を吹き込み、皆は活き活きした。  
そして、今も老いぼれの尻拭いまでしてくれた。」

「……………」

「バリーを含め皆まだ若い。これからも助けてやってくれるか？」

「やれることはします。」

「ありがとう…ありがとう……」

そこまで言っていると村長から力が抜けた。

生まれて初めて間近で命の灯が消えるのを感じた

それまで所詮は夢の世界だ。

そう思つて、何処か浮ついた心でいたのが恥ずかしくて…情けなくて…改めてこの世界で生きる意味を知った。

村長の遺体を背負い、戻ると村人全員が集まり俺達の帰りを待っていた。

「ノエルさん！村長は…村長は……」

バリーさんは分かっているのだろう。

俺はただ首を振るだけで泣き崩れる者、それを支える者等様々だが皆あの人を愛していた。

その日だけはいつも賑やかな村が彼の死を悼んだ。

・

・

・

・

数日後

「バリーさん、村長就任おめでとございます。」

「ありがとう。ノエルさん」

「何言ってるんですか。誰彼構わずそんな言葉遣ってるど貫禄付きませんよ。」

「ノエルよ。言葉遣いで貫禄は付かん。行動の積み重ねだ。」

ボクオーンがチクチク言ってくる。

「じりりっさいなあ、今日ぐらい別に良いだろうが。」

「ハハハ、恩人に敬語くらい遣わせてください。ただ、今回の事件で思い知りました。」

私達だけで無く、皆の力を結集せねばならないと…

二度とこんな事を無くすため、手始めに周りの村と協力関係を築こうと思います。」

「ほう、それは素晴らしいですね。我等も一枚噛ませて貰いましょう」

誰も知らない事件の真相と、人々の思いを胸に秘めて俺達は魔法世界での拠点を手に入れた。



## S a ・ G a 4 (後書き)

『イーブルスピリット』

ロマンシングサ・ガ

邪霊を対象一人に取り憑かせて「ひょうい（敵の一員として、味方を攻撃する）」状態にする邪の術法の一つ。

仲間がこの術で憑依されると確実に不利な状況に陥ります。

この効果を及ぼす魔法は、敵が使うとイヤな魔法で味方が使うと弱い魔法の筆頭。

ホント、使えないなあ…

『クイツクタイム』

言わずと知れたチート。

自分を含めた仲間以外の時間を止める…というより光よりも早くし相対的に時間が過ぎる前に行動することができるまさに一発逆転の魔法。

正直ザ・ワールドというよりスタープラチナ仕様

燃費の悪さが欠点

覚えたては瞬き程度の時間しか止められないが、練度が上がれば停止する時間も延び燃費も若干上がる。

そんな設定

『私が町長です』

町長さんは、町長さんですね。  
報酬金を払えと言いたい！

そしてこの小説で登場したのは、自分の脳内で補完されたロマサガ  
3の村長さん

指導者を孤高に悩み、最小限の犠牲で最大の幸福を選択する……  
そんな副題を制作スタッフから込められたある種の境地だと勝手に  
理解。

そう考えれば…なかなかいい男に見えませんか？

『馬鳥』

はい、マスコットキャラのアイツです。きっと黄色以外にも青やら、  
白やら黒やらデブが居るんじゃないかな？

バリーが村長就任から20年が過ぎた。

早くつてごめんね〜

いろんな事があった。

周りの村に協力しようぜ！なんて言っても一発で共感してくれる所はそう無い。

弟子を2、3人置いて防衛に使ってもらったり、貿易等で交流してバリーは粘り強く話し合い、信頼を勝ち取って合併。

今では村から要塞都市国家『バレンヌ』と言われるまででかくした。

ボクオーンは外交、新技術、魔法の開発と人には言えないことまで陰に陽向に活躍していた。最近できたゲートで念願の旧世界に行けるようになったぞオ〜。

最近は汚れ仕事、スパイによる情報の収集、黒い噂が絶えない小国も御せるうちに食い彼等がもつ独自の技術や魔法の吸収を始めた。

攻めるのは俺だがいつか来る時

の為の準備に余念が無い。

「敵を知らないで戦う者

は愚か者だ」

ボクオーンのありがたい言葉でした。

二人共あれから出世してバリーは村長さんから都市国家の主。

ボクオーンは初めて会った時は研究者だったのに、今では政治もできる魔法研究者所長。ただ、一緒に飯に行った時にシェフが頼んで無い物をボクオーンに出したと思ったらボクオーンはペロツと食ってボソボソ言っただと思ったらシェフはお辞儀して厨房に戻っていった……

ボクオーンは人生をエンジョイしてるらしい。まあ、俺って連れなのに料理出されなかつたんだよね。その時思わず固まっちゃったよ。  
(・・・)

たまに、シヨボーンとする事もあるけど私は元気です。

「師匠、俺にも新しい技教えて欲しいッス」

目の前には胴着をだらつと着ている……というよりもワザと着崩している弟子がいる。

名はクジンシー。

つい先日入門した青年だ。うん、ある日道場破りできたから強いのかなあ〜？とか思っただけで蹴り入れたらガードもしないで吹き飛んだ

次の日、「チイスー!!」

俺も門下生にして欲しいッス!」

また次の日「チィース！！オレッツス、門下生にしてくれるまで動かないッスよ」  
もうね、居座るだけならいいけど、美人の女の子が目の前通る度ナ  
ンパするんだよ……

『来る物は拒まずどんな悪たれ坊主も引き受け力の使い方から熱血指導』をモットーにしてきたが、挫けそうになった。

結局女性達の猛抗議でアイツは門下生にするが夜中に教えるからナンパはさせないと約束させられた。

それから言いつけ通り真面目に来るがああ調子だから余計疲れるし  
……

「クジンシー、基礎ができてねえのに技なんか生意気言ってるじゃねえよ。」

実際は基礎も出来ているし飲み込みも驚くほど速いのだが……集気法に留めている。

「師匠！怒っちゃダメッスよww  
スマイル、スマイルww」

Sa・Ga2のクジンシーが何で嫌われ者かは知らないけど、コイツは空気の読まなさや喧嘩っ早い性格からどこに行っても嫌われている。

そんなこんなで月に一度道場が休みの日  
今日1日で道場で使う消耗品を補給する。

逆に言うとそれが終わったらフリータイム。  
シャドウサーバントの無駄遣いと言われようと毎回サクサク終わら  
せる。

昼頃、食べ歩きをしながらご町内を散歩する。

その時ボクオーンがドデカい袋を担いでフラフラしながら路地裏へ  
入って行くのを見た。

「霧隠れ」

なんかヤバい事をしているのか気になって姿を消して跡を着ける。

周りには陰鬱な空気は漂っていないが場合によっては鉄拳制裁で真  
人間にせねばならんな。

そんな事を考えているとクジンシーは少し開けた場所にて

「オ〜イww

クジンシーのお出ましたぞ〜」

クジンシーの声に反応して何処からか子供達が集まってきた。

「今日は何を持ってきてくれたの?」

「まあまあ、落ち着けてww

それより身体の調子はどうよ?

元気してる?」

「なあなあ、兄ちゃん  
オレこの間1000p拾ったけどネコババしなかったぜ！」

「ちょ、おまww

俺がお前くらいの頃だったら迷わずパクってたっていうwwwさすが親分が偉いと子分も似るってか？ww

「兄ちゃん、それはないよ…」

クジンシーはいつもと同じ感じでひとしきり話した後、袋に手を突っ込んで中のあるものを取り出す。  
パンとオレンジだ

「いい子に待ってるやつから順番に渡すから待ってるよ」

そう言ってスムーズに配り終わると「また明日も来るからちゃんと来いよ」と表通りへ歩いていった。

俺はその光景を見てほっこりした。

同時に俺は初めて自分を恥じた。

俺の弟子はこんないい奴だったのに、勝手に疑い心の中で決めつけていた。

もっと自分の弟子の事を信じようと決意も新たに踏み出した。

次の日

「チイス、師匠ww

クジンシーツス。今日も稽古よろしくお願いしますwwww」

「そうだな、今日からは技の稽古に移るとするか…」

「マジっすか？

これからオレっちのサクセスストーリーが始まるんすね？」嬉しいのだろう…ガッツポーズまでしている。

「それはお前の心掛け次第だなあ。

まあ、俺が個人を教えるからにはそれなりのレベルにはいけるがシンドイぞ？」

「へへwwそんなの入門した時から覚悟完了してるッス!!」

「それと、今まで時間が無く月1で補給していたが間に合わん。これからはお遣いも頼みたい。

この金塊を換金してリストの物を買ってこい。

釣りは好きに使えばいい。

できるな？」ここでバレていようが構わん。

敢えてプレッシャーを出してNOとは言わせない

「え!？」

「イイスよww俺に掛かればお遣いなんて朝飯前ッスwwww」

「よし、では今日も始めるか」

「ウッス!!」



その日、師は弟子を育て、弟子は師を育てるという言葉を頭ではなく心で理解した。

「やっぱり、その前に胴着くらいいびしつと着る。」

「…ウッス」

S a ・ G a s (後書き)

深く付き合っているとハツとする奴いるよね  
この小説のクジンシーはそんな人間

某国家 国立図書館

蔵書の数、保存状態、津々浦々の薬草と効用や魔法の本と一般人も入れるモノとしては広い魔法世界でも最大級を誇る。

だがそれは、あくまでも『図書館』という表向きの理由に過ぎない。閲覧禁止とされた魔本が揃えられた本棚がズラツと並んだ壁際の一  
角…  
決められたパターンで本を入れ替えた際に現れる…限られた者しか存在を知らない隠し通路が存在する。

世界を牛耳るといふ野望の為に各国の成り立ちから保有する資源、軍事力まであらゆる情報を蒐集する事こそが本来の目的…

今この時も、全世界に散らばる構成員が手に入れた情報が、自動的に魔本へと書き込まれて巨大化している生きた図書館。

この国がちっぽけな弱小国家だった頃に食われず、生き延び…力を蓄える事の出来た最大の要因。

その図書館が有する裏の閲覧スペースを利用して中年の男が1

人。

この場所が持つ意味、長身細身で鍛えている様子は無い。間違い無くエリートクラスの文官が…似つかわしくない『一冊の薄い本』を手にとって読んでいる。

タイトルは『要塞都市国家バレンヌについて』

周辺の村に弟子と呼ばれる用心棒を置く。

貧しい村には商売と称して利益度外視の援助、飢えから救う活動を続けてこの20年で周辺の村と協力関係を築き…拙いとはいえ、集落から都市国家へと纏め上げた。

今では、この世界の北西部に存在する大陸…

ヘラスに渡らず集落単位で寄り集まり、狩りなど野人然りとした生活を送る…奴隷亜人を確保する最高の狩場だった大陸はガードが堅くなった。

中には反抗する部族、逆に侵攻した弱小国家も存在した…

だが大抵は奴隷商との後ろ暗い噂を抱える国や、変わらず支配体制を維持する為に戦いを挑んだケースが殆どであった。

そのどれもが1つの例外無く『瞬く間』に1人の謎の男によって、  
首脳部は制圧：バレンヌに組み込んだ後、一族郎党を根絶やしにし  
て根本から作り直す。

要塞都市国家の長というより、組み込んだ遙か格下の部族と対等に  
付き合う：我々の常識では理解できない『盟主』というスタイルの  
指導者。

その者は一山幾ら、歩けば何処にでもいる印象を受ける亜人：名は  
バリー。

文武共に突出した才を見せたことは無く、前述通り何処にでもいる  
馬の骨。

だが実際に相対した機会を得た私は、不思議と心を開き人を惹き寄  
せる：稀代の『陽』のカリスマ性を感じた。

幹部クラスには反逆の意思アリと追い続けていた元ウエスペルタテ  
イア高官にして、魔法研究者：現在は『バレンヌ魔導技術研究所所  
長』兼『参謀長官』のボクオーンが一市民でありながら、政の一翼  
を担う。

武は、同時期にある日突然名が売れたノエルという男が担う…

その武力はデタラメの一言に尽きる。

魔法は一撃で天を裂き、地を割り、干上がった湖を生き返らせる…  
剣の一振りですご大な竜種を三枚に卸した、発生した衝撃波で海が割れたなど嘘か真か…眉唾モノの話しばかりだが、武威を示す逸話は枚挙に暇がない。

実態を見極めるために暫し時を用い、新たなデータを手に入れた。

道場という前時代的な手法で鍛え上げた多くの弟子達の存在。

彼ら自身も亜人の常識では有り得ない魔法を使用…それも詠唱破棄でどれも強力。

接近戦も今までの奴らとは比較にならない。

一体捕獲するのに被った被害は奴隷商の証言から3倍から10倍が平均。

各部落に5、6人配属されており皆が皆…猛者ばかりのようである。

ある一面だけを捉えるならやりにくい世の中になったように錯覚する。

しかし、この証明は裏返せば…ヒトの欲望が消えない限り果てる事も無い奴隷市場。

あらゆる方面で便利な亜人が更に高性能に…

そして仕入れが困難になった事からプレミア、箔が着いた事より一層成熟。

一昔前は数を捌いても遠征費から赤字になるケースも存在したが、  
今では帳消しに出来るハイリターンという事実も忘れてはならない。

さて…長々と語ったが尻尾の部分だけであり、全容は掴めていない。

ヒトに例えるなら成長期真っ盛り…

大陸に眠る水産、農産、鉱物、人的資源も有り余っており、20年  
の成長スピードと考えると私は息絶えているだろう100年後…

如何なる巨大国家へと化けているか、学の無い己には想像出来ない。

ただ1つハッキリ言える事…この国は弱小国家や都市国家群と侮ら  
ず、大国と仮定して絶えず目を光らせるべき脅威である。

工 作 員      クロウ

此処まで読んで、文官風の男は心なしか手に取った時より少し分厚  
く、重量を増した本を溜め息を1つ吐き棚に戻す。

要塞都市国家バレンヌ……

あの国を我が国の支配下に加えられれば…情報通りなら技術、武力、  
資源をそっくりそのまま手に入れることができる…

だが…問題は山積している。

南のヘラス帝国。

亜人が治める亜人の為の野蛮国家…ひと昔前までは。

最近…20年ほどで急速に魔法を使った技術が二段、三段飛ばしに  
発展している。

庇護下にいるかは判明しないが、強力関係に在るのは間違い無い。  
加えて亜人というのは、頭数もやたらと多い。

迂闊に手を出せば大ダメージは必死。

必ず達成出来るとも限らない。

障害はそれだけでは無い。

ウエスペルタティアにその人アリと音に聞こえたボクオーンの存在  
が邪魔臭い。

魑魅魍魎が跋扈する王城で長年生き続けてきた男が居る以上は生半  
可な搦め手は使えない…

武力行使は有り得ない。やはりヘラス帝国という目の上のたんこぶ  
とノエルという男の話が真実なら…長寿で全盛期が長い亜人であり  
ながら、化け物のような魔法。

真っ正面から当たるなど恐ろしい過ぎる！



そして、その男を鍛えた師は不明。  
くたばっているなら問題は無いが…情報が全く浮かび上がって来ない！！

「はあ……………」

暫し頭を抱えて、次の議会の準備をするためあくまで用心深く、急いで図書館を跡にした。

よく晴れた昼下がり…死後もバリー以上に慕われ続けている町長さんの屋敷は、書斎兼応接間屋敷へと改築工事。  
勿論、小城や保管庫も建てられた。

しかし、20年経った今でもバリーは、他の部族に攻め込むなど重大な案件を決断する際には、木材の良い香りとが鼻孔を抜ける感覚がまるで先代から叱咤激励されるようだと言われ、この屋敷が真の王城である。

そんな場所の話しを何故しているかと言つと……………

「要塞都市国家バレンヌ市長を務めているバリーです。」

俺、ボクオーン、ダンダーグ…各部族の長や権力者が見守る中、『にっこり』と微笑みながらバリーが手を差し出す。

どっからどう見ても友好関係を結ぶ意思を表した握手。

亜人の世界の常識では…握られたら反撃の手段が一気に減る握手は『私はあなたを信頼してますよ』、『末永く助け合いましょう』と心をさらけ出した暗黙の意思表示なんだとさ。

言い方は悪いけど、犬は信頼した者だけに弱点の集中しているかと腹を見せるし、背後に回られても動き回らずに大人しくする…人なら見ず知らずの人に包丁向けられても笑って済ましちゃう。

要はお人好しにバカが付くほどに穏やかで信頼できるバリーの人柄だから、他の部族の人達は『危なっかしいから助けてやるよ』って強力してくれてる。

ある意味では必殺の威力を秘めた友好の握手だったが……

「商業王国ドマイから来ましたモウ・K・マツカです。

本日は我が王の命により交易の許可を頂きました。

それと…これは我が国より産出された稀少な魔石を持参しました。

どうぞ御納め下さい。」

ドマイの使者団代表のマツカ氏は差し出された握手をしなかった。少し驚いたバリーと露骨に嫌悪感を露わにした長達を余所に、恭しく頭を下げて形式張った口上を吐くと、懐から魔石が収められているらしい小箱を差し出す。

その頃にはバリーも異文化だから仕方無いかたと納得し、元の穏やかな表情に戻っていた。

うん…商いを生業にするんだったら、ブツを渡してからってのも分かるが…こりゃ無いでしょ？

「それはなんて素晴らしい物を…。キミ、くれぐれも『慎重』に宝物庫へ運んでくれ」

そんな様子を眺めながら、きな臭い空気をバシバシ感じるノエルです。

というのも昨日ボクオーンが道場に来た。

いつもであれば魔法球の修行世界の設定を一通り打ち合わせをして、メシや魔法の試行に行ったりするのだが様子が違った。

何でも、明日商人の国ドマイ王国から使者団が来るんだと。

ただ、同盟国という名の太い客にはメガロメセンブリアという国も名を連ねている。

あの正義の魔法使いの総本山。

闘士、召使い、娯楽と多様な奴隷制度も存在する…ヒトとして腐りきった国。

「会談の際、何があるか解らん…最悪には備えておきたい。

」

「そこまで聞かされたら出んわけにはいかんな」

「よし、これで顔は勿論、背格好からまで変えてから明日来るのだ。」  
「と俺に変装される危険性を話した後、変装キットを残して帰る。」

きつと、警備体制の強化やらイロイロ有るんだね〜。  
分かる、理屈は分かるよ〜

そして今、俺はハートフルボッコ魔法美女マジカル ノエルに化けて会談風景を眺めてる。

嗚呼、新しい扉が音を立てて………開くわけ無いでしょ？

ていうか…ボクオーンはバカなの？ 平和ボケなの？ あからさまな嫌がらせなの？

正直納得いかないけど白熱する会談をぼーっと眺めています。

年代スキップのうちに『リヴァイヴア』が実用化出来ました。  
当然、バリーや長達にも施工済み。

あつ、マツカが机バーンて叩いた。

バリーは困ってるし、周りの長達なんか現地語で話しているから分からないけど、真つ赤な顔が全てを語っている。

ボクオーン…コイツ等、一体何しに来たの？

会談は終わり、即行で魔石を調べた結果…どつちやり用意された石は一つを除いて、かなり有用な魔石。  
底の隠し蓋に嵌められていた魔石は、時限式の破壊の球に加工済みでしたと…

因みにブチ切れてた長さんは

『アンタらが聖地と崇める森に、純度の高い魔石がゴロゴロしてるから切り開かせろ!』って偉そうに言われて怒れちゃったんだとさ

.....

そりゃ仕方ないわね!

今も女の子ノエルのままで、皆でどうするか考え中です。

ドマイを叩いた場合: メガロは、お家芸の搦め手で全世界にバレンヌを悪の野蛮国家として広めるから、迂闊な手は打てないとボクオーンが最初に言ってから議論百出。

なかなか、良いアイデアが出ずに『どうすんべ、どうすんべ』なんて困っている時...  
ノックも無しに息を切らせて、部屋に入って来た文官が放った言葉で空気が凍りついた。

「市長! たった今、ソーモンの村から何者かから襲われていると!」

「何ですと!?!」

野郎、マジでブチ切れちまったことですよ……

S a ・ G a 7 (前書き)

お騒がせしてすみません。



ソーモンが襲われていると言う情報が舞い込み議会は即刻延期。

バリーはその場で各地の村に散らばる俺の弟子へ応援に駆けつけるよう即座に伝令を飛ばした。

俺は道場に戻り、弟子であるバルバトスとアンデルセンを連れて飛び出す。

この二人は道場へ中堅組で実力は折り紙つきである。

なかでも、ダンダークが喜び、愛（用）されるほどのしぶとさを誇っている…と言えば十分伝わるだろうか。

144

「「ああ」！？何だお前！気ツ色ワリイ！！」

「五月蠅い！殺されたく無かったら黙って付いてきなさい！」

「「モエア！？」」

そんな二人を連れて最寄りの村にゲートで飛び、そこからはクイツクタイムの連続使用でソーモンへ急ぐ。

チクシヨウ…この辱めで負ったストレスと鬱憤とPTSDは、襲撃者で発散してやる！

ソーモンの村へ駆けつければ、戦闘の余波でボロボロにされた建物も多いが、避難所である集会所は無事なようだ。

というのも、集会所内には魔法球があり、その中へ避難するように定められているからです。

ただ、弟子達は戦いに専念できているが如何せん相手は軍団。

いつものような野党や魔獣の類では無い。

夥しい数の人間が統率された動きで襲ってくる。

ちいゝと苦戦してるのが分かる。

『シャドウサーバント』

俺は瞬時にシャドウサーバントで分身を作り上げ散開させた。

それと同時にバルバトスとアンデルセンも仲間を救うためバラバラに別れて動き出した。

「アンタ達！巻き込まれたく無かったらすぐに下がりな！！」

俺が駆けつけた現場の弟子は俺が来たの確認すると一瞬『えっ！？  
女の子！？』となったが、シンボルマークのバカデカイ剣で判断し、  
すぐさま後方へ前進する。

仲間は居なくなつた1人残つた俺を見て卑しい笑い声を響かせながら  
軍隊が迫つて来る…だが、それが良いんだ。

俺と共に戦うと戦力差について来れない者ばかりで、逆にお互いの  
足を引つ張り合うことになるしね。

さあ〜と、最初から最期までずっと俺のターン！

『ライトボール、クラック、超重力』！！

光の弾幕が襲いかかり、破裂した際に発したエネルギーと強烈な閃  
光で、ダメージを与えたと共に視界を奪う。

例えるなら、スタングレネード＋爆風が発生しない為ピンポイント  
に破壊できるバズーカ＋速射砲

正直、コレだけでもオーバーキルだが…今日は色んな意味で虫の居

所が悪い！

深さ10メートルほどの亀裂を生み出す。

敵はそのまま恐慌状態に陥ったまま為す術なく地割れに飲み込まれる。

運良く免れた者達も、引力で穴の底へ吸い込まれた末に、超ド級の重力で覆い尽くしてぺしゃんこに圧殺。

「ホント、バカな奴ら。」

素早く地面を塞ぎ土の養分へ変えた俺は、次の現場へ急いだ。

「このクズ共が…命が惜しくないようだなあ？  
死ねイ！練気拳、練気拳ンンツツ！！」

バルバトスは周りの人間を引き寄せ手当たり次第に殴っていく。  
それは文字通り千切っては投げ、千切っては投げを繰り返し…その度にミンチが量産される。

「距離をとれ！！魔法の矢で撃ち殺すんだ！」

隊長らしい男の声で我に返った部下達から、一斉に魔法の矢が撃ち

出された。

それが飛んでくるのを理解してる筈のバルバトスは動かない。というより…顔を歪ませ、笑いながら殺意が込められた矢が飛んでくるのを見ている。

『これには流石の魔人のような男も致命傷…死を理解したか!!コイツを食らって生きていられる筈が無いしな!』  
魔法の矢を撃った部下達は勿論、誰よりも恐怖していたが自制して指示を下した隊長もそう思った。

「甘いんだよオ!

気弾、気弾、稲妻キック」

気弾を撃ちながら突撃、魔法の矢を打ち消しながらある程度まで近づいたら、稲妻キックで一気に距離を詰めるバルバトス!

「な!?! 奴を近づけるなアアアアア」

ダメージが下がっても構わない!魔法を詠唱破棄で撃つんだツツ!

これにさしもの隊長も血の気が引き、半狂乱にメチャメチャな指示を飛ばし、自身も魔法を撃ち出す。

『無駄な破壊行為は控えて制圧すること…!』

事前のブリーフィングではそれが絶対条件だったが、こっちは生き

るか死ぬかの瀬戸際なんだ！  
作戦なんて知ったこっちゃ無い！

部下達もそれに応えて絶叫して魔法を撃った結果、建物を破壊しながらバルバトスの視界全体を塗りつぶした魔法は津波のように彼を飲み込んでいった……

「やったか……？」

誰かがそんな事を呟いた。その思いは皆が持っている。

『ゴクリ』と固唾を飲み込みながら、魔法で舞い上がった土埃が晴れた先を見ると……

「アレが攻撃のつもりか？」

無傷で立っているバルバトスが現れた。

「ひいひいひい！？」

「も、もう嫌だ！ウチに帰るんだ、帰るんだアア」

情け無い声を上げながらへたれ込む者、発狂して無闇に走り回る者……次々に狂気と絶望は伝染し、軍人としての能力は一切合切吹き飛

び、烏合の衆と化した。

「攻撃つてのはなあこつやんだよオオオ!!」

『次元断ツッ』

今まで使っていなかった斧を裂帛の気合いを込めて振るうと、パツクリ裂けた異界の入口が現れ、全てを吸い込んだと同時に消えた。生きることも死ぬことも許されない次元の狭間へ飛ばされたのだ。

「今日のオレは紳士的だ…」

無然した口調でバルバトスは呟くと、次の戦いを求めて走り出した。

「貴様等、肉の一片でも残ると思うなよ…  
ベルセルク、集気法」

アンデルセンは十分強い。だが、バルバトスほどの馬鹿力と頑丈な身体は持ち合わせていない…

そこで足の速さなど俊敏な能力、そして自然治癒力を高速自動再生と呼べる次元まで高めた。

そして、今回も限界まで高まったと判断した瞬間：懐から双剣を取り出すと、一気に敵の中核に単身飛び込み、切り刻み始めた。

「馬鹿が！！槍で串刺しにしてしまえ！！」

四方八方から繰り出された槍が、アンデルセンの体を穿つ。

「次に行くぞ」

隊長の男は知らない：ノエルが何故アンデルセンを連れてきたのかを……

「どうした？異人共。

攻め疲れたなら次は俺の番だなあ……

音速剣、でたらめ剣。」

両手の剣で一閃すると、目の前の敵は真っ二つになり離れた相手も遅れて血溜まりに沈む……

そこからは戦いとは言えない私刑に近い一方的な展開……

いや、どれだけ傷を負っても瞬時に再生し襲い掛かるアンデルセンに恐れたのだ。



「もう嫌だ。オレは死にたくない！」

誰が言ったのか1人が逃げると皆逃げ出す……

「ケツ捲って逃げてんじゃねえよ!!」

『トルネード』

自分も魔法で切り刻まれるのも構わず発動。

逃げ出そうとした敵は皆、巨大ミキサーのような竜巻に吸い込まれ先に逝った仲間の元へ送られた。

後に残るは、血濡れの鬼1人

次の相手の元へ移動した。

これが二人のバトルスタイル。

まさしく狂戦士という言葉がふさわしい。

今でこそ、強面だが話せば気さくでいいオツチャンと呼ばれるバルバトス。

今でこそ、強面だが意外なほど優しいそれでいて人格者と呼ばれるアンデルセン。

しかもコイツに限っては、街に溶け込み孤児院まで運営している為に社会的信用もある。

だが元々、バルバトスとアンデルセンは  
『コイツ等が通った後からは生物が消える』  
とまで噂された有名な武闘派盗賊コンビであった。

それが偶々…ノエルとダンダークが遠出していた街を襲撃、即行で  
ボッコボコの返り討ちにされた後、その場で魔法で魂を縛り付ける  
強制契約。

それからは門下生として鉄拳更正を施され、真人間へと戻った過去  
があり、戦いの場では昔の癖が出てしまう。

ノエルが放つ一発一発は強すぎて常に加減しながらだが効率的に倒  
すスタイル。

彼らのように効率は悪いが、その様が敵の士気を下げしてくれる凶戦  
士スタイル。

正に適材適所。何事も型に填めれば良いという訳でない証明でもあ  
る。

こうして三人が戦っている間も襲撃者を片付けた弟子が応援に駆け  
つけ、また弟子達が片付けて仲間が増えていく

当初は300、500と村1つ落とすには過剰な戦力…軍団と呼べ  
る規模を誇っていた襲撃者は、30人ばかりの小さな集団へその姿  
を変えていた。

さらに、周りは完全に包囲され村から外れた野良っ原の一カ所に追  
い詰められている。

皆がこれから訪れる死を覚悟しながらも剣、杖：自分達の得物を手  
放そうとはしないのは、流石は軍人と言えるだろう。

人垣を掻き分けて襲撃者の前に立ったノエルは、手を突きだして魔  
法を唱えた。

『ナツプ』

ノエルが呟くと魔性の香りを放つ花が辺りに咲き乱れて、香りに包  
まれた敵は残らず意識を手放した。

こうして、ソーモン救出戦は終わりを告げる。

なお、捕虜達の未来はボクオーンが握っており強制契約で洗いざら  
い吐かされた末……………

バレンヌがやるべきこと、成すべきは山積している。

そして、この戦いを契機にノエル：バレンヌと仲間達は魔法世界の  
暗部、それ以上の脅威と永きに渡る因縁の歴史が始まったのだった。

## S a ・ G a 7 (後書き)

『ナツプ』

眠りを誘う霧を振り撒き、無力化を誘う有情の魔法。

スリプル？ラリホー？

そんな魔法知りませんなあ。

『ライトボール』

レオン帝も得意とする光球で全体攻撃。

強すぎる閃光で五感の1つ視覚を奪う…リアルだったらかなり凶悪で、シャレにならない術法。

『クラック』

地割れ一発！

範囲、深さとかなり応用が利くね！

当たり前だけど、飛んでる相手には効かない魔法です。

『次元断』

エターナルフォース系の斧技…決まれば相手は死ぬ。

次元の壁を切り裂き、叩き込む…サラッと表記してるけど、恐ろし

いごとやっています。

『稲妻キック』

雷撃を纏わしながら、ライダーキックのように蹴りつける…漢の口マン技！

気弾、稲妻キック、クイックタイムは憧れの技御三家。

ロマンシングに…カッコ良く…『とう！』って掛け声付きで出したいなあ。

魔法の暗部……

まあメガロメセンブリアやらですが、それ以上の敵を考えてます。勿論、ロマサガから登場しますからお楽しみに〜〜〜！

何はともあれ、ソーモンの村での戦いが終わって周りを見たら、とりわけ頑丈に作った集会所以外の建物に違いはあれども被害が出た。

なんか、凄く申し訳無さすぎて村長さんに謝ったら

「気にせんでください。あなた達がいち早くかけつけていただけなのでお弟子さん達も含め皆無事でした。」

村長さん…

「師匠達が後一刻でも遅ければ……」

そして、村の人々は魔法球ごと連れ去られたでしょう。本当にありがとうございます。」

弟子達よ…

みんな、メツチャ良い人だわ〜

ソーモン村の人達の優しさは海より深いでえ〜

ただ、バルバトスとアンデルセンは血濡れのままだったので、魔法球から帰ってきたチビっ子に泣かれていた。

バルバトスは割とケロツとしていたが、アンデルセンの目から光る筋が見えた。

それでも言わぬが花ってやつだろう。

そっとうね...

:

:

:

:

ボクオーンとバリーの鶴の一声でソーモンに限らず全ての街に頑丈な防壁で囲い矢倉で警戒態勢を改善する方向で決まった。

ソーモンも復興作業中だし、日常に戻ってから間もないある日

「明日、空いているか？家に来い。

ワグナスが呼んでいる。

無論、俺もだ……

ただ、久しぶりにお前との闘争を楽しみたいツツツ  
「ダンダーグが朝、訪ねてきた。」

「いいぜ…夜に来い。またボコボコにしてやんよ。」

だがな…仁王立ちして玄関に立ったまま言っな!!。

新入りの門下生がビビってまごついてただろうが( # 。 )ゴラ  
ア」

まあ、途中クジンシーが空気読まないで脇を通ろうとしたら睨まれて気絶したけど放っておいた……

そして次の日、ダンダーグにお呼ばれしたし一年振りにワグナスさんにも会いたいし…

ワグナスさんは20年前から美人なのは変わらない…むしろよりダンダーグの勇次郎化が進むほどそれに比例して美しさに磨きが掛かっている。

途中で2人の好物も用意したから完璧だ！

「もしも…し、ダンダーグく  
来たぞ…い。だから開 け て く れ」

「んお？ノエルか！！待っていたぞ。

何をしている…早く上がれツツ」近所迷惑だから吼えるなよ…

「お邪魔します。ほい、お土産。



家の中綺麗だな  
さすがワグナスさんだよな」

「ここ半年は俺が家事をしていたのだ…  
黙って、ついてこい」えゝマジかよ。  
正直サバイバル生活しか浮かばないから意外だった。

ダンダーグはズンズン奥に進み「入れ」

入るとワグナスさんがベッドで横になっている。  
そのすぐ脇にはベビーベッド…

「デキてたのか？」  
俺が尋ねると又チャアとでも効果音が付きそうな笑みを浮かべる。

この笑みは最高に嬉しい時の顔だがハッキリ言おう。とんでもなく  
怖い

「実はな…」3日前に生まれたのよ。ノエル君」起きてたのか？ワ  
グナス。」

うん、ワグナスさんの奇跡のスタイルとその美貌「そんなに褒めて  
も何もでないわよ。」と直感健在だ。  
そこに母親になったことによる包容力が加わり最強に見える。

「元気そうだなによりです。」

「ありがとう。……あなた、ノエル君にあの事ちゃんと伝えてくれた？」ニコニコ笑顔で見ているが、ダンダーグは急にあたふたしました。

「ノエルツツ「静かに話してね？」…お前に頼みたい事がある。

娘の名付け親になってくれ。引き受けてくれるか？」

「あゝ、俺で良ければですが…

肝心の名前だけど、俺が知ってる女の英雄にロックブーケってのがいるんだがどうだ？」

ワグナスさんはニコニコ笑顔のまま、ダンダーグを見れば顔が下を向きブルブル震えている。

「「スゴクイイ」」

「やはりノエルに頼んで正解だったな。」

「そうね！！スゴクイイ名前だわ。

これでありきたりだったり変な名前だったら……

ありがとうね！！ノエル君」

よく見たら動かない筈のベビーベッドが揺れる程ロックブーケが体全体を使って喜んでいる。常識をワグナスさんの中に置き忘れてきたらしい。

ただ、この時は2人という死亡フラグを回避したと思っただらその先に仕掛けられた地雷を踏んでいたなんて気づいてなかった…

とにかくその日はお土産とダンダーグの料理が振る舞われ舌鼓を打ちつつ会話も楽しんだ。

S a ・ G a o (前書き)

マンガにない展開は難しいねえ

ガン・ガン、ガンガン

エッホ、エッホ

掘れども掘れども、石が出る

俺ってばなんでこんな事してんだろ…

バレンヌに帰りたい。

:

:

:

:

遡ること6日前の久しぶりにバリー、ボクオーン、俺の3人で高級メシ屋へ…

「バリーさん、ボクオーンどうしたんだ？休日到店を借り切って…こんな高い店じゃなくても近くに酒場があっただろ？」

「まあまあ、たまにはいいじゃないですか。」

「そつだぞノエル。お前は確かに強い。バレンヌで武と言えばお前だ。」

だが、これからは武一本ではいかん！これもお前の事を案じての事だ…

テーブルマナーはその第一歩だ。今日は黙って連れて来たから好きに食べればいい……」

「2人共にそこまで考えて……」

俺もこれからは文武両道紳士としてやってくぞ！」

その時、酔いも回り気持ち良くなってたし、二人の気持ちに感激していた俺は気付けなかった。

ボクオーンとバリーが黒い笑みを浮かべていたのを……

「ふい〜美味かった〜ごつそさん。ゴチになります!!」

久しぶりに食べる高級素材をふんだんに使った料理と上等な酒を心おきなく堪能して幸せな気分でくつろいでいたら肩トントンされた。

振り返れば、8万Dpと俺の名前が書かれた会計を持った支配人が……

なんで!?

「ノエル、悪く思うな。お前の腹を満たす分の料理代を払うくらいなら今の研究費に使う」

「すみません。私も店の食材を使い切らす程の代金は……」

嘘だと言ってよ、バーニイ……

奢ってくれるって聞いたから財布持ってきてないし、こんな話が広まったら……

・  
・  
・  
・

「おいおい、聞いたか？ノエルさん8万Dpツケにして帰ったらしいぞ〜」

「オレが聞いた話だとバカ高い店で食うだけ食って1人で店の食材使い切らせたとかww  
もうね、バカかとwwアホかとwwww」

「フン！良い機会だ・・・思考すること無く流されるまま漫然と食い漁った『たわけ』だツツ  
閉め出してしまえイ！！」

メシ屋総出禁どころか世間から干されちゃうじゃないか……

こうなったら！！

「タッチゴー」金が値崩れするので辞めて下さい。「……………」  
、（「

「流石に8万は酷いかもしれんな。どれ、私が肩代わりしてやろう

か・・・ただし一つ条件があるがどうする？」

「お客様、金額が金額でございます……」

どうか、満額キャッシュでよろしくお願いいたします。」

勝者は落として落として、それから救い上げるツツツ

ざわ…

ざわ…

ざわ…

「助けてくれえ〜ボクえもん！」

:

:

:

そして今に至ると…

ボクオーンが言うにはこの鉱脈は掘り尽くしてしまい放棄された真正銘の死んだ山だったが、最近モンスターが住み着いたらしい。

そのモンスターはどんな形かもわからない、ただそいつらが現れてから今まで見たこともない魔石が発見されるようになった。



しかも、エネルギー変換効率が高いから安定して手に入れたいからサンプルを採るから捕まえてこい。

:

:

:

そして、今に至ると…

ボクオーンが出発前持たせた物は水と食糧が溢れたオアシス世界の魔法球

この鉱脈と同じ山が延々広がる捕獲用魔法球、モンスターボールを頂きました。

ライトボールを浮かべてエアスクリーンで新鮮なエアも循環させた。

分身も総動員したし準備万端だツツ

悪いがプロジェクトXのような波瀾万丈はない！山無し谷無しでサクサク終わらせるぞ〜なんて思っていたが甘かった。

掘った石はトロッコに乗せたら金に変えて地上へ送るなんて……

それに下へ潜れば潜るほど岩は硬くなり、トロッコの往復にかかる時間も比例して延びていく。

1人にやらせる仕事ってレベルじゃねえぞ。

帰ったら労働基準法だけは絶対作らせる！！

それになんとかオラ、ホントはすげえ疲れてんのを無視したら、通り越して変な気分になってきたぞ!!  
もうダメだああああヒヤッハー!!

:

:

:

:

この山に引越してからにはヤツらもいないスゴクイイ所だと思った。

なのに…また

「でたモグー、アリだーモグ」

アリといっても肉食で穴の拡張工事をする最下級のもので高さ2メートル、全長3メートルもあるバケモノだ。

兵隊アリは図体、スピード、パワーが別格でもはや別の生き物だと考えた方がいい…

なにより強烈な繁殖力。

それに加えクイーンだけは別の生物に卵を産みつけなければならぬが孵化した際は特性を取り込みその分より強力な化け物へと無限に進化していく悔しいが完成された生態。

殺しきるのは不可能に近い…

今回で3度目だが、皆疲労困憊だ。次はどこに逃げればいいのか…

：  
：  
：  
：  
「ノエルは石を掘る〜ハイハイホ〜」  
ガンガン地下へ掘り進んでいるノエルです。

早くモンスターボールを使って帰りたい。　ん？石とは違うなんか  
柔らかいモノに当たったぞォ〜

「キシヤー」

「ヒヤッハー！！化け物はトマホークだぁ！」

今まで岩をガンガン削っても壊れなかった相棒……TSURUHA  
SHIを何かに全力で投げつけた！

息絶えたのを確信して覗いたら何故かスコップ？を担いだ馬鹿でか  
いアリの化け物だった。なんでスコップ持ってたんだよ…  
それに何でこの化け物がこの世界にいるんだよ…

「誰だか知らないけど助かったモグ！ありがとーモグ」

「うわ〜！！なんか喋るとる」

腰までの身長に人語を話二本足で歩きもふもふの毛並みを持つモグラ…だと？

驚きすぎて普通のテンションに戻っちまった……

「この馬鹿でかいアリは何なのか知ってんの？」

「コイツ等とんでも無い化け物モグ！最初は肉食でも食い尽くしたら草も食うから雑食に進化するし放つといたらアンタも危ないモグ！ついてくるモグ」

潜ってから自分の独り言や影以外にふれあいが無かったから癒される〜

まあ、実は猫かぶってるだけで本性はゲスだったら…モンスターポールに封印すればいいいな。

「そんじゃま、案内頼むよ？」

「合点モグ！」

モグラの後をついて不思議な山の更に奥へ足を進めた。

前回のあらすじ

ノエルが地下に住む不思議な一族「モール族」に出会った

さっき会ったモグラ「モール族」の少年に先導役としてもっと沢山の仲間がいる所へ案内してもらっている。

「というかこの子、さっきから身振り手振りもつけて、ずっと喋り続けてるけど…」

「モグラ君、モグラ君。俺はノエルというんだが君の名前はなんて言うのか教えてくれるかな？」

「ええ。なんて名前だと思うモグ？」

子供に付き合ってるのも大人の甲斐性だな。俺の腰までしかな

いちちくりんな体型から考えて……

「カボスだろ？」

「ブー！！カボスって何モグ！？違うモグ！僕の名前はケロコツってんだモグ。

そんな事よりもうすぐで着くモグ。」

そんな事ってあんた……

ただ、途中の話で別の大陸でこき使われてたから一族揃って逃げて来たけど、今度はチームに追われて死にそうらしい。

道すがら聞かせてもらったが……チームはヤバいだろ。

それからも他愛も無い話しや、割と聞き流せない話しを続けていたが、目の前には開けたホールのような空間が……！！

足元や壁など至る所に穴が開いており、正に迷路やダンジョンのようだ。

その光景に圧倒されていた俺だったが、ケロコツはホールの中心にととて歩いていく。

「みんな～ただいま。」

ケロコツの声が響きわたると、モグラ君達がそこかしこから顔を出

し、こちら…俺の様子を伺っている。  
お呼びじゃないぜ！って雰囲気を感じてるんだが……

そんな中、一匹のモグラが近づいてきた。

「バカ、どこ行ってたんだ！危ないから外に出るなと言っただろうが！」

「ぐおお…頭があ…」

大きめのモグラはケロコツの親らしく、開口一番怒鳴りつけると同時に脳天に拳骨を落とした。  
拳骨が相当痛かったのだろう。堪らずしゃがみ込み頭を手で抑えながら耐えている。

「で、なんで人間が此処にいるんだ？」

まあ、俺は余所者だ。流石に警戒するわな。  
ただ、問答無用で攻撃されない事から…上手くいけば友誼を結べるかも知れんね。

「実は、この山に魔石を作るモンスターがいるかもしれないと判明し、生け捕りにする為に…」

「それにオイラがアリに襲われた時、ノエルは助けてくれたんだモグ！」

痛みから復活したのか話に割り込むケロコツ…どや顔とサムズアツプも忘れてないのは良いが…墓穴掘ってるぜ？  
ほら、お前の後ろに立ってるモグラの親父から怒オー気が立ち上ってる。

「ケロコツ、テメエこの莫迦たれ坊主が！  
あれほど勝手に出歩くなつつただろが！  
ワリイな坊主の恩人に難癖つけちまってよ。俺の名はレヒツカってるんだ。」

「私の名はノエルと言います。」

「恩人を叩き出すようで…心苦しいが…この山にゃ、タームつつうバケモノがウヨウヨしてやがる。  
せめてもの恩返しだ…アンタが探してる魔石もあるだけくれてやらあ。だから今すぐ帰えれ…」

「どうして魔石の在処を知ってるんですか？」

「あゝ、堅っ苦しい話し方は止めてくんな。」



魔石はよ…アリを倒した時に、奴らのケツからブチ撒けられる蟻酸が地面に染み込むと出来んだ。」

うーん、モール族は的にしていたモンスターで無い…しかし、交流ができるほどの知性があるし、乗りかかった船だ。

放つとく訳にはイカンよなあ。

「あのアリに困っているのなら倒してやるつか？」

「何言ってるんでい!？」

アイツ等を殲滅するのは無理だ。命をドブに捨てるようなもんだ。」

そんな青筋立てて怒るなよ…

そこから、モール族はアリ(ターム)との闘いを繰り返してきたらしく個体による特徴、戦闘力、種としての習性等を、それはもう親切に教えてくれた。

好物が無くなれば、次点の好物を大陸中から探すらしい…聞けば聞くほど放って置けないわなあ。

「レヒツカ…さっきの聞いたら余計倒さんとイカンな。いくら太陽に弱いといっても、地下から来られちゃ大陸全体が奴等の射程圏だろ…」

幸い、俺は腕に自信もあるし、魔石も手には入る。

お前らも本当の家が手に入る…イイ事尽くめだろ？」

「アンタ…そこまで言うなら好きにしな。

このホールからまた奥に行った先の大穴が奴等の巢でい。

それと、コイツは魔石のから鍛え上げた剣だ…

引越の時、かさばるから置いて行こうと思ってたモンだが…アンタのツルハシよりはマシだろ？持っけてけ！」

レヒツカは一本の剣を渡すと仲間の所へ帰った。

不器用なモグラ（漢）のツンデレ…渋いなあ。

「ノエル、死なないモグよね？」ケロコツが話かけてきた。

「馬鹿だなあ、これでも国では最強で通ってるんだ。負けないよ。」

「他のおじちゃん達もそういつて帰って来なかったんだ…絶対死ぬなよ！死んだらブン殴るからな！！」

そこまで言うとケロコツは走って行ってしまった。

不器用な所はレヒツカに似たらしい。  
まあ、ボクオーンやバリーにチョップを食らわすまで、死ねんよ。

『リヴァイヴァ』

今回ばかりは、絶対に負けられない。もし勝ったとしても…万が一、最悪のビジョンが浮かぶ。

一応、今から保険でリヴァイヴァを施す。  
分身に手紙を持たせて地上へ走らせたから、情報も届くはず…！

「さてと此処からはマジで人外魔境ってワケか…」

レヒツカが言っていた通り、ドデカい穴が下へ伸びている。  
さながら閻魔が開けた口のように…内部に踏み込めば作業アリが素早く察知して俺に殺到する。

「虫が調子に乗ってんじゃねえッ  
『シャドウサーバント』、『風神剣』…！」

いつもなら魔法の範囲攻撃を使えば一瞬で終わる楽な戦いだが、今日ばかりはフィールドが違う。

目の前ある広い一本道には幾つもの横穴が続いている。

そうなれば鉾山の地盤にどれだけの影響を及ぼしているか想像もつかないし、その一本がモール族のコミュニティーに繋がっていたら

.....

だから即座に分身を展開、風の剣を持たせ手数稼ぎ、囲まれないように少しずつ進む。

どのタームも、一太刀で切り捨てているが…ランタンとシャベル片手に迎撃してくる下っ端。

女王の産み出す卵の分母が多いから、腐るほど湧き続ける物量、急な下り坂だという悪条件が重なり本来ならば簡単に踏み出せる一步が遠い。

しかも、途中から兵隊アリだろうデカイタームがチラホラと現れ始め…いよいよ本番…巢の中核、クイーンのいる部屋に近づいているのである。

その途中、事情を知らなければ宝石に間違えてしまいそうな球が陳列された小部屋が見えた。

しかしその全てが卵であり、夥しい数の卵が安置された保育室。道中では他に幾つも見つけたので、その都度、分身に念入りに焼き払わせ進んだ。

無論、アリ達は怒り狂い、攻勢は更に激しくなる。

こうして時間はかかったが、俺はかなり開けた場所：クイーンが数多くのチーム共を侍らせている玉座であり産卵室に踏み込んだ。

女王とは大分距離があるのだが、今見えている胸から頭部までも切り捨てて来た並みのチーム共の6倍。

侵入者である俺を確認した女王の一声で、作業アリが忙しく卵を運びだす。

作業アリの代わりに侍らせた新しい部下達も、選ばれしエリート・チームなのだろう…

今まで見なかった剣や槍、中には金鎚など思い思いの武器を構えた赤いアリが続々と集まり威嚇している。

これはアレか？黒アリさんより、赤アリさんの方がパワフルって意味か？

「まあ、何にしても…昔テレビで見た通り、1人じゃ何もやらねえつてのは本当だったんだな」

肝心の卵管は、光が届かない暗闇の向こうにまで続いている。流石に全長は分からないが、とんでも無い大きさなのだろう。

そして、やるべきことはただ1つ…

「先手必勝！跡形もなく消える！」火の鳥

クイーンの部屋はかなり広い長方形型の空間だ。火の鳥で一気に焼却…全てを片づけようと放った頼れる術法。

だがクイーンが鳴いた途端、消えたはずの作業アリが現れ、火の鳥へ飛び込む。

火の鳥は多くのアリ共を焼き払ってくれたが次第に小さくなり…消えた。

後には魔石が転がっている。

ここに来るまでもアリ共を倒したが、魔石は出てこなかった…

『アリを倒した時に奴らのケツからブチ撒けられる蟻酸が地面に染み込むと魔石なんだ…』

モグラの親父はこう言っていた。

今の光景から生じた疑問…答えを確かめる為、弱めに放ち様子を見る。

案の定、当たった瞬間…正確には、タームの体液が触れた瞬間から火の鳥が小さくなっていく。

確かに魔石にエネルギーが含まれていくのが分かったが、それは周  
りから吸い取った結果。  
バッテリーとして転用できるかも知れないが、コイツ等はやはり危  
険すぎる…

ボクオーンには事後承諾だが納得してもらおう。

「飛べ！オラアツツ！！」

基本に戻り、音速剣で斬撃を飛ばして切り刻むスタイルに変える。

対するクイーンもただ眺めているだけでない。

岩を投げつけ、口からは超音波とソニックブームを吐き出し反撃も  
する。

最下層での女王戦から、かなりの時間が経ったように感じる。

今では応援に来るチームの数が減り、取り巻きのエリートとクイ  
ーンも傷を負い動きが鈍っている。

クイーンが懐から取り出したドク口をあしらった杖。

そのドク口に光が集まり、何かを企んでるのが見え見えだ！

「いい加減に地上に戻りたいんじゃないやああああ！『光速剣』！！！」

モグラの親父から借りた魔剣。

その魔剣に音速を越えるスピードに乗せて繰り出した抜刀は、立ち  
はだかるエリート・タームの壁を突き抜け…クイーンを真つ二つに  
切り捨てた！

終わったツツ！ターム編完！

その後、火の鳥で汚物を消毒。

魔石をモンスターボールに収めると、卵を植え付けられていたらと  
考えたら…やはり不安なので焼身自殺。

これでダンジョンに突入する前のキレイな身体になった俺は、モ  
ル族の集落へとルンルン気分で帰った。

「まさか本当にやっちゃまったあ…アンタ、大した男だぜ！！  
何にしても、今日であるアリ共とおさらばできたなんて涙が出てく  
らあ…！」

レヒツカはもう今にも踊りださん勢いで喜んでる。



「なあ、レヒツカ。俺が住んでる国に来ないか？  
人も亜人も平等で通してるから、悪ささえ働かなければ、奴隷時代  
と比べたら天国みたいな所だと思っぞ？

それにこの山には万が一を考えて国の検査が入る。  
バタバタ荒らすことになるから、試しに住んでみるよ。」

「仕方ねえなあ。そこまで言われて断つちや男が廢るじゃねえか…  
待ってな！全員説得してやらあ！」

そう言うレヒツカは猛ダッシュで走って行ってしまった…  
なんていうか…江戸っ子気質で、凄く好感を持てる親父さんだ。

「ノエル。ちゃんと帰って来てくれたモグ！」

「おー！カボスカ  
だから強いつて言っただろがこのバカチン！」

「ブー！カボスじゃない！！どうしたらそんな強くなれるモグ？」

「ハイハイ分かった、また今度なー」

「え、オイラも強く成りたいんだモググ！」

結局、その後もケロコツはしつこく食い下がり、サングラスまでして道場に来たので門下生にするよう約束してしまった。

その日は食料用の魔法球を活用、腹一杯食べて、寝て…疲れを抜いてから地上へと帰還。

俺の我が儘…もとい、口添えとバリーの理解も有り、円満にバレンヌの一員となった。

尚…後世のモール族が、素手ならバレンヌの亜人中最強の種族に化けるが…これは、また別の話。

別大陸の巨大国家にて

「よいか？バレンヌ技術、資源を奪い弱体化させるのだ…行け！」

後日この任務を授けた武官が最近大規模な採掘と調査が行われたという鉱山からとんでも無いエネルギーを秘めた魔石とこれまたラグビーボールほどの美しい宝石を持ち帰って来た。

だが、文官は失敗に終わり逃げ帰って来た…

其れだけでなく呆気なく捕まりバレンヌで手に入れた記憶は消され  
たらしいがそれだけで外傷はない。

バレンヌから情けをかけられるとは……

期待していただけに残念だが彼女には生まれ変わってやり直して貰  
うことにした。

この魔石と宝石を解析し、転用した兵器で奴等を滅ぼすのが今から  
楽しみだ…

なお、この国に駐在している魔法使いから連絡が無いことを不審に  
思ったメガロメセンブリアが事態を把握するのが1ヶ月。

かき集めた同盟国の全力を投入して、滅び去った巨大国家の民は勿  
論、救いを求める周りの国をも切り捨て焦土と化し、地図上から完  
全に消し去り事態の解決を図ろうとするのは2ヶ月後の事で  
ある…



## S a ・ G a 1 0 (後書き)

『ターム』

ロマサガ2

きつとロマサガをプレイしたことの無い方でも、ネットで『まだー！』というネタを見た事が有るでしょう。その元ネタがコイツ等。

分かりやすく例えたら、映画「エイリアン」がアリになって、更に進化、繁殖スピードが上がった存在。

原作での悪事は、ステップの寂れた村で一泊した夜：村を襲撃、また幾つかの村を壊滅させた元凶。

当時はまんまアリ。

ついでにターム族もむしゃむしゃしていましたが皇帝一行に成敗されたと思いきや………最終皇帝暦に復活！

どうやら当時の皇帝に卵を引っ付けて、より強靱でエロスな身体：リアル・クイーンとしてアバロン地下で復活！

女に見えるのに男という不思議：今風に言うならフタナリかな？

また、本人曰わく『七英雄もビビらせたんだぜ？』

そりゃ、いきなり人間が『ほぎー』なんて断末魔を上げたと同時に、

腹を食い破って現れたらマジビビるわぁ！

『ケロコツ………』

元ネタは作者が投稿の前日、夕食で食べたコロッケとヒレカツでした。

また、モール族の名前は「際ユニーク」です。

S a ・ G a 1 1 (前書き)

うーん…楽しんでいてね

「なあ、俺とボクオーンが初めて会った日からだいたい30年が経ったな…」

俺は何かの設計図を一心不乱に描いているボクオーンに話かける。

「30周年はとうの昔過ぎただろ。もう33年が経った…」  
ボクオーンは振り返らずに短く答える

「ボクオーン、最近一気に老けてきたな。お前建国から働き詰めでたまにしか休んでないだろう？」

この間、弟子達も使えるようになったと話してたから後は研究に専念したらいいんじゃないか？」

「馬鹿もん！！使えると言ったがワシの代わりができる程ではない。それにこの国は平和で人も根は穏やかな者が多い。それはいい…だが大国の卑劣漢達はそのに付け入るのだ。」

研究も政治もまだまだ遺すべきものが多い

お前にも黙っていたがワシに残された時間はそう長くない…

そして、後継者は何があるつと国の為に動く人間でなければならぬのだ。今それを見極めている。」  
相変わらず設計図を描きながらだが言った



「マジかよ…バリーには言ったのか？」

「まだだ…バリー達は50代だが亜人の年齢的にはまだ人間でいう二十歳と変わらん…」

それでも『国を想う気持ち』なら一番相応しいのはバリーだとワシは考えている。伝承法に耐えられるだけの資質があるかが心配だな…」

それにノエルよ…ワシの目が黒いうちに片づけたいモノがある。」

「なんだ？大抵の無茶なら聞いてやるよ」

「ドマイ王国を覚えているか？」

設計図が一段落したのだから、揺り椅子に移り静かに語りだした。

「何処の国にけしかけられたか想像はつくだろうがメガロメセンブリアだ…」

どのような取引で引き受けたかはこの際関係無い。軽々しく手出しさせない為の見せしめに1人残さず滅ぼさねばならん…！」

「ボクオーン、そりゃやりすぎ…」「甘いぞノエルツツ…！本当に国の事を想うなら決断せねばならん時が来る。その時も先延ばしにす

るのかッ

なによりお前、本当に世界を変える意志はあるのか!?

そんな軽い気持ちでいるならこの先、ワシが死んだ後も続く戦いに耐えられまい…！いつそ辞めてしまえイッ

ボクオーンは怒り、失望、期待、心配いろいろな感情が混ざったくちやくちやの顔を真つ赤にしながら怒鳴りつける

これを余人が聞いたらただキツイ言葉で励ましているのだろうと思っただろう。

だが、30余年共に過ごした俺には分かる、本気で言っているのだがコレはいつもの事だ、俺がこの程度で折れないことも解っており敢えて辛辣な言葉を投げつける

そして、不器用ながら時に励まし、労り、時に利用し、迷った時は導き、愚痴はこぼしても絶対に弱音は吐かなかったボクオーン…

俺は勝手ながら彼をこの世界での父であり悪戯好きの兄のように慕っている。

そんな彼が周りは勿論俺にも初めて見せた弱みだった。なら、俺も応えなければいけない…

「そうだな…ボクオーンが言うとおり最強と持て囃され浮ついてい

たかもしれない。

分かった、俺も俺のできることをやるっ！！」

「そうか！？なら今すぐ船の手配をしよう！」

そついうとボクオーンはバリーがいる屋敷へ行った。

「俺のできること…か。」

S i d e   ボクオーン

ワシも本格的に老いを感じ後世の仲間の為後継者の育成とノエルのいうS a ・ G aとこの世界の魔法を融合させた魔導の技術を伝えることに一層力を入れてきた。

今日はノエルに確かめておきたいことがあり、道場も休んでもらい私の私室へ来てもらった。

奴は自分の事を頼る人間がいればすぐに助けてやるうと首を突っ込む。それは美徳であるが限度がある…幾ら強いといっても神ならざる人間だ。

限度がある

最悪、この国の為に他の国を切り捨てる判断が下せるかが心配だ

:

:

:

予想通りだったが、あの日結んだ誓いを本当に果たす気があるのか  
様々なことが頭をよぎり、気付けば怒鳴りつけていた。

身体につられて精神も弱ってきたようだ…

いや、強く見せていても一皮剥けば影で努力し今でこそ適切を見抜  
くが最初は見当違いな指導、つい最近もバカな事もしてそれに巻き  
込まれたが楽しんでる自分がいつからからいた。

結局、ワシはノエルを部下や後継者というより抜けているがそれ  
でも愛おしい家族のように思っているのだろう。

果たして、ノエルはドマイ王国を滅ぼすことを承諾してくれた。

家族のように思っている者を戦地へ送り込み、ワシは肝心なときに  
何もできない自分が不甲斐なく準備をすと言って逃げるように部  
屋を出た。

いよいよヤキがまわってきたようだ。

ただ、ワシはやれる事をやろう！その時が来るまで。

S a ・ G a 1 1 (後書き)

どうしてこうなったの？

キャラの一人歩き？

ボクオーンのマリオネットか!？

ボクオーンが遠征の為に上から下へ走り回っている頃  
これは、一種の示威行為：俺一人で攻めてそれが達成できるか悩んでいた時にクジンシーが来た。

「チーイス！師匠、クジンシーッス」

「今日はいつもみたいに構ってやれん。」

「ちよっ！いつもポケを拾ってくれる師匠がこんな事言うなんて

……

マジでヤバい橋渡ろうとしてんスね？

ダンダークさんのように武道を極めたわけでも無いし、ワグナスさんのような魔法も使えない、それにボクオーンさんみたいに切者でもないっス。

けど、オレも師匠の弟子ッスよ！話してください。」

そうは言ってもなあ… 『実は国1つ滅ぼすのに連れて行く奴を誰にするかなんだ』 H A H A H A 『なんて軽く言えるわけねえだろ！

気持ちだけ受け取ろう。

「いや、実は新しい道場を建てたいんだが場所に悩んでいて…  
幾ら魔法球の世界が広いといっても入場までに待つ時間が勿体なくてな。

こればかりはいい案が出てこねえで悩んでんだ。それだけだから気にすんな。 な？」

「あゝそうだったんスカ!？」

オレも柄にもなくマジになりましたよ!

ていうか、師匠そんな事で悩み過ぎwww

「ハイハイ、分かった。気が散る。どっか行ってる。」

クジンシーがいるといつまでも考えが纏まらないので流れで追い出すことにした。

「つつか師匠酷えww

じゃ、またタイミング見てちょっかい出しに来ますんでwww

「今日はもう来なくていいからな!」

クジンシーはふらふら歩きながら街中へ消えていった。

:

:

:



：

結局その日は独り身の弟子の中から選抜者をかき集めるくらいしか浮かばなかったな…

ボクオーンに言われたばかりだが、非情な決断をするのは難しい…

まあ、いつまでも彼におんぶに抱っことはいかない。腹括るしかないわな…と考えていた時

「師匠くクジンシートス」

約束通りまたちよっかい出しに来ましたww

それに今回は自分1人じゃないんスよ！」

おいおいクジンシー、また来たのかよ…今は真夜中だぞ？

今日は鬱陶しいくらいしつこいじゃないか。

ついでに連れまで連れてきやがって…

ご近所さんには、もう寝ている家もあるからクジンシーが騒ぐと迷惑だろう

これは久しぶりに鉄拳制裁をせざるをえんな。

そう思い門を開けに行ったが…

「遅いッッ！！いつから「近所迷惑だから静かに話してね？」…そんなに偉くなったのだ？」

クジンシーがダンダークとワグナスさんの影から顔を出している。  
この野郎、やってくれたな…  
なによりもダンダーグの方がよほどうるさいかったんだが…

「とにかく、こんな夜更けに玄関で話すのも何ですから、中へきて  
ください…」

：  
：  
：  
：  
「ねえノエル君、クジンシー君を悪く言わないでね？」  
『師匠の口を割らせるのは自分だけじゃムリでした』ってこの子な  
りに考えたんだから。」

「お前が何を隠しているかは知らんが話せ。  
30年以上の付き合いだ。そして、此処まで慕う弟子もそうは居ま  
い！  
俺個人としても、お前ほどの強者がこそこそと動くのが気に入らん。  
」なんだかなあ…いつもの危険な仕事というより戦争だから黙って  
たいのになあ。

「ノエル君、言うときは私の目を見ていうのよ。分かったわね？」

それはキツイ。あまり時間を掛けてはワグナスさんの不思議パワーで見透かされてしまう。

クジンシーに言った表向き理由でなんとしても乗り切りたい！

「いや、本当に新しい道場の事で悩んでるだけですよ。

この市街に建てるのは再開発を要求しなければなりません、道場主も決めないといけないから難しいんです。」

なんとしても逃げ切らないと…

「…それならクジンシー君からあらかじめ聞いて代案を持ってきたわ。私が魔法を、武道は主人が教えるの！

それと場所は良い場所を知ってるから解決ね！

じゃあ一段落した所で…本題に移りましょう。今日は逃がさないわよ？」

ワグナスさんはにこにここと微笑んでいるが、『やると言ったらやる』  
凄みをバシバシ感じる。

うん…望みが絶たれた。大魔王とワグナスさんからは逃げられないようだ。

それはもう、今回の騒動の原因になっている悩みから、どさくさに紛れて娘のロックブーケについてはどう思っているかまで、関係無い事も洗いざらい吐かされた…

その間、クジンシーとダンダーグの男2人は遠巻きに監視。というより、ロックブーケの件になった時、アイコンタクトを送ったが見守っていた。

俺が思っていた以上に男の友情は儂かった…というか、どうしてこんな事にいいいい!?

:

:

:

:

「な〜んだ！そんな事で悩んでたの

昔から思ってたけど、ノエル君って凄く強いのに抜けてる所あるわよね？ね〜、あなた？」

国の一大事をそんな事って…

それに俺のことをそんな風に思ってたなんて、ワグナスさん酷すぎる

「拍子抜けだな 今に始まった事ではあるまい！何を恐れるツツ

一人歩きを始めたばかりの赤子、生涯を強者の道に捧げた者まで例外なく国の為ならその程度の覚悟はしているツツ！！

今一度言ってお前ほどの強者がこそ動くのが気に入らん。

1人で動くも良し！しかし、いい加減人を頼れ！！皆の懐に飛び込むことを知れ！！」

ダンダーグ、普通に名言残したけどな…だったら、さっきも助けてくれよ！

「ノエル君、私も主人と同じ意見よ…  
クジンシー君はどう思ってるの？」

「師匠、オレもそう思います。師匠が頑張ってるのは皆知ってるッス。だからよく行くメシ屋のオヤジも少しくらいならツケにしてくれるのはそれが自分も役立てることだと信じてるからッス…  
だけど、物事には限度ってモンがあると思います。

皆少しでも力になるうと全力をだします。何でも1人でやるうとしないで呼びかけて下さい！  
そんなの寂しすぎるじゃないッスか……。」「

クジンシー…普段はイラツとくる奴だが、お前やつぱイイ奴だよ。  
そのキレイな面を普段からも出してくれ…

ただ、自分が良かれと思いついトを最大限使ってきた…チートの俺だからこそ、皆の盾になるべきだと思いついてきたのが知らず知らず、皆に負担を作っていたなんて…

「此処まで大きくなったのは確かにノエル君とボクオーンさんの力が大きいわ

でも、村と呼んでいた時からみんなあなた達の事を知ってるんだから今回もそうだけど無理にいい格好ばかりしなくてもいいの！

もっと頼りなさい！」

「ですが、ワグナスさんとダンダークにロックブーケがいるように弟子達にも家族がいる者が……」

こればかりは簡単には譲れない。

ロックブーケもそうだが、親がいない子供を出すわけには…

「ええい、男の癖にいつまでもうだうだ言ってるんじゃないよッッ今すぐ弟子達に招集掛けて片っ端から聞きゃあいいんだよ！さっさとやんなー！」

「へ！？ワグナスさん……」

「アンタの耳は飾りかい？もう一度言わせる気？」

「はい！ただいま召集をかけます！」

こ、こええええええ！！！！これがワグナスさんの裏の顔か！？  
あまりの豹変ぶりと威圧感に俺は口答えなんてとてもじゃないが、  
できるはずが無い。

あの時ダンダーグが、俺のアイコンタクトを無視した理由が分かっ

た。

後日、弟子達を集め説明をした。そして、判断を委ねた結果立候補者が多く、村の防衛に支障が出ない範囲で選抜し、遠征に行くことに決まった。

なお、選抜者が道場に集まり道場がパンク寸前の所をダンダーク夫婦が作った修行場へ連れて行き、そこが後世の武道家、魔導師の一度は訪れたい修行場と言われるようになるがそれはまた、別の機会に語ろうと思う。

先日ワグナスさんの素の部分が初めてでたとき多少驚いたがそのおかげで踏み出すことができた。

遠征ルートは議会での討論の結果、大陸を通り大きく迂回する道ではなく、魔導研究所が開発した最新型の戦艦で海と『雲海』を突っ切り最短で行くらしい。

空飛ぶ戦艦とか聞くとやはり魔法の世界だなあとしみじみ思う。

ただ、数揃えるのに時間が掛かるがもつすぐらしいが…

それにしても、戦艦を簡単に揃えさせる手腕を持ったボクオーンが味方で良かったと心から思う。いくら俺がチートでもそんな優秀な敵にいたら罫に嵌められそうだから……

バリーはバリーでいつまでも要塞都市国家では他国がソーモンのように末端の村に襲撃をかけるならず者や他国から遠ざける為、『バレンヌ帝国』と国名を改め、それと同時に庇護下にある末端の村から海までも領土、領海を決め世界各国に宣言した。



なお、今までバレンヌと呼んでいた首都も理想を現実にするという意志を込め、『アヴァロン』と名付けた。

国名も新しく変わり、気分も一新！後は警告と見せしめを込めてドマイ王国を滅ぼすだけだが……

ダンダーグとワグナスさんについていった弟子達の様子と修行場を見に行こうと思う。ダンダーグが新しく開いた修行場はアヴァロンからほど近い山にある洞窟内を掘った広間である。魔法球は一つしか無いが利用しなくても、百人の弟子達が十二分に動ける広さなのだ。

それでも、モール族に応援を頼み完成した今も後世の為、下へ下へ掘り下げているらしい

なにより山には修行の妨げとなる物が無く魔法球が用意出来なくとも整った環境が既に出来上がっている。なるほど、武骨で無駄を嫌うダンダーグらしい選択だとつらつら考えながら歩くうちに到着した。

弟子が門番をしている。

「オスツ！お疲れ様です師匠。ダンダーグ師範代は修行場の最奥におられます。」

あつれ〜？ダンダーグが師範代！？なんで？

それよりキミ、この間会った時は年相応の話し方をする爽やか美女  
ダツタヨネ？

すっかり濃いキャラになっちゃって……

「いや…それよりも…」

「……？どうしたのです！？師匠！」

「何故ダンダーグが師範代なんだ？」

「オスツツ！ダンダーグ師範代はノエル師匠に勝つまでは何がある  
うと師匠と名乗らないと仰られましたアツツ！！」

「そうか…聞きたかったことはそれだけだよ。  
ありがとう。」

「それでは門番の仕事、引き続き頑張ってくれ。」

ダメだ…本当に聞きたかったことが聞けなかったアアアア。。。。

仕方ないよな？あんなキラキラした目で何でも一生懸命にやる凄く  
イイ子に「なんで顔とキャラ濃くなってんの？」なんて俺には言え  
ない……口が裂けても！

：

：

：

：

「ノエルか！！どうだ？お前から預かった弟子は俺が極限の武芸者  
へと成長したツツ

皆、気弾を始めとした基礎から叩き直し伸びしろの限界…いや、限界を超えた超限界まで引き上げ結果見事に化けた…

今なら俺の拳を受けても一撃では倒れまいッ！

そして喜べ、生存率もそれに伴い跳ね上がっただろうしな。」

ダンダーグのぶちかましを貰って沈まないのは凄いで？

今回の成長を分かりやすく言うと、スライムからさまようように！！

ゾーマが闇ゾーマになって耐久力増したってくらいのレベルアップじゃないか！！

顔が濃くなったり、暑苦しいキャラになる副作用を引いてもお釣りがくるぜ！

「ダンダーグ！凄くないか！！

お前にこんな隠れた才能があったなんて初めて知ったぞ。

もっと早くに知っていたら…だがこれからは頼むぞ。」

「望むところだ。

そのうちに、総当たりで最強を決める闘いを開くつもりだ。

ノエル、お前も出場しろ。そこで決着をつけるのだッ！」

ダンダーグもその未来を想像したのか興奮気味になり言葉を発すれば空気が震え、部屋の隅に鎮座されているダンダーグの為特注で作られた人型サンドバック『木人』

それがが声無き悲鳴を上げている。

こうして、新しい修行場の視察は終わった。

次はワグナスさんとこだ！

公式バグに育てられてどれだけ成長しているか今から楽しみだぜ。

：

：

：

：

ワグナスさんの修行場はダンダーグとは反対方向に広がる草原の中にいきなり馬鹿高い塔が建っている

基本螺旋階段を登り頂上へ行くらしい。

「あ！兄さん！お母さんの勘はいつも冴えてる」

本当に来ちゃうんだから。」塔の入り口ではロックブーケが俺を待っていた。

あの時、死亡フラグを回避したら知らず知らず地雷を自分から踏みに行ったようだ。

それも全力で…

ロックブーケは歩きだすと同時にパパさんより先に俺の名前を言っていたらしい。

それから、道場に入り浸るようになり、ワグナスさんとダンダーグの素質を良いとこ取りした天賦の才を生かし、全術法を二年で制覇、体術も同年代を寄せつけない次元に登りつめた。

中でも、幻惑等の状態異常魔法が多い水の術法が飛び抜けており、最近では年頃の体を使ったテンプレーションを覚えたから男にはしんどい相手だ。

その魅力に溺れた男が現れてもダンダーグの睨みつけると『私より強い人じゃないと嫌』言葉と俺の傍に居ること。おかげで外堀は埋められたよ…チクシヨ…

これで男は逃げるが、偶にワグナスさんに招待された時にダンダーグがいると胃に悪い。

それにダンダーグを『義父さん』とは言いたくない！！

「ロックブーケ、ワグナスさんは頂上にいるのか？」

「そうだよ！だけど、兄さんにもこの塔の良さを知って貰いたいから階段で来てだつて」

私も上で待つてるから頑張つてね！」

そつ言うと、階段に囲まれた支柱の昇降機に乗ってサツサと上がつて行ってしまった。

「歩いてか…東京で見たビルより高いんじゃないか？  
まあ、とにかく行くぜ、オイ！」

仕方がないので登っていく。その途中、少し眺めればバテている弟子が異様に多いなと感じることがあったがそのまま走り続け今では50階まで踏破した。

「ノエル師匠、もうこんな所まで上がって来たのですか…  
ところで、この塔が誇るカラクリには気づかれましたか？」

修行で体力を消耗しているのだろう。1人の弟子が囁いてくような声で話してくる。

「サマンサか…途中床にへたり込んでいる弟子を多く見かけた。  
そのカラクリが何か知っているのか？」

「うーん、どうやら効果が無いようですね…流石に人間か疑いたくなります。

カラクリについてはワグナスさんに聞けば確実です。  
後、50階頑張ってください。」

そういつて懐から水筒を取り出し飲み始めた。  
話しは終わりのようだ。

俺はその後も一気に登って行ったがなにも感じずついに終点。  
ここにあの小悪魔母子がいるのか…

「早かったわね？流石、男の子！ロックブーケ、ノエル君なら素性も丸わかりだからお母さん賛成！」

「わぁ！お母さんありがとう。後は男2人の説得だね！！私頑張るよ〜」

もう何が何だか……

「ワグナスさん、この塔の修行場に隠されたカラクリを教えてくださいませんか？」

後、いつも勝手に話しを進めないで下さい……」

「まあまあまあ、この塔を建てる時にノエル君にも教えてないカラクリを仕込んだの。」

それは、ボクオーンさんに頂いた魔石を液体に変換してもらって下は薄く、上は濃くなるよう10階毎に変化をだして循環させてるの。

おかげで、そこにいるだけで魔力を吸うから魔力の限界量と使うときの運用効率を文字通り体で覚えることができるってこと。

勿論、この最上階が一番苦しいところよ？」

ボクオーンの研究ってこれだったのか…  
俺なんかバツテリー代わりくらいしか思い浮かばなかったからやはり鬼才は違うな。

「なら、塔から出ればそれだけで成長が実感できると?。」

「そうだよ、負荷が無くなるから体が軽くって何処までも行けそうなくらい爽快なんだよ！」

逆に階段登ってるだけで体力も付くし、魔力が上がるから凄くいい修行場だよ！」

それに待ってる時に試し撃ちしたらまた威力上がった!！」

「じゃあ、私もパワーアップってワケね！」

なにそれ…怖い。

俺の野生動物としての本能が危機を察知しガンガン警報を鳴らす。  
今すぐ、この場から離脱しろと…

「じゃあ、新しい修行場の効果と弟子達の様子も解ったんで…これで。」



「まあまあ、ゆっくりしていきなさいな。  
私の勘だと後4日は大丈夫よ」

「ええ！？お母さん本当？」

「勘よ？」

逃げなければアアア！？

そう思い階段の方を見るがいつの間にかガツチリ施錠されている。  
なら昇降機は！？

「昇降機は魔力を登録しないと乗れないのよ  
だから登ってね？って言ったのよ…」

ノエル君、あなた詰みよ。」  
ワグナスさんとロックブーケが黒い笑みを浮かべながらジワジワと  
にじり寄ってくる。

「だ、誰か、たた助け「はい、兄さんタ〜イホ！）・・・」  
な、待て話せば…」

ロックブーケはガツチリと掴み離さない。  
ならばワグナスさんは！？

「ノエル君、運命は変えられないのよ？」



S a ・ G a 1 3 ( 後書き )

ノエル！アウトー——

S a ・ G a 1 4 (前書き)

ヘルシングの作者の凄さを痛感しました。

ロックブーケさんの修行場に拘束されたまま4日が過ぎた。

あの日捕まった時は一巻の終わりだと思ったけど、2人が悪乗りしてからかっただけで何もなかった。

本当に何もなかった。

ワグナスさん曰く「ノエル君が決心するまではダメよ」との事らしい。

:

:

:

それは置いとくとして、時間が勿体無いから弟子達の稽古をしなから過ぎす。

ワグナスさんの修行場はダンダークの対極のような性質だ。ダンダークのような指導はしないが環境に適應する力を利用して成長を促す。

ぶっちゃけ、1人で頑張れという放任スタイルだった。

だが、それも修行法として筋が通っているので此処は素晴らしい場所だと言える。

そして最終日、塔で修行した弟子に魔法球の世界で試し撃ちをさせたら皆、一段上の使い手に化けた。

うーん、皆が強くなったのは嬉しいが俺も何か道場の売りを考えなければ置いてかれるな…と思ったのは誰にも言えない秘密だ。

そんなこんなでアヴァロンにいるボクオーンから全ての準備が整ったらしく召集が掛かった。

今、一時閉館している道場に集まる。

その中には当然ダンダークと弟子達もいるがこの短い期間でまた面構えが変わっている。

きつと強さもそれに比例して跳ね上がったのだと感じる。

「あなた、久しぶりね。お弟子さんも何だか自信がついたのかいい顔になってきたわね。

私は最初何人か『折れて』しまつと心配してたけど、余計なお世話だったみたいね。

流石パパだわ！」

「ワグナス、周りに弟子がいるのだツツ  
パパ等と呼ぶな！」

まあ、ワグナスが連れてきた弟子共も一見変わりがないようだが体から溢れんばかりの気の揺らぎを感じる

よくぞ此処まで育て上げたツツ!!」

2人は会うなり話し合いそのまま2人の世界に入ってしまった。

弟子達も思い思いに談笑し、親睦を深めているようだ。

そして俺は道場の奥、壇上から皆の様子を見ている。思えば、家族がいる者も参加させたのだ。最小の犠牲で滅ぼさねばなるまい。

壇上にいるのはただ皆の様子が見たかったワケではない。ボクオーンに『軽い演説でもかまして士気を上げる』なんて無茶を言われて前に出たが正直困ってるわけだ…

「諸君、私はアヴァロンの街が大好きだ。

城下町を賑わいを見ていると思わず出歩かずにはいられない。

諸君、私はバレンヌの人々が大好きだ。

皆、毎日の日常を心から謳歌し、諸君を始め多くの弟子にも恵まれた。心から誇りに感じる。

諸君、私はバレンヌの自然が大好きだ。

バレンヌの自然は厳しくも優しく見るものを圧倒し、美しいとすら感じるそして、四季折々の顔を見せ毎年多くの恵みをもたらしてくれる。

そんなバレンヌの自然が大好きだ。

だが、この理想郷は始めから存在したわけではない！！

バレンヌ帝国の歴史は謂われない弾圧と独裁との闘争であった。

そして、皆の力が有ったからだこの大陸を末端まで統治し、理想を  
実現し此処まで大きくすることができたのだ！

だが、恥知らずにも正義と称し我等がバレンヌを踏み荒らす者が大  
陸より現れた！！

此度の遠征は今までのような制圧が目的ではない、殲滅だッッ！！

手加減はするな！我等が武を存分に示し侵略者を遠ざけ、バレンヌ  
の未来…子供達の安息を勝ち取るための防衛戦だ！

諸君、大義有る我等に敗北はないッ！！

あるのは勝利のみッ！未来を掴み取るのだアッッ！！」

弟子達の様子を見ると皆真剣に聴き、終わると同時に喝采が上がる。  
士気を上げることはひとまず達成したようだ…

ボクオーンは意外にも泣いていた。

何はともあれ、俺の演説は成功したらしい。

決起集会はその後、戦艦の機能の説明に始まり、部隊の編成とドマ



イ王国の地理と侵攻ルートを一通り話し、明日の明朝、朝焼けに紛れて1日で首都イカサを陥落。

七日で殲滅完了を目標に展開すると伝え解散した。

明日とうとう、ドマイ王国殲滅戦の火蓋が落とされる

## S a ・ G a 1 4 (後書き)

只今旧世界では西暦1400頃

この戦が終わったらスキップしようと思います。賛成または反対意見があればください。

ちなみにスキップは300年を予定してます。

S a ・ G a 1 5 (前書き)

初めての投稿から2週間経った昨日の総アクセスが3万超……

お気に入り44人……

ネギま！？パワー恐るべしですね

これからもこんな感じでいきます

ドマイ王国の歴史は古く、商人が寄り集まった商會がこの国の始まりである。それ以来商人ならではの方法……貿易でのし上がり今では日常品から情報や奴隸でさえも手広く取り扱うようになる。

また、上客と認められれば背けば呪いが降るといふ厳正な魔法契約の下、裏の取引にさえ応じるといふ特徴から今ではメガロメセンブリアやヘラス帝国でさえその立場故においそれとは手を出させない諸國御用達の巨大商業國家である。

そんなドマイ王国の朝は早い。

取引相手の中にはゲートで直通とはいかない國や個人相手の場合があるからだ。

その場合は日もでていない深夜から出発する場合もある。そんな商人は國が消える瞬間を見ずに済んだのだ良くも悪くも悪運があったのだろっ…

しかし、その大多数…野党に襲われ最終的には千にも満たない人々は逃げ延びた他國に受け入れられ、凶らずもバレンヌ帝國の恐ろしさを広める語り部の宿命も背負い生き残ることができたが最低の暮らしを送る未來が待っている場合は幸運とはい難いが……

バレンヌ帝国の精鋭を乗せた艦隊は空と海2つの軍団に分けられてまだ見上げれば、星が瞬いている夜とつつすらと地平線からみえる朝焼けが混じり合う時間から出航した。

2つの軍ごとに目的と特色がある。

海からの軍にはワグナスさんやロックブーケを始めとした魔導使いを中心に編成した。上陸をした最寄りの村を陥落後、拠点と化した村から各地の村や街道を落とす為に分かれ、相手には反撃する間も与えない速攻での攻略を目的にしたからだ。

空からの軍団には俺やダンダーク、クジンシーを始めとした肉弾戦主体の武道家中心の編成である。更に言うと、この軍は首都イカサを攻略する俺とと首都から各地の村へ侵攻する部隊という2つの部隊で構成され現地ですれぞれ展開する。

何故このような編成になったかは、魔法のメリットデメリットだと言える。いくら敵国といえど魔法は射程範囲が広過ぎ、仲間を巻き込む恐れがあるのだ。

ならば、範囲は狭くとも気弾などで制圧し万一乱戦になった局面も考え耐久力があると言っても限界がある弟子への被害も抑えつつ速攻で殲滅することを目的に考えた結果この形がベストだと落ち着いた。

なお、ボクオーンがドマイが持つ情報を手に入れるためいきなり廃墟にはしない。：

：  
：  
：  
「ボクオーン、もうすぐ大陸に到着だな…  
俺達が下へ降りた後はお前が一番艦隊のことを解っているから大丈夫だろうが頼むぞ。」

「今更、何を言うかと思えば……  
全ての戦艦に『光の壁』を焼き入れしてある。」

戦艦の砲撃と残った術師にウィングガッターの合わせ技で敵はそう易々と近寄らせんよ。」

万が一近づかれても、ワシの『マリオネット』で仲間内で自滅してもらおう。」

ノエル、お前は目の前のことにだけ集中しておけ。初めて経験する本格的な戦争だ…弟子達のことを考え過ぎてた結果不意を突かれて殺されることがあったら笑い話にもならんぞ。」

ボクオーンは椅子にどっかりと座りハッキリと言う。

「こんな時まで、チクチク言うなよ。  
まあ、俺は他国の技術レベルについては知らないがボクオーンが世界初と言いつつ空飛ぶ戦艦だ。何も心配無いだろう。  
それに俺は、こんな訳の解らん国で死ぬ気はさらさら無い。無傷で帰ってきた俺を見てビビんじゃねえぞ！」

俺はボクオーンにそう言うと言いついで手で払うジェスチャーをされた。  
俺、この戦争が終わったらボクオーンをギャフンと言わせてやるんだ！！！：

：  
「ダンダーク、クジンシー、お前達はイカサに着いたら計画通りそこから各地の村へ向かってくれ。俺は単独でイカサを潰してから加勢に向かう。」まあ、この2人はタイプが正対だがメンタル面ではよっぽどのが無い限り折れないことは共通しているからさほど心配はしていない。  
だから作戦の確認を込めて2人と話す。

「じゃあ、オレとダンダークさんどちらが早くロックブーケちゃんやワグナスさん達に会えるか競争ツスね！！  
いや、先に会えたらご褒美貰えるかもって考えたら胸がWWW熱いWWW」

クジンシーはいつものように軽口を叩く。それも俺とダンダークにだ：  
だが正直、相手が悪い。  
ダンダークは基本的に冗談が通じない。  
というよりまどろっこしい言葉遊びが好きではないと言った方が正しい。

しかもその内容があまりにリスクだった。  
話しを振った俺に責任が有る訳ではないが今回ばかりは時と場所を考えて欲しい。

その証拠にダンダークは俯き、表情は解らない。だがその伸び放題の髪の毛が気の揺らめきでぞわぞわと動いているからその怒りは推して知るべし。艦内の空気は一気に緊迫感に包まれてさっきまでのリラックスムードは微塵も感じさせない。

「あれ？どうしたんスカ？みんな固まっちゃって。それにダンダークさんも肩の力抜いてww  
ほら！もつとリラックスwwwリラックスwww！！」

弟子達の顔は皆、プレッシャーの余波で青白くなっている。口を開くものはいないが「もうだめだ、おしまいだあ」と顔を見ればリアリと伝わってくる。

その時、ダンダークの力が抜け顔が上がった。それは意外ツツ！！笑顔だ！！

「ただの競争等、見戯の次元と変わらん…貴様が勝てばそれも良からう！！だが、俺が勝った暁にはどうなるか解るな？」

「ハハハwww大丈夫ツス！！男と男の約束ツスよ！！」

ダンダークはそれを聞くと満足そうに甲板へ歩いていき文字通り危機は去った。

「まあクジンシー、頑張れ…命あつての物種って言うだろ？何事も死なない程度にな？」

俺はもう一度動きの確認をしてくる。じゃあな…」



俺の言葉と同時に弟子達もクジンシーから距離をとるように談話室から出た。

今回ばかりはフォローのしようがなさすぎた。

そして、何も気づかないクジンシーは気合いを入れるのだった……

:

:

「皆、この戦艦はとつとつドマイ王国上空へ辿り着いた！

妖精光を掛けたか？

……

よし、行くぞッッ！！」

:

:

:

俺は首都イカサに降り立った。

「貴様、何者だ？」

「……」

手当たり次第に風神剣で撫で斬りにしていく。が、すぐに

「辞めろ！辞めてくれ！！今すぐ投降する！！だから市民は……」

「助けてくれ!!」

「私達が何をしたの!? 何でもするから家族だけは助けて!!」  
一般人は勿論のこと兵士まで武器を捨ててすぐさま民の安全を請う言葉がでる。正直調子が狂う

仕方無いので一時捨て置きクイックタイムでそのまま一気に王宮を制圧にかかる。国に仕える文官だけは1人たりとて見逃さない。

どうにか助かるうと魔法を撃つものが大半だった。

その時踏み込んだ部屋にモウ・K・マツカがいた。

その時、彼だけはこうなることを予期していたのか俺を見ると「来るべき時が来たか…」と呟き最期まで無抵抗だった。  
初めて無抵抗の人間を殺した瞬間だった…

自分が選んだ道とは言え無抵抗の人間を手を掛けるということとはなんと後味が悪く、生涯忘れられない戦争になるだろう。

「貴様ツツ何奴だ! 儂をドマイ王国国王ポリガ・T・デネンと知つての狼藉かツツ」

最奥の広間に踏み入ると椅子にふんぞり返った爺がいる……

傍に控える近衛だろうか? 装備の格が違う集団が俺の取り囲む

「ここまで踏み込んだ戯けは初めてらしいぞ？名を名乗れ…忘れるまでは覚えてやる」

「バレンヌ帝国…」

「なっ！？モウ様の話は本当だったのか…  
お前達は投降するのだ。」

「しかし、それでは隊長は!?!」

「今更生き方は変えられん。私は私の役目を果たす。」

頭一つ抜けた男が言う。他の近衛は武器を捨て道を開ける。

「貴様等、何をしている!?!儂を護らんかッッ!?!」

「ポリガ王…」

私があるあなたを護ります。

では、バレンヌの強者よ…いざ参るッッ」

隊長…彼は死ぬことを受け入れて最後の闘いを純粹に楽しもうとしているのだらう。俺も初めて自前の剣…ノエルの剣を抜く。

「ハアアアアア!?!」

一気にこちらへ距離を詰め斬撃を放ってくる

それはさながら剣の雨と言えよう。ただ、基礎を突き詰めたからこそ生半可な相手では凌げない業にまで昇華されている。それを俺は剣で受け止め、蹴り飛ばす。

「虚空瞬動ッッ」

彼は普通なら真っ直ぐにしか動けない筈の虚空瞬動で方向転換し俺の裏を取った

「殺った！」

そのまま兜割りを繰り出そうとするが

「甘いッッ」

振り返り斬り上げで彼の剣をへし折り、返す刀で袈裟斬りにする

「がぶはう…見事…」

私の業を超える者がいたか…」

「惜しいな、叫ぶからだ。」

「ふふ…次は…貴様に…ま…」

ドマイの名も知らぬ隊長は逝った。後はふんぞり返っている爺を片付けるだけだな…

「使えん奴だな…」

まあいい。僕の魔法で片付けるだけよ……千の雷イイ」

恐ろしい破壊力を持った複数の雷が俺に襲いかかり飲み込んだ。

「終ぞ名前を語らず死んだか…やはり戯けは死ぬまで戯けなのだ  
ああ

ハ―ハツハツハツハア！「臭せえ口開けてんじゃねえよツツ！！」  
ハアが！？」

簡単なことだ。自然の雷で無い魔法の雷は人間離れした素早さがあれば避けれることは可能だ。

光を超える素早さを授ける無敵のクイツクタイムで裏をとり首をねじ切り終わらせた。

これで首都と王宮は抑えた。そして、そのまま仲間が落とした各地の村や街へ行く。

驚いた事に全ての村々で攻撃前にあっさり投降したらしい。どうやら、城の執政官の部下と名乗る男から「見知らぬ集団が来たらすぐさま投降しろ」という通達があったらしい。

仕方がないので今後のバレンヌでの待遇を話し一時捕虜にした後帰還。

最後にボクオーンから取るものは取ったと聞き、魔法と戦艦の主砲による絨毯爆撃により永きに渡り栄えたドマイ王国はその幕を閉じた。

当初は殲滅と息巻いていたが、蓋を開ければ大多数の者は捕虜とし

て連行。このまま、バレンヌの民草へなるのだろうか。

ボクオーンが苦い顔をしているが関係ない。これが俺のやり方なのだ。民の殲滅は最後の選択だ。とにかくドマイ王国を殲滅するとう目的は達成され、弟子達にも1人の怪我人も出なかったのだから今回はかりは見逃して欲しい。

後は彼等をどのように国に馴染ませるかを俺は『雲海』という次はいつ見られるか分からない景色を楽しみつつ考えた。

話しは変わるが、クジンシーが落としたりした村の数はダンダークに一歩及ばず、メタメタにされたことを一応書いておく

S a ・ G a 1 5 (後書き)

商業国家ドマイ王国

まいど、商人

首都イカサ

江戸期の商人の町、堺から

モウ・K・マツカ

もうかりまっか

ポリガ・T・デネン

ガツポリでんねん

こんな感じのネタは突っ込める時はガンガンいくからいろんな事を  
考えながら読むのも楽しいかもね？

3000年前ドマイ王国を1日にして滅ぼしたバレンヌ帝国

それに対しメガロメセンブリアは連合国を従え正義の名の下に侵攻を開始する。

後に滅ぼした王国を尋問した結果、どうやら一国ごときが幾ら武力を持つと数々の暴力には勝てないと判断したらしい。

更にこの戦争の結果だけいう、空飛ぶ戦艦を持たない連合国はバレンヌ帝国が仕掛ける遠距離攻撃に為す術無く消滅、陸に上ることは叶わなかった。

この時メガロメセンブリアは勝ち目がないと判断すると保身に走った。遠征の負債を強かに他国へ押し付け反対する諸国は持ち前の軍事力と狡猾な搦め手により吸収合併……最終的には連合内の内紛と化しメガロメセンブリアは薄氷の勝利を勝ち取り連合国家最強へ立場を守り通したがバレンヌとの戦争には完敗。

プライドは地に堕ち一層バレンヌ帝国への対抗心を燃やすのだった。

理不尽なツケを押し付けられた国々の中にはウエスペルティア王国も含まれ、古くは始祖の国と呼ばれ高い武力と技術力、固有の血統を有し他国を従える立場のあった列強の一角も緩やかに衰退を始



め、過去の栄光と仄暗い伝統に縋る小国へと成り下がっていった…

そして、バレンヌ帝国はこの一連の戦争を機に南のヘラス帝国、北のメセンブリーナ連合、聞きしに勝る西のバレンヌ帝国と呼ばれるようになり名実ともに強国の仲間入りを果た、世界での確固とした地位を築き上げた。

その後、伝承法により帝国初期からの大志と愛国心を宿した優れた武人、賢者を世に送り出し破竹の勢いで成長を続け今に至る。

なお、その歴史の中で忘れてはならないのが最強の格闘家ダンダーク

最大の魔力を誇り稀代の攻撃魔導に使い手ワグナス

平時は社会の裏を束ねる首領であり戦場へ一度現れれば如何なる時も臨機応変に動き、敵を追い詰めたバレンヌ帝国影の立役者クジン  
シー

最優の補助、状態異常魔導の使い手ロックブーケ

深淵なる魔導の探究者ボクオーン

起源にして頂点と伝えられる『何か』

この六つの称号を冠す者は無類の強さを誇りバレンヌに多大な貢献をした。

:

:

:

:

「なあ…ナニコレ？」

「決まってるじゃないですか。

新しく教科書にかきたしたんですよ!!」

やりきった感たつぷりのドヤ顔をしてくれた目の前の女性……

「クジンシー、いい加減にしとけよ？

しかも自分のことを脚色するな!!」

「え〜!?!」

もう結構な数、刷って各地の学校に送ってしまいました」

「今すぐ回収して伝承法と俺達の項目を消せ!莫迦たれが!!」

「はーい、ごめんなさーい」

そのまま一目散に出て行った。行き先は勤め先の出版社だろうか…

久しぶりに道場に來たと思っただらまたバカをやってくれた……

今代のクジンシーは三代目……にも関わらず、こういうおバカを平気でかましてくる。初代からの負の遺産もすっかりと伝承されているらしい。

それはクジンシーに限らず、他の4人も同じだ。好戦的になる者、腹黒くなる者などそれぞれ特性がでた。

ただ、どのタイミングで伝承者として選ばれるかはハッキリと分らないがダンダークなら洞窟内の修行場『竜の穴』に所属する者という感じでそれぞれ人物の波長や環境から選ばれるようだ。

だが、クジンシーが言っていたようにここ300年間バレンヌ帝国はあの戦争から暫く経った頃に起きた防衛戦を最後に大陸の小競り合いに巻き込まれることも無く平和な時代だった。

それに平和だといってもいろいろあった。

結局俺はワグナスさんとロックブーケから逃げることができなかつた。

それでもロックブーケと夫婦生活を続け俺やロックブーケのようなチートの塊ではないが可愛い子供も授かり無事に独立していった。

今思えばこの世界に来てからこれほど穏やかで幸せな時期は無かった…俺にとつてはいつまでもいい思い出だ。

ただ、最近になって思う。あの羽虫のようにしつこいメガロメセンブリアがこてんぱんに倒されたとはいえ300年も手を出さず搦め手でさえ仕掛けてこないのは正直不気味に感じる。

何もなければそれでいい…久し振りにボクオーンがいる魔導研究所所長室まで足を運ぶ。

「ボクオーン、少し邪魔するぞ。」

基本的に作業中は返事が返ってくることは無いのでそのまま返事を待たずに部屋に入る。

「ノエルさんどうしました？魔法球の催促なら駄目ですよ。」

いつかのボクオーンのように作業をしながら机で作業しながら返事を返してくる。

「今日はそんな話しをしに来たんじゃない。

メガロメセンブリーな連合についてだ。300年も大人しくしている奴らじゃないだろ？」

「メガロメセンブリアですか…」

そうですね…私も奴等については前から怪しいと睨んでいました。

そこで、向こうの役人を買収したわけです。

と言っても、中枢に入り込めるほどの権力を持つ役人は無理でした  
が……」

ゆっくり椅子ごとこちらへ振り向きにやけた表情でマイペースにボクオーンは話し始める。彼が余裕たっぷりと言うのだから情報を掴んでいるのだろうが待つてられない。

「まどろっこしい言葉遊びはいい。もしかしたらこのバレンヌの命に関わる事かもしれない早く話してくれ。」

俺の真剣な声に何か思ったのだろう。ボクオーンは椅子に座りながら佇まいを直しさつきまでの人を食ったような表情を消し真剣な顔で語り出した。

「結論から言うと旧世界での活動に力を入れているようです。そちらで勢力を広げ、力を蓄えた後『何か』とんでもないことをすると言っていました。」

しかし、肝心の『何か』については分からず、他にもどの国の者かは分かりませんが何者かが元老院に出入りしている等、確実に買収できると踏んだ人間ですが些か地位が低く嘘か真か苦しい情報ばかりです。

悔しいですが今掴んでいる情報はこれだけです。」

ボクオーンは苦々しげに顔を歪めて語りだし、無意識にその気持ちの表れか手すりに置かれた手に力が入り拳を作っていた。

だが今の答えで気になる言葉があった。

「旧世界だと！？いつからゲートを開発していたんだ！！  
くそつたれが…奴等、魔法世界じゃだけでなく違う世界でも幅きかせようとしてんのか！」

「先ほど言ったばかりですが…その通りです。  
しかし今すぐという訳ではありません。

なので、バレンヌ帝国は魔法世界で地固めをします。  
正式な使者をヘラスとアリアドネーに送り連携の打診はしました。

既にアリアドネーからは学術都市の限界はある、邪魔にならない範囲で頼むと…

ただ、ヘラス帝国だけはまだ使者が返ってきていません本来なら拒絶であれ返事が返ってくる筈なのですが…现阶段ではどうしようもありません。」

メガロメセンブリアの奴等、バレンヌができて魔法世界での旗色が悪いと見たら別世界にまで巻き込むとは……

だが、俺にとって気になるのは見たことも無い旧世界とやらより身内であるヘラス帝国へ向かった使者が気になる。ただ単に拘束されているだけならいいのだが心配だ…

「今すぐメガロの奴等が動かないなら俺がヘラス帝国に行つて話をつけてきてもいいか？」

ボクオーンは首を横に振ろうとしたがすぐに辞め、掌で顔を覆いながら天井を仰ぐような姿勢で固まった後諦めたように溜め息を吐いた。

「昔からあなたを知る私としてはそちらの方がよほど危険ですが…どちらにしても行くのでしょうか。」

ただし、外交官を1人同伴してもらいますよ？」

「それぐらいは何てこと無い。俺は初代のボクオーンから政治の話しをされたといえ武官だ。」

その方が心強い。」

「わかりました。では私と皇帝の元へ行きましょうか…。」

後日、俺のヘラス帝国行き許可は正式に下り皇帝直筆のサインが入った外交文書が届いたが連れは当日まで分からないようだ。

このヘラス帝国訪問が吉とでるか凶とでるかそれはまだ解らない。まさに神のみぞ知るのだろう。

S a ・ G a 1 6 ( 後書き )

やっぱりこの作品の良いところ、悪いところ皆さんがどう思ってるのか…これだけ感想が無いと不安



S a ・ G a 1 7 (前書き)

今回は自分的に難産でした。

俺が乗ったバレンヌ発、ヘラス帝国行き旧式の貿易用船は、海上をゆっくりと進む。

戦艦は確かに速いが、戦争でも無いのにポンポン使うことはできないし。

普段は領海、空を巡回して、主に竜種の撃退と領圏侵犯を取り締まっているだけだ。

それに俺は基本的に、道場で指導しているから戦争でも無い限り大陸へ行かないし。

ヘラス帝国は、バレンヌ帝国に仕掛けてきたことが無い。だから、南の大陸へ向かうのは初めての経験だ。

そんなヘラス帝国もバレンヌ帝国と同じく、亜人が人口の多くを占めている大国。

しかし、再底辺市民階級：奴隷の存在を、国が認めていることが、バレンヌ帝国とヘラス帝国の決定的な違いだ。

正直、国家間交渉で働きかけて、将来的には奴隷制度は廃止したいのだが…もしあちら側が歩み寄ってくれば、こんな問題は即解決だけと難しいわなあ

まあ、『正義、正義』とバカの一つ覚えで因縁付けた後、寄ってたかって袋叩きにするメガロメセンブリアよりは評価するが……これだけ舐めたことをしてくれる相手だ。

俺が考えもつかない外交カードを持っているだろう。

まあ、そこら辺は連れに期待だ。

「ボクオーン。お前自身がわざわざついて来なくても部下に任せれば良かっただろ？」

俺としては心強いからいいが……いきなり皇帝に次ぐ、準ジョーカーを切って大丈夫か？」

「ノエルさん良いですか？」

ヘラスに送り出した使者は、初代からの記憶と経験を持つ私自身が選抜した者です。

なら必然的に、彼等よりも優れた人間が行かなければ、話しにもならないでしょう。

幸いにも……魔導研究所の方も、今は開発より改良に力を入れていきます。

私が抜けて止まるようなことはありません。それに、あなたから外交官を1人つけるとい言質も取りました。

大丈夫です。問題ありません。」

うーん、言ってることは筋が通ってるから反論のしようがない。

けど、何か納得いかんよなあ〜

「理解はしても納得はしていないようですね？  
わかりました。」

ここまできたらハッキリと言いましょうか。  
今回の同伴はさっき言ったことは勿論ですが、理由は他にあります。  
それはノエルさん…貴方がヘラス帝国に嵌められないようにする事  
です。」

「はあ？俺ってそんなに頼りがいが無いのか？」

「いえいえ、確かにあなたは昔に比べたら、よっぽど駆け引きがで  
きるようになりました。」

それでも、詰めが甘い所があります。私は心配なのです。」

「なんだよ…もっと俺の事を信じろよ。」

「フフフ、武力は心配してませんが、外交に関してはまだまだひよ  
つ子ですからね。」

いくら伝承法で受け継いでいるボクオーンだとしても、孫よりも年  
の離れた野郎に心配されるなんて悲しすぎるだろうが！

その後も貿易船は『どんぶらこっこ』と波を掻き分け順調に航海。

途中竜種が襲ってきたが、ボクオーンがマリオネットを発動。海に突っ込ませて、そのまま溺死させた事件があった。竜の死骸は、商人達が船に括り付けて航海を再会。商魂逞しいというか何というか……そのまま無事ヘラス帝国へ到着した。

「やっと到着か。やっぱり船で来ると遠いな。なあ、ボクオーン……空港は必要だと思っよな？」

「何言ってるんですか？置いてきますよ？」  
此処からは、ヘラス帝国側が手配した竜車で首都へ向かいます。」

最後に敵国なので用心はしてくださいと俺の耳元でボクオーンは囁き、港を抜けた先に停まっている件の竜車に乗り込む。

その竜車の中には既に男が2人乗っていた。身なりからすぐに武官と文官のペアだと分かった。その文官らしき男の方は愛想笑いを浮かべながら、正面に座ったボクオーンに話しかける。

本陣たる王城に着くまでに、此方から何か1つでも情報を引き出してやろうという魂胆が見え見えだ。  
ボクオーンもそれを理解しているから、一応はにこやかに応じているが……当たり障りない答えで煙に巻き、するりと逃げている。

文官には悪いが、ボクオーンの政治生活は年季が違う。

そんなボクオーン達を眺める手持ち無沙汰な俺の前に座っている武官らしき男…

「……………」

「……………?」

自然体を装っているが、いつでも脇差しを抜けるように右手だけは身構え、鋭い視線…メンチ・ビームを俺に飛ばし続けている。

「どうしました？」

此方はバカな真似はしませんから、肩の力を抜いてもよいのですよ？」

「……………」

その様子を見かねた文官が男に話しかけ、返事はするが全く変化は無い。結局武官は首都まで俺のことを警戒したままで車内の空気は最初から最後まで最悪だった…

首都に着いた俺達は、休む間もなく城に案内され最奥部…王の間に通された。

その部屋の奥、玉座に座りこちらを見つめる男がいる。

「おお！遙か遠きバレンヌの使者よ、よくぞ来た！  
皆の者、私の護衛以外は下がってよいぞ…」

開口一番陽気な調子で一言かけた男は皇帝だ。  
そして道中、俺にメンチを切り続けたあの武官以外…控える家臣達に一切の反論をさせずに追い払う。

皇帝は、家臣が部屋から消えてから目を瞑り、暫し沈黙…そして話し始める。

「先日バレンヌ帝国から来た使者が来たばかりだ。  
このヘラス帝国に再び何の用だ？  
連携の件ならば我等は了承できんと記した書状を持たせた筈…五月蠅い家臣共は下がらせたのだ。回りくどい喋り方をするな。日が暮れるわ…手短かに申してみよ。」

凡人には決して真似できない、威圧感を込めた言葉を放つヘラス帝国皇帝。

やはり魔法世界3強の一角、ヘラス帝国を統べる者だ：並みの人間ではないな。

だが、『堅苦しい言い方は無用だ』と奴は言った。俺としても回りくどい話し方は嫌いなんだ！

お望み通りのド直球でイかせて貰おうか。

「その使者のことです。」

いつまで経ってもバレンヌに帰って来ない。

知っていることがあれば、教えて頂けないだろうか？」

ボクオーンは若干顔を青くして、俺を睨んでいる。

「知らんな。」

メガ口の痴れ者なら使者を捕まえて尋問もするだろうが、我が帝国はそのような姑息な真似はせん。

……いつまでもこの国に居座られても迷惑だ。捜すなら奴隷市場しかあるまい。

あの場所で商売する人間には地位は勿論、人種も関係無い。

そこに仕入れる人攫いも同様だ。もしそこへ行つて見つからなければメガ口だろうな。

情報を引き出して今頃は、良くて廃人：普通は死んでいるだろうがな。



信じる信じんは貴様等の勝手だ。話はこれで終わりだ。」

そう言ったきり皇帝は何も語らない。

最早、引き出せる情報はあるまい。

急いで城をでる。

なお、ボクオーンはメガロにいる可能性も捨てきれない、一応探りを入れるとバレンヌへ帰った。

俺は皇帝が話していた奴隷市場へ行き、最もデカイ店へ入る。

その中には、逃亡防止の首輪で繋がれた様々な人種が商品として揃えられていた。

そして数も、予想を超えたかなりの多さ。

正直、面食らったが店内を一周。

広い店内だったが、目当ての使者を見つけられないまま入り口に戻ってしまった。

さて、どうした物かと考えていたら、番台に座って俺を『ジューイ』と見てくる爺さんに気づき、ダメ元で尋ねる。

「オイ、爺さん。今この店の中を回ってきたが良い奴隷がいねえな。最近身なりが良い奴、活きが良い奴は仕入れなかったのか？」

「兄さん、アンタこの街の人間じゃないね？  
ここでは銭さ 銭がモノをいうんだよ。  
人にモノ尋ねる時はちゃんと用意して来な！」

「……………」

仕方がない

一度店を出て、外壁にタッチゴールドを施して金塊を入手。  
再び爺さんが待つ番台へ突撃する。

「へえ…まあいいや、最近ウチは、兄さんが言うような、身なりが  
良い奴は仕入れてないよ。」

「そつか…」

「まあ、待ちなよ。」

わざわざ連れが探しに来るような、扱いにくい商品は『表』の世界  
じゃ置いとかない。

いるとすれば裏の方の奴隷市場だねえ…」

「なんだって！！すまないが教えてくれないか!？」

「…オレが言うより、見た方が早いだろうから、行き方を教えてやるよ。」

ただ、兄さんみたい人間が亜人の奴隷上がり、それも闘士あがりの人攫いがつろつろしてる所に行くなら、なんざ絶好の鴨だねえ。まあ、自己責任だからいいが死なない程度にしときな。」

「そうか…邪魔したな。」

今はそれしか継る情報が無い  
俺は爺さんに教えられた『裏世界の奴隷市場』が開かれている場所の入口を探す為、急いで店を飛び出した。

S a ・ G a i 8 (前書き)

今日作者はライブをやってきました。

担当はドラマ

表で店を構えていた爺さんに教えられた内容は、こうだ。

『この界隈の袋小路を片っ端から探すんだ。  
その時、ボロを着て薄汚れた格好をした男が奥でうずくまっていたら当たりだ。』

そいつに開口一番「一皮剥けば皆奴隷…ところで猫は元気かい」と  
合い言葉を言えば下へ通してもらえる。

この時、合い言葉を言わずに別の事を言おうもんならお終いだ。  
日を改めるまで入れねえから氣イ付けな…』

広い界隈の中を走り回ってそれらしい場所を見つけ出した。

ただ、ボロは着ているが女がいる。

それも気休め程度の物でさながら商売女のようにだ。

オマケにボロから見える部分には、青あざが所狭しとあり、仰向け  
で死んだように動かない。

何も知らなければ暴行された女にしか見えないのだが やるしか  
無いな。

「皮剥けば皆奴隷…ところで猫は元気かい？」

「……………」

反応は無い

もう一度…今度は大きな声で言ってみよう。

「皮剥けば皆奴隷…ところで猫は元気かい？」

「しつこいね！耳の傍で言われなくてもうるさいくらいに聞こえるよ！」

「ただ、今日はここのボスが新しい奴隷の価値を決める日だから辞めときな。」

「アンタみたいなガタイが良い人間が行っても、闘技場の測定用サンドバックか、奴隷にされて終わりさ」

「どうしても通りたいなら、番人のアタシをどうにかするしかないよ。」

「

緩慢な動作であぐらの姿勢をとる。どうやら、足元に扉を隠しているらしい。

しかも、この地下市場を仕切るボスとやらが来ているらしい。そうと決まれば話は早い！

「俺にも下に用事があるんだ。  
悪いが押し通らせてもらおう。」

「へあ!？」

言いきると同時にナツプを発動。

彼女が眠りの世界へ旅立ったのを確認すると、通路の壁に横たえた。

そして俺は鉄板でできた蓋を開き、地下世界へ通じる階段を降りて  
いった。

長い階段を抜けた先に辿り着いた地下世界は、遙か頭上の天井…魔法で光源を確保しており、その明るさは地上と遜色ない。

「お！旦那さんそろそろ小腹が空いてるだろ？  
ウチの食堂に入りな！」

「何言ってるんだい。  
ウチの店はあるの店よりも安くてウマイよ。」

そして、地下世界といっても想像を遙かに超える広さで店は奴隷市場  
場だけではなかった。

そこかしこで呼び子が客を引き込もうと精を出し、メシ屋、道具屋、鍛冶屋など他にも沢山の店が人々の欲求を満たす為に存在している。

裏のマーケットというより、もはやお祭り状態。

こうやって客の心理を浮かせて、違法な金を落とさせるってワケか！

見れば御丁寧にも、色々な娯楽施設を紹介している看板が入口に建てられている。

その中でも闘技場がこの名所らしく、一際大きな看板まで作られている。

使者であろうと、一通りの稽古は積ませているから大丈夫だと思うが…こうなると全ての施設が怪しく見えてくる。

「おい、親父。ここの元締めがいる場所は知らねえかい？」

「兄ちゃん、命が幾つ有っても足りねえですぜ？」

ふむ…やはりボスの支配力は兄弟なのか、なかなか教えてくれないな。



「親父いゝ、タダとは言わんよ？金塊…50キロでどうだい？」

「……………」

「仕方無いなあ…100ならどうだ？」

「貴様、ここを首領の屋敷と知っているのか？  
事前にアポを取ってから来い。」

「さもなければ、首から上が無くす羽目になるぞ？」

酒場の親父から金塊で情報を得た。  
ズンズン進んでいるとゴツツいガードマンに止められた。

だが、俺には必殺技がある。

「まあ待てよ。」

うまく立ち回ればこの金塊をやる。  
安い金で扱き使われてんだろ？

首領に会えるよう取り持つてくれるだけで終わりの簡単な小遣い稼  
ぎだぞ？。」

「貴様……………」

この提案がウソでないと証明する為に、道端の砂を掴むと『タッチ・ゴールド』で砂金に変えると、見せつけるように散らす。

どうだ？金の魔力には抗えまい！！

案の定、警備は奥に引つ込み暫く待つことになった。しかし無事、首領と会えるよう取り計らってくれた。

建物の外も嚴重だったが、内部も同じ。

4人の警備に包囲されながらだが、首領の書斎に通された。

うん。その気になれば正面突破も可能だけど、楽に進めるならそのルートを俺は選ぶんだ。

「で、オレに何のようだ？」

これから奴隷どもの価値を見に行く予定があるんだ。」

いきなり俺が来た為に予定が狂ってしまったので、地下世界のボスはお冠のようだ。

しかも『ふうふう』と荒い呼吸、でっぷり太った外見は丸々と肥えた豚にしか見えない。  
底意地の悪さが身体の全面に出て来てるな。

「単刀直入に言うが、バレンヌ出身の者が、ヘラス帝国へ渡ったのを最後に行方が掴めなくなった。」

「それで？何が言いたいんや？」

ボスは此方を見るどころか、手のささくれを弄りながらふてぶてしい態度で切り返す。

どうやら俺のことを屁とも思っていないようだ。  
それならそれで、俺にも考えがある。

「知ってること洗いざらい話して貰おうか。  
素直に話せば相応の礼はしてやる。  
だが、こちらの足元をみて渋るようなら貴様のデブった首から下を八つ裂きにするだけだ。」

剣の柄に手をかけ、300年モノの年季を込めた凄みを目の前にいる首領にあてる。

「ぶぎょう　くそつたれが！！  
既にバレンヌ産の奴隷はオレ様が手に入れた！！正当な取引でなあ！  
つまり、オレの持ち物なんだよオオ！  
もうすぐメガロの上客に売り捌くんだった！  
今更貴様ごときにどうこう言われる筋合いはねえんだ！どアホがア  
！！」

良かった…使者が見つかったのは本当に運が良かった。  
しかし買い手がメガロメセンブリアだあ！？  
これは余計に取り返すしか無いな。

「口には気をつけるよ豚野郎  
今すぐ返してもらおうか？」

「うるせえ！オレが上、貴様が下だ。  
どうしても返して欲しければ、金を出してオレが持つてる自慢の闘  
士と戦い勝ってみろ！！」

「上等だ。俺が勝つたらその奴隷も貰うぞ。」

「ぶふぶふう」  
なら貴様が負けたら貴様も奴隷になれや！！  
ほれ、お互い逃げられんよう魔法取引契約をするで！」：

場所を移して地下コロシム。

俺はボスにバレンヌ帝国の奴隷を見せると言い、すんなりと通された先は牢屋。

「うぐああ、ノ エル 様、すみません…」

使者は捕らえられてから、今まで反抗していたのだろう…

ギリギリを見極めた連日の攻めと、絶食で頬は痩せこけ話す力も無い。

健全だった頃の面影は残っているが、正に生き地獄に落とされた人間のように変貌していた。

「もういい喋るな バレンヌに帰ったら1からしごき直してやる。だから、暫く待っている。」

そう言うとき使者は安堵したのか気を失った。

「ぐふふ…奴隷になる覚悟はいいか？」

今から貴様が相手にするのは地下世界最強の奴隷闘士！

殺さない程度に命令してやったが、何事にも事故は付き物だ。

まあ精々、楽しませろや!!」

首領はさっさと引っ込み特等席へデブった体を揺らしながら歩いて行った。

俺はこれから地下闘技場最強の相手に素手で挑む86人目の生け贄という触れ込みで刺激に飢えた客の見世物になる。

何処までも人の神経を逆撫でする豚野郎だ。

「へえ…お前が新しい生け贄か。ボスも人が悪いぜ。まあいい、突き当たりの階段を上った先のゲートをくぐりゃ、チャンピオンが首イ長くして待つてるぜエ。

精々、客とボス…それと裏方のオレ達の腹がよじれるような死に様を晒してくれよオ?」

この闘技場の管理人が嫌みたっぷりに喋りかけてくる。上が上なら下も下。

あの豚にしてこのゲス野郎ってワケだな。

果たしてチャンピオンはどんな姿で、戦闘ではどのような動きをするのかを考えながら、ゲートをくぐり闘技場へ向かう。

「ヒヤハ！？オイ！チャンピオン！！  
お前にかなりの金突っ込んだ！そんなポツと出の優男に負けんじゃ  
ねえぞオ！！死んでも勝ちやがれ！！」

「オラ！挑戦者ア！オレはテメエに全財産賭けてんだッ！  
首だけになってもぶつ殺せえええ！！  
負けたらテメエの死体を豚の餌にするぞッ！！」

ゲートを抜けて初めてみる闘技場はかなり広い…昔のコロシアムの  
ようだ。

花道を歩いてその先に有るボクシング程度のリングを想像していた  
が、実際はサッカーコートのような馬鹿デカイもので正直驚いた。

そして観客席は超満員。  
安全の為に不可視の防壁が張られており、被害が来ないと知る奴等  
は好き勝手、口汚くヤジを飛ばしてくる。  
それが更に不快感を感じさせる……

「また挑戦者じゃないカ？  
この間の奴はなかなか頑張ってたけど敵ではなかったでゲソ！  
それに私は100連勝まで後14勝…そうしたら自由の身でゲソ！  
どんな結果になろうと文句無しでやるうじゃないカ！！」

そしてチャンピオンは、意外にも女性…ただ頭から生えた11本の触手をブンブン振り回している。

そして口癖から考えるに、どうやらイカの因子が極めて濃い亜人。きつと両手両足、頭の触手を総動員させた手数で攻めで、これまでの相手を封殺してきたのだろう。

「いくぞ イカ女」

あらかじめ妖精光をかけブーストされたスピードで一気に死角に回り込む。

「甘いでゲソ」

私に死角は存在しないでゲソ！」

チャンピオンは振り向きもせず3本の触手で拳を払い、残った触手で攻めてくる。

『ウィンドカッター』

触手を全て切り落とすが瞬く間に再生、元通りになる。コイツが…再生する触手では流石に厳しかっただろうな。



しかし今のは小手調べか。  
チャンピオンは再生した触手で地面を砕き、ショットガンのように  
広範囲に投げつけてきた。

『ミサイルガード』

迫り来る石の弾丸を風の防壁が防ぐ。  
それでもチャンピオンはなんら変化を見せず突っ込んでくる。

「これでも食らうでゲソ！」

自らが操る髪の毛のような触手で鳩尾への突き、首への薙ぎ払い、  
左側頭部への突き、胸部への突き、下から強烈な金的、右肩の脱臼  
を狙った手刀、両脇腹には束ねてより太くした触手を叩きつけ、喉  
へのクロスチョップと使い分け同時に繰り出した。  
最後に本体の腕が駄目押しのアップパーカットを叩き込んでくる。

それはまさしく怒涛の攻め…手数が多いという才能に驕らず、繊細  
に組み立て、突き詰めた彼女の必勝の型か。

ともかくこの技は自身が持つ特徴を、完全に理解した彼女にしかで  
きない大胆かつ繊細な攻撃だった。

「この勝負もらったじゃないか!!」

そのまま触手で俺を縛り上げ、硬い地面に何度も叩きつける。何度となく繰り返した後、俺は闘技場の壁に勢いよく投げつけられた。

「な〜んだ。バレンヌの人間だと聞いたから張り切ったけど全然弱いじゃないか!!」

これなら、前のチャレンジャーの方が速くて、強くて、もっと必死だったゲソ!」

イカ女はそんな事を言って自分の勝利に酔っているが、そう甘くない。

すぐさま立ち上がり、集気法でこちらも傷を瞬く間に治す。

「な!?!有り得んゲソ!

あの技を食らった後、あれだけ叩きつけたら…普通は中身がぐちゃぐちゃになってる筈でゲソ!」

「現に俺は立ってる。」

「それでも立ち上がるなら…もう一度!

次は本気の本気でやってやるうじゃないかッ!」

チャンピオンは信頼していた技を食らわせ、確信していた勝利を逃したことに冷静さを失い、既に俺は満身創痍だと決めつけトップスピードで突っ込んでくる。

しかしスタミナの低下と動揺で技のキレは落ちている。

「ならば俺も奥義でこの茶番の幕を降ろそう 『練気拳』 ツツ!!」

「あぐう!?!」

トップスピードに乗ったチャンピオン。

俺の気が彼女を引き寄せ、一気に加速したスピードが2人の距離を埋める。

異変に気付いたチャンピオンは、触手を地面に突き刺して踏ん張ろうとするが効果は全く無い。

そのままチャンピオンは、為す術無く俺の射程圏内に入った。

その瞬間…



またある者は、このままチャンピオンが起き上がらないよう固睡を飲んで見守る者……

あれほど白熱していた観客席はまるで水を打ったように静まり返った。

「レフェリー、カウントはしないのか？」

その言葉にハツとしたレフェリーはやつと動き出す。

「……チャンピオンの死亡と判定ッッ。

この勝負ウウツッ！挑戦者の勝利イイイイ！！

新しいチャンピオンの誕生だアアアツッ！！」

「ウウウウオオオオ！チャンピオン！チャンピオン！チャンピオン！チャンピオン！チャンピオン！チャンピオン！チャンピオン！」

「うるせえ！外野は黙ってるッッ！！」

観客がレフェリーの宣言を聞き、騒ぎ立てるのを黙らせると俺はイカ女が倒れている場所へ行く。

『エリクサー』

イカ女は淡い光に包まれた後、傷ついたボロ雑巾のような体が戦う前の健康な体へと変わる。

「……………うん？私は… さつき ボロボロになって負けた筈じゃないカ……………なんでキレイサツパリ治ってるでゲソ！？  
情けをかけたつもりなら余計なお世話じゃないカ！  
いつそのこと殺せでゲソ！！」

「お前は俺に負けた。

そして首領とは俺が勝ったら捕らわれた同胞とお前を貰うと取引をした。

少なくとも、この闘技場よりは自由に振る舞えるだろうな…死ぬか生きるかはバレンヌに来てから決めろよ。  
では、名前を聞こうか？」

イカ女は下を向いたまま呟いた。

「スービエでゲソ……………」

そうか そうきたか…

予想外のビッグゲームだが、結果オーライだ。

「さて、ここでの用事は済ませた。バレンヌ帝国に帰るぞ…スービエ。」

「待てやゴリア！」

オレ様の奴隷を何処に盗む気だアア!？」

世の中そうは問屋が卸さない。

静まり返っていた闘技場に我に返ったボスの怒声が響き渡る。

「ん？屋敷で魔法取引契約をしただろうが…俺がコイツに勝てば2人を連れ帰ると。」

今更何を言っんだ？」

この豚野郎は性根も曲がり、最低限の人としての誇りも無いらしい。

「莫迦たれイどアホが！そんな取引もこの勝負の結果も無効じゃ無効ツツ魔法取引契約も反故じゃボケが！！  
見てみイその奴隷はまだ闘える！そんな金となる木イをみすみす手放せるかア！？  
全ての奴隷はオレ様の為に生き、オレ様の為に死ぬ！！そいつは死ぬまでオレ様の奴隷なんだよ！！」

「な！？何を言ってるでゲソか！？

100連勝したら解放してくれるって言ったじゃないか！！」

温厚な俺も久しぶりにマジでブチ切れちまったぜ……

「お前、ちよつと来いよ…『練気拳』、『超重力』」

「ふうふう 助け…たす、た…助けてく「聞く耳持たん！！」  
べえへ！？」

流石に汚物には触れたくないの、途中で練気拳にキャンセルをかけ圧殺。

地下世界を牛耳っていたボスの最期は地面の染みになり終了。

「待たせたな2人とも…では、行くぞ。」



今度こそ行く手を遮る者が消えたのを確信した俺は使者を背負い、スービエが後に続いてくるように促すと、陽の当たる表の世界へ歩き出し、無事バレンヌ帝国に帰還した。

なお、後日改めてヘラス帝国を訪れ皇帝との会談で地下奴隷市場の撲滅を相互不干渉条約を結ぶ際に確約させたことをここに記す。

## S a ・ G a 1 8 (後書き)

### 『触手』

S a ・ G a シリーズ全般に登場する敵の技。  
作者が初めて出会った作品はロマサガ2。

ロマサガ2で凶悪な技を挙げる時に必ず出る技。  
今回のイカ女の主力技。

また、数ある敵技の中でも一際輝く理由は以下の通り。

○最高HPが999なのにダメージが1、000オーバーはザラ。

盾が発動しても第2波、第3波が盾を避けて攻撃してくる多段攻撃。

○植物は勿論、水棲生物などザコ敵の使い手が異常に多い！しかも、似た技が他にも多い！

○ラスボスの七英雄さえも積極的に使用してくる！

こんな感じで多くの帝国兵、皇帝…ひいてはプレイヤーの心をフル

ポッコにした技。

さて、そんな凶悪技ですが、勿論対策は存在します。

ずばり『腕力+素早さ』触手の攻撃力』です。

ステータス効果の技で苛めるか、使われるまえに殺しましょう。

『スービエ』

七英雄・海の担当

基本的に全くストーリーと絡まないで、ある時急に悪さを働く困った奴。

主な罪状は、海を荒らし回したこと。

そして、いたいけな海の主の娘を吸収したこと！

うん…海の漢である前に、ただ1人の変態紳士であることを選んだイカ野郎！

戦闘では開幕早々に必殺技をぶっ放し、触手や巻きつきも使ってくる。

第一段階はまさしく変態としか言いようが無い。

S a ・ G a 1 9 (前書き)

七英雄がやっと揃った……  
これからもこんな感じで頑張るよ〜

前回のあらすじ

ヘラス帝国では連携という国家レベルの案件に、使者の救出という特殊任務をサクサクっとクリア  
旅の思い出にヘラス帝国の裏世界撲滅と現地で新しい女性スタッフをスカウト、バレンヌ帝国へお持ち帰りしたノエルです。

以上

結局、イカ女のスービエはバレンヌ帝国に来て世界の広さ、面白さを知った。

自分以上に強い奴等がウジャウジャいる修行場、近所のメシ屋、魔  
法球の世界。

まだまだ見せた場所は少ないが、初めて見る世界に目を輝かせていたのが印象的だった。

それからは「死んでる場合じゃないでゲソ！」なんて言い始めて手

始めに俺の道場に住み込み入門した。  
今までは素手と触手で闘う原始的なバトルスタイルだった。  
しかし、他の弟子から刺激を受けて、今は剣を自由自在に扱えるよ  
うに修行している。

なお、誤って切り落としてしまった触手は最近の俺のつまみとして  
貢献してくれる。  
イカちゃんマジ感謝！

「ノエル、音速剣を上達させたいじゃないか！！  
もっと手っ取り早く分かり易く教えて欲しいゲソ！」

「あ、もう！ベタベタ鬱陶しいわ！  
魔法球の中で素振りしてろ。  
雑念を捨てるよ。」

「え〜！？つき合ってくれゲソ！つき合ってくれゲソ〜！！  
あの日、新しい生き方を教えてやるって言ったのは嘘なのか？」

「もうその手には乗らんぞ？  
口動かす隙があるなら体を動かせよ」

スービエはブー垂れながらも修行に戻っていった……

ヘラスで過ごした抑圧されてきた生活から解放されたスービエは、  
バレンヌでの暮らしに即順応……

俺が行くところ行く所、何処までもくつついてくる癖はまだ許せる。  
行動範囲や、顔見知りを増やそうと考えているとすれば、納得でき  
る。

だが、修行中……壁に当たると、今まで頼る者がいなかった反動かは  
分からないが、すぐ俺に泣きついてくる悪癖は別だ。

確かに鬱陶しいのもあるが、この状態が続けばスービエのこれから  
にも悪影響を及ぼすだろう……

それにうざったい！と言っても様々で、クジンシーとはまたベクト  
ルが違うから質が悪い！

「ちわす！」

「師匠が呼んだ気がしたので来ました〜」

「ありえんだろ……」

「……クジンシー、あまりムリしてまで道場に来ることはないぞ？  
仕事はいいのか？」

「それとなく、帰れというサインを出す。」

「な〜に言ってるんですか〜。」

「師匠とは昔から苦楽を共にしていた仲じゃないですか〜！  
だから切っても切れない関係なんですよ〜  
もっとど〜んと任せて下さい〜」

「いや、だから……」

「今日は有給を使ったので、仕事もお休み！大丈夫なんですよ〜」

「最早、俺の手には負えない事態になってしまった。」



クジンシー×スービエ

この2人が出会った時に起こる科学反応に全てをかける！

「クジンシー！今からお前に重大任務を与える。まずはコイツをよ  
くくみてくれ。

どう思う？」

そう言っただ道の板間に寝転び「冷やっこいでゲソッ」なんて言っ  
てるスービエを離れた場所から指差す。

「なんだか…すごく…：…だらしないです。…：」

意外にもクジンシーはクジンシーなりに気を使おうとしたのだろう。  
しかし、俺から見てもかなりだらしない様はフォローのしようが無  
い。

「まったくその通りだ。

こんなだらしない奴でワケアリだが、新しく入った弟子なんだ。

今はああでも、普段は真面目に修行もするし、他の弟子とも仲良く  
しているから問題ないんだ。」

「へ？じゃあそれでいいじゃないですか」

ここからがこの問題のミソだ。

「問題は周りから人が消えると、修行を口実に構ってくれとネチネチつきまとってくる。」

このまま依存させてたら、壁に当たった時その度俺に泣きついて苦しむ。

そうだったら、世の中生きていけないだろう……そこで、お前の出番だ！

お前は、俺が1対1で教えた初代クジンシーの記憶を持つてるだろ？如何に厳しく、恐ろしい内容か脚色して奴の興味を消してくれ……流石に、何から何まで手取り足取り教えては、スービエの人としての考える力がつかないからな。」

「そうですね、」

わかりました！イイですよー！じゃあ、早速取り掛かりますね。

師匠は食べ歩きなり、そこら辺をぶらぶらして時間を潰してて下さいね。」

クジンシーは言い終わるのを待たず「イカちゃん」と歩いていった。

俺にできることは、言われた通りそつとしておくことだ。

だけど、やっぱり不安を抱えながら街に繰り出した。

「お！ノエルさんですかい！！」

今日はいつもくっついてるイカ娘がないけど……どうしたんですか

「？」

行きつけの大衆食堂へ行くと早速、大将にからかわれてしまった。

「大将、俺にも自由な時間が欲しいってことですよ…  
生1つとAランチと日替わり定食頼むよ。」

「了解でさあ！」

今日もガンガン食ってください。

ノエルさんが良く食うメシ屋はウマイ、安い、早いと評判を呼んで  
一気に流行るって業界じゃ伝説まであるんですから！！」

いつの間にそんな伝説が言われていたなんて…

確かに、店をみると若者から老人まで幅広い層の客でごった返している。

まあ、ウマイ早い安いのが揃ってるのもあるが、この食堂の雰囲気  
が俺は好きで通い続けているんだが……

それにしても、安心して食い倒れに挑戦できる店があるのは嬉しい  
かぎりだ。

「いや〜悪いね、大将！あんなだけ食って飲んでと結構やかしま  
って…」

「あゝあゝ！何言ってるんですかい？

ノエルさんの食いつぷりをみた客が新しい客を呼ぶから気にしちゃ  
いませんよ！！

むしろ、嬉しい悲鳴って奴でさあ！

そんじゃま、手前共はこの食堂で待ってるんで今後も宜しくお願い  
します！！！」

「おう！ごっそさん！」

結局、最初の注文をペロツと平らげた後も追加注文。

最後に大食いチャレンジを達成し会計を半額に…胃袋と財布が満足  
できた店を出た。

次は何処へ行くかなあとぶらぶらしていると空き地でちびっ子達が  
遊んでいる。

「このだんだーくのつきはかわせまい！

おらあー！」

「あまいよー！ぼくおーんのほうがぜったいつよいもんね！  
まりおねっとでいっぱつじゃん」

「ちがうよ！しぶとさはくじんしーで、ちからかんけいならわぐなすってじいちゃんがいったもん！！」

「じゃあオレはノエルでいいわ！」

「「「そんなのずるいじゃないか！！」」

「じゃあ、わたしはやみのふくいんをやるね！」

「え〜！？ろつくぶーけやってよ〜」

遠くから聞いていたが、俺達の真似をして遊んでいたらしい。

ほっこりしたのと同時にクジンシーは教科書の回収に惜しくも失敗したらしい 道場に帰ったらOSHIOKIだと心に決めその場を離れた……

「お〜い！クジンシー！帰ったぞ〜スービエの事とは別に話があるからちょっとこっち来い。」

それに、お前の好物のイカ焼きをたんまり買ってきてやったぞ〜」

クジンシーが道場の奥から走ってくる。

「師匠、おかえりなさいませ。  
別の話って何ですか？」

玄関まで来たのは評価してやる。

だが、視線はイカ焼きが入った包みにチラチラいつてるから丸わかりだぞ！

この卑しん坊め！！

「まあそいつとイカ焼きは後のお楽しみだろ？」

で お前に頼んだスービエのことだけど、どんな感じだ？」

クジンシーに尋ねた途端、急にそわそわだし、手は落ち着き無く動き、目は泳ぎ始めた。

そんなの見せられたら正直、嫌な予感しかしないだろ……

「いや」

実は、初代の記憶を元にオーバーなくらいで話したんですが……それを聞いたら、『それならノエルと修行やるゲソ』ってイカちゃん余計に張り切っちゃって

……本当にごめんなさい

まあ、仕方ないね

逆に一日中自由にぶらぶらできたんだ。

デカイ子供を預かってもらっていた。そう考えれば納得できるだろ？

納得できれば前に進める…俺は弟子のフォローもできる器の広い男なんだ。今決めた。」

「ああいいよ、いいよ！久しぶりに好きなだけぶらぶら散歩もできたんだ。

お前がいなかったらこんな事できなかったらどうかな…

せつかくの休みなのにスービエの相手してくれてただけでも十分嬉しいんだ。

だから、気にすることないんだぞ〜」

普通の弟子ならここで感激して泣くだろう…

しかしこんな所で終わらないのが信頼と実績のクジンシークオリティー

「師匠、まだあるんです…それは師匠が大事に隠していた桃も、イカちゃんと一緒に食べちゃいました〜

一応私は止めたんですよ？重ね重ねごめんなさい〜」

ほら来た！だが、今日1日でリフレッシュした俺は気分が良いッ！その程度では揺らがんよ！

揺らがんのだよー！

「ハツハツハ！」

別に桃なんて、また実をもらいでくれればいいだけの話だろ？  
心配するな…それにメシ屋に行けば食えるだろ？

（ ^ ^ ） 「

それを聞いたクジンシーの表情がパツと変わる。さっきまでメソメソ泣いてたカラスがもう笑った

「うわゝ流石ノエル師匠！」

大人の余裕だなく、凄いなあゝ、憧れちゃうなあゝ」

クジンシーはすぐいつもの調子に戻る。  
そのおバカも致命的なバカはしないし、後になれば笑い話になる程度。

だから俺も含む周りの人間は笑って許している。  
逆にここまで来るとチャームポイントだろうか？

まあ、この後にも話が残っているが、桃の怒りだ。

その時になつたら教えてやろう。

俺はクジンシーにイカ焼きを渡した後、スービエの所へいった。

「スービエ、大事な話がある。」



「何だ？突然じゃないか」

プリプリしながらも話を聞く気はあるようだ。

「いいか？お前は強くなる事しか頭にないだろ？

この道場は強くなるという目的も確かにあるが、それ以上に大事なことがある。

それは自分の能力と身に付けた技を如何に生活に活かすかだ！

例を出せばモグラ人間のモール族が分かり易いな……素の彼等は意外にも土を掘るスピードは俺達が思ってるほど速くない。

作業に使う瞬発力は強いが、持続力は俺達と変わらないくらいしかないんだ。

だから、彼等は集気法とアースヒールを必ず修め疲れを感じる前に体を癒やし続け穴掘りの仕事スピードを上げているんだ。」

スービエは黙って俺の話の話を聞いている。

「スービエ、お前なら元は海にいるイカの特徴が在るだろ？

その触手のコントロールは、あらゆる仕事に活かせる。

俺が気付かないだけで他にも可能性は有る。

だけど、強くなることだけを考えると、その可能性も自分で消すことになるんだ。

強くなる以外にも力の使い道を探せ

ができたなら、好きなだけ修行もつけてやる。」

見つけること

スービエは俯き、床の一点を見たまま最後まで聞いていた。果たして、俺が言ったことは彼女に届いているのだろうか…

そのまま、喋る者がいないこの場は、必然的に無音状態。

空気も次第に張り詰めてピークに達した時、スービエが『バツ』と顔を上げて語り出した。

「強くなる以外の道を探すでゲソか…

今すぐには見えてこないけど、速攻で見つけてやるんじゃないか！

そしたらノエルは修行をつけるゲソ！

約束して欲しいゲソ！！」

よしよし、食いついてきた。

「さつきから言ってるだろ？

まずは何でもいいから見つけてみる。

大変だと思うけどまあ、頑張りな。」

スービエはまだ正確には解ってないようだが、感覚的に何かを感じ取ってくれたようだ。

やはり、身分を問わずチャンスは与えなければ…

スービエが抱える問題が解決への手応えを感じイカ焼きを食ってる  
クジンシーにもOSHIOKIするため足取り軽やかに向かった。

その次の日からスービエがつきまといてくることが減った。  
その代わりに近所の店に顔を出して自分なりに殻を破ろうとしている  
のがわかる。

そうになると今までの弟子達と同じように手の掛かるチビいなくなって  
少し寂しさも感じるがそれ以上の嬉しさがある。  
コレだから道場稼業は辞められない。

朝飯を食って小腹を満たした俺は今日も弟子達が待つ魔法球の修行  
場へ向かった。

「もう限界だ！俺は元々デスクワーカーじゃないんだぞ！それにいきなり来て手伝わせといて休み無しかよ！？俺は今から二時間の休憩を断固要求する！」

口が悪いように感じるが、デスクワークならぬデスク・ワークに耐えきれなくなり、相手に幾度となく頼み込んだ結果だ。

「まあまあ、さっきよりもかなり進んでるじゃないですか。その調子なら後、3日くらい完徹したら出来上がるんじゃないですか？

それに私も設計図の製作を休み無く続けてます。一緒に頑張りましょうノエルさん。」

ニコニコと笑いながら作業を続けるコイツ！  
コイツこそ全ての原因を持ち込んで来たボクオーン！

当然、俺のプレッシャーを受けても、いつもの笑った顔を崩すことなく柳のように受け流している。

ふう、なんだか怒りを通り越してやるせなさを感じる。

俺は初めての設計図製作に悪戦苦闘している真っ最中。  
それもボクオーン達、バレン又帝国お抱えの技術屋でさえサジを投げた魔戦艦の新式小型動力炉。

どうしてこんなことになった？！

全ては本日早朝

まだ、朝飯前どころか作ってもない頃だった。

誰かが門を叩く音がするから見に行ったらボクオーンがわざわざ朝早くから道場の門前に突っ立ってた。

それだけで嫌な予感がするだろ？

嫌だな〜嫌だな〜と思ってたら案の定フラグだった……

初代魔導研究所所長：つまり初代ボクオーン。

アイツが遣した設計図や理論、魔法を現実の物にする『特別魔導技術研究部門』なんて部署を作って、魔法球を始め多くの道具の改良や作製をしている。

偶に作製したモノの中にヤバいモノがあった時は流石に国と研究所の双方が出回らないように止めてるらしい。

その如何にも博士やらがうじゃうじゃしてる機関が何なんだ？って話したが…今回の発端は、国がその部署に直々の要請を出したことから始まる。

この300年で、魔戦艦を製造、揃えた国が増えてきたこと。

そこでバレンヌ帝国は、ここらである程度のスピードがある母艦と小回りが利く突撃型の戦艦。

そして、2つを兼ね備えた戦艦の3種を魔導研究所に要求。

ボクオーンなりに考えた結果、朝一番で俺の所に来たんだとき。

その理由？

初代ボクオーンの閃きの半分が、ズブの素人である俺の何気ない呟きから生まれたという記憶があるからだとき。

本当の所は俺にも分からない。

とにかく、そんな事引き受けたくない、引き受けない！

しつこいが「断る」1択しかない。

だって、熱血バカー代ですから！

「大丈夫だ！お前なら絶対できる！

それにコレばかりは力になれんよ…だからもっとベストを尽くせよ！」

「私達、固定観念に固まった人間が考えても画期的なアイデアはなかなか画期的な出ません。」

バレンヌ帝国の為です！どうか力を貸して下さい！！」

「だからさあ…私達、固定観念に固まった人間が考えても画期的なアイデアはなかなか出ません。

バレンヌ帝国の為です！どうか力を貸して下さい！！」おうふ

永久ループしてやがる。

そうか…避けては通れないイベントだったのか。

それに、途中からは鬱陶しいから叩き出したのに、戻ってきて門前で土下座までする根性。

まだご近所さんに見られてるだけだが…弟子に見られてみる。とんでもないチクシヨウだとドン引きされる！

結局断れんのだろ？

俺の世間体とボクオーンの面子の為に、イヤイヤながら引き受けた。万が一、成功した場合の報酬はドッサリ貰う約束をして今に至ると

……

「なあボクオーン…」

お前だったら、他人に見張られながら新式小型小動力炉の設計図なんて考えれるか？書けるのか？」

「慣れですよ…」

涼しい顔して答えるコイツにはできるらしい。

だが、俺は1人がいいんじゃないやああああ！！

「そうだな…何でも慣れるまでが大変…我慢のしどころだわな。だが、魚が水の中でしか呼吸できないように人にも向き不向きがある。」

俺の言いたいことは分かるだろ？」

理論や理屈を抜きにして無理と屁理屈を通せば道理は消えるツツさあ領け！！ 肯定しろ！！  
そして、俺を1人にするんだ！そうすればゆっくり休める！

「仕方ないですね…」

今日から4日後の朝に取りに来ます。

最後に…：…こんな事に巻き込んでしまい申し訳ありませんでした。」

…よしよし、行ったか。

今こそこの身に宿したSa・Gaチートを使う時だ！



御丁寧にも『教授』の知識まで入ってたからなんとかなる。

後は必死こいて複写するだけだ！

正直、ボクオーンが居るうちに仕上げてもらったけど、事ある度に頼られても困る。

頭がパンクさせられる。だから、誰も居ないときにしか頑張らない。よっしゃ、ガリガリ書き起こすぞ！

「やった 遂に書き上げたぞ。」

『ハイパーゴールドラグジュアリーフルオートマチック真ファイナルヴァーチャルロマンシングときめきドラゴンマシーン』の設計図…通称、『術戦車』！！」

道場を平常運転して生徒を返した後、適当に休みを挟みながら、キツチリ仕上げたお前の設計図を献上して、この窮地を見事乗り切つてやるわ！！

「ノエルさん、約束の設計図を頂きに参りました。」

ん！これはナイス・タイミング！

「おおっ、待っとけよ〜」

「どうよ？ボクオーン？新式小型動力炉の設計図だ！それを基に改良すればイイ線いくんじゃないか？」

ボクオーンは俺から受け取った『術戦車』の設計図を広げ、真剣な顔で見ている。

「ノエルさん、ありがとうございます。

早速、研究チームの仲間に見せてきます。

それと約束の……」

「ハイハイ、俺はもう疲れたから見送らんからな」

報酬はまた今度言うから、ちゃっちゃと仕事片付けて来いよ。」

「しかし、まだ報酬の話が……」

変な所で義理堅いボクオーンは報酬を話さない俺に納得いかないようだ

仕方ないか……

「あゝ報酬ね……

頼むからこれからは設計図の製作やら技術屋の仕事なんて頼まないでくれよ？それが俺の望む報酬だ。」

よくよく考えたら、金の使い道なんて無いから貰っても仕方無いんだわな。

それより言質を取った方がよっぽどナイスだと気付いた。

「ハハ…これは一本取られましたね！

しかし、それでは私の気が済みません。

後日、必ずその報酬とは別に御礼をします。

それでは私は、研究所に戻りますが今回は本当にありがとうございました。」

ボクオーン門を抜けた後も律儀に再びこちらへ振り向き頭を下げた後、俺が渡した術戦車の設計図を大事そうに抱えて帰って行った。

いや〜本当に複写しただけだから、割とすぐに終わって良かった。

だけど、もしこれが領海に新しい守りを敷くって要求だったら…いくら知識があつても『アレ』は流石に格が違うからな。

内容聞いた後にデス・ワークから逃げるために国外逃亡余裕でした。

それに俺が持つてる知識なんて、他国に超天才が集まれば追いつかれる程度の物だ。

だから、研究所の成長には人一倍期待している。それに報酬は、俺の好きな時に使える小切手を貰えた……らしいなあ。

「うう、しんどかった。

記憶を引っ張り出すだけの頭脳労働でもキツツイわあ」

久しぶりに徹夜をさせられた俺は、門に天地無用と看板を立てかけて眠りについた。

なお、後日渡された報酬はしつかりとネジが締められたら術戦車。それと作ったは良いが、中の世界が余りにも危険な為に製作者からも封印指定された魔法球だった。

車は別として、魔法球要らねー。

好きな時に使えるスペシャル小切手が欲しかったあああああ！！

そして後年、術戦車のエンジンを基に創られた新式小型動力炉を積んだ次世代魔戦艦『ナハト・ズイ・ガー』が造られたが向かうところ敵無し。

多くの敵を退けバレンヌ帝国の領空圏はさらに盤石なモノとなった。

そしてこの動力炉は、予想以上のポテンシャルを秘めていた割に安価だと言われてあれよあれよと『モンスターエンジン』と改名。

これを積みばトラクターでさえ踊る凶器に早変わりという、名誉な  
んだか不名誉だか分からない称号を授かる。  
そして戦艦に限らず、多く場面で活かされ帝国の軍事力と市民の生  
活を末永く支えるのだった。

## S a ・ G a 2 0 (後書き)

『教授』

ロマサガ3に登場するキャラクター

基本的には実験動物を造ったり、発明をしたり、不思議な踊りをして日々を過ごす。

自称、天才の20代：ホントは30代なのにサバを読んじゃうお茶目な女性。

『術戦車』

ハイパーゴールドラグジュアリーフルオートマチック真ファイナルヴァーチャルロマンシングときめきドラゴンマシーン……ナハト・ズイーガは教授の発明品。

ネジを一本締め忘れて暴走。  
ちやっかり予備の一台を組み上げる…当然、教授に助手はいないから1人で。

術戦車のバトルBGMはF1っぽくて、かなりカッコいいです。

S a ・ G a 2 1 (前書き)

また一週間が経ちアクセスやら見ました。

11万アクセス

お気に入り130

一週間で見事に化けてて最初見たときガッツポーズをとってしまいました( ^ O ^ )

勢いで書き進む小説ですがお付き合いよろしくお願いします。

昨日は散々だった。

ボクオーンも悪い奴じゃないがとんでもない無茶振りをすることがあるが……いつも世話になってるから大概は引き受けるが決まって次の日まで精神的な疲れを引きずることになるからしんどいんだよ……

そんな疲れを引きずってる俺は弟子50人を連れて歩いている。

半年に一回お互いの弟子の交流と修行ばかりで単調な日々に模擬戦をして刺激しあうという目的で2代目ダンダークが持ちかけてきて始まったつまり、互いの弟子達の試合が終わったら最後には確実にダンダークと戦う運命が待っていることが分かっているから足取りも重い……

「師匠、やっと試合の季節が来ましたね。

今日のように選ばれることを夢見てそれをバネに鍛錬を積みました。その成果を試合で発揮し、それを師匠に見てもらいたいです！

早く行きましょう！」

何も知らない純粋な目で見ないでくれよ……

わざとゆっくり歩いてる俺にはその悪意無き眼差しがイタイだろ……

「そんなに急がなくても竜の穴は何処にも逃げんよ……

それより向こうで休めるとはいえ道中はしゃぎすぎて疲れを溜めるなよ？」

そう言って彼を宥める



しかし、その後すぐ別のチビが話しかけてくる

「師匠、自分は兄弟子にから聞いたんですが、師匠とダンダークさんの代理戦争でもあるというのは本当ですか？」

そんな事まで言うなんて

子どもは正直というか考えが回らないというか…まあ、ダンダークを見れば嘘か本当か分かるだろうが

「そんなこと無いぞ。

最低限のルールがある他流試合というだけだ。そこまで酷くないから余計なことは考えるな。

日頃の動きをすることだけ考えておけばいい。」

その後も弟子達は俺の心境などつゆとも知らず、質問を投げかけたり早く歩けと急かしてくる者が後を絶えず俺の返しもだんだん投げやりになっていく

他にも、脇道にそれて雪遊びを始めるチビが1人出ればつられていくのがチビ達の習性

いつものことだがシャドウサーバントを使っただけでも迷子が出ないように注意しながら引率をするのは楽ではないのだ

結局、雪山での野宿にチビ達が耐えられる訳ないので日暮れギリギリのペースで着くように調整しながら歩いて行ったが、チビ達にとっては遠足と化していた。

：  
：  
：  
：  
道中迷子も出ず、無事ダンダークとその弟子達が待つ『竜の穴』の  
入口にたどり着いた。

「いいか？ここまでは山中だったから好き勝手をしても許したがこ  
こからは人の家だ。」

皆そこだけは気を付けるように！  
では、こちらのお弟子さんの指示に従って移動しろ」

「「「「「ハイ！」「」「」」」」

本当にチビ達は元気だ…俺からしたら羨ましく感じる程に…

チビ達の面倒をこちらの人間に任せ、俺はダンダークの元に向かう

「ダンダーク！今年最後のどつきあいをしに来たぞ。」

修行場の奥地、ダンダークを継いだ者だけが出入りできる通称『闘<sup>オ</sup>  
神の間』に行く

奥から2メートルに届く恵まれた存分に鍛えられた体躯、初代のよ  
うな胴着ではなく普段はデニム、大きめのジャケットを着こなして  
刈り込んだ髪にサングラス……

「遠いところよく来てくれたねえ……」

この間から楽しみにしていた。

まあ、今日は疲れただろう。

いつも通り今日はゆっくり休み疲れを抜け。

明日は楽しみにしているぞ……」

今代のダンダークはぶっちゃけ戸愚呂だった。

今までのダンダークも皆男だったが普通の濃いキャラだった。今代  
も男だったが初めて会った時は流石に驚いた。この世界でのビジ  
ユアルが生で見れるとは思わなかった……

「そうだな つい最近、慣れないことをしたから疲れたからのんび  
りさせてもらうわ。」

まあ、明日も今まで通り勝たせてもらうぞ?」

これはダンダークに宣言しているが、自分を鼓舞する意味合いもあ  
り覚悟を決める儀式のようなものだ。

当然、ダンダークは分かっているから全く動じず部屋の奥に引き返  
して行った。

それをいつも通り確認して俺も部屋まで案内してもらい早めに寝て  
明日に備えた。

翌日

広い観客席を備えたこれまた広い闘技場でダンダークのチビ弟子達と俺のチビ弟子達の勝ち抜きトーナメントが予定通り進行される。

その過程で同門でかち合うこともあつたがそのまま続行！

途中、集気法の回復力を上回る攻撃を受けて骨が折れる弟子も出たがそこは魔法の力でサクサク治療する。

リアルな話だが従来型の魔法でも腕がもげようが治せるだけの出力はあるがやはりSa・Gaの魔法の方が面倒な詠唱が無い分バレン又帝国では好かれている。

ただ、武装解除や魔法を吸収しブーストするなどSa・Gaには無い嫌らしい魔法も数多くあるので場合にもよりけりだが……

チビ弟子トーナメントに話を戻すが決勝戦にはそれぞれの弟子が進んでいた。

ダンダークの弟子は総じてタフネスやパワーが強く、ここまで勝ち進んだファイナリストも類に漏れず、ウチのと同年らしいがモール族というのもあり一回りはデカく見える！

対してウチのファイナリストは道中話しかけてきた純情少年だが、  
体躯に恵まれていた訳でも無いしまだ成長中だ…  
2人が並ぶと中坊と小学生に見える。

結果だけ話すとウチのチビは集気法やらハンデを埋めようと立ち回  
ったがイイのを一発貫いそのままダンダークの所のチビが流れを掴  
んで勝った。

「ダンダーク。今年のチビ弟子達もなかなかどうして やって  
くれたな！」

それぞれ好敵手もできたようだからこれからの成長の助けになるな。  
お前はと思うんだ？

ん？」

俺の隣りの客席で腕組しながら眺めていたダンダークに尋ねてみる

「そうだねえ」

ウチの奴等の方がよっぽどガタイが良いが頼りすぎだな。お前の所  
の弟子達はパワーもタフネスも無いが勝てるよう工夫することを知  
っている。

武者者としては上だな。

まあ、お互い今年もなかなかの粒揃いだつたな」

ぽつぽつとトーナメントと弟子達の評価を語りだすダンダーク

「さて、次はいよいよ俺達のどつき合いだな。

ノエルよ…負ける覚悟はできてるかねえ」

此方をサングラスの奥から見つめるダンダーク

「何言つてんだ？」

「まだまだ負けねえよ。お前こそ前回ボコボコにされたの忘れたのか？  
まあ結果はもうすぐ分かる。それに、チビ達の目標になるくらい見  
せつけてやるつもりじゃないか」

：

：

：

：

目の前にはサングラスを外し胴着に着替えたダンダーク  
準備万端、やる気十分だな

「さてと　そろそろどつき合いをやるつか？」

それを合図に走り出してくるダンダーク

「来い！」

先制に右ストレートを鼻柱にぶち込む

「甘い」

万力のような握力で右腕を掴まれそのままお返しの右ストレートを  
鼻柱に叩きこんでくる！

「いつてえなこの野郎ツツ『空気投げ』」

合気の要領でダンダーグを投げ飛ばし、一度距離を取る

「やはりノエルとのどつき合いはいつやっても面白いねえ」

「往くぞ、ダンダーク！『ヒートハンド』ツツ」一瞬の静寂の後、  
トップスピードで一気に近寄る

「来たか！！俺の豪拳に沈めいッッ」

ダンダークは気弾で俺をくい止めようとするが炎拳を当て素早く消した。

しかし、ここからが本番なのだ！

「俺の『龍神烈火拳』 何時までも捌けると思っな！！」

石柱程もある腕に烈火のような焰が宿り、俺の目にも止まらぬ速度で繰り出されさながら炎の壁のようだ！

それならば

「『マシンガンジャブ』」

ダンダーグが極限の力を込めた豪拳を放つなら俺は神速の柔拳を繰り出し瞬時に逸らし、少しずつ前進しそのまま全身全霊の力を込めてぶん殴る。

ダンダークもラッシュを放ちながら前進してくるが 遅すぎる！

そのまま殴って、殴って、殴り続ける！！

「『赤竜波』！！」

フィニッシュブローを撃ち、インパクトの瞬間ヒートハンドで宿った火竜の力を解放し打ち上げる。これにはダンダークも堪えきれずそのまま空中で三回転してリングに沈んだ。

常に集気法を使っているダンダークだろうと今日は立ち上がることはできない

全てが終わりに弟子達が見守っていた観客席を振り返り右手を挙げ勝ち名乗りをする

しかし俺達の闘い振りに圧倒されたのか何の反応も返ってこなければ歓声も無しか

いつもと同じ反応だがこの闘いは記憶に焼き付いただろうか？俺はそうであって欲しいと思っている

こうして今回の他流試合の幕は降りた



S a ・ G a 2 1 (後書き)

戦闘描写は本当に難しいですね

S a ・ G a 2 2 (前書き)

この勢い任せの無理矢理感ツツ!!

私の生み出す地雷原はまだまだ続きまゝす

ダンダークの修行場での他流試合は今回も無事終わった。

ダンダークとの対戦では術や気弾は万が一を考えて使わないから派手さは無いが、無駄を削いだ熾烈な技の応酬になるから端から見たらアツサリ終わったようでも、武術をかじったことのある人間なら次元の違いが分かるからアレでいいのだ。

その後弟子達の親睦会が開かれ、俺は俺でダンダークと酒を飲み交わしながら今回の闘いの反省点を洗い出したりして、1日滞在した

遠足はウチに着くまでが遠足だ。

ただ、本当ならチビ達は俺が連れて行くべきだが用事があるので向こうの弟子と分身に任せて俺はある場所へ向かった。

俺はダンダークの修行場から南へ移動、そのまま最寄りの村からゲートを使い、そこからは妖精光を使い南の山々を幾つも越えた先にある開拓村へと向かう。

村に着いた頃には辺りはすっかり夜になっていた。

「ノエルさんお待ちしておりました！」

私はテレルテバ開拓村、村長をしているものです。」

その村の門を叩けば見覚えのある男が出迎えてくれた。

「お前シャルカーンか!？」

お前が開拓団の長になってたと知らせてくれていたらもう少し急いで来たのに

それに何他人行儀にしてんだよ。お互い気を遣うような浅い仲じゃ無いだろう？

まあ面子や立場があるから仕方ないわな…

それじゃ村長さんが言うんだ。しっかりもてなしてもらおうか？」

過去、腕っ節がべらぼうに強い亜人の盗賊団がヘラス帝国から渡ってきた。その時、皇帝からの勅命を受けた俺が抑え込み、通例通り弟子として連れ帰り性根をたたき直した後、大工や林業、農業など野党以外の真つ当な職に就いてバレン又国民として生きていけるように修正した男達の1人だった。

「ハハハ！まあ、ノエルさんにはボコボコにされましたがバレン又で生きていけるよう飛び回って貰った恩があります。

だから、開拓者を集めると聞いた時これまでの人生の清算もあって志願したんですよ。

ただ、ここまででは順調にきましたがこの先の渓谷からヤバい化け物が偶に来るので応戦していましたがこの間、とうとうとんでもない強さを持ったヤツが出てきました……………

退治依頼を首都のギルドに頼んだ所ノエルさんが来ると知り、こちらも驚いていたんです。」

ふん、シャルカーンも真人間に戻れたか！

それに、自分達の力ではどうにもできない化け物退治なんて正に俺にピッタリじゃないか！！

「おう！任せとけ！

だがもうじき夜になる。村に来る化け物退治と件の渓谷に行くのは明日の朝にしてもらえるか？」

「ハハハ、バレンヌ帝国が誇る最強の男の強さはこの体に『嫌』という程叩き込まれましたがこの暗闇では流石に万が一があります。今日は村の中でゆっくり休んで下さい。」

それに私だけでなくノエルさんに拾ってもらってバレンヌ国民になった者も沢山います。皆、首を長くして待っております。さあさあ、早く行きましょう！！」

シャルカーンはえらく高いテンションで村に入るよう勧め、俺を集会所に案内した。

「あ！ノエルさん！

お久しぶりです。しかし、忙しいのに此方の都合で来てもらって……」

「おう！久しぶりだな。

細けえ事は気にすんじゃねえよ！

それより体の調子はどうか？とんでもない化け物相手にしてんだ。女のお前にはしんどいだろ？」

「疲れは溜まってますが、それは皆同じです。自分だけ楽はできません。

それに、村が発展するのが目に見えて分かるんで毎日が楽しいです。盗賊時代には自分が堅気の仕事をしてるなんて考えてもいませんでした。

仲間共々拾って頂きありがとうございます。」

「気にすんなよ。

まあ、これからも無理しない程度にやんな」

「ノエル師匠、オレです。この村はどうですか？  
立派なもんでしょう？」

「お前よ……」

俺は今さつき着いて村長さんに引っ張られてきたんだぜ？

まだ、村の全貌は分からねえが  
元気が有り余ってるバカは  
ここにいな。」

「そんな〜酷いっすよ」

集会所にはシャルルカーンが言った通り元盗賊だった奴が多かった。そこからは貴重な酒が振る舞われ、明日に残らない程度に飲み、皆の近況を聞きながらあつという間に時間は過ぎ集会はお開きに…今日の寝床はシャルルカーンの家の即席ベットだ。そこで、村の顔ぶれを見てから疑問に思ったことを聞いてみる。

「なあシャルルカーン、悪いが、お前達が手に負えねえ化け物ってなんだ？」

元々お前等はそこそこ強かったが弟子になってからは更に強くなった…そこいらの竜種なんぞに遅れをとるような生つちよろい奴らじゃねえだろ？」

「ちよつと話してみる。」

シャルルカーンは若干顔が青くなり語りだした

「いや、ノエルさん

自分らが戦った化け物ですが、人間みたいな奴でして…一応3匹は倒しましたが1匹は逃げて行きました。

最初はすぐに殺し尽くせると思っていました。

しかし、いつまでも襲撃は止みません。

どの時も従来型の魔法は効かず、ノエルさんから授かった新しい魔法や技が無ければ全滅でした。」

「…そうかあ、ソイツはとんでもない化け物だなで、そいつ等は件の渓谷から来ると？」

「ハイ

ですが、あの渓谷には1つ前の山に昔から暮らす住民が知る伝承が

あり、昔から常に腹を空かせた化け物共がひしめき合って共食いを続けているがいつまでも数は減らない。

そして、もし討伐に行っても魔法も気も使えず餌食になる……  
渓谷を越える時は気を付けると教わりました。」

「まあ世の中は広いからな

魔法がある世界もありや無い世界もある。

自分が知らない事だらけなのは仕方ねえよ。

それに、従来型の魔法が効かないやら渓谷の特徴が分かったんだ。

それだけで十分役に立ったぞ？

シャルルカーン、ありがとうよ！」

「いいえ！

自分達にできるのは情報を渡すことと行っても足手纏いになるので案内したらずぐ引き返してこの村からノエルさんの無事を祈ることだけですから」

「ところで……渓谷の名前を聞いてなかったな。教えてくれ。」

「魔獣が住まう谷

ケルベラス渓谷です。」



S a ・ G a 2 2 ( 後書き )

原作世界改変の予感

S a ・ G a 2 3 (前書き)

戦闘描写は本当に難しいね！  
始めて上手くなりたいと思いました。

開拓村テレルテバ  
村長シャルカーンの家にて

「シャルカーン、村長であるお前にだけは教えようと思う。この世界は魔法が溢れてたりと分からねえ事ばかりだが、この大陸は昔から外の大陸とは少しばかり勝手が違う。

例えば他の生物に卵を産みつけどこまでも進化、強烈なスピードで繁殖をする化け物蟻がある鉱山にいた。

その化け物蟻のせいであるモール族でさえ滅亡寸前まで追い込まれ歴史がある。」

「な！？ノエルさん！ならば今回も同じような危険が迫っているというのですか！？」

そうだよな。それが普通の反応だわな

誰だって、この大陸が世界有数のビツクリ大陸だなんて初めて聞かされたら驚くよな

「まあ落ち着けよ。

その時もタイミングがずれていたらどうなっていたか解らなかったがたまたまボクオーンに飛ばされた俺がいたから殲滅することで蟻騒ぎは収束した。

ただ、今回も何の因果か俺が呼び寄せられた。

俺が行くことで丸く済めばいいがどうなるか解らん。」

「ではノエルさんでも勝てない奴等にオレ達はどうすれば!?!」

「もし戻らなかつた時は今から書く手紙を皇帝に見せてアヴァロンから軍を派遣してもらえ。

それじゃあ案内頼むわ!」

最悪の事態に備えておくようシャルルカーンに言い、手紙を渡しておいた。

:

:

:

:

ケルベラス溪谷

山脈と山脈の間に走る一本の巨大な亀裂だが、その全長はあまりに危険な為測定不能

犬猿の仲であるメガロメセンブリアやヘラス帝国　そして世界各国が『気や魔法が使えない恐ろしい場所』と珍しく共通認識を持っている溪谷

また今は機能していないが、バレンヌ帝国ができる遙か昔からメガロメセンブリアが罪人の処刑場、拷問場として建築した『ケルベラス無限監獄』が崖の上にそびえ立っていることもあり世界的に有名な場所である。なおバレンヌ帝国はメガロメセンブリアの息がかか

つた人間を追い出して以降、今まで詳細な地理を掴むため踏み込んでいない未開の地の1つである。

「ここがケルベラス渓谷か　化け物共がひしめいて今にも飛び出してきそうなのが崖の上にも解るとはよお。

シャルルカーン、無理言ってここまで案内頼んだがここから先は流石に危険だな！」

「ハイ　崖からはくれた化け物にも苦戦するオレではとてもついていけません。

ノエルさん、御武運を！！！」

「おう！ありがとうございます！」

よっしゃ！！行くぞッッ！！『音速剣』」

俺はシャルルカーンと別れ化け物共が闊歩する谷へ飛び込む。

そのまま、剣を抜き上空から斬撃を飛ばす！

化け物共は落ちてくる俺を食おうと上を見上げて口を開けていたので一気に片付けることができた。

「魔法の射手！！　光の**ウチ**一矢！！　ふう〜魔法の矢も使えない

と　」

魔法の矢は発動しなかった。シャルルカーンが言った以上にヤバい場所だ。

俺を察知し、化け物が目の前に迫る。次は、S a ・ G a の魔法を試してみる。

「ウインドカッター」

Sa・Gaの魔法は発動し化け物はズタズタに引き裂かれ絶命した……いつもの威力に比べて随分と見劣りするものだったが

「わけわからんなあ？

この谷に何があるんだ？件の人型の化け物も出てこない……進むしかないな。」

俺は襲い来る化け物を魔法や剣で倒しながら進んでいった

Side ????

有り得ない！こんなことは有り得ない筈だ！何故あの男……ノエルがこの谷にいるのだ！？

あの世界から数多くの場所を渡り歩きその度、多くの同胞を失って遂にたどり着いた新世界。

この世界は奴隷共が支配する世界、まさに理想郷だった！私達はすぐさま長年暖め続けた計画を実行に移し、安息を手に入れたのにツツ！！

他の6人もこの谷に気付いているのか！？いや、きっとそうだ……

思えばノエルは昔から文武に長け統率力がある男だった。持ち前の知識でボクオーン達と共に我等を渡り追ってきたのだろう。

だが、私達はもう昔の弱いままでは無いッ

私が編み出した秘術で此処を貴様の墓場にしてくれるぞ！ノエルウウウウウ！！

Side Out

:

:

:

:

ケルベラス溪谷、瓦礫にコケが生えた場所が所々あり非常に歩き辛い！！

出てくる化け物も潰れた饅頭に触手がうじゃうじゃ生えた気持ちの悪い奴や、バカみたいに顔がデカい犬のような化け物など、人型のシルエットを見かけたことがない。

シャルルカーン達から逃げたから住処であるこの谷に戻る筈だがもしかしたら途中で力尽きたか？それとも弱った所を食われたか？もしそうなら携帯食糧はまだ残っているがこんな陽の光が届かないジメジメした谷底からはサッサとオサラバしたいんだが…

太陽が恋しいなんて考えながら化け物の相手をしていた時

『ハアアアアアアア！！』

谷の奥から何かの雄叫びが辺りに響いた！  
それをキツカケに今まで鬱陶しいくらいいた化け物が俺から離れて俺を置き去りにし『何か』から逃げ出した。

『件の人型が来たか？それともケルベラス溪谷のボスでもきたのか？』

何にしてもコイツぶっ飛ばしや一件落着かね？』

そんな事を考えながら集気法と妖精光でブースト、剣を構え『何か』が来るのを待つ。

闇の奥から現れたのは確かに人型。しかし、俺にとっては見覚えがある化け物だった

『ふうふうう…貴様が調子扱いてる野郎だな？』

いくら修行場つてもこの谷にはこの谷の掟がある。まあ、それ抜きにしてもやり過ぎだ…

そういうわけでここらで死んどけやエエ！！』

確かに人型だが頭には湾曲した角にゴツゴツした岩のようなゴツい筋肉に緑の肌でスパイクのついた金棒、喋ったのには驚いたが紛れもない！！『強鬼』が現れた！

「ハア！」

威力は軽い分多めに斬撃を飛ばすが強鬼は金棒で器用に弾きながら進み、被弾数を抑える。

『これでも食らえい』



渾身の力が込められ金棒が振るわれる。

軽く避けたが、金棒が叩きつけられた壁がぼろぼろと壊れ瓦礫が降ってくるが練気拳で全て投げ飛ばす。

ついでに遠距離から気弾を放つが、奴はギリギリで避けた。

まさか強鬼に避けられるとは思っておらず驚いたが、奴が気弾を避けた瞬間に稲妻キックで一気に距離を詰め、そのままの勢いで奴の顔にストレートを叩き込み、気弾をぶつけたがピンピンしてやがる。

うーん、S a・G a 3 よりもえらいタフになってる気がすると考えていたら強鬼が次は此方の番だと言わんばかりに肩をいからせ突出してくる。

そのまま、棍棒をぶん回してきたがカウンターで回し蹴りを入れ距離を取り続ける。

『もらつたあああ』

「活殺破邪法ツツ!!」

意外にも善戦した強鬼だが最後は、頭に血が上り大振りになった金棒をかいくぐられ俺にすれ違い様胸に掌底を介して気を流された強鬼は倒れ伏した…

だが、せっかく話す化け物がいるのだ。襲撃について、そしてこの谷について知っていることを全て喋らせる。

「おい！死ぬ前に何故村を襲った！

貴様は掟を引き合いに出すほど義理堅い化け物だ。死ぬ前に洗いざ

らい吐け!!」

『む…村?』

知らん…オレの目が黒いウチはそんな事をする奴はいない  
それは余所者が来る原因になる…いたらオレが殺している。』

どういう事だ?

シャルルカーンから確かに襲われたと俺はこの谷に来る前に聞いた。  
もう一度強鬼に聞くしかないか

「俺はある村の人間がこの谷から来る人型の化け物に困り果て助け  
を求めたから来た。」

死ぬ前に正直に話せば楽にして逝かしてやる」

『そんな……バカな 話、知らん!』

仕方ない、尋問は回復させて仕切り直しだな

「生命の…っ!?!?『クリムゾンフレア』誰だ!?!?」

いざ回復しようとしたが殺気を感じて強鬼を抱き上げその場を離れた瞬間、幾つもの熱線が降り注ぎさっきまでいた地面がマグマ状態  
になっていた…

「ほう!あの魔法を不意打ちでも避けるか!!」

だが次は外さんぞ?ノエルよ」

声のする方を振り向けば、闇に溶け込むような黒のローブを着た男しかしその顔はフードを被っているため解らないが、呪文を唱えた声から男の魔導士だろうか。

しかし、何故だ！？Sa・Gaの魔法、ましてやこんな高火力の魔法を知る者はバレン又国民でも一握りだ！

「テメエ、何者だ！」

全力が出せない特殊なフィールド、現地の化け物共に終わったと思つたら第三者の介入。どうやら、今回の依頼は俺が思っている以上に一癖も二癖もあるハードな仕事のようにだ。

「何だ？ノエル そんな事を聞いてどうするんだ？それよりもだ  
ここが貴様の墓場となるのだ！  
大人しく死ねイ！！」

そう言うと魔法使いは戦闘体制に入った。

とにかく今はこの男をブツ飛ばす！

話はこの乱入者の相手が終わってからだな…

S a ・ G a 2 4 (前書き)

さあ、最初の話で出た婆ちゃんの言っていたハードな部分の片鱗が見えてきたね！

「おい、もう一度聞く。お前はメガロメセンブリアに属する魔法使いか？

そして何故、俺達バレンヌ人しか使えない筈の魔法　それも一握りしか使い手がいない魔法をお前が使えた！」

目の前の黒ローブに強い口調で問い詰める。

本来なら四の五の言わず勝負を決める。または牽制の意味で攻撃をするべきだ。

しかし、メガロメセンブリアに操られているバレンヌ国民の可能性もある。

今回ばかりは相手の出方を待つ。

「メガロメセンブリア？短命種の奴隷共が治める国など知らんな。それよりもエル　貴様だ！」

貴様はいつからこの世界にいる？七人集まっているならばともかく今は貴様だけか？まあ、わざわざ聞かずとも貴様を吸収すれば全て解ることだがな・・・さあ問答は終わりだ。行くぞノエル！！」

『ファイアボール』、『ウィンドダート』

『音速剣』、『つむじ風』

黒ローブ…どこでS a・G aの魔法を知ったんだ?!?。

「やるじゃないか・・ならばこれはどうだ？」

『ウィンドカッター』、『フレイムウィップ』」

『トルネード』！

複数の風の刃と追撃用の焰のムチが迫り来るが俺はトルネードを放つ。

俺が放ったトルネードは魔法使いが撃った全ての魔法を一切合切吹き飛ばして尚、その勢いは全く衰えない。

それどころか空気の摩擦でプラズマを生み出し威力の増した竜巻は、まるで巨大なミキサーのように崖をガリガリと削りながら黒ローブを飲み込んだ。

「・・・」

流石に如何な使い手だろうと巨大ミキサーに飲み込まれてはひとたまりもあるまい。

途中、気になるワードは数多く出たが、バレン又国民では無いこと…何処からか帝国固有の技術が漏れつつあること可能性、最悪…裏

切り者が潜んでいると判明しただけでも儲けか・・・

そのまま場所を移して強鬼の尋問を開始しようとするが…

「ん？ノエル？そんなに急いでどこに行くんだ？

せっかく私が生き残ったんだ。

もっとゆっくりしていけよ・・・」ソウルステイル「

後ろからかけられた声と、その直後の技名に驚き慌てて避ける。

「な！？僕の体から力が・抜けて・・・いく」

強鬼は魔技の餌食となり、みるみるうちに生命力が抜かれている。

「テメエ・・・あの状況ではトルネードから逃れることできない筈だ！どうして無傷で立っている！！」

「フハハハハ、ノエルよ・・・次元を渡り歩き、モンスター共を吸収する間に頭がボケたか？

もうお前等に怯えていただけの昔の我等とは違う！！

私でも貴様を倒せる！」

「・・・ツツ！テメエはまさか！！」

「今更気付いても遅い！『アストラルゲート』！！  
そのまま無限地獄に飲み込まれて死ね！！」

クソツタレが・・・俺のすぐ真上に全てを飲み込む次元の狭間を開きやがった！！  
壁に剣を突き差し踏ん張っていられるが、周りの地面が吸い込まれている。このままではジリ貧だ

「コンチクショウが！！『クイツクタイム』」

Sa・Gaの魔法の効力が減退しているこの谷でも確かに発動してくれた。

俺は時間が緩やかになっている僅かな隙に、黒ローブに接近…胸ぐらを掴むとアストラルゲートに投げ込んだ。

「馬鹿な！？あの短時間であの術を使ったのかアアア！？ぐおおツツツ・・・次だ！次こそは貴様を必ずあの世に！！」

黒ローブは次元の狭間に飲み込まれる瞬間、不穏な捨て台詞を残し今回の鬪いは終わった。



しかし、あの黒ローブの正体に関して俺の予想が正しければ・・・

このケルベラス渓谷での出来事は、アヴァロンに戻ったらずぐに議題に取り上げて貰おう。

今はまだ依頼が残っているので黒ローブが現れた谷の奥に治療した強鬼を引き連れ、進むことにする。

:

:

:

:

谷の主を自称する強鬼を先頭に立たせれば、谷の化け物共は尻尾を巻いて逃げ出す者が大半。

虎の威を借るならぬ強鬼の威を借るだなあ！無駄な戦闘を省いて、サクサク進むことができた。

そして、ある地点まで進んだ時俺にはゲームで見覚えがある『あるモノ』が現れた。

『なんだこりやあ？僕はつい最近ここを通ったが、その時はこんなワケのワカらんモンは無かった。』

「そうか・・・強鬼、それは本当なんだな？」

「僕は嘘が大ッ嫌いなんだ！こんなモンはこの谷には存在せんかった！あんな妙な格好をしたふざけた野郎がやっつたに決まっておる！」

強鬼が必死に否定する。「あるモノ」

S a ・ G a 3で各地にこじ開けられていた四魔貴族のアビスゲートそっくりのモノだった。

強鬼が本当に知らなかったかは分からない…ただ、人型の化け物は此処から沸いたのだけは分かる。

しかもゲートの中を覗いてみれば、新たなモンスターが歩いているのが見える。

「（だが、四魔貴族の影は襲ってこない…）」

既に黒ローブの男に吸収された可能性もあるのか…出てくる気配は無い。

「とにかく閉じるべきだな。」

ゲートに剣を突き刺し、一気に破壊した。

『ぬう！消えおつたわい。』

ケルベラスの異変の原因はこれで消えた筈。  
後は強鬼のことだが・・・

「今回は事情が事情だ。見逃してやる。  
だが、その気になればお前程度・・・簡単に影も形も消せる。  
これまで通り睨みを利かせ雑魚共が出ないようにしろ。」

『うるせえ！貴様のような若僧に言われるまでもねえ。』

何も殺すだけが能じゃない。強鬼は苛立たしげに吐き捨てるとその  
まま闇の奥に帰って行った。

まあ、強鬼の立場からしたら殴られ損の上、死にただけで骨折り損  
の草臥れ儲けなんだから仕方ないわな。

「オ〜イ帰ったぞ〜！！門、開けてくれ〜」

「ノエルさん！！」

それじゃあ、谷の魔獣も退治されたんですね？」

「まあな…とにかくヤバい奴は退治したよ。

以前よりはだいぶ楽になるか、だが…それは分からないな。」

てつきり件のモンスターを俺が退治してきたものだと思っていたシヤールカーンの顔が強張る。

そして、その理由を俺は包み隠さず報告した。

無論、無闇矢鱈に村人へ情報を開示すればパニックになるかも知れない…時期を見て打ち明けるようには、言い含めたが。

「さて、報告も済んだから、俺はアヴァロンに帰るわ。」

「そんな…いえ、ノエルさんの帰りを待っている人達や、あなたにしか出来ない仕事がありますからね。

今回は本当にありがとうございました。」

「おう！お前も達者でな。」

開拓村を発った。

S a ・ G a 2 4 (後書き)

より良い作品にしたいのでここがおかしいとかあったら感想やご指摘下さい。

S a ・ G a 2 5 (前書き)

内定を頂いた会社の店舗見学やらしてたら書く暇がありませんでした・・・

待ってた人がいたらごめんね

ノエルが黒ローブを倒し、アヴァロンでケルベラス渓谷での異変を報告している頃

地図にも載らないとある場所、誰からも忘れ去られた小さな遺跡がひっそりと存在する。

そして、陽の光さえ届かない筈の最深部の広間は松明が焚かれを煌々と照らしだしている。

そんな場所に背格好が違う黒ローブを着た怪しい人影が3つ

「やあ！急な召集にも関わらずよく来てくれたね。  
今回集まってもらったのは他でもない・・・僕等の同胞が1人死んだ。」

最も小柄な人影が仕切り役なのか話を切り出した。

「・・・」

「なんだあ？」

アホくせえ！いきなり召集をかけたと思えばたかがその程度の話か！？



「なんだあ？

アホくせえ！いきなり召集をかけたと思えばたかがその程度の話か！？」

オレ達は死んだとしても時間が経てば再び黄泉がえるから放つとけばいいがや・・・」

大柄な人影には仲間意識が無いのか苛立たしげに拳を壁に叩きつけ言葉を返す。

「そうだね。確かに放つといっても黄泉がえる・・・けどね、僕が言いたいのは『何故』このような事態になったかだ！

この世界のどこかに隠された魔法、最悪僕等でさえ太刀打ちできず倒されるかもしれないモンスターがいるかもしれないんだ！！

その時、残された力の無い同胞はどうなるか少しは考えるツツ！」

「そうね・・・あの男は性格に癖があるけどこっちの魔法使いに負けるようなことないのよね」

だからアイツがいた大陸にあるバレンヌって国に何かあるんじゃないの？

ちようど小さな国を支配した所だから軽く偵察にでも使ってみる？」

今まで黙っていた最後の影が自分なりの考察と意見を述べるがやはり仲間意識は無いのか適当な調子だった

「結論がでたな！」

それならこんな集まり時間の無駄使いだ。何より頭で考えてウダウダするのはオレの性に合わねえ！・・・じゃあな！」

それを聞き、この会議から逃れる口実とストレス発散の相手が見つかったとそのまま大柄な影は早口にまくし立てると闇にとけ込むようにその場からサッサと消えてしまった

「どうする？一番馬鹿なアイツが行っちゃったわよ？  
今すぐ追えば引き留めれるんじゃない？」

「いや・・・いいよ。さっき彼が言ったように例え死んでも時間が経てば再び会えるんだ。」

だったら、せつかくやる気になってるんだし邪魔しちや悪いよね？」

「あの馬鹿は体の良い尖兵ってわけ・・・せつかく可愛い坊やの体になつたのに昔からの嫌らしい性格だけは変わらないのね」

小柄な影に残つた影が皮肉を言う。

「ぶ〜、酷いなあ〜！

僕は昔からみんなが幸せになることだけを考えてきたのにそれは心外だなあ。

僕はいつも少年の心を忘れてないよ！

それに嫌らしいのはキミの方でしょう？あの時とっさに支配した国を潰す可能性があるのにあんな案が出せるんだからね〜」

しかし、そんなものは暖簾に腕押しとまったく堪えてない。

それどころか皮肉混じりのジョークを返すほど余裕を見せる。

「アンタツツ・・・坊やと話していると本当疲れるわ！

それじゃあ私は私でやることがあるし、ここら辺で失礼するわ。じやあね〜」

後に残るはただ1人

「さあて、バレンヌ帝国。

僕はあまり奴隷は殺したくないけど、僕等の悲願の妨げになるようなら……その時はその時だね！！

容赦しないよ！」その言葉と同時に最深部の広間にいた者と焚かれた松明の灯りが消え去り遺跡は元の静寂に包まれた。

:

:

:

:

アヴァロンで皇帝に召集してもらった議会で報告・議論の結果、奴一人ならいいが仲間がいるかも現状では解らない。東西南北それぞれに守りの要を作ることと落ち着いた。

平たく言えば、ヘラス帝国に近い南のテレルテバ開拓団は一時解体そのままスービエ、ロックブーケを始めとして人員補充をして『サウスガード』へと再編成。

そして、次はメガロメセンブリーナ連合が支配する大陸と向かい合っている東側にワグナスを始めとした『イーストガード』を作る。なお、迷いに迷ったが北側にあるナゼールの防衛はダンダーグとロックブーケに、西側のヌオノにはクジンシーに行ってもらった。

そのため発起人である俺が率先して動く必要があったので道場は暫くの間、師範代達に任せヤウダの城下町へ向かった。

ヤウダへは術戦車でドライブ、道中ワグナスとたわいもない話しをする。

というのも、本当ならばそれぞれに俺の都合を押し付けようで申し訳無かったが事の成り行きを包み隠さず説明してワグナス、スーピエからは快く承諾を得た。ダンダーグはその時、「ナゼールに行くのはいいが半年に一回で行っている他流試合を月1にしてくれるなら考えてもいいがねえ？」とふっかけてきた。正直ダンダーグと月1でどつき合いは避けたいところだ！

交渉の末1シーズン一回を俺は勝ち取ったがダンダーグは「これで弟子達も世の中を知る機会が増える」とホクホク顔で承諾した。

「ヤウダに行くのも久しぶりだし練魔の塔も一緒に引越したと思えば安いもんですね。今からヤウダの町が楽しみです。」

「ワグナス、知ってる通りこの大陸の東側はメガロメセンブリアから直線で結べばアヴァロンへの最短ルートだ。

この人選もお前達の魔法で戦艦の侵攻を食い止めることを期待しての事だ。大変だが頼むぞ？」

「それは勿論ですがノエル・・・私は月謝を貰い、住み込みの弟子達を育てていますがあなたは無償で育てる。

そのため今回のようにギルドのクエストをした報酬で道場を回していますね？」

危険な目に遭ったり、働き過ぎて皆に心配をかけてはダメですよ！」

助手席からこちらに『私怒ってます！』と表情で見つめるワグナス。正直、ダンダーグのような強面でも無いから全く怖くないさ。

「ハハハ！俺の体は特別製だから疲れ知らずだから大丈夫だ。まあ、ありがとうな。少しは考えて動くよ」

そして、ワグナスは代々おっとり美人系の女性でいつも俺を癒やしてくれた。

今回もダンダーグとの舌戦でくたくたにされた俺をワグナスからの言葉が狙い通り現在進行形で癒やしてくれる。本当、良くできた子だわ……

ただ、俺は初代ロックブーケ以外には不純な心……スケベ心を持ち合わせる事はない。孫と子どもか曾祖父と玄孫だぜ？お互い尊敬や友愛はあってもそれはありえない。

重ねて言うが決してスケベ心が働いたからではない……信じてほしい。

ゲートを使わず術戦車でのんびりドライブするのも定期的にエンジンに火を着けなければ術戦車がオシャカになるからだ。

「ところで練魔の塔は魔法球で取り込んで運ぶが、ワグナスは魔導研が出した新作の魔法球についてどう考えている？

ダンダーグにも聞いたがアイツは俺と同意見で短命人種と長命人種で差がでる・・・最悪の場合、戦時中以外は使用を控えようと思うんだが」

ワグナスもそうだが2人が開いた修行場は魔法球に取り込んで現地に着いてから、適切な場所を探して解放することにより引越すを可能にした。

昔から思うけど、魔法球も大概チートだよな。

最近なんて内部時間と外部時間の経過速度にズレを生じさせ時間を稼ぐ・・・精神と時の魔法球ができたわけだ。

言っちゃ何だけど、外の1日が魔法球内部の1月に換算する魔法球があっても亜人特有の寿命と年の取り方があるから使えるだけだ。

人間が使ってもどんなに暴れても変化が無い世界、年を取るスピードが早すぎることから皆が思うほどの成長は見込めないし、精神が弱い者は最悪発狂して廃人になるかもしれないから使いどころが難しい。

まあ、亜人仕様のピーキーな仕上がりだと思えば納得できるが・・・才能や努力意外に生まれで成長の伸びしろが決まるのはどうにかしたいなあ。

「そうですね」

元々は災いから自分や家族を守るのを目的に開いた道場・修行場で

した。

確かに強くなるのが実現するための近道ですが寿命を削ってまで鍛練するのは既に手段と目的が逆転していますね・・・

私も有事に限り使用を許し、平時は1つの例外無く使わないのは賛成ですよ。もし一度でも使えば歯止めが利かなくなるでしょうから・・・」

そんな固い話やくだらない会話をしながらアヴァロンからだいぶ走り草原が広がる牧歌的な景色から、木々が消え一面岩や砂利だらけの景色に変わりヤウダへのドライブも折り返し地点を過ぎた頃

「ところで最近聞いた話なんですが、ヤウダの町外れにある海岸に小さな女の子が流れ着いてたらしいですよ？」

「へえ、あの海岸に漂着するとしたらメガロメセンブリア側の離島から溺れたんだらうな。その子はちゃんと弔われたのか？」

漂着といっても魚につつかれたりしてボロボロだらう・・・まだやりたいことが沢山あったらうに可哀相だな

しかし、ワグナスは俺が思っていたような沈んだ表情でなくまだ才子を言っていない子供のようにニコニコ微笑んでいる。



「ここからがこの話の面白い所なんですよ。最後まで聞いてくださいね？」

実はその子、眠ってるのかと錯覚するほど凄くキレイな状態で漂着して、葬式の準備が終わるまで遺体安置所で暫く保管してたら息を吹き返したんですって！

世の中不思議な事もあるんですね。」

とっておきのネタだったのかこちらを見ながらニコニコ微笑んでいる

まあ、彼女の狙い通りの反応だったのか俺の第一声は「は！？生き返った？」だった

実際そうだとしたらワグナスの言う通り摩訶不思議な事があるもんだ。

最近は輪にかけて色々アンビリーバボーな目に遭うと思う。

ただ、その後もくだらないお喋りをワグナスとしながら『里親になる者が居なければその子を引き取り育てるのもいいかもしれん。』

そんな事を考えながら術戦車のアクセルを踏み込み冬には珍しいほどポカポカ陽気の中ヤウダヘドライブした。

木で建てられた長屋、その入口は門の場合もあるが、大抵はふすまが使われておりそこに住む人達も穏やかな人が多い。

町を抜けた先にそびえ立つ城はよくある西洋式でなく、瓦や積み石が使われている東洋式で昔、昔の大昔に住んでいた日本を思い出し懐かしく感じる場所。

そこがヤウダ・俺のお気に入りの場所の1つだ。

「ふいふ着いた着いた。ワグナス、途中休みをはさみながら来たけど疲れなかったか？」

「座った所もちょうど良い柔らかさだったし話も楽しかったからヤウダへもだいたい早く着いて疲れを感じる暇ありませんでしたよ？」

「そうか。俺が初めて走らせた時、予想以上に速いモンスターマシンと体感したからスリル満載過ぎて気疲れしたから良かったよ。」

これは本当の話だ。一気にギアを入れてもエンストしないとボクオインから聞かされ草原で実践した所暴走して気を薙ぎ倒し、その度に玉ヒュンしたのも今では良い思い出だ。

城には皇帝からの書状が届けられ、その時の返事から確保できた場所は町外れに広がる草原、漁港の近くの空き地、ヤウダの裏山・ハク口山の3つから選んで欲しいそうさ。どれにする？」

「じゃあ、さっそく見に行きましょう！  
まずは町外れに広がる草原からですね。」

ワグナスはさっさと歩いて行った。

：

：

：

：

「ノエル、どこも良かったんですが防衛の面も考えてハクロ山に決めました。」

結局ワグナスは2日間じっくり考えた結果、天に向かって魔法を撃つよりも、高度があるハクロ山からの方が威力も狙いもつけやすいこと等からハクロ山に決めたとワグナスは教えてくれた。

こうしてワグナスの引越しは終わり、明日はゆっくりして件の幼女の様子を見に行こうと決めワグナスの手前、良さげな旅館をチョイス。

そこで美味しい料理を頂き、露天風呂にのんびりと浸かり疲れを絞り出した後ふかふかの布団で休んだ。

だがこの時の俺は、気まぐれで出会う幼女とは気の遠くなるほど長い生涯の付き合いになるとは想像もつかなかった。

S a ・ G a 2 6 (前書き)

『吸血鬼にされた直後に逢わずに300年経った辺りで逢ったら・  
』・

そんなテーマで書かれています

だって、そっちの方がどうなるかオモシロいじゃん!!

「お客様、お客様？  
朝食の用意ができてございます。早くしないと冷めてしまいますよ  
？」

誰かが俺を呼んでる気がする・・・けど眠いし寒いし道場を開くまで  
まだ余裕があるじゃんか・・・なら寝てしまっても構わんだろ？

「うーん？後10分、いや5分でいいから寝させてくれよう」

ふかふかでホカホカの布団から出たくないでござる。冬の朝は寒い  
から出たくないでござる！

「ここまで言っても起きないとくれば・・・仕方ありませんね。  
ならば、朝食は下げさせてはいただきます！  
それではゆっくりお休みなさいませ」

む！それは聞き捨てならんばい！  
出された物は全て頂くのが俺クオリティ - なんだな

「ああん？ちよっ！起きました。  
起きましたから持っつかないでくれ！  
美味しいご飯を食べたいんです」

「・・・・・・・・」

クイツクタイムの無駄遣いと言われてもかまわない！ふすまの前で両手を広げて通せんぼしたのは弟子達は勿論、女将さん以外いない場所であつた。

ん~~~~！舌の上ではホカホカの白米とアツアツの味噌汁が二人三脚のように喉を通り過ぎとっても美味しいなり〜

お次はおかずの川魚の塩焼きだ。一口頬張れば清流の中を泳いでいた魚の力強さ、ヤウダの海から造られた塩ツツ！本来なら出会うことの無かつた2つ食材が合わさり生まれる相乗効果！！

箸休めに食べた沢庵も良い塩梅で憎い仕事をしてくれるじゃないか！！

おかげで箸を持つ手が勝手に動き出すぞオ！

この料理

う ま い ぞろぞろ

「じ馳走さまでした。」

朝から美味しいメシに出会うことができた俺は調子に乗って朝風呂に、そして風呂上がりにはったり出会ったワグナスと食べ歩きをして今は最高にゴキゲンだ！

これは今日1日のラッキーを使い果たしたかもしれんね？

「ワグナス、俺はこれから漂着した女の子の所に行くがお前はどっするんだ？」

俺と一緒に様子を見に行くか？」

「ノエル、私はこの町の特徴や人々を見てからハクロ山行って練魔の塔を顕現するわ。」

弟子達も続々来るからボクっとしてるられないの悪いけど漂着した



女の子は1人で見に行つてね？

それと、旅館ありがとうね？凄く素敵だった。」

うくん残念！あつさり降られたなあ。

まあ、旅館にいた別の客が話していたのを小耳に挟んだが、意外なほどおてんば娘で手に負えないからすぐに施設へとんぼ返りしているようだ。

とにかくその児童施設とやらに行つてみようか・・・俺が引き取るか、はたまたアヴァロンが誇る最強の孤児院『聖・アンデルセン孤児院』に面倒を見てもらうよう話すのもマジで視野に入れるか。

：

：

：

：

「すみません。ここにとんでもないおてんば娘がいると聞いて訪ねた者ですが・・・」

児童施設は外から見たらえらく新しく見えたが中に入ればそこらじゆうの壁に穴が空いてるは、イスやテーブルが強い力で飛ばされたのかは解らないが大なり小なり破損している物が少し見ただけであつた。

その様はまるで野獣でも放し飼いにしていたように酷い有り様だった。

「ああ、あなたもあの子の話を聞いて来たのですか。」

「もしかしてお前は……」

対応してくれた職員は女性だが見覚えのある顔だった。

「あの子が増えてからはもう大変ですよ。『是非とも私の養子に』という人間がこの3ヶ月で何人来たか……しかし決まって2、3日したら『手に負えん!』と言って返してくる!

仕方なく同僚とあの子の相手をしてはいますがまるで化け物のような力で抵抗するのでこの有り様ですよ……今は、手錠や諸々を使つて年相応の力しか出ないようになっていきます。」

「……………」

「あの子がいる部屋は突き当たりを曲がった先にある部屋ですが、もしあなたが引き取ると言うならば私達大人や子供も限界なんです! 『絶対に見離さない!』  
それくらいの気持ちで引き取り送り返して来ないで下さい。」

「よろしく願いします。」

この職員は俺が昔育てた弟子の1人であった。

しかしストレスからか目の下のクマはハッキリと浮き上がっており、髪もガサガサになり昔の澁刺とした雰囲気は無い。

何よりも、目は俺を向いているが俺を認識できていない。

これは限界を越えているな。とにかく引き取る事だけは固く決心した。

そして、今問題児がいる部屋の前まで来た

コンコン

ノックをしても返事がなかったが幼女が昼前まで寝てるなんて事がありえないのだ。きっと狸寝入りでもしているのだろうそう考えていた。

「どうも。返事が無かったから悪いが勝手にお邪魔させてもらっよ。

」

果たして、幼女はいた。

しかし某ハンニバル博士も真っ青なくらい拘束具でガチガチに押さ

え込まれており、口には猿ぐつわが噛まされており栄養は腕に繋がれてた点滴から送られている。

「さあてと、まずはお喋りの邪魔になる物を外そうか？」

「ふう・・・貴様等、よくも真祖の吸血鬼である私に対して舐めた真似をしてくれたな！」

今すぐ解放すれば半殺しで許してやらんこともないぞ？」

ほう！10歳そこそこのプレッシャーか

どうやら海で溺れていた影響が自分の事を吸血鬼と信じ込み、本来の自分を見失っている・・・二重人格のようだ。

「そうだね・・・話が終わるまでは手を出さないと約束するならこの拘束具を外そうかな？」

「いいだろう。」

私は誇り高い悪を自負している・・・私の命に誓って手は出さん。だから早く解放しろ・・・」

だが俺はあの初代クジンシーに常識を叩き込み、初代ボクオーン直伝の外交テクを学んだ男だ。

コレくらいの幼女相手にギブアップする事は無いし立ち直らせる自

信もある！

まずは敵対心をなくしてもらうに限る。  
ぶっちゃけ『スマイル作戦』だ

ほら、トレードでもスマイルだけは初期装備で、しかもタダでできるだろ？

「『生命、元気の水』」

「つな！？」

そのままサクサク拘束具を外してやる。

「俺の名はノエルだ

ところで何をそんなに怯えているんだ？もうメガロメセンブリアから海に投げ出されることも無い。  
それに、この場所なら安全は保証されているし職員達も少なくとも最初は味方だっただろうに・・・

いいかい？お嬢ちゃん。自分が思っている以上に世界は厳しいが同時に優しくもあるんだ」

この時にゲラゲラ笑う『Laugh』ではなくふわっと咲くような笑みがこぼれたようにする『スマイル』が大事だ。

「私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ

私はこれまでの300年間余りの生涯の中で何処に行っても酷い扱いを受けた!!

時には生きたまま火炙りにされたり口に出すのもおぞましい事だっ  
てあった・・・

何も知らん若造が知ったような口を利くなッツ!!」

俺の技に失敗はない筈だが、彼女はそっぽを向き聞いていたが体をプルプルと震わせると怒りで真っ赤になった顔で怒鳴り散らした。

どうやら相当重症のようだな・・・

思いの文を話してくれたから次は軽く頭を撫でながら話しをして安心感を出してもらおうかな？

ボクオーンからはそう教わった。

いざ、参る!!

「俺も300年生きてきて、それなりに良い所と悪い所も見てきた。今の君は春が訪れる直前にでる吹雪に晒されているようなものだ。

決して捨て鉢になつてはいけない！  
光に生きてみるよ。な？」

くうくう『俺つてば今イイ事言つた』なんてあらぬ方を向きながら  
しみじみ思つたらニヤけてきた。

ダメだ！我慢できない。右手は優しく撫でたまま彼女からは見えな  
いように慌てて顔を背けて左手で覆つた。

それでも、俺の体は良くも悪くも正直で笑いを堪えるが嗚咽は漏れ  
るわ、肩が震えてるわでとにかく必死。

これからは気を付けねば！

精進、精進。

「ま・・・だ・・・れ 黙れツツ！黙れエエエ！！

何が春だ！私の人生で春の時代は最初の十年余り！

いつまで耐えて、待ち続けると言つんだ！！

無い夢は語るなツツ！！

裏切られたら這い上がれないではないか・・・」

怒鳴り声に驚き振り向けば鼻水ダラダラで泣きながら喋り、口調こ  
そ大人びてるが誰が見てもまるっきり子供だ

メッキが剥がれつつあるな？

チャンス到来、攻めの手は緩めん！ここで畳みかけるように口撃する

「甘ったれるな！

何故希望を捨てずに生きてきたのに今ここで俺に頼らない！！

お前のしんどいのも苦しいのも全部ひっくるめて背負ってやる！

信用出来なくなったらかかってこい！それまでは黙って俺に付いて  
来い！！」

「のえるううううう」

エヴァはそのまま胸の中に飛び込み、いつまでも泣き続け仕舞いは緊張の糸が切れたのか寝てしまった。

仕方ない。今日はイスを並べた即席ベットで寝てこれからの事はまた明日にでも話すとしよう。



メガロメセンブリアの正義の魔法使い共に追い詰められ一か八か海に飛び込み漂着した大陸。

私は気付いたら知らない天井を見上げる形で寝台に転がされており、朦朧とする意識の中で人が集まってきたのは感じたが体言うことを聞かず深い眠りに落ちた。

次に気付いた時には周りは女、子供ばかりがいる屋敷だった。

さらには私を善人面をした人買いがひっきりなしに連れて行くこととするが力の限り暴れまわってどうにか屋敷に戻る。

イイザマだ！私を甘く見た報いだな。

しかし、早く抜け出さねば時間の問題かと考えていたが、屋敷の警護にとんでもない手練れが混じっていた。

不覚にも私は魔力封印が施された拘束具で自由を奪われ2ヶ月余り。後、半年もあれば脱出できるだろうと考えていたある日あの男が現れた。

「どうも。返事が無かったから悪いが勝手にお邪魔させてもらっよ。

」

ふざけた風を装っているが佇まいや足の運びで強者と解る  
まずは対話をしてから決めるようだ。

私にとっては好都合だがとんだ甘ちゃんだな！  
なんせ拘束具を外した上に回復までしてくれたのだから。

しかし、普通の人間には出せないだろう。日溜まりのような暖かさ。この世の負の暗闇を見続けてきたようなどこか陰のある微笑みだ…

「何を怯えているんだ？ 少なくとも最初は味方だっただろうに…  
いいかい？ お嬢ちゃん。自分が思っている以上に世界は厳しいが同時に優しくもあるんだ」

奴から投げかけられた言葉を思い返せばこの奴らはそうとも取れる行動ばかりだった。

だが甘いな。世の中そんなに甘くはない。

「私はこれまでの300年間余りの生涯の中で何処に行っても酷い扱いを受けた！！

時には生きたまま火炙りにされたり口に出すのもおぞましい事だった。あつた…

何も知らん若造が知ったような口を利くなッッ！！」

これが私の絶対不変の過去にして判断基準だったが、ノエルとかいう男が直後に喋った言葉で揺らぎ始めた

「俺も300年生きてきて、それなりに良い所と悪い所も見てきた。

今の君は春が訪れる直前にでる吹雪に晒されているようなものだ。  
決して捨て鉢になってはいけない！  
光に生きてみるよ。な？」

頭を撫でながらも自分の過去を思い出したのか、私から見えないうに慌てて後ろを向き、顔を覆いながら肩を震わせながら嗚咽を漏らす。

言葉通りコイツは全てを自分の糧にして光に向かって生きてきたのだらう

そう考えたら羨ましいような、自分が恥ずかしいような初めての感情が湧き上がりその全てを否定したいと思っていたら、無意識に泣き出しながら幼子のように怒鳴り散らしてしまう

「ま・・・だ・・・れ 黙れッッ！黙れエエエ！！  
何が春だ！私の人生で春の時代は最初の十年余り！  
いつまで耐えて、待ち続けろと言っんだ！！

無い夢は語るなッッ！！

それに・・・これ以上裏切られたら這い上がれないではないか・・・  
」

きつとこの時には薄々気づいていたのかもしれないが今までの私を護るために子供のような屁理屈をごねてしまった。

それも瞬時に今までのような幼子を諭す甘い口調では無い迷いを断

たせる強くハッキリとした言葉にトドメを刺されてしまった・・・

「甘ったれるな！

何故希望を捨てずに生きてきたのに今ここで俺に頼らない！！

お前のしんどいのも苦しいのも全部ひっくるめて背負ってやる！

信用出来なくなったらかかってこい！それまでは黙って俺に付いて来い！！」

もうダメだった・・・

今まで、知らず知らずに無理をしてきたものが涙や鼻水となって溢れてきて崩れたプライドの代わりにコイツが私のココロノスキマに入り込む。

これだけ言ってるんだ。

久しぶりに荷物を下ろして他人に持ってもらうのもいいか・・・

とにかく今は何百年振りの涙が止まらない。

「のえるうううううう」

ここまで泣かされた恥ずかしさと意匠返しにコイツの懐に潜り込んで着ている一張羅を涙と鼻水でべたべたに汚す気で泣いていたらい

つの間にか寝ていたらしい。

傍にはイスを並べて作られたしょぼいベットで寝るノエルがいた

あれだけ耐えて待ち焦がれた理解者、パートナーが現れたのかもし  
れんな。

しばらくの間はコイツにくっついて『光』とやらに生きてみよう！  
そう決心し、まだ見ぬ明日に思いを馳せてベットに潜り込んだ。

S a ・ G a 2 6 (後書き)

なんか、ごり押しだったね〜

ああ、頭の中に映像が流れているのに文字で表すスキルが難しい。

S a ・ G a 2 7 (前書き)

エヴァンジェリンさんがスタジオ入りしました  
ボケ役、凜々しい役、それに何でもいけるからこの子は動かさず  
くていいね！

「……と言うわけで今の私になり、そこから逃げ続ける生活が始まった。」

どうもグーテンターク！  
ノエルです。

昨日ダークサイド幼女を落とした事を報告、その際『とうとう施設からストレスの原因が消える』と全職員が諸手を挙げて喜んでいた中、元弟子の女性が静かに涙を流していたのが印象的だった。

まあ、ここまで引つ掻き回す幼女……なんていうかズバリ恐ろしいでしょう！

んで、仕方ないから旅館に連れて行き部屋でこれからの生活について話そうとしたら幼女……エヴァから今までの人生を教えてもらった。

今こじ

「なあ、吸血鬼って言うても施設で拘束されていた間は血が飲めな



かっただろ？  
どうしてなんだ？」

俺が引き取った子が巷を騒がす『闇の福音』なわけが無い  
うん、もし仮にエヴァが吸血鬼だとしても吸血鬼という妄想をして  
いる幼女だよ〜

ただ、設定はどうなってるのか詳しく聞いておこうか・・・  
とにかく血を吸わなくても生きていけるのが問題だ。道端でいき  
なり凶暴化して他人を襲うような設定、思い込みや二重人格・・・  
ついでにちょっととした疑問は早めに消すに限る。

「血か・・・そうだな、あれば困らんのは確かだ。  
しかし、私は女や子供は無闇に襲わん。誇りある悪を自負している  
からな！　しかも、真祖である私は既に血の葛藤を克服したやつ  
た！！」

『どうだ？驚いたか？』なんて言葉が伝わってくるほどのどや顔、  
腰に手を当てて胸を張る様は正真正銘　よう　よ　だった。

何にしてもこれで解ったことがある！

やはり妄想！これまでの人生で辛いことがあったから為に無意識に  
働いた防衛機能だ！  
間違いない。

あの馬鹿みたいに強い力も初代ロックブーケが産まれた直後からパワフルだったようにこの子も神からのギフトがあった。

実際、ダンダーグ夫婦だからロックブーケは健やかに育つことができた。しかし、両親はこの子の力を持て余すようになり海で始末する。

奇跡的に一命に取り留めたが見知らぬ土地、人間とストレスが止めとなりこうなつたのだらう。

「そうなのか・・・なら心配ないな。俺の家兼道場に来ても大丈夫だ。それに、このバレンヌ帝国は向こうの大陸によくある紛争も無いし今でこそ真人間だがすねに傷を持った人間も多い。安心して生活したらいい。」

「すまん・・・何から何まで世話になる」

今は俺だけしかいないが、道場に連れて行き近所の人や弟子達に紹介すれば可愛がられて快方に向かうだろう。

とにかく、エヴァを愛してくれる環境が必要だ

「何他人行儀な言葉遣ってんだ。

もうエヴァは家族になつたんだぞ？肩から力を抜いてもっと気楽にしてりゃあいいんだよ！」

そのまま、エヴァの頭をわしわしと撫でるが嫌がる素振りはない。  
逆に耳まで真っ赤にしたまま撫で回される様は借りてきた猫が懐いたようだった。

:

:

:

:

ワグナスは残るそうで、エヴァとは顔合わせだけして俺達はアヴァロンに帰ってきた

そして今

「ちよっ、ちよっと待てノエル!!」

いきなりこんな場所は駄目だ・・恥ずかしいから・・・早く道場に行こう? な?」

腕を引つ張つてこの場所から離れようとするエヴァだが

「だが断る!!」

「何故だ!?!」

「俺は人を育てるのが好きだが、駄々っ子が嫌がることをやらせてでも人として成長させるのが大好きなんだ！  
というわけで・・・おい大将、久しぶりに大将の旨いメシが食いたくなつたよ」

暖簾をくぐつていざ店内へ！という所でさっきまであれだけ騒いでいたエヴァがいないのに気づいた。

エヴァは人混みに紛れて逃げ出した。

しかし、ノエルにまわりこまれた！

「嫌だ、嫌だ、いやーだー！  
お家帰る！離してー！誰か助けてー！」

エヴァは駄々をこね始めた。

自称300年のエターナルロリータも所詮はエターナルロリータだった・・・メッキが剥がれれば年相応・・・いや、3歳児レベルの酷さでじたばたするから町中の視線を独占してしまった。

幸い、道場や昔からの信用で変態の汚名は免れたが堪らなく恥ずかしかつたのは言うまでもない。

「旦那、何やってんですかい！ウチは変態さんお断りだよ！」

表の騒ぎは店の中まで伝わっており、他の客は俺とエヴァを見てはニヤニヤしていたが大将の洒落で爆笑が巻き起こった。

「大将まで一見さんお断りみたいに言ってくれるなよ・・・もうカウンター席に座るのはダメかも解らんね。

俺はA定食で

金が出すんだからエヴァも好きなモン頼めよ」

「私も同じので」

最初はそんな感じで大人しかったが途中からは目論見通り、大将や周りの客にいじられて『ノエルさんがまた拾った子供』と認知してもらえた。

けどな、周りの人に餌付けされんなよ。

その支払いの一部も出さなきゃならんだろうが！

こうしてエヴァの大衆食堂デビューは周りの客を味方につけて俺の懐に大打撃を与えるというTKO勝ちという鮮烈な結果に終わった。

嗚呼、馬鹿正直だったが謙虚という概念も持ち合わせたレアキャラ『スービエ』のことを無性に懐かしく思いながら25000Dpを支払った。

：  
：  
：  
：  
「ノエル、ここが私の部屋か？どうみても物置じゃないか！」

「うるっせえな。仕方ねえだろうが。ここしか空いてる部屋が無いんだよ！  
それとも1人で寝れないのか？」

悔しそうな顔をするエヴァ  
しかし、この言葉を言われては『ぐう』の音もでまい。  
この仕打ちは昼間の礼だ。遠慮はしなくてもいいんだぜ？

「違う・・・だが家族じゃないか。  
同じ部屋で寝るものだろうが！」

ほほう！そう来たか。だが、その道はスービエが通った道だ。

ちゃんと行き止まりは用意してある

「なんだ、一緒に寝たいのか！」

ならそう言えば考えてやらん事もないがなあ！」

どうする？もじもじしても変わらんよ？

お前がもっているライフカードは3つ

諦めて物置で寝る

プライドを捨てて頼み込む。

野宿

どれを選んでも、誇りある悪（笑）になる事は避けられん！

このまま、吸血鬼の人格にはじわじわ苦しんでもらい主人格に溶け込んでもらおう。

「…しよ…ねい」

「なにに？聞こえんなあ！」

「一緒に寝たいんだ！」

「フハハハハ！」

そこまで言われては仕方あるまい……正直は美德だぞオ？

そんじゃま、早く寝るぞ。廊下につっ立ってたらめちやくちや寒くて体が冷えただろ？」

「この人でなし！変態、馬鹿やろう、貧乏性の大飯食らい！」

「・・・・・・・・」

結局、一緒の部屋では寝たが隣り合わせでなく間隔を取ったことにエヴァがまた文句を言ってきたが寝た



S a ・ G a 2 7 (後書き)

ウチのエヴァさんはこんな感じでいきますね

凛々しいエヴァ様が見たい人は本当ごめんね？

S a ・ G a 2 8 (前書き)

作者お得意の超展開

さあ、地雷原を走り抜けるのです

エヴァが家に来てから早くも一年……また今年も冬が来た

いろいろあつたよ・・・遊びに来たクジンシーとスービエからマジ物の吸血鬼だと知らされて驚いたり、ロックブーケがきた時はポージングを見せ合い、ダンダーグ壊れた木人の代わりに連れて行くとうとするのたまたま来ていたワグナスが魔法で吹き飛ばして止めたりとにかく酷かった

まあ、社交的なクジンシーやスービエ、には懐き、大人の魅力を持つワグナスとロックブーケはエヴァからしたら師匠らしいがダンダーグはいろんな意味でトラウマになってしまったらしい

「セブテンデキム・スビゲチキスーレス氷の精霊 17頭

集い来りて（コエウンテース） 敵を切り裂け（イニミクム・コンキダント）

魔法の射手 サキタ・マギセリエス 連弾・氷の183矢！！！！グラキアーリス

エヴァが今だせる本気の魔法の矢が怒涛の勢いで襲いかかり、それを目眩ましに接近して来るのを感じる。

「はいはい、ウィンドダート、ウィンドカッター」

急がず慌てずウィンドダートで魔法の矢を打ち消し、弾幕の奥から

現れたエヴァに弱めのウィンドカッターを当てて転ばせる。

「どうして適当に撃ってるだけのノエルに負けるんだ！」

うーん：加減を間違えて右足を吹き飛ばしてしまったが瞬時に再生を果たし悔しそうに地団駄を踏むエヴァ

こつという時は本当に真祖の吸血鬼で不老不死なんだなあ実感する。

俺も似たようなもんだが年を取らないだけでリヴァイヴァがなければデスが待つ冥府へ一直線だ

同類合い憐れむってわけじゃないが同級生なんだ。これからもお互い末永く仲良くしていこうと思う。

そんじゃま今回の評定を伝えますか

「従来型の魔法じゃ燃費の向上はできてもすぐに頭打ちになるし産まれた瞬間から威力の限界が決まっているからS a・G aの魔法に変えろって何回も言っただろうが・・・

人間、古い価値観の上に新しい価値観を取り入れんと前に進めんぞ  
」？」

「ノエル達を使う魔法はなかなか使い勝手が良いのは分かっているだ。  
だ。」

それでも、これまで助けてくれた馴染みの魔法なんだ・・・」

また今回はへこんだなあ。へたへたのくたんくたんでいつもの憎ま

れ口を叩く気力も無いくらい落ち込んでるじゃん  
ここらで良い面を言って持ち上げるかな・・

「ただ、今回は魔法の矢を目眩ましにして近づき、接近戦に持ち込もうと考えたんだろ？」

最小の労力で最大の効果が出せるイイ戦略だった！

後は、もう一工夫あれば歴戦の猛者にも通用するようになると思うぞ？」

実際300年で培った知識、経験と肉体年齢13歳特有の学習能力が合わさりエヴァは半端じゃないスピードで成長している。

道場デビュー3日で『バリートウッド』なら上位に食い込み、交流試合ではダンダーグから初めてのエキシビジョンを申し込まれ流石に格の違いから瞬殺されたがそれがキツカケとなり目をつけられた程だ！

「えへへ。もっと誉めていいんだぞ？」

それに開発中の新しい魔法とか秘密兵器も用意してあるから次は地面に這い蹲らせてやるから楽しみにしてろ！」

泣いたカラスがもう笑った。

エヴァはこうやってすぐ次に向かって突っ走れる所が最高の持ち味かもしれない

これからも順調に伸びていけば七英雄が八英雄になる日が来るかもしれない。

「今日の稽古はここらで切り上げぞ。」

「なんでだ！？明日が休日ならもっと付き合ってくれてただろ？」

そんながつかり感を全面に出してアピールしても無駄。  
いつもの食べ歩きとは違う公式の用事がある。

「明日は朝からボクオーンが会いに来てくれと先月から抑えられてたんだ。分身を置いてくから、そいつ等を相手に稽古してくれ。」

「ふむ・・・ボクオーンというと私が会ったことのない最後の1人か。」

よし！私も暇つぶしについて行くぞ！！  
ノエルが何と言おうが私はついて行くからな？」

話を聞いた途端、目を輝かせ勝手にスイッチが入ったエヴァ。こうなってしまうたら好きにさせた方が被害が少ないのはこの一年で理解した。

もう明日は激流に身を任せてしまおう・・・（・・・）

：

：

：

：  
やってきたのは魔導研究所の最奥にある所長室兼ボクオーンの書斎  
茶菓子を用意されたテーブルに2脚の椅子。  
遠慮せず座らせてもらおうとする。

「ノエル、よく来てくれました。  
ということは隣の娘さんが最近よく噂を聞く子ですか。もしそうなら後で個人的な話がしたいのでお時間頂けますか？」

おいおい、いつもの調子で揺り椅子に座りながらさらっと言ったが  
エヴァがドン引きしてたぞ・・・ボクオーン、お前ってこんな奴だったのか？

正直、ブラックジョークだと信じたい俺がいる。

「お前さあ、初対面で300歳のロリータ相手にいきなり口説くなよ……」

ところで用件はなんだ？いつも通り厄介事なんだろう？ドンと来い！  
！サクツと片付けてやるから！」

椅子に揺られて普段は研究員や弟子達などの大多数の人間と接する  
際に漂わせている飄々したボクオーンは消え、極々親しい一部の者  
にだけに見せる触れた物全てを切り裂くカミソリの刃のような鋭い  
オーラが書斎中を満たし本来のボクオーンの姿が現れた。

これには同席を許されたエヴァもあまりの変わりようで啞然とした  
まま言葉も無いらしく静かにしていた。

「今日呼んだのは世界中で恐ろしいことが起こっているからです。まずはこのレポートをどうぞ・・・」

「ふむ・・・これはわかりやすいな。棒グラフの下に先住民族の名前があり全てがここ2年で減少。」

「最悪の物はゼロか・・・しかし、この速度はあまりに不自然だ。」

「その通りです。」

世界中にはスービエのような珍しいだけでなく人智の及ばぬ固有能力を持った先住民・・・いわゆる亜人が至る所で生きています。」

「そうだな...今でこそ平和に生きてるが大昔のモール族は大陸でかなり珍しく便利な奴隷だと根こそぎ攫われていた時期もあったからな・・・」

「そして国交は途絶えてしまいましたが昔ヘラス帝国に行きましたね・・・その時はアヴァロンに帰る前に友好関係を築いたアリアドネーへと向かいました。」

初代皇帝、初代ボクオーン、そしてノエル。あなた達が建国の際に掲げた正義の魔法使いの解体ともうひとつの理想・・・・奴隷制度の撲滅と解放！

まずはこれを叶えるため永世中立国のアリアドネーに近づき情報入手、人攫いから狙われる危険度の高い民族から接触し、極々少数はバレンヌ帝国へ移住しました。

そして外交官を駐在させ説得をしているの民族はまだまだ多かつた



のですが先日アリアドネーからレポートが届きました。」

伝承法により受け継がれた記憶を懐かしむように、目を瞑りながらゆったりとした調子だったが終わり際はかなりシヨックを受けた様子で話していた。

それも当然か・・・当代のボクオーンは義理堅く静かな熱血漢だ。今でこの調子なのだ。最初、報告を受けた時の様子は更に酷かっただろう。

「それがこの内容か・・・  
もしや帝国や連合がバレンヌの動きに気付き行動を起こしたか？  
それとももつと別の要因・・・俺がケルベラス渓谷で会った奴の仲間がいた...か？」

「まだ確証はありません。しかし、諜報員を両国に潜らせましたが奴隷が増えた形跡は無し。  
ただ、一部で気になる情報と現段階で協力者と名乗る人物を得ました。」

ここでボクオーンは一度話を止め書斎には年代物の揺り椅子が軋みながら動く音だけが静かに響いた。  
初代から受け継がれた懐かしい癖だがこれは相手に心の準備を促すための『間』であることはよく理解している。

そつとエヴァを見れば緊張した面持ちでボクオーンの続きを待っており心の準備はできたようだ。

それを確認した俺はカップに注がれた紅茶を一口飲み、一度喉を潤してから聞いた。

「ここからが話の核心部分だろ？何が来ても今更驚かん。続けてくれ」

ボクオーンは揺り椅子の動きをまたピタリと止めて静かに語り出した。

「気になる情報というのは、先住民が暮らす集落が見える町の人間の多くが言った言葉・・・空を見上げたら一面真っ黒で最初は鳥かと思っていたが人に翼が生えた生き物が先住民が暮らす集落へ飛んでいったということです。

それも、どこの町や村、砦にいる人間の証言で必ずこの類のものがありました。

「ボクオーン、亜人という線も捨てきれんが・・・本命は古くから伝わる魔法により召喚された悪魔ではないか？」

あまりの唐突さに声を荒げはしなかったが話を中断させてでも確認をとってしまった

「絶対とは言えませでしたが、十中八九そうだと当たりを着けていました。」

そして、最後に言う協力者ですが・・・」

「ふう、此処に来るまであまりに話が長かったな・・・これ以上遅かったら流石に帰ろうかとさえ思ったぞ？」

不意に声と気配がした方を見る。

そこは書斎の片隅

ボクオーンが取り組んでいる書きかけの学術論文や設計図が無造作に並べられている机の前の空間が揺らめく。

その揺らめきから全身ローブにフードで顔を隠した人影が1ついつでも剣が抜けるように手を掛け様子を見るが、亜人が人間か以前にその声もかなり中性的で性別さえも判断できない。

「・・・ボクオーン。現段階での協力者というのはこの方か？」

ボクオーンに何うと僅かに顔を縦に動かし肯定の意思を見せた。

更にエヴァを見ればどういいうわけか下を向き震えながらも何かに耐えるようにぎゅっと握り締めた拳を別の手で上から抑えていた。

「そっだ……しかしいつまでも『現段階での協力者』というのはスマートでは無いな。」

とにかく私のことはこう呼んでくれればいい。」

「ライフメーカー……始まりの魔法使いだ」

S a ・ G a 2 8 ( 後書き )

エヴァはどうなる？

ノエルはどうなる？

魔法世界は？

心配するな！行けば分かるさ！1、2、3・・・ダア――――！

S a ・ G a 2 9 (前書き)

実はここまでがプロローグみたいなモンなんです。

これからも待ってる人のため頑張りまゝす

ライフメーカーか・・・名を教える気もさらさら無いらしいな？まあ、この際それは良いでしょうか。

だが、これから協力者、パートナーになる筈の相手に顔も見せる気がないときた・・・今までこの部屋に居たにも関わらずタイミングを見計らっていた謎の行動に不躰な態度も信用できん！

ボクオーン、悪いがいくらお前が紹介した人間だろうが信用できんな！

事が済めばこのバレン又帝国に災いを運ぶかもしれん。

ただ、『今は奇抜な登場の仕方をしたただけだ』としらを切られたらそれでオシマイだ！

取り立てて問題行動に出たわけでないから引き下がるが依然、手は剣に掛けたままでいつでも貴様を叩き斬ることができるのだとライフメーカーに向けてメッセージを送る。

最悪、この世から退場してもらおう！

本気のプレッシャーをライフメーカーに浴びせる。

並みの弟子なら泡を吹いて卒倒、これを受けて動けるのは七英雄クラスだけだ。しかし、ライフメーカーは俺のプレッシャーを受けても『どこ吹く風』という様子で悠々と近づくと話しかけてきた。

「ふむ、常人ならば私を初めて見た瞬間は萎縮してしまってるで話にならないんだよ。」

ほら、今でこそ澄ました顔をしているボクオーン君も初対面の時は萎縮してたし、その娘の状態がまさにそうさ！

それに比べて君は素晴らしいよ！

部屋に現れた時からすぐ剣を抜ける体勢に移り、私の一挙手一投足を見逃さず殺気を浴びせる胆力、これがバレン又帝国が誇る最強の武人……やはりボクオーン君に頼んで正解だったよ。」

「ノエル、あなたを試すような真似をしてみません。しかしながら、これはライフメーカーから出された条件……彼に萎縮せず動くことができる強者と会わせるとの事でした。どうか今回の無礼を許してください。」

酷いな…

あれだけ真剣にプレッシャーをかけたのはダンダーグでもそうは無かった強さだった。効果が無いことからコイツはかなりの強者だと分かった。

とにかく敵対関係になるのは避けたいし、癩に障るがそんな事情があったならいつまでも剣の柄に手を掛けて警戒態勢を取るのも無礼だな……

「それは失礼しました。」

ライフメーカー殿も人が悪いですな…もう少しで頭の天辺から真つ二つに両断するところでした。」

「ハハ！それは面白いジョークだね！

あと無理して敬語なんか使わなくていいよ。私はどこぞの大国が仕向けた大使でも無ければ、ここも無理を言ってセッティングしても



らった私的な場だしね。無礼講さ！」

「ノエル、これは本当です。

ヘラス帝国を始めメガロメセンブリアにも探りを入れましたがこれほどの魔力を持った人間は裏にもいませんでした。

それに、無礼講の部分も社交辞令などではなく文字通りの意味ですから安心して力を抜いてください。」

へえ、そりゃ嬉しいな。俺も肩肘張って力チ力チの敬語を遣うのは慣れてない助かる。

さて、回りくどいのは性じゃない！

何より聞きたい事がこちらには山ほどあるんだ。

「はっきり言うがボクオーンからは現段階での協力者と聞いたけどういうことだ？

理由を聞きたい。

そして無礼講と言いながらライフメーカーという明らかな偽名と顔を覆っているフードを外さないのは何故だ？顔に傷を負っているならそれでも良いが……」

「ああ！これの事かい？実は私にとって顔や名前……厳密に言うならば肉体は大した意味を持たないんだよ。

定期的に変わるようになってから次回会った時に無用な混乱を招くと思ったけど裏目に出たね。まずは要望通りフードを脱ぐよ。」

ライフメーカーはそれまで顔を覆い隠していたフードをゆっくりと脱ぎ去り素顔を晒した。

意外にも人に見せられないような化け物顔でなく世間的には紅顔の美男子とでも言われるだろう品の良い顔つきであり、俺の正直な感想に『ボクオーンのような優男』だ。

「驚いたみたいだね。次は『現段階での協力者』という意味だけで落ち着いて聞いて欲しい。実は今回先住民達を消して回っているのは私とその部下だ。」

ライフメーカーが口にした言葉にエヴァや俺は勿論だが、ボクオーンも初耳らしく同様を隠せない。

もしかしてこのライフメーカーと名乗る男を今ここで始末してしまえば全ての問題が片付くのではないか？

全員がそう思ったのか部屋の空気が一気に固まる。

「なら、今この場でお前を始末したら丸く収まるな？」

試しに首だけで空を飛んでみるか？今なら痛みを感じないように手伝ってやるぞ？」

「いいかい？少しは落ち着きなよ。これにはちゃんと事情がある。

事の発端は20年前を境に特殊な能力を持った部族が忽然と消える事件が続発した。

おかしいと思った私は直属の部下を召集し問いたしたが皆の答えは『NO』だった。

そこで調べて回ったらある集団が各地の村人を手当たり次第に『吸収』しているのが分かった。幸い撃退はできたが次回もうまくいく確証は無い。

だから本来ならもつと後に行く筈だった最終手段を使い彼等を襲撃者から護るため魂は保管してあるが存在は消させてもらっている。

そして、その時に襲撃者達が使っていた魔法がバレン又帝国特有の物だったから君達の監視と襲撃者達の撃退を兼ねた同盟を組もうと考えたから『现阶段での協力者』と言ったのさ。

無論、同盟を続ける限りは後ろから魔法を撃つなんて事はしないから安心してくれ」

吸収……そしてS a・G aの魔法か。

その言葉を聞きケルベラス渓谷で遭遇した黒ローブと奴が死に際の捨て台詞を思い出し俺の中で一本の線が繋がった。

あの時は確かに解決はしたが確証も無く相手が単独犯なのか、組織に所属する者で階級も分からず終いになってしまった。そのためボクオーンや皇帝達にも不要な混乱を避けるため敢えて言わなかった『ある疑問』が有ったが今こそそれを打ち明けるタイミングか……

「実は今まで確証が無かったから黙っていた事がある。もし、俺の

予想が正しければ俺は襲撃者が何者でどれほど危険かを知っている  
！！

「ことは別の次元に存在する世界が崩壊する際に逃げ延びてきた『  
古代人』かもしれん！」

「ノエル！それは本当ですか！？もしそうならあなたは何故そのよ  
うな情報を知ってるのです！

今まで黙っていたことはあなたにとっても大きな悩みだったろうに  
どうして話してくれなかったのですか！？」

「ボクオーン、少し落ち着け。私はお前とは初対面だが今取り乱し  
ても事態は動かん。

それに、お前が言った通りノエルも悩んだ末の選択だったのだ！  
仲間なら力になってやれ！！」

それまで紅茶を飲みながら、話し合いには参加せず沈黙を貫き通し  
てきたエヴァが初めて言葉を発した。

その言葉にボクオーンも自分の状態に気づいて落ち着くために紅茶  
を一口飲み、俺はその言葉に大分気が楽になり救われた気分になる。

「すまん！後日必ず話すから今は何も言わず聞いてくれ！！俺が授

けた魔法の大部分は奴らの開発した物がベースになっている。

加えて、『ある技法』を使う者の一番恐ろしいところは活動していた体……いや、端末と呼んだ方が正しいな。

その端末が万一破損してもある場所にオリジナルの情報が集まった本体が生きてる限り時間経過と共に強力になり復活、吸収した相手の能力の一部を取り込む力を持っている。」

「そんな相手を撃退したとはね……しかし、その時に殺しきることができなかつたのが悔しいな。バグ級の強さを持った人間が1人いたらしいんだ。」

ライフメーカーからまた気になるワードが飛び出してきた

「ライフメーカー、今『バグ級』と言ったがその言葉はどういう意味だ？」

「簡単な話しさ。私の『ライフメーカー』という由縁はこの世界の生きとして生きる生物全ての強さを設定して創造したからだ。

そして、たまに現れる成長限界を超えた生物のことをバグと名付け一括りにしたのさ。私なら仕留められただろうが相手をしたのは部下だからね……それで取り逃してしまったんだよ。」

「そうでしたか……ノエル、きっと私達は今同じことを考えていますか？」

「分からん。ただ、考えていることはある。」

メガロ、ヘラス、バレンヌの三竦み状態を解消し世界を支配下に置き先住民達を直接護衛する……それとも、このバレンヌ帝国に来てもらえるように力尽くで魔法球に一度非難してもらい、その間に災いの元を絶つの2つだな」

実際、戦争をしても1対1ならバレンヌ帝国が負ける事はない！  
しかし、北と南の2方向から物量戦を仕掛けられたら厳しいかもしれん。  
ボクオーンのことだ、魔法球による救助を選ぶだろう！

「そうですね……今は魔法球の中に非難して頂くのが一番の安全策です  
すね……」

ライフメーカー、今は皇帝からの承諾が無いので効果はありませんが、バレンヌ帝国はあなた達と共に襲撃者達と戦うためにも私は働きかけます。ですので、先住民達を消すのは暫くは控えてください」

「お前達の言い分は良く分かった。そして今ここに同盟は成った！  
名は『完全なる世界』としようか……」

現段階で判明している襲撃者の拠点と疑わしいポイントはメガロメセンブリーナ連合が支配する大陸を北上した所に聳える『龍山山脈』だ。

では私は状態の収集と撃退をするため世界を回るが新しい情報を手に入れたら連絡しよう。

武運を祈る……さらばだ。」

ライフメーカーは現れた時と同じように部屋の片隅に行き周囲の空間が歪んだと思っただけで消えていた。

「さてボクオーン、俺達が足元を固めていた間に世界にはとんでもない化け物達が闊歩するようになっていたな……」

俺の道場は数多くの師範クラスの間がこの300年で随分増えたからいつそのこと補助に分身達を置いて世界を回ろうと思うがどうだ？」

「んなつ！？ノエル、それは本気で言っているのか？」

私はまだお前に教えてもらいたいことがたくさんあるんだぞ！！」

エヴァがたまらず会話に割り込んできた。

ボクオーンを見るが好きなようにしろと穏やかな顔をしているなら俺の行く道は決まったな……」

「エヴァ、俺が行こうとしている道は命の危険がつきまとうものだ。ただし、お前はこの一年で誰もが驚くほど強くなったんだ。俺の道場を護る師範の1人として生きるのもありなんだぞ？」

それでも付いてくるか？」

俺はエヴァの一生のうちにある可能性と旅に付いてくる場合のリスクを考えてからエヴァ自身の心で後悔の無い道を選んで欲しいと思っ  
っている。

しかし、エヴァは考えるどころか即答してきた。

「私の両親は吸血鬼になってからは会うことは叶わず、異端の一族として一切切処刑され死に別れた……そして、去年の今頃300年越してノエル！貴様は私と家族の契りを結んだのだ！」

私は二度と家族と死に別れるのは勿論、離れる気はさらさら無い！！嫌だと言ってもついて行くからな……」

そして俺の腰に抱きつき顔まで押し付けて『絶対に離れない』と体全体を使って意思表示をするエヴァ。

ここまで言われては置いて行っっては男が廃るな……何よりもその選択には一片の悔いも感じられなかったからな……

俺はボクオーンにアイコンタクトを送り、そつとエヴァを押し戻す

「なら、何処までも愛想が尽きるまで俺について来い！」

俺は旅支度と道場の引き継ぎと残すべきものを選別しなければならん。

エヴァにはボクオーンが話したい事があるようだからじっくり話し合え……きつと役に立つことが聞けるだろうからな！」



「分かった。だが1人で行くなよ！  
約束だからな！！」

「ノエル、寂しくなりますね……ですが、あなたが留守の間は私達  
がこのバレンヌ帝国を魔の手から護ってみせます！  
どうか安心して勤めを果たしてください。」

ガツチリと握手を交わして俺は書斎から退室しそのまま真っ直ぐ思  
い出が詰まった道場へ歩みを進めた。

今は、影すら掴めていないが必ず追いつめると固く決意して

研究所から帰って真つ先に安全な順で魔法球や各種備品の目録を書きあげた。

そして、各地に散らばる七英雄達を召集し事情を説明。

今、世界中で起きてる騒動とまだ見ぬ元凶の脅威……特にケルベラス渓谷にまで侵入されていた事についても包み隠さず伝えた。

「本当はお前達だけに任せず俺もバレンヌを護りたい！

だからといって護りに専念し、奴らを放っておけば必ずバレンヌは荒らされる。だから誰かが打って出なければならん。

勝手を言っただけで悪いがバレンヌを頼む！」

「……ノエル

流石にお前も300年で惚けたか？バレンヌ帝国には俺達がいる。

さっさと行っつて片付けて来い。」

「そうですね、師匠が行ってる間は私達が頑張ります！けど、お土産があればもっと頑張りますよ？」

「私は個人的な恩もあるからそいつ等が来ても全力でぶっ飛ばしてやるじゃないカ！」

ノエルは自分のやるべき事に全力を出せばいいでゲソー!!」

「……私とロックブーケは同意見です。

きつとあなたは破るでしょうがこれだけは言わせてもらいます!

皆、あなたの身を案じてます。無茶だけはしないでください!分かりましたか?」

そうだったな……スービエを除くコイツ等は初代からの付き合いだが決まってこういう奴らだった。

いつもそれとなく手助けしてくれる。

今回も世界レベルの騒動だろうと動じない。

俺は幸せ者だな……こうなれば意地でも守り抜く!

「お前達……バレンヌの仲間は任せた!

元凶は必ず討ち果たしてくる!それまで待つてくれ。」

ただ、ボクオーンについては気になる事があるが奴が打ち明けるまで待つしかあるまい。

:

:

:

:

「ねえダンダーグ、あの様子だとボクオーンはあの事を打ち明けなかつたみたいね……  
きつと、最後の機会になるのに彼は良いのかしら。」

「まあ、抜けた所もあるがノエルほどの男が気付かん訳がない。

それにボクオーンねえ……俺は初めて会った時からそうだが人を見定めるような目つき、態度、言葉遣いが気に入らなかつた。  
しかし、男が考えに考え抜いた末の決断だ…無碍にはできんよ。」

「ん？何の話しをしてるでゲソ？  
話の流れから良い話しじゃないのは分かつたけど……」

「そうですよ！

私達もボクオーンさんと仲間なんです！  
教えていただけませんか？」

スービエ、クジンシーちゃんの2人は知らされなかつたようね。  
ここまできたら話さない訳にはいかないわね……  
そして、私が語ろうとした時ロックブーケが引き止めた

「ワグナス、ボクオーンの所に通つた私の口から語つた方がより分かりやすいかもしれない。

ここは私に任せてくれ……では、私が初めてボクオーンに呼ばれた

ところから話そうか……

Side エヴァ

「で、この密室で2人きり…私も馬鹿じゃない。今からどんな愉快な話を聞かせてくれるんだ？」

「そうですね、このバレンヌ帝国の未来についてですよ。単刀直入に言いますよ。」

私の後継者、次代のボクオーンになる気はありませんか？」

「ハア？」

貴様、さっきあの人外が振りまいた殺気の余波を受けて頭がいかれたか？真祖の吸血鬼が影の宰相を務める国など長続きしない！今までノエルや代々の英傑が積み上げた物を壊すつもりか！！  
恥を知れッッ」

私は真祖の吸血鬼だ

ノエルが受け入れ匿ってくれたからこの国で穏やかな生活が送れたし、この国の歴史もある程度は理解しているつもりだ！

あらゆる人間を受け入れ奴隷の身分にある者がいないのはこの魔法世界と、現実世界を探してもバレンヌ帝国とアリアドネーくらいだ。それを知るからこそ、より一層この国が尊い物に見えてならん。私のような者からしたら、理想郷：失われた筈の光だ

それを無に帰すかもしれない軽率な行動を考えついたこの男には軽蔑を超えて憎悪を抱かずにはいられない！

「まあまあ、話は最後まで聞いてください。

あなたが開発中の魔法人形：私の全てをコピーし封印した人形を政治に使い、ノエルでさえ捕らわれている死の運命さえ超越したあなたには私の武の後継者になっていただきたいのです！！」

ボクオーンはそんな飛び抜けた考えをしていたのか……

確かに『吸血鬼が政治を牛耳っている』と他国から因縁をつけられる恐れは減るが、それでも幾つかの問題は残る。

「私の考えている魔法人形は未来永劫、動き続ける訳ではない。大體その時、貴様はどうするのだ？一巻の終わりではないか。そして、伝承法も私の代で途切れてしまっただろうが！」

私の反論も想定内だったのかニコニコと微笑みを浮かべながらこちらを見つめるボクオーン。

この300年でも見たことの無い人種に出会い、背筋に怖気が走った。

それにこの胡散臭さと変態臭溢れる笑顔も信用できん

「実際にコピーは稼働中です。

これは初代ボクオーン様が考えた発想であり、肉体が消滅していても精神を封印したコア代わりの魔法球が残っていれば復活できます。

」

「なら、どうして武の後継者が真祖の私なのだ。

このバレンヌには強者がごろごろいるだろうが」 「それですよ！

このバレンヌ帝国は昔から『ボクオーン』とノエルに細事から軍事、政治まで多くを手伝わせてきました。しかし、ノエルと違って皆が皆動き回れる訳ではありません。

ここらで『ボクオーン』は政治か研究をする文のボクオーン、武のボクオーンと2つに分けるのです。その成長速度があればすぐに私を超えられます。

そして、今あなたに掛かっている賞金は贖者を作り、各国の要人も呼んでケルベラス渓谷で始末する所を見せれば黙るでしょう。

これからは幻術でも使いなさい。」

「クズが……」

いいだろう！私も不都合はあるがどうせノエルについて行くのだ。  
幻術は使うつつもりだったしな。

それに、手っ取り早く知識と強さが手にはいるのは魅力的だ。  
貴様の好きにしろ！

私にも旅支度があるからこれで帰るぞ。」

「あゝそうそう、余計な事はしなくても良いですからね？」

「…フン！」

この変態は嫌いだがノエルとこの国は好きだ。

役に立てるなら、コイツの手のひらで踊るのも構わん。

何より、あのライフメーカーとかいう男に怯んでしまうような力では肉の壁にしかねんからな……

：  
：  
：  
：  
：  
：  
「ふう、それにしても危なかったですね。  
あと少し粘られたら私の秘密が明るみになるところでしたね……ボ  
クオーン？」



エヴァが退室した後、入れ違いに入ってきた部下……いや、私のコピー。

「本当ですよ。おかげでノエルにこんな情けない姿を見せずに済みました。

いや、私も焼きが回りましたか？」

「そうですね、末期だから仕方ないとはいえ私が部屋に入って暫くしたら急に吐血したんだ。

それよりもイクシールはとんだ不良品でしたね。これならロツクブーケが掛けてくれた『エリクサー』の方が病気の進行を遅らせましたからよほど優秀ですよ。……歴代のボクオーン様は皆、受け継いだ瞬間から死ぬ瞬間までボクオーンでした

あなたは最期まで自分の好きな事をして死ねる……幸せ者ですよ？シゲン？」

自分と語り合う

これが本当の自分語りでしょうか？

まあ我ながら伝承法の裏をかいたと思います。

これで、コピーが死ぬ時も伝承法を使えるから次代からは更に術法は発展する……

旅立つノエルに要らぬ心配をかける必要は無いと黙って後継者のエヴァにも悪印象を持たせたので口を割ることは無いでしょうが、これが最後の話す機会と思うと少しばかり残念です……

「さてと、ノエル達が期待通りやり遂げ帰ってくる前に私達もばちばち働きますか!!」

「そんじゃまいつも通り報告を聞きましょうか。」

その後、ノエル達がバレンヌ帝国を発つてすぐ8日目のボクオーンことシゲンはこの世を去り、言葉通り伝承法は働き武力を始め知識や経験もエヴァへ引き継がれ彼女が自分の短慮とボクオーンの思いを知り泣くのは別の話し

が

バレンヌ帝国の魔導研究所と王城ではコピーが元気に動き回り、すぐに『バレンヌの変態』と呼ばれるようになるのでそれほど悲しまれなかったのもまた別の話し

S a ・ G a 3 0 (後書き)

やっとこさバレンヌから動かすことができました。

今回でエヴァたんはボクオーン・エヴァたんにジョブチェンジしてもらいました。

ちなみにこの二次創作内の設定では

S a ・ G a の魔法      ネギま！の魔法

という力関係です。

S a ・ G a 3 1 (前書き)

さてさて、ちょっとリアルが忙しいので2日に一回の更新になるかも

メガロメセンブリア大陸

例によってバレンヌからの貿易船に乗り込みそこから馬鳥を買い上げ移動する。

しかし、いつも着ていた陣羽織やマントのままでは良くも悪くも顔が割れた俺とエヴァは動きづらい！

なので、エヴァは幻術を使い20歳に相当する身体へ変えたのだが、いわゆる『美女』なので違う意味で行く先々の注目を集めてしまう。

ちなみに、俺は羽根付き帽子をかぶり、自作のツインネックのギターと剣を背負った旅慣れた銀髪の青年に変装……分かる人には分かるだろうがエロール様の格好を拝借した。

後は、万一の為に俺は『エロール』、エヴァは『テレーズ』と名前も変えた。

何にしてもこの格好は使い勝手が良い！

自然と周りに溶け込めて、美人のエヴァを連れているのも旅芸人と言えば説得力も出るし、酒場では俺の演奏とエヴァの剣舞でラクラク飯の種を稼ぐことができたからな

「エヴァ……龍山山脈から一番近い村まで来たが、いやに活気がないと思わないか？」

「そうだな。」

それもあるが、メガ口の外れにあるとはいえこの国自体がおかしい。貧困に喘いでいるわけでもないのに虚ろな目をした人間ばかりだ。」

「もしや旅の方かな？」

それならば、この国を訪れた際は是非とも一度は足を運んで欲しい場所があります。」

特にあなた方のような見た目麗しき人達にはね……

さあさあ！ついてきてください。私が案内致しますから！」

第一村人に出会ったと思つたら一気にまくしたてられて、ぐいぐい手を引つ張られてる

例に漏れずこのよぼよぼの爺さんもどんよりと虚ろな眼をしているしかしその力は体が衰えた年寄りとは思えないほど強く俺とエヴァは面食らってしまった。

「おいジジイ、汚らしい手で私達に触れるな！」

私達の道は私達で決めてきた。

貴様の都合に合わせる道理はどこにも無い。

今なら見逃してやるからさっさと失せろ！」

「おいおいテレーズ、いきなりそんな酷い事を言っではいかんよ。すまんなご老人、私達もついさっき村に着いたばかりなので連れは旅の疲れで苛立ってしまして……  
今日はすぐにでも宿屋に泊まり身体を休めたいので明日その名所を案内していただけませんか？  
テレーズもそれなら良いだろ？」

さりげなくエヴァにサインを送る

「……分かったエロール。  
お爺さん、考えてみれば疲れていたとはいえ確かに言い過ぎたな……許して欲しい。」

「いえ、私も強引過ぎました。  
明日、朝一番でお迎えにあがりますので今日はゆっくりお休み下さい。なにしろ山を登った先にありますからね……では宿屋にお連れします。」

旅の疲れを癒やすという名目で爺さんを宿屋へ案内させる。これで今日1日だが時間を稼ぐことができた。

十中八九、明日は龍山山脈へ案内されるだろうから疲れを抜かなければな。

.....

.....

・

宿屋に到着した俺達はさっさと部屋に籠もり周囲に不審な気配が無いのを察するとエヴァが話しを切り出してきた。

「ノエル、やはりこの村はおかしいぞ。

村人の様子にあのクソジジイの化け物みたいなパワー……この宿屋は何故か怪しい様子の人間が少ないのも不思議だ。

どうする？ いったそのこと楽にしてやるか？」

「いや、それは早計だ。俺は改めて村の様子を見ようと思う。

エヴァはこの部屋で明日に備えてゆつくり休んでいてくれ。

龍山山脈は古代人のアジトと言われる場所だ。何が起きてても不思議じゃないからな」

実際、ケルベラス渓谷は外部から隔絶され、従来の魔法は発動しなくなるというある種の異世界じみた場所だったで慢心していたから1対1に持ち込めた。

しかし、この龍山山脈は名前の通り古くから生きる竜種や獣は勿論、生活の為に麓の村で暮らす人々も入る場所だ。

何かしらの妨害はあるだろうっからな。

「ああ、それとここで出されたメシには手を着けるな。

ここに来るまでに食ってた保存食がたんまり残っているからそれを食べるぞ。」



途中で情報収集のため、宿屋の大将や従業員に聞き込みを試みた  
が結果はサッパリ。

そして、真夜中になっても何事も無いまま過ぎ朝を迎えた

「おはようございます。約束通りこうしてお迎えにあがりました。  
さあ、龍山山脈の名所タフタヌーン山へ案内します。」

「爺さん、昨日から名所、名所としつこいがそのタフタヌーン山に  
何があるんだ？」

「ただ単に景色が良いだけでは無いのさ？」

「実はつい最近まで竜種が支配していたのですが、女王様がこの地  
にいられてからはみるみるうちに数が減り随分と暮らしやすくなり  
ました。」

その女王様が居られる城です。」

「おい、まさかその女を見るのにこんな山を登っているのか！  
名所でも何でも無いだろうが！！」

「ここからは私達で好きに登って行くから帰れ！」

全くその通りだ！

その『女王様』に会いに行くのは変わらないがこの爺さんは戦闘の  
邪魔だ。ここらで退場してもらおう。

「ご老人、女王様の城に着くまで獣道や道無き道等の回り道を通って行くからここまで大丈夫です。」

「……ふう、ここまで来たのに帰れと？これだから風来坊共は嫌なんだ！新しい体の為じゃ！何が何でも僕の案内で行ってもらうぞ！」

爺さんは人が…というより別の生き物にみるみる変わり、鋭い牙や爪を使い襲いかかってきた

「ライトニングピアス」

「どうだオラア！」

電光石火の一撃が元・爺さんの片腕を肩まで貫き岩に縫いつけ、俺が押さえ込み必殺のアイアンクローをかます。気持ちよすぎたのか白眼をむいて昇天した。

「とんだガイドがいたもんだな。  
このジジイを見る！最初は操られてたのか知らんが女王は新しい体を渡す能力があるらしい。」

「厄介な能力だな…」

それに引き継ぎのガイドが俺達を待ってるぞ？

女王様を待たせるのもなんだ…速攻で行くぞエヴァー！！

『足絡め』」

「そうだな…『ストーシャワー』！」

そして頂上付近…女王の城に突入した。

そして意外にも女王だろうか？金髪の邪悪なまでに妖艶な美女が村人を待らせロビーで待っていた

「凄いわ〜！ここまでたくさん奴隷共を仕向けたのに無傷で登ってくるなんて。

やっぱり素材が悪いとせつかく良い体を与えても活かしきれなかったか…それに比べてあなた達は強くて美しいのね！

本当ならおもてなしをしてからにしようと思っただけど気が変わった…私の為、馬車馬のように働くのが生きがいにしてあげる  
「！！」

その瞬間、女王からむせかえるほど甘く強烈なフェロモンがロビー全体に漂う。どうやら村人達が男女関係無く虜にされたのはこのフェロモンが原因か…

だが

「嗚呼、女王様……テメエのような年増のケバいメイクとくっせえフェロモンで俺達をどうにかできると思うな！  
小細工なんか捨てて掛かってこいよ！！」

「同感だな。私のような可憐な乙女が無意識に発するからこそ世の男は惹かれるんだ！

貴様のようなババアが無理に使っても酸いんだよ！！」

エヴァの言葉にはある程度同意できるが可憐なのか？ 帰ったら『可憐』という言葉を辞書で調べさせよう

「この私がババア？年増？貴様等……このミトに向かってよくも言っただな！？

地獄すら天国に感じるほど残忍な方法で殺してやる。行けッッ」

女王……ミトの言葉を合図に変化を終え控えていた村人は走り出す。  
このまま命令通り動くだろうな……ここまでできたならミトの支配下から救うことは叶うまい。万一できてもあの体だ……せめて痛みを知らず安らかに逝ってくれ。

「デルタペトラ」

「サンダークラブ」

体を支配しきれしていない村人達は石化の霧の中に突っ込み、エヴァが放り投げた無慈悲な雷球が炸裂し霧が消えた後に灰塵となり消えた。

その様子を見たミトは苦々しげに顔を歪ませ般若のような形相で眼を見開き、最初の女王様（笑）と服装以外で同一人物とは結びつかないほどの変化。

何より、山脈中の竜種を吸収したのだろうか…悪魔のような羽と左腕は爬虫類の鱗で覆われた巨大な腕に鋭い爪。

そして太い尾を持つ異形の化け物へと正体を現した。

「チツ、使えない奴隷共だね！

もういいさ、この姿になった私が直々に相手をしてやる。すぐにアントタ等もあややって影も形も残らない塵にしてあげるよ！超高速ナブラ」

そこからは野獣の能力に人の知恵を合わせたミトが多彩な攻撃を繰り出せば、俺達は回避し怪我を負っても即座に回復しあい魔法や斬撃を浴びせるが硬い鱗と再生力で決定打を撃てずにいる一進一退の攻防が続いた。

「エロール、これが人であった者の果てか…いつそ哀れにすら思っ  
ぞ。」

私がいくから合わせる！勝負を決める！」

「させるかアアア

貴様から吸収してやるから今すぐ死ねエ！！

アースライ…」

「遅い！…竜尾ファイアツツ！！」

竜尾返し＋ヘルファイア

俺の剣はエヴァの放ったヘルファイアを纏いミトの頭を狙ったが右  
腕、尻尾を切り落とす。やはり相手は特級の化け物。

負傷しても動きは止めず無事な左腕を力任せに振り下ろしエヴァは  
三枚に卸されてしまった。

ミトはエヴァの返り血を浴びて体中が真っ赤になっている。

「流石は一流の化け物だな。

あれだけの攻撃を受けてもケロツとしてやがる！どこを吹き飛ばせ  
ば即死するんだ？正直、気になるな……」

「時間稼ぎは無駄だよ！さて、次はアンタだ。私の心と体を傷つけ  
た罪は重いよ！

あの小娘はあっさり殺しちまって楽しめなかったけどアンタはじっ  
くりいたぶってあげるからねエエエ！！」

甘いな……若作りをしているが所詮はババア。

感情のままヒステリーに叫び散らしたおかげで十二分に時間は稼げた

「掛かったな…」

「この年増のババアが！」

「なあ！？何故小娘が生きている！？その技は何だ！私に何をした  
ッッ」

簡単な話した。

間合いを取るように後退してミトの視界からエヴァを消し、挑発を  
している間にあらかじめ集気法を使っていたエヴァは再生を果たし  
てこれ以上無い絶好のタイミングで不動金縛りを発動！

ミトをその場に縛り付けた。

しかし、これはエヴァだからこそできる捨て身の攻撃法。

ミトが迷わず吸収を選んでいたら失敗していたかもしれない！

だが後は俺が決めるだけだ。

「こつちを見るッ」

龍神烈火拳ッッ！！」

「しまった！チクシヨーーーー！！」

ミトの全身に突き、抜き手、あらゆる拳撃を叩き込み最後は壁に投げつけ全力のストレートを顔面に食らわせて終了

流石のミトも再生力を上回る攻撃を受けて死んだらしい。その身は瞬く間に灰になり風にさらわれ消えた。

こうして奥のアビスゲートを閉じ龍山山脈を平定した俺達はバレン又帝国へ報告、税金は納めているがメガロメセンブリア大陸の最北端を連合が知らぬうちに密かに領土とした。



## S a ・ G a 3 1 (後書き)

クラック+ウエポンブレス+アーマーブレス=デルタペトラ(石化ブレス)  
ミンサガで登場する合成術らしい。しかし始めたばかりの作者にはまだまだ遠い魔法

足がらめ

歩行している敵のみをスタンさせる。したがって、有翼系はもちろん植物や蛇などにも無効。  
とはいえ全体スタン技であるから、先制使用で局面を大きく有利に導く力を持つ。

作者は小学生の時にかなりお世話になりました。

ストーンシャワー

岩石を雨あられと降らせる全体攻撃術法。そのため堅すぎる敵には効果が薄い。  
結構な威力に加え、程々の消費。

サンダークラップ

雷球を発生させて、敵に投げつけ炸裂させる全体攻撃術法。しかも、ゲームでは相手を痺れさせ行動を制限させる効果があったのでこの小説でも採用

## ヘルファイア

地獄の業火で敵を焼き払う魔法。単体にしか使えないがなかなかの威力。

作者が初めて見たのはバクに吐かれてヘッジホッグが丸焼きにされた所でかなり衝撃的だった。

S a ・ G a 3 2 (前書き)

今日の目玉はライフメーカーの基本的な考え方

エヴァとノエルの夫婦漫才の二本立て

龍山山脈のアビスゲートには竜種とゲートの中にいた四魔貴族……  
ビューネイさえも吸収したケバいオバサン、ミトを撃破した。

しかし、確かめなければいけないことがまだある。すぐさま下山すると二手に別れて村全体を調べる。

「もしもしエヴァさ〜ん、聞こえますかー？俺の方はさっぱりだったけどそっちの方はどうだった？」

「ん〜？私の方もさっぱりだー。  
宿屋の人間以外は人っ子1人見当たらん。どの家にも灰がちらほら残ってるだけだし、あのババアが死んだのと同時に体が崩れたんだろうな。」

「はいは〜い、分かったよ。  
そんじゃま調査を切り上げて宿屋で合流して今日1日ゆっくり休むぞ〜」

二手に別れてまで調べていたのは村人達はどうなったかだ。  
宿屋の人間だけは半数が人間であつたらしく無事立ったが、他の村人達は全員モンスターになつていたらしく親玉のミトが消えた際に同じように消えたのだらうな……

正直、第一目標の番人の討伐は達成できたが後味の悪さを感じる事件だった。

「それにしてもエヴァ、お前あのオバサンに三枚にされたが体に異常は無いか？」

できる限り手札を見せないように勝利する為とはいえ、かなりスプラッターな目にあつたエヴァ。

「そんなものをつくの昔に消えたな！第一、一度死んだくらいでギヤーギヤー言う奴に真祖の吸収鬼は務まらないのだ！

それにしても集気法は素晴らしいな……習得する前はだいぶ再生時間が掛かってたがすぐだったぞ！

これが最高にハイって感情だな！！」

実際、体は再生されたが服は直らない。だから俺が羽織っていた外套を着ている。まあ、何故か喜んでるからいいけど、裸一丁に外套を羽織っただけの美女が悪役がよくやる高笑いをしている光景

まあ、この一年間一緒に暮らしたイメージからすっかり忘れてたがエヴァは限りなくグレーに近いブラック……というか魔法世界では泣く子も黙る極悪人だったな。

ただ、いくら美女だといつても俺にその手の女に手を出す趣味は無いからあんまり嬉しくない。むしろ、エヴァの異様な笑い声にびっくりして飛び出して来た宿屋の人達に遠巻きに見られて死ぬほど恥ずかしかった…

・・・

・・・

・

「エヴァ、これからはあんな笑い方をするなよ？」

それに今考えれば幻術を使って誤魔化せば良かったな……」

「別にいいだろうが……私にだって失敗はあるんだ。

お前までそんな目で私を見るな！いい加減もつと優しくしろ！」

「ハイハイ、分かった分かった。

消費期限が迫ってきた保存食を片付けるぞ。ほれ、バッファローの薫製肉だ！これをやるから機嫌を治せよ。なかなか美味いんだぞ？」

「フン！」

まただよ。エヴァは無駄に頑固な所があるから面倒くさい。こうなったらとっておきの薫製肉……ワイルドベアの超級薫製でも渡すか？いや、それはもったいない！

「ノエル君……どうやら彼女と取り込み中らしいね？  
新しいポイントを知らせに来たが……間をおいてから来ようか？」

「ッ！！」

ライフメーカーか……脅かすなよ。

扉があるんだからそこから入ってこい！いきなり背後に現れて話しかけるな。分かったな？次はないぞ。」

「H A H A H A！ちょっとしたお茶目だよ。

ところでよくやってくれたね。これであのゲートも無くなったから魔力の消失も止まるよ。」

野郎、笑って済ませやがったな。人が神経すり減らして倒したのによオ

まあ、いいか……コイツに何を言ってもエネルギーの無駄使いだな  
それより続きが気になるな……

「おいノエル！私と（モグモグ）パクティオーを（ムシヤムシヤ）  
するなら（ごっくん）……ふう、機嫌を治してやらんでもないぞ！」

エヴァが何か言ってた気がしたが、保存食を食いながら話されてもよく分からなかったから流れるにも放つところ。  
そうしよう…

「ん？どうやら良いみたいだね。

次に行つてもらう場所はヘラス帝国…それも、首都のほぼ中心地にある闘技場地区だよ。」

「はあ！？そんな場所にアジトを構えた奴がいるのか？

だとしたら、いくら俺達でも帝国の民を全員相手にしながら古代人を倒すのは難しいだろ！」

今回は寂れた村で頭数も少なく、ターゲットもサクツと倒せたから良かったがヘラスの首都となると皇帝まで古代人の配下にされていたら世界大戦のきっかけになるかもしれん。

もし部下がいなくても場所が場所だ！

本来なら力をセーブしながら戦わなければいけないがそれで倒せる相手でもない。

「まあまあ、落ち着きが足りないね。

そいつは自分自身を奴隷としてあらゆる闘技場に出向き、チャンピオン等の強者のみを吸収している生粋の無頼漢だ。幸いにもゲートは奴自身が閉じた後だったし、手当たり次第に吸収活動をしてる訳



でもないから今日は安心して休んでくれ。」

「よし、ノエル！」

今日1日休むのならば、パクティオーをする時間も当然あるな！  
私はいつでも良いんだぞ？遠慮せずにぶちゅーとティープなのでも  
良いからな！！」

そんな牛みたいに鼻息荒くして言うなよ…子供の状態なら悪ふざけ  
で済んだけど、今の姿だと割と洒落にならんぞ？エヴァさん。

「ふむふむなるほど、危険度が低いにも関わらず話してくれたとい  
うことはつまり、残るゲートがある場所か古代人の本拠地はまだ分  
からないって事か…」

「なかなか痛い所を突いてくるね……」

話しを戻すけど、探したそうとしても人口が多すぎて一苦労だ……  
そこで闘技場の猛者を目指して闘ってくれ。

君ほどの強さがあればチャンピオンにならなくても噂が広がって相  
手から確実に来てくれる筈だよ。けどその場合は連戦になるかもし  
れない。」

なるほど一理あるな。

しかし、いろいろと腑に落ちん事がある。

「そんなにうまくいくもんかねえ？」

それに何故そこまで詳細な情報を掴むことができたんだ！

まさか俺達と古代人を食い合わせて弱ったところで介入して漁夫の利を狙うって魂胆か？」

同盟を組んで間もない今だからこそ聞ける疑問。この際、遺恨を残すことになっても後腐れが無いようにスッキリさせたほうがよほど良い。

「情報が……それは私の部下、そして分身とも言える仲間が命を懸けて手に入れたもの。」

実際に今回も複数人で撃退や諜報活動をしていて、吸収された仲間も囷にしても情報を伝えてくれたんだ！

君の疑問も分かるが信用して欲しい！この世界の未来を本当に案じているんだ。」

そういえば初めて会った時も撃退したとかそんな事を言っていたな……長生きをしすぎて知らず知らず疑り深くなったのかも知れない。ライフメーカーの言葉の真偽は別として今回の事は心に留めておこう。

「俺にとってバレンヌ帝国は思い出や仲間と共にある場所だけでなく、心の拠り所でもある……」

だからどうしてもハツキリさせたかった…スマン。」

「いや、その気持ちは分かるよ…私にとってはこの世界がそれだからね。

逆に君が使命感なんて軽々しい理由で動く人間じゃなくて安心したよ。

そういう人間は確固たる物が無いから最後の踏ん張り所で逃げる奴が多い。」

過程はどうあれお互いに理解が深まり、より強い結束ができた。やはり、想いは口に出して伝えないとな！

「さっきから男同士でよろしくやってたようだが話は済んだかさぞかし有意義だったのだろうか…私の存在を忘れるくらいだからな！」

エヴァの事をすっかり忘れてた。  
保存食も腹一杯食ったのかだいぶ減っている。  
これはキレル前兆だ！

「何言ってるんだエヴァ！  
俺がお前の事を忘れるなんてあり得んよ…だからむっつり顔じゃなく  
て機嫌の良い顔を見せてくれよ？  
な？」

「パクティオー…」

「ノエル、魔法陣は私が用意した！さあ、効果が消える前にやるんだ！」

「ナイスアシストだ！ライフメーカーよ。  
後はPKを決めるだけだ！」

「よし、エヴァさん！契約をするからナイフを取ってくれないか？」

「嫌だ…キスじゃないとやだもん。」

「（ぐぬぬぬ…）分かったよ…俺もその方法が良いと思ってたんだ。  
いくぞ？」

「うん、きてー!」

:

:

:

:

「じゃ、じゃあ私は帰る。

同胞に仕事を投げっぱなしにするのも気が引けるし、いろいろ都合があるから…また会つときまでさらばだ!」

口付け方式で本契約のパクティオーを行わされた。

俺は触れるだけで済ませたかったのにライフメーカーもどん引きするほどディープなのをやられた。

ゴメンよ〜ロックブーケ! エヴァの怒りを静める為の仕方ない犠牲だったんだ。

「はい! パクティオーカードな。

これで10キロ圏内ならいつでも呼び出せる…か。

それに金色はかなりレアらしいぞ? 良かったな!」

まるで、欲しいオモチャが手には入った子供のように嬉しい光線全開のエヴァ…

契約カードを穴が空くほど見たり弄くり回したりしてえらいゴキゲンだが、俺はくたくたにされたよ…

「はあ…そうツスカ。

『三千世界』ってあるけどなんでもいいよ。

今日はいろいろあったから疲れた…もう風呂入って寝るから静かにしてくれよ?」

「ハツハハハハ！何言ってるんだ？今日は寝かさないぞ〜」

結局は酒盛り、風呂、夕食、枕投げと有頂天なテンションのエヴァから妨害に遭い疲れが抜けず、ヘラス帝国に向けて旅を再開したのは明明後日になった。

S a ・ G a 3 2 (後書き)

『三千世界』

ただ単に、世界を一時的に塗り替えて相手を幻想世界に引きずり込み、戦闘する際に周りを考えて力をセーブしなくても良くなるステージに移す。

正直、戦うときは常にチートの力加減に悩み全力全開が出せない主人公のネットクを解消してくれる彼に相応しいアーティファクト

S a ・ G a z z o (前書き)

独自設定があってもいいですよ？



ヘラス帝国…首都ヘラス

この世界の獣人達の大多数が暮らすヘラス帝国の首都であり、前回はお目に掛かることができなかったが守護聖獣とやらがこの国を護っているらしい。

まあ、突然こんな話しをしているのも……

「……………」

「ゴギヤ—————」

「エヴァさんや…なんか木彫りの龍がメンチ切ってるのは俺の見間違いないよな？」

守護聖獣か？首都へ移動してだけなのに突然木彫りの龍が前方を塞いだと思ったら絶賛警戒されてる…

「そうだな…それに私の目には液体の虎？が走ってくるのも見えるんだが…」

「ゲルルウウウツツ」

「本当だなあ」。

また新しいのが湧いてきたな。それにしてもヘラス帝国もなかなかどうして……不思議な生物が溢れてるじゃないか……どうしたもんか」

「私にイイ考えがある。コイツ等はたとえ体が消滅しても生き返るらしい。

なら試しに私達で影も形も残らないほど痛めつけてやればいい。どうだ？」

こいつ等自体はそこら辺の野良竜種だがヘラス帝国が認める国獣だから無闇に傷つける訳にもいかん、ましてや殺そうものなら即戦争……本当に面倒くさい奴だ！

「よし 速攻で振り切るからこっちに寄ってこい！

『クイックタイム』！

最早俺の声は聞こえてないだろうが……あばよ！とつつあんよあ

ハイヨー！シルバー！」

術の効果が持続している間に馬鳥を全速力で走らせ、俺達はスタコラサッサと首都へ逃げ込んだ。術の効果が切れた後には『ついさつ

きまで【そこに】居たのに気付いたら消えていた』と顔を見合わせる2匹が残されたのだった

:

:

:

:

じっくりと市街地を歩いて分かったが、ここは亜人による亜人の為の国という意識を国民1人1人が持っており活気に溢れている。流石はあの皇帝が治める国だと感心した……次代はどうなるかしらんが。

それに奴隷闘技場も存在するがメガロとは違い立身出世の道があるらしいからまだマシってところが

「ふう：来て早々にえらい目にあつたな。この国にはかなり苦しめられた事があるんだがお前はどうか？」

20年前には大使を奴隷にしようとする野郎達はいるわ、今回の守護聖獣らしきモンスターの襲撃で俺の中のヘラス株は取引停止レベルまで直滑降だ！

最早、国レベルで無意識に因縁をつけてきてるとさえ感じる。

「ほう！昔ちよつとしたことでアイツ等に追われた時はまだまだ未熟者で寄ってたかつて袋叩きの半殺しにされたからな。」

そんなわけで私もこの国が好きになれん！」

ん？もしかしたらアイツ等は悪さをしたエヴァを覚えていたから襲撃しただけで、手を出さずに様子見に徹していたのも近くに俺がいたからか？

「エヴァ… ちよつとしたこと」ってお前何をしたんだ？

もしかして無差別吸血テロでもやらかしたのか？」

「……ハツハツハ！私は些細な事など記憶しないんだ！それより今をどうするか考える事にエネルギーを使う。

早く買い物をして闘技場に行くぞ。」

さっきのは冗談のつもりで言ったが、どうやらそれに近い事をしたらしい……なら下手こいたのは俺だっただけかよ… ツいてないなあ。気を取り直して、メガロメの北側からヘラス帝国までの旅はかなり長かったので、かなり消費した保存食等の消耗品を補充し店から出てきたところ周りの人々から嫌な視線を感じる。

「その貴様等！先ほど龍樹と水虎に追われていた怪しい男女だな。大人しく我等とついてきてもらおうか！」

泣きっ面に蜂つてのはこういう事を言うんだろうな。今度は警備兵

に絡まれた。それも1人や2人ではなく大勢にだ。今回ばかりはど  
うしようも無いな。

「エヴァ、仕方ないからついて行こう。揉め事を起こして標的から  
遠ざかる訳にはいかん。」

「分かったよ…ノエルがそう言うなら私はついて行くだけだ。ただ、  
合図があればいつでも半殺しにしてやるから大船に乗った気でいろ  
！」

「頼むから何があっても大人しくしてこれ以上災難が降ってこない  
ように祈っていてくれ。」

かくして俺達はヘラス帝国が誇る治安警備隊の詰め所に連行され、  
龍樹達に警戒された理由からどうやって逃げ切ったのか等を何回も  
言わされ、たが全ての詰問に対してうやむやに答え、そのまま留置  
所にぶち込まれて一晩を明かした。

そして朝になり慌ただしく動く気配を感じて起きた。

しかしエヴァは呑気に寝ていたので優しく拳骨を落として起こした  
瞬間、昨日から横柄な取り調べをしてくれた亜人が現れた。

「いいか！今からやんごとない身分の御方がお越しになるが貴様等は何があつても大人しくしている。許されるのは息を吸い、吐くことだけだツツ！分かつたか！  
理解したなら出る。この犯罪者共が！！」

朝っぱらからム力つく野郎だ。もしここがバレンヌ帝国だったら速攻でぶっ飛ばせるのに…こん畜生め！  
それに今でこそ寝ぼけてから大人しくしてるがエヴァは元々気が短いんだからいちいち刺激するようなことするなよ！

「む？そやつ等が龍樹達の追跡を振り切りこのヘラスに侵入したという者達だな？

こんな命知らず達はこの先の生涯でも再び現れるか分からん。どれ、縮こまっておらんともつと近くに來い。」

「…警備隊の諸君は下がってくれていい。いつまでも俺達に構っていては支障が出るだろうから今すぐ通常通り働いてくれ。  
この犯罪者達の身柄は俺が預かる。」

やたら偉そうなチビはきつと皇女だろうがどうでもいい。

しかし、もう1人は20年前のあの時に皇帝の傍で控えていた武官か！皇帝のガキを警護しているなんてえらく降格したな。

それに相手も変装を見破った上で俺の事を理解したらしく僅かに動

揺したのを感じた。

「しかしそれでは……」

「俺の言葉が聞こえなかったか？  
首都の安全を維持してこい。」

「……分かりました。」

少し苦しい感じもしたが武官の機転と権力のプレッシャーで警備兵を黙らせすぐに詰め所から俺達を連れ出してもらえた。  
これが吉とでるか凶と出るかは分からないが、何にしてもこれで警備隊の詰め所兼留置所からは離れられる。

裏道を入り込んだ先に建てられた一軒の巨大な倉庫へと案内された。中は天窓から光が差し込み木箱や樽が所狭しとボンボン積まれているのが見えるが、どの荷物も埃を被っているから最近是利用されていないらしい。

このような密会にはうってつけだ。

「ジール様。私はこの者達の片方、ギターを担いだ男の方を知っています。」

皇帝陛下とも面識のある者であり、最悪の場合はバレンヌとの国際問題に発展すると考えますれば……」

「何！？もつと詳しく申してみよ。」

これは父上に恩を売れる思わぬ拾い物やもしれぬからの！御主等からも話しを聞きたい。よいな？」：

：

：

：

「ふむ、やはり街に出て正解だったな。そうなると世界の一大事じやな。とにかく御主等の身分は私が所有する闘士とする！そうすれば闘技場での煩わしい審査も顔パスで通るから自由に動けるじゃろう。」

ゲオルグよ、私の考えている事は解るな？」

「ハイ、正式な証明書は無い間は私が付き添えですな？」

これでも顔が利く。」

闘技場のオーナー達もむやみやたらと拒むことはできまい。何より、ジール様は言い出したら止まらないお転婆なのは十二分に理解しております。」



そこからはあれよあれよと言う間に表向きはジール第四皇女が所有する奴隷という身分で自由に動くことが保証され、思い描いていたプランとは違うがスムーズに闘技場でデビューする事が可能になった。

S a ・ G a 3 4 (前書き)

多分、テオドラさんが皇女の癖して大胆不敵に動けたのは過去に前例があったからだと作者は考えています。

皆さんはどう思いますか？

へラス帝国でそこその人気を誇るとある闘技場の1日が終わり、モヒカンヘアーに異常なほど筋骨逞しい大柄な亜人が後ろからついて来るこれまた大柄だが人の良さそうな亜人と人影の無い道をのんびり歩きながら会話を楽しんでいる。

「どうだ！今日も圧勝だったろ？」

最近はピリツと来るような相手がいねえから物足りねえぜ。」

「ほんま、チャンピオンはとんでもなか強さば持った人やけん。昨日に続き今日も活きのよかチャレンジャーが来よるのに情け容赦なくあつとゆう間の瞬殺やけん惚れ惚れしたよ。」

「そりやそうだ！オレの拳骨に捕らえられたら最後、そいつにもう勝ち目は無い。デビュー以来から頼りにしてきた必勝の技ってやつだな！オメエも付き人とはいえ闘士の端くれだ。それくらい分かるだろ？」

「チャンピオン、それくらい分かるけんよ」

ところで話は変わるんやけど最近ピリツと来ない言うてたけん、もしオレが勝ったらアンタの力の全てが欲しいんやけど貰ってもよいか？」

それまで人懐っこい笑みを浮かべ会話に付き合っていた付き人の発言と気配が別人のようにガラッと変わった事にチャンピオンも感化され和やかな空気は一変し、すぐさま重苦しい闘争の空気が辺りに立ち込める。

「そんやま…荒事につってつけの場所ば知ってるからそこに行こうか。多分、ピリツとどころか逃げたくなるほど激辛の闘いは体験させてやるから安心しろよ。」

「オ〜！面白れえ事言うじゃねえか。俺の売りは24時間フルタイムで全力全開だ！それはお前でも例外じゃねえ。死んじまっても化けて出るとか文句無しだぞ？」

こうしてまた1人、闘技場から実力者が忽然と消えたが所詮は奴隷上がり。闘士は星の数ほどいるから誰も気にも止めず、衛士に出世したくらいにしか考えない。

そして、すぐさま次のスターが現れ人々の欲望と野心が支配する闘技場はこれまでと変わらず平常通り運営される。

:

:

:

:

「フンツ！セヤア！このオ！ジヨイヤアアア！  
この若僧！逃げてばかりいないで正々堂々と挑んで来んか！  
おかげで観客もしらけておるぞ！」

「いやいや、逃げてるんじゃないや無くて避けながらカウンターしてるだけだから。」

実際、顔面が痣だらけだろ……それにしらけてるのも俺とアンタに  
実力差が有り過ぎて飽きたただけだ。」

最初は体を乗り出し前のめりにみていた観客はオッサンの不甲斐な  
さすぎる姿から開始三分で消えた。

残っている客は動きを盗もつとしていた闘士や感心しながらも俺が  
どう料理するか待つギャンブラーの2種類…

「うるさい！俺はこの闘いに勝つたら農場を開き、気になるあの子  
と結婚して故郷に錦を飾るんだ！  
いいから倒される！」

凶星を指されて恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にして捨て身の特  
攻を仕掛けてくるオッサン。

ここまでくると哀れを通り越して、愛すべきキャラにさえ思える。

「詩人パンチ。」

しかし勝負は勝負。

ルール通り、テンカウントの失神をプレゼントして決勝戦という名の茶番の幕は閉じ、賞金とインタビューを頂き闘技場を後にした。

「エヴァ〜？こんな小っさい闘技場で闘ってもしょうがないだろ。今からでも遅くないからペア〜とデッカい闘技場に行ったほうが下手人も掛かりやすいと思わないか？」

「フッフッフ！ノエルは甘いな！

こういうのは段階評価を積んでランクアップした堅実派の人間が最後には勝ち進めるようになってる。

年長者の言うことは素直に聞いておけ！」

今日のエヴァは人目もはばからず笑うはで、そりゃもう上機嫌だが理由は見当がついている。

エヴァは俺が試合に出てる間、暇潰しにエール片手に観戦している。

それも、旅の予算の半分を賭けて荒稼ぎする有り様だ。

「たかが三年ばかりじゃねえか。それくらいの差で威張るなよ……口  
リババアめ。」

「ああ！？ノエル！言いたい事があるなら面と向かって言えよ？」

「別に……」

酔っ払っても年の事は聞き逃さない辺りにエヴァの無意識の肯定を  
感じないか？

ゲオルグから提示されたのは小さな闘技場から実力者としてランク  
アップしていく方法と大きな闘技場で本戦に進む為の予選を勝ち抜  
いていく方法の2つ。

どちらにしても一長一短……どの方法を選んでも名前が知れ渡るには  
時間が掛かるが前者は優勝者として実績を積むのでランクアップす  
る際に幾つかの予選をスキップできる。

後者は一獲千金を狙う奴隷商人達や立身出世の近道と考え予選に集まる人数もグレードによって跳ね上がる為に試合数の割にはなかなか進まずに注目株の1人くらいにしか見られない。

闘技場デビューの手配はすぐに完了したがエヴァと俺の意見が合わず一悶着あった。

結局、今のように俺が折れて地道に闘っている。

いい加減俺も年だ。エヴァの我が儘に付き合うのも大人な男の嗜みだろ？

そして1日の報告の為、あの巨大倉庫へ寄っていくのがここ一週間のサイクルになっている。

•••••

•••••

••

「よしよし！ノエル殿、今日もゲオルグからの報告通り順調に勝ち進んでいるようじゃの。」

次の試合は私の名を使い開催する御前試合じゃ！実力者が集まればそれだけ古代人とやらが釣れる可能性も上がるからの！

本来ならば、ちと苦しいがノエル殿には開催者権限でもぎ取った特別枠で出場して頂きたい。」



そしてゲオルグから渡された図面に描かれた闘技場のデカさと出場予定者の数に驚いた！

エヴァもあまりのぶっ飛び振りに目を『コレが限界！』と言わんばかりに見開き驚いている。

「オイ、その金の出所は分かるがいつの間に闘技場を建てたんだ？一週間では到底できると思えん！」

そうだよな……

市民感覚を持つ人間からしたら異常な話だよな。

エヴァ、その気持ちは分かるよ……

俺なんか今日まで無意味に闘ってたんだぜ？

「エヴァ殿…私は父上に申し上げたがケースが特殊過ぎて表向きの協力は得られなかった。

会場にする無人島と開催資金だけに終わったから突貫工事で建てたがこれが限界だったのじゃ……」

流石はチビ助（皇女）だ。

やはり金持ちは凡人とはやる事も考えることもスケールが違うな

しよげてるけど、一週間で土地を押さえて急造の闘技場を用意しただけでも凄いのにまだ上があるらしい。

それに、どれだけの金と人間が動いたのか…

現にゲオルグは初日に比べて若干痩せてきたぞ！？ヘラス帝国皇女の護衛は残業なんかは当たり前、あらゆる能力が求められなんて超ブラックじゃないか…問題持ち込んだ俺達が言えた事では無いが強  
く生きてくれ！！

「皇女さん、俺達は御前試合まで体を休めていれば良いんだな？」

「うむ！」

きつと当日は激戦地になるじゃろうからゆっくり体を休めて、万全  
の状態で来るのじゃ！」

皇女さんはどや顔も忘れず、ビシッと締めてくれた。

正直、ヘラス帝国を甘く見ていたかもしれんな…

•••••

•••••

••

『拝啓　ボクオーン』

## 前略

今、俺達はヘラス帝国に居るが色々あって皇女さんの世話になっている。

この世界で300年…  
いろんな物を見てきたが、一週間で島一個に相当する闘技場を造ることは可能らしい。

それで思い付いたのだが、今度バレンヌ帝国でも天下一武闘会を開いてみないか？

ノエルより』

「うーん、便りがないのは元気の証なんて言いますがこの突拍子の無さ……」

ノエル達が旅立ってからバレンヌ帝国は平和一色です。  
ただ、今まで交流試合でどつき合いをしてストレスを発散していたダンダーグのストレスが貯まりっぱなしで危ないから調度品イイかもしれないですね！

何よりも、古代人を誘き出すための罠ということとは島一つ地図から消える覚悟をヘラス帝国は持っている。つまりダンダーグが全力全開で暴れて島が無くなっても構わないという事ですか……

やはりノエルは最高です！

とにかくこんなチャンスが目の前にあるのですから、爆発寸前のダンダーグだけでも連れて発散させますか……

闘技場の建設はそれから

ついでに都市開発プランも皇帝陛下に進言してみましよう！

さっそく元ボクオーン、現在はバレンヌ帝国の誇る変態…魔法自立人形『シゲン』は動き出した。

S a ・ G a 3 4 (後書き)

最近分かったんですが、どうやら作者はダンダーグとボクオーンが  
好きらしいです。

いつプレイしても早く会えるからかな？

街中で今、誰も彼もがこぞって話す最高に熱いモノ。

それは……

「なあなあリユウチャン、知ってるか!？」

ヘラスの第4皇女ジール様がまたやらかしたらしいよ!」

街中を歩く仲良しトリオのうちで最も背が高く、手足も長い亜人が仲間に話を振っている。

当然その内容は、『ヘラス帝国第4皇女ジール様が再び仕組んだ壮大な娯楽』に関してだ。

「なんだよヒゴー。あれだろ？」

離れ島を闘技場にして最強の闘士を決めるんだろ？

いつもながらジール様は遊びをさせたら天下一だよなあ。」

「バカ！今度はマジでスゲエんだよ！

ヘラス帝国各地にいる有名チャンピオンは勿論だがその気になりやあオレ達でも出れるぞ！

リュウチャン、今なら滑る込みで選手登録が間に合うから試しに出てみるよ。」

「はあ？

お前何言ってるんだよ！！オレに殴り殺されてこいつて事か！？

お馬鹿もいい加減にしなさいよ！！」

リュウチャンと呼ばれたずんぐりむっくりの体型をした男の亜人は全力で否定する。

被っていた帽子を地面に叩きつけ、地団駄を踏みながら…

「え！？

リュウチャン、出ないの？じゃあ、オレが武闘会に出るよ。」

ヒゴーと呼ばれた亜人が…

「何言っただんだ！リーダー！  
リーダーじゃすぐダメになるに決まってる。だからリュウチャンと  
一緒に観客席で眺めてるよ  
俺が出るからな！」

トリオの最後、一番の力持ちであるジモンが名乗りを挙げた

「ねえねえ、ママ」。  
私も闘技場デビューしたいなあ。  
いいでしょう？」

「ダメよ。  
お母さんが出て、ウンと活躍するからそれで我慢してね？」

通りがかりの親子

「おやおや、小さい子がいるのにそれはいけませんな…  
よしよし、私が代わりに出ましょー！」

「ハッハッハ！」



旦那様、あなたの護衛が優秀だと知らしめるいい機会です。俺が出ますよ。」

次は人の良さそうな紳士とその従者

「じゃあ俺が……」

「何の、拙者が……」

「あいや、待たれ

よ！おいどんが……」

「いいえ、アタイが……」

「じゃあ俺も……」

「む！ノエルは出るだろうが！今更……」

「良いから流れにノれよ！……」

ぞわ

ぞわ

ぞわ

ぞわ

まるで感染したように道行く人々が出場すると言い出し、楽しそうに会話をしている。

しかし、リュウチャンだけはポツンと淋しそうである。

何より、亜人といえども社会性の生き物で人間と変わり無い。

「あああああ！もう！！」

じゃあ俺も武闘会に出るよツツ！！これでいいだろ！？」

リュウチャンが決意し大声で言った瞬間

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「街ぐるみでふざけるなああああ！！！！」

手のひらを返したような反応にヤケになるが自分以外の全員が証人今更、さっきの発言を取り消そうとしても周りの空気が選択肢を排除する

かくして、可哀相なリュウチャンの武闘会出場が半強制的に決まったのであった……

：

：

：

：  
「いやいや、ゲオルグとその部下達が率先して広めたとはいえ3日。たったこれだけで少なくとも首都はこの話で持ちきりってのは凄いな！」

「フン、それだけ娯楽が無いんだろ。それよりさっきのアレは何だ！凄く恥ずかしかったぞ！罰として手を握れ！！」

よく分からん理由で命令するエヴァの顔はほんのり赤い。いつまでも乙女ですな。今この瞬間からロリババアからエターナルロリータに称号を変えてやるう！

「ハイハイ分かりました。だけど、口ではそんな事言っても意外に面白かっただろ？こんな事があるんだ。たまには意味もなく街ん中をぶらぶら歩いてみるもんだな？エヴァさんや？」

「そうだな！  
だが私は…もう少しムードが…」

「ん？エヴァなんか言った？」

「……」それにしてもこの時代、この世界でアレがあって自分が参加できるとは思わなかった…

ヘラス帝国に住む亜人達の結束力は阿吽の呼吸レベルにまで達しているとは…侮れんなあ。

住めば都と言うが案外、ヘラス帝国も良い所かもしれんな！

「取り込み中すまんナノエル殿。

少し時間を貰ってもいいだろうか…」

元気一杯に走り回っていたのだろう。

肩で息をしているゲオルグ…いや、働き者のゲオルグさんが後ろから呼び止めてきた

げっそり痩せたと思った次の日には復活している。その働きぶり  
とタフネスには感嘆の念を抱かずにはいられないが、この人はいつ  
身体を休めているのかさっぱり分からん……  
もしや、分身かクローンでも使ってるのかな？

とにかくゲオルグさんはそう感じるほど不思議人間だ…

「ゲオルグ殿か…

明日の武闘会についてか？

それともジール様がまたどこかに消えたのか？」

「いや…それもあるが違う。

実は怪しい2人組がこの近辺をうろついている。

1人はサングラスを掛けた身の丈3メートルもある異常にガタイの良い大男。

もう1人はニヤニヤと笑みを浮かべながら歩く並くらい的身長の男。もしかしたら、帝都を騒がしている下手人やも知れん。一緒に来てくれないだろうか」

そうか…そう来たか。

あの手紙が原因か！？いやいや、ライフメーカーの嫌がらせという可能性も若干ある…筈だ。

きっとそうさ…今ダンダーグに出会ったら厄介事に巻き込まれそうな気がする…

「ノエル…この特徴はアイツ等だよな？」

昔のトラウマが蘇ったのか俺の手を握るエヴァの手に力が入ってきた…

俺もあのプレッシャーはマジ勘弁…トンスラしよう！

きつと時間が解決してくれるさ！

「ゲオルグ、そいつ等は俺達の知り合いで故郷にいる筈の仲間だが…  
良いか！！絶対に手を出すなよ！」

何があっても此方から手を出さなければ『基本的に』大丈夫だ！  
最悪、視線を合ったらゆっくり後ずされ。  
分かったな？では明日の武闘会に備えて、俺達は宿に戻る。  
また明日会おう！」

大丈夫！気持ちの問題だ…絶対に生きて会えると信じてるぞ！ゲオルグよ。

俺達は安全な宿からキミの無事を祈ってるからな。

Side ゲオルグさん

「な！？待ってくれ！  
もう少し詳しく教えて…行ってしまったか。」

20年前のあの日、皇帝陛下の御前で在ろうと一切の小細工抜きで挑んだ男…ノエル。

アレほどの胆力を誇る人間を慌てふためかせる2人組とは一体！？

「帝都と皇女様の安全の為だ…  
この俺にどこまで出来るか分からんが最悪は相討ち覚悟で止めるしかあるまい！」

「うーん、惜しかったですね。」

どうやら今さっき逃げられたみたいですね 明日の武闘会まで大丈夫

夫ですか？」

ニヤニヤした不審な男。いかにも「私、人の裏を斯くのが大好きです」と存在だけで伝える気持ち悪さ

「良いだろう…」

明日になれば久しぶりに闘える。

久しぶりの武闘会、初めて本気で闘える環境……アイツと全力で暴れられると思えばどうという事はない！」

物騒な話をして明らかに堅気でないアピールして無駄に凶悪なオーラを発しているグラサンの大男。

奴が自制のためグツと拳を握っただけで市民は危機を察知し、周りから人が消える。

それはさながらモーゼのアレのように…

「外見に似合わず楽しみはとっておくタイプなんですか…」

まあ、今日はゆっくり休んで明日は気が済むまでストレスを解消してください。ダンダーグ」

2人の半端無いオーラに武者震いが止まらず、ただ歩き去っていくのを見ることしかできなかった皇女専属近衛兵筆頭（お守り）のゲオルグ。

「相討ち覚悟で倒すと意気込んだが俺とは次元が違いすぎる。もう帝都は…厳密には明日の武闘会はオシマイかもしれない……」

緊張状態から回復した際に無意識に眩き、プレッシャーに耐えた反動でまたげっそり痩せていた。

:

:

:

:

「ノエル殿！

今日の私は上の特等席で観てると……早い話し拘束されて自由に動けぬ。

しかし、そんな事で大人しくする私ではない。合図を送ったら攫って欲しいのじゃ！」

皇女ながらがつちり固められた警備を如何に気付かれないように抜け出せるかに全力を出すジールって馬鹿なの？  
馬鹿なふりした切れ者なの？

なにより、そんな事でいちいちどや顔をされても知らんし攫わんよ。いつも死ぬほど働いてるゲオルグさんを休ませる為にもたまにはジツとしてろ！



コレだから権力を持った落ち着きのないチビ助はイカン！

「前から思っていました。がハッキリ言わせて貰います……お前はもう少し大人しくしてろ！」

国を挙げて武闘会を開いてくれたのは感謝しているが時と場合を見てから判断しろ。

それにいつもお前の事を心配してる駆けずり回ってるゲオルグのこともな……」

「むう……」

「俺は開会式に行くから行くが今言ったことをよく考えてみてくれ……」

ゲオルグさん、アナタに変わって俺はチビ助に言ってやりました……だから昨日見捨てたのはこれでチャラにしてくれませんか？

……

……

……

「いや、開催前日なのにうまくエントリーすることが出来ましたね。」

これもあの方のお陰ですね Mr・KARATE？」

「そうだな。『誠意ある交渉』の末に『快く』承諾してくれたあの老人には感謝しても仕切れん…」

これで心おきなく暴れる権利を得たわけだからなあ。」

怪しい2人組

「ほえ、あつち見てもこつち見ても強い奴等ばかりやね！

こぎゃん太っ腹な武闘会ば開いてくれたヘラス帝国：ココの担当になって本当、ラッキーやった！」

何度となく周りにいる選手の顔ぶれを確認しては小躍りする陽気な武闘家

「エロール！決勝戦まではあの男にバレないようにして、最後は全力を出して優勝しろ。

賞金ガツポリだぞ！」

「……テレーズ、武闘会出場はただの手段だ。

金に誘惑に負けて旅の目的を忘れるな！

バレンヌにも危険が迫ってるかもしれないんだからしっかりしてくれよ！」

開催者枠でねじ込まれたこの場には似つかわしくない美女と銀髪の詩人の2人組

そして、その他大勢の一杯選手や客席からの歓声にいい気になってる下馬評では最有力とされる優勝者候補

「皆の者！今日の武闘会の覇者は破格の賞金と最強の名誉を手に入れることができるのじゃ！」

この闘技場も離島にあつらえたのは他でもない。  
蹴りや殴りは勿論、魔法、種族の固有能力やアーティファクト…周りの被害を考えずに持てる力の全てを出し尽くすことに専念してもらいたいからじゃ！」

殺しだけは御法度、5カウントルールじゃがそれ以外は特に取り決めはないし、ある程度の怪我也治す手配もしてあるから安心して欲しい。

では……第一回ヘラス帝国最強を決めるの祭りの開幕じゃア！」

それぞれの思惑、欲望、願いが渦巻くヘラス帝国最強を決める武闘会はついに始まった。

S a ・ G a 3 5 (後書き)

最近思ったのですが、ゆっくり過ぎてトロいぞポケ！早く美少女との絡みが見たいんだッ

という方は感想に書き込んでください。

古代人を誘き出す為に開かれた武闘会：

1日が経ち、予選は全試合が終わったが一言で纏めるとお祭り状態だった。

どの実力者達も挑んできた素人選手から気付かれないように手加減してある程度打ち合い、最後は優しくリングアウトさせる紳士の集まりだった。

逆に負けた一般選手の方も『あの選手の胸を借りれたぞ！』なんて喜ぶ奴等が殆どでルンルステップで客席に移動して行く。

492

俺の相手はあのリュウチャンだった。

『殴るなよ！絶対に殴るなよ！』なんて眼を見て後退りながら言われてもネタか本気が迷うだろ？

結局、『ナツプ』で眠ってもらったが、この武闘会がメガロメセンブリアで開催されていたら正義の魔法使い（笑）は気を利かせずに全力を出してただろうから観客はブーイングの嵐だったに違いない！

「よし…これより本戦の開始じゃ！」

此処からも予選と同じく勝ち抜き戦じゃが、ある選手から名前の変更届けがあった！

『Mr・KARATE』が本戦からは『ちよつと本気のカラテ』となる。」

ジールも大人しく観覧席から試合を眺めて、司会をしている

偉いね！武闘会の進行くらい1人でできるもん！つてか？

それにしてもMr・KARATE改め、ちよつと本気のカラテ……  
できれば最後まで闘いたくない相手だ。

天狗の面で顔を隠していても見覚えのある胴着と刺すようなオーラ

……

なによりも……

「始めッッ！！」

今、ちょうど始まった。『ちょっと』本気のカラテ対バルログ

「……………」

脱力してじりじりと相手へ近づいて行く。しかし、フットワークのような追い詰める動きではなく殴りやすい位置に移動するだけだが…それが恐い

観客も『ただ近づいて殴るor遠当てによる完封』で飛び抜けた実力を発揮してきたMr・KARATEに『無名の化け物』なんて称号が付き、ごつい漢のファンまで付いてた。

それに引き替え、バルログはヘラス帝国西部で幅を利かせるの豪族出身の闘士だ。

素早い動きで相手を翻弄し、一方的に攻めると最後には華麗な技で勝利してきた紛れもない実力者

ただし…ファンは女性だけ。

男からは確かに強いのは認められているが気障ったらしい態度が全てを台無しにして嫌われているナルシストさん

万が一ってこともあるから暇つぶしに見るか……

「美しくない仮面にファイティングスタイル……本来ならば視界にも入れたくないが仕方ない。せめて私の引き立て役とし……「フン！」チツ！」

あ！演説に夢中になっていたバルログはギリギリで空手チョップを避けたが仮面にひびが入った。

つていうかバルログ……このままだとやけに女からの声援が多いだけのお馬鹿さんだぞ？

Side 『ちよつと』本気のカラテ

「美しくない仮面にファイティングスタイル……本来……」

コレが本戦進出者か？あまりに無防備！あまりにも無駄が多いッ  
！！

思えばこの大会はノエル以外に心が躍るような人間がない……  
次の強者に期待してさっさと片づけるかね。



「フン！」

「チツ！口上の最中に攻撃とはな…極限流とやらは卑怯者の集まりだな！」

交渉の末にこころよく出場権を…更には極限流で勝ち抜いて欲しいと奥義までも授けてくれた老人を侮辱するとは半殺しでは済まさん。

「……………来い、嘗めた口を二度ときけなくしてやる。」

「ほう！そのセリフは俺のスピードについてきてからほざけ！」

どうやら見た目通りの高機動型らしいな…

分身の数は1、2、3、4人だけか。この程度ならばバレンヌに残してきた弟子達の相手をしたほうが遥かに有意義だがたまには暇つぶしもいいか。

「……………」

後ろに回り込んできたから手の甲で軽く撫でてやったがそれだけでふらついているとはな。

絶対の自信があったらしいスピード攻撃が止められたことによる動揺も隠しきれしていない。

あまりにも心身共に打たれ弱すぎる

「速さを売りにするにはスロー過ぎるな…  
早く本気を出させてくれないか？」

「まぐれで当てた一発とはいえ、なかなかの威力だ。  
少し見くびっていたらしいな…此処からは本気で血祭りに挙げてやる…！」  
「ヨー！」

突如体勢を変え後方回転をした勢いを活かし遙か上空からの浴びせ蹴りか。  
高所の利を知る以上は少なくとも口だけの男では無いらしいが甘いな…

「ハッ…暫烈拳!」

迎撃のビルドアップから従来のマシンガンジャブに老人の奥義を取り入れた新技へ繋げる。

「虎煌拳」

更なる威力と速さを手に入れた気弾で追い討ちをかける。

「飛燕疾風脚」

起き上がりにもまでは単発式だったが連撃が可能になった稲妻キックで蹴り飛ばし、再びダウンを取る

「今日はもやし野郎の厄日だねえ……」

「ふざけやがってツッ!  
もういい……殺し御法度なんて甘いルール等関係無い。  
奈落に突き落としてやる!」

「それは楽しみだねえ。よし…俺からは殴りに行かん！カウンター以外の行動はしないから好きに打ち込んでこいよ…もやし野郎。」

・

・

・

「エロール…バルログは奴に少しでもダメージを与えられると思うか？」

ヘラス帝国サイズのポップコーンが入った箱を抱え込み、股座にびっくりサイズのコーラと完全装備を手に入れて観客状態のエヴァから話しかけられた。

「そりゃ無理だろ。予選中もバルログからオーラを感じたし、さっきなんか物凄い熱視線を送られたけど…アイツが美醜で相手を判断しているのは確定的に明らか。」

一般人には視認できないスピードで縦横無尽に駆け巡り分身と時間差で攻撃してるが片っ端から殴り飛ばされてるからな。」

「……………そうだよな。」

あんな残念なハンサムがダンダーグに殴りかかっても5分と持つまい。

ほれ、ポップコーン食べるか？」

少しばかり貰うかな。

「口元に食べかすが付いてるぞ…闘う事になる俺としては少しでもスタミナを削って欲しいんだが…」

四角いリングの中ではビルドアップにより浮き上がったバルログに向かつて何度目かの『暫烈拳ッ』と技名を言いながら片手でマシンガンジャブを放つMr・KARATE

うーん…あれは控えめに見ても23HITはしてるな…Mr・KARATEが苛ついてる分それだけ重いから一発一発が石柱で突かれたような衝撃に襲われてるだろうな

その証拠にバルログの仮面は既に破壊されて自慢の甘いマスクが丸見えのボコボコになっている。

「見る…高速移動からの一方的な展開が持ち味のバルログが超反応正拳突きでボロボロだ。

可哀想にな…あまりに一方的過ぎて同情を禁じ得ん。」

俺はエヴァの隣に座りながらぼくと試合という名の公開リンチを眺めている。

「むむ！あれはバルログの必殺技、『レケナの螺旋塔』だ！  
どうやら勝負を決めるらしいな。」

「えらい詳しいじゃないか：もしかして知っているのかエヴァ？」

「うむ！『レケナの螺旋塔』は奴の決め技だ。  
本来の技名は『回転稲妻落とし』と言い、背面に回り込み脇の下から抱え込み天高く飛び上がり横回転を加えて頭から叩きつける禁じ手だが……ホールドが甘いな！  
よく見てろ！私の予想通りならばこれから面白いことが起きるぞ？」

「……………」

ハイペースでコーラを消費しながらワクワクしてるエヴァの横顔はそれはもうスっ気たっぶりのどや顔だった。

結局、空中で投げ抜けしたMr・KARATEはバルログを下敷きにして悠々と着地。

「なかなかどうして…上手いことやったな。  
あの筋肉達磨はこれで名実共にスターの仲間入りだな。」

「そうだな。俺はストレスが貯まったダンダーグの餌食になる次の  
対戦者が不憫で前が見えねえ。」

絶世の美闘士と下馬評にあつたバルログはプライドと顔、何よりも  
必殺技の抜け方を世間に公開され呆気なく敗北。  
バルログに勝利したMr・KARATEには男達から万雷の拍手が  
送られた。

S a ・ G a 3 6 (後書き)

バルログも所詮は前座です。

さらつと流しましたが、あのスペイン人に恨みがあるわけではありませんからね



『皆の衆、お待たせの！！武闘会もいよいよ大詰め…とつとつ準決勝じゃ！』

数多くの出場者がいる中でも予選から底知れない強さを見せてきた戦う詩人…『エロール』、極限流が誇る最強の刺客…『ちよつと本気のカラテ』、陽気なターミネーター…『カゴークフ』の3人が優勝候補と騒がれておるらしいが……さあてどうなるかの？

それでは準決勝、第1試合……エロール対ゼクトじゃ！！』

ジールのちよつとした演説の後に発表された対戦カードを聞いて観客達の期待が一気に高まりまだ始まってもないのに至る所から歓声が上がりはじめた。

そして舞台の上では、ノエルとゼクトと呼ばれた少年と間違えてしまつほど小柄な選手が向かい合っている。

このゼクト…予選から立ち回りで不利になるロープでその身を包み隠したまま勝ち進み、この場でも立ち尽くしている……

しかし予選から数多くの選手が挑んできたにもかかわらず誰一人として剥ぐことを許さなかった実力とミステリアスな風貌によってMr・KARATE達に迫る程の人気を獲得している。

そして客席ではポップコーンを食べるエヴァ、アヴァロンの変態に Mr. K R A T E はこの試合の結末がある程度見当がついている者達はのんびりと眺めているが、何も知らない一般客とその他の出場者達は食い入るように舞台を見ている。

「お前……正体はライフメーカーだろ？」

……年齢偽装薬でも使ったのか知らんがそんなちんちくりんのチビ助になつてでもこの場に來たのは認めてやる。」

「正体については、あなたの想像に近いですよ？まあ似たような存在ですがね。

それよりエロールさんあなたがまだ余力を残しているのは知っています。お互いお客さんには注意しましょうね？」

その言葉自体は丁寧だがその実、話し方と醸し出す雰囲気からどことなく『お前にそんな器用な事ができるのか？』とノエルに対する挑発を目的にしたモノと会場全体が感じた。

「うるっせえな、そんな事はお前なんかに言われなくてもよく分かってるんだよ。」

しかし、試合が始まる直前から言葉のジャブを打ち込むゼクトに面

倒くさそうに返すエラー。

こちら辺を軽く流したのは年季の差である。

「実はライフメーカーからあなたの事を一度聞いたのですが、その時の方があんまり楽しそうに話すのでそれ以来僕も闘ってみたくてうずうずしていたんです。あいにく今の僕はあの方に遠く及びませんが……まさか負けることはありませんよね？」

「へえ！自称とはいえお前がアイツの代理を務める……と。」

俺も一度ぶっ飛ばしてやりたかったんだ……レフェリーさん、今すぐリングから離れな……こんな所で突っ立っていると怪我で済まんぞ」

予選を通して数多くの選手を見てきただったレフェリーもリング上に漂い始めた異様な空気を感じてすぐさま飛び降り安全地帯に非難してしまった。

こうしてレフェリー不在という異例な空気の中で始まった割には舞台上の2人は睨み合ったまま微動だにせず様子見に徹している

試合前の様子を見ていた一般の観客は準決勝に相応しいド派手な攻防をすると期待していただけにいつまで経っても動かない2人の試合にしらけ始める

しかしエヴァやダンダグ…一部の選手は本能的に感じ取っていた。世界最高クラスの戦いが始まったと……  
実際、ある程度の実力を持つ者は舞台上の2人の一挙手一投足も見逃さないつもりで静かに舞台を見つめている。

「仕方ないなあ…お前が来ないなら俺からぶん殴りに行ってやる。」

いつまでも動きを見せないゼクトに痺れを切らしたエロールによって、とうとう試合が動いたが一般人では到底見ることすら適わない速度で舞台上や上空を所狭しと動き回る。

その動きは並の猛者やレフェリーでも目で追うのがギリギリの速度

……

一般客が視認できるのは突然の衝撃で吹き飛び、抉れた舞台とその破片、そして暫くしてから空中から叩きつけられたらしいゼクトと離れた場所から見下ろすエロール

実際は常に移動しながらノエルが頭部、顔、胸部、鳩尾、人体の急所という急所を正確に狙って拳を突き入れ、少しでも距離が空けば気弾を打ち込むというえげつない勢いで一方的に攻撃し続けていた。

対するゼクトはどうかして自身も攻めようとしてもエロールが繰り出す鬼のような攻撃の勢いから牽制の魔法の矢、重力魔法で鈍らせ避けるしかできない。

それでも避けきれないものは手で受け流すなど終始守りに専念して凌ぎ続けていた。

「エヴァンジェリン、アイツ等が何をしていたか分かったか？ やってる事は単純だが次元が違う……これだけで楽しめる闘いだ。これまでの余興に見慣れた観客達は見えていないだろうがな」

「そうだな！正直アイツ等は人型の化け物だからな…アレを観ても貴様は辿り着くつもりらしいが諦める。命に限りがある貴様では無理だ。今の私でもついて行くだけで精一杯だからな。」

「おやおや……いつもノエルの跡について行くエヴァさんでもギブアップ宣言が出るとは……正直、意外ですね」

そうそう、私なんか2人が一瞬で消えたと思ったら舞台がボロボロになっていましたよ。

アヴァロンに帰ってからスロー再生するのが楽しみです。」

そんな感じでいつの間にかエヴァを挟んで仲良く観戦するMr・K  
ARATEとシゲン

Mr・KARATEの中身であるダンダーグは久しぶりにノエルと  
…それも混じりつけ無しの純粋な全力と闘える事を夢想しながら試  
合を眺める。

その他の選手は2人の技や体の運びなど少しでも盗もうと集中して  
眺めている。

「ふう、エロールさんも酷いですね。  
こんないたいけな少年の喉元を鷲掴みにしたと思っただら情け容赦せ  
ず固い地面に叩きつけるなんて……」

「あ？何言ってるんだ？身体強化に障壁でダメージなんて蚊に刺され  
た程度だろうが……」

「まあまあ良いじゃないですか。  
これで逆立ちしてもあなたには接近戦は適わないと分かったんです  
から  
次は遠距離と裏技を使わせてもらいます！」

その言葉を合図にゼクトを中心に眩い光が覆い、その光が収まった後には髪が逆立ち、体から溢れ出す気が圧力を持ってノエルにぶつかる程で、これまでとは比べ物にならない程に強化されたゼクトが現れた。

これには観客は勿論、闘技場内にいる人間全てが度肝を抜かれたらしく、感嘆する反応がそこかしこで見られた。

それはリング上で対峙しているノエルにしても同じであり……

「おお！？初めて見る技だがえらい隠し玉だな。そうしたらさっきのは殴り損だったか！（すげー！金ぴかになりやがった。スーパーサイヤ人のアレみたいだな……）」

「究極技法・感掛法です。さあて、ここからが本当の闘いですよ！」

そこからは高速移動砲台と化し、異常にスピードが上がった魔法の矢や重力魔法による足止めに加えて、四方から突然現れる石柱で押し潰す魔法や氷縛も追加された魔法に接近戦では片手居合い拳を繰り出すゼクト

ノエルはノエルで幾らでも『切り札』を持っているがこの後に控える古代人戦の為に力の温存と手の内を知られる事を考えて使うことができない。

だからウィンドカッターやライトボールで魔法を相殺し練気拳で引き寄せ稲妻キックを繰り出すに留まり膠着状態に陥っていた。

逆に観客達にしたら大歓迎で、超スピードでの攻防が全く見えなかった前半戦とはガラツと変わり魔法の撃ち合いメインのド派手な展開に誰もが喜んでいる。

：  
：  
：  
：  
：

（どうすっかな…ライフメーカーとはいえ流石に殺すわけにはいかんし。かと言って、手を抜いて楽に倒せる訳でもない……）



ノエルは問答無用の必殺技ならば数多く知っている  
しかし、対象が一体だけで尚且つ、周りに被害が出ずにゼクトが戦  
う気を無くするような効果が見込める技がなかなか思いつかない

（この期に及んでまだ本気を出さず素振りを見せないなんて傷つくな  
あ。僕なんて感卦法でくたくたなのに……  
これじゃあライフメーカーの命令に逆らってまで抜け出したのに収  
穫ゼロだよ。）

ゼクトはゼクトで初めて直接会うノエルの底知れない力を知った。  
何より憎まれ口を叩いたノエルが実はウォーミングアップ程度の認  
識で自分と闘っていることにも気が付き始めた。

：  
：  
：  
：  
：

ノエルが突然ゼクトとの撃ち合いを止めその場に立つと何かをする  
のかと不審に思ったゼクトも釣られて静止した

「ほう！見てみるエヴァンジェリン…今からノエルが『初めて』ゼクトに向かって仕掛けるぞ。」

「それくらいは見てれば分かるわ！！」

果たしてゼクトがノエルの攻めに耐えきれると思うか？私はギリギリで死ぬと予想するがな…」

「エヴァさん…流石にあの人も時と場所を考えてると思いますよ？まああの顔をする時は大抵がろくでもない結果が待っているから正直心配ですが……」

そしてその場に居合わせた人間全てが思ってみない言葉を耳にする。

「よしゼクト！俺は決めたぞ！！もういい加減お前の相手も面倒臭くなってきた！

だからな…今から一度だけ全力を出して瀕死にまで追い込んでやるよ。

それでも満足できなかったら何度でも付き合っただけやるからお前も全力を出してみるよ！」

「分かりました！ならば御言葉に甘えて後先考えず、今出せる全力をあなたにぶつけますよ！！」

2人が力を溜める！

それに伴ってリング上に限らず闘技場全体もビリビリと刺すような鋭さを持つ空間へと変化し、バタバタと失神してしまう者が続出した時になってやっと解放される……

「契約により我に従え 奈落の王！！」

地割り来れ 千丈舐め尽くす 灼熱の奔流！！

滾れ！ 進れ！ 赫灼たる亡びの地神！！

引き裂く大地！！」

ノエルに向かって万物を飲み込み溶かし尽くす無情のマグマが轟々と唸りを挙げて襲いかかる。

「火の鳥ツツ！！もっと熱くなれよツ！！」

しかし、ノエルが対抗で放った鳳凰はゼクトが渾身の力で生み出した恐ろしい温度を誇るマグマと必然的に衝突したが拮抗など夢のまた夢…物ともせず一瞬でマグマを燃えカスすら残さず悠然と翼をは

ためかせして突進する

「これが…ゴッドバード…」

火の鳥はそのまま飲み込みと誰もが…ゼクトでさえ思い諦めた瞬間に急停止し着地すると右の翼で灼熱の抱擁をした。

:

:

:

「生命の水」

ギリギリで手加減したとはいえあの火の鳥から抱擁されたゼクトは全身がぐずぐずになるほどの火傷を負い、完全な死に体であり、逆に炭化せずはこの程度で済んだのは魔力で編み込まれたローブで全身を覆い隠していたからだ…

そんな死人に限り無くに近い状態だったゼクトはノエルに回復してもらいどうにか立ち上がることができるまでに持ち直した。

「まだやるかい？」

あれほどの超魔術を放ったというのにノエルはトレードマークの羽付き帽子が戦闘の際に損失しただけで全く消耗しているのを感じられず、ゆったりとゼクトに歩み近寄りながら語りかけた

「いいえ、あれだけこてんぱんにしてもらえたんです。それだけで十分ですよ。

今回の試合で改めて空の広さ、高さを知ることができました。

今にして思えばライフメーカーは僕がこうすると分かって話したのだとさえ感じますよ。」

首を横に振りすっきりした顔で言いきる様子は試合前から纏っていたどこか人間を見下したような印象も消えていた。

「いいか、今回はたまたま命があったが次は無いかも知れん。分かるだろ？」

「はい…流石に拮抗すらできずに破られるとは思いませんでした。」

「分かればいい…さて、古代人に余計な情報を与えてしまったが解  
決策がある。」

お前は次の試合で棄権しろ！いいな？」

「え！？でも僕はさっき誰がどう見ても…」

その言葉には流石のゼクトも驚き言いよどんだが……

「うるせえ！！」

敗者は勝者が言った通りにすりゃあいいんだよ……『タイムディシ  
ーバー』」

一言の反論すら許さなかったノエルがボソツと呟くと一瞬だけ世界  
が捻れたようにゼクトは感じた。

そして、ボロボロになっていた舞台はまるで録画映像を巻き戻すよ  
うにみるみるうちに元通りになり……

「……さあてどうなるかの？  
それでは準決勝、第1試合……エロール対ゼクトじゃ！！」

その時になってゼクトはようやく理解した……リングを修復したただけでなく『皇女が演説をしていたあの時』に帰ってきていたんだと……

「お、お前がゼクトか！

これまでの対戦者もなかなか強い奴等ばかりだったがお前は特別期待してるんだ……俺の期待を裏切ってくれるなよ？」

更に『前』は聞いたこともないセリフにハッと気付いてエロールを見ればレフェリーから見えないよう帽子を深めに被りこちらにウインクでサインを送っていた。

（何度でも付き合ってやる……そして棄権しろとはこの意味か……知らないでとんでもない人に喧嘩を売ってたんだな。  
悔しいけど、僕が勝てる可能性は無いな……）

「レフェリーさん、僕……ゼクトはヘラス武闘会での出場権を破棄します……」

「ええ！？

あの〜ゼクト選手？

今、何をおっしゃっられたのですか？もしよろしければ……もう一度繰り返していただませんか？」

レフェリーにしてみれば『自分が知る限り』突出した実力でここまです勝ち進んできたゼクトの言葉に驚き、慌てふためいて聞き返してしまっただ。

それも願わくば、一時の気の迷い又は質の悪いジョークと信じて…

「だ〜から！僕は棄権しますからエロール選手の不戦勝ってことをお願いしますね。

それでは失礼しますよ？」

しかしこれが現実。

ゼクトはハッキリ、キツパリとマイクを分捕り宣言すると自身の影に沈みさっさと転移してしまっただ。

「ええと……それではゼクト選手が棄権したので…準決勝第1試合は……ゼクト選手の棄権によりエロール選手の勝利です！！」



レフェリーがその場に残されたマイクを拾い上げると、せめてこの流れを変えようと高らかに宣言した。

だが、ゼクトの棄権というあまりの展開に理解が追いつかない会場は暫くの間は水を打ったように静まりかえったままだった。

## S a ・ G a 3 7 (後書き)

ねえ〜！大戦期で既に300歳のシヨタジジイなんだからこんなお茶目な事態が彼にも有ったはず！！

逆算してまだ100歳に届いてない彼には若干、若気の至りで大怪我してもらいました。

「タイムディンバー」

ターンを強制終了させる魔法

正直、S a ・ G a 系は攻撃こそ最大の防御だと考える作者は使い所に悩む……というか多分、使わないであろう魔法。

今作品では同系統の魔法との差別化を図るため、ある程度の時間操作ができる魔法として設定しました。

## S a ・ G a 3 8 (前書き)

携帯で執筆する時に寝ぼけてさ行の上の電源を押した時の絶望感…

こまめに保存しながらやる癖を付けないと駄目ですね〜

ジール第4皇女主催ヘラス武闘会

ヘラス帝国各地に存在する闘技場は勿論、裏世界からも腕に覚えがある強者が集まり、初代統一王者を決めるために昼夜を問わず競い合う…全ては己が最強の座に相応しい者と証明するために…というのが表向きの理由。

そして、この武闘会が開かれた真の理由はヘラスに潜伏する古代人を誘き出し、この場で始末する為だ。

ここまで多くの人間を見てきたがカゴークフ…俺は予選の時からこの男が怪しいと感じていた。

それは失踪した猛者の技を自由自在に扱うことや異常と言える回復力を兼ね備えていたからだ。

まあ、シゲンも変態が持つ独自のレーダーで胡散臭いと思っていたらしい。

そんな訳で準決勝第2試合は『ちよつと』本気のカラテVSカゴークフ戦…俺はカゴークフが少しでも不審な素振りを見せたら介入するつもりで闘いを見守っていたが……

「暫烈拳、暫烈拳、暫烈拳ッッ！！」

「あぶぶぶぶぶぶぶぶ」

開幕早々から、正直どこら辺が『ちよつと』と言いたくなるほどの勢いで攻めるMr・KARATE…それを必死に捌き、逃げ続けるが捕まるカゴークフ

「ひいひい…こぎゃん容赦なか攻撃ばするなんて…とんでもなか漢だ、Mr・KA…」「霸王翔吼拳ッッ」

「ちよつ、ちよちよちよちよ！？  
待て待て…待てえー」

それにしてもMr・KARATE…の中身であるダンダーグ（戸愚呂）！情け容赦ない漢だ。

「ノエル…Mr・KARATEは随分とえげつない奴だな。  
試合を観てるだけでトラウマが蘇ってきそつだ……」

俺でも気を抜いてたらリングで料理されてるアイツのようになるからな……

エヴァなんか俺が目を離れた僅かな隙に拉致されてサンドバッグに

されんだ

お互い、ダンダーグにはトラウマがあるからよく分かる。

「まあ中身がダンダーグだから仕方無いわなあ。次は俺とアイツで決勝だけど、どうするかねえ……」

お！練気拳を使った吸い込みからの連撃にゃはナイアガラバスターとは……悪魔だな。

「これでお終いか？

準決勝まで来たんだ……お互い楽しまないと勿体無いと思わないか？」

ダンダーグは余裕だねえ！

ウォーミングアップ感覚でやってるのが観てるだけで分かる

「へっ！余裕ツス！オレの本気はこれから……」

かろうじて立ち上がることができたがふらふらのへろへろじゃないか！

レフェリーさん……アンタに情けがあるならいい加減に止めてやれよ……

「エヴァ……アイツは古代人でかなりの極悪人かもしれないのに応援

したくなるよ…  
逆にこれだけ痛めつけてるとダンダーグが悪の幹部に見えてきたんだが…」

「はぁ？ダンダーグが悪人に見えると言ったのか？

私が見た限りだが、お前が弟子に稽古をつけてやる時もアレの一步手前くらい酷かったぞ。」

ええ〜！？自分が分からないだけでそんなに酷いレベルに居たのか…  
次からは注意しながら指導するか。

「……虎煌拳」

「アーーーーッ！」

闘いに飽きたらしいダンダーグが放った超スピードの気弾は予定調和のようにカゴークフに炸裂し、奴はそのまま場外まで吹き飛ばしされた。

「終わったな。次の試合はまたストレスの溜まったダンダーグだな…ノエル頑張れ！  
私はここで見守ってるから。」

コイツ、自分だけ安全圏から眺めるつもりか！？外道め。  
今日のアイツはハイテンションだからなんとしても闘いたくない。

「ちよ、バカ！古代人が出ないんだから無効！  
あんな状態のダンダーグとなんて闘えるかよ。とんずらするぞ！」

：  
：  
：  
：  
：

「……さて、このヘラス武闘会は初代ヘラス統一王者をこの眼で見たいという私の思いつきじゃった。

しかし開催までに多くの者達の力があつて実現し、開催後も手に汗握る闘いだけでなく本当に色々あったの。私も此度で考えさせられる事があつた。が、それは別によいな！

前置きが長くなつたがたゆまぬ努力と何者も寄せ付けない実力を持つ者……栄光の初代統一王者は……Mr・KARATEじゃ！！」

歓声がワツと溢れ出す。

しかし、Mr・KARATEことダンダーグは少しも嬉しくない。  
それどころかムツとしたオーラを隠そうともしない。



『ノエルと闘える』チャンスだからヘラス帝国にまで来たのに肝心のノエルことエロールが会場から消えた。

当然、彼にしてみれば面白くないし、自分よりも強い漢が存在するのになし崩し的に王者が決まったこの状況……今、自分を取り巻く全てが気に入らない。

だから彼は行動に移した。

「黙れッツ！俺は最強では無い…」

何よりヘラス帝国最強にも興味はない。俺が目指すのは世界最強だ！

シゲン、行くぞ。」

こうして、ダンダーグは言いたいだけ言ってさっさと会場を後にしてしまった…

そしてこの大会はMr・KARATEが残した余りにも鮮烈な印象により『Mr・KARATEに始まりMr・KARATEに終わった大会』と語り継がれてある意味伝説化し、翌日から街には『極限流』を探すミィハーが溢れたのは別の話。

街外れ、ダンダーグとシゲンが歩いている。

「全く、あなたは勝手な人ですね。  
賞金だけでも貰えば良かったんじゃないですか？」

「そんな物は要らん。」

それよりもあの老人から授かった『極限流』の方が価値がある。  
次にノエルと会った時こそ必ず……」

「はいはい……（ノエル、せっかくダンダーグのストレス解消と『アレ』の開発資金の獲得が狙えるチャンスだったのに……まあ、この人もある程度スッキリしたらしいから良しとしますが、あの金額……100万Dpは惜しかった……  
当分の間は恨みますよ。」

やはりアヴァロンの変態は変態だった。  
これで資金が手には入っていたら恐ろしい未来になっていたかもしれないがノエルは知らぬ間に救っていたらしい。

「そういえば、アナタ狙いの熱心なファンが後をつけてきてますがどうします？」

ふと、シゲンがダンダーグに話しかける

「知らんな…話があるなら出てこればいいのだ。  
俺達が止まってまで付き合う義理は無い。」

ダンダーグは正論を返すだけで歩みを止める気はないようだ…

「アンタがMr・KARATEの正体やる？  
オレはアンタの力が欲しいんやけん…ツラ貸しな」

ダンダーグを狙う熱心なファンが現れた！

Side 変態

この人はさつきボコボコにされていた選手A…  
あゝあ、あれだけ手加減されて負けたばかりだからよせばいいの  
なあ。

きつと空気読めない人なんですね。わかります。  
しかし、無謀と言えるほどの勇気とダンダーグの怒りを静める為の  
人柱に立候補してくれた自己犠牲精神に免じて助け船を出してあげ  
ますか…

「Mr・KARATE…どうします？」

やる、やらないは自由ですが勇氣ある挑戦者のお誘いをアナタは断

りますか？」

プライドをくすぐるような言い方でも十分ですが、期待していたノエルに肩すかしを食らい荒ぶっている彼ならば…

「いや…この男は死に場所を探していたのだろう。こつこつ手合いは後腐れ無いように、此処で楽にしてやるのが一番だ。」

ふふ…計画通り。

ダンダーグが存分に暴れまわっても被害が出ない場所……  
首都から遠く離れた森の奥地

「貴様に付き合ってやる…  
死ぬ気で来い。」

ダンダーグは構えることすらせず余裕の態度

「行くぞッ」

そして、全力で距離を詰めるカゴークフ

だが

「超霸王至高拳！」

ダンダーグが本気で撃った連気弾

一発目で足を止められ、二発目が命中、空中に吹き飛ばされた状態で駄目押しの三発目が当たった。

「流石、オレが目ば付けた漢やけん。オレも本気の本気は出してやらあー！」

カゴークフは気弾をモロに食らったのでボロボロになったが瞬時に再生、そのまま空中で体勢を直して着地までに変身を完了させた。

その姿は黒髪が金髪、大柄な身体は一回り大きくなり身の丈4メートル！更にカゴークフが発するプレッシャーも別人と間違える程になっっている

「さて、この姿にまで追い込まれたのは貴様が初めてだ……」

「貴様が噂の化け物か…ならば龍脈を使わざるをえん!!」

ダンダーグの身体が二回り…いや、三回り大きくなる。

今代のダンダーグである戸愚呂は龍脈の効果を限界以上に引き出し、並みいる強敵を蹴散らして受け継いだ漢。

元々、並外れたマッスルを誇る戸愚呂に更なるマッスル、スピード、タフネスが合わさり最強に見える。逆に並の人間が手を出したら強化したパワーに身体が追い付かずに破裂する…今の戸愚呂は存在するだけでも奇跡という次元にいる。

2人が立ち会うだけで周りの木々がざわめき、地面は唸りをあげる。

「やはり、貴様は極上の獲物だな。

それでは最終ラウンドへ…血と汗と涙を流せ!」

「能書きは要らん。

そんな暇があるなら拳の一発でもさっさと打ち込んで来いッッ」

そして勝負は小細工無し…2人のどつき合いへ移る。

両者の拳と蹴りは一発一発が必殺の威力を秘めている。

空振り、受け流した拳の延長上にあつた木々が衝撃で裂け、地面は踏み込んだ際に大きく揺れ動き、地割れが至る所で発生している！

戦闘の余波で周囲の景色は一変し、事情を知らない者が訪れたら巨大竜巻と地震に見舞われたような認識をするに違いない。

それほどの激しさを持つ闘いが現在行われているが、両者互いに一歩も退かない！

「貴様は身体の筋肉量と密度を上げ、威力も上がったが弱いな！」

「ふん…所詮は紛い物の力だな。」

貴様こそ図体ばかりで技のキレも無ければ回転が遅すぎる。

まるで話しにならないな！次の技で葬り去ってやる。」

「ハッ！甘いな、デッドリー…「遅いッッ」な！？」

ダンダーグは僅かな差を競り勝ち、顔面左上段順突き、鳩尾右中段掌底、顎を狙った右上段孤拳に股関節右下段回し蹴り、そして脇腹左中段膝蹴りを絶え間なく連続で流れるように繰り出した。

しかし

「フフツ…フハハ、ハツハツハツハ！」

どうした？貴様が俺を仕留める気で放った技もこの身体に傷一つ付けることは叶わなかったなあ！！

さあ、潔く俺の糧になれツツ！！」

ダンダーグが必殺の意思を込めた連撃を真つ向から受けきったカゴークフに目立った傷は無く、先の言葉から我が身の勝利を確信し、悠然と歩み寄っていく。

535

それを見たダンダーグは龍脈、常時発動させている集気法、果ては構えまで解いてしまった。

それは負けを覚悟したからではない。

「貴様は哀れな男だな…もう一度、自身の身体を試してみるがいい。」

既に勝敗は決していたのだ

その証拠に……



「そんな！？俺の最強の肉体が崩れていくだとオ！？  
有り得ん！こんな事は有り得る筈が無いのだ！  
貴様、何をしたツツ！！答える！！」

「活殺破邪法…貴様がその肉体を造る為の糧に取り込んだ犠牲者達  
の魂を解放してやった…  
最早、貴様には死有るのみ。」

「ガアアアア！！  
俺がツツ、俺こそが最強なんだ！！  
あの男を越えるまでは誰にも…貴様なんぞに負けられんのだアアア  
！！」

崩れいく身体…認められ無い現実…そして、遠いあの日あの男に敗  
北して以来積み重ねてきたモノが無に帰る。

「貴様が今日まで積み重ねてきた罪を数えながら死ねい！」

「こんな…こんな筈ではアアア！！」

その最期はダンダーグの一喝と共に放たれた気弾により、奇しくも武闘会と同じく吹き飛ばされながら空中でバラバラに分解、灰と化した…

「どうでしたか？」

最後の最後でなかなかの変わり種が来てアナタも随分と熱中していたようですね〜

それで……彼と闘えずに溜まっていたもやもやは晴れましたか？」

2人が闘っている間、いち早く安全圏に避難し見物していたシゲンがいつからかひょっこり現れ、期待を込めてダンダーグに問う

「……………下らん時間を過ごした。」

早くバレンヌへ帰るぞ。俺が目指す武の頂はまだまだ遠い……」

どうやら彼なりに得たものがあつたらしく今回のヘラス旅行も全くの無駄ではなかったようだ。

「はいはい、そうですね。」

それでは帰りましょうか！愛しのバレンヌ帝国へね。」

：

：  
：  
：  
：  
ダンダーグがカゴークフを倒したその頃、武闘会からとんずらした  
2人組はこれまた街の外れに存在する宿へ移動中だった…

「ノエル、結局この茶番劇は…一体何だったのかなあ。私は骨休め  
になったしトトカルチョで大儲けしたから別にいいがな！」

足取り軽く、スキップするほど上機嫌なエヴァ  
今回の賭博でかなりの額を荒稼ぎしたようだ。

これで、今までの味気ない保存食とはオサラバ。  
これからは1ランク…いや、2ランク上の高級保存食が食べると思  
っているのだろう。

「エヴァさんや…それは言わねえ約束だろ？  
古代人が出なかった…来ると思ったんだ…実際に、怪しい奴はかな  
り集まってただろ？  
陽気なターミネーターなんて言われていたカゴークフなんて最たる  
例じゃないか…」

それに引き換え、事業に失敗した経営者の哀愁と悲壮感が背中に取

り憑いたようなノエル  
当然その足取りは鉄球でも引き摺ってると思つほど遅く、とぼとぼ  
歩いている。

そんな時だった

「ヤッホー2人ともお疲れ様だったね。」

おかげでヘラス帝国で暴れ回っていた古代人の消滅を確認できたよ。

「

どこからか、突然湧いてきたライフメーカーによる衝撃の報告。

「「……はあ!?」」

正直、何が何だかさッパリ分からない2人にライフメーカーが丁寧に説明、理解したノエルとエヴァの疲労は更に増大してしまった…

S a ・ G a 3 8 (後書き)

これにて長らく続いてきたヘラス帝国武闘会編は終了です。

ぶつちやけ戸愚呂ダンダーグで裏武闘殺陣をヤリタカタダケー！

それに、主人公が優勝するのもありきたりで面白くないからこんな展開になりました…

何より、この主人公に完璧という言葉は似合いません

きつとこの2人が一番、それぞれの七英雄に与えられた異名…乱暴者と卑怯者に近いんじゃないかな？

「活殺破邪法」

S a ・ G a 3 … 幽霊に特攻効果の体術技

幽霊に関連づけて穢れた魂にも効果有りにしました。

大丈夫！S a ・ G a とネギま！の世界ならば…イケると思います。

「龍脈」

S a ・ G a 2 … 龍脈から力を取り込み身体能力を引き上げる魔法。

ただし、集気法を超えた無理なブーストだから使う側は使用後の異

常な反動と闘う覚悟が必要な魔法という設定

Mr・KARATE、本気のMr・カラテ

私のトラウマ…

小学生の頃に友人とやった格ゲーで発見、そして高校で別のゲームで再開。両方ともキチガイじみた強さで完封された記憶とキャラの設定から登場を決意。  
読者の皆様に伝わるかな？

S a ・ G a 3 9 (前書き)

今回は昔、この世界に来たばかりのノエルと今のノエルの考えの違いや変化、それぞれのキャラの立ち位置です。

ライフメーカーから驚きの真実を聞かされたノエルです。

エヴァからは「私は儲けた賞金と泡銭を使って遊んでくるからお前は宿で休んでいる」と有り難い御言葉を頂きましたよ。

エヴァの薄情者、このチクシヨーム！

「はあ…俺のダチにダンダーグって奴が居てな。そいつが全部、後始末までやってくれたとさ…」

俺も俺なりに頑張ったんだけど最後にビビってバックレたのが駄目だったんだろうなあ…お前はどう思う？」

「クエツ！クエツクエ！クエクエツクエ！（ププwwダセエ！そんなヘタレだから下手扱いたんじゃね？ていうかバカ？）」

「そうだな…お前だけだよ。

こんな時こそ気合入れていかんとダメだよな！

やっぱりお前は優しいなあ」

「クエ！クエ！？クエツクエツクエ！（そんな話しよりもご飯まだ？？好物の人参食いたいんだけど！）」



そんな訳で散歩がてらバレンヌ又出発から苦楽を共にしてきた旅のパ  
ートナー、馬鳥の国士無双号と語り合って癒してもらいに来ました。

アニマルセラピーの効果は半端じゃないですね。少しくたびれたと  
は言え元々はかなりモフモフで抱き心地最高の毛並み。  
何言ってるか分からないけどつぶらな瞳で俺を見つめ、首を傾げな  
がら反応を返してくれるカワイさ！

エヴァの10倍は軽く行くね！

「よしよし、今日の御駄賃にお前が大好きな人参を食わせてやるか  
らな？」

「クエー（ヨッシャー人参キター！）」

「おおっと！そんな興奮するなって。  
人参はどこにも逃げんだろっが。」

その後も満足するまでモフモフを堪能して完全にリフレッシュもで  
きたし、イイ気分転換だったよ。

：

：  
：  
：  
：  
そんなこんなで宿に到着したが、扉の向こうからイヤな気配を感じる。

昔からそうだったが、こういう『何か』を感じた時は決まって何か有るんだよな…

うだうだしていても事態は動かない。

勢いよく扉を開けて投入した俺だったが……

「やあ、ノエルさつき振りの再会だね。

実は毎度恒例、次の古代人が居るのであるう場所を伝えていないと思  
い出してね。

君達が泊まっている宿でどちらかの帰りをのんびり待っていたんだ  
よ。」

神のクセにメッセージャーをやっているライフメーカーが座卓の傍  
に寝転がっていた…

メッセージャーくらいだったら別にゼクトとかの下っ端でも問題な  
いだろとか言いたい事も有るがせっかく来てくれたんだ。

大人しく話しを聞くとしますか。

「実はね……」

「実は何？勿体ぶるなよ。早く言え。」

いつになくシリアスなオーラを出しているライフメーカー。  
それにしても自分で神とか言ってる割に最近はよく現れる…きつと  
勿体ぶってるのも仕事をサボる為だろうなあ。

「実は、もう一ヶ所ゲートが開かれた跡を見つけた。  
既に機能停止した無害な状態だったけど…  
そして肝心の古代人だけ足取りが掴めない。  
つまり、君達に次の目的地を伝えることができない。」

「ダメじゃん！」

予感があったんだ。  
いつもならすぐに教えるのにこの態度、そして部屋に入った時から  
感じたシリアスオーラ…

最初はとんでもない化け物級の古代人かとも思ったけど、蓋を開け

れば真逆…何処にいるのかサツパリ分かりませ〜んなんて予想の斜め上に行く話だった…

旅の始まりは突然であり、旅の終わりもまた突然だった…なんてなぶっっちゃけバレンヌから発つ時に『俺がいない間は頼む！』なんてカッコつけたから1、2年やそこらで帰ったらダサいわなあ…  
しかもダンダーグなんかは闘いたい欲求が溜まりきってるらしいからタイミング的にはbetterとは言えない！

今、バレンヌ帝国に帰ることは不可能っぽい…

どうする？どうするよ俺？

「ノエル君、なんだか悩んでいる所に割り込むように悪いけど…私達の搜索に引っ掛からないとすればもしかしたらヘラス帝国にいた古代人が最後の1人だったと思うんだけど…」

そうか…発想の転換！

古代人は全て退治できたと考えればそれもアリだな…

「なら仕方無いな…それでいくか。」

そんじゃま俺達はヘラスにもう少し滞在してからバレンヌ帝国に帰るがそれで良いな？」

「一向に構わないよ。」

ただ、ヘラスやメガロによって無理矢理に取り込まれるレアスキル  
持ちの少数民族は依然存在している…

そこで、彼らの受け入れをバレンヌ帝国に頼みたい。」

そうだよな…

バレンヌ帝国も元々は1つの村。それが大陸内に点在していた村や  
多民族国家を統合、吸収して列強からも安易に手出しさせない国へ  
成り立った。

ウチの大陸は余計な争いごとは無いが世界は300年前から飽きも  
せずあっちこっちで小競り合いしてるからな。

それも大概の場合が『平和のため』なんて言ってるが、穏やかに暮  
らしたい人間からしたらいい迷惑だな。

そのことを考えれば犠牲になった者達に同情もできる。

それでも俺は

「ライフメーカー…俺からは何も言えん…

幾らバレンヌ創成期から生きる人間と言っても所詮は一市民だから  
な。

何よりも今回の安易な回答でバレンヌ帝国に無用の戦いが降りかか  
るとしたら尚更だ。

悪いがそう易々と手を貸すことはできん。

これが俺の正直な本音だ。」

「……………切実な問題だからね。それに他にも言いたい事、有るんじゃない？」

こういう所はライフメーカーにかなわないと感じる…

まあ、こんな機会はそうそう無いから語らせてもらうかね。

「思えば今日まで約350年…ウエスペルタイアの僻地…ボクオーンと出会い、世界の現状を知り義憤に駆られたまま『世界を変えてやる』と突っ走ってきた…

だが、最近ふとした時に思うんだ。

戦争が終わってもまた何処かで戦争が始まり、いつまで経っても変わらない世界…ならば、バレンヌ帝国で暮らす仲間が穏やかに暮らせればそれだけで十分だなと…」

今にしてみればあの時は若さが持つ勢いとチート能力があればガンガン世直しができるとか考えてたんだから若いよな…

まあ、実際はそう簡単に行く訳なかった。

今から国を潰すだけでも一苦労だ…ヘラス、メガロ、バレンヌで長年続いてきた三竦みも何処かが動けば均衡が崩れる。そうなれば泥沼の戦争が待っている…

ままならん世の中だ。

「……………そうだね、まったくその通りだ。  
私も自身が創った世界とはいえたまにウンザリする時がある。  
事実、戦争と無縁なのは君達が治めるバレンヌ帝国とアリアドネく  
ら이었다よ…  
バレンヌ帝国を創ってくれただけでも感謝しなければいけないのに  
済まなかったね。  
まあ、さっきの提案はダメ元だったしね…お互い出来る事、すべき  
事をこれからも果たしていこうか！」

ライフメーカーはダメ元と言いながら笑顔を浮かべたが俺にはえら  
く儂いように見えて、堪らなく罪悪感を感じさせられた…

「…そうだな、俺もお前にはまたいつか会いたい。  
その時は面倒事抜きで頼む。」

「そこら辺は努力するよ。  
……………じゃ、またいつか！」

座卓から立ち上がるとすぐさま転移して行ってしまったライフメー  
カー。

たった300年ぼっちの俺でさえ世直しを諦めたこの世界だ。まし

てや自身が創り出した世界で2000年以上は生きてると公言していたライフメーカーだ…

俺以上にダーティーな部分を見てきたにも関わらずそれでも世界の為に動く…俺なら放置することはしても守護神なんてとてもではないが務まらない。

きっとサルーン級の邪神になってる気さえする…それだけ長く生きるのはキツイ…

にも関わらず、ぶれず、曲がらず、肅々とこなすアイツには感嘆の念しか無い。

「さて、エヴァが帰って来るまでに荷物を纏めるかな！モタモタしてるとまたヤイヤイうるっさいからな。」

俺がいつまで生きているか…最悪、バレンヌ帝国が不要と思う日が来るかも知れんがぼちぼちやってくか！

：  
：  
：  
：  
：



その頃のエヴァは…

「ふう、なかなかどうして…上物のワインがあるとはな。それに人通りもあまり無いから穴場だな！

いつかノエルと2人で…フッフッフッフ

また昼間から酔っ払いながらふらふらと歩いているエヴァしかし、人がいないのも当たり前だ。

そこは『そういう』人間しか受け付けない場所だから。

実際、遠巻きに見ている男達の会話は「あの女、かなりイイ線いつてるな！」と誰かが言えば、「ありゃあ、3万Dpでも買い手が出るぜえ？」また誰かが返事をしてると「それにかんりの金も持っているな…カモだぜ！」なんてその筋の人間が集まってくる。と、まあこんな具合の場所だと分かってもらえただろう…

間違ってもエヴァが妄想するようなロマンティックなデートコースには使える訳がない。

残念！

「ん！？骨董屋か…まだ見ぬアーティファクトの予感がする。」

酔いどれエヴァさんは建物が半分傾き奇跡のバランスで存在している…そんな店に飛び込んだ！

「うん、いらっしやい。」

「二日酔いだからさっさと決めてさっさと帰ってくれ。」

「ハッハッハ！面白いジョークだ…マリオネット。」

「はへ？今日は身体が勝手に動いてるぞ？

こりゃ楽チンでイイヤ〜」

「容赦なくマリオネットを掛けても同じく重度の酔っ払いには効果が無いようだ…」

「運も無いエヴァ」

「この店で一番高価で実用的な物を出せ！

さもなければ、身体が半分に裂ける羽目になるぞ？」

「発達した八重歯を見せながら店主の身体に巻きつけた魔力糸を引っ張るなんてサービス満点」

「エヴァも『これならビビって働き出すだろう！』と確信した。」

「ウチに一般客向けの商品はないよ。」

「どうしても欲しいならこの人形をくれてやるからさっさと帰れ…ゲロが出そうなんだ…ウップ」

効果は今一つのようだった。

それでも一目見て歴史ある（ボロっちい）人形をタダで獲得！

他にも魔法球作成キットを調達することができてまたまた嬉しくなったエヴァが店から出ると……

「お前等、行くぞォ！」

「「「「「オォ！！」「」「」「」」」」」

あ！野生のごろつきが現れた！

ごろつきA〜Zの押さえつける攻撃だ。

しかし、エヴァは不敵に笑っているだけでダメージが無い！

エヴァの真空波！

ごろつきのグループにダメージ、A〜Zは倒れた。

「姐さん！ど、どうかあつしを家来にしてくださいませ。」

ごろつきが1人仲間になりたそうにこちらを見つめている。

「断る！今すぐに消え失せろ。  
ただし有り金全部置いていけ……………よしよし5000Dpがっぽり  
ゲットだな！」

ノエル達が真面目に話をしてる間、彼女は本当に遊んでいたのであ  
った…

S a ・ G a 3 9 (後書き)

もういい加減に原作に入りますが、新しい七英雄…特にロックブーケとワグナスは誰にしようか考え中です。

皆さんの中でもしもコイツがいいんじゃない?という方がいましたら一言ください。

S a ・ G a 4 0 (前書き)

まあ、ちよろつとしか出てきません

魔法世界にもある半島の先端とその沖にあるチヌ島、そしてバミューダ諸島を結んだ三角形の海域：バミューダトライアングルと呼ばれる場所が存在している。

そこは通過中の船舶や飛行機が突如何の痕跡も残さず消息を絶つ海域とされる。消息を絶つ直前にコンパスや計器の異常等の兆候があるとされ100を超える船や飛行機、1000以上の人が消息不明となっており「魔の三角地帯」と呼ばれている。

その海域の海底に在るはずの無いモノが存在している。

フォルネウスの海底宮殿

内部には魚類や海竜、水を領地とするモンスターが闊歩している。

そして最深部：アビスゲートがあるべき場所には巨大な円卓と椅子が4脚配置されており、ノエル達に倒された3人と少年がそれぞれ座っている。

：  
：  
：  
：  
：

「ふう…死に上がりの所悪いんだけど…みんな揃いも揃って倒されるなんて弛んでるんじゃないの？」

カゴークフなんて調子に乗って1対1の真剣勝負を挑んで負けた上に弱体化させられたらしいね。

昔から強さだけ追ってるから相手の実力も計れなくなるほど脳みそも力チカチになるんだよ。」

「テメエ！漢と漢の真剣勝負にケチつけるな！

あん漢との鬪いは昔、ダンダーグしゃんに胸ば貸して頂いた時と同じくらいオレの中で輝いてんやけん。調子扱いてると捻り潰すぞ！」

カゴークフは机に拳を叩きつけ威圧するけどそれが何になるのかな？  
それどころかあの時、一方的に攻められただけでダンダーグに手も足も出なかった癖に…これだから脳筋は困るよ。  
気を取り直して次はミトと話すか…

「はいはい、それは良かったね。おめでとう。

ミトさん…あなたは国1つ落としたのは評価するけどそれだけ…これからまた一から頑張ろうか？」

「……………（くそつたれが…）そういうアンタは私達が蘇るまでに何かやったのかい？」

「自分もミトの真似をして国を手に入れたよ…



いつの世にも欲深い人間がいるもんだね…それが自分達の首を締め  
ることに気付かないバカがね。

それに『テンプテーション』なんて無くても利益をちらつかせれば  
驚くほど簡単に靡いたよ。

たしか、メガロメセンブリアって言ってたかな？」

「ツツ！？」

アンタがやることやってたのは良く分かったよ。突っかって悪か  
ったね。」

ふう〜、昔ロックブーケに惚れた男を取られたのが今でも忘れられ  
無いのか色気に走るこの年中発情期女…さっぱり使えないな。

こういう時に頼りになる存在と言えば、やはり彼しかいないな。

同化のやり過ぎで性格が歪んできたのが玉にキズだけど…

「イルズコ君。君が一番最初に倒されてしまったけど、どうだい？  
君が担当していた大陸、君を倒した相手について何か感じた物は有  
るかい？」

「ノエルだ！この世界にはノエルが…七英雄がいる！

私はノエルによって倒されたのだからな！」

「…！？」

「イルズコ君。それは…それはほんまか！？」

やったらダンダーグしゃんもいるって事やる？  
どうなんだ！はっきりしろよ！！」「……」

「それよりもロックブーケとワグナス様よ！！  
居たの？居ないの？どうなのよ！」

コイツ等は昔からこうだ！時と場所を考えないこういう所が会議の  
邪魔なんだ！

「まあまあ順番に行こうじゃないか。

それでイルズコ君、本当に『あの』ノエルだったのかい？」

「そうだ！

短く揃えられた銀髪、軽装鎧に巨大な剣とあの剣の冴え、術法の知識と使い方…何よりも私が名を呼んだ時に反応していた！  
ここまでできたら間違いない、私達が知る七英雄ノエルだ！」

そうだったのか…この世界、バレンヌ帝国にノエルがいたなんて予想外だ。

しかし、明確な敵ができたから良しとするか…

「2人が知りたがっている他のメンバーについてはどうだい？」

「それについては分からない。  
あの谷が持つ不思議な特性の研究とアビスゲートの影を吸収する目的でいたのだから。」

ところで…この世界をどうやって手に入れるのだ？多くの次元を渡り歩いてきた末にこの世界に辿り着いたのだ。  
もう同胞達も限界に近いのではないか？」

そうだ、彼が言う通り、度重なる次元跳躍による疲労と住める環境が見つからないストレスで皆へとへと…今は違う次元世界で待っている…

あまり博打は打ちたくないがこの状況だ…四の五の言っている場合では無い以上提案してみよう！

「……良いかい皆、よく聞いてくれ。僕にはこの問題を解決する策が有る！  
ただし、七英雄を葬り去る替わりに新世界…この世界は消えて無くなるが良いかい？」

「私は賛成よ！」

ここら辺りで昔の因縁とはオサラバしないと前に進めないからね。  
まずはミトか…

「ふむ…この世界はなかなか面白い実験場だったが仕方無い。」

安住の地を求める同胞達の為だ…私も賛成意見を投じよう！」

イルズコ君も賛成…可決だな！

「ま、待て！

そぎゃん事ばして住処ば手に入れてもまたあん時の二の舞になるだけやろうが！？」

それに、そんな案はこん世界の人間も消すとゆうのが決まってる辺りがオレは気に食わん！！」

またこの男か…いい加減にしてほしい

「ならばカゴークフ！

君に代替案が今すぐこの場で出せるのか！

今この瞬間にも我らの同胞達は苦しんでいるんだからね。」

「そ、それは今すぐとゆうのは苦しい…」

「なら、半端な意見を出して会議を止めないでくれないか？  
コレは僕等の未来が掛かっているんだから！」

「ぐううッッ」

カゴークフ…今更、人情なんて持ち出すのはナンセンスだよ。  
まだ大人に成ったばかりで権力が無かったとはいえ、僕等の為に命を懸けた七英雄を裏切ったあの日、あの瞬間から外道に成り下がってしまったのだから…  
もう簡単には止まらないんだよ…

「……………さて！」

この計画はかなりの長期間を仕込みに費やし、発動してからも気が抜けない。つまり失敗は許されない。  
それでは説明するけど…」

：  
：  
：  
：  
：

「ノエル殿。 学術都市アリアドネーはいかがですか？  
バレンヌ帝国から出向して頂いている武官の皆様方からはなかなかの評価を戴けていますがね」

「そうですね。」

個人差はあれども大抵の者からは学を修めるといふ気を強く感じますから流石は天下のアリアドネーだと先ほどから感心しきりですよ。私も趣味で道場なんて開いてる一介の指導者としても見習わなければと感じる所は多いですから。」

「そのような高い評価を頂けるとは…ありがとうございます。」

しかし最近の若者達は筋が良い者が多い。お互い、更に高めていかなければいけませんね。」

まあ、あれから何だかんだあつたが無事バレンヌ帝国…麗しのアヴァロンに帰ることができた。

我等がバレンヌ帝国と太いパイプで繋がった巨大実験室という裏の顔を持つてるんだから……

そりゃ、メガロメセンブリアもおいそれと手が出せない訳だ！

確かに宝の山だが未知の魔法を開発し、それをすぐさま戦闘に活用する恐ろしさと世界的価値でガッチリ守りを固めてるんだからな。

まあ、いい加減見学してるのもアレだから呼びつけられた本題に入るかね……

「それで…開発してしまったたんでもないモノとは何ですか？」

「それでは学園地下39Fに行きましょう。  
そこにあるシエルターに保管してありますから。」

：  
：  
：  
：  
：

「うう〜！えらく寒い所ですね。

何が在るんですか？もしかして合成生物やらウィルス対策ですか？」

「…開発した者からしたら生き物でしょうか…  
さあ、この扉の先にいますよ。」

ギガガガガガガガガガ…ガッゴン

えらく重厚感たっぷりの音を発しながらゆっくり、ゆっくりと開いて4分の1まできたら止まった。

シエルター？いいえ、どうみても巨大な扉という名の壁がカチンコチンに凍りついたどでかい金庫です。  
本当にありがとうございます。

それで開いた所を申し訳ないけど…扉の中に閉じ込められてた冷気が此方に流れてきてこれまた一段と寒くなったので今すぐに帰りたい。

いや、こういつ時の

「セルフバーニング！」

絶対零度さんサヨナラ！コンニチハ温度調節された身体に優しい空気さん！

最初からこうしていれば良かったのに…無駄な我慢していたね。  
本当、トホホだよ……

「ノエル殿…なんだか喜んだり、落ち込んでいる所を悪いですが、先に進んでよろしいでしょうか？」



「ありゃあ！スイマセンねえ、寒さから解放されてはしゃぎすぎました……」

明らかに不審者に向けるジト目で此方を見つめる学園長には悪いが、俺は寒いだけは本当にダメだ。

こんな時間さえ凍りつくような世界に来てここまで我慢していたのを早くに察して欲しかったよ。学園長さん……

「実は今回あなたを招待したのはただ単に冷凍庫の中を歩かせるためではありません！」

あるお蔵入りした開発品を引き取って欲しいからです。」

「はあ……そうだったんですか……実物を見ないことには何とも言えないですね。（俺はゴミ処理業者じゃねえ！

しかも、学術的価値のあるゴミとか余計に困るだろうが……！  
もうつつとは気イを利かせるよなデコ助が……！）」

そのまま一番奥の部屋へ突入、最初に目に映った台座の上にはビツクリするモノが鎮座されていた。

「紹介しましょう！」

現在はあまりにハイスペック過ぎて封印されていますが、従来型の魔法人形とはパワー、スピード、思考力、魔力など全ての能力が進化した次世代魔法人形の最新最強試作品……その名も『メタルアル

カイザー』です。」

マジ、ありえん！

S a ・ G a 4 0 ( 後書き )

感想待ってます。

S a ・ G a 4 1 (前書き)

メタルアルカイザー：ブラックが酷い設定の上、けちよんけちよんにされてしまいます。

漢のブラックさんのファンという方が読まれる場合は注意してください。

アリアドネーの地下にはあらゆる物がカチンコチンに凍りついた氷の世界：俗に言うヤバい物を封印している保管庫が存在している。

そこに学園長からお呼ばれたからアリアドネーの地下39F…秘密の部屋にホイホイ来た。

そして最深部に鎧武者みたいドカツと鎮座した状態で封印されていたとんでもないモノを引き取って欲しいと言われた。

けどさ、メタルアルカイザーなんて貰ってもどうすんのさ!?

「学園長さん…本当にコイツを私が引き取るんですか?」

「はい、お願いします。この子は限りなく人間に近付くをコンセプトに開発、成功しましたが私達では手に負えない腕白坊主でして…」  
肩をすくめて「困った、困った」と続けたが、えらい淡々としてるな…

その様子からは、愛着の『あ』の字も感じられない。

この調子では開発までに掛かったコストの回収すら考えてなさそうだ…

造って動いたのを見たら満足してしまったのか？技術屋の考える事は、良く分からないな…

「それで手に負えないとは…どうやって止めたのですか？」

アリアドネーの戦力 カチンコチンのロボット…顔には出さないけど、もしそうならコイツ等ってホント馬鹿だろ。

「いや〜緊急停止システムが作動しなかったので、自爆スイッチで始末しようと思いました。

しかし、バレンヌ帝国から警護に来ていた武官の方々の力を借りて、やっと鎮圧、ここに運ぶことができました。」

今、確信した！

メタルアルカイザー…メタルでイイかな…どれだけ暴れたのか知らんが、欠片も愛されてねえー！

それにこの野郎め、稼働データを取るだけ取って処理に困ったから俺を押し付ける気らしいな……

汚いな学園長！流石に汚い！

裏はドロドロしているアリアドネーを纏めている人間だけある。

ただ逆に考えればアリアドネーに貸し1つ作れる事を思えば安いも

んか…

「それでは、お宅の精鋭部隊で抑えられないなら頂戴しましょう。ただし！これはアリアドネーへの貸しです。

そして引き取った瞬間からメタルアルカイザーに何が起ころうと口出し無用というのがバレンヌ帝国からの条件です。」

例えば貰って起動した瞬間に『不慮の事故』でバラバラのスクラップになっても因縁をつけられたらシャレにならんからな

「構いません。

それよりもアリアドネーが産んだ最強の魔法人形…メタルアルカイザーを可愛がってやって下さい。

それと彼の名前は『ゴレムス』です。」

「はぁ……分かりました。それではこれよりバレンヌ帝国のノエルがゴレムスの管理を致します。」

：

：

：

：

：

言質は取った！

まあ、名前も教えられたけど…どうでもいいか。

今は陽の当たる表の世界に帰ってきたところだけど温いわ、暖かいわ

やっぱり生き物に太陽の光は大事だねえ

多分メカ…アンドロイド(?)も氷の世界よりは嬉しいんじゃないの？

「お、い、一人で歩くなよ。」

問題起こしたら、また冷凍室でカチンコチンにされちまうぞ？」

「……………」

(・o・)ノ

まあ聞こえなかったのかも知れないよな…

「これから長い付き合いになるんだ。

聞こえてるなら反応くらいはしてくれよ？」

「……………」



( ^ ^ )

今回はゴレムスも気付くように肩を掴んで、身振り手振りで伝えた。それでも俺の手を振り払い先に行きやがった！

「おい、鉄屑野郎。」

あんま調子くれてんじゃねえぞ？

今すぐその場で止まれ。」

「……………もしかして俺に言っていたのか？

てつきり独り言の練習でもしてたのかと思ったんだが。」

(。。(

コ、コンニャロー！スーパーロボットだからリアルロボットだか知らんがスカした態度で舐めくさりやがって！

今すぐスクラップにして術戦車のパーツにしてやりたい衝動に駆られるがまだ我慢だ…

アリアドネーの研究者、学者連中の視線をそこかしこから感じるからな……………

バレンヌ帝国に着いてから思い知らせてやる。

「…ゴレムス、今からバレンヌ帝国の首都アヴァロンに帰るが大人しくしてろよ？」

もし暴れたら……賢いお前だからどうなるか分かるだろ？」

「ほう！それは願ったり叶ったりだ。

さあ何処からでも掛かってこい！後、俺の名はゴレムスなどとダサイ名では無い…ブラックだ…」

これから長い付き合いになるのだから名前くらいは覚えて欲しいものだがなあ……マスター殿？」

もうね…何なのこの欠陥ロボット？

中指立ててマスターに挑発するロボットを開発するなんてアリアドネーの研究者、学者諸君はバカなのか？

バカなんだろうな、きつと。

正直、こんな天上天下唯我独尊我が儘ロボットなんてタダで譲られても嬉しくないわ〜

なんていうかね……

癒やしが感じられないんだよ…

こう…ロボットは慎ましく、瀟洒、それでいて天然…

そう！アイギスのような子だったら喜んで引き取った。

こんなヤクザロボットなんて……嬉しくない！！

「もういい、俺も学園長さんがお前を手放す理由が頭でなく心で理解できた。」

今から言うのは子供でもできるお願いだ…

これ以上人の神経を逆なでするような真似はせず、大人しくしていてくれついて来てくれ。」

俺はブラックの態度を見て、怒りを通り越して呆れて、適当な調子で言ってしまった。

しかし、次にブラックが口にした言葉が俺の逆鱗に触れた。

「ハン！腑抜けが…」

「俺はお前みたいに自分の事しか考えないガキじゃないんだよ！」

「さあ〜どうかな？お前達こそどうだかな…人間達は束で来るから強いだけだ。」

何処かに武人の心を持った漢はいないのか…」

はあ！？このポンコツは武人なんて…どの口でナニ調子扱いたこと言ってるんだ？

今すぐに外装取っ払って先代ヘラス皇帝ゲオルグさんに土下座させ

たい！

ついでにメカ特有の剥き出し鉄仮面フェイスでまったく表情がなかったからまだ良かったが人間だったら間違いないくぶっ飛ばしてたかもしれなかった…

ただスクラップにするかは別として、早いうちに伸びに伸びたその鼻っ柱とプライドを叩き折る必要がある。

「だったらお前が望む1対1…ここに来てるバレンヌ帝国の戦士とサシの勝負をセツティングしてやる。

それで負けたら無駄口も叩かず大人しくしろよ？」

「俺とサシで闘って勝てる人間など存在しているのか疑問だが…良いだろう！その条件、飲んでやる。」

さてさて…貴様が二度とそんな口を利けないようにアイツに教育的リンチをして貰おうかね

「ダイナマイト！

久しぶりだが元気そうだなによりだ。

だが、お前はまた身体がデカくなったな？

マッスルばかり鍛えるのもいい加減にしておけよ…いざという時に

筋肉が動きの邪魔をして遅くなり、袋叩きにされちまうぞ！」

これは戸愚呂が先代を超えることが出来なかった最大の理由だ…  
その代わりに集気法から始まり、体がボロボロになるリスクも承知  
で竜脈を使用した。

その結果、体に掛かる負担を軽減、それでも効果は変わらないと改  
良した功績は大きい。

「ええ！実はコレでも絞ったばかりですが…やっぱりヤバいつすか？  
最近、食後のプロテインも控えてるんですよ？これ以上はマッス  
ルが痩せてしまうので嫌なんです…」

今でも2メートル弱ある身長にブ厚い筋肉の装甲を纏った男の名は  
ダイナマイト。

身体の至る所に傷痕があり、初見で堅気の人間とは判断出来ない。  
根は優しいのだが『見た目で損する』タイプの典型だ。

「ワハハハ！だから昔から言ってたんだ。

戸愚呂師匠に憧れるのは良いが筋肉の付けすぎだってよお！」

ダイナマイトを指差し豪快に笑う  
筋肉ムキムキマッチョマンがいる。

彼の名はフリッツ。

彼はとんでもないパワーを秘めており、掴んだら離さない握撃の使

い手で付いた異名はアイアンクロ―

子供時代からその力は顕現化しており、鉄パイプでバルーンアートの真似事をする子供がいると噂になり戸愚呂が自ら出向いて弟子に取った男でもある。

この2人はダンダーグの竜の穴が誇る武闘家コンビだ。  
なお、ダイナマイトはタフさがウリで先代ダンダーグ：死ぬ前日まで無駄に元気だった戸愚呂が気に入る程の耐久度を誇るらしい。

「それからキャット、ベア、エメラルドもどうだ？」

お前達の家族からは手紙を預かっているから後でゆっくり読むといい。」

「……ありがとうございます！ノエルさん。」

この3人は魔法がさっぱり使えないレスラー2人組みのフォーローと陣形を構成、攻防のバリエーションを増やす為に送られたが元気そうで何よりだ。

さて、彼らの調子もある程度だが知ることが出来たところで本題に入るとするかな。

「ところで、この中でアリアドネーが造ったロボットと闘った者は誰だ？」

「あ、私…キヤットとエメラルドの2人でいた時に出くわしたので叩き伏せてやりました。ですが、あのポンコツがどうしました？もしかして復活したんですか？」

キヤットさんよ…そんな上目遣いで心配そうに聞く仕草なんてされたら萌殺されてまうわ〜  
それに勘も鋭いね。ブラックを連れてこなくて良かったな。

「いやいや、封印は完璧だった。ただ、アリアドネーの学園長さんから、あの産廃廃棄物を引き取ってくれと言われてな〜  
世の中、助け合いが大事だからと安請け合いしちまったが、猛烈に後悔してる。」

ホント、予想以上の問題児で困ったもんだよ。

「そうですか、ノエルさんの心中お察しいたします…  
バトルジャンキーロボットは倒しても倒しても何度でも立ち上がってきて私達にとっては面倒でしたから。  
それでもノエルさんならストレス解消サンドバック用だと割り切ればピツタリですよ！」

意外にもポジティブなお言葉。これはエメラルドさんからのアドバイス？それとも皮肉ですか？

うーん、やるんだったらナットの一本すら残す気は無いからそんな使い方はしないし、処分するならシゲンの研究室に不法投棄かな？

「なあフリッツ、ダイナマイト。

どちらでも構わんが、タイマンでメタルアルカイザー…件のポンコツと闘ってくれないか？」

「良いんですか？

なら2人でジャンケンして決めます。

なので暫くお待ちください！ノエル大師匠。」

ダイナマイトが速攻で食いついてくれた。

それにしても大師匠か……久しぶり過ぎてむず痒いな。

:

:

:

:

:



「マスター殿よ、この男に俺のタイムン相手が務まると思つのか？」

腕組みしながら仁王立ち……何処までも自分の勝利を確信して疑わないブラック。

今から鼻っ柱をへし折ってやる！

「御託はいいからサツサとリングに上がって闘え。

そうすれば貴様が如何に小さな存在かがよく理解できる。

バレンヌ帝国の武闘家が対戦者だ。」

この野郎に一発ギャフンと言わせてやってくれ！

しかもアリアドネーの生徒達が集まり、ギャラリーまで発生した。賭けまで始まっているが、バレンヌ帝国の護衛が持つ力を再認識させる良い機会でもある！

頼んだぞ…フリッツよ。

「では……始めイイ！」

「行くぞツツ！！人間」

開幕早々フリッツに向けてダッシュするブラック。

プレッシャーを掛けながら組み付き、速攻で勝負を決める魂胆らし

い。

対するフリッツは完全に待ちの体勢

「これで一発KOだ!!」

そしてブラックはメタル造られた右腕を振りかぶり、必殺の意思を込めた文字通り鉄拳を繰り出した。

しかしただの鉄拳。

俺達からしたら力の伝導率を無視した体の使い方、そして大振りが無駄に隙のある打ち方……

「甘いな………ゼア！」

フリッツに軽々と手の平で受け止められ、万力のような握力で両方破壊された。

その後、ブラックが慌てて蹴りを打っても結果は同じだった。

膝から引きちぎり無力化…赤子の手を捻るようにまさしく瞬殺だった。

どうにか立ち上がるうともがいていたが、不可能だと理解。今は大人しく仰向けに寝ころんでいるブラック。

それを見下ろすフリッツ。

「どうでしょう、大師匠？。これならばかなり損傷が押さえられた筈ですが…」

いや、四肢が無いから損傷は酷いが…そんなことはどうでも良い。スカツとしたからそれでイイのだ。

「上等、上等！よくやってくれたなフリッツ！今日の礼に今度、俺が知ってる竜肉専門の美味い焼き肉店に連れて行って腹一杯、『これ以上は食べられない』と言つまで食わせてやるからな！」

「あざす！」

御期待に添えてなによりです！

それでは警護の時間が迫っているのですいませんが失礼します。」

「いやいや、こちらこそ悪かったな」

今日は本当にありがとうよ～～！」

フリッツが持ち場に帰ると同時に、アリアドネー生徒諸君も各々感

想を言い合いながら解散した。

俺も最後の仕上げをするか…

「さて…あれだけ調子扱いて文字通り手も足も出なかった気分はどうだ？  
うだ？  
んん〜？」

鉄は熱いうちに打て…自意識過剰な奴は弱った所に付け込め。  
これは初代ボクオーンの名言だが、あながち嘘じゃないから馬鹿に  
できんよ。

「俺の負けか…：情けをかけるくらいなら俺を殺せよ。」

甘いな！言葉責めの倍プッシュだ！

「何言ってるんだ？」

お前にかける情けなんて無いに決まってる？それより、貴様が抱えるくだらんプライドを木っ端微塵にしてウチで修理してから使い物になるように性根を叩き直してやる…：リタイアは認めんから覚悟しておけ。」

「勝手にしろ…」

自力で這う事もできないブラックを肩に担ぎ上げ、のんびりと術戦車を停めてある駐車場へ歩き出した。

S a ・ G a 4 1 (後書き)

「エメラルドさん」

ロマサガ2ではパジャマ姿のジェラールに、気前よくファイアボ  
ルを教えてくれる宮廷魔導師

ちなみに女性

大体の方が御世話になるはずのお師匠様

「ダイナマイト」

人間では最高のLP28!!  
それ以外はわりかし普通の人  
元ネタの人は初代タイガーマスクとライバルだった凄い人

「フリッツ」

格闘家の中でも特筆すべき点も無い普通の人。  
ですが、カポエラキックを初プレイ時に閃いた思い出が有るような  
…無いようなと考えて登場。

元ネタの人は『アイアンクロー』の異名を持ち、馬場さんともよく

闘った人です。

「キャッツ」

この人は……使ったこと無いです。  
ただ、意外に律義だったり、義理人情に厚い女盗賊なので作者は好きです。  
その足で踏みつけられたい……

アリアドネーでは一悶着あったが、バレンヌ帝国から派遣されているスタッフはリンチの一部始終を人間によるクチコミ情報から一層信用されるようになったようだ。

これぞまさしく怪我の巧妙ってやつだ…ラッキー！

そして新しく小間使い（仮）のブラックを仲間に加え、俺は愛しのアヴァロンに無事帰ることができた。

「で…そのロボットを持ち込んで来たという訳ですか？

あなたの前ではふらふらしてばかりで、遊び人と思われても仕方ありませんが、こう見えて研究者ですから忙しいんですけども……」

「シゲン、急に押しかけて悪いが、コイツの修理と新しいボディをあつらえてやってくれないか？流石にダルマ状態では使い物に成らんスクラップにしてリサイクルするしか道が無いんだ。」

俺はアヴァロンに着いて一服したらすぐに魔導研究所…変態のシゲンがいる研究室へ足を運んだ。

当然、ぶち壊してしまった現物を見てもらう為にブラックを担いで。

「うーん……」



まあアポ無し、顔パスで会うことができただけでもラッキーか…当然YESとは言ってくれない。

「スマン！この通りだ！

時間ができた時点で構わないからお願いできないか？」

頑固者が相手ならばDOGENZAを使わざるを得ん！

見るこのフォームを！古来より嘆願する為だけを目的に磨き抜かれ、無駄を排除した機能美！

これで限界です。

頼むから引き受けて下さいイイイイ！！

「そうですね、あまり勿体ぶって期待させてもいけませんからハッキリ言いますよ！

私にはこのロボット…ブラック君をバージョンアップをする事はおろか、修理すら不可能です！」

「な、なんだって〜！」

なんてこつたい、DOGENZAの意味は無かった…

しかも、変態技術者シゲンにして修復すら無理と言わしめるアリアドネーの超技術が生んだ魔法人形：恐るべし！

そのスーパー魔法人形、ブラックはアリアドネーで会った時の生意気な姿はどこへやら：すっかり覇気が無くなり討ち取られた落ち武者オーラを漂わせている。

中身はハイテクでも素人の俺にはダメダメロボットにしか見えない。

「なあシゲン：それならこのロボットはさっさと解体して術戦車や何かのパーツに変えちまった方が役に立つと思うか？」

「スクラップにする決断はまだまだ早いですよ、ノエル？」

私は魔力の運用法、新魔法の開発を自分のテリトリーとして活動しています。

早い話が別畑：型落ちした魔法人形ならともかく、最新式なんてとてもじゃ無いが手は出せません。

なので、今からその分野の友人を紹介致しますからパーツに変えるのはそれからでも十分ですよね？」

「おお！！やはりシゲンは凄いな！

何処に行っても顔が利くし知恵も出してくれる…本当にありがとうよ！

ほれ、ブラックも礼の1つでも言わねえか！！」

「……………」

返事がない……………ただのポンコツのようだ。

「…そんなじゃま、邪魔したな。

今日の礼は必ずするから待っていてくれよ?」

「別に人を紹介しただけですから礼なんて要りません…とりたい所ですが、稽古ついでにスービエと実戦組み手をしてくださいね? よろしくお願いしますよ。」

今日はそう来たか…やってやるよ!

「…構わない、ドンと任せろ!」

甘えっぱなしじゃダメだろ?

「頼もしい限りです。

それではノエルお目当てのプロフェッショナルが居る場所ですが…

……………」

そして現在

「ふむふむ…なんと！！ほほう、なるほど、あれがアレしてこうなってるよ……」

ノエルさん、あなたを裏切るように残念ですが……この程度ならば余裕綽々で期待通り、いやそれ以上の物を提供できると約束しましょう！」

「本当ですか！？ヒラガ7世殿！」

実はここにはシゲンに紹介されて来たのですが、本来ならスクラップにしてやろうと思ってただけに助かりました。」

そう！発明家の世界では有名人、一般人にとっては不思議なおジサンと呼ばれているヒラガ7世を頼りにやってきた。

「俺はまだ死ねないのか？」

これ以上、俺を辱めてくれるな！ひと思いにスクラップにしろ！！！」

アリアドネー以来、初めて喋ったブラック。

しかし、そのセリフはある意味フラグだぞ？

「だが、断ります。

キミはアリアドネーの技術の粋を注ぎ込まれて生み出された…いわば叡智の結晶！」

スクラップなんてとんでもない！データの収集と新理論の実践の為に無理矢理にでも生きてもらいますよお？」

ヒラガ殿はノリノリでブラックを観察している。

お！ヒラガ殿と俺、双方にメリットが出るナイスアイデアを閃いた。

「それならヒラガ殿に譲りましょう！

名前はブラック、どうか可愛がってやって下さい。」

「ノエルさん、分かりました。

ブラックは私が魂を込めて立派な漢…ロボットに改造してみます。

「

「貴様ツ！！」

ヒラガ殿とガツシリ握手を交わしていたらブラックが恨めしそうなオーラを送ってきていたがそんなの関係ねえ！

「そついう訳だ。

とんとん拍子に話が纏まったが不服そつだからもう一度言つてやる。

お前は今日からヒラガ殿の家族になれ！！

そつそつ、それと間違つてもヒラガ殿に暴力を振るつなよ？悔しかつたら俺が相手をしてやる。」

「必ずや貴様を後悔させてやる。」

まあ今にして思えばあの高慢ちきな態度とこの潔さもある意味では  
武人と言えなくも無い。

大前提として『間違った』というワードが必須だが…これからの成  
長に期待だな。

「それでは私は失礼しますがヒラガ殿、またいつかお会いしましよ  
う。」

その時は安くて美味しいメシ屋を紹介しますから。

ブラック、お前も達者でな！」

「それは有り難いですなあ。

では、またいつか…」

「な！？待て！俺をこのマッド野郎と2人きりにするな！

聞いているのか！？オイ、マステ…」

ヒラガ殿とブラックにも別れの挨拶を済ませたのでヒラガ邸を後に  
する。

そして、俺はアリアドネーから溜まっていたストレスが発散され、  
スッキリとした気分で家に帰ることができた。

S a ・ G a 4 2 (後書き)

はい、ヒラガさんが登場しました。

これからもちよくちよくネタとキャラを入れていきたいと思えます。

それと、今日初めてネギま！を読んだのですがかなり熱い展開と近衛の爺さんの格好良さにビックリしてしまいました。

## S a ・ G a 4 3 (前書き)

久しぶりにアクセスやら確認したところ、PV40万、ユニーク5万ありがたいですね。

これからもぼちぼちやってくのでよろしくお願いします。



バレンヌ帝国は建国以来500年…なかなかの歴史を持つ。ぼつと出の田舎国から、見事に軍事力最強の大国にまで成長することができた。

そして首都アヴァロンは、ここ200年で人口と民族の増加した為に…増築、整備と再開発を繰り返してきた。

その結果、新しく移民を受け入れるための新市街地。

あらゆる民族が古くから生活している旧市街地。

吸血鬼、悪魔、鬼など新しくバレンヌの民になったが、容姿とモンスターに対する固定観念で、様々な損をするモンスター達ものんびりと暮らすことができる特区。

大まかに分けて3区を併せ持つ、魔法世界でも類を見ない超巨大都市に姿を変えた。

なお、特区について誤解が無いように説明させてもらうが決して差別ではない。

再開発しようにも、肝心の場所が無かった。

結局：本家アバロンと同じく開拓、整地、建築までを、プロと共に  
入居希望者が力を合わせて開発。

そのうち自然と、その類の住民が集まって特区になったという歴史  
を持っている。

とまあ、何故ここまで特区について語ったかと言つと……

「皇帝陛下、バレンヌ帝国は財政は火の車とは行きませんが…新たに  
大学を建てたばかりの状況で、これ以上都市開発に割ける資金は  
ありません。」

「…そうか、なら仕方ないな。」

俺、シゲン、皇帝が全くのプライベートで、バレンヌ帝国について  
簡単な話し合いをしているからだ。

「陛下、ハッキリ言わせてもらうが、これ以上はバレンヌ帝国だけ  
で、異民族を受け入れるのは不可能だ！

魔法球の中で生活してもらつたら話は別だが…また、メガロメセン  
ブリアに付け入る隙を与えるのか？」

「亡命か、誘惑…拉致問題か、懐かしいな。  
あれには先代も驚かされたようだな。」

昔、ライフメーカーから、世で言う『魔眼』や『神通力』などのレアスキル持ちの民族を、保護して欲しいと嘆願して来た際…俺はハッキリと断った。

本音を言うなら受け入れたいが…ウチの大陸は手狭だ。  
開拓も粗方し尽くした感も漂っており、住処を提供出来る場所が見つかからない。

だから、心を鬼にして断った。

しかし、後日知ったが…ライフメーカーは、初代皇帝バリーの意志を伝承法で受け継いでいた…先代皇帝に、直談判。

これを皇帝は快く受諾、その年から国民が一気に増えた。

ヘラスは、あらかじめ事情を知っているゲオルグ帝だったので『国民が、自らの意思でバレンヌ帝国へ渡ったのだ。』と因縁をつけてくることは無かった。

他の国もそうだったら良かったのだが…

「昔から『技術提供しろ』だの、何かにつけて噛みついてきていたが…この1000年は何を考えてるのか静かだ。

それに50年周期で起きていた大戦はおろか、世界中で起きていた小競り合いも消えた。

まあ平和だが…もうじき150年だ。

流石に、ドデカい戦争が起きると睨んでるが…陛下はどう考えてい

るのだ？

「いっその事、戦争のどさくさに紛れてメガロメセンブリアを潰すか？」

それに引き換え、メガロメセンブリーナ連合は彼等をこき使ってたらしく…バレンヌ帝国に亡命したと見るや、国民を拉致されたと賠償請求シテキヤガッタ。

「こういう所には如実にお国柄とか出るよな？」

結局ヘラス、バレンヌの一時同盟で『人として恥すべき行為だ』と平和的に黙らせた。

それでもスパイを送るわ、貿易の邪魔はするわけで、いい加減にうざったいから公私共にどうにかしたいものだ。

だから冗談っぽく提案しているが、俺は本気だ。命令が有れば、速攻をする気は満々だ。

「そうですねえ。」

古代人の本体が見つからない…という問題もどうにかしたいですが、私も初代ボクオーン様の記憶を受け継いでから、随分経ちました…流石にあの国の態度は、酷くなる一方ですからどうにかしたいものですね。」

シゲンも俺と同意見らしく、メガロメセンブリアには良い印象を持っていないようだ。皇帝はどうだ考えているのか？

「2人の言うことは最もだ。

俺自身も雌雄を決しなければと考えている。

だが知つての通り、戦争には大義名分も必要だ。

俺の一存でも勿論可能だ…しかし、メガロメセンブリアを世界から消すために、このバレンヌを割るような真似は簡単にできん。

そして、国を平らげた後に残された難民の受け皿になるという責任も生じる。

何より、古代人というあまりに危険な存在が、このバレンヌ帝国を狙っているという可能性も捨てきれんのだ……」

皇帝も俺達と考えることは同じだったが、最悪の場合を考えるとどうしても動くことができない…と。

「そうだな、陛下の言うことは全くの正論だ。

俺の考えが足りなかった。すまない。

しかし、神であるライフメーカーが、古代人の本体を見つけれないとなると…次の世界に渡ったという可能性も浮上してくるよな。」

「そうですねえ、世の中ままならないものですね。」

「ふう…全く、お前達って奴は…」

この世界で突出した力を持っているが他国と古代人を同時に相手にするのは厳しい。この2つを片づけるためにはどうしたものか……この後は割とどうでもいい事に脱線しながらも3人会議は続いた。

:  
:  
:  
:  
:

Side メガロメセンブリアの将校

やっとこの日が来た。目の前には苦楽を共に乗り越えてきた仲間達がいる。

「時は来た…俺達はこれから戦艦でバレンヌ帝国に奇襲をかけ、一気に滅ぼす！」

なお敵の反抗は厳しく、作戦は熾烈を極めるだろうが恐れることはない！我等は元老院で開発した技術によって最高の身体を手に入れた最強の兵士だ！

今こそヘラス、バレンヌに存在する蛮族を根絶やしにし、メガロメセンブリアを世界の覇者へ押し上げるのだ！！」

「『『『オオオオオオオオオオオオ！！！！！！』』』」

フ、どうやら気合い十分のようだな。

まあ、それもそうか…

血の滲むような訓練、地獄のような人体実験を幾度もの繰り返しを経て、ようやく人を超えた力…竜種でさえ刃向かう気を無くすほど強大な力を手に入れたのだ。

しかし、それも一握り…最初は連合各国から集まり数多くいた仲間達も1人、2人と倒れ、50万人いたらしいが1万にまで数を減らしてしまった。

俺達は彼等の無念も背負う！

このまま攻め込みメガロメセンブリーナ連合を戦勝国にすれば世界は平和になる！

私はそうなると確信している。だからこそ、リスクを承知で理想を実現するための礎になったのだから…

「諸君！明日の作戦の成否がこの世界の行く末を決定づけると言っても過言ではない！

だから英気を養って欲しい。それでは解散！」

さて、私も明日はバレンヌへ発つ…これまで気にしなかったが生き

残る保証は何処にもない。最後まで残ってきた家族と話しをしよう。

:  
:  
:  
:  
:

#### 旧世界：麻帆良学園

明治時代、広大な敷地を贅沢に使用して設立された巨大学校である。そして設立当初から全国でもいち早く、初等部から大学部までを揃えるなど歴史と名声を兼ね備え、企業や商店街が集まるなど城下町ならぬ学術都市という存在まで抱える学園の枠を超えた学園。

そして裏：というより真の顔はメガロメセンブリアの日本支部であり、強力な認識阻害魔法が常時発動されている危険地帯でもある。

そして認識阻害のために無理が効く麻帆良の祭りはハジケテイル。

#### まほら武闘祭



最強を決める闘いを開催し、誰にでも参加資格アリ、噛みつき、金的、果ては武器有り、魔法有りとルール無用バリエーション…まさに麻帆良らしさを顕現化した祭りだが安全面は大丈夫なのだろうか？

そんなことは置いといて

「へへ！ここでもオレが一番強エ男だつてことだな！案外、麻帆良つて所も大したことねえな。

ジイサン、優勝したんだからさつさと賞金くれよ！賞金、賞金、賞金」

今年のチャンピオンが決まった。

並み居るライバルを蹴散らしたその者は口調から分かるように性別は男だがかなり知性は低そうだ…

しかし、戦闘時は流石に別人だろう。

では彼は、誰もが納得するパワーとスピードを兼ね備えた武闘家？それとも老練なテクニクと魔法を使いこなし、計算し尽くした試合運びで相手を翻弄した魔法使いか？

いや、違う！

「これ大人しくせんか！！！」

つたく…今年のまほら武闘祭の王者はナギ・スプリングフィールド、10歳にして栄光を掴んだ最年少覇者の誕生じゃアアア！！皆様方、彼に盛大な拍手を！」

王者の名はナギ・スプリングフィールド。  
怖いもの無し、チャキチャキの10歳児！

肝心のバトルスタイルは「粉碎・玉砕・大喝采！」……まあ、有り余る魔力を使って力任せに魔法を発動し力任せに勝ち進んだテクニクもクソも無い持ち前の才能とパワーで押し通した馬鹿

そして主宰者の老人の言葉により会場からはチャンピオンを称える割れんばかりの拍手が沸き起こる………はずだったが

シーンとした無音の空間

正直、観客からしたら少年が闘うらしいぞ？ あら不思議、可愛らしい はあ？なんか雷出したよね？ アレが今年のチャンピオンと  
かあり得ん……

という具合に頭の中でオカシイと思う感情とコレは正常と思わせる認識阻害の効果がせめぎ合いフリーズしていたのだ。

それほど、ナギ・スプリングフィールドの存在は鮮烈で異端の存在だったのだ。

そんなフリーズなど露と知らず、もの凄く居心地の悪いリング上の  
主宰者と王者ナギ

「ほれ！賞金とカップの贈呈じゃ！邪魔だからさっさと何処かへ行  
け。

それでは、此度のまほら武闘祭はこれにて閉幕、また来年をお楽しみに。」

老人は今回のごたごたを消したいがためにポイツと渡して部下と共に記憶消去の魔法を掛け始める。

「ハア！？何だよ！

チクシヨウ！こうなったら意地でもオレより強い奴に会ってソイツをぶっ飛ばしてやる！

待ってやがれよ魔法界！今からそっちに行つてやるぜ！」

学校をドロップアウトしてたまたま出場したとはいえ、あんまりな対応に納得いかないナギ少年は故郷の魔法学校で噂になっていたゲートのある場所と魔法世界を思い出し、バカだからすぐさま行動に移した。

魔法世界が今どのような状況かも知らないのに下調べを全くしないまま……

S a ・ G a 4 3 (後書き)

私はナギの存在によってまほら武闘会が見直され廃れたと勝手に考  
えています。

それと、感想待ってます。

皇帝、シゲン、俺の3人で語り合ったあの日から一夜明けた次の日の早朝、メガロメセンブリア所属の軍艦が何の前触れもなくいきなり攻めてくるという事件が起きた。

幸いにもメガロメセンブリアが仕向けた戦艦は最短ルートでアヴァロンを目指してヤウダ沖から来たからワグナスと弟子達の魔法で返り討ちにしたから被害はゼロで済んだが、そこからが問題だった。

サクツと片付けてホツとしたのも束の間、意外や意外その戦艦に乗っていた人間…というより面影はあるが半分人間辞めたような化け物達が海から現れた。

しかし、ワグナス達の冷静な立ち回りによってそいつらも撃退、一部は石化する事に成功し、シゲンが勤めるアヴァロン魔導研究所にサンプルとして送られて再び現れた時のために今頃は弱点、耐久力、攻撃力を始めとしたあらゆる角度からデータを取っているが、最初に判明したのはホムンクルスではなく元人間という衝撃のデータが出た…

過程は分からないがメガロメセンブリアは人間を化け物と掛け合わせ兵器とする技術を確立したようだ。

そしてバレンヌが襲撃された同時刻…ヘラスも同様に襲撃を受けていたらしい。

ヘラスにはバレンヌ程の武力が無く首都近郊まで戦艦の侵攻を許し

てしまったようだったが、それでもヘラス帝国にはバレンヌ帝国には無いものがあつた。

龍樹を筆頭に帝国を守護する聖獣の存在だ。

彼等の圧倒的な力によりメガロメセンブリアの戦艦はクルーごと存在を抹消されたことにより、事なきを得たようだ…

技術と武力は随一だが他国に比べて領土が狭く補給する際にいささか難があるバレンヌ帝国。

ヘラス帝国のルーツは亜人の自由を求める組織らしい…つまりその広大な国全体が有事には団結する強い絆と行動力で闘うことは三国一だった。

実際、素早い進軍と連携を武器に渡り合っている。

残るメガロメセンブリアが盟主として君臨する連合。ここはウエスペルタティアを始めとした長い歴史を持つ老獪な国々が多いだけに不気味な存在だ。

超巨大な領土と物量に物を言わせ昼夜を問わずに戦闘を始めることができる力と冷酷さ、戦場では各国の固有魔法やスキルはもちろん、毒や同士討ちの呪いなどの搦め手、酷い場合は悪魔召喚にも平気で手を出してでも勝ちに来る恐ろしさ。

最近では、ライフメーカーの保護下に入っていない部族を襲撃、洗脳してまで武力の確保を始め、悲しいことだが再びライフメーカーに『鍵』を使わせてしまう原因にもなっている。

こうして魔法世界はヘラス、バレンヌの両帝国とメガロメセンブリア

ア率いる連合による世界を真つ二つに割つた大分裂戦争に突入した。しかもこの戦争は当初は自由を勝ち取るだつたのがいつの間にか他国はウエスペルタイアに存在している聖地を理由に戦っているすり替わつてきたから非常に夕チが悪い

そんなある日、皇帝から七英雄に緊急召集が掛かった。

「…七英雄の皆、よく集まってくれた。

今このような状況だからこそ君達にしかできない話がある。手元に配った資料に一度目を通してくれ。」

流石の皇帝も戦争が起きて以来ギリギリまで動き続けているため日々の疲れが抜けないらしく、随分と気が滅入っているように感じられる。

それを皆が感じ取り、どう切り出すか考えていたが…

「おいおい皇帝さん、今更かしこまった態度なんて無用だぜ？。厳密には違うが俺達はバレン又建国以来の仲だろ？」

「そうよ、1人を除いて残りの者は今では立派な皇帝様が『バリィさん』なんて呼ばれてた時代からの付き合いだつたんだからねえ…遠慮なんかしないで用件を言いなさい？」

あつけらかんとした調子で今代のスービエであるギルガメツシュとロックブーケのシエルミーが口を開いた。

コレには皇帝も驚き、同時に肩に入っていた力がフツと抜けて話し始めた。

「皆も知つての通り、昨日で開戦から1ヶ月が経った…」

その間の連合は異常な回数 of 侵攻作戦を展開しているが兵の疲労を省みない…これではまるで世界の覇権を取るのが目的でなく世界を破壊するのが目的なのではと、そんな考えが数日前にふとよぎった。

「

確かに配られ資料に記されたデータには戦時とはいえメガロメセンブリアは世界中で連日連戦しておりヘラス帝国もそれに負けまいと勢いを増しているのが分かる。

しかしだ…

「陛下、しかし我等がこの戦争から手を引く事ができたとしても他国の勢いは止まりません…逆にエスカレートしていくでしょう！その考えが真実として如何されるおつもりですか？」

「昔前ならばステルスを搭載した戦艦で一気に国を滅ぼすことが可能だったが現代は他国にもある程度の技術が揃ったためにそれもできなくなつた。」

「ノエルよ、俺とてそれぐらいはお見通しだ。」

そこでお前達にはバレンヌの外……実際に戦地を渡り歩き探りを入れて欲しい！今ここで動かなければ大変な事になると俺の勘が囁く



のだ！  
頼む！俺の頼みを聞いてくれ。」

そういつて頭を下げる皇帝。

しかし、バレン又帝国内で活動するのではなく外部へ赴き調査する…しかも、この御時世にだ！予想の斜め上をいくプランに流石の一同も絶句モノの願いだつた。

「ちよちよ、ちよ〜つと待つておくんまし！

世のため人のためなら吝かでもおまへんが、ワテらがバレン又帝国から消えてもつたら必然的に、守りも薄くなってしまいまっせ！？」

クジンシーのエビス丸が当然の意見が出る。コレには全くその通りだと言わざるを得ないと七英雄側の意識が統一された瞬間…

「まあまあ〜こういう時の為に私がヒラガさんと共同研究した魔法人形が生きてくるんですね〜

実は七英雄の皆様方の戦闘力を10分の1程度の人形ならばサクッと量産化できるようになりましたよ。本当にナイスタイミングですね〜。」

変態のシゲンがタイミングを計つたように入ってきた。

『何で都合良くできたんだ！ホントはヤバい物だからお蔵入りして

いたんだろ?』とか『どうでもいいが10分の1なんてそれで役に立つのか?』と疑問が出た

しかし、それも「一体程度なら他国の猛者でも倒せてしまいますから数で勝負です!

それと本当にヤバい物はこんなモンじゃありませんよ?」とシゲンが言った事により沈黙。

いつの間にか座席まで用意したシゲンも交えて話し合いが進み七英雄の全員が外へ行くことに決まった。

## S a ・ G a 4 4 (後書き)

クジンシー…エビス丸

リメイク版S a ・ G a 2より忍者のクラスでイメージしてください。

ボクオーン…エヴァンジェリン

引き続きエヴァさんがボクオーン、完全にチャチャゼロと本家の人形、さらに魔力の系によるマリオット繋がりからちなみにS a ・ G aで言うと軍師系の能力

ダンダーグ…ジーン

ダンダーグは格闘が強いキャラでバキより勇次郎からスタートし、一度は北斗キャラに行き着きましたが面白くない！  
世紀末パロディのG O D H A N Dというゲームの主人公から採用。

クラスはもちろん武闘家

ワグナス…八雲 紫

はい…すいません。魔法が強い女キャラがさっぱり浮かびませんでした。許してください。

クラスはホーリーオーダー に相当

ロックブーケ…シエルミー

分かる人には分かるK O Fのシエルミーさんです。

魅力があること、雷が使えることを考えたら浮かびました。  
クラスはアマゾネス系

スービエ…ギルガメッシュ

金ピカの方ではありませんよ？先代スービエはイカ娘で触手でしたが、こちらは多腕で剣術を繰り出してもらいます。

ちなみにイーストガードに近い存在

新七英雄の紹介はこれで終わりです。

感想お待ちしています。

皇帝から命令された俺達、七英雄はまず手始めに厄介な連合の盟主様であるメガロメセンブリアを潰そうと考えた。メガロメセンブリアが黒幕なのか、それともただの手駒の1つに過ぎない存在かは分からないがこの戦争の勢いを大きく削ぐことができるからだ！

今は古代人の1人、龍山山脈をアジトに活動していたミトが滅ぼした村が麓に存在していた場所、その廃村は表向き連合の領土だがバレンヌ帝国の領土であり、密かに設置したゲートにアヴァロンからジャンプして大陸に乗り込んだのだが：

「やあ！久しぶりに会ったねノエル。

それと君達バレンヌ帝国が取った行動は、私の予想したその中でも五番目に合理的だよ。」

ゲートを抜けた先にはどういう訳かライフメーカーが待っていた。

「それで今回現れたのは何が目的だ？ひょっとして古代人の本体が見つかったのか！？」

「そうだったら良かったのだけどね…残念だけど違うよ。君達は『赤き翼』という傭兵集団を知っているかな？」

ライフメーカーが現れたからには古代人かと思っただが傭兵集団の話しか…赤き翼だか黒き翼だか知らないが期待はずれだな。

「いや知らんな…お前達は『赤き翼』なんて奴ら知ってるか？」

「……………」

七英雄の仲間に見えたが誰も知らないようだ。

「赤き翼…彼らは連合の側について戦っている。常に全員、と言っても5、6程度の少数で動くが彼らが現れると劣勢から一気に優勢へと戦場の流れを変える程の力を持った集団…それが『赤き翼』だ。」

淡々とした調子で情報を伝えるライフメーカーだがそれは俺達にも言える事だ。

それよりコイツが何を考えているのかが問題だ。

「…そいつ等がどうしたんだ？」

お前が言づくらいだから意味はあるのかもしれんがそれほど重要な事か？」

「実は赤き翼の出現によってヘラス帝国が逆に劣勢になってきた：それに伴いヘラスの内情も危うくなってきている。ヘラス帝国に行つてくれないかな？」

そうは言われても、メガロメセンブリアを潰せば連合は瓦解し戦争の勢いは止まる…当面は凌げるのだ。

ヘラス帝国の内情など関係無い。これで滅びたとしてもそれがヘラス帝国の寿命だったと解釈するしかない。

「よおライフメーカーさんよ、さっきからごちゃごちゃ言ってるが俺達が助ける義理は無いんだよ。

それよりメガロメセンブリアをどうにかしてからだ。そうすりゃ戦争は無くなるからな！」

「神様には悪いけど、ヘラスの人達よりバレンヌで頑張っている仲間の方が大事なの。」

この話、到底聞ける内容じゃないわ。」

直情タイプのギルガメッシュが文句を言うのはいつもの事だから諦めているが、基本的に温厚な性格のユカリまで断固とした意思を込めて言ったのには全員が驚いた。

しかし、その意見はあらかじめ予期していた内容…そして俺達の創意だと判断したライフメーカーは再び話し始めた。

「どうなるうとバレンヌ帝国には関係無いと仰いましたか…ところがヘラス帝国のゴタゴタはバレンヌ帝国と決して無関係なんかじゃないんです！  
むしろ大有りですよ？」

ライフメーカーはおどけた調子で言ってきた。  
正直メガロメセンブリアを潰すためにわざわざ来たところに突然の足止め、そこにこの口調だ！  
人をおちよくってるのかとさえ感じてイラつとしたが我慢は大事だ。

「ライフメーカー！そいつはどういう事だ？お前も忙しい中ここまで来てくれたんだ。詳しく話してくれないか？」

しかしこれだけ勿体つけた割に口ほどにも無かったら一発ぶん殴ってやる。

：  
：  
：  
：



「つまりヘラス帝国のクーデターが成功した場合、次期皇帝になる野郎…大臣のサイフリートは裏でメガロメセンブリアと結託している。」

そういうことか…」

先代ゲオルグ帝が選んだ継承者であり現皇帝のトーマ帝は典型的な文官タイプ…その程度の情報はバレンヌ帝国も手に入れている。

しかし戦争に突入してからトーマ帝が軍事に優れないのをいいことに、ゲオルグがいた時代から仕える古株のサイフリートが幅を利かせ急速に勢力を伸ばした。

そして大臣という立場を利用して『進言』を理由に何かと皇帝に楯突くようになり、とうとう情けない皇帝に変わり自らがその座に着くと息巻きクーデターまで企んでいるようだ。

ただ後釜に着く気ならとやかく言わないが野心家のサイフリートはメガロメセンブリアと裏で結託して最後は全世界の独裁を目論んでいる…それがライフメーカーから聞いた情報。

こういう時ほどお天道さんならぬライフメーカーは悪事を全部お見通しというワードが似合うシチュエーションは無いな。

この調子で古代人も見つけて欲しいものだが、難易度の厳しさが伝わってくるからあまり強く言えない。

メガロメセンブリアに着いたばかりなのにヘラス帝国に行くのは面倒だが、解決しなければ相手は全世界……これでは流石のバレンヌも厳しい。

「そう……ヘラス帝国がそのまま滅びるか、それとも生き延びることができたかでこの戦争の行方……世界の行方に大きな変化をもたらすと言っても過言では無い。」

メガロメセンブリアに来たばかりのところ悪いが、私の意見を聞いてヘラス帝国へ行ってくれないか？」

「バレンヌ帝国の一大事なら見逃せまへん！」

正義の忍者……もとい七英雄たるワテらの出番がとうとうきたみたいでんな！なんだか燃えてきまつせ〜」

エビスは初代クジンシーの気質をかなり濃く受け継いでいるからムードメーカーでもあるが詰め甘い所があるんだよなあ……致命的なレベルでもないし時と場合を考えてるから別にいいけど……

「ハイハイそこまで……意気込むのはいいけどうっかりしてるところがあるんだから空回りしない程度にしておきなさいよ？エビス？」

案の定シェルミーが釘をさした。

シェルミーはロックブーケを継いだ人間だけあり、一般からしたら

かなりの美人に分類されるしそれとなく気も利かせるイイ子なんだ  
…でも彼氏いないんだよなあ。

「ノエル、この流れからしたらヘラスに行くことになるがどうする  
んだ？メガロメセンブリアも放っておけないと私は思うのだが…」

「エヴァか…そんな分かりきつた事を聞くなんてどうしたんだ？」

エヴァからは少しばかりガツカリとしたオーラが発せられているが、  
それは気のせいではないだろう。

「いや、私はメガロの奴等に半殺しにされるなど沢山の借りがある  
からな…どうやって料理してやるうかと楽しみにしていたのだが仕  
方無いよな。」

「そんなしょんぼりした顔で言うな…ヘラス帝国が一段落したら、  
またメガロメセンブリアを潰すために動くからよお…」

「そんなしょんぼりした顔で言うな…ヘラス帝国が一段落したら、  
またメガロメセンブリアを潰すために動くからよお…」

「そうだな…そうだよな。バレンヌ帝国の為なら仕方ないからな…」

そりゃあ俺もメガロメセンブリアを潰せるならそうしたいが、流石  
にヘラスのサイフリートはどうにかしないとヤバいだろ。正直、面

倒臭いけどな…

「よし、聞いてくれ！メガロメセンブリアに来たばかりで悪いが今すぐヘラス帝国へ出発するぞ！」

「七英雄の皆には私の転移魔法で移動してもらおうから時間はかからない。これくらいしかできないが頼む。」

こうして全員が納得してヘラス帝国に行くことになったが…なんだかなあ、こうまでタイミングが良いと釈然としない。

それに赤き翼という傭兵集団も現れた。

今は対ヘラスに投入されているが、いずれはバレンヌ帝国にも仕掛けてくるだろう。

もし遭遇することがあれば早めに潰すとするかね…

S a ・ G a 番外編（前書き）

その頃、バレンヌ帝国のシゲン達は……

## S a · G a 番外編

私の名はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。

連合の盟主メガロメセンブリアに所属する諜報員…スパイを生業とするしかないダンディーだ。

まあ、自慢じゃないが仕事に関しては、常にプロフェッショナルと呼ばれる程度には評価されている。

仕事柄、他国に渡ることが多い。場合によっては、上層部にいる人間とも巧みにコンタクトを取る技術もお手の物だ。

そんなスペシャルなスパイである俺が今、かなりヤバい事になっている。

コレだけでは分からないだろうから説明しよう。

全てのきっかけはあの時…  
戦争が始まって間もないある日のことだった。俺は本国の役人から、緊急の呼び出しを受けた。

「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ…貴様は連合最高のスパイと呼ばれる男。この評価に間違いは無いな？」

「まあ、最高のスパイかは知らないがプロフェッショナルという自覚はある。」

「よろしい…貴様に任務を与える。

西の大陸に存在する忌々しい野蛮国家…バレンヌ帝国に潜入しろ！  
今すぐその国に渡り、重要機密は勿論、新技術、魔法のあらゆる情報を手に入れてくるのだ！！」

「分かりました。全力を賭して執政官様の御期待に沿えるよう動き、見事データを手に入れて見せましょう。」

この手の野郎には経験上、恭しい態度をしておくに限る。

そうすれば、無駄に長い話を早めに切り上げてくれるからだ。

「クックック…ガトウよ、この任務の成否が戦争の行方を左右する。

そして、作戦の責任者である私は高く評価を得ることができる。

その為に、わざわざ貴様を呼び出したのだ！

あまり私を失望させてくれるなよ？分かったなら行け！！」

そして命令通りバレンヌ帝国に潜入…化け物国家に言われているが、抜け道の1つくらいはある…苦勞はしたが達成した…それにしても、初っ端からハードだ。

そして現在は、潜伏場所である特区…モンスター街に存在するB A R『魔の巣』を中心に活動しているが、肝心の情報についてはさっぱりだ。

このままでは、世界最高クラスのスパイである俺が、ただのダンディーなウェイターになっちまうじゃないか！  
こうなったらちよつとばかり危険を冒してでも…

「おい、ガトウ。ウチのエース（上客）から酒の注文だ。手エ空  
いてるのお前だけだから、今から行ってこい。」

む？マスターの夢魔からまた配達のお知らせか…  
やはりダンディーな男はダンディーが分かるのだろう…ここに来てからこんな重要な仕事ばかりだ。

「では配達をしますが…その常連さんの住所は何処ですか？」

「ん？さっき言ってなかったか？」

まあいい、帝国魔導研究所に勤めるシゲンさんだ。  
入り口で止められても、この店の名前を出しや通してもらえろ。」

コイツは渡りに船だな。それにしても、マスターの瞳はたまに怪しい光を出すな。

流石は俺が認めるダンディーだ！



「分かりました。それではひとつ走り行ってきます。」

いきなりバレンヌ帝国が誇る化け物研究所に公認で入り込めるとはな…

やはり、この店を潜伏場所に選んだ俺の勘は冴えていたな。

それにマスター…アンタもダンディーだったぜ？俺には負けるがな。

さあて、本格的に仕事を始めようか！

ガトウが行ったのを確認したマスターはグラスを磨きながら意味深に呟いた。

「フツ、ガトウよ…お前はよく働いてくれた。だからコイツは俺から哀れなダンディーへ俺の魔眼を特別ボーナスだ。せいぜい良い夢を見るんだな…」

：

：

：

：

：

「待て！！関係者以外は立ち入り禁止だ。  
今すぐ、ここから立ち去るのだ！」

第1関門：警備員か。

ここで遊んでる暇は無いんだ。サクッと通してもらおうか？

「BAR『魔の巣』の者です。

商品をお届けに参りました。コレがその商品と従業員証明です。」

「ふむふむ…夢魔の謹製ワイン、夢の雫だな。」

「それと…（シゲン様から連絡のあった通りの男だな）うむ！大丈夫だな。今回に限り特別に通ってよし！！」

「ありがとうございます。」

よしよし…今日は全てがスムーズに進んでる。  
こうなると、逆に帰りが怖いぜ

チェック中からガトウの自信満々な表情を、今は彼の歩き去る後ろ姿を見つめる警備員達。

あまりに滑稽だから、ふと口から思いが洩れてしまった。

「あゝあ、可哀想に…」

今日のシゲン様達のストレス発散用スパイはアイツってことか…  
敵ながらいろんな意味で哀れだ。」

「そうだな…普通、商品なんか俺達が受け取ってオシマイだろ。  
それより仕事に戻るぞ。」

「おう！」

「ふう、ここがバレン又帝国の化け物研究所内部か。

それにしても、無駄に階段が長いな。いつまで経っても、次のフロアが現れないのだが…

知力だけでなく体力も試すという事は、それだけ嚴重な物があるのか？」

警備員をクリアしたガトウは階段をひたすら上り下りしていた。  
小一時間も！

「あ！その階段は、使用者登録しないと無限に続きますよ？」

「あなたは？」

「私はスカイア。この研究所で働いているスタッフの1人です。  
（こうして見ると、流石のダンディー（笑）も汗だくだと年相応の  
オッサンにしか見えないわね。」

説明しよう！

いくらガトウでも、普通なら階段の昇降運動くらいでは汗はかいても、爽やかオジサンにチェンジする程度だ。

この階段は日頃、あまり動かない研究所スタッフの為に、超重力の  
応用で若干の負荷が掛かるように設計された運動不足解消マッスイ  
ーンでもあるのだ！

無論、アヴァロンの変態…シゲンによる無駄に洗練された無駄な技  
術の1つだ。

説明終了

あまり無用な接触は控えるべきだが、この状況だ。仕方無いな

「私はガトウと言うものです…実は…大事な届け物がある…次のフロアに…行けるように…してくれませんか？」

ガトウは疲れからか、いつものキャラを捨ててハアハアしている。

「（うわあ、ハアハア言ってる！）え、ええ…それくらいお安い！  
用よ！」

スカイアさん…アンタって人はいい人だよ…  
せめて感謝の気持ちだけでも伝えたい！

「ありがとうございます…ごじます。（ハアハア、ハアハア…）」

「……………この変態」

「ええええええ！？」

この瞬間、ガトウはスカイアによって気持ち悪いスパイと言いつら  
される運命が確定した。

：

：  
：  
：  
：

「ついに研究所最深部にたどり着いたぞ……」

途中、何故かかえるの王様が出たり、コロッセオで緑色の鬼と戦ったりもしたが、夢の雫を守り抜いてやっとここまで来た！

ところで、なんだか凄く大事な事が他にあつたような気もしたが、忘れてしまう程度の事だ。  
大したことは無いな！

ユクゾ！！！！

「チワーツス！BAR『魔の巣』からご注文の夢の雫をお届けに上がりました〜」

さあハンコをここに！サインでもいい！  
それで俺のミッションは完結するんだ！

「ほら、見なさいシゲン。  
今日の方は今までの軟弱者達とは違って、ここまで来ましたよ？賭  
けは私の勝ちのようですね？」

「ふう…私は強鬼に倒されると予想したのですが、やられましたね。  
コウメイもなかなかできるようになったんじゃないですか？  
それでは約束通り、私が代金を払いましょう。」

ん？軟弱者？今までの？

……ハッ！！思い出した！

「大人しくお前達の知る技術と情報を渡して貰おうか？」そう！俺  
はメガロメセンブリア最高のスパイ！  
そしてスペシャルダンディー！  
ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ！

「コウメイ、面倒臭いから、あなたがアレをやってみなさい。」

「はいはい、マリオネット」

「バカな！？俺の身体が勝手に動く！？  
いや、勝手に『動かされてる』んだアアアア！！！！」

右腕は頭の方へピシッと曲げられ、左腕は腹という違いはあるが同

じよつにピシッと曲げている！  
そして右足を上げて左足にクロス…それはまさしく『シェー』のポーズ。

俺の説明はこれで終わりだ。そして今に至る…

「（くそ、無音拳も封じられたか…コイツは今までに無い危機だな）スパイである俺のことをどうするんだ？こんなポーズをさせるだけじゃないだろ？」

この類の術はかなりの集中力と魔力を消耗するはず！  
今は少しでも時間を稼ぐんだ…

「別に…何かして欲しいんですか？私はノンケですからちょっと…シゲンはどうしますか？」

「そうですねえ、ここまで辿り着いたくらいです。割と優秀な人間みたいですから、真面目に『よく頑張ったで賞』をあげますか。」  
シゲンと呼ばれる男が後ろのデスクにどっさり積まれているファイルから幾つか抜き出してきた。  
冥土のみやげのつもりか？そう簡単にはいかんぞ。  
必ず生き延びてやる…



「ここに大戦を裏で操っている者、兵士の改造や先住民にメガロメセンブリアがしてきた行い、世界の行く末がそれぞれファイリングしてあります。」

コピーは取ってあるから差し上げます。

それと後ろから撃つなんて真似はしません…それではどうぞ？」

……この男はバカか？

敵国のスパイに自分から重要機密を差し出すなど…

それとも俺の想像を遥かに越える切れ者なのか？

ファイルの情報も本当かどうか怪しい。

どちらにしても、ファイルを手に入れ、命脈を繋ぐことができる。ファイルの真相を探るのも大事だが全ては帰ってからだ！

「…確かにファイルは頂いた。さらばだ！」

さて、真偽の結果は別としてこのファイルはメガロメセンブリアには提出できんな…

:

:

:

:

:

「どんなもんですコウメイ？

これぞ策謀！敢えてファイルを渡し、相手を疑心暗鬼の状態にするのがミソですよ。

彼はなまじ優秀なだけに、特に有効でしたがね。」

「本当そうですね。これでファイルの真実にたどり着いて、メガロメセンブリアに対抗する地下勢力が誕生したら、それだけで御の字ですか…

いや、ある程度知恵がある方を動かすのは楽でいい。

あのスパイさんの活躍に期待しましょう。」

実はこの2人、最近はずの夢の雫を肴に忍び込んできたスパイをあの手この手で弄んでいる。

ひとしきり楽しんでストレスを発散した後は迷わず始末、再び仕事に戻るといふ生活をしている。

しかし、今日は初めて最奥に位置するこの部屋に到達した人間…ガトウが現れたのだ。

その高い能力は確かに驚異だが、世界が滅びるような選択はしない…むしろ敵の敵は味方となると考えた。

要はガトウが生き延びたのは、レジスタンスくらいにはなるだろうと考えたシゲンの気まぐれである。

この気まぐれが蒔いた種が、後に展開に大きな意味を持つとはシゲ  
ン、コウメイ、2人をしても見抜くことはできなかつた。

## S a ・ G a 番外編（後書き）

### BAR魔の巣

モンスター街で店を持つ夢魔のマスターが仕切る大人の酒場

リリースや女吸血鬼などの女性モンスターを揃えた店

マスターが何処からか用意する酒『夢の雫』を始め、美味しい酒を数多く揃えているが、お値段はベリーセーフティー

S a ・ G a 4 6 (前書き)

\*若干グロいかも

バレン又建国以来、貿易や外交問題、果ては古代人の1人が堂々と活動していたヘラス帝国

俺自身にも深い因縁がある国だが、今回はライフメーカーたつての願いと、バレン又帝国の危機が結び付いた。

そして、大臣のサイフリートのクーデターを阻止する為に首都ヘラス入りした俺達。

さあて、どうやってサイフリートの企みを潰そうか……

「ノエル、んな奴は俺達で畳んじまえばいいんだよ！  
さっさと宮殿に乗り込もうぜ？」

「ダメだ。それはクーデターを防げなかった時の最終手段だからな。」

うん、剣の柄に手を掛けてやる気満々アピールをされても困る。

とりあえず、まだ20そこらで若すぎ、思慮が浅いギルガメッシュには暫くは黙っていて貰おうか。

これが街中で事情を知らない人間が、今の言葉だけで判断したら、俺達は間違いなくテロリストになるだろうが！

「じゃあねえな！ノエルとエヴァ、お前達は先代の記憶が確かならヘラスの皇族とツレになっただんだけ？」

ダメ元で交渉してみよう。」

「そうね…ジーンの言う通りかも。」

実際、それがベストかは分からないけど、ベターではあるわね。ダメならダメで力尽くまで片付ければいいだけの事だから。」

ジーンとユカリから案が出た。

確かにゲオルグさんが皇帝を継いでから、俺とエヴァは、ちよくちよく招かれて軍事演習やら簡単な集気法くらいなら伝えた。

その時に、まだ幼かったトーマ帝も紹介された。ここ20年は会ってないが、間違いなくお互い面識がある。

そこから判断して可能性が無いことも無いだろう……厳しいな。

「ワテに全ての問題を解決させるグッドアイデアアが有りまんねん！聞くだけ聞いておくんまし。」

奇抜なアイデアに定評のあるエビス…

だが、コイツには当たり外れがあるんだよなあ。

しかし、この状況だ。あまり時間を無駄にすることはできない！

「エビス…俺達は行き当たりばったりでヘラスに来た…お前のアイデア、聞かせてもらおうか？」

「な！？ノエル、本当にエビスの言うことを聞くのか？」

「エヴァ、よく考えてみる。行き当たりばったりでヘラスに来たが、この先どう転ぶかも分からん状況。

もしかしたら今この瞬間にもクーデターが起きるかも知れんのだ。

今は、エビスのアイデアに賭けるぞ！」

もし失敗してもユカリが言うとおりに力尽くで片付ける。

最悪、ヘラス帝国を地図から消すだけだ。

「貴様という男は……」

だが分の悪い賭けか。なかなか面白いじゃないか！

私もエビスに賭けてみるとしよう。」

「フッフッフッフ！ほなワテが考えた自慢のプランでおますが、実は………」



「『『『『』な、なんだつてええ!!』』』』』」

意外にも的を射たプランで今回ばかりは全員驚かされた。

こうしてプランも決まったことだ。後は行動有るのみ。さてさて、この騒動はどうなるかね……

:

:

:

:

:

エビスのプランを聞いた俺達は、思い切って王宮にアポ無しで突撃。

それはもう入り口から警備兵相手に、ごり押しにごり押しを重ねて奥からある大臣が来て突破できたが……

「御主等が父上が何度も聞かしてくれたノエルとエヴァ殿か!?

ノエル殿はパツと見は美男じゃの。それにエヴァ殿も美しい!

それに他の者達もバレン又帝国屈指の強者に相応しいオーラを感じるが……隣のふとっちょは何者じゃ?

妾にはただの気のイイ木こりのおっちゃんにしか見えんのじゃが……」

「何言うてまんねん、テオドラはん！  
こんなハンサム目の前にしておっちゃんって……そりゃ酷すぎまっ  
せ？」

それにワテは、こう見えても正義の忍者と呼ばれてるんでっせ？」

「ふーん、なんと胡散臭い忍者じゃのう…御主、本当は珍どん屋  
の類じゃろ？」

それになんで斧持つてるんじゃ？」

笑わないから妾にだけは本当の事を話してみよ！」

「こ、このじゃりん子め……」

ノエルはぐん、エヴァはぐん、皆はんも仲間のピンチをボーっと見  
とらんと少しは助けてくれまへんか？」

エビスを見る振りしてテオドラの様子を見たが、部屋に入った時に  
していたつまらなそうな顔も今は年相応のガキの顔をしている。

まあ王宮…しかも皇女付きの侍女や近衛兵になる人間は、エビスの  
ようにオーバークションをする人間はいないだろうから、それが  
新鮮でからかうのが楽しいのだろう。

まったく、すぐにガキのツボを掴むところなんかは見ていると本当  
に初代クジンシーそっくりで、アイツの事を思い出すよ。

「エビスはそのまま皇女様のお相手をして差し上げる。  
俺達は大臣が来るまで、ゆっくり休ませてもらう。」

こんな状況になっているのも大臣からいきなり第3皇女テオドラの元に通され、皇女の相手でもして待機するように言われたからだ。

その間に皇帝に会えるように都合をつけてくれるらしい。

ただ、去り際の大臣からいきなり

『実は私、ライフメーカーが派遣した部下の1人ですから安心して下さい。』

嫌々こんなオッサンに化けているんですが早く元の姿に戻りたいものですよ……

お互い大変ですが頑張りましょうね?』

なんてカミングアウトされた…

第3皇女の雑な扱いにも驚いたが、この衝撃の事実には及ばなかったな……

サラッとこんな事やらかすライフメーカーが敵でなくて良かったと痛感したよ。

マジで…

椅子に腰掛け、そんな事をつらつらと考えていると…

「ねえねえ、エビスはバレないように上手く立ち回ってると思う？」

エビスの事が心配なシエルミーがたまらずジーンに話しかけている。

本当、シエルミーは優しい子だねえ〜  
でも彼氏いないんだよなあ。

「アイツはやればデキる男だぜ？ノエルも休んでるなんて言ってる  
だから俺達はアイツを信じて、ここで待ってりゃいいんじゃない？  
そうだろノエル？」

「おう！アイツはうつかり癖があるが締めるところは締める奴だ！  
シエルミーがエビスを心配する気持ちも分かるがユカリを見る！」

シエルミーがエビスを心配している一方でユカリはいち早くソファ  
を独占してくつろいでいる。

休んでいるのはユカリだけではない。

エヴァは『エビス』の様を見て腹を抱えて笑っているし、ギルガメツシユは愛刀を研いだり、鎧を磨いたりして武具が万全の状態かチエックしている。

ジーンに至っては、ボトルを一本空けて完全に自分の家のようにリラックスしている。

うん…七英雄の仲間はまだ少しエビスを心配してやったほうが良いかもしれない…  
今その事は置いておくとしよう…

「いいかシエルミー。  
ユカリはよオ、エビスの事を信じてるからあれだけリラックスできてるんだ。  
お前も気疲れなんかしてもしょうがないだろ？  
休める時に休むのも大事だぞ。」

「そうですね…よし、私もうんと休んで、バリバリ働けるようにするぞー！」

うんうん！俺の言いたい事だけうまいこと伝わって良かった。  
後は頼んだぞ？エビス！

：

：

：

：

：

Side 大臣に変装している部下…プリームム（一号）

ライフメーカーの協力者…七英雄が自由とはいかないまでも動けるようにはしてやりたい。

その為に皇帝がいる玉座の間へ向かった。

「皇帝陛下…ご存知の通り現在の戦況は一進一退が続き、現場の兵士達からも疲労の声が上がっています。」

「そうであるな…だがここが正念場だ！

今、争っている場所はグレートブリッジにほど近い要所だ。」

よしよし、イイ流れだ！

「実は同盟を結んでいるバレンヌ帝国が、こちらの状況を顧みて、善意で帝国屈指の強者を派遣してもらえました。

今は、この城の一室で待つて頂いてますが……いかがなさいますか？」

さあ言え…戦争の助っ人として参加させると！

事実、赤き翼が連合国にいる限り帝国は苦戦を免れないだろう。

大要塞グレートブリッジは巨大さ故に多くの補給路が存在する。

件の戦場は最も重要な補給線の1つ…それが陥落したら、芋づる式に要塞は落ちる。

彼もそれが分かっているから兵士を戦わせ続けるという選択肢を取った。

だが、『バレンヌ帝国でも屈指の強者』と言えば軍事演習を見ていたトーマ帝なら感じていないに違いない。

決断しろ！その決断はこの場にいるサイフリート率いるクーデター派への牽制にもなる。

それがヘラス帝国の延命にもなるのだから！

「陛下！今回の派兵は善意からではありません。これはバレンヌ帝国の巧妙な策略で御座います！よく考えて下さい！バレンヌ帝国はその建国以来、他国を喰い続けてここまで成長して来たのです！その事実を決して忘れてはなりません！」

「む……………」

無駄なあがきは見苦しいな？

サイフリート

アビスリーグの大幹部の1人…

貴様も万人と同じように人の子として生まれた筈だろうにな…………自ら人を辞めるとは哀れな男だ。

今は証拠が上がらないから泳がしているが、七英雄の介入があれば焦って尻尾を出すだろう。

「私は…ヘラス帝国は……………」



そしてトーマ帝も今は悩んでいるが僕には分かる。  
必ず七英雄を受け入れる。

彼の国を想う気持ちは本物だ。

僕には分かる。それも『きっと』なんて不確かなものじゃなく『絶対』だと…

「サイフリートよ！私はもう迷わない！」

『ツツ！！』

「ほほう、やはり私めの進言を聞いていただけましたか！！」

「そうだ！私は国の為に全力を振るう！」

ヘラス帝国は今この時をもってバレンヌ帝国からの派兵と同盟を…

…

「いかなさるのですか？皆にもハッキリ聞こえるように宣言して下さいトーマ陛下！！」

さあどうするんだ！？

「ヘラス帝国はバレンヌ帝国との同盟をより一層強固な物とし戦後もそれは変わらない！  
国は違えども志しは同じなのだ。全力で助け合う！！  
そしてバレンヌ帝国に喰われたとしても、民の幸福の為ならば私は国をも潰す覚悟だ！！！」

勝った！それにしても確信していたとはいえ、冷や冷やさせられたな…

それにサイフリートの甘言を跳ね退けた瞬間、玉座の間に集まった全ての人間が息を呑んだのも感じた。

最近のサイフリートは影の皇帝だったからな…まさかトーマが勝つとは思わなかったのだろう。

「そんな馬鹿な！陛下は私の進言を切り捨てた！それは国を殺す決断ですぞ！！  
今なら間に合います！もう一度、ご検討を！！！」

「くどいぞサイフリートツツ！！  
私は…余は決断を覆さぬ！  
貴様は先代ゲオルグ帝…我が父上の代から仕えてくれた忠臣であつた。」

「それならば何故!？」

「余は幼い頃から父上と国を盛り立てる貴様を見てきた…父上の息子でありながら武はからきしダメだった。だから政で腕を振るう在りし日の貴様を越えるつもりだった…それがどうだ!!!」

「あの頃のサイフリートがいつか帰ってくるのではないか……そう思っていたツツ、思い込んでいたツツ!!」

「それも今日ハツキリした。貴様等の悪政もここまでだ。」

「処分については追って知らせる…下がれ!!」

「……」

長いことトーマ帝を見てきたが、こんなに感情的な彼は初めてだな…

まあ、3大国の長の1人としてはこれくらいエネルギーに溢れてる方がよほど良いんだけど…まさか急に覚醒するなんて、人間は何があるか分からないな。

「それでは私は陛下が仰られた言葉を七英雄の皆様に伝えてきます。」

「

ヘラスに来て以来、気を張り詰めていたから、これで山場は越えたと安心した。

だが、それが間違いだった。

「どこまでも甘いんだよオ、トーマー！」

こうなれば皇帝の座は、貴様を殺してでも奪い取る！！」

気付いた時には遅かった！

魔法を撃って殺そうにも、サイフリートの延長線上にトーマがいる。

それにサイフリートに続くように、奴の部下も変化していた。

モンスターを殺しきる威力はライフメーカー謹製の僕だから問題無い。

だが、部屋全域に展開したら、魔法の余波に巻き込まれたトーマが死んでしまう…どうすれば！？

このままでは全てが水泡と化してしまう！

「フハツツ!!そのクビ殺ったアアアアツツ!!!!」

胸に爪を突き立て心臓をえぐり出し、鋭い牙で首を食いちぎろうと恐ろしい速さで既に飛びかかっている。

「サイフリート!!貴様は余を殺せても、貴様ごときがヘラス帝国を殺すことはできぬ!!」

トーマも反撃が無駄だと覚悟している。

もうダメだ…そう思った時……

「トーマはん、よく言わりましたな!!アンタなかなかの男前でっせ?」

虚空から彼が……エビスと呼ばれ、ほっかむりを被った彼がトーマの後ろから突然現れたのだ!

それだけじゃない!

手に持った斧でサイフリート吹き飛ばし、間一髪のところまでトーマ

の命を救っていた！

あまりに予想外な出来事で吹っ飛ばされたサイフリートとその部下、逃げ惑う文官や抵抗する近衛兵、僕もフリーズしてしまった。

「ヘラス帝国の新たな門出に古臭いダニは要りません。ワテがこの場で始末してやりますわ。」

：  
：  
：  
：  
：

「な、なな、なんじゃ！？こりゃああああ！  
エビスが…突然消えたのじゃ！」

「お前等、エビスからの合図だ！  
王の間に行くぞ！！」

「「「「おう！」「」「」」」」

あの時、エビスから語られたナイスなアイデアはこうだ…

ギルガメッシュが持っている『アメジストの斧』の固有スキル、幻体戦士法を発動したまま霧隠れが得意なエビスの本体がこっそり皇帝の間に潜入する。

その時にクーデターが起きたら幻体戦士法を解除し、俺達というエビスが消えるのを合図に動き出す。

シンプル且つ技の特性を活かした大胆なプランだった。

そして今、俺達はエビスが廊下に残した後を手掛かりに到着した。

「クイックタイム」

俺とワグナスが術を発動して時間を止める

「飛べよオラ！」

ジーンは威力を抑えた気弾とパンチでモンスターを吹き飛ばし

「剣の錆びにしてやらあ！！！」

ギルガメツシユは万全の状態にした愛刀を使って撫で斬りにする。

「セエア！死んだ実感も無いまま死ねえ！！！」

エヴァは魔法の矢とエクスキューションソードで作り出したレイピアを使い、眉間と心臓の部分を正確に攻撃して葬り去る。

そしてシエルミィは……

「エビス！私に合わせなさい！」

一直線にエビスの元へ駆け出す！  
途中のモンスターも本来は立ちふさがり邪魔をするが、止まった時  
の中ではただのオブジェに過ぎない。

シエルミィはグングン近づいていく！



「ほな、逝きまっせ！」

エビスもシエルミリーの動きに合わせてる！

「高速ナブラアア！！」

エビスがアメジストの斧を振るうとサイフリースの身体に正三角形の切れ込みが入った！

「行くわよ〜…羅刹掌！！」

そして中間地点にシエルミリーの助走と気合いで威力が上がった掌打が入る。

「そして時は動き出す」「」

フロアのモンスター達はその瞬間から頭が潰れる者、バラバラ死体になる者、眉間と心臓がある部分に野球ボールの穴が空き死ぬ者が一斉に現れた……

そしてサイフリートは身体に三角の切れ込みが入ったと思った瞬間、  
羅刹掌で与えた衝撃が全体に行き渡り、爆散して死んだ。

こうしてサイフリート派が企んだヘラス帝国クーデターは国民が永  
遠に知る事無く、秘密裏に鎮圧されたのだった。

「殺してでも……」

ん〜名言ですね！

執念がこの一言に込められているのを肌で感じる事ができる名台詞。

アイスソードの調達は計画的に……

「羅刹掌」

掌打。コレに尽きます

ただし、全身全霊を込めるため凶悪な一撃。

この小説では準備が必要で若干のタイムラグ有りという設定。

ミンサガでは、受けた相手は高確率で1ターン気絶してしまう素敵な技。

「幻体戦士法」

原作ではアメジストの斧を素振りしていると閃き、シャドーサーバントのように分身を作る。

ただしコレはシャドーと違い、物理攻撃を受けない限りいつまでも残る身代わり君。

ただし、発動中はアメジストの斧以外使えなくなる。

作中でエビスは先に霧隠れをしてから幻体戦士法で身代わり君を用意してプリームム君の後をスネークしてました。

今回でガンバー、もといヘラス帝国編は終わりです。

サイフリート？彼はかませですよ？

しかし、プリームム君に全くイイ所が用意できなくてファンの皆様には本当にスイマセンでした…

今回は赤き翼が放置気味だからいじってあげようかと思えます。

サイフリートのクーデターを鎮圧して、ヘラス各地から不穏分子を一掃する事に成功してから3日が経ったある日のこと…

プリームムに示された場所はヘラス各地に点在していたからフルに働かされてキツい所を皇帝に呼び出された。

トーマによる人払いにより現在、王の間には俺と皇帝の2人しか存在しない…

「七英雄の皆には至急グレートブリッジの救援に行って頂きたい！」

俺やエヴァは人外だから疲れても死ぬことは無いが、他の仲間については別。

いくら強くとも代々の積み重ねの結果だから当然休みが必要不可欠だ。

「トーマ閣下…それは今すぐに発てということですか？  
しかし何故いきなり…理由をお聞かせください。」

天下のヘラス皇帝であるトーマの顔が曇る。  
せつかく覚醒して威厳が出てきたのに…普通にヤバいだけでは無く、  
他にも理由があるのか？

「ヘラスの民である傭兵があるうことか赤き翼に寝返った……  
情けない事だが、グレートブリッジに通じる最終防衛ラインを連合  
に突破された。」

「それはまた…なんとも…  
一難去つてまた一難とよく言いますが、寝返る者が出るとは…心中  
お察しします。」

「…御主等は客将とはいえ十二分働いてくれた。  
しかし、此度は皇帝トーマでは無く、ただのトーマとして無理を承  
知で頼む！  
もう一度だけヘラスに力を化して貰えないでしょうか？」

王冠を外しての土下座か…  
情報が上がってきてからバレンヌ帝国とは同盟国であるとはいえ、  
ここまで頼りきるのには国威と現場にいる兵士の士気に関わる…

しかし、後が無いのも理解しているからこそその土下座。

人払いをしたとはいえ、これが漏れれば情けないとクーデターを企む輩が再び現れたらう……それだけの覚悟か。

「ならば私は七英雄のノエルではなく、ただのノエルとしてその援軍、引き受けてやんよ！」

「す、すみません……ノエル殿。」

「おいおい……一国の長が他国の人間をいつまでも見上げていては格好がつかないだろ？」

「そんじゃま、一丁片付けて来るわ！」

踵を返し颯爽と立ち去る俺……うーん、カッコいい！  
それよりも、どうやって説明しようか……

Side グレートブリッジにいる将校

「ここが正念場だ！弾幕を張り続けてアイツ等の接近を許すな！なんとんでも持ちこたえるんだ！」

最悪の状況だ……連日の競り合いでかなりの人数の仲間がやられた。上の者達との連絡も日に日に繋がらなくなっていく……連日の攻撃は激しさを増している。

勿論この状況だ…増援や物資の補給を要請しているが、どこも同じような状況だから期待できないだろう。

そして疲弊した状況を知ったのか連合がアイツ等……赤き翼を投入した。

しかも傭兵ギルドから仕事を請け負っている筈のジャック・ラカンまで奴らの側に寝返ったのが2日前のこと……



最終防衛ラインもここまで持ちこたえていたが、先日とうとう抜かれた…連合の犬、赤き翼がここまで来るのも時間の問題だ。

そうなればグレートブリッジの喉元に建てられたらこの砦も、瞬く間に陥落

しかし兵士の一人一人にも、私にも家族は居る

私としては一人でも多くの將兵を帝国で待つ家族の元へと帰してやりたい……

「大佐！赤き翼のアイツが…サウザンド・マスターが弾幕を潜り抜けてきました！」

「全軍撤退！ここはこれ以上は持たん。死にたくなければ早くするんだ！」

「お言葉ですが大佐！この砦は帝国にとっても取り分け重要な地点です！」

我等が撤退したらどうすんですか！？  
増援が来るまで戦線を維持するべきです！」

コイツは…まだ年若い兵士だな。  
どうやら士官学校では退き際を学んで来なかったらしい…

「お前が言うことも一理ある。  
だから私だけは最後まで残り爆破させるつもりだ。」

「そんな！？大佐は本気ですか！？」

「この皆はどう転んでも潰される運命にある。ならば、この命と引き換えにする事で奴らを始末できるなら安い物だろ？  
さあ行け！お前達は生きて情報を持ち帰れ！」

若造共が死に急ぐ必要はどこにも無いからな…

「……自分も残ります。自分は最後までこの部隊の一員でいたいですから！」

「…私の言うことが聞けないのか！…これは命令だ！」

「へへ、赤き翼を倒した部隊……大佐と若造2人にイイ所を持つて  
いかせませんよ？  
お前等もそうだろ？」

コイツもか…

「おう！！あの連合にキツイ一発、ブチかましてやるうぜ！」

どうしようも無い馬鹿者達が…

「何をしているんだ！今すぐ持ち場に戻れ！弾幕を張れ！！  
サウザンド・マスターに集中攻撃しろ！アイツには詠唱する暇を与  
えるな！  
もっと引き付けろ！この距離で爆破しても障壁すら抜けんぞ。  
やるなら死ぬ気で気合い入れろ！」

「……イエス、サー！！」「……」

その時、思いもよらない通信が入った：

『前線にバレン又帝国からの援軍：七英雄が来た！  
連合の赤き翼に勝てるかも知れない。  
今すぐ補給しに行くから皆の兵士もそれまで持ちこたえてくれ！』

まだ悪運は尽きていなかったか！  
何にしても願ってもみない援軍と補給：コイツは僥倖だ。

「貴様等、聞こえたか！  
この戦い、死んでも生き残るぞオオオ！！」

「コイツ、サー！！」「」「」

Side 赤き翼 ナギ

強い奴が出ると聞いたからまほら武闘祭に行ったが拍子抜けだった…

あれから俺は魔法世界に行くため故郷の近くにあるゲートを使った結果…メガロメセンブリーナ連合とかいう奴らが治める大陸のゲートに出た。

そうしたら戦争やってるらしいじゃねーか！

こんだけ広い世界なら俺より強い奴もいるか？

腕試しのついでに手柄まで手にはいりゃ、金持ちになれるんじゃない？

そう思って適当にぶっ飛ばしてたら、いつの間にか仲間ができた。

京都神鳴流剣士 青山詠春

剣技ではメンバー中最強でむっつりも最強のジャパニーズサムライ野郎。

ちんちくりんの癖にジジ臭いフィリウス・ゼクト

俺の魔法が暴発しないようにコントロールする術を覚えてくれた俺の師匠！

いつもニヤニヤしていて胡散臭いアルビレオ・イマ

重量魔法の使い手で楽しみりゃイイとか言ってくっついてきた野郎だ。

ただ、コイツが来てから頭を使わなくなったからラッキーだぜ。

それと俺達の筋肉担当　ジャック・ラカン

奴隷出身で、傭兵剣士として幾多の戦場を転戦しながら対人、対魔獣、対軍、対艦、対要塞とあらゆる戦闘において無敵を誇る……らしい

まあ、俺の敵じゃあなかったが殴り合って、話してみりゃイイ奴だから仲間にしたオッサン

しかも、殴り合いができるオッサンだから最高だぜ。  
その分、バカだけど……

そんなこんなで赤き翼を結成して、いろんな戦場を回ってきたが連戦連勝！

今回のグレートブリッジとかいう場所も少しは抵抗してるみたいだけど全然、甘エな！

今日もサクッと落としてやるぜ。

「アル、もたもたしてねえで早くしろよ！

早くしねえと連合の奴らに先を越されて暴れられなくなっちまうじやねーか！」

ラカンと戦果勝負してんだから早くしねえと面白みが無くなるじやねーかよ。

「何を言つとるんじや…そんなに急いでも戦場は逃げんし、現にド真ん中じゃわい。」

そんなに皆を潰したいならば、ナギだけ先に行けば良からう。」

「師匠まで何言つてんだよ〜」

転移魔法でパパッと戦場に飛んでくれりゃあ時間の節約にもなるじやんか！

なあ〜良いだろ？」

「こらこら…ナギ、今日は十分暴れたでしょ？」

それでも我慢できないならラカンと先に行けばいいんじゃないですか？

ただし！グレートブリッジは破壊してはいけません。

ある程度ラカンと暴れたら帰ってくるのですよ？」

「流石はアルだぜ！」

オイ、ラカン！さっさと皆に行こうぜ？

今日の勝負も俺が勝たせてもらうけどな！」

「おいおい、今はオレが勝ち越してんだぜ？  
偉そうに言うのは逆転してからにいな！」

「へ！上等。速攻でオッサンの成績抜かしてやるから待ってな！  
よっしゃ！行くぜ！  
先手必勝、千の……」

そのまま皆から撃たれる魔法弾の雨を楽々かいくぐり千の雷をぶっ  
放そうとした時……

「あれは！？ナギ、待ちなさい！今すぐ戻ってくるのです！」

「「あ？」」

アルの声に気付いて周りを見た瞬間、俺とラカンは今まで見たこと  
も無いほど巨大な気の塊……気弾が襲いかかり仲間の元まで吹き飛ば  
された……



・  
・  
・

「お〜いノエル、アイツ等はぶっ飛ばしてやったぜ？」

ふう、危なかった…魔法使いがあそこまで弾幕を避けながら魔法をぶっ放そうとするバトルジャンキーがいるなんて……

助けることが出来て良かったが、戦場は怖いところだね。

「ん〜ジーン、ご苦労さん。

ユカリ、シエルミィ、用意は良いか？」

「私はいつでも良いわよ。シエルミィは？」

「私もバッチリよ！いつでもドンと来い！」

「よしシエルミィ、合わせる！」

『『『』』』』

戦場の空を覆い尽くしていた大量の敵戦艦に無情な雷が降り注ぎ、次々に炎上し墜落していく。

「次は私の出番ね

『ワームホール』！！ゴミはゴミ箱と…」

墜落していく戦艦、かろうじて落雷から免れ此方にターゲットを向けた戦艦も一緒くたにして、虚空に出現した異次元の入り口に吸い込まれて消えた。

後には何も残らなかった。

ついさっきまでここは戦場だったと言われても、第三者は誰も信じない……ただ土埃が巻き起こりっている荒野にしか見えないからだ。

「勝ったぞ！！」

我等ヘラス帝国の勝利だ！

喜べ！全員、生きて家族に会うことができるぞ！！」

「ウオオオオオ！！」

「大佐！やりましたね！」

「ああー！」

砦の兵士達は絶対絶命の危機から一転して勝利を収めた喜びを分かち合っている。

その頃

「それにしてもエヴァはん、ギルはん、ワテら楽できてラッキーでしたな。」

「『『『全くだな』『』』」

エヴァ達は覚えている技、魔法で広範囲のモノが無い。  
そして、無理をする必要も無いために今回の戦場はお休みである。

「まあ、これで鬱陶しい連合の軍はサクッと片付いた…っと。」

そんじゃま、このまま赤き翼とか調子乗ってる傭兵さん達の相手す  
っぞ〜

始めは強めで、後は流れでお願いしま〜す。」

「「「「「「「「「「「「  
お願いしま〜す。「「「「「

やる気ゼロでも次元の違う強さを見せつけた七英雄…

そして今、赤き翼は絶体絶命の危機を迎えようとしていた…

## S a ・ G a 4 7 (後書き)

『召雷』

S a ・ G a 2 でロックブーケが使う代表的な技の1つ

一体のターゲットをメインに発動、周囲のターゲットにも雷撃でダメージを与える魔法。

実は全体技ではありません。

正直、作者個人の意見ですがテンプレーションよりも怖いです。

この小説ではややこしいので問答無用の全体技にしました。

『ワームホール』

S a ・ G a 3 のコマンドモード限定技

分かりやすく説明するなら某紫さんのスキマを複数人で作り出して始末する技。

ただ、この小説ではロマサガの設定が多いのでユカリに限り1人で発動可能に変更しました。

『弾幕

』

某艦長さんの名台詞。

前回の予告に偽りありでした…すみません。  
赤き翼に活躍の場を与えようとしても、じっくり来ないので結局か  
ませになってしまいました。

原作ファンの人には本当にすいませんでした。  
次回こそ…次回こそは赤き翼の回です。

S a ・ G a 4 8 (前書き)

今回はいつもの二倍くらい長いです。  
長くてもめえね、じいめえね。

『赤き翼』

超少数精鋭で戦場を蹂躪する力を持つ化け物傭兵集団。

現れた最初期はその足取りに規則性は無く、連合国、ヘラスを無差別に戦っていた。

そしていつから結成され、人種、思想、正確な人数構成、何を目的に激しい戦場を選んで出現するのか全く不明…

一説には、そのデタラメな強さから両帝国を滅ぼすために連合国が技術の粋を掛けて、作り出した人造生命<sup>ホムンクルス</sup>…人の皮を被った化け物ではないか？と言われていたがこの疑惑はラカンが寝返った事によりデマと発覚した…

それ以外にもただ1つハッキリしている事がある。根無し草は連合国の側に付き、戦場で相変わらず暴威を振るっている

特に、サウザンド・マスターとか呼ばれる奴は頭1つ抜け出した凶暴性を持っていて、戦艦の一斉砲撃も嗤いながら避けてオーバーキル級の魔法をぶっ放すヤバさから戦場では『死神』なんて異名を付け恐れられている。



それがライフメーカーと帝国滞在中に手に入れることができた情報だ。

情報ソースが戦場帰りの兵士から艦隊の司令官まで幅広い視点の人間の主観が混ざっているから、正直かなり偏った情報だ。

我等がバレンヌ帝国？

たかが傭兵集団ごときに右往左往するような、なまっちよろい軍ではありません。

ヘラス帝国とは鍛え方からして違うのですよ！！

それにバレンヌ帝国の領土は離島……他国のように地続きではないから、陸海空凡庸戦艦で来たとしてもメールシュトロームと武装商戦団が率いる戦艦で迎撃している。

結果…：連合国の皆様方には1人残らず、海の藻屑になってもらっている。

まあ、長々と語ってしまったが、戦場跡の荒野…これまた遠く離れた米粒くらいにしか見えないほどに離れているけどヘラスが恐れる噂の本人達がいるわけだ……

「ユカリさん、ユカリさん。」

歩くのが面倒だから、パパッと転移魔法を使ってくれませんか？」

「歩くのは健康にも良いし、あまり疲れを溜めこむと一気に老化が進むから嫌。」

どうやらさっきのワームホールでかなりエネルギーを使ったから、余計なエネルギーを使うのを渋ってるようだ。

（お前等、このままだと向こう着く頃には日が暮れちゃう……どこにかするぞ！）

（（（（（OK！）））））

「ユカリはまだまだ若いだろ？」

若いうちから負荷をかけておくと、身体が丈夫になるぜ？」

ジーン……ちよいとキビシイ説得だな。

「ユカリさんは肌なんかすごくキメが細かいじゃないですか？羨ましいですよ。初対面の人なら間違い無く、大人びた美少女だと思いますよ!!」

ね？エビス？」

「ホンマでっせ。

ワテは初めてユカリはんに会った時なんて…美人過ぎて顔見れまへんでしたわ。その本人が老化なんて…まだまだハタチでもイケまつせ？」

「え！？それって本当？」

「マジですよ」

シエルミィは女性ならではのポイントを誉める。そして、エビスは生来の人の良さでヨイシヨして、その気にさせる……ナイス連携プレーだな。

「長年生きてきて古今東西、数多くの人間を見てきたがユカリは本当に美人だと私は思うぞ？」

それに年々、美人になっているしな！

貴様に老化現象はまだ早いだろ…」

「んも、エヴァったら口が上手いんだから、いきなりそんな事言われちゃったらユカリ、困っちゃった」

「……………」

うん…エヴァのこれまで生きていた記憶に基づいた説得力ある告白でいい気になったな…

今、最高に喜んでるのが分かるけど…このぶりっこだけは無いわ

「ギルは何か無いの？」

「ええ！？オレもか？」

（（（（（ギル！頑張れよ。マジで頑張れよ！）））））

ギルガメッシュ…お世辞がさっぱり言えないのは分かってる。だから無理してチャレンジする事は無いぞ！

お前はこの流れを、ぶった斬るような真似をしなければ何でも良いから…

「（え〜つとよ…うーん あ！あれだ！）ユカリは美人だし、昔から年くつても変わらないから、別に気にしなくても良くね？」

「……………」

それまで上機嫌だったユカリの表情が笑顔で固まった。確かにユカリの表情は笑みを浮かべているが、その目は全く笑ってない。

そして俺達の空気も固まった…

そして、ひと仕事やり終えた感を出しているギルガメッシュ…

（（（（（終わったな…これで日暮れルート確定だな…）））））

ギルガメッシュ以外は場の空気からそう思い、楽する事を諦めた。

しかし…

「まあ良いわ…少し疲れるけど、歩くのも実際疲れるし、時間の無駄だから転移魔法を使ってあげるわ。」

「ユカリ…それマジか？」

正直、俺を含めたギルガメッシュ以外の人間はあまりに予想外で言葉が出なかった…ジーンは皆の気持ちを代弁してくれた。

「別にジーンは歩きで行きたいなら、そうすれば良いのよ？」

「ハハ…そりゃ勘弁だ。」

ユカリさん…やっぱり怒ってますね？美人が怒ると恐ろしいというのは本当だった…

しかし何故、転移魔法を使ってくれる気になったんだ？

「それじゃあ…いきなり全員は難しいからギルガメッシュから順番に転移させるわね？」

ユカリの考えている事がやっと分かった…だからと言って俺達はど

うすることもできない。

矛先がこちらに向けられては堪らないしな……

「さあてギル、覚悟はイイかしら？」

・

・

・

・

・

「痛つてえ…チクショウ、どこのどいつだよ！ あんな化け物み

たいな気弾ブチかましてくる非常識な奴はよオ」

「五月蠅いな。気が付いたと思ったたらその話ししかしてないじゃないか…

手当ての邪魔になるから少しは黙ってる。」

今は詠春から、手当てをしてもらっている。さっきまではアルから回復魔法を掛けてもらっていた…

「痛つてエな！俺は怪我人だぞ！？」

「それだけ鳴き喚いて、身をよじって消毒液を払おうとする人間は怪我人と呼ばんわい…それに、アルビレオも警告したのに、あれだけ突出したお前が全面的に悪い。」

あの時、俺はとんでもないデカさとスピードを持つ気弾の直撃を受けて、そのまま師匠達がいる所まで吹き飛ばされて気絶していたらしい…

一緒にいたラカンのオッサン？あのオッサンから『頑丈さ』を取ったら何が残るんだ？バカしか残んねーよ！

「そうやって先走って怪我してりやしょうがねえわな？」

バカ 弟子 クン？プププ…」

人が気絶してる時に走って帰ってきて、馬鹿笑いしてたんだとよ…気が付いてからはこうやって、しつこくからかってきやがる。

詠春に手当てしてもらってるから我慢してるけど、身体の調子が万



全なつたら必ずぶつ飛ばしてやる！

「それにしても、俺とナギをぶつ飛ばしたあの気弾だが…まさかな…あの人は死んだから有り得んしな…」

ラカンのオッサンが顎をさすりながら、ぶつぶつ言ってる…その姿はキモイが話しの内容は俺も気になる相手の事だな。

「オッサンは気弾の使い手について何か知ってるのか？」

「ああ？ハッキリした事は言えねえけど心当たりは有んだよなあ…ただどな…どうすっかな？」

肝心の所で急に言葉を濁して、そわそわしだしたオッサン。巨大があっちふらふら、こっちふらふらする様はマジでキモイ。

アルも笑みを浮かべてドン引きしてるしな…

「知ってる事があるならさっさと言えばいいじゃねえか。それとも言えねえワケがあるのか？」

「そうだな…あの気弾の使い手については俺も気になってたんだ。些細な情報でも良いから、是非とも教えて欲しい。」

「詠春にまで請われたら仕方ねえな！実はあの気弾の使い手はな…  
…10年以上も前に死んでんだよ！！！」

「はあ！？急にシリアスな空気を出し始めたから、何を言つかと期待してたらオバケか？  
オッサンは意外にも根性無し（チキン野郎）だな！！！」

「ん？皆さん…何者かがこの場に転移してくるようですよ？」

「アルが知らせてくれたから警戒していたら、暫くして空中にポツカリ穴が空いて、そこから腕六本で大柄の亜人が現れた。」

ユカリの魔法で飛ばしてもらったけどドンピシャだな！明らかに怪しい集団がいるじゃんよー！

斬り込み隊長ギルガメッシュとしては、ちょっとかい出して確かめるしか無いだろ？

「どっこいしょっと…ん？んん！？」

何かチビすけが多いけど聞いてみるかな……お宅らが『赤き翼』って奴らかい？

「……だったらどつするんだ？」

軽い気持ちで尋ねてみたけどアタリらしい…それにメガネを掛けた剣士が抜こうとしている刀…コイツは業物の予感！

「そうだな…悪さができねえように懲らしめてやんよ！ほれカモーン、カモーン。」

こういふ真面目ぶった剣士は大抵が腹ん中に何か…人斬り、怠惰、

憤怒、色欲のどれかを抑えつけてるんだよなあ。俺の場合は怠惰な精神を消すためだけだな！

ついでに挑発してりやあ罨に掛かるし、コイツ等が玉無し野郎でも仲間が来るまで時間稼ぎになる……ん〜！俺って頭イイ〜

「ほれほれ〜ヘイヘイ！カモ〜ン、カモ〜ン！  
もしかして腰に差してる得物は竹光ですかあ〜？」

「挑発か……化け物風情が図に乗るな！今すぐ奈落にたたき落とすてやる……  
いくぞ、神鳴流奥義…雷鳴剣！！」

「カモ〜ン……来いやあ！！」

勢い良く上段から振りかぶり、雷撃を纏わせた一撃で頭からザックリする気らしい。  
玉無しではなかったようだが、この程度の挑発に引つ掛かるなんて…若いねえ。

「その刀……俺が戴いたアア！！」

後は簡単！白刃取りで攻撃を受け止め、しっかりと両手に挟んだままサマーソルト。

サマーソルトを喰らわす時は、刀が自分にすっぽ抜けるように……そして相手の顎を正確に蹴り抜き、相手の得物を抱き込むようにして着地するのがコツだ。

そうする事によって……

「そんな……馬鹿な……俺の……得物が……」

「ありがとうございます！  
それにこの業物は……千鳥じゃねえか！！  
悪いなあ……大事にするぜ！」

相手の武器を奪い無力化する動作と攻撃が一発でできる！

先代のスービエからそう教わったのに……

「貴様ツツ!!今すぐに俺の家宝の千鳥を返しやがれ!  
そういえば実家で思い出したぜ……貴様を見ているとあの化け物を  
思い出すなあ……ふふふ………決めたぜエ?  
八つ裂きにするだけで許してやるぜエエエエエエ!!」

ナニアレ……怖い  
相手と戦わずして戦意を喪失どころか凶暴、もとい狂暴化してるじ  
ゃんか!!!!

先代イカ女の嘘つきいい!!

あ!2本目抜いた……ノエルー、早く助けに来て……!!

・  
・  
・  
・  
・

ギルガメツシュが赤き翼内でもタブー視されている黒詠春を呼び出してしまい、赤き翼も単独犯だと警戒を解いて2人のリアル鬼ごっこを眺めて楽しみ始めた頃

「はい到着。」

ところで、ねえノエル…ギルが今頃どうなってると思う？」

「あそこでメガネを掛けた修羅に追いかけて回されてますね…」

ユカリさんはよく働いてくれたから、休憩しながらのんびり待機してください。

オ、イ、ギル…いつまでも遊んでないで戻ってこい！」

「ひいひい、ノエル…神鳴流のメガネ剣士はヤバいぜ。」

無刀取りをしたら、別人格が出てきやがった」

「バカ野郎…どうせ業物狙いでやったんだろうが自業自得だ。」

やっとユカリさんの気が済んで赤き翼の本隊が転移してきたので、ギルガメツシュは事なきを得た。

「……あやつ等は確か……（今まで情報を流していたけど……ライフメーカーはとうとう赤き翼を敵性対象と見做したみたいだね……）」

「げエ、ノエル！エヴァンジェリンもだとオ！？  
ど、どどど、どうしてお前等がこんな所に居るんだ！？」

「へえ！この方々が音に聞くバレン又帝国の猛者ですか……（ナギが  
これでは正面突破は厳しいかも知れませぬえ）」

「ちよつ！？待てよ！！刀泥棒の次はバレン又帝国だあ！？  
オイ、アル！コイツ等ぶつ飛ばすか！？  
（つーか、バレン又帝国ってどこだ？とりあえず合わせよう。それ  
が一番だな……うん。）」

「ヒャッハー！刀泥棒は八つ裂きに！化け物とその仲間は殺した後  
に、もう一度八つ裂きにして退治だアアア！！」

赤き翼のメンバーはそれぞれに思うところがある者、裏で生き延び  
るための策を巡らす者、とりあえず合わせる者とラリったままの者



などバラエティー豊かだった。

そして赤き翼、最初の犠牲者は……

「俺の愛刀を返せエエエエ!!」

依然としてバーサーカー状態から復帰していない京都神鳴流正当伝承者 青山 詠春

「詠春!? 正面から行つては相手の思うツボです! お待ちなさい! ラカン、詠春を止めてください。」

詠春のスピードは普段ならそう大したこと無い。しかし、京都神鳴流の伝承者は当然裏の業も修める必要がある! 感情が高ぶり、それが絶頂に達した時に実力以上の力を発揮する超強化がそれだ…

詠春がわざわざ魔法世界の戦争に参加した理由の1つに、この禁忌技の完全制御がある。

それが発動している場合は理性が消える。

つまり、全てのリミッターが外れた最強状態で突っ込んでいるため、アルビレオでは止めようが無いのだ。

そのためアルは縋る思いでラカンに頼んだが…

「ムリだ！！アイツは自分から死地に行った！

あの距離はあの集団の間合いだから手の出しようが無い！！

それよりもアイツ等の相手をする事を考える！」

ラカンが言うことは、単に仲間を切り捨てたように聞こえるが、赤き翼の生存を考えた末に傭兵・ラカンが導き出した答えである。

この場は不意を付かれた赤き翼と、圧倒的優位を築いている七英雄が睨み合う戦場

要は、冷静な詠春なら決して犯さない失態。

理性が飛んだ彼は、死線の向こう側まで行ってしまったのだ。

これにはあらゆる戦場を越えてきた流石のラカンも諦めざるを得なかった。

「ギルガメツシュ、あの狂った剣士はお前が蒔いた種だろ？  
やり方はお前の好きにしていから効つてこい。俺達は後ろに控え  
てる奴らを片付ける。（それに見知った奴もいるしな）」

ギルガメツシュがポロツとこぼした無刀取り、執拗に追い回してい  
た青山詠春を見ていたのだ。  
ギルガメツシュを指名したノエル。

その理由は『あんなサイコ野郎の相手は、正直嫌だなあ』と七英雄  
の仲間で意見が纏まったから。  
そしてノエルとエヴァの2人も面識があるゼクトが何を考えてるの  
か赤き翼のメンバーにいるからだ。

「筋を通すにはそれしか無いから仕方無いわな…サクツと片付け  
か！」

どこまでも自信たっぷりで、その間も鬼の形相を浮かべながら猛然  
と迫り来る詠春を前にしても、余裕を崩さずギルガメツシュは仁王  
立ちで待ち構える。

「行くぞオオオ！薄汚い化け物オ！！ハアアア！！」

最強状態の詠春がもう一振りの愛刀、沈む夕日に向かって振った際に切り分けたという逸話を持つ「夕凧」で抜刀居合いを放つ。

その衝撃は凄まじく、大地を削りながらギルガメツシュ一直線に進む真空の刃を複数発生させた。

それは神鳴流の中でも扱い安く、威力も高い斬空閃の上位版…斬空閃・散と呼ばれる宗家に伝わる奥義

そして、持ち前の剣術の冴えと身体能力向上により、今ならばラカオンやナギとも互角に渡り合える詠春の猛攻はまだ止まらない。

「お前には惜しい業だが…これで地獄にたたき落としてやらあ！」

ギルガメツシュとの最初の立ち会で放った雷鳴剣は、一体の敵を葬るために編み出された技

そして、神鳴流は戦いにおいてあらゆる状況を見越し、古くから技の開発、改良、発展を重ねてきた武闘集団。

それでも開祖：青山が伝えて以来、一度の改良も行われず、それでいて真つ先に最強と上げられる技が存在する。

「京都神鳴流決戦奥義：真・雷光剣ツツ！！」

原理は雷鳴剣と同じだ。

両奥義の真髄は共に、気によって発生させた雷撃を纏わせ、相手を一刀の下に斬り捨てる剛の剣。

しかし、雷鳴剣との決定的な違いがある。

それは込める気の量：剣に纏わせる雷の威力が桁違いなのだ！

そのため、対象は一体の敵ではなく戦場全体。

戦場に存在する全ての敵を葬るため斬撃と同時に雷撃が爆散：超規模の攻撃を目的にしている。

それを詠春は脈々と受け継いできた神鳴流剣士の本能で選択した。

夕風に雷が纏い、雷撃が一本の剣を形作つた時に力を解放：天にも届かんとほどの迅雷がギルガメッシュを襲う！

炸裂する秘剣、響き渡る轟音、決れる大地、揺れる世界

ギルガメツシュいた場所は50メートル四方のクレーターが出来上がっており、普通なら生還は絶望的だ。事実ギルガメツシュの気配は無く、土埃が晴れた戦場には影も形も見当たらない。

「ハッ!?!…俺はまたやってしまったか…強化を使いこなせるように…神鳴流伝承者を真の意味で名乗ることが出来るようになるのはいつだ…」

そして、やっと正気に戻った詠春。無闇な殺生と未熟な己を思い返して恥じる。だがそれが行けなかった。

「背中ががら空きだぜ?」

確かに奥義で跡形もなく葬った筈のギルガメツシュの声が突然、詠春の背後から聞こえてきた。

「俺が抜かったというのか!?!」

「詰めが甘いぜ？名刀千鳥が奥義！雷殺斬！！」

・

・

・

・

・

「バレン又帝国の方々が来ましたがナギ…身体の具合は如何ですか？」

赤き翼で現在、最強の火力を持つ者…ナギにアルビレオが問いかける。

現状は詠春を欠き、向こうも4人とはいえただでさえ分が悪いのだ…ナギが動けてやっと互角かと、赤き翼の策謀担当…アルビレオ・イマは考えていた。

「へへ…オッサンと師匠がマジになる奴ら…だったら、こんな時にくたばってるワケにはいかねえぜ！！」

それに赤き翼は最強、バレン又帝国だかなんだか知らねえがぶっ飛ばしてやるぜ！！」

「おおナギ…フフ、私とした事が知らず知らず、ペースを乱されていたようですね。」

「おかげで落ち着いて考える余裕ができました。」

アルビレオの心配は無用だった。

ナギは戦う為にこの世に生を受け、戦う事を宿命付けられ、戦に愛された戦の申し子と言っても過言でない人間。

それはアルビレオが仲間になってから一戦越える度に元から強い男が化けるのを見て来た…

ナギはその程度で腑抜けるような人間では無い。むしろ、より一層燃え上がる気質の持ち主。

「おいナギ、アイツ等をこれまでの相手と同じように考えるな…お前やアルが考えてる強さの10倍は有ると思ってる。」

「上等！俺の腕試しには、これくらいの奴らじゃねエと意味ねえ！」

ラカンのいつに無い真剣な顔と言葉にメンバー内の緊張が高まり、



ナギは戦意が高揚してくる。

七英雄の4人はゆっくりと歩いてくるが、確実に両者の距離は縮まる

そしてある程度まで達した所でノエルが動いた。

「久しぶりだなゼクト…お前は何をしているんだ？  
お前のことだから何か考えがあるのだと思うが…もしふざけた理由  
だったら、その時はどうなるか分かってるな？」

ノエルが高威力、広範囲の術を使わず、わざわざ気弾で注意を引いたのはゼクトの存在があったからだ。そして何故、ライフメーカーや世界を裏切るような真似をしているのかを知るためだ。

しかし…

「うるせえ！よくもさっきは不意打ちを仕掛けてくれたな？こつちこそ聞きてえ事が山ほど有るんだよ。ラカンのオッサン、行くぜ！」

「バ、バカ野郎！？お前の喧嘩に俺を巻き込むんじゃねえよ…チクシヨウ、こつなりややけっぱちだ！」

場合によってはゼクトとの話し合い次第で、回避できたかもしれない戦いの引き金をナギは自分から引いてしまった。

ナギに遅れてラカンも駆け出す。

それを待ち構えるノエルはふと考えた。

『デカイ方は帝国から寝返った傭兵ジャック・ラカン。では、あのガキは何だ？あれが噂のサウザンド・マスターか？アレがそうならば調子に乗った戦闘狂だな…』

「エヴァ達は楽にしてて良いぞ…俺がアイツ等を始末する。」

言うが早いかノエルも駆け出す。

「こんにゃろっ、これでも食らいやがれ…千の雷…！」

ナギが幾多の戦場で使い、サウザンド・マスターと呼ばれる由縁にもなった絶対の信頼を寄せる魔法…千の雷を放った

「『エアスクリーン』…コイツはお返しだ。」

風の防壁を展開して雷の中を突っ切ったノエルはナギにキックをした。

キックと簡単に言っても、バレン又帝国内でも化け物と呼ばれるノエルのキックだ。

「ぐう…あああああ」

結果…ミドルキックを予知しガードを固める事はできたがそこまでだ。

きりもみ回転して頭から着地…意識を手放した。

「バレン又帝国がナンボのモンだ！  
ここまで来たら、俺がぶっ飛ばしてやらあ！  
ラカンインパクトツツ！！」

赤き翼に残された最後の砦…ヘラスが誇った最強無敵の傭兵ジャック・ラカン

総合力ではナギと全くの互角だが肉弾戦はダントツトップの男がヤケになってぶちかます全力全開の一撃！

「ギルドから請け負った依頼も勝手にとんずらこいてツツ…祖国を裏切る男が俺に勝てるわけねえだろがあああああ！！」

ラカンインパクトに合わせたカウンター…そして素早く後ろに回った。

そして…

「やっぱりダメだつダブア！」

バックブリーカーを極められ肩まで埋まった筋肉野郎という難解なおブジェが完成した。

「おいギルガメッシュ、メガネ剣士は片付いたか？」

「おう！こっちはこの通り峰打ちでござる…なんつってな」

よほど上手く決まったのか意識が無い詠春を筋肉オブジェの傍に放り投げるギルガメッシュ。

「さて『足絡め』っと…そっちの優男はどうするんだ？それともお前がサウザンド・マスターか？」

倒したナギを始めとしてメンバーを大地から伸びてきた蔓がグルグル巻きのスマキ状態にしてしまう。

「何を仰るやら…サウザンド・マスターはアナタが蹴っ飛ばした赤毛の少年の事です。」

あんな光景見た後です…潔く降参させて頂きます。」

アルビレオ・イマはあれだけ力の差を見せつけられたのだ…あっさりと降参した。

こうして赤き翼はバレンヌ帝国の化け物ノエルに屈した。

「そんなじゃまゼクト…ちいゝとばかり O H A N A S H I I よ  
うか？」

「ゼクト…大丈夫ですか？」

アルビレオ・イマも事の重大さを理解しているだけに気が気でない。

「大丈夫じゃ、儂が滅多な事でも言わん限り殺される事は無いじゃ  
ろうて……殺される寸前は有るかも知れぬがな。」

「ハハハ…頼みましたよ？ゼクト」

『ところで何でゼクトの野郎は爺さん口調で話してんだ？  
あれでイメチェンのつもりなら見当ハズレ所じゃないだろ！』

こうしてゼクトは赤き翼の運命を双肩と舌先に託された。

S a ・ G a 4 8 (後書き)

『エアスクリーン』

実は相手の通常攻撃の他に雷属性も緩和するお得な術法。  
ロックブーケ戦で従姉妹の姉さんに教えられた時は『マジで!?!?』  
となりました。

『足絡め』

足のある生物に発動、行動不能にする術法  
当然、竜は勿論として翼があるもの、虫、蛇を始めとした足が無い  
ものには効果無し。

『名刀千鳥』

原作ではロマサガ2に登場。

セキシユウサイがドロップするか、その城に落ちてるお宝

『雷殺斬』を閃き、使うことが可能な唯一の刀

『無刀取り』

セキシユウサイさんだけが繰り出し、異常な発動率を誇るカウンタ

―奥義！

作者のヘッジホッグがボコボコにされたトラウマ技  
ロマサガ3でプレイヤーも使えるようになりました。

しかし、本当に武器を盗まれたら怒りを超越しますよね？

関係無い話ですが、現実の無刀取りは柳生の子孫曰わく…相手と  
戦わない事を目的にしておりオーラで振り切る、女装で騙す等が本  
来の姿らしいです。

今回はユカリ、年が気になる、詠春ブチ切れる、赤き翼の災難の3  
本立てでした。

詠春さんって昔はキレると怖いとラカンが語ってるけど、アイツが  
怖いと言っくらいです…描写が無いですがこういう事でしょうかね？

今回は説教とゼクト…ライフメーカーの企みを予定しています。



S a ・ G a 4 9 (前書き)

\*ナギの株が急落します。  
ファンの方は御注意を…

ヘラスの対連合における最重要拠点であるグレートブリッジの救援に來たついで感覚で、ライフメーカーに前々から聞いていた『赤き翼』を壊滅状態に追い込んだノエル。

そして気掛かりであったゼクトとの対話が始まる。

「ノエル…これには深いワケが有るのじゃ。

儂が話せる事は全て言うから、仲間に手を出すのはしばし待ってくれ。」

300年前から少年の姿で全く変わらないのに、口調だけは年を取ってジジイになっていたゼクト。

演技かもしれないがもう少し別のやり方が有ったんじゃないか？

ただ、ヘラス武闘会の時もそうだが意外に不器用な所や仮初めの仲間にも気が遣えるのは変わっていなかったな…

「まあ別に良いけどよ…正直に話してくれよ？」

何だかんだ言っつて、俺はお前の事を気に入ってんだからな……」

「済まんの……アルビレオよ、仲間を一ヶ所に纏めて待っていてくれぬか？」

「分かりましたよゼクト。戦わなかった私が言っつのは何ですが……待ってますよ。」

アルビレオはゼクトを信じてラカンを掘り出し、スマキ状態で気絶している2人を担がせると誰の邪魔も助けも入らないように距離を取った。

「……ふう、年寄り口調は予想以上に疲れるよ。  
ノエルも一回試してみれば分かるよ……気力まで抜けていくのがね。」

アルビレオ達が遠く離れ、会話を聞かれる心配が無くなった瞬間、さっきまでのシリアスな空気が一気に吹き飛んだ。

「ゼクト、自分で自分のクビ絞めるって……お前って実はかなりのおバカ君だろ！」

「ノエルの馬鹿！僕はいつまでもチビだから、傭兵に舐められないように一生懸命工夫したんだぞ！」

俺の言葉が聞き捨てならなかったらしいゼクトは顔を真っ赤にして抗議してきた。

しかし、その道の人間が見れば、そのシヨタっ気満載の容姿と相まって喜び過ぎて鼻血が出るほど迫力が無い。

「（面倒臭え… 肉体変化薬でも何でも有るじゃねえか）ハイハイ、私が悪うございました。」

俺も仲間を待たせてんだからお前が何故赤き翼いるのか、その理由をさっさと話せよ。」

当たり前だがノエルがゼクトと話している間は手持ち無沙汰……エヴァとユカリはノエルの傍らで大人しく聞いているが、他の者は2人が話している傍の岩に腰掛けたりして休憩モードに入っている。

それにノエル自身も砂埃が舞い上がっている荒野に居ては、突風が吹く度にビュウビュウ砂が飛んできて目に入るわ、鬱陶しいわで、サッサと片を付けてヘラスのホテルでのんびり休みたいのだ。

「つれないなあ……まあ、僕もあまり時間を掛けるとあの馬鹿が来るから仕方ないね。」

僕が傭兵集団『赤き翼』にいる理由から話そうかな……」

・  
・  
・  
・  
・

「それが僕が赤き翼に居る理由……決してライフメーカーを裏切った訳では無いんだよ。」

ライフメーカーは連合に怪しまれずに近づく事が可能で使い捨てに出きるような駒が欲しかった。

その意思に従い、開戦当初から手頃な人間を探していた。

帝国の犠牲者については申し開きのしようもない……その代わりにメガロメセンブリアを支配する古代人の狙いがある程度絞り込む事ができた。

ゼクトの説明を要約すると、この3点を手短かに語られた。

「お前よオ、今は世界大戦中だろ…古代人の狙いが何か探るなんて関係無いだろ？」

やるべき事は古代人の本体の発見と戦争の終結だろうが！」

「落ち着いてくれよノエル。

キミの言うことは正論だ。しかし、世界は今ややこしい事になってるんだ。

最悪…この世界が消えて無くなるかもしれないんだ！」

はあ！？世界が消えて無くなるだあ！？急に話しのスケールがデカくなったな…

それと赤き翼の関係がどこに有るんだ？それ以外にも気になる事は山積みだ。

世界が消えたらバレンヌ帝国も当然消える…俺達が目指した国、仲間、あらゆる物が無に帰す…

ポケボケして世界滅亡したまったら、俺達に託して先に逝ったアイツ等に会わず顔が無い。

「もう一度、今度は世界が消える理由も合わせて話してもらおうか。

「この世界は大体600〜700年周期で消滅の危機に瀕してきた。その度にライフメーカーを始めとした僕等…そしてウエスペルタイア王家の『黄昏の姫御子』でどうにかしてきた。」

「ウエスペルタイアねえ…」

この世界に降り立った場所であり、過去の戦争でも相手をした国。最近では落ちぶれて嘔とんと名前を聞かなくなったが、「始祖の国」なんて威張るだけの事はやってたんだな…

「それで王族である黄昏の姫御子がどうして世界滅亡に関わってた？」

「黄昏の姫御子が現れる時…それは世界の崩壊が近づいてるからだよ。」

『黄昏の姫御子』の役割はそれだけじゃない。世界の崩壊を抑え込む役割も担っている。」

「黄昏の姫御子が存在する意味と役割は分かった。次はわざわざ連合に探りを入れていた理由だ。」

「ゲートはあれ以来出現しない……連合を操る古代人はこの世界から手を引いて旧世界に進出した。」

それだけじゃなく、古代人はメガロメセンブリアの大図書館からその情報を手に入れた。」

つまり今回の戦争は、邪魔者である僕等を魔法世界ごと葬り去る為だけに引き起こした茶番だったんだ。」

「そついう事か…戦争で勝とうが負けようが関係無い。だから連合は国が潰れる事も省みず、連日連夜の侵攻をしているんだな。」

メガロメセンブリーナ連日はこの3ヶ月、常に戦闘を仕掛けてきた。それも朝、昼、晩でヘラスとバレンヌ帝国に休む暇を与えない程だ。

まさか古代人がこの世界を諦めて旧世界に仕込みを始めている事も予想外だった…

皇帝が考えた通り、バレンヌ帝国の外には戦争の真実が転がってた



な。

何より、ウエスペルタティア王家の秘密を掴んだのは大きい…「ゼクト、だったら黄昏の姫御子を守らねえと世界は終わりだな…どうやってウエスペルタティア王国から連れ出すんだ？」

バレンヌ帝国はあの国への外交カードは無い…いつそのこと拉致するか？」

最悪、世界を護るためならバレンヌ帝国に俺を追放、国際指名手配させても拉致してもいい。

「いや…キミ達七英雄は、バレンヌ帝国の重臣、それぞれが分野の第一人者の集まりだ。

だから手は出さないで欲しい…その為の『赤き翼』なのだから。

それに彼等も戦場に進んで出る人間だから覚悟は有るだろうから問題無いさ！」

ゼクトはまるで新世界の神のようなゾツとする笑みしながら、赤き翼は汚れ役だとハツキリ言った。

こつこつ所には、長年生きた準化け物として凄みが滲み出ている。

「今回の話し合いでゼクトが赤き翼にいた理由もよく分かった。さっきは悪かったな。」

「僕とキミの仲だ。」

これくらい別に構わないよ。逆にバレンヌ帝国中心とはいえ、世界の事を真剣に考えてるのが分かったから、今回の話し合いは僕にとっても有意義だったよ。

まあ、最後まで握手でもしたい気分だけど、アルビレオが見てるだろうからこれでオシマイだ。」

ゼクトの背後（と言っても遙か遠くだが）赤き翼の方に視線を向ければ、アルビレオ・イマは気になるらしく、仲間の介抱をしながらも仕切りに此方の方をチラチラと見ている。

赤き翼の命運を左右する話し合いだというのに、和やかに握手をして別れる。

外交ならばこれもアリだが、命の食い合いというじゃれ合いをしたばかりでは確かに不自然極まりない。

それにしても、ゼクトは後ろに眼があるわけでも無いのによく気付いたものだ。

「そうだな…俺の仲間も癖は有るが全員イイ奴等だ。」

お前の方は癖どころかアクが出るが…まあ頑張れよ。」

こうして話し合い兼情報の受け取りは、滞りなく終了した。

少なくとも俺とゼクトはそう思ったが……

「この不意打ちヤロー、今すぐに俺の師匠から離れやがれ！……雷の斧……！」

「ナギ！？何をしてるんだ！？今すぐ辞めるんだ……！」

流石のゼクトも驚いて素の口調で対応しているなあ……好事魔多しとは言うが、世の中本当に上手くない事ばかりだなあ。

・  
・  
・  
・  
・

時間はノエルがアルビレオの様子を見た辺りにまで遡る。

「うーん、俺は……ってなんじゃこりゃあ！？  
体中にツタが巻きついてうざってえ。」

「気が付きましたかナギ…しかしバレンヌ帝国のノエルと言えば、世界でも指折りの強者と名高い方です。」

「はあ！？あの不意打ちヤローが指折りの強者だあ？」

「ノエルとかいう男は、突然気弾による奇襲攻撃を仕掛け、ボコボコにしてきた卑怯者だろ？」

「不意打ち仕掛けてぶっ飛ばすのなんか、出来て当たり前じゃねえか。」

「アル、幾らお前がイタズラ好きつっても、あまり滅多な事は言うもんじゃねえぜ？」

「幾ら俺がバカだからって、そう簡単にイタズラには引っかからねよ。」

「これは事実です。」

「手加減されたとはいえ、彼のミドルキックを喰らったのに骨折1つしなかったとは…」（賢さのステータスが異常に低いですが）丈夫さもチートですね。」

途中で変な間があったのが気になったが、またチートか…  
意味は知らねえが、これって褒められてんだよな。

「何言ってるんだよ。俺は強いからな！アルだってそこらの相手にや  
やられねえよ。」

「ハハ…」

まあ、こつやって強さを認め合う仲間ってのはイイけど…

「アル、師匠は何処だ？」

詠春は刀を盗られたショックでうなだれているし、ラカンのオッサ  
ンも今日だけは真面目に慰めている。

それは良いが、師匠がどこにも見当たらねえ。

不意打ち仕掛けられたとはいえ、俺達『赤き翼』は負けたんだ。

この場に居ない師匠の事が気に掛かる。最悪、バレンヌ帝国の奴ら  
に……そんなシーンが頭に浮かんで俺はアルに尋ねた。

アルはゼクト師匠の話しを振った途端、見たことも無いほど険しい  
顔をして答えた。

「ナギ…ゼクトは私達の為にあのノエルと話しを付けに1人残りま  
した…」

そこからアルには事の経緯、知ってる事を全て喋らせた。

「馬鹿野郎！何で師匠1人だけをアイツ等の所に残してきたんだ！  
お前達がやらねえなら……俺だけでも師匠を助けに行くぜツツ！！」

「ナギ待ちなさい！ゼクトの想いを踏みにじる気ですか！？  
もう一度良く考え直しなさい！！」

アルの説得は聞き飽きた…

「ナギはこの状況が分からないのかツツ！！  
ゼクトの決死の覚悟を全て蔑ろ（ないがしろ）にする気が！  
自分達の立場を考えろ。」

詠春は常識やら、武人の覚悟を持ち出して来やがる。

「ナギ…今回はかりは話にならねえ。ガキの我が儘だぜ。しかも俺達はたった1人に…完膚無きまでに叩きのめされた。バレンヌの奴等が本気なら俺達全員、今頃あの世だ！ゼクトの事を思うなら、信じて待て。」

ラカンのオッサンが渋い顔で言う。

それに奴隷闘士時代から念頭に置いている弱肉強食の理論。バカなくらい豪快なオッサンが、たった1回の敗北でここまで冷める…人間はここまで変わるのかよ!!

師匠の危機なのに、コイツ等はどうして動かねえんだ!?

もう我慢ならねえ…

「うるせえツツ!

師匠が犠牲にならなくても、俺が師匠を助け出せばそれで全部解決だ!」

アルは俺よりも遙かに頭が回るし、詠春とラカンのオッサンは長生きして経験を積んでる。

アイツ等の言うことは大抵その通りだ。

だがよオ…運命は力技でこじ開ける時も必要なんだ！！

「この不意打ちヤロー、今すぐに俺の師匠から離れやがれ！！！雷の斧！！」

待ってるよ、ゼクト師匠。俺が速攻であの野郎をぶっ飛ばしてやらあ！！

・  
・  
・  
・  
・

「……………」

「この野郎！ちょこまかと逃げてばかりでムカつくぜ！」

さて、俺はナギとかいうガキに襲撃を受けたが、赤き翼の存在意義を聞いたばかりだ。



蹴りや突き、無詠唱の魔法の矢で攻めてくる。

「ノエル、頑張れよ」

「そつだぞ！そんなガキ遊んでやれ」

エヴァやギルからは冷やかし混じりの声援があつた。

信頼してるから？いいや、暇つぶしの余興で見ているだけだろうな。

それにこのガキ……使い道がある以上、ここで殺すわけにもいかない。

こういう時はアイ・コンタクトでゼクトにお伺いを立てるとしよう。

「もう疲れた…僕は知らん」

管理人からのOKサインは出た。

「こつなりやコイツで勝負だ！千の…」「うるせえッッ！」「ぐぐぐぐぐい…」

うんうん、魔法使いには喉を攻撃するのが一番だよな。

やってることは至極簡単！片方の腕で喉を軽く絞めて、残りの手でナギの両手を封じているだけだ。

これから問答をするんだ。

質問に答える事ができるギリギリの所までは緩めてやるとしよう。

「貴様はガキの癖に戦場に出るとは…：どついつ神経してんだ？

貴様が魔法を撃つときに何を考えてるんだ？」

まず、このガキは人の命ってモンを軽く見てる…：そいつを理解させてやる。

「うるぜえ…：おでのがつでだ！」

「ほお、これだけこてんぱんにされても悪態を吐く元気があるとは…：負けん気だけは一人前、いや二人前だな。

さっきの質問分かりやすく言つてやる。

お前は何を考えて戦場に立つんだ？

家族を養つ為か？それとも力を思う存分振るつて金を儲ける為か？  
後者なら、貴様が今まで殺してきた人間…：その家族の想いを背負えるのか？

さあ答える！」

「デメエ！一体何が言いだんだ！！！」

酸欠気味で脳みそが働いて無いのかも知れないが、そんな事は関係無い。別に良いよな…  
コレが最後のチャンスだ…このバカにも分かるように言っただろうかな。

「お前みたいな男が幾ら強くなろうと、ストレス解消で他人に襲い掛かるチンピラと変わらん。  
何故、己は戦場に立つのか死ぬ気で考えろ！」

そのまま地面に叩きつけ、距離を取る。

「ぐう、ハアハアハア…俺が戦場に…立つ理由だあ？」

「そつだ…本来ならば貴様等、全員晒し首にしてヘラスに届けるのだが、ゼクトに免じて見逃す。

ゼクト…この狂犬でもお前の仲間だ。手綱はしっかりと握っている。

「

「見逃してくれるとは有り難い…これからはナギが暴走せぬように監督する所存じゃ。」

やはり脳しんとうで動けないらしいが、逆に言えばその程度で持ちこたえたガキ。

この年頃のガキなら、俺が手加減して叩きつけても良くて半身不随か植物人間、普通はミンチ……とんでもない規格外クラスのガキだな……

結局、ナギはゼクトに引つ張られて赤き翼に合流、そのまま奴等は何処かへ消えた。

俺も仲間達が待っている場所に戻ったが……

「へへへ、やっぱりノエルは説教したな。  
賭けはこのギルガメツシユ様の1人勝ちだな！」

「はあ、半殺しを選択したんだがなあ。  
ギルに負けるたあ俺もとうとうヤキが回ったか？」

「くうう、若僧の分際で私を出し抜くとは……  
ノエル！どうして速攻で始末しなかった！」

私はお前があのガキを殺すに賭けたのに……おかげで負けたじゃないか……」

エヴァ、ギル、ジーンが賭けをしていたのをすっかり忘れていた……ねぎらいの言葉どころか、エヴァからは非難の言葉が飛んできた……

「うるっせえなあ、俺の勝手だ。

ヘラス帝国への義理は果たした。

それにとんでもない情報が手に入った。バレンヌ帝国に戻るぞ。」

俺も仲間の手綱をしっかりと握って置かねえとな……

メガロメセンブリア：元老院議会場

古代人に誑かされ、戦争を始めた連合を取り仕切る老人達が集まり、施設の奥深く…積み重ねた歴史により陰鬱な空気がこびり付いている空間。

そして世界の暗部に限りなく近い人間達がこれから話し合う……当然、話題は戦争関連の内容だ。

「それで戦況は…各国の疲弊度と我等が持つ駒の消耗度のバランスはどうだ？」

最も力のある議員の1人が末端の男に問い掛ける。

「計算通りヘラスは疲弊し、いつ暴動が起きても不思議でないレベルです。」

そしてバレンヌ帝国についても、離れ島から遠征出来ないように釘付けにしています。これからも今まで通りのペースで問題無いでし

「よう。」

「そうか、その調子でいい。」

戦争は引き続き軍人達に任せるとしよう…それでは皆が独自に仕入れた情報を提出してもらおうか？」

本来、老議院は派閥と権力、年齢によって自由な発言権も無い。

しかし、この瞬間から序列は関係無い。全員同列と見做して情報を提出する場に変化する。

「若僧が手柄を挙げようとバレンヌ帝国に飛ばして以来、消息が掴めなかったガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグが赤き翼と接触したようだ…」

さっそくグレートブリッジ戦の結果と共に手に入れた赤き翼の情報が上がる。

「その赤き翼だが、バレンヌ帝国から援軍に来た7人組み…正確には1人に倒されたと報告が来た。」

使い勝手の良い駒だったが、ここらで処分するか？」

メガロメセンブリアにとっても赤き翼とは使い勝手の良い傭兵に過ぎない。

不穏分子はいち早く消し、石橋を叩いて渡る周到さと狡猾さが有ったからこそ生き延びて来たメガロメセンブリアだ。

「ガトウは何としても消さねばならんな…所詮傭兵ごときが真実を知り、動いた所で流れは変わらぬだろう。

だが、万が一という事も有り得る…念には念を入れて関係者共々消し去るべきだ。

この結論に異議ある者はいないか？」

「……………」

強硬、穏健派、内部に幾つもの派閥が存在する議会場の面々からの反対意見は無い。

「では諸君、赤き翼にはこの世から退場してもらおうと満場一致で決定だ。

今回の議会はこれで解散だ。」



そして1人1人席を立ち、表の世界へ…各自それぞれの立場と権力を使って暗躍する日常へ帰っていく。

しかし、未だ席を立たず残る一部のメンバーがいる。

「議長：古代人は約定を守る気は無いでしょう。このままでは破滅は必至です。いかがなさいますか？」

世界の為では無いが、古代人に刃向かう者はメガロメセンブリアにも少なからず存在するのだ。

「我等がすべき事は黄昏の姫御子をウエスペルタティアから誘拐される隙を作ること…マクギルに悟られてはならんぞ。」

それぞれの思惑を秘め、老議院は回っている。

・  
・  
・  
・

「ガトウの情報に従い儂等はウエスペルティアに向かう。  
間違っても先走る事は許さんぞナギ！」

「…分かってるよ」

あれから俺に対する風当たりがキツイ……  
そりゃあの時の行動が裏目に出たのは認めるけど、師匠を助けてエ  
つつう一心だったのにこりゃ無いぜ。

「……………」

前までは気にならなかった沈黙が堪らなく痛え……

「なあラカンのオッサン…アイツ等の事知ってたけど、どうしてだ  
？」

「ああ？俺の職業柄渡っていい場所、いけねえ場所が暗黙のルール  
で有んだよ。」

「……俺にバレンヌ帝国と気弾の使い手について、詳しく教えてくれねえか？」

本当は別の事が聞きてえんだが……馬鹿な事言っちゃった。

「まあ、ウエスペルタティアまでは長いからな。時間潰しにはなるから話してやる。」

「ふいふ、はるばる来たぜバレンヌ帝国、首都アヴァロン！」

俺が奴隷から解放された直後まで遡る。

バレンヌ帝国は俺が奴隷闘士の頃から、とんでもない奴等がゴロゴロいる国だと噂になっていた……なおのこと来るっきゃねえ！ついでに腕試しも出来るな。  
そう思って、バレンヌ帝国に渡ったんだ。

噂の続きじゃ、建国以来首都アヴァロンに存在して魔法、格闘技を一通り修める『道場』

格闘技一本の『竜の穴』  
魔法を極める『練魔の塔』

他にも剣やら、補助術、技を専門であるがどついう訳か大陸の端にあるから遠い。

と、なるとアヴァロン周辺部の3つだが…漢なら拳で勝負だ！

つつつ訳で『竜の穴』へ行ったんだが…

「む、キミは入門希望の方かな？それとも道場破りの方かな？」

入り口には笑顔が眩しい兄チャンが立っていた。

「へっ！！俺はヘラス帝国最強の解放奴隷闘士ジャック・ラカンだ！今日は『竜の穴』の看板もらいに来たぜ！」

「あゝ、そうですか。ではこちらにお名前と10000Dpを……」

ムムム…俺の啖呵を受けて屁とも思ってたねえ  
バレンヌ帝国は並みの拳士からして手強かった

「ハイ、結構です。」

では、こちらの番号札を持って中へどうぞ。」

道場破りで行ったら、どういう訳かぼったくられた。

まあ、中に入って納得したぜ。

「「「「「.....」」」」」

先に来ていたらしい敵つい顔のオッサンがいた。

ヘラスでも有名な拳士も考える事は同じらしい…バレンヌ帝国がどれほどのモンか試しに来たんだわな。

「幾ら人数が多いとはいえ、消耗品の購入費に使うDpを徴収…稽古、指導中に手を出させない為の番号札システム。」

意外にせけえ場所だから、なんとかなると考えていたがよ…」

「おいラカンのオッサン、それからどうなったんだよ！勿体ぶらずに教えるよ！」

「そつだぞラカン、お前は早く教えるべきだ。」

「なんだ詠春もかよ………悪いが先が知りてえなら金が要るぜ？  
1000Dp寄越しな。」

「チッ…」

「仕方ないな、1000Dp確かに払ったからな。」

うほ！ダメ元で言ったら本当に払いやがった。  
コイツはラッキーだったぜ！

「よしよし、毎度！」

じゃあ、道場破りから再開だな………」

俺も闘士だ。若い頃からやんちゃ坊主だったが、この時ばかりは大  
人しく順番待ちしてた。

つつか、挑戦者が奥の部屋に通されて長くて2分もすりゃ、出てき  
たからな。

「それでは番号札27番、ジャック・ラカンさん。

この『竜の穴』最強の人間がこの先にある扉の向こうで待っていま  
す。」

「おし、一丁やってやるか！」

岩を切り出した通路を進んで行くと、ドデカい金属製の扉が現れた。  
場数を踏んではいえ相手は人間だ。プレッシャーを掛けれりや  
上出来だと、勢いつけて扉の開き、中に入ったんだが……

「今日はキミで最後らしいねえ……」

俺よりもデカい身長、ゴツい筋肉の鎧を着込んだ身体、ただ其処に

いるだけなのに、歴戦の猛者にしか出せないオーラを発するジイさんが待っていた。

・  
・  
・  
・  
・

「はあ！？ジイさんたった1人にオッサンはビビったのかよ。情けねえな」

「バーカ、最後まで話しを聞いてやがれ！いちいち話しの腰を折るんじゃないよ。」

「ナギは我流で来たから知らないだろうが俺は分かる。神鳴流に限らず、世界の達人には相手と闘わずして征す技があるからな。」

「お！流石に詠春は分かるわなあ。  
後から調べたら、『活人剣』って技の応用で、気をぶつけていたんだとよ。」



まあ、ナギが知らないのも仕方ねえがな………今までの人生で敗北した相手もバレン又帝国のノエル以外いない。

それに、あの時のノエルは気当たりなんて使わなかった。

悪たれ坊主を相手にする程度の認識だった……『活人剣』を使う素振りは無かったから、コイツは体験しねえと分からないからな。

「詠春とオツサンだけ分かる技の話はどつでもいいんだよ。早く続きを話してくれ。」

「へいへい、分かったからそう急かすんじゃないよ。ウエスペルタティアまで半分も来てねえんだからな。」

「ほほう、俺の気当たりをまともに受けて、戦意を保つとは……ヘラス帝国の奴隷闘士もやるじゃないか。」

「うるせえ！俺もここまで来るのに相当の場数踏んでんだ！たかがプレッシャーでビビってたら、とっくの昔に死んでんだ！！行くぜジイさん！！」

その時の全力全開を出してジイさんを殴りに行ったさ。

けどな、どれだけ蹴り、突きを出しても当たらなかつた…っーか、掠りもしなかつたな。

なんつつか、ジイさんからしたら紙一重で避ける練習台にしか見られてなかつたんだろっな。

カウンターも張り手か手の甲で叩くくらい……偶に突っ張りやシヨルダータツクルでぶちかましをしてきたけどよオ。

おかげで闘士デビューして初めて闘った時を思い出してたぜ。

あの時は中堅相手だったが、新人の俺にとってはとんでもなく強い格上相手だったからな。

ヘラス帝国では最強なんて呼ばれて天狗に成ってたが、世の中には化け物がゴロゴロ居るって叩き込まれたわな。

ここまで語った所で詠春が感慨深げに呟いた。

「ふむふむ…人に歴史有りというが、ジャックも努力していたんだな。」

俺はついさっきまでお前の事をナギと同類だと思っていたよ。」

「そうですね。私もジャックはナギと同レベルのチートだと思っていただけに意外でしたよ?」

「「「!?!?!」」」

ゼクトと一緒に話しをしているとばかり思っていたアルビレオが気配もなく会話に乱入していた。

油断も隙もねえな。

「アル、急に沸くんじゃねえよ。」

タダで聞こうなんてマナー違反だろ。」

ナギの場合は金を払わせただけだろうか。

「まあまあ落ちつきなさい、ナギ。」

私はゼクトから気弾の使い手について、ジャックから聞いてこいと  
言われて来たんですから。」

「な！？嘘扱くんじゃねえよ、アル！  
もし俺が師匠なら直接聞きにくるぜ！」

「ではゼクトに確認しますか？今日は一段と機嫌が悪いですがね？」

コイツ：嘘を吐き通しやがったな。

まあこの程度で丸め込まれるのもナギくらいだけだな。

「それよりアル。

コイツみたいな天才キチガイはそうそう居ねえよ。

それに最後だから金はいらねー……

ところで、後は俺が気弾を受けてぶっ飛ばされるだけの話したが聞くか？」

ナギはぴーちくぱーちくうるせえ所が有るからな。

多少苦しいが、サツサと話題を変える方が被害が少ない。

「ジャック・ラカン本人から負けた話しを聞ける機会なんて、この先巡ってくるか保証は有りません。勿論最後まで聞かせて貰いますよ？」

なんつうか、ずる賢いと言うか、飄々として世渡りが上手いと言う

か……

「はあく、言つて減るモノじゃないから良いが、誰にも言いふらすなよ!」

「フフフフ……」

この野郎……

「久しぶりに骨のある挑戦者だった。だが負けてやる訳にはいかん……ここらで幕にしようか。」

「上等だ!ジイさん。」

そして俺が走り出したと同時にジイさんは空中にデコピンをした。

最初は何か分からなかったが、近づくにつれて気の塊を撃ちだしたのだと理解した。

その頃には避けられない所まで来ていた。

だから

「ラカン・インパクト!!」

コイツで蹴散らしたが甘かった…

「ゲエ!?今のよりデカいだってええええ!!?」

「今日は厄日だねえ?」

・  
・  
・  
・  
・

「結局、2発目に撃たれた本命の気弾に為す術無く敗れた俺は、そのまま壁に叩きつけられて終わった……コレが俺の知るド級の気弾を撃つことができる男の話だ。」

「やはりバレンヌ帝国は恐ろしい場所ですね…  
イイ暇つぶしにはなりましたよ。」

「ありがとうございます、ジャック。」

「おお、お前はゼクトの所にサッサと行け。」

あまり傍にしていると胡散臭さが感染してきそうだし、  
ついでにゼクトにも教えてやるのもイイしな。

「剣術の道場はどうなんだ？  
千鳥を盗られた相手の情報は！？」

「最近の詠春はいつもこれだ…  
普段は落ちついたが、たまにスイッチが入るから困る。」

「知らねえよ。話し聞いてただろ！  
バレンヌ帝国が戦争の中核にいるんだから、アイツ等にもそのうち  
会うこともだろ。」

「傭兵としてやってけるのかねえ？」

「オッサン…俺達がバレンヌ帝国の本拠地に攻撃を仕掛けてた場合、生き延びる事はできると思うか？」

ん？バレンヌ帝国に仕掛けたいのか？マジ物のバカだろ。

「まず間違い無くあの世行きだな。

ついでに言つと、海を越えることすらできねえ。あの国は半端じゃないからな…」

「………だったら、オッサンは今まで殺した相手を考えた事あるか？自分が戦場に立つ意味を考えた事はあるか？」

は？いきなりマジな顔して、そんな事聞くなんて………なんだコイツ。

「知らねえよ。自分で考える。

お前は腕試しと手柄が欲しいから、わざわざ戦場に行くんだろ？」

「実はこの間、不意打ち野郎から言われたんだ。

『何も考えず、ただ力を振り回して何がしたいんだ？貴様が殺した兵士の人生を背負えんのか？』ってな……

そっから自分で考えたら、戦場に立つ意味どころか魔法が無かった



らスツカラカンだって気付いてよ。」

この手の問答か…

俺もアイツにはバレンヌ帝国で下働きとして一時世話になったけどよ…

「…それで？」

「それでって…オツサンに相談してんだよ！」

俺は斬艦剣で飛べない程度にしてるが、コイツは魔法を手加減無しでぶっ放すから跡形も残らねえからな…

それも理由も無しだから、ノエルがブチ切れても不思議じゃない。説教だけで済むとは、運が良いじゃねえか。

「テメエで戦争に参加すると決めたように、戦場に立つ意味くれえテメエで決める。」

まあ、こればかりは悩んで悩んで悩み抜くしか道はねえから、俺がしてやれる事は無い。

ウエスペルティアに着くまで時間も有るし、昼寝でもするかな！

「待てよオッサン！分からねえから聞いてるんじゃないか！！」

「悩めよ！少年。遠回りしねえと答えは出ねえぞお」

誰にも言っつてねえが俺もなんだかんだ言っつて、ヘラス帝国の為に戦  
つてるしな……

今回の戦争は胡散臭えから裏から探る為に皇帝の勅命とはいえ裏切  
つちまったのはキツいな……

ところで、ナギには何か大切なモンが残ってんのかねえ……

『活人剣』

剣技最高クラスの閃き難度を誇る技

効果は発動した瞬間、敵が撤退してくれる。  
ただそれだけの死に技。

ただし、ある裏ワザを目的に使えば、一気にバランスプレイヤーに化けるスクウェア公認チート。

『気弾』

今頃の解説

適当にモンスターをぶん殴っていると突然閃く最初期レベルの技。

その癖、魔法や弓矢を使わなくても遠くの相手にも当てることが出来るニクい奴。

今回で赤き翼がノエル達から生き延びることが出来た理由。  
そしてナギへの説教、戦争の意味を考えさせる話しは終了です。

長かったね…

けど、原作でも街中で魔法をぶつ放すくらいバトルジャンキーな所がある彼が、いきなり人助けに走るとは不自然です。  
なので作者的には外せない内容でした。

あれから世界のパワーバランスは激変した。

ゼクト率いる赤き翼が予定通り『黄昏の姫御子』…アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシアを内部の手引き、戦時の混乱に紛れて誘拐することに成功した。

それが先週末の出来事…連合はウエスペルタティア王家の要望で、赤き翼を指名手配した。

今の所、怖いくらいライフメーカーの思い通りに進んでいる。

この調子で古代人の本体も見つかって欲しいものだ…

どうでもいいけど、王家のくせに名前の何処にも『ウエスペルタティア』が無いのに気付いて、エヴァにこの事をドヤ顔で言っちゃったんだよ。

どうなったと思う？

「ノエルはバカだな。いいか？私の生まれ故郷フランスと同じ理屈だ。『ウエスペリーナ』がお前が言ってる『ウエスペルタティア

王家の』という部分だ。

その年でこの間違いは、ちょっと恥ずかしいぞ？」なんて手の掛かる弟を見るような目をしながら心配された…

コレだからブルジョワみたいなややこしくて訳分からん名前は、大ツツ嫌いなんだよチクシヨーー！！

まあ、何はともあれ赤き翼のおかげで黄昏の姫御子は連合の手中から解放された…

荒事担当の俺にまで情報が流れてきたくらいだ。シゲンを始めとした軍師の奴等はどこまで掴んでるのかね〜

それに問題はまだまだある。全ての黒幕である古代人だ！

戦争が終わっても、奴らがいる限りは問題の先延ばしに過ぎない。

最悪、次元をさすらう古代人の本隊が旧世界を乗っ取る。

そうなれば両世界のどちらかが消えるまで永遠に続く戦争が待つて  
るだろう……

正直、チートを持っているとは言え俺は元々平和な世界から来た人間。

どれだけ年を取っても戦争なんてしんどいし、面倒事しか無いから嫌なんだ！

それでも戦争を無くす為には戦わなければならない……って言うても、好き勝手に戦う訳にはいかない。  
ホント世の中思い通りにいかない事ばかりだよ……。

色んな事を考えながら、俺は朝っぱらから支度をしている。

「おいノエル、早くヒラガの所に行くぞ？あんまり遅いと置いて  
っちゃうぞ？」

上機嫌のエヴァが呼んでいる。

上機嫌な理由は『ヘラス帝国でエヴァ様が見つけたアンティーク人  
形。』

エヴァ様と先代から改良を重ねて、とうとう自我を持つモノが今日  
出来ました。』というメールが真夜中にヒラガから届いた。

其処からは、飛び跳ねたり、今すぐ行くぞなんて、有頂天状態のエ  
ヴァを真夜中だから近所迷惑と宥めて寝た。

そして今、体の半分を自身の影に沈ませたエヴァから急かされている。

長年の夢が叶って、興奮状態になるほど嬉しいのは分かる。

だけど朝一番から振り回すのは勘弁して欲しいよ。

もしも、エヴァが8年…高校生くらいの肉体だったら、こんなに子どもっぽくなかったかも知れんね。

「はいはい、今行きますよ…今行くから、子供みたいに急かすんじゃないよ。」

どうせエヴァの影を通れば、すぐなんだから待っていて欲しい。

「今日は新しい家族が増える記念日なんだぞ？  
早くこっちに来てい！」

自動人形で思い出したけど、ブラックはヒラガに押し付けたけど元気だろうかなあ。

S i d e    エヴァ

やっと長年の夢が1つ叶った。



私は一度ならず、ノエルと肩を並べて戦う事を夢見てきた。  
私は真祖の吸血鬼。確かにどんな必殺技を受けようと、たちどころに再生して相手を倒す事ができる。

しかし、それでは昔の私と変わらない！

手負いの野獣がするような捨て身戦法から脱却しなければ、いつまでも七英雄らしいスマートな人間になれん！

それに身体は再生しても衣服は再生されない。魔法の服を着込んで、先代スービエのスコールを喰らったら、術式までスタスタになる不良品ばかりだった。

協力者とはいえ、他人に裸を晒すのは懲り懲りだ！

私が見つスキル……闇の魔法？却下だ。そんなスキルは、魔法を溜めている間にノエル達が敵を片付けてしまう。

それでは私1人、わざわざ気合いを入れて踏ん張りに来たのかとユカリ辺りに笑われてしまう。

ならば……従来型の魔法はどうだ？

ハッキリ言わせてもらうとかなり微妙なラインだ。

確かに私達が使うバレン又魔法は、駆け出しの者でもとんでもない火力を誇る。

その反面、従来型の魔法は嫌らしい効果を持つモノが多い。  
これは状況によって使い分けるべきだ……

七英雄『ボクオーン』の固有スキル……採用！  
ボクオーンが編み出した『マリオット』。それを改良して敵を自由自在に操れる技に昇華すればイイ！

そう決意してから早100年……『マリオット』の改良から全ては始まり、スピアの人形……従者を開発するまでひたすらに長かった。  
だがそれも今日までだ！ついに私だけの戦闘人形……マイ・サーバン  
トが手に入る！

このドキドキは、ノエルに初めて頭を撫でられた時に匹敵するな！

「ノエル、準備は良いか？」

ついさっき叩き起こした我が伴侶に問い掛ける。

「超余裕ツス！」

ふむ、パンツ一丁で寝ぼけた顔をしたアイツは何処へやら。  
新しい家族に迎えるに相応しい、パリツとした男前になってるな！

「では…ヒラガ邸に突撃だあ〜〜！」

今、私達が迎えに行くから、それまで大人しく待っているよ？

・  
・  
・  
・  
・

「お待ちしておりましたノエル様、エヴァ様。

注文通りお二人様の人格パターンを混合したパーフェクトな人形を生み出しました。」

「は？ちよつと待てよ。」

どうしてそんな性格で作ったんだ？良くある普通の学習型にしとけば良かっただろ？」

もつと言ったら俺自身は、人形なんて注文してない。

それに、今日のヒラガは明らかに態度がオカシイ。

普段は作務衣か厚手の作業着スタイルなのに、白衣を羽織っていかにもな研究員スタイル。無駄に丁寧な口調も怪しい。

「いえいえ、確かに先代から引き継いだ時にノエル様の名前がございましたよ？」

「実はなあ、ノエルの名前を使ったのは私なんだ。」

ちよつ！？いきなりエヴァからのカミングアウト…そりゃビックリですよつて！

まあ、悪用した訳でも無いし、イタズラ程度だろう。

それに無駄なプライドを持ち、弱みを見せないエヴァがしょげ返っている。

「エヴァ：なんでそんな事をしたんだ？怒らないって約束するから訳を言ってみ？」

寿命が無い者同士、ヤウダで会って以来の長い付き合いがある人間なんだ。

信用：どれだけスレても、義理と人情は忘れたとあっちゃあ人間オシマイだよな。

「実は戦術の幅を広げる為に、私専用の魔法人形を手に入れたかった。

七英雄の一員として皆の力になりたかったんだ！金輪際、勝手な事はしないから頼む！許してくれ。」

「しょうがないなあ。

真面目な理由だから、今回だけ見逃してやるよ。ただし！次は無いからな？」

「ありがとう！流石ノエルだ。

私は今最高に嬉しい！愛してる！」

ハハハ！このロリめ！あまりの嬉しさで抱きついて来よったわ。

ヒラガもそれ見て『うわあ』って顔するんじゃない！

俺にだってその手の趣味は無いんだからな！

せめて幻術でキレイなお姉さんに化けて欲しかったよ。

しかし問題はヒラガに支払う魔法人形の製作資金だよな。  
また俺の懐からキャッツシュユが消える…トホホだよ。

ひとしきりエヴァの相手をしたところで、ヒラガが玄関先では話しも進まない邸宅兼工房に招かれた。

「どうです！コレがヒラガブランドの最新作『コツペリア』です！」

女性タイプ、身長150cm、有りがちな球体関節ではなく完全な人型。

バレリーナが着るプリマチュチュを、お洒落に改造した衣装を着せられ椅子に鎮座されている。

そしてスイッチが入ってないらしく動くことはない。

その表情は穏やかな寝顔を浮かべている様にも見え…何処となくエヴァと似た顔をしている様にも感じる。

「おお素晴らしい…なんと素晴らしいんだ！私の要求以上の出来栄えだヒラガ。」

「ありがとうございます。先代も喜びましょう。この『コッペリア』も現段階で、ある程度の常識が備わっています。しかしマスターは決まっていない真っ白な状態です。エヴァ様が魔力の糸を繋いだ瞬間からあなた様の物です。」

「ふふ…ふふふ…ハツハツハツハ！」

最高だヒラガ！貴様等一族は最高の技術者だ！ヨシ、さっそく動かしてご対面といこうか。」

エヴァはもうすぐ600歳…それがガッツポーズをしたり、今にも飛び上がらんほどに浮かれている。

『マリオット』

エヴァが万感の思いを込めて、コッペリアに魔力を通す。

ヒラガは先代から引き継ぎ、自身で完成させた傑作が起動する瞬間…彼は手に汗握って見守った。

俺はそれを眺めながらも、気性がすっかり丸くなり部屋の掃除をしていたブラックとたわいもない話しをしている。

「ブラック、ヒラガに預けられて大人しくなったが何を学習したんだ？」

「オレもいつまでもガキのままでは無いという事だ。少なくとも狂犬のように、噛みつくだけの頃よりはマシになったさ。」

うんうん…何があったか分からないが、大分社会に馴染んできたよ  
うだ。

やはりヒラガに押し付けたのは正解だったな。

「む？ニヤニヤしてどうした。俺の顔に何か付いてるか？」

「いや、何でもねえよ。俺が言えた義理じゃないがホント、お前は  
見違えたよ。」

「「おおおお！動いたああ！…」」

べつちから無事起動したらしい。



「掃除の邪魔したな、ブラック。」

「この程度なら別に構わんさ。たまにはやかましいのも悪くない。それよりせつかくの記念日だ。連れの傍に行つてやれ。」

こんなに大人になつちやつて……アリアドネーの奴等、ざまあみろ！お前達が厄介払いしたブラックはそこらの人間より立派になつたぞ！

スッキリした気分でエヴァ達の元へ向かった。

・  
・  
・  
・  
・

「ノエル見てくれ！マスターである私の魔力を自動的に受信して動くんだ。コイツは凄いぞ！」

「おゝ良かったな。おめでとうエヴァ。」

幾ら財布から飛んでいくのか、高性能過ぎて俺は素直に祝福してやれないよ……

「初めましてだなノエル！これからマスター共々世話になるぜ？オヤ・ジ。」

ん？オヤジか……つまり俺がエヴァの保護者と理解してるんだな！なんて賢い人形なんだ！

「おう！俺からもよろしく頼むぞ。名前はコツペリアのままが良いのか？」

「この日の為に温めてきた名前がある。  
アンティーク人形『チャチャ』として歴史を持ち、新しくゼロから学習するコイツの名は……チャチャゼロだ！」

チャチャゼロ（仮）の反応が無い。  
別にそこまで酷い名前では無いと俺は思ったのだが……

「お！なかなか粋な名前じゃねえか。今日からオレの名はチャチャゼロか……気に入ったぜマスター！」

杞憂だったな……口が悪いのは気になるが、マスターに似て単純な所

があるのかも知れないな。

「当たり前ではないか。私が1日使って考えた名前だからな！  
やはり私のネーミングセンスは世界一イイイイ！」

『コツペリア』の名前も本人が気に入ったチャチャゼロにすんなり決まった。

これで全部、丸っと片付いたな。

「さて…エヴァ、チャチャゼロ。あまり人ん家で騒ぐのも良くないから、家に帰ってから騒ぐぞ〜」

「いえいえ…お二人様の満足が得られたようで何よりです。  
つきましては、『コツペリア』チャチャゼロの代金を頂戴致します  
…」

チツ！逃げ切れなかった。

仕方が無いからヒラガに渡された会計に目を通したが……………

「100万D.p……………」

100万Dpつつたら、10年は面白いおかしく金を使って生活できるレベルだぞ!?

「なあヒラガ、これはジョークだよな？」

後ろに手を組んでるから、そっちにホントの代金が書かれた会計があるんだろ？」

「……………」

「嘘だと言ってくれよ!ヒラガ!」

「残念、コレが現実です!

私も借金してまでチャチャゼロを完成させたのです。

破産したくないので100万Dpキツチり払って頂きますよ?」

救いは無かったね…

注文したエヴァの家族として支払い義務が発生した。

結局、要らないモノをかき集めて5万Dpが用意出来た。

そして、毎月3万Dpをヒラガの預金口座に振り込む形で決着した。

俺…この戦争が終わったら帝国の闘技場デビューして、しこたま荒稼ぎするんだ……

その帰り道

「おかしいな。朝っぱらから行ったのに、帰り道は夕日で茜色に染まってるあ……」

それに、眩しくて前がよく見えねえから歩きづらいな……ハハハ」

「済まなかったノエル……」

私もあんな額にまで膨れ上がると思わなかったんだ……」

「オヤジ……生きてりゃ良いことあるぜ？とりあえず元気出していこうぜ？な？」

エヴァとチャチャゼロの励ましも、今だけは静かにしていて欲しい……

95万Dpも残ってる……

金が値崩れしても構わないから、タッチゴールド使っちゃまおうかなあ。

「オヤジ、家族はプライスレスって言うだろ？  
オレの事…捨てないよな？」

プライスレス…どつかのCMでも言ってたな。  
そっいえば返却って手段が有ったかも知れない。

「おお…捨てんよ、捨てないから安心してくれて良いぞお。」

けど、チャチャゼロ本人から釘をさされたから諦めよう。

「マスター、どうすんだよ！オヤジが死にそうだぜ？」

「ええい、私もそれくらい分かってる！私達も金を稼ぐぞ！！」

この日、エヴァは念願の従者を手に入れたが文字通り、高すぎる買い物だった。

## S a ・ G a 5 1 (後書き)

『コツペリア』

ソーマンの天才発明家一族、ヒラガ 世が発明する絡繰人形

標準装備のプリマチユチユは状態異常をシャットダウンする特別ヒラガブランド。

ヒラガ一族の趣味、性癖が伝わってきます。

なお、初期からある程度の格闘技も修得済み。

そしてLPは脅威の99!!

H P O から復帰できる回数 98 を誇るスペシャルな人形さんです。  
ヒラガが修理してるんですね

不死身と言ってもいいコツペリアにも短所があります。

全くと言っていいほど閃かない。更には操作不能というキャラクタータ  
I。

でも魅力的ですね

という訳で、図らずもチャチャゼロさんも原作よりビジュアル、性

能共に強化してしまいました。



S a ・ G a 5 2 (前書き)

今回はライフメーカーのお話です。

魔法世界

とある山脈のひっそりと建てられ、打ち捨てられ記憶の文献からも忘れられた砦……

薄暗い砦の至る所に書き込まれた古代魔法トラップは、凶悪なまでの性能を錆びび付かせる事無く今も健在だ。

そして、数多く存在する部屋の中からただ一室……小綺麗に片付けられ、沢山の椅子と巨大なテーブルが『ドン』と置かれた部屋がある。

私こと、ライフメーカーは各地に散らばる部下に、この砦に召集を掛けた。

目的は魔法世界の状況では無い。

古代人が逃げ込んだ旧世界での活動状況を聞き、指示を出すためだ。

それでも出席率は半数強。

スパイや襲撃など特殊な任務で、持ち場を離れられない者もポツポツいる。

私も鬼ではない。彼らについては罰は無い。

伝令役に命令を送らせるとしよう。

参加者には、非常時のみ開かれる格式ある会議だと思われてるから、私もこの会議は力を込める必要がある。

「では諸君：旧世界の現状を把握しているか？  
私の知る限りでは、古代人のもたらした技術によって1900年から急速に発展を遂げているらしい。相違ないな？」

メガロメセンブリアが手を出し始めた19世紀から産業革命。  
メガロメセンブリアが古代人に乗っ取られた20世紀初頭から急速な発展。

そして戦争に突入……

古代人：ハエのようにどこまでも鬱陶しい存在だ。

「恐れながら私に意見がございます。」

褐色肌に黒髪、強い意思力を秘めた眼差しになかなか鍛えた体つきをしている青年…

確かこの青年の名は…

「デュナミスか。」

「ハッ！」

大戦勃発前：古代人派の勢力によるレアスキル狩りの襲撃を受けた集落において、ただ1人生き残った少年。

その様子が気になり、時間に余裕がある時は極力、孤児院に顔を出した事も一度ならずあった。

その子がいつの間にか青年にまで成長し、この会議のメンバーにまで参加する程、逞しい青年になるとは…時が経つのは早いなあ。

「発言を許可する。」

貴様の意見を述べてみる。」

デユナミスがどんな事を言うのか…少しばかり楽しみだ。

「ライフメーカーの旧世界に対する見識には文句の付けようも御座いません。」

しかし、何を言つかと期待したら涼しい顔して前言を撤回した。

この部屋を包む空気が若者のあまりに無礼な態度に驚き、どよめきたつ。

「……静まれ。」

私はてつきり情報の修正が来ると思っていた。

それがコレか…デユナミス、ふざけておるのか？  
弁明が有るなら申してみよ。」

議会には秩序が必要だ。今日ばかりはふざけた態度は許さない。

「ライフメーカー。」

現在、魔法世界で動いている者達は、古代人派の中でも分体と捨て駒に位置する者達です。

これは我等が女型の古代人を倒した際に、呪詛と共に漏らした情報です。」

先ほどの意味とは違う良い意味で全員が驚き、どよめきたつ。  
それもそうだ。

「古代人の1人をバレンヌ帝国、ノエル達の力を借りずに倒すことが出来た。」

これは大きな意味を持つ。

かく言う私も、予想の遙か上に行く報告に驚いてしまった。

「これで終わりではあるまい。そのまま続けよ……」

「古代人の本体をこの世界に引きずり込むのです。しかし、そのためには連合を完膚無きまでに滅ぼし尽くす気で介入せねばなりません！」

まあ、言ってる事もあなたがち間違いでは無い。

しかし介入したと仮定して、その場合は決して少なくない犠牲が出る。

特に…私が直接『鍵』で手を下してしまうと再生する力も大量に必要になる。それは『アレ』の力を強めてしまう。出来れば避けたい。

そして『多対1』という限られた条件下だが、古代人を倒せる力を持つ者達も現れたか。

思い切ってバレンヌ帝国の道場に指導して貰ったのは正解だったな。

「他の者には考えは無いか？」

「「「」……………」

私がさつき撒き散らしたプレッシャーの残滓が予想以上にキツかったらしい。

皆が顔を俯きがちにし、問い掛けにも全く反応がない。『完全なる世界』はいつから、こんな腑抜けの集まりにまで堕ちたのか……

話が進まないなら仕方ないね…

「デュナミスよ、他に言いたい事は有るか？」

「はい…古代人は自分の手はなるべく汚したくない。しかし、目的は必ず達成させるといふ矛盾を抱えています。」

「ほほう…なかなか面白い考察だ。」

何となく、デュナミスの考えてる事は想像がついた。

しかし、生半可な覚悟で出来る計画では無い。

どれ、試しに少しばかりプレッシャーを掛けてやるか。

「それをこの場で言うてどうするんだ？  
貴様の考えているプランを話してみる。」

「ハイ！」

奴等に魔法世界を消す……手を出すことが出来る最後のチャンスだと危機感を抱かせれば良いのです。順次、旧世界の古代人派に染まった国に経済ダメージを与え……武力行使に来たら我等が介入します。

黒幕に安寧の場所は無いと追い込むのです！！」

フフ…手加減したとはいえ、私が当てたプレッシャーだ。

案の定、顔は青を通り越して蒼白。

髪もこの短期間で、脱色して若干だが灰色になった。

力の差が分かるだけに、言葉を発する事にさえ苦しんだろう…

それでもデュナミスが最後まで言い切った。

他のメンバーは萎縮してしまって、反論に使うエネルギーも意識を保つのに回しているようだ。



「あの重圧の中、よくぞ最後まで言い切った！  
その肝っ玉の太さに免じて貴様が考えた作戦は任せる。  
休眠状態にある『フェイト』シリーズから適当に見繕って、好きな  
ように使うが良い。」

「ハッ！！」

この身に変えても、古代人を炙り出してみせます！」

私からの任命が嬉しかったのか目を輝かせ、席から立ち上がりらば  
かりの勢いで乗り出して返事してくれた。

うんうん！若いね。若者だけが持つ情熱に溢れているよ。

デユナミスはレアスキル持ち。

ある程度の戦闘力を持ち合わせており、頭も廻る。

何よりも、肝っ玉の強さと高い士気を維持し続ける人材に任せてみ  
たくなるよね。

まさかこの会議で、こんな逸材が現れるとは…  
嬉しい誤算だね。

ところで…デュナミスが活躍するのを無言で見つめる大多数。  
どうしたもんか……

正直、もう少し頑張っただけいいなあ。

・  
・  
・  
・  
・

「どうした？何をしている。

皆は年若いデュナミスより劣っているのか？意見が無いなら、今回の会議は閉会だが……」

依然として故意にプレッシャーを撒き散らし、支配者たる姿を見せつける芝居を続けるライフメーカー。

ライフメーカーからしたら手加減はしているつもりだが、彼等にしたら本能に刻まれた恐怖。

当然、神に立ち向かえる胆力を持つ人間などそうはいない。  
幼き日にライフメーカーの飾らない姿を見たとしても、デユナミス  
は特異な存在なのだ。

何の音もせずシーンとした空間が暫く続き、参加者の緊張も高まる。

それも1人の老人が口を開いたことによって、やっと解消された。

「恐れながらライフメーカー…極東の活火山、コムルーンの火口が  
何者かに固められていました。」

「ふーむ…それで貴様は何をして、何を得たのだ？」

逆鱗に触れぬように、恐る恐る語る老人にも容赦はしないライフメ  
ーカー。

周囲の参加者もその様子を眺めながら、次は己の番かと戦々恐々と  
して縮こまっている。

「うう…私はコムルーン火山に住むサラマンダーと連携し、火口を  
塞いでいた岩を取り除きました。島の爆散も回避し、サラマンダー  
とも…友好関係を築きました…た……」

老人にライフメーカーが発する刺すようなプレッシャーは毒らしく、健闘むなしく語り尽くすと同時に気を失ってしまった。

「……（ここらが潮時だなあ）……今日の会議はこれにて閉会させてもらう。皆、次の集まりにも誰一人欠ける事無く、再び会おう。」

ライフメーカーは背後の空間に溶け込むかのように転移して消えた。

その後に訪れる静寂……  
そして、誰かが口を開いた。

「……はあ……、今回のライフメーカーはバカに上機嫌でしたな。ただ、あのプレッシャーだけは勘弁して欲しいのですが……」

そう！ここからが会議の本番。緊張から解放された人間がポロツと情報を零すのだ。

「ううう……ワシは……」

「あーみんな、お爺さん気が付いたみたいよ！」

「良かったな！爺さんの年だとポツクリ逝っても不思議じゃなかったぜ？」

この会議が与える意外な副作用。

ライフメーカーのプレッシャーという試練を共に体験し、乗り越えた同士と仲間意識が芽生えて結束力が高まる。

もはや年齢、性別、種族、職業の差を越えた会議は誰にも止められない。

皆、心行くまで語り合い、次回の会議でも再会出来るように固く誓いを交わした。そこから転移符を使い最寄りの街まで行き、各々の持ち場に帰った。

「ふう…私が消えてからはよく喋ることだ。

金色の小石が金になるまで磨くのは骨が折れるな…」

ライフメーカーは静まり返った部屋で、1人ぶつくさ言いながら壁のタイルの一部を剥がす。

穴が空いている。

そのままどっころしょ！という感じで手を突っ込む。

そして、奥の空間から驚くべき物を取り出した。

「いつまでこんな物の力に頼るのか…」

それにいい加減、私のプレッシャーに慣れて欲しい。

あれでは古代人と対峙したとしても、腰が抜けて逃げる事すら叶わないな。」

取り出した物はレコーダー！

会議では出ない下世話な話だから、重要な情報まで詰まった端末機。

会議が機能しない為にライフメーカーが考えた苦肉の策だった。

「ふむふむ…アリアドネーがそんな事を…なるほど…ウエスペルタティアは大変なんだなあ…クククツ…ハッハッハッハ！  
むむ！なんと…会議で言えよ！」

そして、皆が帰ってからレコーダー片手に1人でメモに書き出す作

業をするライフメーカー。

その姿は部下にキツく当たっているが意地悪ではなく、本心は部下に成長して欲しいと願う上司の哀愁漂う背中そっくりだった。

S a ・ G a 5 2 (後書き)

『ハエのよつこ……』

ロックブーケがぶりっ子を脱ぎ捨て、思わず皇帝に言った本音から。

関係無いですけど、19世紀からの発展は凄まじいですよね。  
作者には、不思議なパワーが働いてるとしか思えません…

そしてデュナミスさん

あの方がライフメーカーに狂信者並みの忠誠心を持つ理由は捏造しました。

そして皆さんはカリスマ性溢れるライフメーカーの方が好きですか？

こんなお茶目なライフメーカーも作者的にはアリだと思います。



S a ・ G a 5 3 ( 前 書 き )

マクギルさんの人格改悪があります。

「……………」

私…アリカ・アナルキア・エンテオフユシアは牢獄にて考える。

どうしてこうなってしまったのかと……

アダドーと名乗る男が城に侵入してきた。

その時に我が妹…アスカを牢獄から解放する企みを持ちかけられた。暫くしてアダドーが言った通り『赤き翼』が現れた。

戦闘時の混乱に紛れて、脱出の手引きをした時からだろうか…

いや…あの行いは間違っていない筈だ。

ならばあの時か？

優しくかった父上も戦争と共に人が変わり、治世を不審に思い進言した。

あの日…

ウエスペルティア国王にのみ座することを許された玉座に腰掛け、私と対話する父上。

それが、みるみるうちに化け物に変わっていった。

それを無我夢中で手にかけて時からか？

しかし、助かるためには仕方なかった。

あの時抵抗していなければ、今頃は父上の腹の中。もしくは化け物の仲間入りを果たしていたに違いない。

私はぐるぐると思い返したが、詮無きことだ…

今の私はアスカのスペア。

鎖に繋がれアスナがいた薄暗い牢獄に『黄昏の姫御子』として障壁を張るためという名目で拘束されている。

しかし、私にその力は無い。

当然、障壁も魔法装置が発生させている偽物だ。無効化など不可能。良くて半減程度の出力しか出ない民衆を落ち着かせる為だけに仕立てられた張り子の虎だ

『アスナが秘める『黄昏の姫御子』の力を防衛に使う。』

この案が父上から出た時に無理矢理にでも反対しておけば…

間違いが有ったとすれば其処からだったのかもしれない。

『この案が父上から出た時に無理矢理にでも反対しておけば…間違いが有ったとすれば其処からだったのかもしれない。』

そのツケが巡り巡って私に返ってきて、払わされているのだから滑稽だな…

『ギイイイイ…ガタツ』

この牢獄に通じる扉が開かれたらしい。

そして足音が聞こえてきた。

一歩一歩しっかりとした足取りで近づいてくるのを感じる。

足音の主はウエスペルティア王国を裏から牛耳り、王族最後の人間である私を表舞台から追いやってからは王のように振る舞っている男。

いや、化け物がまた今日も様子を見に来たか

この部屋の扉が開かれ、牢獄に入ってきた。  
その人物はアリカにとっては馴染み深い男。

「ご機嫌麗しゆう御座います…アリカ・アナルキア・エンテオフユ  
シア女王陛下。」

使い古された挨拶を使う。  
本来ならばそれでいいかも知れない。  
見ているだけで不快感を与えるような笑みを浮かべていなければ。

「よく顔を見せたな、今すぐ視界から消えよマクギル！汚らわし  
い下郎が！！」

「おお、怖い怖い。  
しかし、噛みつかんばかりの威勢の良さは相変わらずですな。」

今もアリカのザマを見て薄ら笑いを浮かべている。  
マクギルは昔から狡猾で野心家だった。

息を殺して王宮内部に賄賂、脅迫を駆使して執政官にまで登りつめた。

古代人と手を結んでからは国を腐らせたドブネズミ。

「私はウエスペルタティア王家アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだ！」

確かに今の貴様が持つ力は強大だ。

だが、いつまでも私を掌の上で転がせると思うなよ。」

アリカはマクギルを睨み付けている。

その目は『今は身動き一つ取れないが、必ずこの男に思い知らせてやるんだ！』そう語っている。

しかしマクギルにしたら、その態度が気に食わない。

「ふう……ウエスペルタティア王家の人間は、身の程を悟る力が無いらしいな。

お前の父親もそうだ。

命乞いの1つでもやれば、駒になるとしても命だけは助けてやったものを……

まあ死んでからは素直な男だったよ。

ところで貴様はどうだ？命乞いをして良いのだぞ？」

「貴様が父上を殺したのかッ！  
それだけで飽きたらずに魔物として操り、尊厳まで踏みにじるなど  
…恥を知れッッ。マクギル！」

戦争が父を変えたと考えていたアリカに知らされた事実。

アリカは鎖に繋がれているのも忘れて、マクギルに掴み掛かるうず  
るほど思考は怒り一色に塗り潰された。

「フフ…そう睨んでくれるな。」

これでもワシは貴様の為に気を遣って、先王を使ってやったのだぞ？  
それに、先王にトドメを刺したのはアリカ女王陛下ではありませんか  
？」

人間であった時から、この類の非難は耳にタコが出来るほど聞いて  
きたマクギルだ。

ウエスペルタイア王族が必死の剣幕で言っても『小娘程度が何を  
緩いことを言っているんだ？身の程を知れ』とでも言いたげな表情  
むしろあと少し、あと少しでアリカの手が届く。そんな位置に自分  
から近づき、飛びかかろうと懸命にもがくアリカの様子を楽しんで  
さえ状態で話しを進める。

「くたばっていた先王のザマは素晴らしかったぞ？」

頭はぐちゃぐちゃの柘榴、手足は剣と魔法で吹き飛び玉座の間を血  
だらけに染めていたなあ…流石は王家の断罪だと感心させてもらっ

たよ。

おかげで、兵士を連れて部屋に押し入っただけで、いとも容易く権力を手に入れる事が出来た。

貴様がやったことは全て私の計画通りだったのだよ！」

「……………」

「ほれ、貴様には先王の怨みが聞こえてこないか？私にはハッキリ聞こえる！！」

『アリカ…お前は国を滅ぼす暗愚だ…』

何故、傍にいて気付かなかつたお前も地獄に…「黙れ、黙れ黙れエエエエ！！私は貴様の思い通りにはならない！父上、アスカの分も必ず復讐してやる…覚悟しておけ！！」

…「ハハハハ！それは楽しみだ。いつかその機会が来るのを楽しみにしているぞ？」

徹底的にアリカの心を折るような台詞を吐き続けたマクギル。

そしてなりふり構わず喋るアリカの様子から、強靱な精神に罅を入れた手応えを感じた。

ある程度満足したマクギルは外に通じるただ1つの出入り口からアリカに見せつけるようにゆっくりと立ち去った。

「くそ…これではマクギルの思うツボではないか。」



そしてアリカは最後に見た最愛の妹…アスナの姿を思い出す。

アスナは5ヶ月近く『黄昏の姫御子』としてこ牢獄で過ごした。それは昼夜を問わず飛んでくる敵の攻撃から護るため、障壁を張り続けたことを意味する。

今の私より、劣悪な生活を強制していたのかと思うと自分が恥ずかしくなる。

「アスナに謝るまでは生き延びるんだ。

それまでは何が有ろうと耐えてみせる！！」

アリカは薄暗く、敵の攻撃が直撃する可能性もある牢獄で1人戦っている。

・  
・  
・  
・

今、俺はエヴァと2人仲良くふかふかのシートに並んで座っている。

慌ただしく動く人々を見ながら…

「もうすぐウエスペルティアの中枢オスティアだ！  
オメエラ、クソツタレの連合にオレ達の力を見せつける！弾も腐る  
ほど有る。節約なんてくだらねえ！！景気良く撃ちまくれ！」

「『『『イェス、サー！』』』」

ドレイク提督のかなり簡単な号令で一斉に持ち場に移動するクルー  
達。

「連合のカトンボはオレの朱雀式機関砲で撃ち落としてやる！やっ  
てやるぜエエエエ！！」

「もう我慢ならねえ！数だけが多い敵艦はフルオープンアタックで  
一掃だア！ヒヤッハー！！」

機関砲でバタバタと…ボタン一つで前方の敵艦が一気に消え去った  
ような気がしたが俺は知らないなあ。

それにやモヒカンヘアのトリガハッピーや世紀末野郎が急に現れ  
たのも気のせいだ…

うん…気のせいだと思いたい。

「ノエルさん、バレン又帝国零番貿易艦隊の力はどうですかい？  
ほら連合の艦が爆散しながら墜ちるところなんか、出来の悪い花火  
みてえじゃねえですか？」

前方に移る視界は勿論、レーダーにも敵の反応が無くなった。

ドレイク提督も満足気だ。

だが素人の俺には心配事がある。

「帰り道に使う弾薬の分はどうなんだ？一気に撃ちすぎて帰りはた  
だ的になつたらシャレにならんぞ。」

いつもお世話になつてる戦艦だが、今日みたいに味方の俺も引くほ  
どバカスカ撃つたのは初めてだからな……  
帰りは避けるなんて事になつたら泣ける。

「ハハハ！そりゃ要らん心配つてもんだ。なんてつたつてシゲン  
とヒラガが開発した術結晶化技術から弾を造るんですぜ？  
弾切れなんて有り得ませんよ。」

またあの2人は持ち前の変態を発揮して、やらかしてくれたいらしい。この分だと『アレ』も自力で設計、完成させているだろうな。

「なあノエル…この艦に乗ってる人間は海空軍の人間では無いよな？」

エヴァは窓から雲海を眺めていたが、俺の方に振り返り話し掛けてきた。

ちなみにチャチャゼロはここにはいない。

チャチャゼロには影のゲートの中で大人しくしてもらっている。

興奮して刃物振り回されたら迷惑だしな。

「この戦艦の人間はバレンヌ帝国が誇る『武装商船団』の人間だと説明したたる？」

この間、ヘラス帝国から帰ってくる時も世話になったじゃないか…」

「そつだよな…」

「1日でもいいから、このクルー達から離れてゆっくり休みたい。」

魚が死んだような眼で語るエヴァ。

切実さが伝わってくる。

チャチャゼロが家に来た次の日から連日遠征。

最初は『チャチャゼロの性能を試せる！

オレも活躍出来るぜ！』と仲良く張り切っていたエヴァ達。

しかし…それも1月続いたら話しは別だ。

それだけ疲れてオカシくなって証拠だな。

俺も少しばかりオカシくなってきてるのが分かる……

「ウエスペルティア侵攻戦が終わったら、1日くらい休めるさ……」

そうだったらいいなア…つつか、帰ったら皇帝に直談判するしかないな…

このままでは2人仲良く死んでしまう。

•

•

その頃のウエスペルタティア……最終防衛ラインにて

「西からはヘラス、東からはバレンヌ帝国が来ているんだ！このま  
までは敵艦のレンジ（射程圏）に入るぞ！！  
早くしろ精霊砲を撃って！撃って！撃ちまくれ！！」

「そんなこと言われてもチャージがまだ完了していません！」

部下からの切羽詰まった返答。  
現場はこの1日、騒然としている。

「威力が低くても砲身が焼き切れようと構わん！今は非常時だ！と  
にかく時間を稼げ！！」

焦る將軍の怒号が部下に飛ぶ。

軍用に改良された遠見の魔法には西600キロにヘラス、東700  
0キロにはノエルが乗るバレンヌ艦隊が迫っているからだ。

「ええい、メガロメセンブリーナ連合からの援軍はまだか！！  
通信すら入らないなど…どうだ！？早く言え！」

刻一刻と迫る破滅のリミットに、將軍は自然と必要以上に声を荒げ  
てしまう。

今回の戦いに国の命運が掛かっていると分かっている。

しかし頼りの精霊砲も無理な稼動により半壊。自前の軍は両帝国に  
よりことごとく潰された。

この絶体絶命の現状にも打つ手が無いウェスペルティアにおいて、  
連合に要請した援軍だけが最後の望み。

もつともその返事は、將軍だけでなく現場にいる兵士達は薄々気付  
いているのだが聞かずにいられなかった……

「さつきから援軍と通信が来るどころか応答も…無線すら繋がりま  
せん！

……既に落とされた。もしくは我々は連合から見捨てられたかと…  
…」

淡い期待を込めつつ聞いた。

しかし、青い顔をした部下の通信士から返ってきたのは絶望的な現  
実。

無意識に目を背けていた現実が一気に現場の空気を舐め尽くした。それが兵士達の士気を奪い去り、動きが鈍る。

「ぐうっ……………こうなれば玉碎覚悟だ！」

貴様等も腹を括れよ！この一戦に国家の命運が…大切なモノが掛かっているのだからな！！」

將軍はウエスペルタティア：オスティアに住む友人、恋人、家族の存在をほのめかし無理矢理にでも士気を上げる。

ウエスペルタティア防衛軍は、両帝国の脅威に晒されてんてこ舞いだった。

・  
・  
・  
・  
・

「お！ここが空島の首都『オスティア』か。」

せっかく世界の上側から来たんだ。一丁ド派手に暴れてやるうぜオヤジ！」

「コラ！暴れるなチャチャゼロ。」



「ここは敵地だぞ…また突出して体が壊されても知らないぞ！」

ある意味、快適な空の旅を過ごしてやっとウエスペルタイヤが首都オスティアに到着した。

今は『霧隠れ』で物影に潜み、作戦の確認をするところだ。

ただ、正直に言うとチャチャゼロにはあまり戦って欲しくない。ヒラガに修理してもらっただけで5万D.p…借金が振り出しに戻った。

この調子だと、遠洋水竜漁に引つ張られてしまっじゃないか！！

「……今日は暴れるのが目的じゃない。

ライフメーカーからの情報によると、どついう訳か2人目の『黄昏の姫御子』がいるらしい。

そいつを俺達で保護する。無用な戦闘は無しだ…分かったな？」

「ちえく、そりゃあ無いぜ…1人くらいならやっちまってもイイだろ〜？」

このお馬鹿！お前はバレンヌを出る時に、作戦の何を聞いていたんだ！

それにエヴァは何をしているんだ！従者がフリーダム過ぎるぞ！！

「……………（スマン！許してくれ！）」

そんな風に頭を下げ、手のひら合わせて謝る暇が有るなら、マリオネットで黙らせてほしい。

この調子で1人突っ込んで前回の戦闘で大破したんだ。申し訳無い顔をして、も許さん！この口りめ！

「（つたく…自分の従者なんだから管理しろよ！）……………敵は霧隠れを知らない。」

戦闘は見つかる危険もある帰り道限定だ。」

まあ実際のところは、ターゲットを確保した瞬間エヴァのゲートで戦艦に直帰だから戦闘は無いぜ？

だがチャチャゼロにはこう言うしかないわな…

「ヒヤッホーイ！やっぱオヤジは話しが早エな！マスターよりも愛してるぜ？」

小躍りを始めるくらい喜んで、俄然やる気が出てくるチャチャゼロ…  
逆に負のオーラを発しながら燃えるエヴァ。

「（この駄人形め…家に帰ったら厳しい躰をしてやる。）チャチャゼロは私達のサポートだ。私のオーダーがあるまで戦闘は許さん。ノエル！サツサとVIPを確保するぞ！」

おお、怒ってる怒ってる！

チャチャゼロも、初めてエヴァに怒られるのが初体験なもんだから固まっている。

これはサツサとVIPを確保するしか無いよな。

「そんじゃま王宮に行くぞ！」

「任せろ！」

そこからは一切喋らず霧隠れを維持。途中敵と擦れ違った事も何回かあったがスルーしながら王宮まで行った。

そして、モンスターがうじゃうじゃしている王宮深部に突入してからもそれは変わらない。

不自然にならないようにクイックタイムを発動して扉を開き、どうしても避けられない場合に限り暗殺する。

そして、遂にターゲットがいる最深部に存在する牢獄に辿り着いた。

ロックを解除し、扉を開ける。

「ん？そこにいるのは誰だ！居るのは分かっているんだ！大人しく姿を表せ！」

入室早々ターゲットに怒鳴られた。

十分な食事も取ってないために痩せこけ、風呂どころか水拭きもされていなかったために長い金髪は艶を失い、鎖で繋がれている部分は血が滲んでいる。

それでも威勢の良い啖呵を吐き、瞳から力は消えずこちらを睨むだけの意思を見せる辺りは流石王家だな…

「アリカ・アナルキア・エンテオフユシア女王だな？」

「……だったらどうするのだ？この命、タダではくれてやらんぞ！」

本人と確認することが大事だ。

口答だけで無く、魔法で認証する。

こういう場面では従来型の魔法が役に立つ。

「ノエル…どうやら本物らしいぞ。」

エヴァから結果が知らされた。

「よし。良くやったぞエヴァ！

ではアリカ女王をお連れしろ……俺はまだ野暮用が残ってる。先に  
行っててくれ。」

俺の指示でチャチャゼロは鎖を切り裂き、エヴァは地面に倒れ込ま  
ないように優しく抱き留めた。

「必ず帰って来いよ？ノエル……」

こうして3人は影を通り消えた。

さて、あまり時間をかけてドレイク提督を待たせる訳にはいかない。  
ぼちぼち片付けるかな

「扉の影に隠れているのは分かってんだ。サッサと出てきたらどう  
だ？」

「ククククツ…バレン又帝国のノエルが釣れたか！  
貴様のクビを取ることが出来れば、ワシの地位は更に高まる……ワ  
シの踏み台になってもらおうぞオオオオオオ……」

現れたのは執政官のみが着ることを許されたローブを着込み、ギラギラとした目で俺を見つめるロマンスグレーが渋いオジイサマ。

ただし中身は立派なモンスター………正直、どこのシスの暗黒卿だと思ってしまった。

その間もベキベキ、バキバキと耳障りな音を響かせながら変化を続けるジイさん。

最後には変化する過程で飛んだ血で真っ赤に染まったローブで頭からすっぽり被ると完成したらしい。

「ふうふうふう…ワシの変化が終わるまでに逃げておれば助かったかもしれないが残念じゃな…」

ワシの名はマクギル！貴様の墓場はこの牢獄だアアア！！！」

そう言うなり飛びかかって来るマクギル。

無駄にアグレッシブだが、その姿はまるっきり『アイツ』にしか見えない。

まあ考えても仕方無い。サッサと始末してしまおう…

「化け物の分際で五月蠅い（うるさい）ぞ？御託はいいから死ねよ。」

「

風神剣を呼び出し、頭から股下まで真っ二つにする！

風神剣が生み出すカマイタチも細かい刃として襲う。

本体の刀身は振り抜けば暴風の凶刃を飛ばし、マクギルの背後にある壁をも切り裂いた必殺の攻撃だったが……

「ぐおおおお！貴様アア！！良くも私の身体をツツ！！！」

どうやらあの暴風の中、寸前で身をよじったらしく、右肩から脇腹を切り落とした程度に軽減されてしまった……

これは空中でとっさに体勢を変えたマクギルを褒めるべきかもしれないが、情けないな……

「やはり汚物は消毒するに限るなあ……『クリムゾンフレア』」

ここは狭い牢獄だ。なので局所壊滅魔法に分類される『クリムゾンフレア』を使う。

「そんな！？ワシが…このマクギルがツツ！この程度で終わるだあ

！バカな…バカナアアアア！？」

マクギルは内部から太陽に焼き尽くされるような熱に晒されて、チリ1つ残さずに消えた。

「……………」

確かにマクギルはこの手で殺した。

しかし、俺にはあのマクギルが変化した姿を見て胸騒ぎが収まらない。

「……………今は目の前の問題を見るんだ。

マクギルが残した問題には手の出しようが無い……」

俺は急いでエヴァ達が待つドレイクカスタムの戦艦に駆け出した。



## S a ・ G a 5 3 (後書き)

ケルベラス無限監獄はバレンヌ帝国が抑えているので、アリカ女王にはここで囚人体験してもらいました。

原作ではイイ人のマクギルさん……出番が少ないから増やしてあげました。

マクギルが化けた『アレ』って分かるかな？

『クリムゾンフレア』

ロマサガ2の火術最強威力を誇る魔法。

よくコウメイ×クリムゾンフレアは最強と言われるのは、隠しパラメータの魔術×3 - 理力×2で算出される『術威力』が設定されているからです。

因みにコウメイは55

スカイアさんは二番手で50です。

さて…戦争編も折り返しです。

感想お待ちしてます。

S a ・ G a 5 4 (前書き)

アリカ女王のキャラ崩壊に注意して下さい。

アリカ女王救出兼ウエスペルタティア侵攻戦は、両帝国共に目立った被害は無かった。

なお、ヘラスはウエスペルタティアが開発した新型精霊砲のデータを、当たり前だが俺達はアリカを手中に収めて無事帰還した。

しかし、アリカの処遇が俺の斜め上を行っていた。

『アリカ女王は、救出したノエルが責任者として身柄を受け持つこと』

休みの申請をするために城へ行ったら、皇帝に開口一番言われた。

お奉行様も目ん玉飛び出すほどの迷裁き。その時、俺は現実から目をそらし、一緒に来たエヴァは膝から崩れ落ちた。

そして今日はアリカ女王が来てから4日目

初日は『ここは敵国、一分の隙も見せんぞ!!』といった感じで近寄りつとさえしなかったアリカ女王。

メシを出しても、なかなか口をつけない。

ちよつとした用事で留守にしたら、何が目的か家ん中の引き出しを漁りまくっていたらしい。

道場までぐちゃぐちゃにされていた。

当然、中身は『ポイツ』したままだった。

そのクセ、片付ける気はサラサラ無いようでポイツと引っ込んでしまった。

それを見たエヴァとチャチャゼロがブチ切れて、襲いかかろうとした。

ほぼ終了した国でもアリカは女王様だ。

いくらなんでもぶつ飛ばしていい道理は無い

どうにかこうにかして、2人を宥めるのに必死な1日で全く休めた気がしなかった。

ホント、王族の我が儘には困ったモンだよ……

2日目は大人しくメシも食うし問題も無く、穏やかに過ごすことが出来た1日だった。

今にして思えば、嵐の前の静けさだったんだろうな……

3日目の夕方……

ヒラガから呼び出されたためエヴァはヒラガ宅へ、俺はどうしても皇帝と会議があった。

仕方が無いからアリカを一室に押し込んで留守にした。

『杖どころか発動媒体の1つもないから大丈夫だろう。』  
そう考えたのが甘かった……

会議で頭使ってへとへとになって帰ってきたら、なんと金庫が破られていた!!

これには流石の俺もブチ切れて、たまらずアリカに張り手を喰らわしてしまった。

エヴァとチャチャゼロが帰ってきた時には、俺に叩かれたアリカの頬の腫れも引いていた。

それでも2人には雰囲気でもバレてしまっていたが、その事には触れてこなかった……

そして今日の朝

朝起きて、メシを食おうと集まった。

だが一足先に来ていたアリカ女王は、身分の差も関係ないといきなり頭を下げた。

うん、そりゃ驚いた。

昨日まで怖いもの無しのタカビー女が謝ったんだから。

呆然としている俺達にアリカは畳み掛けるように話しを始めた。

「どうしても聞いて欲しい……私はアスナ姫の手掛かりが欲しかった。」

昨日まで黙って好き勝手していたのは謝る。

どうか許して頂きたい。アスナ姫の行方は知らないだろうか？

アスナ姫は私に残されたただ1人の肉親、そして絶対に謝らなければならぬ相手なんだ……」

必至だったのはよく分かった。

だからって、あの暴走は無いんじゃない？

それにアスナ姫「黄昏の姫御子」って事だが……俺でもおいそれとは手を出せない領域にあるしなあ。

そういえばゼクト……赤き翼の奴らは、アスナ姫を誘拐した日を境に鞍替えをした。

それ以来、連合軍をボッコボコにしているという情報が入ってる。

もしかしてあの赤毛のガキは、黄昏の姫御子を連れ回して移動してんのか？

いや…しつかり者のゼクトがいるんだ。

まさかそんな事無いよな……

「うーん……そんな悲痛な顔をされても…黄昏の姫御子かあ……」

その時、エヴァが口を開いた。

それも我慢していたら分をブチ撒けるように

「私たちは知らん。  
そもそも今は戦争だ！親兄弟と生き別れ…  
中には死に別れた人間など何処にでもいる。何より貴様は一国の長だ！それを忘れて甘ったれるな！」

エヴァは俺が言うべき事を、代わりに全部言ってくれた。  
ホント、肝っ玉が太いイイ女だよ…  
永遠のロリなのが悔やまれる！

まあ、ここまでエヴァがアシストしてくれたんだ。  
最後は俺がシユートを決めて終わらせるか。

「アリカ女王…貴女には悪いがこれが現実。  
黄昏の姫御子の行方と同行者については最高機密です。  
辛いでしょうが諦め下さい。」

俺とエヴァは丸く収まったと考えていた。  
だが甘かった、甘々だった…

「確かに…今の私は何の力も無い小娘だ。  
お主らに対した礼も出来ない。それでも一目アスナに会って話しを  
したいんだ！頼む…この通りだ！」

アリカは椅子から飛び退くと見事な土下座をしながら縋ってきた。  
それも泣きながらだよ…

正直、女の涙はズルいよな。  
こっちが正論を通してのに、無理矢理にでも押し通す魔力を秘め  
てるんだからさ〜

それにしても、まだ二十歳にも成ってないのに女の武器を使いこな  
すなんてアリカ……………恐ろしい子！



とつか現実逃避も程々にしないと…

「お願いです！一生の頼みです。何でもしますから力を貸して下さい。」

涙、鼻水、その他諸々で酷い顔をしながらびえんびえん土下座しながら泣く少女

「（どうすんのコレ！泣いてるよ！  
近所サンに誤解されて付き合いが無くなってまうぞ！？考えるエヴァ！）」

腕組みしながら必死に考える俺

「（バカ！私に振るなって！  
こういう時は、緑茶を啜ってリセットするんだ。間違いない！）」  
あたふたしながらもお茶を啜るエヴァ

「へっへっへっへ、朝からこんなシヨーが見れるなんて…今日はラッキーだな！」

この修羅場を遠巻きに眺めてニヤニヤするチャチャゼロ

今日は間違い無く最悪の1日だな…

・  
・  
・  
・  
・

そして昼過ぎ…

「うう、ではアスナと会わせてくれるんだな？」

ピークも過ぎて流石に大人しくなってきたアリカ女王

「必ず会わせますから泣き止んで下さい（このじゃりん子めー！）」

「……………私は疲れた…好きにしてくれ」

結局、アリカに幾つかの条件を付けた形で了承してしまった。

まず己の身は守れるように、簡単な魔法をひたすら極める。  
何があっても1人で突っ走るな！お前が動く、皆が動く羽目になる。

戦争が終わった時に必ず会えるように、取り計らうから我慢しろ！  
言うことを全て聞け！

この3つをアリカに確約させた。

俺は各国にスパイとして散らばっている『シテイシーフ』に、『赤き翼』及び『黄昏の姫御子』の情報を可能な限り手に入れて欲しいと通達した。

やっと全てが片付いて一息ついたところで、サッパリ存在を忘れていた者が話し掛けてきた。

「なんだよ！せっかくドンパチ出来たかも知んないのに。  
とりあえずお疲れさまだオヤジ！」

「チャチャゼロ、お前って奴は……………」

「へへ、礼はイイぜ？」

「お前つて奴は……… 見てるだけでクソの役にも立ってねえじゃねえか！このバカチンがあー！！」

みんなが苦しんでる時に、1人だけ楽しんでいる……そんな奴には拳骨制裁だ！

「あ痛！？酷いぜオヤジ〜」

「うるせえ！お前の罰は皿洗いと掃除のフルコースだ！分かったな！」

「そんなあ〜」

アリのカの願いだが、後は風任せ…

はあ、早く戦争が終わって穏やかに暮らしたいものだよ……

S a ・ G a 5 4 (後書き)

ここまでの各国の簡単なパラメーター

バレンヌ帝国

国威 最高

産業 強力

民衆 最高

軍事 最高

ヘラス帝国

国威 強大

産業 強力

民衆 満足

軍事 強大

メガロメセンブリア及びメガロメセンブリーナ連合国

国威 最高

産業 強力

民衆 最悪

軍事 最高

ロマサガ3の施政風に表すとこんな感じですよ。

学術都市アリアドネー

知つての通り魔法世界でも有数の『平等な人権』が保障され、各国も迂闊に手を出させない力を秘めた学園国家。

施設内には未来を支える学者、技術者、あるいは豊富な知識を生かした冒険者のタマゴ達が生活する。

「ヘイ！相棒。

最近ではメガロメセンブリアの奴らも必死らしいぜ？」

バレンヌ帝国から警護兵として派遣されており、とある事件から一気に株を上げて生徒からの人気者になった格闘家のフリッツ。

「そつだな相棒！確かに連中はバカス力戦争してるな。

だが大丈夫だろ！なんたつてバレンヌ帝国…師匠達も動いてる。

オレらは何も心配しなくてイイさ！」

フリッツの相棒と同じく格闘家である筋肉が人型の筋肉を羽織って歩く人間…ダイナマイト。

この2人が休み時間に仲良く話しをしている。

「だよな！しかも応援でバレンヌの兵士も増えたし大丈夫だよな」  
今日も今日とて、戦争時とは考えられない平和な学園都市……生徒は備えをしているとはいえ、実際はのんびりとした空気が漂っている。

まあ、それは『アリアドネー魔法騎士団』とバレンヌ帝国の兵士が日夜働いているからに他ならないのだが…

「おう！連合くらいドンと来い！！ブツ飛ばしてやるぜ！」

「ワハハハハハハハハ！！！！」

まあ、各国もおいそれとは手を出せない武力と各国へのパイプを持つキチガイ学術都市国家『アリアドネー』だ。

長距離魔砲は東西南北の門に標準装備。

自前の戦艦、爆撃機、魔戦車くらいは当たり前のように揃えている。

最近では戦争時ということ、一般生徒も自衛の為に従来型魔法に重



きをおいた強化カリキュラムを作成し、すぐさま実践。

臨時講師も始めたエメラルドから、ウィンドカッターなどの簡単な術法を習う者も増えたので少しはマシになった。

アリアドネーの精鋭戦闘部隊『アリアドネー魔法騎士団』は、バレン又帝国からの指導で魔法剣士として頭角を現す者が増えてきており、短期間で大幅パワーアップを果たした！

何よりアリアドネーを中心としてバレン又帝国が北西部に、ヘラス帝国は東南東に存在する。

アリアドネーは歴史と共に積み重ねた独自の技術、魔法…そして両国を攻める際の拠点にもなる。

連合にとっては是が非でも押さえない要所。それでも攻め込めば3国を相手にする。

それこそ戦争が半年を過ぎても、莫大なりスクを恐れて連合軍は襲撃しなかった最大の理由である。

つまり守りは万全だ！

だが、どんな事にも『絶対』などは有り得ない……

「はい、はい……ならばその日は全てのブロックからバレンヌ兵が消えるように手を回します。」

「……フッフ、分かっていますよ。では……」

しかし、どんな頑丈な人間も内側から毒に蝕まれれば徐々にその部分から全体が腐り落ちるのは必然。

学園都市国家は誰も知らない水面下で、未だかつて無い未曾有の襲撃の危機に瀕していた。

・  
・  
・  
・  
・

「やあフリッツ君。」

卸したてのようにパリッとさせたスーツに身を包み、整髪料でガツチガチのオールバックに決めたダンディーな男が声を掛けた。

「おろ？学園長先生じゃないですか。  
陽が出てるうちから執務室を抜け出してくるなんて珍しいツスね？」

フリッツは警護、メシ、寝るのサイクルで回しているから情報に疎い。

それでも戦争が勃発して以来…最近の学園長は、夜まで執務室にずっと籠もりきりというのは耳にした事がある。

「分かりました！さては息抜きですね？  
本臭い執務室で籠もりきりは体に悪いツスからね〜（ぶっちゃげ顔色、すっげー悪いしなあ〜）」

「ハハハ…まあ、そんなところですよ。  
少しばかり野暮用だね。力仕事だから手伝って欲しいんだが頼めるかい？」

「イイツスよ。だったらダイナマイトにも声かけてきますわ。」

学園長は細身で筋肉もあまり無い華奢わさかな体つきだ。  
フリッツは快く引き受けた。

「フッフ…有り難いですね。  
では、また後で…」

「すみません、エメラルドさん。」

「あら？学園長先生…いかがなさいましたか？」

「忙しいのは重々承知しています。」

実は困った事になりました…

そこでエメラルドさんの力を借りたいのですが…」

学園長は本心から心苦しいという態度で、エメラルドの目を真っ直ぐ見つめて話しを切り出した。

「…どっぞお話し下さい。」

エメラルドは少しばかり不審に思いながらも、頷いた。

「おお！ありがとうございます。」  
実はですね……」

「ああ、いたいた。  
探しましたよキャッツさん！」

「え〜？どうしたんです急に？  
（別に警護以外に予定もないし、久しぶりに生で見たから付き合っ  
てやるか）」

一人前のシテイシーフとなるためには当然スパイとしての教育があ  
る。

中でもキャットは潜入工作のプロ。  
同期の仲間からは猫被りのキャットと呼ばれる女怪…アリアドネー  
に来てからも、やっぱり猫を被っていた！

「いや〜、実はアリアドネーの地下には秘密のアイテム保管庫が在  
ってね。そこからあるアイテムを防衛に転用するので、引っぱり出  
す必要があるんですが…手伝ってもらえますか？  
他の方は予定が有ると断られてしまいました…。」

エメラルドの時と同じように、いかにも『困っている』と雰囲気  
醸し出して願いを伝える。

ただし、身長の関係で上から見下ろす形で眼を見つめる。

「はあ…仕方ないですね。」  
（冷や汗？いや、脂汗だね。どちらにしても気持ち悪いな。  
アタイを上から見下ろすんじゃないやねえよ。このデコ助野郎が！  
それに整髪料が臭エんだよ！）「とうぜんキャットは顔に嫌悪感を  
欠片も出さなかった。」

「ありがとうございます！」  
それではコレが保管庫に通じるエレベーターの入口とアイテムの目  
録です。  
それと私は、野暮用があるので御一緒にできませんが、頼みましたよ  
？」

学園長は普段と変わらない大人の余裕を感じさせる笑みを浮かべて  
念を押す。

「ハイ！分かりました。」  
それじゃあお仕事頑張りますね。」

「すみません。アリアドネーの安全の為にお願いします。」

そして学園長は踵を返すと自身の執務室に通じる薄暗い通路へ……  
歩いている生徒を掻き分けながら一目散に走り去って行った。それを  
黙って見送るキャット

「さてと、あの学園長が動いたか…こりゃあ、アタイもたくさして  
らんないよ。」

そろそろ本気で動くとするかね。

（こいつを始末したらノエルさんからの評価もガンガン上がって…  
…ウシシシシ！）

キヤットも自身の仕事を遂行するために行動を開始した。

言葉にするのも憚られるような方面に特化した妄想のために…

・

・

・

・

・

「なあ相棒、いきなりアリアドネーの地下保管庫に通されるってオ  
カシイだろ！」

「おいおい、相棒。」

学園長先生から直々に頼まれたんだぜ？それに俺達は警護兵の中で  
も最古参。

要は人柄が評価されたのさ！」

ダイナマイトの指摘は間違っていない。

普通は機密情報を外部の人間には漏らさない。

しかしフリッツ達はアリアドネー警護任務五年目の古株。

底抜けに明るいい人柄が評価されたと考えるのも…アリっちゃアリだった。

「ともかくにも野暮用を任されたんだ。

サッサと片付けて警護任務に戻ろっぜ！」

「うーん…」

こうして、ダイナマイトはどこか引つ掛かるのを感じながらも、アリアドネー地下保管庫へ通じるエレベーターに乗り込んだ。

『チーン』

エレベーターが保管庫入口に到着、あらかじめ学園長より知らされたパスワードを入力して突入したが……



「うおっほ!? 寒みい寒みい…コイツは堪んねー!。  
相棒もそうは思わねえか?」

この保管庫は高性能過ぎる機械は勿論、危険な術式が暴走しないように、且つ解凍した時には以前と同様に動く事を考えた造り。

冷気も当然、自然のそれではない。  
物質の経年劣化をも視野に入れた固定化を付与する魔法構造によって構築されている。

フリッツが震えるのも無理はない。

「…まあな。

それよりあれをしてみるよ、フリッツ…

エメラルドさんがカツチカチに冷凍されてるぜ!」

目の良いダイナマイトが見つけたのは保管庫の奥…上に有るものを取ろうとした手を伸ばした姿勢で凍り漬けにされたエリザベスの姿。

更によく見ればエメラルドだけじゃない!

フリーランスのヘクター、軽装歩兵カップルのライーザとジョンま

でもかが凍っているのを見つけた。

「相棒、俺達はあの野郎に嵌められたんだ！

しかもバレンヌの仲間まで……人の良心につけ込んでな！」

ダイナマイトの予感はやはりの中した……  
それも最悪の形にだ。

「くそつたれ！あのもやし野郎がッ！

ダイナマイト、早く助けようぜ！」

速攻で助けてやろうとフリッツは駆け出した………が、他でもないダイナマイトに止められた

「まあ待てよ相棒、まずは落ち着け。

戸愚呂師匠も常々仰られていただろうが……『敵のフェイント、虚実に惑わされるな。常に見極める』ってな！

弟子である俺達が忘れちゃったら、師匠が浮かばれないだろ？」

「済まねえ相棒！！頭に血が上って我を忘れちゃってた……だけど、もう大丈夫だ！」

今すべき事は保管庫からの脱出、アリアドネーの防衛だろ？」

「おう！だがエレベーターはさっぱり動かない。下り専用にいじられてる。」

それならンンンン……ハアアア！！  
だったら、どうするか分かるな？」

ダイナマイトはエレベーターのスイッチを押して確認する。

そしてフリッツに振り返るとニヤリと笑い、エレベーターの扉を腕力に物を言わせて無理矢理こじ開けた。

当然、相棒と呼び合うフリッツだ。ダイナマイトの考えた事も気づき、俄然燃えてきた！

「へへっ！こうしてる時間も惜しいんだ。ならそれで行こうぜ！」

2人はエレベーターの天井を破壊、素早く据え付けられているハシゴに手を掛けたツツ！！

「む？重力までいじられてるな……」

ダイナマイトが縦横から重力を掛けられているのを感じる。

自分は全身を鍛えている……フリッツは握力が人外レベルだ。

命綱は当然無いが、地上まで無事に辿り着けるはず……大丈夫だとは

思うが万が一がある……

迷うダイナマイトの肩にフリッツが手を掛ける。

ダイナマイトが見たフリッツの瞳が語っている

『じゃらくせえ！見せてやろうぜ！！』

バレン又帝国竜の穴で積んだ修行は伊達じゃないってな！

学園長をブツ飛ばして仲間を助けようぜ！！』

「ワハハハハ！！そうだ！そうだったな！！

やってやろうぜ相棒！！」

俺は何を迷っていたんだ。今は考えるより行動する時だ！！  
さっきまでの自分が小賢しく思えて笑えてきた。

「当ったり前だアアア！！相棒！！」

フリッツも自分と先に来た仲間を嵌めたあの卑劣漢をぶん殴ると気  
炎を上げている。

要は2人はただのコンビじゃない。

生死を掛ける瞬間も信頼できるバディなのだ。

「ヨッシャー……ッッ……」

其処から脇目も振らずに地下39Fから

上がるッッ!!

登るッッ!!

昇るッッ!!

『手足を使って』駆け上っているのだッッ!!

時間とエネルギーは確かに使う。

しかし肉体は嘘を吐かない。

凍てつく冷気でハシゴに掛ける腕と足の痺れる。それが刻一刻と地上に近付いている事実を身を持って確信させる。

その確信が2人の活力に、仲間が待っているのが更なる活力となり速度が上がる。

学園長の失敗は3つ……

1つ 保管庫で始末しようと画策したこと。

1つ フリッツ1人なら良かったが、ダイナマイトを誘うのを止めなかったこと。

最後の1つ 2人の知性を過大評価していたこと。

大概のことは無理を通せば道理引っ込む…地下からの冷氣と360°から掛かる重力がじわじわと消耗して力尽きるのが道理…真理だ。

だが2人のマッスルは道理をねじ伏せた。

確かに傷ついているが、2人は地下二階にまで到達、後はエレベーターの入口をこじ開けるだけだ。

「フリッツ！やるぞ！！」

「おつよ相棒！！」

「フアイトー………！ツ発アアア！！」

気弾で無理矢理扉を吹き飛ばして、零下地獄から地上に帰還した2人。

そして連合の兵士とモンスター達が襲撃しているのを確認。休むことなく、すぐさま走り出した。



S a · G a 5 5 (後書き)

次回もアリアドネー編ですね。



S a ・ G a 5 6 ( 前 書 き )

私なりに若セラスをイメージしてみました。

「ゲゲゲゲゲ！」「」「」

醜悪なモンスターが鋭利な牙や爪を見せつけ威圧する。

幸いにも、狭い一本道のため集団で一気に取り囲んで襲い掛かってくる危険は無い。

しかし、魔法で倒しても次から次に化け物が補充されて押し寄せてくる。

「みんな怯むんじゃないよ！

手数は多くても、一発一発は戦技教導官に遠く及ばない。

障壁を張れ！

消費の少ないウィンドカッター、ウィンドダートで弾幕を張って応戦するんだよ！

隙を見て後方部隊は上位魔法を撃て！」

「ハイ！」「」

アリアドネー魔法騎士団は魔法の矢と同コストで中級魔法レベルの威力を誇るウィンドカッター系を撃ち込む。

内部に入り込んだ侵略者に必死の迎撃をしている。  
そして檄を飛ばす、第一騎士団筆頭のセラスは思う。

何故、今頃になって連合軍が進行してきたのか？

応援要請を送ったがバレンヌ帝国から援軍が来るまでには1日掛かる！

この広いアリアドネーだ。日頃の堅牢さは一旦内部から攻められると地の利は無い。  
それどころか逃げ場の無い牢獄のようだ。

更に相手は化け物！これでは体力と数に差を開かれている我等が圧倒的に不利だ。

「きゃあ！」

その時、化け物の一匹が建物の壁に張り付き飛びかかってきた！  
たまらず仲間達にも緊張が走り、パニック寸前に陥ったが……

「『エアスラッシュ』！！！」

セラスが咄嗟に反応、この状況でエメラルドから教わった中でも最良の魔法を放った。

結果、モンスターは空中で真っ二つになり絶命した。

「いいかい！敵は亜人じゃない！

何をするか分からない化け物相手に油断するんじゃないよ！

それ、目一杯魔法をくれてやりな！」

そのまま矢継ぎ早に指示を出し、仲間をパニック状態からも回復させる。

「筆頭、大規模魔法の詠唱が完了しました！」

後方部隊からの報告がセラスに届いた。

「よし！それを待っていたんだ。皆、後方部隊が通れる道を確保！  
気を抜くんじゃないよ！」

セラスの伝令で、騎士団員がびっしりと並んだ道に少しのスペース  
が出来た。

そこを後方部隊の一部…高威力、広規模魔法部隊のメンバーが1人  
ずつ確実に進んでいく。

そして……

『風牢壁』

## 『雷の暴風』

### 『1000の影槍』

この三種の魔法が敵の状態と補充された割合を判断して、延々と繰り出された。

巨大なつむじ風でモンスター達を拘束、壁に引っ付いた者を地面に叩き落とす。

そこに放射状に撃ち出された迅雷が襲いかかる。仲間を盾にしてせめて自分だけでも助かるうとするモンスター達。

しかし魔法は電撃！

一瞬で盾モンスターをスパークさせ、後続へ伝導していくため無駄な足掻きでしかない。

そして締め影槍。

貫通力、切断力に優れた魔法の影が電光で発生したモンスターの足下から発動。

視界に映っていたモンスター達をキレイに葬り去ることが出来たの事を確認すると、次の組に入れ替わり迎撃する。

その間の前衛は消耗した精神力を回復させる。

残る後方部隊が配合したエーテルを回し飲んで回復を果たし再び戦

うのだ。

(このままじゃキリがない。

他の騎士隊も同じ状況だから応援は望めない。

しかしバレンヌ帝国の方々もいないのは何故だ?)

エーテルを飲みながらセラスは考える。

降って湧いたような襲撃、いつもなら警護をしているバレンヌ帝国の人間の姿が見えない。

自分達が預かり知らぬ場所で何かが起きているのではないか?

しかし、思考は部下の言葉により中断する。

「筆頭!! 後方部隊が魔法を撃ち尽くしました! 前衛部隊も全員エーテルを飲んだのも確認しました! 号令を!」

今は目の前の化け物共から生き延びるのが先決だ!

無駄は省け… 一つの所に命を懸けるんだ!

「前衛は最初の隊列を組め!

奴らを一匹たりとも自由にするな! 魔法を浴びせかけるんだ!」

「『ハイ!』」

今の流れで多くの化け物を葬り去った。それでも、まだ化け物の増援が止む兆しは見えない。

騎士団メンバー、そしてセラス自身にもくすぶりだした不安を吹き飛ばすように指示を飛ばした。

・  
・  
・  
・  
・

S i d e      キヤット

「うわ、何処を見回しても化け物だらけでしたっちゃんかめっちゃかだねえ。」

霧隠れでステルスしてるから気付かれる心配はないのは理解してるけど、ホント嫌になるわ。

「相棒、こりゃあ休んでるヒマは無さそうだぜ？」

「分かってるさ、あのオールバック野郎にパロ・スペシャルを決めるまでは休む気は無いしな！」

ありやりや？筋肉2人組じゃないの。

地下エレベーターから現れるなんて……予想はつくけど、ちょっと話しを聞いてみようか。

「オーイお二人さん、そんなに疲れてどうしたんだい？」

「ん？その声はキヤットか。  
霧隠れなんてしゃがって……」

「無駄な力を使うのはよせ、フリッツ。  
キヤットは知恵が回る。地下の出来事を話そう。」

うんうん、ダイナマイトは空気が読める奴だよ……  
フリッツも黙らせてくれたしね。おかげで話しが進むよ。

「時間が惜しい。一言で伝える。  
学園長に嵌められた仲間が地下にいる。」

ホントに一言……手短だった。



「へ、分かった…ありがとね。」

「相棒!!行くぞ!!」

「合点だツツ!!」

凄いねえ…モンスターを蹴散らし、壁をぶち抜きながら学長室までまっしぐらかい!

まあ、私の仕事はこの地下に在る。サクサクつと片付けるよ!

「と、その前に『アイツ』に通信を……………」

「キヤットか…首尾はどうだ?」

ん、今から突入するとこ

アリアドネー騎士団でヤバい状態の部隊がある。

……………そうだよ。それじゃあ頼むよ!クマ五郎。」

さあて…メッセージも入れた。

いざ!アリアドネー地下へLet's GO

「うへへ、寒いし役に立たないゴミだらけ…保管庫が聞いて呆れるね！」

あのデコ助野郎め！

こんな汚い場所をアタイ達に掃除させようとは……許せないね〜

しかも駄賃は誰にも邪魔されず、助けもない空間で永久にお休み出来る権利とは笑えないジョークだ。

それにしてもエメラルド……いくらアンタもお人好しだからって、ゴミ箱の住人になる事は無いだろうに…

「もたくさしても仕方ないし、サクサクつと助けて形成逆転するか…」

チビの頃からの腐れ縁だし、なんだかんだ言っただけ友達だしね〜  
エメラルドは優しく助けてあげよつと！

そう思って保管庫に踏み込んだけど…

「いや…わざわざ地下まで来たんだ。そう急ぐこともあるまい。  
キミも仲間とゆっくりしていきなさい…世界が終わる瞬間までな！」

「もうね…どうしてこのタイミングで、モンスターは発生するのだろっね！」

せつかく助けようとしたのに、デコ助そっくりの化け物が何も無い空間から現れた。

強いのかもしれない…

ただの雰囲気野郎かもしれない…

戦えば分かるから関係ないか！！

「（霧隠れ、水舞い、スパークリンググミスト…っ）」

まずは各種ブーイストを発動！

素早く背後に回ったが…

「フッフッフ…霧に紛れて姿を消したただけなんて甘いですね！  
そこですか？」

「（ッッ！？）」

上手いこと避けたけど、蹴りが丁度、私がいた場所目掛けてピンポイントに襲って来やがった。

「（何でアタイの場所が分かった！？）

アタイの霧隠れは、エビスさんも褒めてくれた程の出来。足音は立ててない。

何か奴は能力を持つてる！？）」

「フフ…動揺してるのが丸分かりですよ？

どうです？ここで諦めたらすぐ楽になれますよ？」

コイツ…人をいたぶって楽しんでやがる！！

こんなサド野郎だけには負けられない！

「（アタイ達シテイシーフの専売特許は盗むこと。命を盗む……………

暗殺も仕込まれてんだ。

女だからって舐めてんじゃないよ！）」

腰に差したダガーを左手で3本まとめて抜く。

右手にはいつもアタイと共にある相棒…いつ動きだしても大丈夫だ。

「力の差を感じても、私と戦う。それはとても残念です。

しかし仕方ありませんね……綺麗な体を残したまま死ぬると思うな  
ツツー！」

今度は真後ろでなく、右斜め後ろにいた。それなのに迷い無く蹴りを  
繰り返すことが出来た。

まだトリックは分からない……しかも相手は本気を出してきた！  
こりゃ避けるのも一苦労だよ。

「チイツー！これでも食らいなー！」

小手調べにダガーを投げつける。

「スピードは有る、だがフェイントも無しに当たる私では無い！」

「言ってくれるじゃないの。」

すぐにその余裕も消し飛ばしてやるよ！」

アタイだって、あんな見え見えで工夫の無い攻撃なら当たるなんて  
思っちゃないさ。

実際、初見ではまんまと引っかかった。

バレンヌ帝国が表に出さない歴史の裏側の人間が研いてきた牙……  
身を持って味あわせてやる！！

「まずは目眩ましたよ！『ライトボール』」

ライトボールを5発生み出す。

1発は奴の足下に、3発は胴体、最後の1発は頭を狙って避けさせる。

「そんなレベルの術ではダメージすら与えられんぞ！！」

あんな『避けてくれ』ってアピールした攻撃を当たり前に避けて調子に乗るんじゃない！

「いいや！まだアタイのターンは終わらない！『サンシャイン』、  
『幻日』！！（霧隠れ）」

ライトボールの4発はブラフ、本命は避けさせた1発だ。  
目眩ましと宣言したのもこの為の布石。

そして光球を太陽の代わりに使用。熱線に焼かれてたまらず奴が振り向いた瞬間に幻日を発動。

そして、アイツが破ったと確信した霧隠れで姿を隠す……

確かにコイツの身体能力は正真正銘の化け物だ。戦いにおいては**ぶずぶ**の素人…**チヨロ**いな。

「クツ！…やってくれたな。

今のはなかなか効いたぞ！！だがここまでだ。死ねイ！」

（分かってないね、アンタこそが終わりなのさ！）

「何故だ！？何故死なんのだ！？

確かに肉を裂いた手応えがあった。貴様の首から上を潰した！  
それなのに何故再び現れる！？」

（ンンンン、目が焼かれているとはいえ滑稽だね！

さっきから何も無い場所を必死抜いて攻撃してるよ）。

ホント、おバカさん。）

コイツは網膜に焼き付いた私の幻を必死に攻撃してる。

こうなれば棺桶に片足突っ込んだ半死人同然。

戦闘経験者でもない人間が突然手に入れた身体能力を御しきれぬ筈  
無い。

それにアタイは油断どころか慢心して勝てるほど楽な相手じゃない  
さね！

後は避けながら攻撃するだけ…こうなればeasyな仕事。  
霧隠れを看破したトリックは最後まで証明しなかったけど、『サン  
シャイン』が効果バツグンだったんだ…

大方アンデット種がよくある体温で判別しててたんだろっね。  
そうすれば、この巨大冷却装置がある保管庫におびき寄せた説明も  
つく。

それにコイツが仲間に魔法を掛けて凍らせたんだろっけどね？

サクッと始末したいけどさ…こういう奴ほど油断出来ない隠し玉を  
持ってるもんさ。  
最後までクレバーに仕留めよう。

S i d e O u t

「クソッ!！」

化け物こと学園長は考える。

何故このキャットという女は死なない!？

キャットが使った『サンシャイン』と『幻日』という目眩ましの魔



法の効果も消えた。  
今はハッキリと『キャット』が見えている。

既に幾度も切り裂き、呪文をぶつけて殺してやった！！

それでもみるみるうちに死体が再生、または全く別の場所から攻撃が飛んでくる。

もしやバレン又帝国には詠唱破棄どころか無詠唱で効果を発揮する魔法が存在するのだろうか！？

それとも死者蘇生魔法まで確立されているとも言うのか！？

『どこを見てんだい？次は腕をもらうよ〜』

「盗賊風情が…いつまでも調子に乗るなアアアアア！！  
これでお終いにしてやる！『ブラックアイス』！！」

私が手に入れた邪法！

石化の魔法…それもただ相手を石化するだけの魔法ではない。  
美しく保存、鑑賞することが出来る結晶化だ！

今、その魔法の出力を限界まで引き上げ部屋中に放った。

「……………やったか？」

静寂が保管庫内部を満たす。  
キヤットは現れない。

つまり、それが意味することは……

「フフ、フフフフ…ハハハハハハッ！」

勝った！勝ったぞオオオオオ！！

ざまあみる盗賊風情が！私に勝てる道理なんてどこにも無かったんだよ！」

『死闘の末に勝利した！』その実感でいっぱいだった。  
だからだろう…私が負けたのは。

「甘いですね？そこですか？」

突然キヤットの声が聞こえたと思ったら、体の中から全身に向かって針が血管に乗って流れるような痛みが走った。

「アンタはもうじき死ぬ…イロリナの星で急所という急所を攻撃したからね。」

そうか…針が体中を巡るような痛み of 正体は先端に返しの付いた細剣で突き抜かれた衝撃と肉が削ぎ落とされた痛みだったか…

なるほど…認識した瞬間から体の至る所から血が噴き出すのが分かる。

そして私を見下ろすキャット。

殺さなければ…立ち上がろうとするが、気持ちだけが先行して身体はじたばたとみっともなく這うだけ。

立ち上がるという簡単な動作さえも不可能。

もしも冷却装置が稼働してたら、この程度の傷はすぐさま凍り付き血の流出は止まったかも知れない。

しかし私がブラックアイスで部屋中を結晶化してしまった…

傷口から流れ出る血が止まらない…生命力も体外へと抜けていき、みるみるうちに衰えるのを感じる。

「さく、サクサクと死のつか？仲間が助かるにはその道しか無いっばいしね。」

嗚呼、私の頭を穴だらけにする気で細剣が構えられた。

これが私の最期…か。

本体が存命だとは知っているが虚しいな……

「ほら、そのバカップル共もシャキツとしないかい！  
地上には化け物が溢れかえってるんだ。今すぐ応援に行くよ！」

「バ、バカップルって…私達も好きで凍ってた訳じゃない！」

「まあまあ、キヤットが助けてくれたんだ。  
続きはモンスター達を撃退してからゆっくりと…な？レーザー。」

「もう…ジヨンったら〜」

キヤットの読み通り化け物が消えた瞬間、保管庫内部で捕らわれていた仲間の魔法が解けた。

なお、バカップル共は目障りだから最初に送り出した。  
魔法が解けた瞬間からキヤツキヤウフフしだしていたから……

「オレ達も地上に上がるんだ。」

そしてフリーランスの長ヘクターも、部下が待つ戦場続いた。

「さてと…最後はアタイ達だけだね。」

エメラルド、こんな所とはサツサとオサラバするよ。」

しかし、エメラルドの様子がおかしい。

「ちょっとちょっと、どうしたんだい!？」

もしかしてどこが悪いところでもあるか?」

「いいえ、キヤツト…ごめんなさい。敵の罠に自分から掛かりに行くなんて……」

キヤツトは納得した。

この友人は繊細過ぎるハートの持ち主だったな…今回も魔導師である自分が、何の役にも立たなかったのが申し訳無かつたんだろ…

なら簡単だ!失敗を返上する活躍をさせればいい。

「だったらアタイのサポートをしてちょうだい。ドカーンって魔法は使えないからね。」

いつものひょうきんな態度でウィンクして、キヤットは言った。

「分かったわ！久しぶりに全力全開を出してあげる！！（いつも助けてくれてありがとうね？キヤット…）」

こうしてキヤットは仲間を解放、遊撃隊として自分達の役割を果たすためエメラルドと共に地上へ帰還した。

ライーザ達はキヤットがあらかじめ通信を入れて警告した為に、難を逃れたバレンヌ又帝国兵の仲間と合流。

ヘクターと部下達は雇われのフリーランス…防衛、撃退の仕事をポリシーに従いやり遂げるため応援に駆けつける！

役者は揃った。アリアドネー側の本気の反撃が始まる。

キヤットが学園長の目を潰して弄んでいる頃…

「グゴゴ…グルルルル!!」「」

セラスが率いる部隊はピンチだった。

「筆頭、前衛部隊も魔法を撃てる回数が減っています！  
もはや迎撃することは不可能です！」

「何を弱音を吐いているんだ！  
もうすぐバレン又兵の方々が応援に来る！  
私も前衛に立つから踏ん張れ!!」

「ハイ!!」「」

あれから何度も迎撃パターンを繰り返した。

3回前から後方支援のエーテルが切れ始め、両部隊が放つ魔法の威力が弱まってきた。

今は威力より手数を増やして無理矢理に侵攻を押し返し、モンスター達の中間部を圧殺している状態。

そして魔法の飛んでくる隙を突き、3匹のモンスターが特攻する。

騎士団の仲間は満身創痍で反応が遅れてしまう！

「この！モンスターの分際で舐めるなアア！」

魔法が間に合わないと判断したセラスは剣を抜刀、そのまま一匹、二匹と斬り伏せたが……

「ゲゲゲゲゲ！！」

「セラス筆頭！危ない！」

「しまった！？」



ここにきて数の暴威が持つ効果が現れた。  
戦う仲間を鼓舞し、自身も魔法を撃ち続けたセラスは既に気力だけで動いていた……

そのため、モンスターにバックを取られるという普段なら信じられない失態を犯してしまった。

『もう目の前まで爪が迫っている！？』

仲間も必死だから助けは無い。剣は間に合わない…魔法など遅すぎる！

もはやここまで………』

セラスはスローになった瞬間に選択肢を探したがどれも不可能……  
抵抗を諦めた………

『グチャツグチャグチャグチャ』

何かとんでもない質量が上から掛かり肉が強い力潰され、引きちぎられる音が響いた。

セラスの目の前でだ。

驚くセラスの目に待ち望んだ漢が映った。

短く刈り込まれた短髪

頑強な全身鎧に身を包んだ身体

剣、大剣、槍に斧…そして大柄な体躯をも覆い隠す巨大な盾を背負った頼もしい後ろ姿

「あなたは……」

それはバレンヌ帝国から新たに派遣された重装歩兵の長。

そして騎士団を指導する人間を『指導する』戦技教導官でもある熊の亜人ベアだった！

「セラス殿、よく保たせてくれたな…騎士団の長として見事な働きを見せてくれた！」



「この生態系を外れた役立たずの化け物が!!」

「ギャオオウ……」

黒曜石の槍を抜き、何匹かを串刺しにして投げ飛ばす。

「貴様等全員皆殺しだ!」

「……グルルル…ガアアアアア!!」

残るモンスター達がベアの脅威を感じ取り、排除するため殺到する。

アリアドネー防衛戦の第2ラウンドが幕を開けた!!

## S a ・ G a 5 6 (後書き)

『スパークリングミスト』

ロマサガ3の玄武系統の術

全体に判定アリで敵の器用さを下げる効果もある。  
しかし弱い、弱すぎるし器用さなんて下げても仕方ないから誰も使わないだろう死に技。

『サンシャイン』、『幻日』

ロマサガ3の太陽術

前者は敵全体に熱属性の術ダメージ、アンデッドに有効。  
後者は確率で攻撃を回避するバリアーを張る。

幻日はファイリアとも読むらしいです…こっちはオシャレな雰囲気ですね。

『イロリナの星』

ノエルが潜む移動湖に安置された細剣。  
振ってれば閃く『百花繚乱』は即死効果もある使い勝手のいい技。

今回はキヤット活躍するの巻

セラス頑張る！の二本立てでした。

次でアリアドネー編はオシマイです。  
今回はいつもより長くてごめんね〜

S a ・ G a 5 7 (前書き)

卒論と就活は酷いね：時間があつという間に無くなってる。  
小説を書く暇が無いよ)・・・)

「ハアツッ！」

ベアが槍を振るう。

「ギヤオオ！」

モンスターが纏めて尻ぎ払われる、纏めて吹き飛ばされる、纏めて切り刻まれる。

ベアは着実にモンスター達を葬り歩みを進める

『ザッ…ザッ…ザッ…ザッ…ザッ』

重装歩兵隊の部下はベアに回復魔法を施しながら大盾を構える。そして隙間から槍を伸ばしてじわじわと歩みを進める。

この様子が延々と繰り返されている。

モンスターからしたら針の壁を背にした亜人が、ブンブンと凄い勢いで槍を振り回しながら此方に向かって来るのだ。



その威圧感、迫力、危険度は先ほどまで相手にしていたアリアドネ  
ー騎士団の比ではない。

何より単騎で…山ほどいるモンスター達に殴り込みをかけるベア…

……

その様はまさにベア無双

「ドオリヤア!!」

「……ゲゲエエエ!?!」

今も槍が振るわれ、モンスター達が冥府に旅立った。

その恐怖から恐慌状態に陥っても、モンスター側にはセラスのよう  
に指揮する者はこの場にいない。

「……ギョオオオオオオオ!!」

結果……耐えきれずに門扉まで押し合いへし合い、一目散に後退し  
た。

「ふんツツ！根性の無い奴等だ。女ばかりの騎士団のほうが100倍マシだな！」

モンスター共が視界から消えたのを確認すると、黒曜石の槍を『ブンツツ』と一振りし付着した血を払う。

「ボス！このまま奴等が逃げた方角へ突撃しますか？」

血気盛んな若者がベアに意見する。

「そつだな……………」

総員突撃…

戦艦が存在する今は全滅のリスクもある。  
自分なら戦艦の砲撃で必ず精鋭を始末する…………釣りの伏せを仕掛ける。

「部隊を分けるぞ。

ヘッジホッグ達は俺について来い。

逃げ出したモンスターを始末する！

残りはアリアドネーの迎撃システムを取り戻す班と、ライーザ達の応援に行く班に分ける。

そいつで外の奴らをぶっ飛ばせ！！分かったな！」

「『『『『『イエス、サー！』『』『』『』』」

指示通りに長距離魔砲を始めとしたアリアドネーの迎撃兵器。それを統括する迎撃システムを確保する部隊

仲間の救援に向かう精鋭部隊。

ベアを始めとしたモンスターの本隊を叩く本隊に別れてすぐさま行動開始した。

「おうおう、イテエか？化け物。」

力こそ全てのバレン又傭兵部隊の長ヘクターは、そこら辺に転がっていた数打ち物の剣を二本使い、モンスターを壁に縫い付けている。

「グウウウウ……ギギギギギギ……」

「よくもオレ達が留守にしている間に好き勝手やってくれたな……今日のお前は虫の居所がワリイんだ。お前等は今日ここで、全殺しだ!!」

「ウゲゲッツ……ゲ……」

そして自前のクロスクレイモアで壁ごとバラバラに引き裂いた。

ヘクター達は傭兵。ライーザやベア達…バレン又帝国正規兵とは違いがある。

正規兵は号令で動く。傭兵集団にも長はいるが、基本は各自の判断で戦う。

この程度なら大した事はない。最も大きな違いというより特徴は……

「ヒイイイヤツホオ!!目を瞑つても攻撃が当たるぜエ。今日は久しぶりに快眠出来るぜエエエエ!!」

「棒立ちのモンスターはただの的！  
逃げ回るモンスターは訓練された的だア！  
ヒヤッハアアアアア！！撫で切り、微塵切りだア！！」

「アハハハハハ！！  
ウチのウィンドカッター、ダートの切れ味はどうだい？  
あ、コラ！まだ逃げるんじゃないよ！」

規律に縛られ、己自身が満足出来る闘争を出来ない正規兵に嫌気が  
さして、軍を抜けたアウトローの寄せ集め…  
それこそがバレンヌ帝国傭兵部隊の前身。  
現在も傭兵部隊には簡単な決まりしかない。

仲間に被害を出すな。

契約事項は必ず守れ。

好き勝手に暴れて、役に立ち、隊長が指示した場合は従え。

防衛？撃退？

知ったこっちゃ無い。

刃向かう者は殺し尽くす。

結果……防衛の役に立っている。

なお、彼等の凶暴性は旧世界なら存在自体が抹消されるレベルだ。しかし、常に戦争が勃発する魔法世界では、『毒を以て毒を征す』という考えで立派に認められている。

「畜生が…テメエラ！無駄に遊んでんじゃねえ！さっさと片付けて次行くぞ…！」

「…グギャ！？」「」

ヘクターは持ち前の剣術でモンスターを瞬く間に始末すると、最前線へ躍り出ていった。

「おっ！頭が来たぜエ…！」

「マジかよ！？こりゃあつかつかしてられねえな！」

素のポテンシャルが高いので、好き勝手に暴れまわるだけでも頼りになる傭兵部隊。

その荒くれ共にヘクターが指示…というより怒声を飛ばした。

その瞬間、さつきまでの力任せの動きから打って変わり、即座に陣形を組んで進軍…モンスター達を更に追い込んでいった。

なお、アリアドネー騎士団員は既に移動しており、この場には1人もいない。

魔法を撃つのも、得物を扱うのもちんたらして邪魔くさい…ヘクターが来る前隊員達が追い出して、別の現場に急行させたのだ。

かくして目一杯暴れることが出来る遊び場を確保した傭兵部隊の勢いは誰にも止められない。

彼等が通った跡にはモンスター共の凄惨な亡骸が至る所に転がるこの世の地獄が出来上がった。

Side ベア

俺達はモンスター達が撤退した道を辿り、学園入口の大きな門に到着した。

そして陣形について考える…

バレンヌ帝国建国以来、重装歩兵隊に伝わる伝統の『インペリアルクロス』

全体の守りを固め、攻め疲れた隙を突いて力で以て蹴散らす鉄壁の陣形『ムーフェンス』

そして中央の囷役と攻撃役の仲間が離れて戦うことより、囷に攻撃は集中…危険度は格段に増す。しかし、仲間は普段よりも攻撃に専念することを可能にする特攻の型…『鳳天舞の陣』

今回は自身の命を捨てる覚悟で戦わねば、勝機は無いだらう。

「いいか、これより俺達は決戦の陣形…鳳天舞の陣で戦う！俺が中央で囷になる。お前達は攻撃し続ける！」

「……イエス、サー！」「」「」





「アンタらはバレンヌ帝国の兵士だな？身体から立ち上るオーラば見れば分かるとよ。」

「……………」

「ああよか、よか…」

オレ達は敵同士やけん無視されても仕方無いわな。  
けど此処で逢ったのもなんかの縁やけん話しばししようや。」

なんだと！？この状況で交渉でもなく、ただのお喋りがしたいだあ  
！？

「どうしますボス？自分達はボスの後について行きます！」

ベアは古代人を見る。

さっきからずっと笑っているが、嘲るようなそれではない。  
ただ単に話しをするのが楽しみという類のもの……………」

確かに防衛を優先すべきだ……………」

しかし、古代人の情報が手に入る絶好機ではないか？

「少なならな……」

「おお！流石話が分かるとよ！

実はな…オレ自身は、こん世界は消すのは乗り気やなかんばい……」

「（話し方が独特だな…）じゃあお前は何故乗り気でないんだ？  
侵略行為に加担するのは何故だ？」

「オレ達はあらゆる種類の生物の能力、知識、習性は吸収してきたとよ。

オレは武道の達人…人間だな。

まあ吸収した力も100年ほど前に、大半を失ったけどな……」

真偽は分らんが、情報は引き出せるな……  
ギリギリまで続けよう！

「貴様の事情はどうでもいい…話しを続ける。」

「復活してからも新たに何人も吸収したとよ。

けどな…モンスターを吐き出して限りなく人間に近付いたオレやけん……喰った相手の思い出や意思、想いが流れ込んできて、こん世界が大好きになった。

消すのは勿体無さすぎる。

それ以来探してたのさ…オレをぶっ飛ばせる奴をな!!」

またエライ話しが飛んだな…

俺がコイツと話している間は、雑魚モンスターの侵攻も止まっ  
ている。

ならば…まだイケる。

「お前を倒せる奴を見つけたらどうするんだ？」

「さあな、そればかりはオレば倒した相手にしか教えられな  
かる？」

最初のケラケラとした笑い方、独特の喋り方が相まって飄々とした  
イメージを受けるがそれはフェイク。

途中の雰囲気は冗談抜き…本気でぶつかって来たな。

「…貴様の言い分は分かった。

最後に聞かせてくれ。今回の襲撃は、貴様の独断専行か？

それとも他の古代人はいるのか？」

「ああ、仲間内でも頭が回る小狡い奴やけん。

残念やけどオレは荒事担当…どうにか奴ば誑かして実行することが  
出来よるとよ。

ソイツは遠く離れた安全圏からアリアドネーが落ちる様は面白がつて観とるしな…」

そこまで知恵が回る敵が…もしかしてコイツの監視役か？  
この会話すら向こうに漏れているのか！？

「話しは終わりだ…ここからは互いの武で語るとしよう！」

もしかしたら、此方に抱き込める可能性も有ったかも知れないが…  
…残念だな。

「へへ、分かり易くて良いね。  
実際、弱っちい奴には任せられんな…では行くぞ！！」

む、亜人の身体から変化したか！

獣のような四つ脚…機動力を求めるならコレが最も理に適っている。  
そして上半身は人型…魔戦車ほどの大きさを誇る体躯…どこから取り出したのか、巨大な打槍や剣を軽々と振り回している！！

コイツは典型的なパワータイプだ！！

『さて、まずは小手調べだ！このオレ様を止められるか？』

それに初っ端から力任せのぶちかましか！

「お前等、盾を構えろ！真っ正面から受けるな！受け流せ！」

「……イエス、サー！」「……」

『受けて立つその気概は見事だが、こんなちっぽけな盾でオレ様は止められん！』

そして奴は、肩をいからせ突進してきた。  
そして俺達は、古代人の力を思い知った。

「……ぐおおツツ！」「……」

とんでもない馬鹿力だった。

コイツのぶちかましは、盾を使いこなすため、戸愚呂殿にシヨルダ  
ータツクルをしてもらった時と同等！

困役が俺で正解だったな……部下だったら吹き飛ばされてるレベル

だ。

「（チクシヨウが…衝撃で手が震えてやがる。）奴の隙は少ない！今のうちに仕掛けるぞ！」

「亀甲羅割り！！！」

ベアの号令でトータスが動き、天然のアーマーと化した敵の皮膚を戦槌で砕く。

「マキ割りダイナミック！」

すかさずウォーラスも胸部の亀裂に楔を打ち込み、次の攻撃に狙うターゲットとして痕を残す。

「逆風の太刀ツツ！！！」

バイソン、ヘッジホッグが素早く移動。

吹き荒ぶ風を従えて特攻、仲間が作り出した弱点にX攻撃を繰り出した！

こうして信頼する仲間達による、怒涛の連携攻撃は完全に決まった！

しかし……

『ガハハハハハハ！！』

なかなかどうして……やるじゃないか。

復活して、この身体を手に入れてから傷を付けたのは、お前達が初めてだぞ。』

確かにダメージは与えた。

しかし分厚い筋肉の鎧に阻まれ、致命傷というには程遠い……多少のダメージに止まった。

「くそつたれが……あの集中連携攻撃を食らってピンピンしてやがる。」

『フハハハハ！舐めてもらっちゃあ困るぜ？』

それに、まだまだ闘争は始まったばかりだ。

オレ達の情報が欲しければ、更なる力を示せ！！』

この野郎……いい気になりやがって……！！



「お前等、このゲテモノ野郎に後悔させてやるぞ!」

「……イエス、サー!」

・  
・  
・  
・  
・

ベア達が丁度戦い始めた頃……

遙か遠く……学園全体を視界に納めることができるほど離れた高台。

今まさに陥落するアリアドネーを見つめる2つの人影がある。

1人はアリアドネーを裏切った男……学園長

もう1人は仲間からも小狡いと評され、過去にノエルが最初に遭遇。バレンヌ帝国と敵対するきっかけを作った黒ローブの古代人だ。

「……………」

「長年治めてきた学園から火が上がっている様を、顔色一つ変えずに眺める……生徒達も殺されているがどんな気分だ？」

ローブの中に隠された顔はニヤニヤといやらしい笑みを浮かべている……

相手から表情は見えなくても、全身からゲスさがにじみ出ており不快感を与える。

「何の感情も湧きませんね。

強いて言うなら……権力闘争渦巻く狭苦しい檻から解放された解放感に浸っているところですよ。

イズルコ様は楽しそうですね……」

「クッククッククツ……この戦には人の世が凝縮されている。

いつまで経っても人の世は変わらん。

ある日、信頼する長の裏切りで内部から組織が瓦解、混乱の極みにある状態で負け戦に挑む人間達。

そして自らの手は一切汚さずに観る私……最高だ。」

それを聞いて学園長は今までの人生を振り返る。

「……………」

（300年生きてきたが、この男の言う通りだな…人の世はいつまで経っても変わらない。

せめてアリアドネー卒業生が世界を変えてくれればと邁進した時期もあつた。無理だったかな……………」

東西南北の大門、緊急非常口など至る所から侵入するモンスター達…このイズルコがアビスゲートを開いている限りは、打ち止めは存在しない。

当然、アリアドネー側の勢力は勿論2人がいる場所まで進軍出来ない。

ヘラスとバレンヌの両帝国からの援軍が到着する頃には、アリアドネーがギリギリ陥落するように計算した戦力。

イズルコの計画では、このまま最後の瞬間まで高みの見物と洒落込

んでいる筈だった…

計算外のイレギュラーさえ発生しなければ。

「お師匠、コイツ等がガトウの言ってた古代人か？」

「

赤毛の少年が…

「そうじゃな。

ついでにアリアドネー襲撃に関わっておるのも間違いないのオ……………」

シヨタでありながら、ジジイでもある奇跡の存在が…

「つつことは…………どっちにしてもブツ飛ばしやあ解決じゃね？」

「今回はかりお前の意見で間違いないな…  
やはり魑魅魍魎の類は切り捨てるに限る！」

「え〜？ 斬り捨てるなんて穏やかではありませんね〜。  
それよりも私に、ナイスなアイデアが有るんですが…………それならば、  
大分楽に相手をする事が出来ますよ？」

更に、限界まで鍛え抜いた身体に浅黒い肌の巨漢…

一振りの業物を抜刀し、眼鏡の奥の瞳は鬼をも震え上がらせる鋭さを秘めている、旧世界は極東からやってきた魔剣士……

そして1人だけ仲間から一歩引いた位置で、ぶつくさ言って台無しにする伊達男……

巷を騒がす指名手配ながら、その活躍は人々に理解されファンクラブまで発生した戦闘集団『赤き翼』がアリアドネーの救援に現れたのだ！

「イズルコ様、この者達は赤き翼です。そこらの魔法使いが持つ威力とは段違いです。」

学園長は突然降って湧いたイレギュラー…魔法世界人であるが故に、赤き翼が持つ規格外な実力を理解している。

イズルコに進言しつつも、僅かな拳動すら見逃さないと身構え、戦いが起きた瞬間すぐにも魔法が撃てるように備えた。

それでもイズルコは余裕綽々で、身構えてすらいない。

「クククク……たかが羽虫が5匹で儂を倒す気か？  
今の儂は気分が良い……命乞いしたら奴隷にしてやらんでもないぞ？」

イズルコにあるのは、魔法世界を研究した際に手に入れた綿密なデータ。

そのデータから、自分達が扱う魔法に比べて、この世界の魔法は威力、連射、精度性能で劣っていることを割り出した。

そして、この世界の魔法使いが幾ら束になると、自身を倒すどころか致命傷を与える力すら無いと理解した上で挑発すらしたが……

「ああ？命乞いだあ？」

おいナギ、命乞いだとさ……こりゃあメチャ許せんがどうすんだ？」

「ラカンのおっさん……俺も同感だぜ！

だがよオ……こんな三下相手にして、アリアドネーが落ちたら話しにならねえ。

だから無視！」

「ガハハハハハハ！」

ちよつと前まで火の玉小僧だったが、ちったあマシになったなナギ  
！」

完全攻撃特化タイプで頭が弱いと認定されている2人にさえ、イズ  
ルコの安い挑発は通用しなかった。

「はあ〜、話すのもそうだが、相手をする時間も惜しい。  
アルビレオに奇策があるらしいから任せるぞ！  
それでいいな！さっさと行くぞ！！」

「「ちよ！？詠春！」」

そのまま詠春は2人を引っ張り、アリアドネーへ向かおうとしたが…

「儂が目の前に現れたネズミを見逃すと思ってるのか？  
甘いのオ…来世では賢く生きてみる。」

そして、かざした手から高密度の障気が込められた魔玉…ダークスファイアを撃ちだした！

しかし、詠春は止まらない。避けようと思えば避けれる攻撃だが最短ルート…このままでは魔玉に直撃してしまうが、最速で突っ込んだ。

そして魔法が当たる瞬間

「最強防護！（　の盾）」

イズルコの魔法から詠春達を護るためにゼクトが発動させた絶対防壁！

それは、怒りの形相をした恐ろしい悪魔の顔があらわれた魔法の盾。

見事、魔玉を退けると消滅…詠春達はアリアドネーへと疾走して行った。

しかし、突破されたイズルコに怒りは無い。普段なら怒り心頭！必ず命を刈り取るが、ゼクトが見せた障壁への興味が湧いた。

それに自分が行かなくても、相手をする者はアリアドネーにいる。それならば、今すぐにでもその魔法を研究、自分のコレクションに加えたい気持ちがあったのだ！

「学園長君…ヘイトよ。」



貴様は手を出すな。何ならこの場から消えても良い…あの小僧は私の獲物だ！」

「では、御言葉に甘えて私は退散します。

それとイズルコ様…決して油断してはなりません！御武運を。」

そして、イズルコとゼクトの2人による睨み合いが始まった。

周囲に緊張が走る。一触即発…濃厚な闘争の空気が漂い始めた。

しかし、赤き翼最後の1人。アルビレオの発言によってあっさりと霧散された。

「ゼクト、化け物には化け物しか対抗出来ませよ？

ここは1つ、私に任せませんか？絶対に損はさせませんよ〜？」

「…お主がそこまで言うなら任せようかのオ。（まあ、流石にヤバくなったら助けるけどね。）」

「羽虫がツツ！儂の邪魔をする者は何人も許さん！すぐに死ねイ！『ソウルステイル』！！」

発動すれば、相手を必ず死に至らしめる最強クラスの邪法が、アリビレオに襲いかかる！

「アルビレオ！何をしておる！？

早く避けぬか！このままでは死んでしまうぞー！！」

「このギリギリのリスク…たまりませんねえ」。

けど、今回は…アデアット！『イノチノシヘン』」

眩い光がアリビレオを中心に発生、ソウルステイルの赤黒い光と合わさり、目を焼くような凶悪なフラッシュとなる。

これにはゼクト、イズルコの人外2人もたまたまらず目を背けて、間一髪のところ視力を失うという難を逃れた。

913

そして光が収まり、アルビレオがいた場所を2人が目を向けると……

「ああ〜ん？どこだここ？なんでアリアドネーが…ついでにお前はケルベラスの古代人だな？」

「バ、バカな！？何故貴様が、何故貴様がこの場に居るんだ！？ノエルツツ！！！」

なんとノエルが現れたのだ！

流石のイズルコも、何百年も出現しなかったマスターピース級と呼ばれるアーティファクトのオーナーが、存在するなど予想していなかった為にデータを仕入れなかったのである。

そして、驚きのあまり攻めの手を止めてしまった。

その隙を見逃すゼクトでは無い。

「ノエル、良いかい？

君は幻影：10分で消える！

それまでにあの古代人を倒してくれ。僕はアリアドネーの救援に向かう！」

ゼクトは最低限の説明と簡潔な指示を出すと、1人用に開発した水のゲートを発動。アリアドネーの救援に向かってしまった。

「突っ込み所満載だが、古代人を始末出来るなら関係無いな。」

「ほざけ！英雄気取りの化け物に僕は負けん。

ワグナス達は後回し…まずは貴様から殺してくれるわ！」

そしてイズルコの身体から炎が吹き上がり、みるみるうちに巨大化！その火柱はやがて老人型の火精霊に変化した。

「貴様には死あるのみ！定めは変えられんぞ！！」

「うるせえ！アウナスのコンパチ野郎がゴチャゴチャ言ってるじゃねえ！『吹雪』！！」

こうして、アリビレオ（ノエル）対イズルコの戦いが始まった。

「オラオラ！どうした？守ってばかりでオレ様を倒せると思ってるのかあ？

だとしたら1000年早いわあ！」

「くうツツ！！」

術を一切使わないのは予想外だったが、パワータイプ…ベアの読みは正しかった。

しかし、術を使わないハンデを補って余りあるパワーと、四つ脚による脅威的な機動力まで持ち合わせている。

それに奴が得物を振る度に、つむじ風も発生。

ベア達が持つ盾は既に破壊された。

今はパライ（受け流し）でなんとか防いでいるが……

それに、妖精光でスピードを上げたヘッジホッグ達が着実にダメージを与えている。

それでも奴はケロッとしている!!

しかも奴の攻撃は地を砕くパワー、大岩を軽々スライスする切れ味、機動力とスイングスピードが相まってより凶悪な威力を発揮している。

ベアは考える。

このまま守っているのは、スタミナ切れで負ける!ならば、死を覚悟して切り札を切るしかない!

「いいか!アレをやるぞ!」

「『イエス、サー!』!」

『最後まで足掻くか…ならば、オレ様も付き合っただけ!』

チャージをしながらのぶちかまし…そいつを待っていた!

「『逆風の太刀!』!」

ヘッジホッグ達が再び胸部の傷痕にエックス攻撃を仕掛ける。

『ええい！うろちよるとうざったい！消え失せろ！』

「「うおわああああ」」

自身の突撃するパワーと、ヘッジホッグ達のパワーがぶつかり合い、より大きなダメージを与えることに成功した。

しかし、2人は巨大な打槍の一撃により、吹き飛ばされてしまったが、刃の付いた穂先でなく、面だったのが幸이었다。

鎧は衝撃でバラバラに砕かれてしまったが、まだ戦闘は継続出来る！

当然、奴は止まらない。止まる訳が無い！これが最後の攻防になる。ベア達が仕掛ける捨て身の攻撃。

それがもたらす気迫から十分に理解している！！

だからこそ、後続の相手にも怯まず突進した！

「「活殺獣神衝！！」」

そしてライノ達が全身全霊の力を込めて、傷痕と胸部に存在する秘孔を突いた活殺獣神衝の衝撃が身体の内部から破壊。

こうして、鳳天舞の陣が可能にする奥の手の1つ…ダブルエックス攻撃が決まったが…

「ぐおおおお！？」

だがオレは止まらんぞ！邪魔だツツ！！吹き飛ばイ！」

折れた槍ではなく、太い腕で2人とも吹き飛ばされてしまった…

しかし、その働きがもたらした影響は大きい。

何せスピード、パワー共に大きく低下させることが出来たのだから。

「お前が倒ればオレ様の勝ちだ！

さあ大人しく踏み潰されちまえ！！」

強烈な殺気をぶつけながらベアまっしぐらに突進する古代人！

今までの攻防で肩のアーマーは砕け、再三攻撃された胸部の傷からはダバダバ流血…パワー、スピードも減少したとはいえ依然として、一歩一歩踏み出す度に地割れを発生させる。

この攻撃に巻き込まれれば、いくらデュフェンスに定評があるベアといえども、致命傷は避けられない…それほどの威力を持つタツクルが迫る！

「……………」

だが、ベアは槍から大剣に持ち替え、八相の構えを取ったまま微動だにしない。

考えていることはただ一つ…雑念を振り払い、自らを戦の鬼に、この一戦に勝利することのみ！

『お前が何を狙っているのか知らねえが、コイツで終わりだあ！！往生しろオオオオ！！』

そして、無防備なベアに古代人の強烈なぶちかましが炸裂した…だが古代人…カゴークフは違和感に気付く。

自身の持てる力を込めた攻撃は、確実にベアに命中…相手をぶっ飛ばした。

ベアの鎧もバラバラに砕けちり、片腕はあらぬ方向に曲がっているが二本の足でしっかり立ち、未だに大剣を構えてこちらを見据えているのだ！！！！

「これが俺の切り札…コイツを耐えれば貴様の勝ちだ……ッッ」

「……………ワハハハハ、オレ様もさっきの攻撃で力を使い果たした。その切り札打ってみろ！オレは必ず受けきり、弱者であるお前達の



息の根を止めるッ  
さあかかってこいバレン又帝国の武人！」

カゴークフも満身創痍：無事な両手をクロスさせ、弱点である胸部の傷をかばい待ち構える。

対するベアの身体からも気炎が立ち上り、それがみるみるうちに鬼を形作る！

それは燃え盛る炎の中で剣を構えて、敵を睨む鬼神である。

「古代人…これが俺達バレン又帝国重装兵に伝わる最終奥義。全身全霊の力を込めた一撃『不動剣』だッッ！！」

鬼神の力を降ろしたベアは、限界を超えたスピードで接近。

「ウガアアアアッッ！！」

そして目の前まで近づくと飛び上がり、先ほど受けた攻撃の威力も加えた必殺の一撃を振り下ろした！！

ガードのために構えていた、巨大な石柱のような腕も一刀両断、そのまま胸部から下腹部、獣の下半身まで一気に切り裂くことに成功した！！

「……………」

「……………」

辺りはカゴークフの夥しい流血により真っ赤な荒野に…許容量を超えたダメージによって、力尽きたカゴークフが膝から崩れ落ちて横たわっている。

そして変化が解けたカゴークフは人型に…胸から股までバツサリと斬られた姿に戻った。

「俺達は貴様に勝った……  
貴様の望み通りブツ飛ばしてやった。さあ、勝者に言うことがあるんじゃないか？」

「へへ…たまらんね…やっぱバレンヌ帝国はえらい強いなあ。  
オレ達の…最終目的……世界は無に帰すこと。

墓守り人の宮殿に…なん人も入れさせないように動く。  
黄昏の姫御子も奪取する……儀式の邪魔は出来れば、より確実になるとよ…ゲッホゲホ……」

「……………」

吐血しながらも、強者と認めた対戦相手の長であるベアに情報を伝えるカゴークフ。  
ベアも片膝をつき、剣を杖を代わりにしてただただ、じっと見つめて話しを聞く。

「これがオレの知つとる確実な情報だ……」

オレは幸せ者の分身やったな……こぎゃんにも全力は出して戦い、腹一杯満足して負けた……………いやあ、人間はやっぱり凄いなあ……」

「……………」

「はあ、えらい話したいのに力が入らなか……目も霞んできた。こりゃもうダメだ……………こん情報ば活かすも殺すもアンタら次第。世界ば守りたければ、最後まで足掻きな……………」

「最後に名を言ってから逝け……………」

ベアが静かに語り掛ける。

「忘れとつたね……オレの名はカゴークフ。  
これで最後………そうじゃあな………」

そしてカゴークフの身体は息を引き取ると同時に、みるみるうちにチリと化し、荒野を吹き渡る風に浚われて消えていった。

「……カゴークフ……か。」

たった1度……命のやりとりをただただ。それでもベアは考える。  
変な奴だ……組織の一員としては最悪の奴だったな……  
しかし、人の心を確かに持っていた。  
もしも、魔法世界人なら……

「考えても無意味だな………それより、残されたモンスター達を始末するか。」

そう……まだカゴークフに泣きついていたモンスター達は残っており、統率を失った奴らは再びアリアドネーへ侵攻を始めている。  
既に死に体……気力のみで身体を動かそうとしたベアだが、叶わず見

つめることしか出来なかった。

アリアドネーは再び壊滅の危機を迎えるかと思われたが違った。

「神鳴流奥義 斬空閃!!」

どこからか気の刃が乱れ飛んで来て、モンスター達を瞬く間に葬り去った。

「おい！ぼろぼろじゃないか！？意識は有るみたいだが大丈夫か？」

詠春とナギ達が到着したのだ。

「俺よりもすぐ近くに部下達が転がっている。奴らを看てやってくれ……」

「詠春はこのオッサン達を看ていてくれ。俺はラカンのオッサンとアリアドネーを救援して来る……」

この言葉を最後にベアは意識を手放した……

「何故だ…何故僕は貴様を倒すことが出来んのだ……………」

炎の勢いは種火のように弱まり、局長的にブリザードが吹いたように荒れ果てた雪原に倒れ伏すはイズルコ。

それを地面に這いつくばるウジ虫でも見るような冷徹な目で見つめるアルビレオ（ノエル）。

「お前の遊びに付き合ってる暇もつもりも無えんだ。だからさっさと死ねや。」

気を冷気に変換して攻撃する月影の太刀による斬り下ろし、斬り上げ、払い抜けを叩き込みイズルコを倒したノエル。

「またアビスゲートか……モンスターの無限沸きたあうざってえ！」

そして、自慢の剣を突き刺してゲートを崩壊させることが出来たところで、『イノチノシヘン』の効果が消えた。

「ふう……化けただけでこの疲労とは、やはりバレン又帝国の化け物は規格外ですね……」

何はともあれ敵の増援も無くなった。

後は、バレン又帝国兵とアリアドネー騎士団、そして赤き翼のメンバー達の活躍によりモンスター達は全員返り討ちにされて鎮圧。

こうして波乱のアリアドネー防衛戦は終了した。

S a ・ G a 5 7 (後書き)

『逆風の太刀』、『払い抜け』

ほぼ同じ技。ただし逆風の太刀の方が威力がある。

『活殺獣神衝』

ロマサガ2ではお世話になった技。

身体を巡る気を穂先に集めて、相手の秘孔を突き刺して攻撃する高等槍術。

敵の素早さやパワーも下げる効果もあるナイスな技でもある。

七英雄戦にあるとありがたい。

『鳳天舞の陣』

○

○

○

○

○



こんな感じの陣形。

中央の皇帝や仲間に攻撃が集中する代わりに、他の仲間の防御力が大幅に上昇する。攻撃力も若干上昇。

中央の囷役が攻撃を受けたあと、ターンの最後に剣技の不動剣を放つといった戦い方ができる。

カウンターおいしいです。

ちなみにエックス攻撃、ダブルエックス攻撃はロマサガ3のコマンダーモードの陣形技。

『不動剣』

なかなか閃いてくれない剣技の1つで、最後に行動するように確定される。

しかし、敵の攻撃を受ければ受けるほど攻撃力が上がる効果もある。背後から不動明王様が見てる。

『ぶちかまし』

ダンダーグにやられてプレイヤーは死ぬ。

盾で防御することも出来るが、完全にダメージをシャットアウトすることは出来ない。

ジエラールとかだと全滅確定の全体技

単体攻撃ながら防御不能の『ふみつけ』も恐ろしい…

『月影の太刀』

今回ののは、マイナーな単体攻撃バージョン。  
エフェクトは、流星が落ちる月夜を背景に、まさに三日月を思わせる太刀筋で、相手を切り裂く……そんな感じの技。

『ベア様』

バレンヌ帝国重装歩兵。パリィとネタで使われるが、意外にスゴい技です。

ただ、槍のカウンター……風車、体術のカウンターを使わせたほうがイイかも？

という訳でアリアドネー防衛編……完結ッツ！

カゴークフが何バカなことやってんだ？と思われる方がおられるかもしれませんが、人や亜人と同化した影響です。

こんな悪役がいても良いよね？

そしてイズルコさん……アナタはよくある囁ませです。

2人が変化した元ネタが分かる方はいますか？

なお、赤き翼の登場……一度戦争の終わりまで書いて登場しなかった削除書き直し（今ココ）。

ここが彼らと接触出来る最後の機会だったので参戦に、尚且つセラスが憧れるきっかけを作りました。

S a ・ G a 5 8 (前書き)

1ヶ月以上もひっさしぶりにアクセス解析を覗いてみました。  
そしたらどうでしょう！

「ねんがんの 50万PV をてにいれたぞ！」  
有り難いですね〜

こりゃあまた活力が湧いてきましたよ。  
これからも上手いことロマサガ要素を絡めていければと思います！

古代人が率いたモンスター達との、死力を尽くした防衛戦から3日が経った。

ボロんかすにされたアリアドネーだが、臨時の学園長も決まった。それにより、以前の姿を取り戻そうと動き出した学園都市アリアドネー。

友好関係にあるバレンヌや、ヘラス帝国からも少しでも助けに成ればと多くの資材が提供された。

資材には外壁を直す建材は当然として、他にも食料品や薬品、負傷した兵士や作業員に代わって働く人員も含まれた。

そして、アリアドネーからは開発した独自の技術や魔法をある程度…協力の見返りとして渡されるように決まった。

ヘラスはどうだか知らないが、バレンヌ帝国は無償提供という太っ腹な対応でいた。しかし、ベア達バレンヌ帝国兵がした抜群の働きに恩を感じたアリアドネーからの要望でありがたく頂戴することに決まった。

そして俺やエヴァ…そしてアrikaはアリアドネーに行くように、皇帝からの勅命が下された。

全世界指名手配のテロリストとして扱われている為あまり大っぴらには出来ないが、アリアドネーにら紅き翼がアリアドネーに滞在している。

長年生きているクセに情けない話だが、俺達には建築関連の能力どころか何かを作り出す能力は欠片もない。

だから、用事が有るとすれば紅き翼関連しかないのだが、アリカには復興作業という名目で連れ出している。

そして、武装商船団所属の船で俺と補給部隊の魔戦車を積んで海路を行き、陸に着いてからはステップをガンガン飛ばして行く。

流石にいつ何時メガロメセンブリアが仕掛けてくるか分からないため、戦艦を動員することは出来なかった。

ちなみに運転は俺、助手席にはエヴァ、後部座席にアリカ王女とチャチャゼロという車内構成なのだが……

「今日はヒラガの所で新しい魔法人形について勉強したかったのに……」

「オレはオヤジが持つてる魔法球で、しこたま武器を振り回したかったのに。」

「アリアドネーなんて行ってもつまんねーぜ。」

エヴァが流れる景色を眺めながら不満をボソツと呟けば、その従者であるチャチャゼロもすかさずこぼす。  
バレンヌを発つて以来、2人はこんな感じである。

「俺なんか今日は久しぶりに道場で……………今更こんな事話しても仕方ないわな。」

はあ〜〜、サツサと片付けて、バレンヌの我が家に帰りたい。」

これは嘘偽り無い本音だ。何が悲しくて休み無しでアリアドネーまでぶっ通しで運転せにゃならんのかと……………  
ついつい俺もこぼしてしまった。

「3人ともこれからアリアドネー復興という大仕事だというのにその態度は何じゃ……  
お主達は、自身がバレンヌ帝国の看板を背負ってるという自覚は無いのか!？」

「……………」

「黙っておらぬで何か言わんか!!」

この調子ではアリアドネーに着いても、十二分に働くことは出来ぬぞー!」

なんていうかアリカ王女が弛んだ空気を出す度にちよくちよく突っかかってくる。

アリカは次期王女になるため幼い時から施されてきた教育で責任感、正義感やら、滅私奉公レベルまで高められたあまねく全ての人に何か役に立ちたいという鋼の精神の持ち主。

正直立派だと思っよ？

俺や初代ボクオーンの記憶を受け継いでいるエヴァといえど、そこまで自分を犠牲にする行動は出来ない…

重ねて言うが、冗談抜きで立派だと思っよ？マジで。

けど、その本質はまだまだ世界のう上辺すら知らない小娘……

若者の特権である『勢い』で皆を導くエネルギーある程度の無理を跳ね退ける情熱は持っている。

しかし穿った言い方をするなら、トップとしての経験があまりにも不足していることの証明でもある。

実際：裏の裏まで考える思考回路

相手の不利益になるうとも意志を貫く冷酷なまでの気概

万難を排すための根回しや情報の仕入れ方のやり方すらも満足に知らない。



普段は王族然りといったお澄ましさんとして突っ張っているが……  
一度メツキが剥がれれば、家族思いで未熟な年相応の女の子。

それに直情型の人間……そんな訳で俺達がダラダラしてる理由に気が付かないし、気付けるわけもない。

ぶっちゃけ、俺達にはキャットからの情報が入ってきているから知っている。

紅き翼がアリアドネー防衛戦に介入……かなりの活躍をしたこと。  
俺が懸念していた厄介事も纏めて持ってきたことも……

アリカ王女には何があっても伝わらないように細心の注意を払っていたが……

ホント、世の中ってうまく回ってるようで回ってないよな……

「へへへ……オヤジイ、それにマスター、王女サンがああ言ってるんだしやる気出そつぜ?」

「……………」

「そうだな。お望み通り私はやる気を出すぞ〜」

「エヴァンジェリン殿！！私が求めるのはそんなダラダラした調子では無い！！  
シヤキツとハツラツとした……………」

「ケケケケ！！こりやからかい甲斐があってイイゼ。」

おいおい、まただよ…  
せっかく隣に座っているエヴァと後ろのアリカが外の景色を眺めていたから静かだったのに、暇を持て余したチャチャゼロが焚き付けてくれおった……

「オラ、チャチャゼロ！！  
あんま調子乗ってるぞ、データが詰まってる頭だけ残してバラしちまうぞ！！」

「す、すまねえオヤジ…ほんの出来心なんだ。だから許してくれよ  
オ〜」

この調子のいい魔法人形は……器用に正座までして謝るんなら、最初からちよっかい出すなよ……  
おかげで、車内がカオスだろうが!!

「もういい…2人を黙らせる。アリアドネーに着いたら面倒事が待ってんだから、余分なエネルギー使わせんなよな!  
バカヤロー、コノヤローめ。」

そんなこんなで俺が運転する魔戦車と、バレンヌから託された資材を載せた補給部隊の魔戦車は、諸々の面倒事が待っているアリアドネーへ向かった。

「ハイハイ着きました。アリアドネーに到着しましたよっと。  
ほれ降りろ、降りろー」

騒ぐだけ騒いで途中から暇を持て余して寝ていた薄情者……エヴァ達をたたき起こす。もうね、チャチャゼロ以外お前らは子供か？子供なのかと……

「ううう…寝違えたのか首が痛い」  
「チャチャゼロよ！どうして主人である私を助けなかつたんだ！？」

「いや、知らねえよ。」

「アリカだつて首傾けながら歩いてんだから、マスターも我慢すれば？」

「ぐぬぬぬぬ……」

「へっへっへっへ」

「ぴーちくぱーちく姦しいのは一旦放つとくとしてだ………  
いつかブラックを貰いに来た時に訪れたアリアドネー。  
その時は学園なんてレベルじゃない程に、洗練された建築物だった。」

「それが激戦により外壁から中身もボロボロに…昔の美しい姿から、  
一気に廃墟レベルにまで破壊されてしまっている。  
ベッドから立ち上がり、自由に動き回れる生き残り達は、必死に瓦礫の撤去や栄養をつけてもらうための炊き出し……各自で考え、それぞれを持ち場で戦っている。」

「ノエル殿…私は王城、そしてバレンヌ帝国に保護されてからも軟禁状態で、実際の戦地については知らなかった。これが戦の爪跡か……コレでマシな方とは酷すぎる。」

「そうだな。」

これじゃ、瓦礫の撤去作業だけでも一苦勞つてとこだな。復興がどれだけ大変か分かっただろ？」

アリカもアリアドネーの惨状を生で見ても、何か感じるモノが有ったのだろう。

いつもの調子ならすぐさま行動し、瓦礫の山と格闘している。それがただ茫然と眺めている。

もしかしたら、ウエスペルティアにいた頃は、報告や映像で現地の様子を理解した気になっていたのかも知れない。

だが実際は、現場に赴きその場の空気を体感しなければ理解できない事ばかりだ。

俺が発前に聞いた話では、被害は建物ばかりで、死人は驚くほど少なかった……敵戦力から想定したら、奇跡的な状態だったらしい。

それでも、世間知らずの女王サンにショックを与えるには十二分な威力がこの場にはある。

しかし、いつまでも此処にいても仕方がない。

「アリカ女王。ショックを受けてる所悪いが、俺達が喚ばれたのは単に復興作業のためだけじゃない。この先、アリアドネーの一室に俺達が訪れるのを待ってる人間がいる。」

「私を待ってる者だと？そんな相手が私にはいない筈だが…何かの間違いではないか？」

「そんな素っ頓狂な顔してんじゃねえよ。待ち人についてはお楽しみだが、会うまではいつものシャキッとした王女サンでいる。」

「むうううう…まあ良い。」

王族がしみつたれた顔では待ち人にも失礼だからな。」

そう言っつていつものシャンとした王女然りというアリカに戻る。

やはりこの少女はこうでなくてはいけない。

支えになるモノが乏しいこの少女は一度沈んだらどこまでも沈んでいってしまうだろうからな…

もつばちばちエヴァ達も呼ぶかな。

「オ〜イ！！エヴァ、チャチャゼロ！瓦礫どかしてたいなら俺達だけで先行くぞ〜！」

「ああん、ノエル待つてくれ〜」  
チャチャゼロ！お前は瓦礫を運びやすいように切り刻んで片付けて、アリアドネー復興の役に立ってる。これはマスターからの命令だからな！」

「ええええ！？オレが逆らえないこと知ってて言うなんて…鬼！悪魔、吸血鬼〜！！！」

泣き言を言うチャチャゼロを振り切り、此方にサッサと向かって来るエヴァ…  
残されたチャチャゼロがアリアドネーの方々の役に立つどころか、手当たり次第にゴミを増やして邪魔にならないかが俺は心配でたまらない……………

紅き翼に会った時に暴走するリスクを考えればマシかも知れないが…こればかりはチャチャゼロの働きに期待するしかない。

そんな時なんていうか、その…ダイナマイトのボディでありながら、人の良さそうな雰囲気もちあわせる女の亜人が1人俺達の方に近寄って来た。

「どうもお初にお目にかかります。臨時ですがアリアドネーの学園長に就任したアリアです。」

アリアさんというのか。

それにしても…別に必要はないのだが、ちょっと聞いてみようか。

「もしかして出るタイミング図ってましたか？」

「あれ？やっぱり分かつちやいましたか？」

「なんだかお隣の女性と真剣な顔で話していたんで、ちょっと待ってました。」

「「「……………」」」

『てへぺろ』してあっさり認めるとは…意外におちゃめサンのようだ。

「それでは案内致しますね？」

学園長アリアさんの先導に従い、待ち人がいる部屋に移動する。

その間も忙しくなく（せわしくなく）行き交う学園生、血の染み込んだ箇所があり戦闘の痕を表同様にまざまざと感じさせる。



するとアリカが彼女に話しかけた。

「アリア殿…アリアドネーの方々は遅いですね。  
メガロメセンブリアの艦隊と古代人の襲撃からも…自分達の居場所  
は何があるかと守り抜いて、今も復興に全力で動いている。」

「……そうですね。」

この学園のモットーは『学ぶ意思さえあれば身分の差は勿論のこと、  
犯罪者でさえも受け入れる』です。  
実際、子供でありながらそれぞれの事情により行き場が無い者や、  
スネに傷持つものも少なくありません……家族同然の仲間や住処を  
守るのにみんな必死なんですよ。」

「家族ですか……私にも妹と父上がいました。」

しかし父上は私自身の手にかけてしまいました……そして姉である  
にも関わらず、私は妹に不幸の全てを押しつけて向き合おうとしま  
せんでした。

生き別れですから会える望みはありません。しかし妹は私を家族と認  
めてくれるでしょうか……」

アリカは昔を思い出しながらなのだろう…時たま言葉に詰まりなが  
ら話していた。

自身もマクギルに幽閉されていたとはいえ、アスナが味わった苦し

みとは比べ物にならないと思っている…  
そして、バレンヌ帝国でのうのうと保護されているという点から、  
アリカに有るのは罪悪感と自責の念だった。

アリカ王女でなく人間・アリカの告白にアリアも真摯に応える。

「難しいですね　ただ、アリカ王女に妹様を想う心がある限り、  
いつでもやり直せると思いますよ？」

アリアは歩みを止めず穏やかに、しっかりとした口調でアリカに語  
り掛ける。

そして、ある部屋の扉の前でアリアは立ち止まった。

945

「ノエル様、エヴァ様、アリカ王女…此方のお部屋へどうぞ。  
あなた方がお越しになるのをずっと待っていた方々が中におられま  
す。」

それでは案内役の私は復興作業に戻りますね？」

「アリア殿、ありがとうございました。」

「いえいえ…それではごゆるりと。」

アリアは最後にふんわりとした柔らかな笑顔を見せて立ち去ってい

った。

「アリカ、お前がお前のタイミングで扉を開けるんだ。俺とエヴァはお前の後に続く。分かったな？」

「……………」

この扉の先に待ち人がいる。  
アリカはドアノブに手を掛け、ゆっくりと扉を開いた。

S a ・ G a 5 9 (前書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

今回のお話しは長いです。

うん…なんだか詰め込み過ぎた感も有りますが、アリカ、ナギ、そして登場人物について色々と考えながら読んでいただけたら幸いです。

扉を抜けた先：控えの間にて俺達を待っていたのは紅き翼であるゼクトとナギだった。

しかし、ジャック・ラカンや青山詠春、あの嫌らしそうなアルビレオなど他の奴らがこの場にはいない。まあ、あまり人数揃えられても鬱陶しいからどうでもいいが…

ここまでは概ね予想通りだったが……部屋の片隅に設置された椅子にゆったりと腰掛け、俺と目があった瞬間からニコニコと人の良さそうな笑みを向ける者がいた。

そいつは街中を歩けば百人が百人とも振り向くだる整った顔、身に纏っているのは何処にでもある外套とパツと見：ただの兄ちゃん。しかし、其処に座っているだけで尋常でない存在感を発しており、俺とエヴァも良く知っている相手……

「久しぶりだなノエル。今日の語らいを楽しみにしていたぞ。」

何故かライフメーカーがいた。

正直これには俺とエヴァも動揺した。何故お前が居るのかと…

だが、この先の話で戦争の行方を左右するかもしれない情報が飛び出す可能性が一気に高まった。

そんなライフメーカーだが今は完全なリラックスモード。きつとアリカがいるから話す気が無いのだろう。

それに、アリカも言いたいことが溜まっているかも知れないから、しばらくは好きなようにさせてやるう。

「サウザンドマスター！？そして傍らに居るのはフィリウス・ゼクトか。

お主等が待ち人というのは理解したが……他の者達はおらぬな。よもや連合軍に倒されたのか！？それに部屋の隅にいる優男は何者なのだ？詳しい説明せい！」

ビツとライフメーカーを指差し、勢いよくサウザンドマスターに詰め寄るアリカ。

熟練兵士でも震え上がるだろうあの存在感にビビらないのは、肝っ玉が太いのか…それとも危機察知能力が低い系の怖いモノ無しなのかは謎だ。

何にしてもアリカには驚かされた。

「まあまあ、落ち着けよ姫サン。

ラカンのオツサンは無駄に力があるから撤去作業に詠春は斬岩剣で瓦礫の解体、アルは得意の重力制御でアリアドネーの力になってる。それとこの人は、俺の師匠の師匠さんだ。

「か、無敵の紅き翼が連合にやられる訳無いだろ？

いくら姫サンでも冗談きついで……」

赤毛のガキ…本名ナギ・スプリングフィールドは、やれやれなんて具合に肩を竦ませてアリカの問いに答えた。何も不自然な仕草でもないし、質問したのもアリカだから俺には関係無い。しかし、ちよつと馬鹿そうなガキにこんな態度にイラツとしてしまった。年を取つて昔に比べて大分穏やかになつたと思つていたが…：うーん、まだまだ俺も短気だと思ひ知らされたな。

「そうか…私の早とちりがお主の誇りを貶めたやも知れぬ。素直に謝らせて欲しい。すまぬな……」

そして頭を下げるアリカ…

「！？」

（おいおい、初対面で俺達に下郎なんて言つてたあの姫サンが頭下げて謝つてるぜ師匠。）

（ホントじゃな…あのアリカ王女が頭を下げておる。）

おお！ナギだけでなくゼクトも驚いてるな？

あのタカビーだったアリカが素直に謝る…俺とエヴァ、2人の匠が

躰た結果だ！

匠の技はこれだけじゃあない。

これからも、もっと驚いていいんだぞ？

「どうしたのだ？

サウザンドマスターともあろう男がさつきからこそこそと内緒話を  
して。何か後ろ暗いことでも有るのか？」

「それより姫サンこそ隣にいる奴らを知ってんのか！？」

そいつ等はグレートブリッジで、俺達に不意打ちを仕掛けてきた卑  
怯者とその仲間だぜ！？」

あれ？そんなこと言っちゃうんだ？。

そっちがその気なら、こちらも考えがある。

すぐさまエヴァにアイ・コンタクトを送ったら、ウィンクで返して  
くれた。

「ノエルウウ、こいつ何を言うのかと思えば今更不意打ちは卑怯ら  
しいぞ？」

ナイスアシストだぜエヴァ…

こっぴつ阿吽の呼吸で動ける相棒がいると、動きやすいな。  
さて、仕上げに掛かるうか。



「ホント、今更だよなエヴァさんや…  
戦争つつかルール無用の命の食い合いに、卑怯もクソも無いだろ  
うになあ？」

つつか、お前の言う正々堂々って何だ？真っ正面から馬鹿正直に突  
撃することか？

ガキが考えることは短絡的でいけないなあ……。テメエの都合と物差  
しで世の中測ってんじゃねえッツ！！  
しかも連合側にいたにも関わらず、手加減してやったのに酷い言い  
ようだと思わないか？」

師匠とした人間…ゼクトと毎日いるんだ。

グレートブリッジで邂逅したチンピラ同然の状態から、どれだけ成  
長したか試してやろうとあからさまな挑発をした。

さて…どんな反応を返してくれるかな？

この様子ではあまりいい結果は得られないが、自重はしてほしい…  
そんな淡い期待を抱いたが……

「テメエ！自分のことは棚に上げて好き放題言いやがってッツ！  
今すぐブツ飛ばしてやらあ！！」

そして言うが早いか、俺をぶん殴ろうとした瞬動により超加速で一  
気に距離を詰めてきたチンピラ……  
期待通りというか期待外れの結果にガツカリしながらも、素早く力

ウンターの構えをした俺だったがその必要は無かった。

何故ならば…

「止めぬか!!」

ノエル殿は形はどうあれ連合の檻から救い出し、今も世話をしてくれている私の恩人だ！お主も妹を助け出してもらった恩人だ。

それでも私の目の前で、そのようなマネは許さんぞツツ!!」なんとアリカも瞬動を使うと両手を広げて割り込み、ガキが怯んだ瞬間から一氣にまくし立てたのだ。

「うう…姫サンに言われたら何にも出来ねえだろ……」

ガキはアリカの剣幕で、塩をかけられたナメクジのように萎えた。そして、そのまま振り上げた拳からへなへなと力を抜き、最後に俺を睨み付けて元いた位置に帰って行った。

その時、チラツとゼクトの方を見れば拳をグツと握りしめて暴走しないように抑えつけ、怒鳴り散らさないように苦笑して耐えている。

ううん、直属の上司の…分かりやすくすれば社長同然のライフメーカーの前で、全く気を遣わない部下にゼクトも苦勞しているようだ。

そしてライフメーカーは言わずもがな。冷や汗をかいてチラチラとライフメーカーの様子を伺いながら苦しむゼクトを、ニヤニヤと怒っているのか許しているのかどちらにも解釈できるスマイルを浮かべてガン見している。

「（なあなあノエル。昔から思っていたがライフメーカーって…）」

「（ああ…あの野郎、この状況を楽しんでやがる！！  
ライフメーカーは間違い無くDSだ！）」

有能だが、寿命が縮むような悪戯好きな上司なんて…俺は嫌だなあ。  
そんな事をつらつらと考えている間にも2人の会話は進んでいる。

954

「ところで姫サン、別に嫌って訳じゃねえが『サウザンドマスター』  
なんて堅っ苦しい名前で何回も呼ばねえでくれ。  
知り合いから何回も言われると、こっ…なんつつかむず痒くなっ  
てくんだ。」

だから気軽にナギって呼んでくれ！」

顔を逸らしながらも急にファーストネームで呼べたと？  
この流れはもしかや？

「そうか、ではこれからはそう呼ばせてもらおうか。  
代わりにお主も私のことは姫サンなどと言わずにアリカと呼ぶんだ。  
分かったなナギ？」

「お、おう！よろしく頼むぜア、アリカ。」

「うむ！！」

ナギ・スプリングフィールド…思えば二次成長真っ盛りのガキだ。  
貴様も色を知る歳かッッ！！

だが、甘いな

軽くウインクしながらアリカは応えたが、その様子は普段通りでナギとは大違い。緊張感の欠片もない。

ガキはその仕草にドギマギしながらも喜んでいるようだが、ぶつちやけアリカに脈はナイ…友達のラインと立っただけだ。

残念！！

「お、おいノエル。サウザンドマスターとアリカを眺めると思ってたら、急にニマニマしてどうしたんだ？

冗談抜きで気持ち悪いぞ……」

ちよー！？ホントに冗談抜きの顔で言ってくれたな？このロリめ！  
こうなればお前も仲間に取り込んでやる。

「エヴァ、固いこと言うなって…（それよりサウザンドマスターの様子とアリカを見比べてみるよ。）」

あの2人からは見えないように注意して、さり気なく指を指してエヴァにも促す。

「（ん……ほほう…なるほど　コレは面白いな！いやはや前言撤回だ。」

アリカから何か話し掛けられる度に赤くなるなど…クツクツ、こりゃ初なガキその物だな。」

「（だろ？しばらくの間、自由に泳がせておこうぜ。その方が面白くなりそうだしな？）」

やはり長年一緒に暮らしているだけあってエヴァとは通じ合つと思つてた。それにしてもイイ顔で眺めてるじゃないか。流石は誇りある悪（笑）を自称しているだけある。

再びガキンちよの青臭い片思いと、全く気付かない2人の掛け合いを眺めようとした矢先…

「（何やら楽しそうではないか…私一枚囓ませてもらおうか。）」

「うおお！？びっくりさせるな！急に耳元で話し掛けてくるんじゃないよ。気持ち悪いなあ……」

いつの間にかライフメーカーが近寄って来て、話し掛けて来やがった。

ツとに、無駄に高い能力の無駄使いしやがって……このおちゃめサンめ！

なんかゼクトがぼっちになってるけど……別に放つといてもいいな。

さて、これで落ち着いてサウザンドマスター（笑）とアリカの掛け合いを観ることが出来るな。

・  
・  
・  
・

ウエスペルティアのあの姫サンと会う…それを大師匠から知らされた俺は師匠に頼み込んでチャンスを掴んだ。

しっかし……久しぶりに会った姫サンはスゲエぜ！

何がスゲエって物腰とか雰囲気若干だが柔らかくなっていた。俺もあの時よりは大人になった自負はあった。けど、ラカンのオッサンがこぼす強者のオーラや貫禄はまだ欠片も出てこねえ。

姫サンは家族と離れ離れになって、終いには国まで崩壊して苦しい状況にいるに違いない。

それでも潰れるどころか、初めて会った時よりもシヤンと芯が通ったイイ女になった。それだけじゃなくなれたかが傭兵である俺に、自分からワビをいれる気配りまで出来るな美人……

なんつうかアレだ…人生で初めてだが、惚れちまったぜ！

だがよオ……

「さっきから黙っているがどうしたのだ？」

「顔色も優れないが…もしや戦闘で受けたの傷でも有るのか!？」

「ちょ、ちょちょ、ちょっと待ってくれ姫サン!？急に顔を近づけねえでくれよ。」

「…か、怪我なんかして無いから落ち着けて!」

「この戯けが…私のことは名前で呼べと伝えた筈だが?」

「ワリイな……アリカ。」

「よしよし、それで良い!!」

これからナギと私は身分など関係無く、対等な関係でいたいからな。

「

「……………おう。」

「うむうむ!!」

「……………」

正直、意識し始めたら前みてえにペラペラ喋れ無くなっちまった。

話しのネタが尽きたワケじゃ無い。むしろ話してえ事は山ほどある。

傭兵として世界を回るうちに見つけた大自然が作り出した絶景。

王族には無縁であろう仲間と街に入ったり、野宿の時に味わった即席のワイルドな飯。

それに、俺達が保護した黄昏の姫御子…姫子ちゃんについても、これでもかって程にネタは有る……………

姫子ちゃんの話になると、どんな小さな事にもすごい喜んでくれた。

その時、顔をほころばせながら、熱心に俺の話しを聞いていたのが印象深かった……………

だけど、恥ずかしいことに、その後の会話が続かねえんだ…



そうやって、俺がいつまでもうだうだしてたからだろう…俺達の様子を見かねた大師匠が話しを切り出した。

「アリカ王女。キミはバレンヌ帝国に保護されてからも妹サン…アスナ姫の行方を知ろうと、方法はどうかあれ手を尽くした。これに間違いは無いね？」

その口調に問い詰めるようなキツさは何処にもない。それどころか、ただ事実を述べてるだけ…淡々とした調子なのだが、室内の空気がそれまでの談笑ムードからガラツと変わる。

そして、俺と妹サンは大師匠が発する妙な力に引きつけられた。

「ライフメーカー殿か…確かにあまりに拙い方法でだがアスナの情報を求めた。」

それも、幾ら追い詰められていたとはいえ、ノエル殿を始めとした一家には多大な迷惑をかけてな…」

「……………」

流石の俺も大師匠に噛みつくようなマネはしないし、出来ない。残念だけど妹サンとの話しは終了か…これは悔いが残るぜ。

「アリカ。もしもお前が捜し求めたアスナの情報を…それどころか彼女に会うことが出きるとすればどうするのだ？」

「（ノエル、ノエル。  
ライフメーカーはあんなことを言ってるが、本当に叶えると思うか？）」

「（そりゃライフメーカーも鬼じゃ無い。ここまで期待させたんだから叶えるだろうよ。  
ライフメーカーの顔を見てみるよ…さっきまでのS顔じゃない。純粹に問い掛けてる顔だ。  
エヴァもそう感じないか？）」

「（まあ、そう見えない事も無い。  
ただの悪戯好きなDSだと思ってたが、意外にイイ奴だな！）」

そりゃ幾ら何でもライフメーカーに失礼だろ…  
今は静かに見守ってアリカの気持ちを打ち明けさせてやるか。

「な！？それは本当ですか！？  
もしアスナに会わせてもらえるなら、どんなことでもしよう！だから私を一目だけでもいい……会わせてくれませんか？」

アリカはあの日のようになりふり構わず、縋りつくような勢いで頼みこんでいる。

これで嘘だったら、鬼どころか邪神の類としか言いようが無いな。そして室内を尋常でない緊張感が包み込み、全員が固唾を飲んでラIFメーカーの返答を待っている。

一分、それとも十分だろうか……そう錯覚するほどの空気の中で、ラIFメーカーは静かに口を開いた。

「よろしい……お前の気持ちはよく分かった。」

「それでは……」

「そうだ……今からお前が渴望していたたった1人の肉親であるアスナと対面させてやろう。」

「ありがとうございます！

本当にありがとうございます！！

この恩はいつか必ず返させてもらいます！」

待望の妹ととうとう会える…そう理解したら、今まで張り詰めていた緊張の糸が切れてしまったのだろう。  
瞳から涙が零れ落ちるがそれも拭わず、ライフメーカーに土下座をしながら伝えていた。

「ノエル…これは良い話だな。

私は、両親に会いたくても決して会うことは叶わない。守るべき存在でもあった…しかし、苦勞ばかりかけて、大昔に天に帰ったよ。少しばかり羨ましいとすら感じるな。」

そう言いながら俺の腕をぽんぽんと触れながら、眩しそうにアリカを見つめていた。

なんというかアレだな……

「なあ、エヴァ。

俺とお前は肉親じゃねえが家族だ。

それに俺がヤバくなったら、エヴァは助けてくれるだろ？

こう見えて俺の首を狙ってる奴らは結構いるんだぜ？」

ちよつと撫でやすい位置にある頭に手を置き、わしわしと撫で回しながらビシッとやってやる。

「フフ…化け物みたいに強い癖に何を……まあ良い。

私がお前を守ってやるから、お前は勝手に何処かへ行くな！いいな。

」

「ウィ〜ス！それくらいのお願いなんてお安い御用だ。お、アリカがライフメーカーが作り出したゲートを潜り抜けたな！」

さほど広くない…小学校の教室ほどの部屋中にゲートから漏れる光が差し込む。そして、ライフメーカーはアリカが行ったのを確認すると、自身も潜り抜けて消えた。

後に残るのは紅き翼の2人と、俺とエヴァ…バレンヌ帝国の2人。

「それでは一段落着いたところで、大事な話しをしようかの。」

「そうだな。アリカがいないからこそ出来る話しもある。

それで何から話すんだ？やはり、ベアが手に入れた古代人の最終目的地…墓守人の宮殿か？

それとも、魔法世界の暗黒面…メガロメセンブリアへの対応と処理か？」

話す題材は、普段から頭を使わない俺でもこれだけ思いつくんだ。策謀に優れたボクオーンを継承するエヴァは、どれだけ先を行ってるんだらう？

「実は、その2つでは無いのじゃ。  
バレンヌ帝国の領海に魔の海域が存在するじゃろ?」

「あゝ、あそこか。」

言われて思い出すのは、ただ1つ。

そこはヘラスに向かう近道だ。しかし、海路・空路関係無く船に被害が出るため、屈強な武装商船団も好き好んで通らない難所と呼ばれる海域。

そこはモーベルム…南ロンギットに存在する氷海と呼ばれる場所だ。だが俺の知る限り、あそこは600年前から難所として有名だった。にも関わらずゼクトは切り出した……これには、すつとろい俺も『ピコーン』と来た。

「その魔の海域にの……最後の古代人が潜んでいる可能性が高い。ノエルが言う通りメガロメセンブリア、墓守人の宮殿の対応も確かに大事じゃが、バレンヌ帝国が落とされれば戦争が長引く。決戦に向けてまずは地固めが肝要じゃ!」

「なあ師匠、海つつつと海ん中だろ?

幾ら俺達でも水中で戦うのは無理だぜ!? 一体どんな手を使って、陸に引きずり出すんだ?」

まただな…このガキがいると話しのテンポ、リズムがいちいち狂わ

される。

紅き翼には常識人はいないのか？

「グレートブリッジ戦での会話でワシはノエル殿の性格の一端も知った。そしてバレンヌ帝国の皇帝でも無視できない力を持った人間……ノエル殿に頼み込むのじゃ！」

話しがややこしくなるから、少し大人しくしておれ!!」

「師匠、そんな目くじら立てなくてもいいじゃねえか！」

これはあれだな。ああ言えばこう言っつて奴だな。

せっかくゼクトが優しく言ってるのに、如何にも『オレは悪く無エ!!』という気を隠しもしないふてぶてしさ。

その態度からは、反省の欠片も見えない…前々から思っていたが、コイツはどんな教育・躾をされてきたんだ？

戦争に参加するのを看過するくらいだから、ろくでもない親や大人しかいなかった…これくらいは容易に想像出来るが。

そして、これまで我慢してきたゼクトが持つ堪忍袋の緒がキレた。

「ナギッツ!! 貴様はいつもそうだ。行き当たりばったりで計画性は勿論、品性の欠片も無い！」

せっかくワシがお前のためを考えて指導しても、魔法の扱いばかり上達して頭はバカのまま!!

貴様が敵の挑発に乗って、仲間が要らぬ戦闘に巻き込まれたのは数

知れず…今日もノエルだから事なきを得たが、いつまでも見え透いた挑発に引つ掛かる！

もうこれ以上貴様に場を引つ掻き回されるのは懲り懲りなんだ…」

「……………」

「（普段から穏やかなゼクトに、ここまで感情をぶつけさせる…あのナギというガキは、ある意味で大物だな。ノエルもそう思わないか？）」

ホント、エヴァは小悪魔ガールだ。

ゼクトがキレるなんて金輪際見られないかも知れない…そう考えてニヤニヤしながら、見つめている。

なんか長生きした影響か、性格悪くなってるないか？

そしてゼクト…最後は、ジジイキャラまで消え去るほど、怒り一色に染まってるんだ。

如何に紅き翼…というより、あのガキをコントロールすることに苦労しているかが伺える。

「（いやいや、これは洒落にならんぞ。

戦争が始まって9ヶ月…ゼクトはアイツと行動して来たんだ。きつと今までずっと耐えてきたに違いない…正直、その気力には感嘆の念しか出んよ。俺やエヴァだったらどうしてると思つか考えてみるよ。）」



「（……………もしゼクトが言ったことが真なら…………一週間で、始末するな。方法は想像に任せるがな？）」

エヴァにひそひそと話しをしている間も、ゼクトは溜め続けていた鬱憤を吐き続けている。

このままでは話しが進まないが、ゼクトがスッキリするまで待つとしよう。

ライフメーカー殿が作り出した、眩し過ぎて目を開けることすら叶わない光のゲート。

後から追いついてきた彼に手を引かれながら、一步一步確実に進んでいく。

ゲートに入る前は、たった1人の妹と会うことが出来る喜び、あの人形のような生気の無い状態から少しは回復している筈…その姿はどうなのだろうと、ドキドキと気分は高揚していたが今は違う。

あの子にあんな役目を押しつけた人間の1人に、間違いなく私は入っている。

会うことを拒絶されるのではないか？

それだけならば、私は一向に構わない。

しかしだ…私が来たことを知って、道具扱いされた日々を思い出して苦しめるだけかも知れない。最悪…悪夢のような思い出によって、人格を崩壊させてしまうのではないか！？

そんなネガティブな考えがぐるぐると頭を巡り、今では会うことに恐れすら抱いている有り様だ。

我ながら情けない……

「アリカ、もうすぐゲートを抜ける。待望の妹姐と会えるが、心の準備はいいか？」

そうか……もうすぐ、アスナと会えるのか……

「……………大丈夫だ。問題ない！  
ライフメーカー殿、よろしく頼む！」

「……………」

そしてゲートを抜けた先……眩しすぎる空間に居たために、しばらく目が慣れなかった。

そして、認識出来るようになった時に心臓が止まるほど驚かされた。

「ア、アスナか？」

「……………」

地べたに座り込んで、こちらをぼんやりと見つめているアスナが居た。

「アスナ…私ができるか？アリカだ。」

頼む…

どうか私を受け入れて欲しい。

どうか…どうか、私の心がアスナに届いて欲しい。

その一心で、祈るようにアスナへ投げかけた。

「……………アリカ……………姉上？」

「うん！そうだよ、姉上だ！」

「姉上……………ごめんなさい」

「な！？どうして謝る、謝るべきは私なんだ！」

本来なら私は、何をしてでも守るべきだったんだ……」

「うん……私にも姉上を守る力はあった。

だけど守れなかった……だから、ごめんなさい」

「……アスナ、おいで。

ほら、仲直りしよう。今からもう一度……全部をやり直そう。

大丈夫だよ……私とアスナならどんなことが起きても、絶対に離れ離れにならないからね？」

「……姉上……姉上……姉上」

「うん、うんうん……大丈夫だよ……私はココにいるよ。

私が抱きしめているから、安心して力を抜いていいんだよ……」

「……うん、姉上……ありがとう。」

「違うよ……ありがとうを言うのは私だ。

（お前が居てくれたから、あの牢獄に繋がれている間……どんな辱めを受けようと耐えることが出来た。

お前が生きていてくれたから、私は自分で命を捨てるのを踏み止めることが出来た。）

アスナ……本当にありがとう……」

「ねえ……このまま、ちょっとだけ眠ってもいい？何だか、急に眠たくなつてきちゃったの……」

「いいよ。ほら、姉さんの腕の中なら安心だから、ゆっくりとお休みなさい……アスナ。」

私は涙を拭いながら、胸の中に抱きつき、安らかな寝息を立て始めた愛しい妹……アスナの頭を優しく撫でながら、自分に欠けていたピースが『カチリ』と嵌るのを実感した。

「姉妹水入らずを壊すようで悪いが、アリカ……お前には一働きしてもらおう。よもや先の覚悟忘れたとは言わぬよな？」

「分かっています。ライフメーカー殿から受けた恩に報いるためなら、どんな事も受け入れる覚悟は有ります。」

この言葉に嘘偽りは無い。

今日会うまでのアスナも大切な存在だった。だが、今は命に代えても守りたい掛け替えの無い存在になった。

この子を守るなら、地獄だろうと喜んで身を捧げよう！

「よろしい。それでは……」

「ツツ!?!?.....分かりました。」

その役目……必ず果たして見せましょう。」

ただ、紅き翼やノエル殿達に恩を返せないこと。

そして、アスナを置き去りにしてしまうことが無念だ……

S a ・ G a 5 9 (後書き)

どんな感想でも良いので貰えたらエネルギーになります。  
ちなみに、誤字脱字は有りましたか？  
もし有ったなら、その場所をご報告頂けたら嬉しいです。

ゼクトが溜めに溜めた鬱憤を吐き出しきって、やっと落ち着いた頃にアリカとライフメーカーの2人も丁度帰って来た。アリカを小さくしたようなチビを連れて、だ。

「アリカ、その子が噂のアスナだな…」

「ん……」

「待望の妹さんに会えて氣イ抜けたのか？  
ぼんやりしてるが大丈夫か？」

「…大丈夫。全然平気。」

今まで支えにしてきた、『アスナに会う』という大きな目標…まあ、世の中には達成感と共に力尽きる者や、腑抜けてしまう者は珍しくない。

アリカは王家の自負から気の強い女を演じて隙を消しているが、元々はただの女の子だ。  
そうなるのも無理は無い。

明日になって調子を取り戻してくればそれでいいのだから、余韻



に浸らせてやるとしよう。

それよりも氷海に潜んでいるらしい古代人だな。

ライフメーカーも揃ったことだし、いい加減に話しを進めよう。

「ライフメーカー。ゼクトから聞かせてもらった。実際に攻める時には、やはり『アレ』を使うんだな？」

「そうだ。バレンヌ帝国が呼称する氷海：あそこは海を漂う氷山地帯であるが故に、砕氷船でしか進めない。

しかし、それでは古代人の襲撃によって徒に被害を増やすだけで、とてもではないが賢い選択とは言えない。

それとシゲンには事前に話しを通してある。万が一にも無いとは思うが、皇帝が渋ったら説得して欲しい。」

「分かった。俺も出来ることをしよう。

それでだ…いつ攻め込むんだ？墓守人の宮殿を押さえる、古代人の命令で動くメガロメセンブリア…この2つが問題だ。

今の情勢ならば、隠し玉が有るかもしれないが連合は虫の息。

その後に墓守人の宮殿を片付けてから、最後に狩るのがベストだと思うが？」

「いや、墓守人の宮殿は放置しても問題無い。所詮、あの遺跡は巨大なゲートに過ぎん。

それよりも、古代人は旧世界で高みの見物と洒落込んでいたが、最

近になって立て続けに分身が倒されたことで動揺している。  
ここで更なる動揺を誘うために、メガロメセンブリア・氷海の古代人は同時進行で進めたい。」

ライフメーカーの言ってることに何らおかしい事はない。  
だが、俺の理想は向こうの世界に出向いて、抹殺することだった。  
旧世界がどうなるうと関係ないから、全力で戦えるからだ。

「なあ お前がこの世界に引きずり込んで、古代人達を始末しよう  
と考えているのは分かった。

だが、決戦は熾烈を極める…当然、被害も甚大になるが、本当にそれでいいんだな？」

もしライフメーカーが、どこぞの後は野となれ山となれという神ならぶん殴ってでも性根を入れ替えてやる。

「それについては良く考えた上で解決策も用意してある。

だからノエル達七英雄は、メガロメセンブリアを片付けてくれ。

今回の古代人については確認も兼ねて、私自ら出向いて始末する。」

いつになく真剣な眼差しで俺を見つめるライフメーカー。

神だけあって、そこら辺に抜かりは無いようだ……仲間も引き連れて行くだろうから大丈夫だろう。

ならば、もう俺からは何も言つまい。

「悪かったな、いろいろ突っかかって。それにしても、お前もなかなか粋な奴だな。アリカとアスナを引き合わせてくれたんだ。俺からも礼を言わせてもらおうよ。今日はありがとう。」

「構わない…私は私で得たモノは有った。話したいことも粗方片づいた。ゼクトの様子も見れた。私の目的は果たされたから失礼させてもらおうか…さらばだ。」

今日のアイツは、いつものようなおちゃらけた雰囲気ではなく、どちらかというライフメーカーという役を演じていたように感じた。しかしその去り際に、悪戯小僧のような笑みを俺に向けると光のゲートを通ってサッサと帰ってしまった。

そして残されたのは3 on 3の6人。最初に口を開いたのはゼクトだった。

「ナギ。ワシはノエル殿と話しを詰めてから行く。お前は先に詠春達と合流して、アリアドネーの役に立つてくるのじゃ。」

「はあ！？何言っただ師匠！俺だって…」反論は許さん！分かったか？』分かったよ…オイ！ノエルとか言っただな。今度は負けねえからな！」

今日を限りにナギへの対応を変えるのだろうか。

厳しい口調で屁理屈をシャットアウトして、現場に追い出した。

しかし、ナギもナギだ。

まだ俺に敵対心を持っているなんて……

ここまで貫けば、バカも才能かも知れないな。

勢い良く扉を開き、ダッシュで向かうガキの後ろ姿を見てふと思った……そういえば、チャチャゼロは紅き翼の奴らを見て暴走してないのか、と…

エヴァのマスター命令で縛られているから大丈夫だとは思うが、正直不安になってきた。

こりゃあ、俺達も悠長にしていないで、ベア達重装歩兵などの重傷者に回復魔法を施して退散した方が賢明か？

そう考えていた時、エヴァが話しかけてきた。

「今度は負けないと宣言していたが、その時が来たらどうするんだノエル？

なんなら私が『マリオット』でエビ反りにして、背中から真っ二つにしてやっても良いぞ？」

「弱いものイジメ、ダメ絶対！それに、あんなガキに其処までの価値は無いぞ。」

まあ、『マリオット』で複雑骨折くらいなら良いんじゃないか？」

ぶつちやけ、従来型の魔法でも胸を撃ち抜かれようが、達磨にされようが回復することが可能！

Sa・Ga魔法でも『エリクサー』を使えば、場合にもよるが首が胴体に繋がっており、尚且つ心臓が動いていれば復活出来る。

だから、道場でも廃人にならないように注意すれば、ある程度の無理は利く。

逆に、連合は半死人も無理矢理再生させて送り込んでるんだらう…全く非道い世の中だ。

連合の兵士の中にどれだけ人間のまま…化け物に改造されてない者がいるかは分からないが、早くメガロメセンブリアを潰してやろう。

それが兵士、一般人問わずこの戦争が産み出した被害者達へ、俺達が出来るせめてもの手向けだ。

「そんじゃまエヴァ。俺達も負傷者に回復魔法をかけて、バレンヌに帰ろうぜ。」

メガロ攻めには相応の準備が必要だからな。」

「本当だなあ。それにしてもメガロメセンブリアか…永きに渡って私を苦しめてくれたあの国を、完膚無きまでに、大義名分の下に攻撃出来るなんてなあ。」

私は今から楽しみで堪らない！！」

「ちょっと待ってくれノエル、エヴァ。  
さっきはすまなかったね…どうか許して欲しい。」

あ、ライフメーカーの影で考え込んでいたら、すっかり空気になっ  
てたゼクトのことを忘れてた。

仕方ないよな…あんまり役に立ってなかったしさ…

だけど、このままではあまりにもゼクトが不憫過ぎる。

ここは一丁、俺だけでも労ってやるかね

「別にいいさ。あのガキには何の期待も抱いてない…逆に、今まで  
お前はよく頑張ったと心から思っている。」

真面目なのは知っているが、もっと体を労れ。」

「ノエル…キミだけだよ。」

そんな優しい言葉をかけてくれる人間はね。」

俺の言葉にジーンとしているゼクト。

またイイ事言っちゃまったな…

こりゃあ、ゼクトの中で俺の株が上がってるに違いない！

へっへっへっへっ！

今度こそ気持ちよく行けると思っていたが…

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ノエル。  
最後に1つ聞かせてくれないか？」

「おいおいゼクト…これ以上何が有るんだよ！」

「キミは長年、道場で指導してきたプロだ！  
情けないことだが、ナギのような少年はどうやって接すれば良いんだ？

頼む！教えてくれないか？」

「はあ！？んな事知らねえよ。

強いて言うなら二十歳までのガキは、なんだかんだ言って仕来たりや年長者からの指示が要るんだ。分かるか？」

「ふむふむ…」

「つべこべ言ってくるようなら、ぶん殴るなりして速攻で黙らせる。それでも暴走するようなら……殺せ！！

どうせ部外者の旧世界人だ。

いつそ一思いにやっちまえ。分かったな？

そんじゃま、俺達もやる事あるから…おゝい、アリカも行くぞ。じやあな！」

こうしてゼクトへの義理も適当にだが果たした。これ以上ゼクトに

余計な質問をされる前にサツサと部屋を出た。  
ちなみに、弟子を殺すような真似はしない。次の日から、ちいゝゝ  
つとばかりハードなメニューにするだけだ。  
そうでもなければ、いつまでも我が儘放題好き放題の性根を叩き直  
せ無いからな。

「ゼクトはあの赤毛を始末すると思うか？」

部屋を出てすぐにエヴァが俺に話し掛けてきた。  
その様は、壮大なサプライズを仕掛けて実際に成功するかを聞いて  
くる…そんなチェシャ猫のような笑みを浮かべながらだ。

「あゝ、分かんねーなあ。

けど、どっちに転んでも得だろ？」

更正しないなら鉄砲玉に、更正したなら現状維持。

どちらにしても、今の奴は力があるから天狗になってるワンマンプ  
レイヤーに変わりない。

協調性のある無能より扱いにくい奴が消えるんだからなあ。

いやゝ、我ながらナイスアイデアだわな！」

「なんだなんだノエルウウ。

適当に言うフリして計算してたなあ？」

なかなかやるじゃないか。

真祖の吸血鬼たる私にはそれくらいの腹芸は出来なければ……

まあ、そんなお前も好きだぞ。このこのお！」



おとつとつと、このロリータめ…肘でアバラの辺りを突っついて来たお  
った!

さつき家族だとハッキリ伝えたからなのか良く分からんが、頬を朱  
に染めながら無意識にルンルステップするくらいエヴァは上機嫌  
だ。

俺もイイ機会だから、こつ恥ずかしいから伝えられなかった事を口  
に出そう。

「俺もお前の腹黒い所とか、意外に子供っぽいお茶目な所、そのク  
セ頭が切れるギャップも全部ひっくるめて好きだぜ？」

ほれ、お返しだ!このこのお!」

「ノエル……」

「エヴァ……」

「へっへっへっへっへ!」

そんな2人の三步後ろをぽてぽてとゆったりと付いて来ている少女

……

若干、放心状態から回復したのかとノエル達は感じる少女…【アリ  
カ】は、その様子を眺めながらポツリと呟いた。

「……………何だか2人とも気持ち悪い……………  
こんな2人で本当に大丈夫なの？」

そんな少女の儂い吹きは決して届くことなく、アリアドネーの空気に溶け込んで消えていった。

その後は予定通り…ノエルがベア達やアリアドネーの人間も一纏めにして、重体、重傷と思わしき者から順番に回復魔法を施した。

そして念の為に急には動かず、1日は様子を見るように伝えると、解体作業中だったチャチャゼロを拾った。

その時、『斬り合いてえ奴がウジャウジャいて我慢するのが大変だったぜ』

「へえ、チャチャゼロもやりやあ出来るじゃないか。

家に帰ったら、魔法球の中で好きなだけ相手してやるからな。」

最後に補給部隊の長に『明日から働きたいと言つ負傷者が出るが、自重させてくれ』と、一言かけてから魔戦車で帰った。

なお、ノエル達が回復魔法をかけて回っている頃……

「……よし、今日からは僕もバシバシやってくぞ！」

悪ガキとはいえ一応仲間だ。全力で更正させてやるから覚悟しておけよ。ナギ・スプリングフィールド！」

アスナと一緒に残されたゼクトは、ノエルの魔心一杯のアドバイスを真に受けて不肖の弟子を更正すると固く決心する。

その傍らで……

「（いつものゼクトはキャラを作ってたのか？

それより、意外にノエルは過激な人間だったんだな）」

と、いつもより『シャン』っとしながらも誤解を深める少女…【アスナ】がゼクトを見つめていた。

S a ・ G a 6 0 (後書き)

コレにてアリカ、アスナと再会する。

ゼクト、鬱憤を晴らす。ナギへの対応を吹っ切れる

この苦労人達へのご褒美はオシマイです。

ナギには人間的に成長してもらったために、ビシバシしました。

次からは戦争最後編…一気に戦争集結へと進めようと思います。

### S a ・ G a 番外編 3

紅き翼、そしてバレンヌ帝国に正義アリとメガロメセンブリーナ連合に潜入するダンディー。

潜入中は主に、その動向と人を人とも思わない悪魔の技術、その産物のサンプルデータを入手して送信：戦況をより有利に進めるための大仕事を行っている。

そんな俺の名はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ：元・メガロメセンブリアの腕利きスパイにして、現在は同じような者が集まり結成したギユウ軍『悠久の風』に身を置くハードボイルドダンディー。

そんなハードな毎日を送る中で、ふとした時俺は思い返す…

バレンヌ帝国に潜入、まるで子供のように弄ばれたことを。その結果は、自身の命を見逃してもらい、戦争の核心を突くファイルまでを渡された…：自身の実績、能力にかまけていた自分の目を醒ましてくれたあの日を。

子供が考えたような仕組みでありながら、悪魔のようなセキュリティレベルを誇るあのバレンヌの研究所のに比べれば、メガロメセンブリーナ連合のあらゆる軍事施設、研究所への潜入も一度は死んだ身だと思えば怖くは無かった。

何より過程はどうあれ、俺はバレンヌ帝国から恩を受けた：俺の流儀からして受けた恩は返す。

その意味合いも込めて柄にもなく、必死になったな。

そのうち一匹狼の俺にも行動を共にする仲間が出来た。

龍山山脈でバレンヌ帝国が極秘に進めている北方開拓団に所属する

『トーマス』という若者だ。

彼は槍術、そして朱雀術というバレンヌ固有スキルを得意とする誠実な人間だった。

それだけに、魑魅魍魎の類が暗躍するような場所に潜入する俺に付いて来れるか？

ボロを出してしまわないかコンビを組んだ当初は不安だったが、全ては杞憂だった。

『フェザーシール』という術で姿と気配を消し去った上に付かず離れずで共に動き、魔法が使えない俺をサポートしてくれた。

今では頼れる相棒だ。

今回のミッションは、連合加盟国の1つ…俺達のような業界人からは、公に出来ない技術なら世界トップレベルと噂されているラクーンという国の研究所に潜入したのだ。

研究所内部のセキュリティは以前の俺なら苦労したであろうレベ

ルだったが、難無く回避。

変装キットを使って敵を欺き、時には後ろから羽交い締めにして昏睡状態にしてやる場面もあった。

それでも全てが順調に動き、薄暗い通路を抜けた先に研究員でも一握りしか存在を知らない……俺達の目的にしているブツがある地下最深部のラボまで辿り着いたのだが……

「ガトウ、コレは何処からどう見ても人間、亜人だよな……」

相棒もこれには呆然としている。

まあ、俺だって同じような有り様だから何も言わないが……

「ああ……コイツはまたいつになくブツ飛んでるぜ。

こりゃ、いよいよ連合もキチガイ極まってきたやがるな。」

最深部の広大なラボには、部屋一杯に並ぶ試験管のような培養プールが有った。

おまけに中身は人間そっくり……というより人間そのモノがぶかぶか浮かんてる。

今までにも、嫌悪感を抱かせて相手の士気を下げる目的とした化け物を培養していた場所を潰した事はある。

武器商人のカルテットに潜入した時には、人を化け物に変える魔生物兵器を取り扱ってる奴等もいた。

それでも今回は別だ：ここまで化け物共が人間の形をしており、膨大な量を揃えているケースは存在しなかった。

「トーマス、この研究成果の使い道が分かるか？」

「分かるぜ……ここまで人と見分けが付かない化け物の使い道なんて一つしか無いだろ？」

まさか、ダッチワイフやダッチハズバントの為に造り出した訳無いだろうしな……」

そうだ：全てが人間そっくりならば、今までのように戦場でしか使い道が無かった旧型とは違う。

難民キャンプに紛れ込ませるだけで後は放っておけば、両帝国を内部から破壊するような芸当も可能だろう。

正攻法しか使えなかった旧型　そして搦め手にも使えるこの新型の危険度は比べ物にならない！

「トーマス、このファイルを見てみるよ！

開発コンセプトは『見分けが付かない完全なモンスター』だよ。」

「それだけじゃないな……頭に電極ブツ刺して、リモコン操作まで



出来るようだ。」

この悪魔の技術は、絶対にこの世から抹消しねえと流石にヤバすぎる！！

「よし 休憩は終わりにして、今日の仕上げに入るぜ相棒。俺は全てのデータをぶっ壊すから、トーマスは試験管の中の奴等を片づけてろ。」

「分かった。」

相棒は槍を構えてすぐさま中身を串刺しにして始末し始めた。さて、俺もプロフェッショナルに恥じない仕事をしようか。

「これで83体目エ！オラア！！」

全く、連合の悪趣味は理解できないな……。わざわざこ丁寧に老若男女、亜人タイプまで揃えてくれている。

意識が有るとは考えられ無いが、彼等が楽になるように一思いに頭部を穿つ。

その度に、試験管から流れ出したグリーンの培養液が部屋中に溢れ出す。

幸い、ただの栄養素を含んだ水らしい…訳の解らん溶液に違いないが、毒液で無いだけマシだ。

しかし、今のカプセルを破壊してやっと片付いたと思っただが、また新たに扉が現れた。

「おいおい、勘弁してくれよ…」

こういう時の扉の奥には、決まってヤバいのが控えてるんだから。

『フェザーシール』これでよし 開けオラア！！」

ガギヤ！ギギギギ      ガタッ

縦に一閃、その後は無理矢理こじ開けて踏み込んだ先には案の定カプセルが…その中には少年が納まっていた。

しかし問題はその異様な試験管だ。

前の部屋に設置されていた物でも立派だったが、コレは明らかに雰囲気が違う。

部屋中からケーブルが試験管に伸びて、少年にブツ刺さっている。

そして培養液も血のようなレッド…極めつけは土台部分には『アビス』なんて大層な名前まで彫られている。

まあ、赤い奴等は三倍強いなんて何処ぞの大佐がよく言ってたが、俺のやる事には変わりはない。

ただ、粛々と職務をやり抜くだけだ。

「うわ、こりゃ酷えことしてやがるぜ……」

俺はトーマスと別れてから、要所要所に爆弾を設置、そしてデータが詰まっているパソコンに電子精霊をぶち込んで自分があらかじめ用意した端末にデータを移動、そして内部からキレイさっぱり破壊してくれている。

その過程で材料に使った人間とモンスター達、そして加工法が載っていた。

大抵が優秀な奴隷闘士に野生の龍種やら強力な生物を掛け合わせたモノだが、『アビス』とやらは次元が違う。

コイツの材料はかなりのメジャー生物……どうやって入手したのか知らないが、龍樹を始めとしたヘラスの守護聖獣。

そいつ等の能力を掛け合わせて1から培養して造り出したスペシャルモンスターらしい。

当然、生半可な傷では仕留めきれない再生能力、他のシリーズの追随を許さない身体能力から指揮官型として試作されたようだな。

まあ、救いは調整がデリケートだからか試験管内での刷り込みは行われていない。

逆に、解放してから刷り込みをさせるとファイルには記されている…かなりの学習能力を持っていることが窺える…

PIPIPI!PIPIPI!

『全データ、バックアップの抹消を確認しました。』

「流石バレン又製の電子精霊だな…今日も仕事が早いな。」

最後にパソコンに無音拳を叩き込んでバラバラに破壊してやったから、試験管の破壊に向かったトーマスと合流しようとしたその時だった…

『パキッ、バキバキバキ……ゴボ、ゴボポポ』

部屋の奥から、イヤゝな音が響いてきた…それも都合良く2つだな

…

相棒が悪いワケじゃないが、流石にコイツ等と戦うことになったら  
多少は恨むぜ？

・  
・  
・  
・

『パキツ、バキバキバキ……ゴボ、ゴポポポ』

「クソツ！！勝手に出てこようとするんじゃない！」

槍を構えて抹消しようとした丁度その時、いきなり培養液が排出さ  
れた。

しかもどういふ原理か、空気に触れると酸性になるようだ……地面  
に這わせてあるケーブル、至る所に設置されている計器が溶かされ  
火花を上げ、培養液は此方へ迫ってくる。

最早一刻の猶予も無い！

握り締めてた金剛石の槍に全身全霊の力を込めて『アビス』に投擲。

槍は分厚いガラスを貫通…そして試験管の中に納められている少年の頭を粉碎した筈だった。

「マジかよ」

「……………」

突然の超反応を發揮したソイツは槍の前に腕を翳すと、さも簡単に掴み取ると試験管内に捨てやがった！！

当然、コイツを縛る物は既に無い。

強酸性の溶液でベタベタになっている床もへっちゃららしい………その年相応の歩幅でゆっくりと近付いて来る。

どうする！？槍は手元に無い。潜入に向いている朱雀術に切り換えだが、自分の適性は蒼龍術………しかし、どちらも威力に欠ける。とてもじゃないがこの化け物を殺しきるのは不可能。

体術なんてこの部屋の有り様だ。満足に動き回ることも出来ないから不可能！

逃亡などは以ての外だ！背中を見せれば狩られる…仕方無くジリジリと後退しているが………

ぺちゅ、ぺちゅ、ぺちゅ　ぺちゅ… たっ、たっ、たっ、たっ…

「……………」

とうとう『アビス』は俺の目の前　手を伸ばせば触れられる位置にまで接近して来た。

今はジッと見上げながら、俺のことを観察…そして、部屋の中をキョロキョロ見回して自身の置かれた状況を把握し始めている。

「（万事休す　ここまでか…）」

こうなれば、片方だけでも生還出来るようにしなければならない。此方に気が向いてない一瞬を見計らい、ガトウに通信を入れた。

『（ガトウ　俺はもうダメだ。お前は今すぐ撤回しろ。）

そして安全圏まで退避したら速攻で爆弾を作動させるんだ。』

『（…バカ野郎が　腑抜けてんじゃ無えよ。）

今からそっちに向かうから、無い頭引っ掻き回してでも何か考える

！…！』

仕方無え こうなりや破れかぶれだ。  
ガトウが来るまでどうにかして時間を稼いでやらあ！

「お、おい そんなにキョロキョロしてないで話してもしないか？」

「???ニク？」

「バ、バカ野郎！肉じゃねえ！  
話したよ！は な し！！！」

ウオオー！？こつち向きやがった！！  
しかも頭ン中がスツカラカンなのか、俺に興味深々じゃないか！？  
それともあれか？目と目が合う瞬間、エサだと気付いたのか？洒落  
にならん。

「ほら、何か喋ってみる。

何ならカプセルにGO・homeして良いんだぞ？」

「あう…ああし、あなし…はなし??うう?はなし、話し 話し!  
!うう~~~~!!」



「 あ、こりゃダメだ。」

純真無垢な振りしてどんなバイオ兵器よりも有害な人型が両手を広げて特攻してくる。

ヤバイ…

ヤバすぎる…俺もすぐに逃げ出したが…

「ちよ、ちよ!? 待てよ!

溶液の付いた身体で抱きついてくるな、飛び付いて来るなアアア!」

「ううう! うううう!! デュワツチ!」

「あつ!? ダメだから、ホント駄目だから!

もうハードボイルドとからしくくない事はしないから助けて…ってア  
「—————!!!」

「大丈夫かトーマス!? つて、なんだこりゃああああ!!」

「なあ、いつまでむくれてんだよトーマス…何はともあれ、全ての元凶だったラクーン研究所は木っ端微塵に消えたんだ。お前も切り換えが大事だぜ？」

「ガトウさんは苦労しないからそんな事言えるんですよ。未婚でこぶ付きになったなんて、どうやってエレンになんて言えば良いんだ……」

「ZZZZZ、ZZZZZ、ZZZZZ…」

「はあ………どんなにシュミレーションしても撲殺・ENDしか見えない。」

鬱だ…いつそのまま死にたい。」

結局、俺が行った時には全てが手遅れだった。

アビスの封印は解かれていて、抵抗するトーマスを馬乗りには押しさえ込んだキャツキャはしゃいでいた……

仕方がないから、俺がアビスにトーマスは親だと刷り込んで事なきを得た。

今は、最寄りの街に隠しておいた車で移動中だが、トーマスの自由という尊い犠牲は忘れてはならない。

「ところでそのアビスはどうするんだ？」

何なら悠久の風の本部へ報告に行った時、ついでにコイツを引き取っってもらおうか？」

一応、ありきたりな選択肢の1つとしてトーマスに提示してみる。さつきからあーでもない、こーでもないと頭を抱えているトーマスだが、彼の性分を考えれば次に言うセリフも容易に想像できる……まあ、この質問は通過儀礼みたいなモノだ。

それから暫くトーマスはうんうん唸っていたが、やがて運転する俺を見つめながら答えてくれた。

「……………最初は僕もその気でいましたよ。」

けど実際は、無駄に力が強くて無駄に学習能力も高い、エネルギーが有り余ってるだけの無害なチビだから……もう暫くは様子見です。」

俺の予想通りの回答だ。何より気負いもなく、ただ自然体のままにトーマスが答えたのには驚いたな……肝っ玉が座ってきたじゃねえか！嬉しいぜ？相棒。

「そう言うと思っていた。

いつまでも『アビス』じゃカッコ悪いから、コイツの新しい名前も考えておいた。

その名も…『高畑・T・タカミチ』だ！

コレでアビスと連想させる奴がいたら、ソイツも化け物だな。」

「案外まともっていうか、アビスの『ア』の字も無いのは良いですね。」

「だろ？我ながら冴え渡るネーミングセンスだ！

今なら才能の壁を突破して、新世界までイケるかも知れないな。」

「ところで、真ん中の『T』の意味は何ですか？」

またうんうんと唸りながらあーでもない、こーでもないと考え始めたトーマス。

俺にくつついて活動してきたから、頭も切れるようになったと思うが…まだまだ経験が足りないな。

「何だ何だ、そんな簡単なことも分からないのか相棒？この『T』が名前のミソなんだぜ。」

「勿体ぶらずに早く教えて下さいよ。いい加減、怒りますよ？」

「興味津々なのは分かるが、短気は損気だぜ？  
この『T』の意味はな……」

「……………（ゴクリ）」

「トーマスのTだ！ハッハッハッハッハ！！  
いや、即興とはいえ最高だなっと。」

「……………鬱だ、不幸だ このまま荒野で果ててしまいたい。」

また相棒が塞ぎ込んだじまったが、時間が解決してくれるわな。

俺の名はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーク。

頼れる相棒と共に人知れず戦うただの捜査官さ。

## S a ・ G a 番外編 3 (後書き)

『フェザーシール』

ロマサガ3の朱雀術

効果はロマサガ2の霧隠れと同じように、敵のターゲットから消える。

ロマサガ3の武器には割と便利な固有技が揃っている物が多いから、なんだかんだで使わない魔法。

酷いときは、初心者に気付かれる事すら無くクリアされる。

『串刺し』

ロマサガ2の槍術

敵のカエル戦士やらが使うと痛いのが、自分が使うと大したこと無いガツカリ技の1つ。

ベアなどカウンターを閃いて欲しい時に何故か現れるのは物欲センサーの仕業に違いないと作者は思う。

『トーマス』

ロマサガ3：主人公の1人

開拓団の若者：適当に宿星を選んでも魔力が高く、使い勝手のいい奴。

因みに、得意な属性は蒼龍でも朱雀でも無く玄武術。

水の術法が大好きな男。

取りあえず槍をブン回してモンスターを蹴散らしている……作者のイメージはそんな人。

そんなワケで言ったそばからコレだよ……

まあ、タカミチのTが気になって仕方なかったのが悪い。

そして久しぶりのガトウさん……貴方は捜査官というより、潜入工作員をしていたと思うんだ。

だって、敢えて魔法を使わずに無音拳なんて如何にも某スネークが喜びそうな技を使うしね！

ノリで首締め柔道をさせちゃったし、トーマスも最後には雷電みたいななんちゃってハードボイルドキャラになりました。

そしてタカミチ……作者の都合でキメラになってもらいましたが、彼には後々、イヤと言っただけで活躍してもらいたいなあ……

それでは感想待ってます……！！

S a ・ G a 6 1 (前書き)

うーん……なかなか上手く書けない。

安西先生……面白いお話しを執筆出来るようになりたいです……



「それでは皆さんはこれから私達はメガロメセンブリアへ向かいま  
す。」

知つての通り世界を懸けた決戦の1つです！

バレンヌの最高戦力であるあの方も、今日は出し惜しみをしません。

」

一番艦に乗り込んだシゲンからの通信が全艦へ入る。

「ノエル、此処まで至るまで大分掛かったな…

今日で世界を我が物顔で蹂躪してきたメガロメセンブリアも終わる。

」

チャチャゼロの調子を確認し終わったエヴァが感慨深げに呟いた。

「ああ、バレンヌ建国以前、ウエスペルタティアから落ち延びる時  
にボクオーンと交わした誓い…それが今果たされる。」

「そして古代人を始末すればやっと世直しか？

ボクオーンの記憶にあるスタート地点に立てるな。」

ボクオーンだけじゃない…

ダンダーグ、ワグナス、クジンシーを始めとした七英雄、そして初代村長のバリーの記憶を受け継ぐ皇帝も今日という日が来るのを待っていた。

ただ、戦争でしか奴らを滅ぼせなかったのは残念だ……

『この戦いが終われば後は古代人だけです。』

辛い戦いになるのは分かりますが、どうかもう暫くバレンヌのために力をお貸し下さい！！お願いします。』

『『『『ウオオオオオオオ！！』』』』

これから行うのはあらゆるモノの壊滅戦…刃向かう敵は俺達七英雄が消し去る。

敵の中はほとんどが化け物かも知れない。

だが妻帯者、帰りを待つ恋人を持つ人間も確実にいるだろう。

俺としては、終戦後にバレンヌへ恨みを持つ遺族が現れないかとも複雑である…

「なあノエル、それ程思い詰めるな…」

メガロメセンブリアは近い未来、誰かが潰さなければならなかったんだ。腑抜けていると足下掬われるぞ？」

「へへ…なら俺はエヴァに助けてもらっせ。

頼むぞエヴァ！！」

「うむ！私に任せる。ワケの解らんモンスターや戦艦など力チ力チに凍り付かせてやるからな。」

「ソイツは頼もしい。

これからもヨロシクな、エヴァー！」

「それと家に帰ったらキ、キティと呼べよ／＼／＼」

ほほう…恥じらいながらのおねだりか。

エヴァさんアンタ可愛いさというか魅力が上がったな…

『それでは各艦長サン、離陸を…メガロメセンブリアへと最短ルートで向かって下さい！…！』

ゴウン、ゴウン、ゴウンゴウン、ゴウンゴウンゴウン…

ゆっくりと戦艦は離陸、そして世界のダニである元老院がいるメガロメセンブリアへと発進した。

「そうか…」

「はい……軍が応戦しましたが全て壊滅。立ち向かった艦隊はいずれも、バレンヌ帝国固有の魔法で跡形もなく消し飛ばされているようです。」

そして今も大陸の東側からはヘラスが、西からはバレンヌの両帝国が恐ろしい速度で向かってきています。」

連合において人間のままでいる最後の將軍は穏やかな表情で部下から報告を受けている。

アリアドネーでノエル、ライフメーカー達が果たした密会から今日で丁度一週間。

色々と調整するために必要な一週間だった。

その空白期間に無為な犠牲を無くすために、紅き翼の元締めである悠久の風が動いた。

そこに所属する商人に扮する工作員に、行く先々で『両帝国が本腰を入れて侵攻する』と情報を流させた。

そして、戦争から逃げ出したい一般市民を保護：悠久の風の思惑通り、連合のあらゆる街から人が消えた。

当然、軍部もこの動きは察知していたが序盤の猛攻により人員、物資…慢性的な息切れを起こしている。

現在は、国家総動員と称して非戦闘員も改造兵士として送り込むことで、やっと戦力を維持している状態。

だから分かっていても対策など出来る筈も無かつたし、戦争の行く末も子供でも理解している以上生きる権利がある彼等を引き留めることは出来なかつたから黙認した。

そして悠久の風の働きにより、ノエル達も手加減せず全力で連合艦隊を粉砕。

普通なら考えられない速度でメガロメセンブリアに迫っている。

守るべき家族、恋人、それぞれの大切なものが安全圏に逃れた…それならば兵士も脱走してしまっても構わなかつた。

現に各国の防衛軍からは相次いで失踪者が出ているが残る者も数多くいる。

彼等が戦う理由はただの意地…皆、物資が不足しているために遙か昔に型落ちした戦艦、武装で立ち向かっている。

しかし、運命は変えられない。

戦況は予想以上に酷く、返すどころか持ちこたえる事すら不可能。地力の差を思い知らされ、彼等は瞬く間に撃破されていく………

「はあ……」

理解はしていたがあまりに酷いな。

生き馬の目を抜く…戦争だから理解できるが、バレンヌ帝国もなかなかえげつない事をするものだ。

さてさて、どうしたものかのオ………」

老将は顎をさすりながら部下の背後…部屋の入り口を見つめながらのんびりと考える。

「……………」

「何だ？この現状が気に入らないようだな…」

「はい、私は不服であります。

第一にこの戦争には続けるだけの大義は有りません。

第二に元老院の評議長からも戦争終結のために動けと密命を受けています。」

「ふむふむ……ならば、貴様お得意の白兵戦で敵艦を片付けるか？  
ジャン＝リュック・リカードよ。」

「はい…まだ人間である仲間が踏ん張っている。」

彼等に報いるためならこの命惜しくはありませんッ」

「報いる……………か。」

「將軍!!」

どうか今こそこの国を守るため御英断下さい!!」

「……………ファッファッファッファ。」

「大将ッッ

笑ってる場合ではありません!  
事態は一刻を争うのです!!」

「いやいや、すまんな。  
儂が衰えたのか、それともお前が成長したのか…考えたら可笑しく  
なってな。

それにしても貴様から英断なんて言葉が聞けるなど、年月が流れる  
のは早いのお……………」

「……………」

「そうじゃ…バレンヌ帝国東の要…ヤウダを治めていたアト王を知つておるか？」

「それがどうしたのです…」

「まあ、そんなカツカするでない。

アト王は黎明期以前の要塞国家だったアヴァロンに包囲されるとすぐさま降参した事から暗愚とされておるが…果たして本当に暗愚かの？

自らの意地のため勝てぬ戦に臨み無意味な犠牲を出すより、平穩が約束される敗北を素早く選択する…

こう考えればアト王もバカに出来んわい。

実際、その後は殿様では無くなったが太守に任命されて相変わらずヤウダで穩やかに暮らし、民からも慕われたという逸話もある。」

「……………」

「ふむ、お喋りが過ぎたかの？

ジャン・リユック・リカード！！

貴様には命を捨ててもらうが今では無いぞ？

貴様に国際戦略艦隊旗艦スヴァンフヴィートの艦長を命ずる。

非常時故に略式も略式だが、そこら辺は気にするな。

儂が乗る予定だった新型艦だ。

既にクルーとその他乗組員は揃えてあるから、今すぐオスティア総



督府に飛べい！！

いつか誰もが生を謳歌する世が来る筈じゃ。

貴様はそこでクルーや仲間と共に再起を図れ。」

「大将…それはまさか!？」

オステイア総督府・・・メガロメセンブリアに司令部が移された棄てられた総督府である。

以前バレンヌ帝国により陥落され、現在はバレンヌ帝国から派遣された軍師モウトクが統治。中立国として存在する元ウエスペルタテイア王国の首都。

そこに向かえと命じた大将はいつも通りの穏やか面持ちだったが、ジャンには全てを覚悟した戦士のように感じた。

「まあ、意地っ張りでガンコなのはジジイの専売特許じゃ。お前みたいな若僧はもっとよぼよぼになってからにしとけ！そんなワケで前置きが長かったが、儂からの最後の指令だ。分かってくれるな？ジャンよ…。」

「大将……。」

「バカたれが…娑婆っ気が抜けない小僧のようなしみったれた泣き顔を晒すな！」

それよりこれから死地に赴く英雄に、何か気の利いた言葉の1つでも送らんか！！」

「…では最後まで指揮ばかりで楽をせず、久しぶりに戦場の厳しさを思い知って下さい！！」

「ファツファツファ！皮肉を言うなど…やれば出来るじゃないか。では行け…逃げるが勝ちじゃからな？」

茶目つ気たつぷりの笑いを浮かべて階級の違いなんぞ関係無いと、將軍は人生最後の敬礼をジャンに送る。

「御武運をツツ！！」

「うむ。」

最後の最後にジャンは敬礼を返し、踵を返すと振り返ること無く走り戦艦に乗り込むとメガロメセンブリアから離脱。

將軍の命令に従い部下を諭すと戦場を大回りしてバレンヌ帝国艦隊を回避、全速力でオステイアへと向かった。

「さあて、久しぶりの現場だがこれぐらい分が悪くて丁度良い…では、一花咲かせるか!！」

そして、將軍は前々から何が起きても使えるように整備させておいた戦闘機に命を入れた。

この後、東から軍を蹴散らし到着したバレンヌ帝国艦隊の前に一機の戦闘機が飛来。卓越した技術で砲撃を避け、ピンポイントバリアで受け流して艦隊の合間を縫うように飛び、これでもかと翻弄しながら奮戦した。

幸いにも『ミサイルガード』によりダメージを負うことなく撃墜したが、その峻烈な姿は敵であるバレンヌ帝国をして天晴れな戦い振りだったと言わしめた。

そして七英雄が作戦通り降下、元老院を制圧して議員を捕縛したことによりメガロメセンブリア決戦は幕を降ろした。

S a ・ G a 6 1 (後書き)

『アト王』

ロマサガ2 / 三国志

元ネタは暗愚と言われた劉禅の幼名、阿斗から

ロマサガ2でもヤウダ地方の殿様で登場。

稚拙な罫で主人公パーティーとワグナスの共倒れを狙うが、逆に家臣からも呆れられて見捨てられる暗愚っぷり。

この時、面倒臭くなって放っておいたり、ある手順を抜いて年代が変わると完全に国が崩壊、強力な仲間も一緒に消えるから注意…

因みにセキシユウサイさんの最期の頼みで自動的に見逃すので、処刑はされない。

リメイクが出たら、某村長並みに処刑してやりたいと思う方々もいる筈……………

というワケで今回はサラッとメガロメセンブリアを潰してしまいました。

まあ、だらだらやるよりイイよね？

真面目に書いたら20ページくらいの無駄に長くなって面白く無かったし…

今回は、ライフメーカーとその一味が

最後の古代人ですね？

犠牲者の仇です。殺らせていただきます！！

するためどんぶらこつこと海をいきます。

ノエル達がメガロメセンブリアと決着付けるためバレンヌ帝国を発つた同時刻……

南ロンギット沿岸に接地された切り札の1つ潜水可能都市型移動要塞『バンガード』に紅き翼と、自身が率いる完全なる世界でも腕っ扱きを引き連れたライフメーカーは氷海へ向かっていた。

「ヒュー、コイツが浮沈島バンガードん中か。

もつと息が詰まるような場所だと思ってたが、そこらの街よりも快適じゃねえか！

お！旨そうな大蛸が泳いでやがる。」

「ええ、バレンヌ帝国は恐ろしいですね。

流石に心臓部には立ち入らせて貰えませんが、街を潜水艦にすると……予想以上のチート国家ですね。」

ラカンが上機嫌に、アルビレオが冷や汗をたらりと一筋流してこぼすのも無理は無い。

『水舞い』、『エアスクリーン』を常時展開：海水とは違う魔法の水を張った下に空気の膜で覆い、極めつけは海の魔物から襲われないように巨大な岩だと錯覚させる『カモフラージュ』を使っている。

そのため潜水時は外界を遮断して飲み水と新鮮な空気を確保。  
陸の街では野生の竜種による襲撃もあるが、それもシャットアウト  
している。

超巨大でありながら、ヘラスやメガロメセンブリアのデータベース  
にも引つ掛からなかった超ハイスペック。

双眼鏡を持って街中を散歩しながら天を仰げば魚や海竜、ラカンが  
見つけた大蛸のような水棲生物を見ることが出来る。

無論、平時には漁も行うため何処よりも新鮮な海の幸が手に入る最  
強の港町でありながら、潮の流れに任せてバレンヌ帝国領海を周回  
して防衛もする。

因みに設計者はシゲン…飲みに行った際にノエルが呟いたアイデア  
を拡大解釈。

有り余る才能と趣味に懸ける変態的な執念を原動力に、ノエルもビ  
ビるほど元ネタに忠実でありながら、彼の変態…浪漫がこれでもか  
と詰まった傑作の1つ。

なお、構想から完成まで100年…開発には、時の皇帝に目ん玉ひ  
んむかせるほどの資金がつき込まれているのは、トップなら誰もが  
知っている公然の秘密である。

そんなバンガードは彼等を乗せて、どんぶらこつこと海中を進んでいる。

外部を見ることが出来るラカンとアルビレオが居る都市郊外から離れた場所…

魔法を張り巡らす支点である巨大な塔が目印の都市中心部。その広場にナギとゼクト、詠春の3人は居る。

しかし此方は向こうとは対象的に空気が澱んでいる。

それは打って変わって厳しくなったゼクトの方針にナギが反発、この一週間2人が揃うと自然に険悪なムードになるからだ。

だから普段は連まないラカン、アルビレオの2人も『面倒臭え』とばかりに離れており、仕方無く詠春が残っているのだ。

今日も古き良き庶民感覚（面倒見が良い人的な意味）溢れる苦勞人属性の詠春は、どうにかしてこの2人の中を取りなそうと話し掛ける。



「ナギ、見てみるよ。」

天を魚が泳ぐなんて幻想的だと思わないか？」

「そうだな。」

さっきからあんちよこ（カンニングペーパー）を見返して、詠唱の短縮に励むナギに話し掛けたが、案の定手応えは全く無かった……

この男…詰めが甘いというより、肝心な時に力が出せないのが悩みの一つだ。

「……ゼクトもこっちへ来い。」

今からあまり気負い過ぎると、肝心な時に集中出来なくなるぞ。

ほら、仲間と話してもしてリラックスすることも大事だぞ？」

ダメ元も目を瞑り、静かに座り込んでいるゼクトにも声を掛ける。

「……ワシは300歳じゃぞ？詠春に言われなくてもその程度のこととは知っておる。」

それに今は瞑想しておったのじゃ。肝心な時に使う魔法の威力に関わる…頼むから集中させてくれないかの？」

「うう…」

短く呻くとお腹を押さえて脂汗を浮かべるとその場にへたり込んでしまった。

「逆に詠春こそ決戦前に神経をすり減らしては腕が鈍るぞ。ワシ等に構わずラカン達の方へ行くが良い。」

「うううう………」

元々、詠春自身のキャパシティは豪放磊落…どこまでも自由人なラカン、とんでもない悪ガキのナギとアルビレオの世話、ゼクトと共になだが関係各所への挨拶まわりと陰日向に気を遣ってきたが限界だった。

そこに今回の問題で胃痛持ちに…隠れて薬を飲んでいた。

しかしゼクトは全てお見通しであり、遠回しにその事を言っているのだらう。

だから詠春は何も言い返すことが出来なかった。

「ほれ、気にせず行くのじゃ。」

心配いらん。いい加減解決せねばならぬと考えていたところじゃ。

2人だけになったら話してもするから安心するが良い。」

「……………すまないゼクト。」

詠春は最後に本心から役に立て無かった己の不甲斐なさを詫びると、ラカン達の所へ行ってしまった。

「さて……………バカ弟子よ。」

これから御主の一生を左右するやも知れぬほど大事な話しをする。いつまでもふてくされておらんとこっちに来るのじゃ。」

「師匠が来ればいいじゃねえか。」

せつかくゼクトから歩み寄っても、ナギはプライドを守るためのその指示を受け入れない。

この一週間…こうして2人の周りに重たい空気が漂い始めるお決まりのパターンだ。

結局はナギの意固地でいつまでもこの状態が続いていただけ。

以前までのゼクトなら自分から詫びを入れて次に進んでいた。と、言つのも一週間前はおんぶにだつて導く……………人によってはぬるま湯に浸かるような指導をしていた。

だが、今は厳しきこそ至上と穿った覚醒をしたゼクトは突き放す、ぶん殴るは当たり前…詫びの1つを入れるまで徹底するスパルタに切り換えた。

だが、あまり効果は無かった……

今日の氷海の古代人討伐が済めば、この後控えているのは古代人本体との最終決戦……ノエルと自分達は味方だ。

だが、ノエルはナギのことを便利な鉄砲玉くらいにしか考えてない。ゼクトはアリアドネーで受けたアドバイスを冷静に思い返して確信し提案た。

そんなゼクトも最初にナギに抱いた扱い方やイメージはノエルと同じで『どうでもいい旧世界の1人、替えが利く傭兵』。

有り余る魔力を武器に大魔法を連発…我が儘放題好き放題の愚連隊と変わり無かった。

約一年共に過ごしていくうちに、意外にも面倒見がよい点、仲間と認めた相手には底抜けに信用するなどナギの良い面を知るうち変わった。

今は不出来で手も掛かるが初めての弟子だという認識。

情が移ってなければグレートブリッジ辺りで切り捨てている。

だからゼクトは考えた。

ノエルは自身の約2倍…約600年を生きている。

彼に仲間と認められれば単純な個人の戦力で考えればこれ以上無い頼もしさだ…場合によってはバレンヌ帝国も味方に引き込める。現に、今の状況がそれだ。

しかし敵、もしくは自身の仲間を脅かす障害は物理的、社会的な面からでも抹消するくらいは容易く行う非情さも持つ。

事実…過去の連合国で物理的に消された国は数知れず。

ヘラスに存在した地下マーケットがバレンヌの使者を商品にした時は、後日皇帝に単独で脅迫…

結果…地下マーケットは完膚無きまでに軍に蹂躪し尽くされ消えた。

そんな逸話は600年で幾つか伝えられている。

だから今度、ナギが噛みつくことがあれば……

ノエルも普段は見た目年齢相応に思考が浅い風を装っている。

だが、その気になれば誰にも悟られないように凶暴化の呪法も掛けるくらいの技術は有る……

このまま行けば和を乱し、無能以上に邪魔だという彼の評定を覆すことは不可能！

正式な決闘だと称して誘い出し……速攻で片を付ける筈だ

だからこそ…時間が無いからこそその180度の方針転換だった。

しかし、その本人に苦心する師の想いは皮肉にも表層の厳しさだけ伝わって、肝心な部分は今日に至るまで届いてない。

「（魔法に対する耐性も高いから心変わりの暗示も使えない……  
やれやれ…本当に困った悪たれ坊主だよ。」

仕方が無いからゼクトから歩み寄る。  
それでもナギは背中を向けたまま。  
ゼクトはナギが耳を傾けているのを知っているので、特に気にする風もなく話しを始めた。

「のうナギ、何故お前はワシの気持ちに分からん…  
いつまで子供のまま…嫌な事から逃げ出して、どこまで自身を偽って生きていくのじゃ？」

「…別に逃げ出してなんていねえよ。」

「では何故、故郷を飛び出し、わざわざ別世界の戦争に首を突っ込んだのじゃ？」

「そりゃ、自分の力がどこまで通用するか試したかったから……」

ここでやっとナギも振り返り、今日初めて相對した。  
しかし、未だにふてくされたままで俯きがちで視線を合わそうとはせずのだが……

一瞬ゼクトはその態度を叱りつけようかと迷った。  
しかし、最後のチャンスになるかもしれない会話だ。  
だから…飾らない自分で接し、ナギの心に訴えようと考えて元々のスタイルに…  
ノエルからはぬるいとバツサリ言われたが、自身とナギを信じて戻した。

「ふむふむ…では何故、味方になったバレン又帝国の要人であるノエルを敵視するのじゃ？」

「あのノエルって奴は……」

「また卑怯者呼ばわりか？  
ワシ等がヘラスの軍を後方から叩いたのと変わりないぞ？  
ナギ…お前はどうかやっても叶わない現実を認めたくないだけじゃろ？」

「バ、バカな事言うんじゃないよ。  
俺が万全な準備をして真つ向勝負をすれば……」

「勝てるか？」

どこまでも穏やかにゼクトは尋ねる。

ゼクトは全く意図していないが、一週間前のあの日から鬼のようなスパルタを続けたこと。

そして全てを受け入れるようなスタイルに戻した揺り返しで、北風と太陽のような作用を起こしていた。

「なあ、ナギ。

お前は今の体力、魔力任せのバカ戦法のままでも十分強い。

戦闘のセンス、物覚え自体も悪くない。

むしろ昔のワシと比べたら遥かに早い…天才を越えた鬼才じゃ。」

「……………」

話しの雲行きの怪しさにナギの顔が険しくなる。

「だがな、ノエルには勝てんよ。

ワシの師匠がただ1人同格と認める相手…魔法自体の威力も段違いじゃからの。」

「…師匠は何が言いてえんだ？」



難癖付けるだけならお呼びじゃねえぜ！」

「まあ待て。

お前は『自身の腕試しとどんな奴もぶっ飛ばせるほど強くなる』が戦う理由だと言ったな？」

「だったらツツ…何だよ！」

最強を目指すことの何が悪いんだ！

敵を倒して師匠に迷惑掛けてんのかよ！！」

両親が居なかつたナギは近所のスタンに引き取られた。

そこで躰、特に魔法について厳しく教育されて、誰よりも強く立派な魔法使い（マギステル・マギ）になれとメルディアナ魔法学校に入れられた。

結果だけ言えば魔法の才能だけを見て評価し、画一的な使い易い人間へと作り替えるだけの魔法学校に疑問を感じてドロップアウトしてしまった。

つまりナギにとって『強さ』という項目は、自分を構成するアイデンティティの中でも大半を占める重要な要素。

だから、反射的に声を荒げてゼクトに反発して『しまった！』と冷静になった時には既に遅かった……

これでいよいよナギは引っ込みがつかなくなってしまった。

「……………確かにお前は望み通り、戦えば戦うほど強くなっている。だがどうじゃ？」

強くなればなるほど、イライラしてきた…それもノエルに負けて以来ずうっとじゃ。」

「ノエルだあ？アイツは関係ねえ！」

最近は何も悩んでるだけだっつーの！」

「そうかのオ。まあ、いい…」

ワシが言いたい事はの…このままではそこらのチンピラと変わらん。大切なモノ、守りたいモノを見つけるのじゃ！」

そうすれば少しはマシになるじゃろっ…」

ノエルに挑むのはそれからじゃ。」

「……………」

「おお、それと一番大事な事を伝え忘れておったわ。

本当は理解していても、気付かない振りや認めないでいると…気付いた時には、手の中からスルリとすり抜けているぞ？」

ワシからの最後の教えになるかもしれん…よく考えるのじゃぞ？」

「ああー、しつこいな！分かったよ！  
大切なモノくらいすぐに見つけてやるよ！  
俺もラカンのオッサン達の方へ行くぜ。」

「ん、」

話しはそれつきり…  
ナギはラカン達の元へ行つてしまい、ゼクトはまた瞑想を続けながら考える。

なんて手の掛かる弟子なんだ。  
こんな事をノエルはライフワークにしてるなんて…まあ、口より  
先に手を出すらしいから自分とは比較出来ないけど。  
ああ、もつと楽に生きたいな…  
ライフメーカーからお役御免が出ないかなあ…

ゼクトもゼクトの悩みがあり、人知れず苦悩していた。  
なお、術の威力は日々のストレス発散である。

所変わって…要塞を動かすためのエネルギーを送り、操作する機関

部：

オシャレな絨毯を敷かれた部屋の中央には、玄武術増幅機関のイルカ像と力を注ぐ術師達。

前面は透過の魔法で外の様子が見れるように調整されたバンガードの心臓部。

そこにライフメーカーは右腕であるプリムムと共にいた。

「海底宮はまだ見えません。

これ以上の潜水は魔術師のパワーが保ちません！」

計器を見ていた兵士がライフメーカーに告げる。

既に日の光も届かな深度3000：あらかじめノエル達が力を注いだ為に余力はまだあるが、帰りの分を計算しなければならぬからだ。

それを聞いたライフメーカーは徐にイルカ像に無言で近づくと、手を翳した。

やった事は周りの魔術師と同様、バンガードのエネルギー補給だ。しかし、目視可能なほどの超魔力を単独で注入：周りは騒然としたが、あるクルーの報告でド肝を抜かれる事になる。

「す、スゴい！！

70、75、80：95、100%！？

本体だけじゃなく、予備バッテリーまで一気にMAXまで上がった！  
イケる！コレなら海底一万マイルまで行って」

「もつと深く潜るんだ。

必ずこの海の深海に奴はいる。

だから私と我々を乗せているバンガードの性能を信じろ。」

日頃節約しているからか、今日は出し惜しみ無しでカリスマを發揮するライフメーカー。

「「「「サー、イエスサー！！」「」」」

溢れんばかりのカリスマに感化され、クルー達の士気も鰻登りに上がっていく。

そんな操縦室の片隅：帽子を目深に被り、立派な椅子に座ってパイプは標準装備の威厳溢れる御老人が居る。

「ワシがキャプテンである！」

本来のバンガード市長兼キャプテンだが、ライフメーカーのバグ技

ですっかり影が薄くなってしまった…

その後は何回かプリームムがエネルギーを補給して潜り続け、キャプテンのメンツを潰すこと1時間…

「レーダーに魔力反応アリ！」

バンガード並みに巨大な何かが…宮殿が映っています！」

深度3000にまで到達。

危険水域まで達してやっとレーダーに魔力反応が…海底宮がその姿を現した！。

「よし、バンガード全域に通信を入れる。

私と紅き翼が第一陣として切り込んでいく。

バレンヌの者はもしもの時のために、第二陣として来い。」

「「「「サー、イエスサー！」「」「」

艦内放送を入れる者、着岸するために操作盤を弄くる者など慌ただしく動く中で、ライフメーカーは海底宮を見つめる。

「（またコイツを見る機会があるとは…

世の中…いや、世界は狭いねえ〜）

プリームムよ、お前に預けた力…ひとまず返して貰うが良いな？」

「委細承知…ゼクトにも声を掛けておきます。」

「うむ」

古代人最後の分身が待つ海底宮…ライフメーカー達が踏み込んだのは、丁度ノエル達がメガロメセンブリアに到達した頃だった。

「あのう…ワシがキャプテンなんじゃが……  
もう、ええわい。勝手にしろい！」

キャプテンはすっかり煤けてしまっていた…

## S a ・ G a 6 2 (後書き)

ナギに成長して欲しい…そんな話しになってしまいました。

だって…このままだと主人公がナギを『ポイント』してしまうから、入れざるを得なかったよ。

ていうか、原作キャラの動かしにくさは異常。

『バンガード』

ロマサガ3

かつて聖王が魔海公フォルネウスを倒すために作り上げた海上移動要塞で、町長の事をキャプテンと呼ぶ風習？がある。

バンガードの動力は玄武術師を何人も集め、それを希少鉱物「オリハルコン」で出来たイルカ像にブツ込み増幅すること。

イルカ像カワイイ！！

けど盗まれる辺り、警備はザル

それにキャプテンは自分ン家でくつろいでいるだけで、キャプテンらしい描写は一切無い。

何でいるの？ロマサガらしいっちゃらしい人



次回こそ…次回こそ古代人です。



その後ろを紅き翼、プリームムなどの部下はスッタラスッタラついで行く。

「なあ、ラカンのオッサン…」

あのハンパねえ大師匠に勝てっと思うか？

詠唱無し、虫を払う感覚で塵も残さない火力…こりゃ反則じゃね？」

「バカ野郎、一目見た時から全面降伏だっつーの！

アイツがその気になれば、オレ等なんか簡単に消せるんじゃないか？

ていうか、そんな結末しか思い浮かばねえよ。

それに、並の魔法使いはお前のことそう思ってたんだ。」

「…なあ、師匠。大師匠って昔からあんな強えのか？」

「それについては私も興味があります。

過去に彼が力を振るったケースは有ったのですか？」

1人だけ自身と地面に斥力を掛けてふよふよと浮いて…能力の無駄遣いで楽ができていいるかは怪しいアルビレオも話しに入ってくる。

「それについてはノーコメントじゃ…」

ただ、ラカンの予想は正しいという事だけは言おうかの。

実際、あの方の魔法に対する認識は格下相手へのハンデじゃからな。ラカンと同じじゃよ…上手く扱えないなら投げるなりして適当に当てれば良いとな……………」

「……………」

「魔法世界は狭いようでデカいなあ……………」

ゼクトは仲間にも主人ついて只1つを除き明らかにしなかった。それも神妙な様子から、冗談抜きでひたすら…予想の遙か上をいく強さに紅き翼の面々は絶句。

詠春は戦力のインフレに耐えられず、ちょっと違う世界にトリップして呟いた。

現に今も、物陰から鎧を着た魚人モンスター達が奇襲攻撃を仕掛けてきた。

しかし、即座に反応したライフメーカーの手の一振りで発生した魔法に飲み込まれて、一匹の例外も無くことごとく消される。

この光景がさつきから何回も繰り返されておりモンスターが塵も残さず消えるのは既に予定調和、誰の頭にも無双という2文字がハッキリと浮かんだ時、ライフメーカーが歩みを止めた。

「大師匠サン、急に止まってどうしたんだ？  
とうとうスタミナが切れてきたのか？」

「違う。」

お前達常人には暗闇で分かり難いかも知れぬがこの先に扉がある。  
ついでにトラップもな…『光よ（ルークス）』！」

ライフメーカーは指先に生み出した光の玉を遊び『そおーい』と見  
事なフォームで投げた。

「うお、まぶし！」

その光の玉は暗闇の向こうで破裂…  
閃光でパツと明るく…逆に暗闇に慣れ始めていた目には強烈に感じ  
るほどであった。

まあ、何はともあれ見通しが利くようになった通路の奥には、言葉  
通りにドデカイ扉…手前には謎の穴肉塊が脈動し、無知な犠牲者を  
嵌めるため不気味に蠢いている。

「ただ付いてくるだけでは退屈だろう…あのトラップと扉の先に居

る魔物は紅き翼に任せる。  
私にその力を見せてみる。」

「へへ、やつと俺達の出番かよ。

流石に待ちくたびれちまったぜ！！

師匠、オッサン、アル、詠春…準備はいいな？」

ナギはやつと力を振るえることから、仲間にも初めて見せる凶悪な  
笑みを浮かべ問いかけた

「俺はいつでも戦える…化け物相手は本職だからな。」

ニヒルに答え、いつでも愛刀『夕凧』を抜けるように手を掛け臨戦  
体勢の詠春。

トリップしてたり、胃痛に悩まされている情け無い姿は無い。

なんとも頼もしい…

「（私としてはダンジョン等はあまり得意なフィールドでは無いの  
ですが……）」

おんぶにだっこではカッコ悪いですしね。

やれる事はやりましょうか。

ただ、いつもみたく派手に動けないのでサポート頼みますよ？ゼク  
ト」

「任せるが良い。」

それにワシも大魔法は加減を間違えると、この洞窟が崩れるからの願ったり叶ったりじゃ。」

アルビレオはいつも通りの気怠げに…。

ゼクトは主と同僚が見ている前で情け無い姿を晒すわけにはいかない…普段と変わらぬ風を装っているが、内心ではいつになくやる気満々である。

そして紅き翼最後の1人ジャック・ラカン…

「モチのロンだ！」

ただし、千の雷みたいな大魔法なんてブツ放すなよ。流石のオレも瓦礫を片付けるのは勘弁だ。」

「うるせー、それくらいは俺でも分かっただらあ！」

「ワハハハ！なら構わねえ。」

ナギがお約束の落盤フラグを立てないように叩き割った。

「ヨッシャ 紅き翼行くぜー!!」

「「「おう！」「」」

そしてナギの合図でモンスター達を蹴散らし、進軍を始めた紅き翼。それを最後尾まで下がり、ついに行くライフメーカーに、すぐ隣まで来た部下の1人『火のアートウル』という大男が納得いかないという顔をして問い掛けてきた。

「主…私は納得いきません。」

「…アートウル、私の采配の何が気に入ら無かったのか？あの状況であの選択は戦力の温存も考えれば、次善解だと私は思っているがな。」

「何故、紅き翼に露払いを任せたのですか？この程度の障害ならば自分達が！主の役に立てるなら火の中だろうが水の中だろうと怖くありません！」

感情が高ぶり、自分でも無意識のうちに炎が漏れている。元が武人肌の調整を施した傑作の1つだが、その様はまるで人間ラントラン。それを見たライフメーカーは小さくため息を吐いて部下の疑問に答えた。



「アトウル お前達を選ばなかったのは理由の1つが、強大な力を持っていて制御が甘い。

誕生して間もないとはいえそれは許せんよ。

紅き翼に行かせたのもゼクトと奴らの力を見極めるため。

これで良いか？」

「ハ…すみませんでした主。」

ハッキリ直球で言われてさっきまで息巻いていたアトウルも落ち着きを取り戻し、炎を体に納めた。

また、他の部下達も同じようなモノで、皆が大なり小なり不満を抱いていたようだった。

だが、アトウルとの問答の答えで切り替え、たまに湧いてくるモンスターを蹴散らしながら進んでいる。

「（意欲的なのは良いのだが、ちと頭の回転が良くないな。

ゼクトやプリムムは別格だとしても、一人前まで時間が掛かるな…

それとバンガードに残したプリムム…アイツは大丈夫かね？）

ふう…問題は山積み。世の中上手く行かないな。」

丁度その頃…

「へつくしよい、べらめえバーロー！」

「！？…どうしたのプリーム殿？  
深海に来て体調を崩したの？」

「いえ 何だか主が私のことを噂したような気が…  
別に風邪でも何でもないですから心配無用ですよ。アスナ姫」

「本当に…大丈夫なの？」

「本当の本当に大丈夫ですからね。」

「……分かった。」

いつもの爽やか王子様の調子で、くしゃみのイメージを払拭しようとするプリーム…

「ナギ達は無事に帰って来るよね？」

「もちろんです！」

我が主もいるのですから、きつと五体満足で帰って来ますよ。」

「そつだよね…。」

アスナはそれつきりプリームムから顔が見えないように俯いて、耐えるように小さな身体を震わせた。

「（アスナ姫、子供ながら戦士の身を案じる、か…」

さつさとこんな戦争は終わらせなければな！）」

改めて最終決戦に向けて決意し、少しでも慰めになればと頭を撫でた。

しかしプリームムは知らない。

震える『アスナ姫』が腹の中で何を考えていたかを…

「（それにしてもプリームム殿は、顔に似合わずクシャミが豪快過ぎるの！」

ぼんやり海を眺めてるだけかと思っていたが、飛んだ儲けモノ。

『へつくしよい、べらめえバーロー！』話しのネタにもなるし、私も次は使ってみようかな。）」

たまに可笑しな事もあるけど、バンガードは平和だった。

あれから俺達紅き翼は、大師匠に従い前衛へ…  
それからはモンスターをばっさばっさと蹴散らしながら、順調に進んでいる。

途中でラカンのオッサンが魚人の化け物を鯖折り。

地面に敷き詰められた肉塊に引つかかった時も…奴ら吸われた生命力を逆に気合いで吸い返して脱出してた…

オッサンが言うには、気合いがあれば何でも出来るらしいが…仲間ながらワケ分かんねえ。

流石にキモかったが、普通に辿り着いた。

「俺はせっかくだから赤い扉を選ばせ！」

「はあ？何言っただよオッサン…扉は1つしか無エし、普通に真っ黒だろ！」

「さっさと行くぜ！！オラア！」

どうせ二度と来ない場所だ。

それに所々朽ちていて触りたくないから、景気良く蹴破って侵入してやったが…

『……………』

バカでかい体をしたへビに太い腕、ついでに首回りには水晶で牙が俺の身長並か…

コイツの後ろにはまた扉が見えるが部屋は巨体を収めているだけあってかなり狭く感じる。

さっきから威嚇してるみたいだけど、纏わりついて袋にしちまえば大したこと無いな。

「オッサン、詠春！コイツを袋にしちまうぜ。」

「師匠とアルはコイツの邪魔とサポートをしてくれ。」

・  
・  
・  
・

あのへびモドキ、尾撃やら噛みつき、水晶を飛ばす荒技をしてきたけど体がデカいだけで大したこと無かったな。

アイツが守っていた背後の扉を抜けた先は、ガラツと雰囲気が変わって神殿みたいな装飾が施された柱だったり、像が壁に埋まっていた道もキレイに舗装されて灯りも点いていた。

モンスター達がいなけりゃ、観光とかなかなか面白いんじゃないか？行くのに金と時間が半端無く掛かるがな。

ただ、奥に進んだから仕方ねえが、厄介事も増えた。

「それにしても魔法世界で故郷の日本に伝わる青龍型の竜種に会えるとは…ハッ！！」

『めらみっ』

「まあ、伝説の龍は天候さえ支配したらしいがな…フン！」

『ほむほむま…っ』

「詠春の故郷にはこんな化け物が居るんだな…シャアオラア！」

『い、いおらアア』

「あくまで空想上だが、なッッ！」

『じ、こ、すば』

「なら、俺が闘った龍樹とどっちが強えエのか気になるな。

羅漢適当に正拳突き！！！」

『はっざんぶぶぶ！？』

厄介事ってのは通路の壁がどっか水だった。

だから魚人以外のモンスターもバンバン襲ってくるようになったことだ。

奴ら、水中だから動きがスゲエ速えエ。

オマケに俺は雷魔法ばかり強化してた…感電して自滅する訳にもいかねえ。

だから瞬動に魔法の射手を重ねて、ちまちまブン殴って蹴散らすしか出来なくなった。

今の主力は詠春とラカンのオッサンで、大師匠達のグループはのんびりと付いてきている。

それと、大師匠…さっきから後ろを見て確認してるが、明らかに水面に立ってる！

水面を歩くとかスゲエ！！

「ナギ！もたくさしてるな！

ニクシーがすぐそこまで来ておるぞ。」

「おゝ師匠、ワリイ、ワリイ。

さてっと…三叉槍なんて捨てて、素手で来いよ…オラァ！」

『るつえるん！？』

先発隊はいかにも宮殿の主が控えているらしい部屋…の重厚な扉前に到着。

「紅き翼の力は…まあ、可もなく不可もなく。

ブリームム達もギリギリ合格ライン。

最終決戦に耐えられるから連れて行くが、これからの成長に期待だな。」



水壁の通路の途中で、アートルなどの部下達が闘いにくいフィールドで如何に立ち回るかを見るために交代させて進んだライフメーカ―。

。 評定が辛めの理由は『それぞれが魔法や固有能力に頼りすぎだから』。  
楽をしながらも無駄な犠牲は出さないために、今回の立ち回りで最終決戦で主力に組み込むか判断していたのだ。

「何はともあれダンジョン最深部…この先に古代人が間違い無くないる。

これまで御苦労だった。私1人で戦うから、のんびりと古代人が倒される所でも見ていると良い。」

「「「「「「!?」「」「」「」

そして最後の扉を抜けようとしたが…

「ちよつと待つてくれよ大師匠！

ここまで来たんだ。俺達も戦うぜ！」

「ナギ…（主、どうすれば？）」

ナギが待ったを掛けた。

最初はゼクトも諫めようとしたが、この弟子の気持ちも分かるだけに言葉に詰まり、主であるライフメーカーに目でサインを送った。

またライフメーカーも部下の不始末は自分の責任かと溜め息をして…

「ダメだ。」

お前は特に私と古代人の戦いを見ている。」

キツパリ答えた。

「何でだよ！俺は、紅き翼は戦える。」

絶対に邪魔にはならねえ！」

「「「「……………」」」」」

アトウールを始めとして部下達は主の決定に逆らったこと、そして自分達を差し置いて意見するナギのことを敵意剥き出しで睨み付けている。

だが、ナギとゼクトを除いた紅き翼の面々に古代人と好き好んで戦おうという雰囲気は無い。

むしろ、ラカンと詠春は間違い無く世界の頂点に位置する男が力を振るう…

1人の武人として己の糧にするために。

アルビレオは持ち前の好奇心で神を自称する男の戦いを特等席で…しかも、次はいつ観れるか？

両者共にこの機会を逃したら次は無いと考えているから反応は薄い。

「ナギ・スプリングフィールド、お前はバレンヌのノエルに敵意を抱いているらしいな。」

「それがどうしたんだよ…」

「アイツは武力だけなら私と同格だ。

だからこそ私のレベルを見る。

それでも挑むなら止めんよ。

まあ、十中八九容赦なく殺されるが…私はゼクトと違う。

勝手に挑んで勝手に死ぬ！虫けらのようにな。」

「だったら見せて貰おうじゃねえか！

ノエルと同格つつうアンタの実力をな！！」

「安心しろ。」

格の違いを貴様にも分かるように戦ってやる。

では諸君、仕上げといこうか。」

そして最後の部屋に通じる重厚な扉を魔法で吹き飛ばして侵入。

その部屋には

「はあ？ガキ1人だあ！？」

「そうだよ、そのガキ1人にざっと数えて10人か……  
こんな子供1人相手にするのにそんなにいっぱい引き連れて、大人  
気ないと思わないのかい？」

「私は昔から大人気なくてな。」

女子供にも平等をモットーにしている。」

「ふーん、偽善者よりはマシだね。」

海底宮最深部は部屋というよりホール、いや 巨大なドームやコロ  
シウムと言った方がしっくり来るほどに広い空間。

其処には緑の長髪を一本に纏めて手には三叉槍を持った、見た目はナギと同じ年くらいの少年が待ち構えていた。

なお、隅にはライフメーカーが吹き飛ばした扉に穴が3つ空いて無造作に転がされている。バカに出来ない戦闘力が有る証拠だ…

「ところで道中楽しんでもらえたかな？  
自分なりにインテリアとかに気を遣ったんだ。

あの肉塊なんてパンチが聞いていて良かったんじゃないかな？」

「そんなモノに興味は無い…」

「うーん、やっぱりかあ〜！

猿でも開けれる自動扉を吹き飛ばして来たんだもん。  
そうだと思っただよ！

もし違ったら真性のバカだよな。」

「（見え透いた挑発だな）

1つ、2つ質問をさせろ。」

「2つどころか、10個でも全然イイよ！

どうせ皆、冥府に逝くんだからさあ〜」

身の丈もある槍にもたれ掛かりながら、嘲るように話しを進める古代人。

「…貴様等古代人は何故、魔法世界に手を出した？」

「そんなの簡単さ。

同胞達と共に新たな住処、植民地とする為さ。

まあ、最近は別の世界の方が楽に手に入るし広いから用済みだよ…  
どうせだから綺麗サツパリ消してあげるよ。」

ライフメーカーが投げかけた質問。

答えは、昔にノエルが推測で語っていた内容とほぼ変わり無かった。

だがライフメーカーは聞かなくても分かっていた。  
これは旧世界人もいる紅き翼の面々に、改めて理解させるため言う  
ただけに過ぎない。

「ふむ では、私に見覚えは無いのか？」

これには紅き翼、直属の部下達も首を傾げた。  
問い掛けられた本人は言わずもがな…

「へ？」

見覚えなんて有るわけ無いに決まってるじゃん！

やっぱり無駄な歴史ばかり積み上げて、僕等が使う魔法より弱っちい魔法しか作れなかった神だから仕方ないね！

アーハッハッハッハ！ヒイ、ハハハ…『私に見覚えは無いのか？』  
だつてさ。

腹が、腹が破裂する。

ハハ 擦れる、ヒイ、ヒイ」

最大限、思い付く侮辱を並べて腹を抱えてライフメーカーを指差し、  
笑いながら地団駄を踏む。

流石にライフメーカーの質問の意図が不明だとしても、コレには耐えきれなかった者が居た。

「化け物の分際で主を愚弄するとは許せん！

俺の水で殺してやる！！」

ライフメーカーを最も慕い、その性分から常に最前線

完全なる世界でも腕利きにして、古代人と相打ちになり修復された

16代目…水のアダドーが怒りに駆られて突撃した！

「な！？待てアダドー！

主の命令を忘れたか！！」

「止めてくれるなアトウルよ！  
例え差し違えてでも討つ！うおおおお！！」

制止も振り切り古代人のレンジへ瞬動、虚空瞬動を用いて接近。

「お！いきなり前菜が飛び込んで来てくれたなんて嬉しいね！」

「主が出るまでも無い！  
俺が一撃で終わらしてやる…死ねイツツ！！」

裂帛の気合を込めて発動させた全方位からの水の牙、虚空瞬動で得たスピードで急落下蹴りを仕掛けた。

全方位から襲い掛かる術を破ってアダドーを迎撃しても、決死の覚悟で放った一撃。

誰が見ても完全にはいったと感じた、が…

しかし……

「甘い甘い。」

カモン マイ・サーヴァント！！」



「なんだとおおお!？」

自身は槍で周囲を薙払い、魔法を無効化。

アダドーに関しては、古代人の背後に広がる影が蠢いたと思ったら巨大な怪魚へと実体化…鯉が雀を丸呑みにするように飛び上がり、抵抗するアダドーを飲み込んだ。

「ア…アダドーオオオ!!！」

水と火 正反対の性質でありながら、主への忠誠心と実力を認め合った仲だったアトウルが叫ぶ。

「ふう…ご馳走さまでした！」

キミの部下はなかなかどうして…特殊能力も僕と相性が良かったし、鍛えていたからデリシャスだったよ。」

「……………」

「それに色々と…黄昏の姫御子が何処にいるか、とか。バンガードとやらの情報 ついでにパワーアップも出来たし…」

「……………」

ライフメーカーはただ古代人を鋭く見つめるだけだが、その瞳は部下を殺した仇を見る類の物でない。部屋に入った時から アダドーが先走った時も変わってない。

それが古代人には面白くなく、少しばかり搦め手で攻めようと考えた。

「な〜んか、部下が始末されたのに…… 『薄情とは思いませんか？ 主イイ』 なんてね。」

それは紛れもなくアダドーの声……

「テメエ……この野郎ツッ……！」

「アトウール殿！ 落ち着くのじゃ……！」

お主の気持ちは分かるが、感情に任せて突っ込んでアダドー殿の二の舞じゃぞ！」

「クッ……ゼクト……！」

「耐えるのじゃ……我等の主を信じよ。」

必ずや、アダドー殿の仇は取って下さる……！」

アトウルを止めるゼクトは軽度の火傷：  
そして自制するため固く握った手からは血が流れていた。

「アツハツハツハツハ！！」

安い芝居を観てるみたいで面白いよ！！」

「…」

やっとライフメーカーが動いた。

それもわざとらしいほどの大股、詠唱などは全くしていない。

「ハ！馬鹿な神だ！バラバラになっちまいな。『ウォーター・アイ  
スジャベリン』」

指先から高水圧の水流、空気中の水分を凝固させて発生させた氷の  
矢が、合体し威力を増した術となり雨あられとライフメーカーに殺  
到。

避ける素振りも見せず直撃したが…

「『ストーンバレット』」

「…流石に神を名乗るだけはあるようだ。  
それなりに手応えは感じたのに無傷、水しぶきに紛れて即座に反撃  
とはね。」

「『ストーンバレット』」

「チィ…『ウォーターガン』!!」

「『ストーン・ストーンバレット』」

「クソ、『ウォーター…』『ストーン・ストーン・ストーンバレッ  
ト』」

それはノエルが白虎術でもよく使うの基本術…  
それを1人で複数合成し、『ストーンシャワー』と比べても遜色な  
い巨大な岩槍の弾幕がお返しとばかりに叩き込まれた!!

だが、敵もさるもの。

体の大部分に掠り、肉を持って行かれたがすぐさま再生。

ライフメーカーがじりじりと間合いを詰められるのを悟ると、瞬時に  
体勢を立て直す。

「（ぐうう、撃ち合いでは不利…詠唱スピードがデタラメで勝てない。）  
出て来い僕の分身!!」

『グゴオオオオオ!!』

先ほどアダドーを丸呑みにした怪魚を召還。そのまま一気に頭から地面に食らいつき、胃の中に飲み下す最高の動きを見せた。

「やべエ！いくら大師匠つっても呑まれてからじゃ間に合わねえ。これじゃまた古代人が強くなっちまうじゃねえか！  
紅き翼！介入するぞ。」

「待てナギ！あの怪魚の様子をよく見てみよ。」

「……!？」

アイツ腹を打ちつけてやがる!!」

ライフメーカーを丸呑みにした怪魚はアダドーの時のように影には潜らず、ビットンビットン陸に上がった魚のように苦しそつに跳ね回っている。

そして次の瞬間…

『ドクチャアア！！』

実に生々しい音を出しながら怪魚の身体を破ってライフメーカーは脱出！

「『アースライザー』」

未だにビチビチと痙攣していた怪魚は地面から岩槍で貫かれ、天井に縫い付けられて悪趣味な魚拓と化した。

「で…もう終わりか？」

「この化け物め…いや、魔神の方が正しいかも知れないね。」

だが、古代人にとっては手駒の1つを失ったに過ぎない。  
未だ余力を残しており、慢心にも近い自信を漂わせている。

「来ないなら私が近くへ行つてやろう。」

当然ライフメーカーは、先の怪魚でのあれやこれやで全身血濡れ。ダメージを受けた様子もなく、とんでもないプレッシャーを掛けながら再び大股で距離を詰める。

「影を始末したくらいで調子に乗らないで欲しいな。

真のアビスの力を見よ！『マッドサンダー』、『サイクロンスクイーズ』！！」

三条の稲妻、地面からの強烈な螺旋水流による突き上げがライフメーカーを巻き込み、歩みを止めたかに見えたが…

「効かんなあ　まあ、血を洗い流してくれたのは有り難いな。

その礼に、いい加減に終わりにしてやる

アデアット…『千の絆』ミツレ・サインクラ」

光に包まれたライフメーカーが再び現れた時には、普段纏っているローブではなく見る者を奈落に引きずり込むような錯覚を与える…漆黒の見事な西洋鎧姿だった。

「これを見てもまだ思い出さぬか？」

「（バカな…奴に放った魔法は本気だったが無傷だと!?)」

さつきも答えただけどキミの事なんて知らないね。それより何だその魔法は!?!」

「黙れ下郎…では、次の力だ。」

「(まだ魔法具を残しているというのか!?!)」

同様が見え始めた古代人の追及を切り捨て、再び千の絆を発動。ミツレ・ウィングラ

光に包まれた後、今度はゼクトが使う切り札…最大防護で顕現する悪魔の意匠が施された大盾。

鎧と盾を合わせればかなりの重量になるだろうが影響などどこ吹く風。

お構い無しに距離を詰める。

「(何だ…吸収した魔物の記憶の中に該当者が居るのか!?!)」

これ以上の接近は危険だツツ。

僕の最大技でケリを付ける!」

「ほう!最大技か。

良かろう、試してみるが良い…このライフメーカーに対して!」

「余裕でいられるのは今だけだ!



水に漬される！『メイルシュトローム』ツツ！！」

古代人が自ら最大技と言うだけある。

技の種類は『サイクロンスクイーズ』と同じく膨大な水流。

しかし、ただ巻き込む嵐のようなサイクロンスクイーズとは別物。

ターゲットを飲み込み、左右の回転を加える事によって威力を格段に増した魔技！

一度飲まれれば脱出は叶わず、より凶悪な渦に身体を引きちぎられる必殺技が、悠々と歩くライフメーカー目掛けて怒涛の如く唸りを上げて襲い掛かったが…

「甘いな…術の構成、出力、どれを見ても私が知るそれとは比べる価値もないゴミだ。

至高の魔技が泣いているぞツツツ！！」

またしても無傷で切り抜けたライフメーカー。

そして、ただの一喝が風を従え古代人を背後の壁にまで吹き飛ばした。

「ヒイイイイイ！」

（ば、化け物！！コイツは想像を超えた真正正銘のクリーチャー！  
モンスターを吸収しても僕じゃ追い付けないツツ

今は今は逃げて力を蓄えるんだ。

それにバレン又出身の下僕がバンガードに乗っている『アスナ姫』

を手に入れば、勝ち目は十分有るツツツ  
そうと決まれば即行動だ！！！！）  
きよ、今日のところは勝ちを譲ってあげるよ。」

「……………」

「墓守人のダンジョンで待つ…そこで殺してやる！！  
『アビスゲート』」

言うが早いかゲートに半身が潜り込んでおり、追撃も間に合わない  
完璧な撤退を成した古代人は…無事にゲートも閉じて異界へ逃げお  
おせた。

戦いでボロボロになった部屋に冷たい静寂が満たし始める。  
あれだけ一方的に痛めつけておいて呆気なく逃げられ、呆気なく終  
わったのだ。

これには後ろで戦いを見守っていた紅き翼、ライフメーカー直属の  
部下達も作戦の失敗という最悪の結末を迎えたことに、血の気が引  
いて驚いた。ナギ・スプリングフィールドを除いて……

「大師匠！いやライフメーカー！！  
アンタ格の違いとかが言ってたが、まんまと逃げられたじゃねえか！！  
どうすんだよ！？姫子ちゃんの居場所までモロバレで最悪の結果だ  
ろツツ」

「魔術の入口も潜ってない小僧は黙っている…  
もうすぐだ…もうすぐで出て来る。」

「テ、テメエツツ!!」

ナギがライフメーカーを殴りつけるため瞬動を発動しようとした時…

「そんな有り得ない!？」

何故『墓守人の宮殿に行こうとしたのに再び海底宮…それも化け物の真ん前に居る』んだアアア!？」

(あ…ありのまま 今 起こった事を思い返せ。

僕は アビスゲートで完璧に逃げ切った

と思ったら いつのまにか奴が殴りやすい至近距離にワープしていたわ… 分からない どんな魔法を使ったのか  
いや… 実際に魔法を使ったのかすら 分からない…(」

「不思議そうだな…

アビスゲートを操れるのは貴様だけではない。」

「それこそ有り得ない!

アビスゲートの行き先をねじ曲げて、目の前に転移させるなんて荒技は不可能だツツ」

「神だからな。」

では、遠回りしたが最後のヒント…千の絆<sup>ミッレ・ヴィンクラ</sup>!!」

そしてライフメーカーの右手に現れたのは…巨大で禍々しさを感じる斧。

ライフメーカーが召喚した魔法具は3つ…

全てが異常なオーラを放ち、ついさっき思い知らされた力の差も相まってか…古代人は逃げなければと考えた。

しかし無意識に膝を屈し、重力と化したプレッシャーで身動きが取れなかった。

なお、そのプレッシャーは遙か後方、部屋の入口付近に控えて敵意を向けられていない仲間ですら戦慄を覚えさせ、遅れて出発しダンジョン内部を進んでいる第二部隊にも本能的に身構えさせたレベル…

そして古代人を一瞥するとライフメーカーは話しを始めた。

「ゼクトに与えた盾、プリムムに与えた鎧…そして常に私と共にあった斧。

どうだ…記憶の底にどろりと沈んだ私を思い出せたか?ん?」

古代人の…吸収した数多の糧の中に属する一体。この海底宮の主が有していた記憶が、光景がフラッシュバックして蘇る。

その記憶には1人の人間が自身を完膚なきまでに打ちのめすビジョ

ン。

同じように3人共に軍門に収められ世界を支配したビジョン。  
最後の記憶はその人間が今と全く同じ格好をし、東方に遠征する際  
に送り出した場面…そして、4人が束になっても勝てなかった悪夢  
のような事実。

その名は

「……………魔…王、か？」

消え入るような…咳きよりも小さな声を発するのがやっとだった。  
しかし、目の前に立つ魔神には十分な声量。

無言のまま頷いたのを見ると両手、額を地に擦り付けて土下座を始  
める。

「た、頼む！み、みみ見逃して欲しい。  
両世界からすぐさま手を引く！！復讐なんて考えずに別の世界へ渡  
るから見逃してくれ！！」

「……………」

この世界は魔王の箱庭…全ての命は彼の裁量で決まる場所。  
戦争など起こさなければ…

バレンヌ帝国のケルベラス溪谷で仲間が倒された時、即座に引き上げれば…

初めて世界に通じた時、彼に共存の道は頼み込めば未来は有ったかも知れない。

万、億、兆に一つも無い可能性に賭けた結果は

「良い…これまでの無礼は全て許そう。」

「ほ、本当ですか!？」

「私は嘘を吐かんよ。」

顔を見上げた先には、ニツコリとどこまでも優しい微笑み。

それはまるで聖王とさえ錯覚させる慈悲深さ、全てを受け入れる懐の深さを漂わせていた。

だから羽が生えたように肩の重圧が消え、蒼白だった顔にも血色が。タイムに喰われそうになった時以来味わった事の無い…いや、それ

以上の息苦しさを嘘のように解放された。

「死ね……」

「グ……、ゲハッ……、オエエエエ……」

そんな未来は何処まで行っても有り得ない。  
全てはリアルから逃れるため、この痛みから救われるために見た泡  
沫の夢。

出来損ないの走馬灯……

蹴る

内臓を破裂させる掌打

頭を鷲掴みにして叩きつける

斧で盾で手足を一本ずつ…再生が追い付かない超スピードで切り刻まれる。

部屋の一部は血で赤く染まっている。

「ライフメーカー！アンタの格の違いつて奴は分かった。もう十分だ…だからこんな戦いは終わらせてくれよ…」

たまらずナギから、凄惨極まりない私刑と化した戦闘にケリを付けるよう促される。

「私の孫弟子が優しくて良かったな…大分早めに逝けるな？」

「（ヒュー、ヒュー、ヒュー）」

ゲホ、げほ…黄昏の姫御子は、手に入れた。

バレンヌに、バンガードにいる 僕の下僕から念話が、入った。これで僕等の勝ちだ！」

最期に穴が空いて上手く喋れないが一矢報いてニヤリと笑う古代人。

「なら取り返すまで。」



そのまま全力で柱に投げつけめり込ませ…

「…ギャグン！」

大盾を胴目掛けて縦に投擲、落ちないように縫い付けると…

「これで終わりだ『ファイナルストライク』」

斧の魔力を限界以上に高めて武器が耐えきれず壊れた瞬間、一条の巨大なレーザーの一撃が古代人に直撃し…塵も残さず消し去った。

「では、始末したからバンガードへ帰ろうか。」

## Sa・Ga63 (後書き)

『ストーン・ストーン〜』』

サガシリーズの連携は、術の前部分がくっついて發動します。だからワケ分らない技やら魔法はてんこ盛りです。

『アースライザー』、 『ストーンシャワー』』

アースの方は力場による巨大な壁(岩)を作り、敵前列を攻撃する。發動するのは必ずターンの最後。  
ストーンの方は、よくある隕石の雨：覚えてたでもプチメテオくらいには役に立つ。

『マツドサンダー』』

強力な雷3連発。

手数が多い相手に使われると余計に痛い。

ロマサガ3のラスボスも使用するイヤな技。

『サイクロンスクイーズ』、 『メールシュトローム』』

サイクロンは単体を、メールは全体を攻撃。

どちらも渦潮やら津波、竜巻か嵐のようなエフェクト。  
前者はスタン（一切無防備）に、後者は即死アリで威力も有るのに  
普通に雑魚も使う鬼仕様。

ロマサガのアメフラシはきつと別の生き物だと思う。

『ファイナルストライク』

特定の武器を持つてると必ず使える技。

武器の魔力を解放することによって強力な爆発をおこして敵全体を  
攻撃する。

武器は使用後に破壊される。

ゴブリンソード！！

『アビスゲート』

七英雄やらも本気になったら使う技。

正直、背景が変わるだけに見えるので作者には分かりません。  
それよりその後、確実に出す技が怖い…

千の絆  
ミツレ・ヴァインクラ

ネギま！の主人公ネギの魔法具。

従者のアーティファクトを勝手に使う。

個数制限無しのチート仕様。

因みに、アーティファクトはマスター、従者のレベルを加味。その人間に相応しいモノが選択されるらしいです。

つまりネギは赤松神公認で、稀代のタラシというポジションが相応しいという事ですね？  
分かります。

というわけで海底宮編…完！！

さらっと水晶龍やら、フォルネウス影、本体も出しましたが瞬殺されてもらいました。  
彼らが弱っちいという訳ではありません。

バグだったりチートだったりで戦った相手が悪かったのです。  
一応、名無しの古代人君は仲間内でも最強という設定です。

だけど、他のSSでぼろんかすにされてるライフメーカーの強い所が見たかったのです！  
魔王はなんだかんだ、四魔貴族も従えていました。  
だから絶対、聖王より強かったに違いない。

異論、反論、誤字脱字の報告は幾らでも受け付けます。

色々と長くてコメントね〜！感想待ってます。

あの電撃作戦から3日が経った。

メガロメセンブリアは予定通り…

いや、首都を防衛していた戦艦スヴァンフィードが中立都市オステイアへ逃亡。

侵攻の妨げになる市民も居なかったために、当初の計画を遙かに上回る成果を上げて無事に陥落。

スヴァンフィードは現地で接收されて正規のクルーも立派な戦力に加算された。

古代人討伐部隊はライフメーカー自身が前線に立ち、最深部に控えていた古代人と戦闘。  
ゼクト曰わく…300年生きてきた自身も初めて主が隠していた力の片鱗を見たらしい。

もう…敵ながら哀れに感じるほどに術、技、奸計をねじ伏せる力の差を見せつけ圧倒。

最後は散々ボロンかすに痛めつけて…武器を犠牲に発動させた大技で、塵も残さず滅したらしい。

あまりのプレッシャーと力の恐ろしさに、紅き翼の奴らは勿論。部下であるゼクト達も背筋が凍るような…その場に居ただけなのに、心臓を鷲掴みにされたような感覚を味わったらしい。流石神サマ、パネエ！

途中、ナギとナギやらアダドーとかいう部下に問題も発生…部下の方は忠誠心故に死んでしまったようだ。だがそれも所詮は、世界消滅に比べたら些事。

ここまで聞いたらまずまず成功したように感じるが続きがある。

武装商船団所属の船乗り…今はバンガードに出向しているギャロン。そいつが『アスナ姫』を警護するプリードムムに生じた一瞬の隙を突き、『アスナ姫』を連れ去りゲートで逃亡。

古代人は最後の駒を失ったが戦争の、世界の行方を左右するjok er…『黄昏の姫御子』を手中に収めた。

かに思えたが……

「ねえ…おかわりは ない？」

「今日は用事があるからダメ。  
分かったらよそ行きの服に着替えて来なさい。」

「……………」

短く返事を返し、台所に皿を片付けてとっとこ歩いて行く。

アスナ姫には、一切の情報が入らないように、俺達の態度からも悟られないように注意して預かっている。

それにしてもアリカ…お前はホント、 İyi 女だよ。

お前が身代わりになってくれたから、大事な妹のアスナ姫は無事だった。

それにライフメーカー…全て見通した上であらかじめ仕込んだおいた、お前の秘策は確かに有効だったよ。

まあ、その選択と手段が絶対の正解だったかは俺には分からんが。



そんなことをつらつらと考えていたが、ふと柱時計を眺める。  
現在8:30。

今から家を出れば、アスナの足に合わせても9:00頃には城に到着する

今日の用事は10:00からだから、その1時間でのんびり資料に目を通せるな……

「まあぼちぼち行くか。」

アスナ姫は時間通りにバシッと決めてるじゃん！」

「ん……当然……」

胸を張ってサムズアップという高度なテクを披露するアスナ姫……

初めて魔法が解けてチビに戻った時には、マネキンの方がマシだと感じる生気の無さを披露してくれた。

短い間でなんでこんなに元気になったの？

呪いやらもレジストしてるの？

雰囲気も相まって強力な不思議ちゃんキャラに成った。

それでもだ……

「よしよし、一人で出来て偉いですな〜」

「わたしは れでいー……」

「ホントだよな〜」

何にしてもイイ傾向……  
年不相応なまでに聡明な点も出てきたし、これがこの子の地なのか  
な？

「それに比べてエヴァは……」

「……ほんと いつまでも……ごども」

アスナ姫にこんな事しんみりと言われたら……

「もう何も言えね〜」

「……………ね〜。」「

わざわざシゲンがウチまで来て『明日、最終決戦に向けて作戦会議をする』と予定を伝えてくれた。

そのまま返す訳にもいかないから、晚メシに招待。

開始時刻まで説明されたのが昨日。

当然ながらエヴァもその場に居た…

「お〜い、エヴァさん？」

いつまでもぼけぼけしていると俺とアスナ姫…「アスナでいい…」…  
…アスナと2人で城に行くぞ〜い。」

「ちよ、待ってくれ！

今…もうすぐ……………出来上がるから！」「

「……………」

洗面所辺りからゴチャゴチャしてる音、慌ててる雰囲気の流れてくる。

仕方無いからしばらく玄関で待っていると…

「よし、エヴァンジェリン　完　成　　エヴァンジ  
エリン　完　成！！」

雄叫びが響いてくる。

どうせ最近ハマってる魔法抜きで如何に美しく化粧するかに時間懸けてたんだな…

「マジ恥ずかしいわ…もう置いてくべ。  
いっそ遅刻して恥かきゃいいんだ！  
アイツも道知ってるから勝手に追い付いてくるし…イイよな？アス  
ナ。」

「……………うん…痛い目みないとダメ…」

「ほんじゃま…靴も履いたし参りましょつか御嬢様？」

「つむ…くるしゅうない……」

はぐれないように手を繋いでアスナと城へ行つた。  
本物のロリは年相応に肉が柔らかいわぁ〜

エヴァ？

人を待たせるようなロリババアは『ポイツ』です。

バレンヌ帝国の首都アヴァロンに存在する城

その城で最も広い大講堂にまともな列強各国のトップと將軍クラス  
…ついでに紅き翼も集まった。

俺とアスナが着いた頃には厳かな空気で静まり返っており、入室と  
同時に注目を浴びた……  
始まって無かったのになんで？

因みに置いてきたエヴァは影のゲートで先回りしたらしい…椅子に  
座ってぶーたれていた。

裏技使いやがって…今日の晩メシは差別して作ってやる！！

まあ、いざ会議とやらが始まったが…

「……以上を踏まえて何の捻りもありませんが、砲撃などの力業で墓守人の宮殿へ突撃。

紅き翼、七英雄、精鋭部隊が内部に踏み込んでターゲットを抹殺している間、我等は外部からの邪魔者を迎撃…シャットアウトします。ここまではよろしいですか？」

シゲンの部下兼変態仲間？の軍師コウメイが世界地図を指しながら侵攻ルートやら敵が仕掛けるだろう障害を解説してくれた。

長い前置きが有ったが、結局は殲滅戦だとざっくりと言ってくれた。北のメガロメセンブリア、南のヘラス、西のバレンヌ、極西のアリアドネーが全戦力を全てブツ込んで、世界のほぼ中心にある墓守人の宮殿へ四方から進軍する。技巧も糞も無い力技。

それも地形を変えるレベルで構わないと……

色々シミュレーションしたが、四方から一斉に攻めるのが一番率が

良いんだとさ…

シンプル・イズ・ベストですね？  
分かります、よく分かります！

なお作戦名は『完全なる世界』

なかなか粋な計らいをしてくれるもんだ。

これには参加者の面々もコウメイの話術と、作戦の合理性でほぼ全員が納得。

それでも極々一部から反対意見やらは飛び出す。

「だったら姫子チャンの代わりに浚われたアリカはどうすんだよ！  
黙って聞いてりゃ、犠牲もやむ無しってなんだそりゃ。納得いかね  
ーぜー！」

発言者：ナギ・スプリングフィールドと所属団体『紅き翼』に、会場全体から怒り、呆れ、嘲笑を含んだ視線が刺すように集まる。

今回は糞ガキの意見も間違っって無い。

だが、場合が場合だ。

「な、何を言うておるのじゃ!？」  
貴様は今、自身を口にしたことの意味を分かっておるのか!!  
いや、一時は共に行動したアリカ王女の話しが出て来ないから動揺したんじゃよな?  
皆様方、ワシの弟子が無礼を…どうかお許し下され!」

ゼクトは親しい者が切り捨てられたと錯覚したと苦しいフォロー。

僅か14歳という年齢と『一時は共に動いた…』という如何にも武人肌の老将達の義侠心をくすぐるワード。

まあ、実際は恋慕の情が大きいかな…

何にしても咄嗟に出たセリフにしては、一応の説得力を持っていた。  
俺も素直にゼクトの回転の良さには驚いたが………

「いや師匠…俺は正常だぜ。  
もう一度言うが、何でアリカの救出を勘定に入れねえかつつう事を  
言ってるんだ!」



「（あゝあ、あの糞ガキ…見事にやらかしてくれたな。」

断固として意思で渾身のフォローを内側から吹き飛ばしてた糞ガキ。ゼクト、詠春を愕然とさせ、アルビレオは凍りつき、ラカンは深く座り腕を組み目を瞑り、じっとしていた。

（ハハ、たかが女1人で冷静さを欠くなど…アレが偉大な英雄候補か？）

（全く、仰るとおり。

これではてんで頼りになりませんなあ。）

（それよりも寝てる者が居ますな……アレは間違い無く傭兵ラカンですなあ。）

（はあ…残念ですが紅き翼…

ひいては悠久の風に対する評価も改めねばなりませんまい。）

『コリア、ラカン！

今すぐその赤毛を黙らさんかあ！！』

『テ、テオドラ！静かにせんか馬鹿者ツッ  
此処はヘラスでは無いのだぞ。』

会場から好き勝手な意見とも言えない野次、たまに切実な要求が飛び出す。

どうなっかな〜と思ってたら騒動の張本人、ナギがブチ切れた。

「ガタガタうるっせえぞ！！」

俺はコウメイって奴に聞いてんだ！

下らねえこと抜かす奴らは魔法で吹き飛ばすぜ？」

杖を召還。『いつでも放てる』と見せつけるようにバリバリと魔力をたぎらせ杖を構える糞ガキ…

「……………」

無詠唱で放つため威力は落ちているらしいが、それでも規格外といえる『雷の斧』

逆を返せば、アレでも無詠唱で雷系の上位古代語魔法を撃てる実力者。ハイ・エイシェント

並の上位者に口を嚙む意外の選択肢は無かった。正直、理不尽の上無いがそれが賢明。

ゼクトや他の奴らも刺激しないように静観している。

小回りの利く部隊の代表として紅き翼が来た時からイヤだなあと思ってた。

そうしたら案の定この有り様だよ。バカヤロー  
おかげで会議は中断、見事に支配された。

この状況は、興奮したテロリストが爆発しそうなダイナマイトを体中にフル装備してるのと変わらない。

会場全体は一気に凍りつき、身じろぎすら許されない重たい空気に包まれているが……

これ以上アイツに好き放題やらせるつもりはサラサラ無い。  
だからと言って、今すぐ血祭りに上げるような真似は出来んが方法

はいくらでもある。

「（エヴァ 魔力の糸を這わせていつでも『マリオット』で潰せるようにしろ…」

真っ先に首の骨を折るんだぞ。」

「（それが妥当だな…任せておけ。）」

エヴァは何の感情も表さない鉄仮面で指先から静かに 紅き翼や糞ガキにも気付かれないように 確実に魔力の糸は這わせ、無事に腕、足、首に巻き付かせた。

アイコンタクトはホント役に立つよな…

そんじゃま次だな。

「（ユカリは、アイツを囲うように局所的『ワームホール』を発動させて、術を飛ばして無効化してくれ。）」

「（まどろっこしい真似しないで、今すぐやっちゃえば丸っと解決するのに…」

まあ、いいわよ。いつか埋め合わせは貰うけどな」

ユカリが、今も偉そうにぼざいてる糞ガキの四方にスキマの結界を仕込みを始めた。

これで奴の魔法が万が一発動しても安全。  
仕事は完璧…後が怖い。

背に腹は代えられないから仕方無いけどな。

これで最低限の仕込みは終わった…  
もしこれで糞ガキが死んだとしても鬼神兵の技術を組み込んで、盾くらいには活用しようかな？

「……………俺の『クイックタイム』発動が合図だ。」

エビスは既に霧隠れでいつでも首が取れる位置にスタンバイ。

ギルガメッシュはタンブラーロッドを懐に忍ばせ、鋭い目はアイツのどんな動きも見逃さないように監視している。

後はアスナだが…この子はマジックキャンセラーだから大丈夫だと

は思うが、世の中に絶対なんて事は有り得ない。

「(アスナ、お前は机の下で大人しく隠れてろ。)

「(わかった…)

「(ジーン、アスナの盾になってくれ…頼むぞ。)

「(しゃあないな…OK、そのチビっ子は任せな。)

ふう…これでその気になればすぐさま取り押さえられる体勢が整った事をコウメイに目配せする。

そしてコウメイはシンボルマークの羽扇であおいで淡々と、諭すように喋り始めた。

「ナギ殿…あなたは何の犠牲も出さずに世界を取り戻し、救えるとお思いですか？」

「ああ、！」

「ふう……感情的になつては議論は成り立ちませんよ。また敢えて私はこの場でハッキリと宣言しましょう……」

あらゆる損害、犠牲者ゼロで勝利を掴めるとは思っていないません。市民、兵士、王族……神でさえ一切を同列に扱います。」

「デメエ……………」

糞ガキの赤毛が魔力で逆立つ。

もう今にもブツ放してやるとありありと顔に書いて、コウメイに敵意剥き出しに……まるで親の仇のように睨みつける。

その恐ろしい形相とプレッシャーに会場の温度がまた下がったが……

コウメイはまるで動じず、ゆっくりと羽扇であおいでいた。

そして、どこまでも怜悧に研ぎ澄まされた……剣のような冷たさを以て、コウメイは答える。

「勝利は目の前とはいえ敵は異界の化け物…  
退路を断たれた彼らに、その程度の気構えでは負けるでしょう。  
時には非情にならねばなりません。」

「……………」

糞ガキの様子に変化は無い。

「2日後決行しますが今すぐ去りなさい。」

「ナギ…コウメイ殿が言う通りじゃ。  
ここは堪える…大人しく席に着け。  
アリカ王女を救う機会は必ず来る。」

ゼクトにしてもこれしか道が無く…  
『魔法を撃つならワシを撃つてからだ』と目で訴え、ナギの杖を自  
身の胸に当てて自制を求める…………

そして長い沈黙があった…



「ああ、分かったぜ……」

「分かってくれたか…ナギよ」

ナギが力を抜き、肯定する旨を言ったナギにゼクトは安堵したが……

「師匠、俺は俺の考えで動いて、好きなやり方で戦う……」

「……なん……じゃと……？」

「……邪魔して悪かったな、あばよ……」

一瞬だけ顔をしかめたが、へなへなと崩れ落ちるゼクトの手を振り  
ほどき会場から飛び出して行った……

ぞわぞわ

ぞわぞわ

ざわざわ

また会場からは野次が飛び出す始末だが、俺達も余計な仕事が消えてくれたから力を抜くことが出来た。

「ふひいゝ、無駄に神経張りつめてまいりましたわ。  
終わったら一杯行きはりまへんか？」

席を外していたエビスが戻ってくるなり、小指と親指でクイツと一杯やるサインをした。これはBAR『魔の巣』に繰り出す時のサインだが…

「エビス…俺はエヴァにサイフ握られてるから無理だわ。  
なんかわりいな。」

「あ…そうでつか、  
なら仕方あらしまへんわ。  
けど、久しぶりにノエルはんと一杯引つ掛けたかったでんゝ」

顎をさすりながらあの日を懐かしむエビス。

あの日は良かった…

リリスたん、ベラドンナさんのお酌。  
ダンサーちゃん、レインちゃんのセクシーなポールダンス。  
マスターお勧め『バクのなみだ』…おいしかった。  
気付いたらウチの布団の中だったけど……

「皆さんお静かになさい。」

各々が生命の危機から解放されたからか好き勝手に話しを始め、騒然とする参加者達を諫めるコウメイ。

「……………途中ちよつとしたハプニングがありました、2日後の決戦を思えば全ては些事です。」

皆さん、これが間違い無く最後の戦いになります。

短いですが、明日1日で心を整理してきて下さい。

稚拙な内容でしたが、私の話しはこれで締めくくらせて頂きます。」

やはりナギ・スプリングフィールドは最後まで引つ掻き回してくれ  
たが、無事に会議は解散。

紅き翼の奴らも約2年、あんなガキと行動を共にしたんだからすげ  
えな…

明後日に決戦を控えている……

明日は魔法球で美味しいモン見つけて、勝ち鬨の肴に味わおうかねエ。

S a ・ G a 6 4 (後書き)

『マリオネット』

小剣技、ボクオーンノロマサガ2

マリオネットを受けた者の攻撃対象を変える。

この小説内では、上記のマリオットは努力すれば扱えるかもしれないモノ。

エヴァが使う『ボクオーン』のマリオットは文字通り傀儡と化し、自由自在に操る魔技…

そんな設定。

『リリスたん、ベラドンナ〜〜(ry』

ロマサガ3

ロマサガ3の女性モンスターの美しさは異常。

ドットの見やすさはサガフロ、アンサガに勝るとも劣らない。

そんな丁寧に描かれたおっぱい！

スラッと伸びた足！

脇、尻：大事な所だけ隠して他は惜しげもなく晒したセクシーポーズ！

女性モンスターはカワイイネ！

因みに夢魔、アスラ師匠は上記の全てを兼ね備えています。

色々有りましたが愛故に苦しみ、愛故にナギは消えました。  
でも、原作ナギも一歩間違えばこうなってもおかしくないよね？

次回は墓守人の宮殿に行つて…殺してでも、世界を取り戻します。

誤字脱字、感想お待ちしてます。

決戦を明日に控えて家族と連絡を取る者など様々。紅き翼のメンバ  
ー内もそう。

アルビレオとゼクトは何処かへふらつと消えた。残るラカン、詠春  
は英気を養うためメシを食っている。

「なあ詠春、俺は前々から思ってたんだが何考えてこんな戦争に参  
加したんだ？」

ラカンが何気ない調子で…あくまで暇潰しといった感じで詠春に語  
りかけた。

現に聞いたクセして手は止めず、巨大な肉を切り分けてバクバク食  
っている。

その自由奔放な様子に若干うんざりしながらも、約2年共に過ごし  
てだいぶ慣れた。

律儀な詠春は溜め息混じりに答えた…

「この世界に来たのも義父…まあ、婿入りした先の親父さんだが、  
その人がちよつと訳ありだな。

義父の密命でメガロメセンブリアの勢力を削ぐため、成長限界を超  
える為の武者修行と新たな奥義の考察…色々考えた末に介入したっ  
てわけだ。」

グラスに注がれたドリンクを飲みながら詠春は、自分でも思い出すように語った。

「ほへへ、詠春は真っ面目だねエ。

俺なんかアレだ！皇帝からの前金1000万Dp、成功報酬100万Dpで引き受けたのがきっかけだからよオ！」

「ハハ、身も蓋もないが今は違うんだろ？」

「ん…この定食屋のメシウメエ！

オ〜イ、バッファローの本気ステーキおかわりな！。

そうだったな…今は古代人とかいうワケ分らんのに消されるのも気に食わねえからな。ポツコポコに畳んでやるつつうのがデケエな！」

『ワツハツハ』と豪快に笑いながら話し終えた。

こじんまりとした小さな店なので周りの客も突然大笑いをした男に驚いたが、本人は気にせず新しく来たメニューを平らげる。

そんな状況故に、生真面目過ぎる詠春は軽く会釈。

「はあ…そんな事だろうと思ったよ。

まあ、お前らしいっちゃらしいな。

ところで、ナギの馬鹿野郎だ！

もう時間が無いというのに今頃何やってんだ…」

「気にしても始まらねーぜ？

それよりこのミソシルってやつ！ウんまない！

食わねえなら詠春の分も食っちまうぜ〜」

既に手を付けていなかったオカズは箸でひょいひょいと口に運ばれており、残るは汁物と白米、付け合わせの野菜のみ…

通りかかった店員を引き止めると申し訳無さそうに口を開いた。

「……………すみません、Bランチください。」

時間はそれぞれの想いを嘲笑うように、いつも通り粛々と…無慈悲に過ぎていった。



天候はカラツとした最ツ高の秋空、吹き渡る風も気持ちがいい。

ライフメーカーを乗せた戦艦を先頭に雁が空を飛ぶように『型  
で省エネ運航。』

道中何回か、ワケの分からん悪魔？羽虫？…とにかく空飛ぶ敵勢力  
に出くわした。

その全てを圧倒的な戦闘力に定評があるライフメーカーが、超遠距  
離攻撃で一方向的に且つ速攻片付けてくれた。

初めて見たライフメーカーの実力はハンパ無かった…  
前方150°を瞬時に一掃する不可避の極太ビーム…もうね、『ド  
ツギアアアン』って何なのアレ？

1人で10馬身くらい差をつけてるブツちぎりの反則レベルだった。  
神様？とにかくバアちゃんからチートを貰った俺も呆然とさせられ  
たね。

決戦時に参加出来ないイベントユニットなのが悔やまれる……

ただ、自分じゃ分からなかったけど仲間からしたら、俺の『ギヤラクシィ』もあんな感じらしい。

いよいよ化け物の領域に踏み込んだと理解させられたけど、俺は元気です。

それと全く関係無いがあのだギは終ぞ姿を現すことは無かった。あれだけの啖呵を吐いたんだから当たり前だわな。

逆に土下座しても許さないし、首を落としてやったけどな！

そんなこんなではるる来たさ！墓守人の宮殿。

紅き翼、ライフメーカーとその部下、俺達七英雄…世界の鍵を握るアスナを連れて潜っている。

もしこの場にナギの野郎が居たら『なんで姫子ちゃんを戦場のド真ん中に連れて来んだ！』なんてぴーちく煩かったかも知れないがそれも無い。

ラカンと詠春とやらを除いた紅き翼の士気が若干低いが無関係いな。

サクサク進めることを喜ぶべき、間違い無くそうすべき。

まあ、現場にハプニングは付き物……

まず、腐った足場に嵌ったユカリも青筋浮かべて切れ気味

それを笑ったジーンの声に反応してコウモリが集って来る。

ありがちな飛び出す槍、ありがちな召還魔などのトラップを突破してきたが……

「宮殿？ふざけるなツツ！。  
デッカイクモの巢は張り放題、植物は道を塞いで無駄に埃は待っている。」

何なんだ此処は！！帰ったらすぐに墓守人の廃墟に改めてやる！！」

それでも進んでいたが、頭にトカゲが降ってきてエヴァが噴火した。

「そんなブンスカしなさんな…  
ホント、エヴァは子供っぽいな。  
表現方法を変えてみ？」

いかにも悪の大親分が隠れてるフロアに通じる、雰囲気たっぷりの  
ダンジョン……アリじゃね？」

「……」

七英雄以外の空気がヤバいです。

「……風情がある」

アスナ……やっぱりお前は可愛いわ（o^ ^o）  
荒んだ荒野に染み渡る天の恵み……コイツが居るだけで癒やされるわ！

「フフ、風情有る……か。  
その少女の言う通りだ。このダンジョンは、私達悪魔が顕在するに  
はうってつけなのだよ。」

バリトンボイスの渋い声が響いた後、道を遮るように闇が蠢き5体の人型を成した。

『初めてお目に掛かる以上自己紹介から…私の名はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン。後ろの者達は私の従者達です。以後、お見知り置きを……』

黒いしゃつぽ、黒いコート、黒いスーツに手袋をした素敵な髭の老紳士然りという悪魔が恭しく御辞儀。

後ろに控えてる奴らも水魔の類か、うねうねと体を組み替えている者達がちらほら居る。

だけどなあ……

「時間が惜しいんだ。アンタと遊んでる暇は無いぜ…クイツクタイム…！」

アスナを連れているリスク、こんなジジイと戯れるほど無駄な時間はない…だから無視するに限る。

ヘルマン爺が何か言ってるが関係無い。遠慮無く素通りさせてもらったが、追撃が有るかも分からん…とい

うより無いはずが無い。

「プリームム、お前は部下を率いて奴らを潰せ…分かったな。」

「分かりました。

主、皆様、御武運を…」

ライフメーカーは歩きながら指示を出し、プリームム達はすぐさま  
反転…ヘルマンだけでなく、召還魔を抑えるための捨て石覚悟で向  
かった。

これは事前にコウメイにより示された策の1つ。

外からの敵は連合軍が…

待ち伏せにはプリームム達を殿しんがりに使う

全ては太平の為…後世で非情と言われようが甘んじて受けよう。  
何の感情も抱かないように只、前へ突き進む！

そのうちに遺跡の雰囲気が変わる…

蔓が伸び放題、脆い足場や壁という粗い造りではなくなり、壁にはルーン文字が刻まれて通路も魔力が循環しているからか怪しい光を発している。

それに、どうやら向こうもこれ以上は進ませたくないのか悪魔や化け物の襲撃が一気に増えた。

しかし…

「邪魔だ…失せる。」

ライフメーカーが先頭に立ち露払い、紅き翼は後方に…七英雄は中心でアスナを庇いながらだが問題無く進む。

ひっきりなしに迫ってくる障害を雑払いながら、1人の落伍者も出さずに進み、無事に遺跡の終点…ライフメーカーが言った通り目当てのゲートがあるフロアに辿り着いた、が…

「……まあ、いい加減しつこいな。

大人しく頭を垂らすなら、苦しまないように殺してやるぞ?」

「遠慮するよ。」

それに此処で君達の足止めして、儀式が間に合わないように時間を稼ぐだけで僕等の勝ちだからね…

此処から先は何人も通さないよ？ノエル！」

落ち窪んだ眼でこちらを睨み付ける、燃え盛る焰を纏った老人…名前には分からないがケルベラスで遭遇した最初の古代人か。吸収したモデルはアウナス。何とも分かりやすい奴だ。

流れるような美しい金髪と全てを魅力する容姿、3匹のドラゴン・スピリットを侍らした女…コイツはミトだな。吸収した大物は間違い無くビューネイ。

三又槍に緑の長髪、高校生くらいのガキ。情報では海底宮に潜み、バレンヌ転覆を謀った古代人…吸収した奴はフォルネウスか。

そして最後の1人…コイツは例外か？

あらゆる動物を取り込んだらしく四つ脚、棘や角、帯剣までしたミノケンタウロスのような異形種。

直接戦ったことは無いが…間違い無い。

ヘラスで暴れまわったアイツだな。



案の定、古代人4人衆が待ちかまえていた。  
それも最初から本気らしく、ビリビリと肌を刺すような強烈なプレッシャーを発している。

そのやる気を共存に向けていけば…今更考えても詮無き事。

どちらも行き着く処まで来たんだから、どちらかが今日消える運命。

「ほら…この世界が終わりを迎えようとしている音が聞こえないかいノエル？」

君達の方こそ頭を垂れるなら、僕の力の一部としてなら生きても良いよ？

さあ、もたもたしないで掛かってきなよ！

人質の『アスナ姫』も押さえてるんだから奪い返すのも考えると、タイムアップまで余裕は無いんじゃない？」

あのフォルネウス野郎！報告通り、人の弱いところをほじくって楽しむ真性のゲスだな。

ご丁寧に部屋の隅…古代人の背後には、意識が無い【アスナ状態である】アリカを見えやすい位置に磔にしてある。

焦りから此方がミスをするように仕向けてやがる。

今も憎らしいほど余裕の顔を浮かべて挑発しているが、貴様等は奴隷や遙か下だと見下した存在との知恵比べに負けたんだ。

神が全力で施した細工に元・人間が気付いていない。

何よりも人間の可能性と情を遙か昔に捨てた化け物。

アリカの姉として根性、愛故に自己を犠牲にしても実行した切り札を、見抜ける道理はどこにも無い……  
その慢心が敗因だ！

だから今は好きに笑っているがいい。  
そのすぐにその憎たらしい顔を、ぐちゃぐちゃに歪ませてやる！！

「うるせえ！！準備ぐらいさせろ！  
ゼクト：あのガキが抜けた手数不利はギルガメッシュで補わせる  
…しかし、いつもとは勝手が違う。  
戦闘力も相手の方が勝っているかも知れない。  
それでも出来るな？」

ゼクト…もとい紅き翼の奴らは何の気負いも無く、全員が凜然とした戦士の顔で頷いた。

どうやら、俺は彼等のことを色眼鏡を通して見て、過小評価していたようだな。

なら、後は各々の本分を果たすだけだ。

この場は彼等に任せて、俺達は予定通り世界を救う儀式とやらを終わらせるか。

「…アスナ、お前も覚悟はいいな？」

「うん…」

その言葉と同時に、今まで姉のアリカに擬態していたアスナを光が包む。

そして、元の小さな黄昏の姫御子…アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアが現れた。

古代人達も自分達の理解を超えた異常なまでの偽装魔法に驚き…結果、冷静な思考を失った。「何だって!? 黄昏の姫御子が…クソ、嵌められたッッ  
すぐにこの畜生共を潰すぞ!」

あのリーダー格の号令で慌てて襲い掛かって来る化け物共。

これを待っていた…

ゲートの前からは邪魔者が消え、完全がら空き状態だ。

『クイツクタイム』

その瞬間から世界の全ては色を、音を失い灰色に。

そして、悪鬼羅刹が如き形相で此方に飛びかかっている奴らの脇を素早く抜けて、ゲートを起動。

潜り抜けたと同時に効果は切れ……

そして『時』は動き出す!

「ハッ！やられた…」

まさか時間制御系魔法の運用を可能にしていたなんて…

『ソウルステイル』で、ゲートの前に陣取ってるコイツ等を始末してほしい。」

「お安い御用だ…死ねッッ畜生共！『ソウルステイル』！！」

生物から極限まで生命力を抜き、あっという間に死に至らしめるという数ある魔技の中でも最凶と名高い技の1つ。

それがまずギルガメッシュに狙いを付け足下からノーモーションで発動。血の赤を彷彿とさせる玉が呑み込むかと思われたが…

「どっこいしょういちっとお〜！

へへ、マヌケだぜ！」

見切りにより身体が反応…素早く安全圏に退避した。

「……………貴様ッッ！！」

「その技はとっくの昔にノエルから見切りを授けられてんだよ！

残念だったな。爆裂ジジイ！」

「畜生の分際で図に乗りおってッッ……」

怒りによって体から噴き出す魔炎の強さが増す。

だが、この場に立っている連中に、その程度で引っ込むような者は居ない。

「さっさとブチのめしてハッピーエンドと洒落込むか！」

勢い良く六刀を抜き、完全戦闘態勢のギルガメッシュ。

「世界だとか小難しい事は知らねえが……落とし前は付けて貰うぜ！」

ラカンが軽く首を鳴らしてファイティングポーズを取る。

「………とんでもない大仕事に巻き込まれたもんですね。」

困りましたねと肩を竦ませて大袈裟に言いながらも、アルビレオは魔力を練り上げる。

「来てよかった…京都神鳴流がどこまで通じるか本気で試せる。」

詠春の静かな闘気に呼応し、鞘に納められている夕凧も『チチチツ』と紫電が滾る。

「生あるものは必ず死ぬ。しかし、死ぬために生きているわけではない！」

ゼクトが断固とした意思で言い放つ！

ついに最終決戦の火蓋は切られた。

S a ・ G a 6 5 (後書き)

さて…分かってる方も多いかも知れませんが、ライフメーカーがイ  
ベント・ユニットである理由も次回にハッキリします。

そしてナギ……

そしてアリカ……

長かった戦争編もあと2、3話くらいかな？

誤字脱字、感想お待ちしてます。



S a ・ G a 6 6 (前書き)

衛春さんが好きすぎて困っちゃっ  
…  
本編は長いけど、ゆっくり楽しんでいってね！

「ラカン…インパクトオオ」

ラカンが「千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・メタ・キーリオ  
ン・プロソーポーン）」で籠手を造り全力で殴りつける

『バオオオオオオ!!』

獣の古代人は自身の怪力と武装を以て迎え討った。

「しゃらくせえ！オラアツッ」

籠手を破壊、本体の拳とかち合った時に蓄積された力の衝突に耐えられず古代人の大剣が砕け散る。

それでも、幾分か軽減した結果は如実に現れる。  
急所の密集地帯、胸部にラカンの拳は突き刺さったが…。

「チイツ…仕切り直しだ！」

手応えは無く、ラカンは舌打ちすると追撃を掛けるために走り出す。

肉と皮、鱗に棘という天然の鎧も纏っているためか予想以上に浅く入ったのだ……

ズズーーン……

果たして巨体は吹き飛ばされ、轟音を立てて壁を砕きバウンド…倒れ伏した。

確かにラカンの最強打を受けた、が…まだ死んだ訳では無い。

只単に、身体の機能を狂わされて麻痺しているだけ。

余力は十分…今も立ち上がるうともがいており、時間稼ぎの為に地盤を削り取り雨霞と投げつける。

「（クソ、さっきからコレの繰り返しだ…）このタフガイ野郎。さ

「つさと沈みやがれ！」

再びラカンは籠手を造り上げ特攻する。

だが古代人の下に到達した時には既に、スタン無防備状態から回復を果たしている。

そして使い物にならない大剣だったゴミをぞんざいに投げ捨てると、形態を変える。

それも、ごく丁寧にミノケンタウルスのような異形から、格闘に主眼を置いた筋骨隆々…限りなくラカンに似せた人型へとだ。

『バルバルバルツツ…ウオオオオオオオ！』

『さつきまでののは小手調べ。ここからが本当の戦いだ』とでも言うように雄叫びを上げながら胸をドラミング。

なお、どういう構造か分からないが一発打ちならすごとに筋肉は強靱に…目に見えて大きくなり、最初はラカンと同等だった体格も巨大化。

中学生と小学校高学年くらい…50cmくらいの身長差で見下ろすとニヤリと笑い、「チヨイチヨイ」と右手で招いた。

コレには流石のラカンも驚いたが、限りなくフェアで世界を賭けた戦いというのも忘れて……1 闘士として挑戦は受けて立つという本能が湧き上がって来た。

「こつなりや根競べだ…オラアアアアア！」

『ガアアアアアアアツツ！！』

トップスピードで駆け出し衝突、レスリングのように腕力勝負がっぷりよつに組み合う両者！

「いんにゃろっ！」

『ゲッフッフッフー！』

混じりつけ無しの純然たる力と力のぶつかり合いに…まだ終わりは見えない。

「いい加減しつこい男だね！

地力は私の方が上なんだからさっさと諦めて、くたばっちまいな！」

「……………」

女の古代人が従えた使い魔と共に連撃を繰り出してくる。

それもギリギリで視認可能な速度：肩の動きと直感から予測。

暴風圈の中で小刻みに夕凧を振るって攻撃を逸らし、短刀でちまちまと斬りつける。

ひたすらこれの繰り返し。

眼鏡なんて開幕すぐに使い物にならないゴミに変わった。それは初手故に紙一重で避けたから：これが首だったら死んでたな。

実際、当たれば重体、掠れば最低でもその部位の肉は持って行かれるくらいの重傷は覚悟せねばなるまい。

そんな集中力の枯渴が死に繋がる極限状態の中でふと、昔の情景が頭をよぎった。

修練場も兼ねている我が家の裏には山が広がっている。  
そこは普通なら子供は入れない禁足地。

だが、鬱蒼と茂る竹や杉の木、すぐ傍には手拭いを濡らしてサツパリ出来る沢も有った。

だから悪いと分かっているながらも、子供ながらに一心不乱に大木へと打ち込みを続けて、陽もとっぷり暮れてとうに夕方を過ぎた辺りに……どこからか現れた父から叱られて家に帰る自分。

というのも、己は青山宗家の人間だが決して強いと認められ、期待された者では無かった。

逆に、全てが中間。凡庸という言葉が相応しい子供だったと今なら理解できる。

それでも父祖から受け継いだ血と使命は十二分に宿している自負は有ったから、自分なりに努力に努力を重ねて後継者候補にまで追い越した。

だが、世の中そう甘くない。

『強さ』という点で上を見上げれば、青山鶴子という遠く年の離れた従妹がいる。

彼女は自身とは明らかに違った：

4の頃、ひよっこり道場に顔を出し、斬岩剣を見よう見真似で会得。

5の頃には斬魔剣を…周りの兄弟子、姉弟子を五段も六段も異常なスピードで追い抜き、当時13であった己と肩を並べた。

それ以来、文武両道を旨としていたが武一筋。学は常識程度に留めて道場、山、道場、模擬戦と以前にも増して研鑽を続けた。

それでも俺が京都を旅立つ直前。

鶴子12歳の頃にはほぼ全ての技、奥義の極意を会得。

俺は剣術一筋で極めて、他は最低限かじった程度……

彼女は刀、槍、杖に拳術と多岐に渡る神鳴流派を完全に我が物とし、



長老衆はもちろん全員が最強と認める戦士へ成長。

惜しみない讃辞を浴びていた。

早い話…彼女は天稟を持っていた訳だ。

それも歴代の最強を名乗ってきた戦士と比較しても見劣りしない……  
一番星のような誰よりも強く、眩しい輝きを放つ稀代の天稟。

仲間内では初代様の再来とまで噂されている。

まあ、そう言いたくなるのも分からなくもない。

あの才の前では、どんな天才も有象無象の凡人と変わりない……  
そう考えればナギのバカ魔力もその類かもしれぬな。

「フ……」

「おやおや！とうとう恐怖で頭が可笑しく成っちゃったかい？  
だったら無駄な抵抗は止めな。」

頭を吹き飛ばして楽にしてあげるからねエエ！！」

どうやらさっきの笑みを見て、俺が追い詰められた末に発狂しただと勘違いしているらしい…

黙っていたれば傾国の美人と謳われるだろう美貌も、戦いによる興奮で昔に退治した山姥の方がよほどましに…まあ、それは行き過ぎでも同等に醜い。

「む！？」

また昔…というよりつい最近の情景が蘇って来た。

その日もいつもと同じ様に裏山へ行った。

しかし、打ち込む際に誰かに監視されている錯覚を覚えた。そもそも、この山は一般人からも有名な魍魎の匣。

だから妖魔の類だと直感に従い、小太刀を投擲したが……

「これ！いきなり爺に刃物を投げつけるとは、青山の倅も随分と格が落ちたもんじゃわい。

うーん…嘆かわしい世の中に成ったのオ。

これは返すぞい。ほいほいつほほ〜い！」

まるで霧が像を結ぶように何もなかった場所に…後ろに大きく出っ張った異形の頭に大きな丸いイヤリング。

顎髭と眉毛は伸び放題、伸ばし放題で体毛全白髪。

しかしかなり上等なまるで武士が腹を斬る時のように白一色だが紋付き袴では無く、普段着に属する色無地を着こなした怪老人が現れる。

そして彼はふさふさの顎髭を撫でながら、フガフガ文句を言って杖を振る。

すると、小太刀をふわりと浮かべて柄の方を向いて俺に返ってきた。

此処まで来れば下手な妖魔より質が悪いと、この界限では口に出すことさえはばかられる存在。

「近衛老…ですか？」

もしそうなら…この京都に何をしに来たのか。

「ふお？もしかしてワシが誰か気付かんかったの！？ワシが悪の魔法使いだったら、お主は今頃ぼっくりさんじゃ！」

危機察知能力が衰えとるんじゃない？」

鼻毛を抜きながら飄々と答えるこの妖怪爺は、やはり近衛老だった…

正直、そうであって欲しくなかったが仕方有るまい。

「それが最期の言葉で構わんな？」

木刀とはいえ立派な武器。更に小太刀も有るし、神鳴流は武器を選ばない。

殺気を込めて距離を詰めたが……

「ふおおおお！？ちよ、タンマ、ストップ、自重するんじゃないよ。」

今日はお主に相談が有るんじゃないよ、  
斬り捨てるなら、聞いてからにして欲しいなあ、なんて思っとるんじゃないが……」

本当にこの人は年寄り連中が語るような悪逆非道の下衆なのか？

あたふたとみっともなく慌てる様子は、どう転んでも小物にしか見えなかった。

だから、演技がどうか確かめるために耳を貸すことにした。

「……………元が付くがあなたは身内だ。私としても進んで斬りたくは無いです。」

それと無理に押し入ったのでしょうから我等西の追っ手が来るはず……………手短かに御願います。」

「うむ、実はのう……………」

如何にも悪戯好きな好々爺という風に破顔すると、周りを見回してから語り始めた。

その内容は、近衛の党首と目された自身が何故、東へ渡ったか……………

この世界と魔法世界が置かれた状況と近い将来、襲来する危機……………

捨て鉢に生きるなら、武者修行を兼ねて魔法世界へ行ってみる……………あらゆる場所に道は続いている。

情報は有っても自由に動けないワシに変わってメガロメセンブリア

の力を削げ…

大まかに表すとこの4つだった。

「話しはそれだけですか？

もういつ何時、父達があなたを補足するか分かりません。お引き取りを…」

「何じゃ〜い。最後まで愛想笑いの一つもせんとは…  
ま、裏切り者じゃから仕方無いかもしれんがな…じゃが、最後にこれだけは頼む！」

「！……」

この時、近衛老が纏っていた雰囲気がガラツと変わり、森の木々達もぎざざわとざわめき立った。

「ここから先は糞爺の戯れ言では無い。

ワシの娘…近衛桜を支えてやってくれんか？」

「……………」

「ほれ：親父はジジイで、近衛家秘伝の写本を盗んだ裏切り者じゃ。妻も先に逝ったあの娘は、間違い無く血族にいびられて難儀している筈じゃ。」

「こればかりはお主にしか頼めないんじゃ！  
どうかこの通りじゃ：願いを聞いて下されい。」

恥も外分も無く、上等な生地を使った白い色無地が汚れるのも構わず、若輩者の自分に土下座をした近衛老。

本当ならば黒の紋付き：正装で来たかったらう事は想像に難く無い。

だが、どんな理由があつたとしても西を、家族を捨てた自身の行い。だから近衛の家紋は背負えない為に色無地を選択。

監視には、あくまで東の長として内通者を作る一環と言えば説得力も生まれる。

何よりその姿には、本心は親として何かをしたい。  
だが叶わない、何も出来ない歯がゆさ、悔しさ、大きな親心が感じられた。

だから、あの時の自分は……

「……………努力はしましょう。」

関東魔法協会の長でも無く、近衛近右衛門でも無い……………只、娘の無事を祈る親の願いに応えた。

其れからは、研鑽の合間を縫う形だったが自分なりに東とメガロメセンブリアを調べ、近衛老の話しの信憑性を知り。

もちろん父達には報告したが……………逆に内輪で揉める西の醜態に愕然とした。

近衛老が東へ渡るに至った苦悩、渡ってからの苦悩が……………まだ一端しか覗いてないが理解した。

近衛老の頼み通り桜殿にちよくちよく顔見せをしているうちに、逆境を跳ね除ける凜とした精神。

袖口で口元を隠しながらも、鈴を転がすようにコロコロと笑う慎まやかな仕草と明るい性格。

何時からか彼女に惹かれる自身に気付き……………



使命や血と共に受け継いだ全てを捨てても護りたい、掛け替えの無い大きな存在へ…

初めて自分の意思で神鳴流を振るう理由が見つかった……

だから、この程度の猛攻で狂うようなら…

あのギルガメッシュに為す術無く、あしらわれて千鳥を取り上げられたあの日に……

義父に話しを持ちかけられ、魔法世界に来る前に…

もっと言えば神童・鶴子が存在したことによるプレッシャー。

宗家の長男でありながら、あまりに弱すぎる自身への葛藤した幼少期…既に己は終わっていた。

嫁と出会い、初めて守りたいと思う前に…

そして彼女が受けてきた辱めに比べれば……

「温い…まるで、なっちゃいない。」

「何がアンタを突き動かす！？利き手、順手も傷だらけでふらふらのクセして強がってんじゃないよ！」

「……………」

頬を鎌鼬が切り裂いた痛み。

熱波、冷気を合一させた傷み

痛みは耐えられる…

この世界で敗北したからこそ、更に高みがあるのも体と頭で理解した。

そして、一切の連絡を絶ち再認識した彼女の存在。

まだまだ試してみたい事、アイツと見てみたいモノはごまんとある。

だから幾らでも耐えられる。この戦いも勝つべくして勝つ。

「もうじれったい!!」

「……………」

古代人が距離を取ったな…これから大技を出すから見てくれと言わんばかりに気を高めている。

「アンタみたいに弱い癖にここまで粘った虫けら!

何よりもその目が気に入らないんだよ…『超高速ナブラ』!!」

「……………」

3匹のドラゴン・スピリット達が俺を中心に三角形の陣形を取る……成る程、どんな技かは大方読めた。

本当に、まるでなっちゃんない。

「この時を待っていた…神鳴流奥義 百烈桜華斬!!」

『メエ!?』、『デツデエ』、『オオオオオ…ツツ!?』

即座に気を円範囲を放出しながら雑払い、漂っていた使い魔を一掃。手数も一気に減ったからやりやすくなったな。

「アタイの可愛いベビー、ドッグ、バードがアアアア!!  
ア、アンタ!?もしかして……」

よほど使い魔とやらが愛おしかったのだろうなあ。  
絶叫までして俺を睨んでいる。

「目を見開いて此方を見るな…目が腐る。  
それに、わざわざ斬りやすい位置に飛んできてくれたんだ。  
なら斬り捨てるのが礼儀だろ。」

「グウ……ぶつ殺してやる。  
絶対にぶつ殺してやるウウウツツ!  
うああああああ!!」

岩礫の術を乱射しながら、狂ったように此方へ突進してくる古代人…  
戦いを越える度に手に馴染んできた相棒 - 夕凧もさつきから『早く  
オレを振るえ！あの醜女をぶった斬れ』と言わんばかりに紫電で自  
己主張までしている。

いいさ… 思う存分、力を解放させてやる！！

「死ねえエエエイ！」

「神鳴流決戦奥義 真・雷光剣」

「ひいい！？」

抜刀からの切り上げが顔を斬りつけ、古代人が怯んだ所を大上段に  
構えた一撃を叩き込んだ。

『イル・ストーム』！！

『ヘルファイア』！！

体から噴き出す魔炎が毒素を伴い、詠春を焼き払い、じわじわと毒で動きを止めようと搦め手も同時に炸裂。

基礎技にして、バレンヌ帝国でも名のある火術者が放つ『ファイアストーム』の威力を遥かに越えた魔法だった

「うわっアチチ！ やりやがったな、こんのサイコジジイ！  
『ナイチンゲール』、『霧氷剣』からの…『多段烈風剣』ッッ」

それでもすぐさま毒を解除し傷を回復。

絶対零度を誇る氷剣の魔力を解放し、怒涛の風剣で叩きつける！

ギルガメッシュはまず考えたのはコイツの特性への有効打と各々が得意とする攻撃方法。

ラカン：拳闘士型…超接近戦など問題外。  
まず最初に選択肢から消去。

アルビレオは重力操作…ブラックホールも自爆してしまうし、可能かも分からない。

ゼクトはあらゆる魔法技術に精通、年の功とは言ったもの…確かに有効打は有る。経験も豊富だから任せたいが、あの緑髪がいる。

詠春…落ち着いた物腰と神鳴流に伝わる斬魔剣。

刀を通して己の気を一気に放出し、幽体を引き裂くうってつけの奥義。

正直、この男ならと一瞬迷ったが旧世界人は脆すぎる。自身にも似た技は有る…却下。

それより、他の相手をして欲しいと念話を送った。

そして、ノエル達が去った際に自身に狙いを付けたのを幸いと、敢えてプライドを逆撫できるように挑発。

この炎の魔人が自身に釘付けになるよう仕向けた。

それから『音速剣』でフォローも入れつつ、敵を分断。攻撃も地味ではあるが着実に成果が出る技を選択した。

そして目論見通り

『ぐぬぬ…畜生の分際でワシと同列のつもりかッッ…焼き払ってやる、塵も残さず焼き払ってやるぞオオオ!!』

「ぶぶぶ…ワシは焼き払うぞ〜!

おお、怖い怖いwww」

『ワシを愚弄する者は何人も許さん!』

最初よりも遥かに怒り、荒れ狂っているし、猛然と仕掛けてきているが蓄積したダメージは隠しきれしていない。

焰の勢いは目に見えて弱く、動きは精細さを欠き、注意力は散漫になっている。

所詮、他人から奪い取った力に振り回された素人。幾ら恐ろしい火力を持っていようが、勝ち目は十二分にある。

そして戦いに派手さや優雅さは要らない。

只、目的を達成するのみ…挑発、外道は当たり前。敵が勝手にプレッシャーを感じれば丸儲け。



流石に本気の古代人とやり合うんだから腕の一本、二本は落とす気でいたが…

もう後はくびり殺すだけだし…チヨロいな！

霧氷剣以外を鞘に戻してズンズンと近づいて行くとよぼよぼのジジイみたく喋り始めやがった。

『この姿で追い詰められたのはノエルだけだ…

だが、図に乗るな。

貴様等ごときに運命は変えられんぞ。』

へえ、奴さん、力が出なくてカツカツだから時間稼ぎしてるらしいが…【運命】ねえ。

したり顔で語ってくれちゃってさ…ホント便利な言葉だぜ。

だがなあ、運命やらワケ分からんモノを逃げ道にして諦めんのが、俺は何よりも大ッ嫌いなんだ。

「ジジイ…そりゃ無理な話した。

調子こかせて貰うぜ！」

あゝあ、自分でもかなりの悪人面で笑ってんのが分かる。

まあ、兜で見えるはず無いけどな！

「ゼクト、私の術に合わせて下さい！」

古代人の真つ正面にアルビレオ

「合点じゃ！」

古代人の後ろにゼクト

「ちょこまかと飛び回ってッッ」

ライフメーカーにボコボコにされていたとはいえ、力の一部しか使えない分体でもかなりの脅威を知った2人は挟み撃ち。

常に動き回り、狙いを付けさせないよう戦い続けるゼクト達にいい加減鬱陶しさを感じている。

「足下がお留守ですよ。」

重量の本質は星の力…引きつける引力と弾き出す斥力の轟

アルビレオが強力な引力で足止めをすれば…

「ほれ、下を向いては前が見えぬぞ？」

阿吽の呼吸で魔法を発動。

空から岩槍を降らせて追い詰める。

「雑種が調子に乗るな！『マイティサイクロン』！！」

2人纏めて始末しようと力の片鱗を除かせる。

その力は気合い一発で、内巻きの強烈な竜巻を発生させた。

「むむ、こりやたららん。」

ゼクトは咄嗟に感卦法を発動。

無事に竜巻から逃れたが…

「う、これは…無理です！

ゼクトく、ヘルプ、ヘルプ…！」

抵抗むなしくアルビレオは体が浮き上がり、ズンズン引き寄せられている。

切羽詰まったアルビレオは逆転して、意外に余裕そうに助けを求め

た。

「待つとれ…冥府の石柱！」

だからゼクトは『割と余裕じゃね？』と石柱を降らせただけ…  
意味は勿論、引力でしがみつけば？

ゼクトはこれで大丈夫だろうなあとと思った。

古代人も『やられたツツ、気流を乱された…畜生』と苦虫を噛んだ  
ような顔をしたが……

「あ、ちょーあ、当た、あたばばば…うべエ!？」

アルビレオは無事助かった。

ゼクトの生やした巨大な石柱の面に、すごいスピードで顔面から強  
打して……

「「……………」」

「……………チッ、この子供ジジイめ！」

「黙れ、お前こそ子供ジジイじゃ！  
アダドーのこと…忘れたとは言わさぬぞッ」

ゼクトは後味が悪いし、古代人的にもあんまりな結果だったので……

無かった事にした…

「ふう…痛たた、体中が打ちつけられて痛い。

けど、傷は浅い…『治癒』<sup>クイラ</sup>

ふう、生きてるって素晴らしい！」

まあ、アルビレオ…頭はパツクリ割れて、血イダクダク流してたけど普通に治癒したから生きてるんですけどね！

何にしても…

重力以外にも治癒の魔法に定評が有って良かったな。  
アルビレオ・イマ…！！

「では私のターン！ ±（引力、斥力）を最大に…場を一掃します！  
『ブラックホール』…！！」

威勢良く言ってるように感じるが、頭へのダメージと流血で朦朧と  
しているためそんな事は無い。

むしろ2人に全く気付かれないまま発動。

運良く、たまたま、ホントに神の悪戯的に…ピンポイントで古代人  
の足元に光さえ呑み込む悪魔の口が現れた！

「わっしやっしや！古代人…ざまあ！じゃ。

巻き添えで吞まれちゃたまらんわい…それ、スタコラサッサじゃ  
！」

「あ、あんまりだ！？こんな結末あんまりだアアアア！？  
まだ僕は本気を出して無いんだぞオオオオ！？」

あんまりな断末魔を上げながら古代人最強を名乗った彼は、為す術  
無くスキマの彼方に消え去った…

「ふう…悪は滅びた。」

「ええ…ですがゼクト、ぶっっちゃけハンパ無く痛かったんですよ？」

顔はニコニコと笑っているが、目は全く笑っていない。

まあ、敵からのダメージはゼロ。

味方からのダメージ100だったら誰だって頭に来る。

「…許せ。それに敵は残っておる。

向こうを見てみい。」

「はいはい…」

納得はしたが『ぶつすー』と、頬を膨らませて不満たらたらの顔。

それでもゼクトが指差した方を順番に見れば……

ギルガメッシュ、詠春が受け持った古代人は揃って半死半生。  
素晴らしい仕事をしてきている。

しかし…

「ラカン全力で垂直落下パワーボム・インパクトオオオ!!」

「ンゴオオ!?ンゴ、ンゴゴ…ギョベ!!」

古代人と仲良く拳で語り合うラカンの姿が!!

頭から体の半分まで埋まった古代人は持ち前の無駄なタフさで素早く復活。

「フン、フン、フンフン、フンガアアアア!!」

「あだ!うぶぶ、ぐえあ!?めがらば!？」

ラカンの足を掴み、ハエタタキのようにバシバシと何回も、執拗に叩きつけている。

簡単なようで凶悪な威力を誇る荒技は遠心力による血流の阻害、文字通り化け物の膂力によって異常に硬い地面を次々に陥没。

バカみたいに頑丈なラカンにもかなりの大ダメージを与えている。

旗色があまりに悪すぎる。



「ラカンのフォローに回るぞ。」

「まあ、コレは仕方有りませぬ…」

ゼクトと共に未だ壮絶な殴り合いを続けるラカンの加勢に向かおうとしたが……

「待、待てよ…僕等はまだ負けない！」

貴様等のような畜生に…僕等が負けてはならないんだツツ」

半死半生…ボロボロになりながらも、ギリギリで生還を果たしたフォルネウス型の古代人。

だが、下半身は異界から生還する際に失ったらしく腕で力無く這いずり、声の限りに叫びを上げる。

「貴様等のような畜生達をかき集めても遙かに多い同朋達に…安住の地を。」

（幾千、幾万、記憶が擦り切れる程の年月…次元の放浪にピリオドを打つ…！）

(イズルコ君！)

『…おおお』

体からは既に焰は上がらない。

ギルガメッシュの足元に転がる骸でなく、中心部の核が淡い光を返すだけ……

(ミトー！)

「……………」

既に魂は冥府に吞まれかけている…うつすらと、かすかに残る力を振り絞り頷いた。

(カゴークフツツ)

『ブモモ！』

ビタン、ビタンと恐ろしい勢いで繰り出すラカンハエタタキは止めずに力強く頷いた。

(こうなれば奥の手だ！僕に力をくれ！)

この念話がスイッチとなり獣の亜人は動き出す！

「バルバルバル…グオオオオオオ！！」

四つ脚のミノケンタウロス型に化けるとラカンを振り回しながら詠唱の元へ爆走。

「くそ！ラカンを離せ！！」

『バルアアアア』

詠春は夕凧を突き立て構成の甘かった片手を斬り飛ばすことが出来た。

しかし、カゴークフもさるもの…無事な腕を伸ばして空中でキャッチ、ラカンで衛春を跳ね飛ばすと転がっていたミトを回収。

そのまま部屋の中央で力を溜めているリーダー格の古代人へ投げると速攻で反転。

ラカンはギルガメッシュにブン投げたが、受け止められず避けられ…壁に激突しやっとな解放された。

その時の僅かな隙に、巨体からは想像も出来ないスピードで接近。イズルコと呼ばれた古代人の回収を果たす。

それでも……

「これ以上は走らせねえッツ！！  
ここでくたばりな！！」

ギルガメツシユと擦れ違い様に足を切り落とされたカゴークフは……  
……仲間を脇に抱えて、自分達を待つ仲間の元へ無理矢理飛翔。

「止めるんじゃ！何を企んでおるか分からんが全力で止めるんじゃ  
ア！！！」

「そんなこと！分かってます！  
今、全力で重力を加えています！」

「衛春！」                      「おう！」

『双刀 雷 殺 斬！！』

その過程で幾つもの魔法、斬撃を一身に受けたために体はバラバラ  
になりながらもイズルコを守り通して到達……

咄嗟の自己犠牲は完遂された結果…

【最早、この身で助かるうとは思わない！

此処からは本気の本気…貴様等に真の地獄を見せてやる。

我等4人の力を見る！】

4人が健在で、バラバラに戦っていた時とは比べ物にならない底冷えさせるような威圧感。

イズルコ、ミト、カゴークフ…そして最後の1人

4体の魔物が肉塊を中心から生えた異形の化け物…絶望の権化が  
顕現。

「これはまた…」

「ええ…ちょっとやばすぎますね………」

「俺は負けられん！必ず勝つ！！」

「詠春：お前の言う通りだ。

俺もこんな肉巻き野郎に負けたと有っちゃあ、イカババアに笑われちまつ…絶対に負けらんねえツツ！！」

「あ、イテテテツ…力任せに叩きつけやがって！この野郎め。  
リターンマツチだツツ！！」

傷付いた戦士達は己を奮い立たせ、圧倒的なオーラを発する古代人との決戦は最終局面へと突入する！

## S a ・ G a 6 6 (後書き)

『古代人4人衆』

四魔貴族＋古代人＝贅沢なまでのパワーとネタ！

真面目に戦わせれば、アビスと人の執念が合わさり最強に見えるがコンセプト。

ロマサガ2の七英雄みたく合体しないでバラバラに戦ったのは、その形態があまりに危険で取り返しの付かない……ワグナス、ノエルなども本当に最後の手段とした形態だからです。

邪魔な世界と共に滅びるため逃げようが無い……まさに最終形態。

まあ、彼等も彼等で退くことが出来ない理由や想いは有るし、何万年と居住可能な世界を探す作業をしているなんて、執念と狂気レベルの義務、使命感が大半になるしね。

様々な苦悩、苦難、希望、絶望など……ぶつちやけ、視点を变えて古代人側を主人公にしても一本ストーリーが書けちゃっても不思議じゃないよね〜

というワケで前半戦は少しネタやったり、衛春に厨二的な主人公っぽく過去を語らせてみたり、ゼクト、アル、フォルネウス型のペライ戦闘（笑）と作者なりに実験してみた回でした。

ナギ、お前このままだと稀代のチンピラになるけどさあ、どうすんの！？

そんな事も考えつつ…次回をお楽しみに！

誤字脱字、感想待ってまゝす！



S a ・ G a 6 7 (前書き)

今回も長いです。

ていうか、ナギをどうするかで死ぬほど悩みました。  
こんなに俺を悩ますなんて… ナギ、許すまじ！！

今更ですが紅き翼とバレンヌ帝国が協同作戦をするのは、

紅き翼が連合から鞍替えしたから

元々、悠久の風は完全なる世界側の組織で、ゼクトは古代人との  
当て馬になる強力な傭兵を捜していたから

こんな感じですよ。

とにかく難産でしたが、本編をどうぞお楽しみ下さい。

元々、最深部の間はルーン文字や魔術的装飾の施された床や柱で構成されており、荘厳な空気を漂わせていた。しかし、今は見る影もない。

寄り集まり、繋ぎ合わせて完成した巨大な肉塊のような古代人。

だが開幕から圧倒された。

グチグチと音を立てる醜悪な肉塊から生えた4体の古代人は、驚くような移動方法を使って虚を突いて来たのだ。

子供の玩具には『スーパーボール』という物が存在している。

ゴムボールを壁に投げては不規則な反射を楽しむ…次元の低い『スカッシュ』のような遊技だ。

だが、もしもだ……

そのボールが自分の何倍も巨大で…

かろうじて予測できた動きをキャンセルして、突撃……

これ以上は存在しないとさえ感じる、痛いほどの殺意を此方に向けてきたら？

そうだ…古代人達はこれを文字通り体現した！

密室に於いて全力で得たバウンドは、予想も付かないトリッキーな機動と力学的にかなりのパワーを発揮する。

それがこの場でいとも容易く…4人の意思も加わった事でより凶悪に！！

でぶでぶした外観とは裏腹に、ボディからは想像も出来ない機動力と息つく暇を与えない手数と威力。

「ぐう……っ！！ゼクト！  
もっと力を込めて下さい！このままでは私の重力だけでは抑えきれません！」

常時魔法発動に必要な集中力と火力の維持。

術の範囲から逃れた敵の末端たる触手から繰り出される攻撃を避ける為の集中力…

いつも飄々として、どんな時も余裕を崩さなかったアルビレオ・イマダが、そんな彼は此処には居ない。

アルビレオの魔力は確かに素晴らしいモノが有るがその反面…このメンバーの中で最も身体能力が低い。

脂汗を流しながら、一分の隙も見透かされないように戦っている。

「分かっておる！さっきから目一杯やっておるわ！」

対するゼクトは感卦法でブースト。

縦横無尽に動き回ること敵の狙いを引きつけながら戦う高速機動戦法。

そして、魔法も常に使い続けている。

現に2人の魔法の効果が在るからこそ、鈍重な古代人本体が居るのだ。

「詠春！肉蔓をぶった斬って、あの肉巻き野郎をぶっ飛ばすぞ！」

「よし分かった！」

「来い！『千の顔を持つ英雄』」

六刀で迫り来る肉蔓を排除しながら猛然と進むギルガメツシュ。  
詠春は背後にピツタリと付く事で、力を溜めつつ敵の攻撃から逃れ  
て接近…

ラカンはずぐさま槍や小さめの斬艦剣を具現化、投げつけて後方支  
援をする。

仲間の力が合わさりギルガメツシュ達は、無事に本体まで到達。

「バラバラになりやがれやアア！！」

ギルガメツシュは接近したまま六刀から素早く撃ちだせる多段烈風  
剣を肉塊の中心部…真つ正面の一点に叩き込んで、抜き胴！

「ハアアアア…ツツ！！」

ギルガメツシュの後ろから現れた詠春が雷撃を纏わした渾身の一撃。

先のポイントに狙い澄まして見舞う！

そして…

「コイツは忘れてんじゃねえ！  
俺の本気の斬艦剣だあああ！！！」

2人が攻撃したのを確認すると、ラカンが斬艦剣を具現化して投擲。

斬艦剣は行く手を阻む触手を引きちぎり……

【ぬおお！？】

勢いを殺されること無く、切っ先から見事に突き刺してそのまま壁に縫い付けた……古代人の本体に強烈なダメージを与えたのだ。

それはX攻撃に一撃を加えた変則連携……『ジャックナイフ』の変化系。

推進力を一本に絞り威力を跳ね上げた一連の攻撃。

急拵えなどとは連想出来ない見事なコンビネーション。  
実際、敵の勢いもかなり落ちたが……

【フッフッフ……この程度の攻撃力で我等を倒そうなど、1000年早いわッッッ！！】

すぐさま本体の内…獣型の一体が突き刺さった斬艦剣の抜き、逆に投げ返して戦闘を続行。

確かにダメージは与えたがそれを上回る恐ろしいスピードの再生力。

それが苦勞の大半を無に帰す。

追い討ちは掛けれることなら掛けたい！

だが一度、ラカンが果敢に攻めた時…触手で間に合わない判断した本体がそれぞれの魔技で迎撃。

その際に、面子でタフさなら1、2を争うあの男が瞬く間に手足をもがれて壁際まで弾き飛ばされて…逆に、戦闘不能どころか致命傷を負わされた。

ギルガメツシュが貴重なルーンの杖を引き換えに…『シャッター・スタッフ』で回復したから生きているが…生半可な隙で攻め込めないと理解させられた。

攻められない理由はそれだけでは無い……

積極的な攻撃は出来ないが重力で敵の動きを抑えているアルビレオ…

常に動き回る高速移動砲台として、敵が攻撃する時には狙いを逸らすように立ち回るゼクト……

己が最強の攻撃『拳闘』は軟体相手にはダメージが通らない以上、即座に封印して魔法の消費が無いアーティファクトで剣闘、投擲で迎撃するラカン……

術に集中する為に移動、移動で限りなく無防備なアルビレオを守りながら戦う詠春……

隙を見ればすかさず攻撃、仲間が危うくなれば杖の魔力で回復……  
アルビレオの出力が落ちれば負担を軽くする阻害もするし、攻撃から守る壁にもなる。

オールラウンダーな活躍を要求されるギルガメッシュ……

1人が欠ければ、全体が崩壊に繋がるギリギリの戦力。

だからこそ無闇な特攻は仕掛けられ無い。古代人を追い詰めても再生され、古代人に追い詰められたら即座に回復……

【『メイル・シュトローム』、『グランド・スラム』に『トリニティ・ブラスター』……『ゴーストライト』だ！！】

再び熾烈な攻撃が再開され、肉蔓による触手だけでも厄介極まりな



いのにそれぞれの特性を生かした力を振るう！

地割れ、超潮流、熱波と冷気の相反する複合技……最強クラスの範  
囲攻撃によりフロアの床や柱は悉くが陥没、粉碎。

そして粉塵の奥からは実体を虚像とさせ、虚像を実体と錯覚させて  
自滅を誘う幻惑光を放つ古代人達。

「チィ…鬱陶しい小細工使いやがってッッ」

ラカンのように鋭い感覚を持つからこそ、より一層苦しめられる夢  
幻地獄。

それを振り払うように自身の頭を殴って喝を入れると、具現化した  
槍で牽制しながら動き続ける。

そしてギルガメッシュも清廉な川の流れのような動きで刀を振るっ  
ていたが、突如荒れ狂う濁流の如き動きへと変わる。

タイミングは完全に狂わせ、大きな隙を誘ったのを確認すると敢え  
て触手の檻へ飛び込み……

「雲身・払車剣！！ドオリヤアアアア！！」

縦横無尽に駆け巡り一気呵成、怒涛の如く斬撃を放って触手はバラバラに切り刻んで距離を取る！！

「まだじゃ！コイツがくたばるまで何度でも叩き込むぞっ！」

「「「おう！！！」

「「

「私もあんなのに負けるのは癪です！」

ゼクトの号令で陣形を整える。  
全てはこの猛攻を防ぎきり、再び一撃を叩き込む機会を手に入れる  
為に……

だがこれで何回目だろうか…

ゼクト達は油断、気負いの一切を切り捨てて挑んだ第2形態…最終決戦だった。

「(ド畜生が：攻撃の隙が作れねえ！  
もたもたしてたら回復が完了されちまう。)」

ギルガメツシユは迫り来る肉蔓を叩き落としながら、内心で毒づく。

そして：他の戦士達も同じ事を考え必死に反撃をしているが、じりじりと追い詰められているのを皆が感じている。

【フハハハハ！！弱い、弱い！弱すぎるぞオ！！

すぐに貴様等を始末してゲートの向こうに居る仲間達も殺してやるぞ！！】

命を捨てた古代人達に焦りは無い。

むしろ、時間が経てば経つほど身体が馴染んできているからか、同じ攻撃の威力が加速度的に強化されているのを感じる。

「(紅き翼の奴らもそうだが、俺も正直カツカツで後が無い…)  
ノエル…早くしてくれねえと抑えきれんぞ」

ギルガメツシユは紅き翼と共に戦い続ける。

その頃

墓守人の宮殿：入口、連合軍陣地

「シゲン、ちょっと東側が匂うので『油地獄』を仕掛けて貰えますか？」

無線で指示を飛ばしていたコウメイが、同じく指示を出しているシゲンに声を掛けた。

「はいはい、お安い御用ですよっと。」

遠く離れた何も無い平野の地面が盛り上がり、地下から石油が噴出した。

陣地に居る各国の参謀達はコウメイの突飛な指示を聞いて

『何を遊んでいるんだ！！バカヤロウ！』と睨んでいる。

だが、当の本人は全く気にしていない。

いつも通りに…端から見たら覇気が足りない調子で次の指示を出す。

「スカイアさん、スカイアさん。」

ちよつと即席油田を的に、割と本気で『ファイアボール』を撃つて下さい。」

「はいは〜い！久しぶりに本気出しちゃいますね〜」

おっとり系翼人美少女スカイアさん。

多くの者は知らないが、知る人ぞ知るバカ魔力の持ち主。

ポン！ピョロロロロロロロロ……

『何だ！？あのへっぴり火球は！？』

『ハハ、ワロスワロスwwww』

『火w球ww、謝れ！火の精霊に今すぐ謝れ！！』

あまりに遅い弾速、球とも呼べないへにやへにやの魔法を見て

『戦場に情婦を連れ込みやがって…もげろ…！』

と思っっている。

このようにスカイアへの評価はほぼ全ての人々から、邪魔な存在だと決めつけられていた…しかし、誤った認識は一発で改められる事

になる。

ふらふらと使い手が乗り移ったように頼り無く飛び、味方の弾幕に『一度も掠らず』潜り抜ける。

そして、陣地から離れるにつれて段々と加速して到達。

油地獄に種火が入った。

ーーン!!!

極光、爆炎、轟音ーーーーー

引火して爆発したと仮定しても、異常な規模の爆発だった。

まずは目の前でスタングレネードを炸裂させたと錯覚するほどの光遅れて有り得ないレベルの爆炎。

最後に音と爆発の余波が熱波として襲い掛かる。

そして近く…と言っても、だいぶ離れた敵の別部隊も巻き添えになり消し飛んだ。

『『『『はあ？油が有るにしても有り得ん威力じゃね？』』』』

各国の参謀達はさっきまでの火球と結び付けられず、動きが止まっていた……

コウメイはマイペースに双眼鏡を取り出して灼熱地獄と化した平野を眺めた。

そして『うんうん』と頷き、スカイアに話し掛ける。

「うん、流石はスカイアさんですね。

バレないように接近していた悪魔達が丸焼けですよ……この後も宜しく頼みますね？」

「は……い！」

実はこのスカイアさん……

シゲンが局長を務める研究所に転がり込んで来るまでは、『ワグナス』を継ぐ前の若かりし頃のユカリと鎬しのを削っていたほどの魔女。

そんなスカイアさんが選ばれ無かった理由は『ちよつとのんびりし過ぎでダメ！』という理屈……最後までユカリと互角の能力を誇っていた。

まあ、七英雄レースには敗れはしたが、日々を魔法の改良に捧げてエンジョイしてるスカイアさん。

衰えるどころか魔術の腕磨きが掛かり、迫り来る敵軍の一角を潰した…

それでも戦場は巨大な生き物。

一時として停滞せず千変万化…常に動き続ける。

「コウメイ殿！

またしても敵が…それも今までとは一線を画す大軍が…！」

ノエル達が突入してからの連合艦隊は、ずっとモンスター達や悪魔を迎撃していたが、今度の敵軍は桁が違うらしい。

あまりの勢力に驚いた、ヘラスの武官が慌てて無線を入れてきた。

【焦ることは有りませんよ。バレンヌの者達に『トライアンカー』、『玄武陣』と命令してください。】

だがコウメイは落ち着き払った調子で返答する。



無線越しからも落ち着いてる様子からヘラスの武官も冷静さを取り戻し、言われた通りに命じた。

5人組に別れてすぐさま反応

見れば左に倒したT型のような陣形…トライアンカーとやらが8つに対し、玄武陣は2つ。

総勢50人…空を飛ぶ艦のデッキにずらっと並んだ彼等…

今も絶えず艦隊で弾幕を張り、悪魔の大軍を必死に押し止めている現状にたかが人に何が出来るのか？

「いったい何を仕出かすと言うのだ？」

そして…武官に限らず、戦場に居る者達は揃って驚愕する。

『ゾディアックフォー』

トライアンカー部隊の者達が何やら呪文を発動させれば、天から迫り来る敵目掛けて流星雨が降っていく。

だが、これで終わりではない。

『ギャラクシイ』！！

今度は玄武陣部隊が魔法を発動…大軍だった敵の生き残りが居た空間がねじ曲がる。

あまりに常軌を逸した現象が続いた為、我に帰った時には消え去っていた。

「……………」

精鋭とはいえたったの5人…彼等は七英雄のようなキチガイ級の精鋭でない。

バレンヌ帝国正規軍が誇る只の『トップクラス』の精鋭…  
この連合艦隊の1艦、1艦に、これと同等の人数が乗っているとすれば何百人、何千人も居る。

そしてより正確に言えば、3人の合体魔法が紅き翼のあの男が放つ

アレの威力に匹敵していた。

ヘラス帝国とアリアドネーの部隊と艦隊はこれ以上無い頼もしさを。メガロメセンブリア側から参じたジャン・ジャック・リカードは言いよりの無い恐ろしさを抱いた。

何故なら、バレンヌ帝国はいつでもメガロメセンブリアの息の根を止めれたという事実を突きつけられたのだから……

そんな時、新たな一機の高速船が…コウメイとシゲン、他にも極々限られた者達しか知らない無線チャンネルにメッセージを入れて此方に向かって来た。

無線の内容は至極簡潔…

『我、墓守人宮殿、突入可能兵力アリ』

流石のコウメイとシゲンも驚き、お互いの顔を見合わせた。まあ、2人の考えることは同じらしくニヤリと笑った。

【（ふう…ガトウもなかなか味な真似をしてくれますね。）

皆さん、あの高速船は落としてはなりませんよ！】

コウメイは無線で素早く全艦に到達。

高速船が墓守人の宮殿の真上に差し掛かった時、メッセージに有った声援…ガトウともう1つの影が降下していった。

高速船が現れてから、そう時間も経ってない……その頃のプリームム達はと言つと

「……………」

『悪魔パンチ（デーモニツシエア・シュラーク）』

悔しそうな顔をした風使いである仲間が石化。

無防備にされたところをヘルマンの剛拳で無惨に碎かれ、また1人リタイアした。

「ふむふむ…残りは2人ばかりか。

火と万能型のキミたちにはまだまだ勝ち目が有るのだよ？」

「く……………」

ヘルマンは紳士の面を脱ぎ捨て、身も心も悪魔たる本性を現していた。

目から放たれる強力な石化光線…これはライフメーカーから創られた彼等でもレジスト不可能な代物だった。

まず油断した仲間が1人目…

警戒してスライムのような使い魔を相手にしていた仲間の視線が有る位置。

そこに突如として現れたヘルマンによって餌食に…2人目

其処からはバタバタと仲間達が逝った。

わざわざ遺跡内部に召喚されるだけあって、ヘルマンは武一辺倒の悪魔とは段違いだった。

正直、武力だけでもかなりの使い手でその使い魔も同様になかなかの使い手…

戦いの序盤戦から本性を現した中盤からは使い魔の水を媒介にワー

プするトリッキーな一面。

数ある引き出しから変則機動闘法を持ってきた…相手が奥の手と錯覚させるほど強力なスキルに騙された。

まさかギリギリの所に追い詰められるまで温存…相手が勝利を確信した瞬間から石化の魔眼を行使する戦略家の顔。

「……………」

人造生命の自分達はまだいいさ。

大義の為とはいえ完全なる世界のメンバーから選抜された者も…そして、倒された者の大半は帰りを待つ者達が居る。

しかも才能を潰すのが快感だと？

悪魔の中でも最低の、吐き気が出るほどの下衆ツツ

そして多大な犠牲を払って最後の使い魔はたった今…倒された仲間と相討ちになり消滅。

それが存在した名残として地面が濡れている。

だからヘルマンの言うように、決して勝ち目が無い訳でも無い。

何よりも主、先に逝った仲間の為にコイツだけは絶対に倒さなければならぬが……

(アトウール…まだ動けるか?)

険しい顔で自分と最後の生き残りである『火のアトウール』に念話を飛ばした。

(まあ、やってやれない事は無いが厳しいな。

つうか、プリームムは片手だが…大丈夫っぽいな。)

油断無く…目を合わせることはおろか、見つめられても危険なため爆炎の幕を張っているアトウールの顔は険しい口調で返す。

(厳しいのは同じだよ…)

アトウールとプリームムも石化光線を食らっている為、全くの無事という訳では無い。

胴体や頭の重要な部位で無く浸食する前に切り離せるたから今も生き残っているだけ…

ヘルマンの強烈な拳闘で負ったダメージも相まってかなり旗色は悪い。

使い魔達は飛行しながら戦っても相手を出来たギリギリの速さだった…。

では主のヘルマンは？

五体満足のプリームムと同等か…

片手でバランスが悪い、今のプリームムでは全力には付いていけない。

アトウールは炎精霊を使役する『紅蓮蜂』を無理矢理に義足を創って何とかしている…

しかし、常に掌握し続ける必要があるから接近戦に限定される。

魔眼の餌食になるのは必至……

「どうした？早くしたまえ。それとも語らいの時間が欲しいのか？」

目眩ましと張りながら悩むプリームムと威嚇するアトウールに、呆れた感じで言うヘルマン。



奴の能力が分かっている今…只、其処に在るだけで十分に漂っているプレッシャー。

石化光線は立ち止まってタメる為に一瞬だけ隙が生じる。それでも凶悪さを考えれば有ってないような物。

しかも、あの悪魔のことだ。

魔眼を隠していたように、まだ奥の手を温存している可能性も捨てきれない。

「（どうする…考えろ、どうすれば倒せるか考えるんだ。

自分達が消えれば、コイツは間違い無く主の元へ行く！どうすれば………）」

考えれば考えるほど選択肢が浮かび上がっては、消し去られていく。

頭の中ではぐるぐると考えばかりが巡り、経験豊富だからこそヘルマンの術中に嵌ってしまったプリームム。

その時アトウールの大きな手がプリームムの肩を『ポンっ』と優しく乗せられ、念話が送られてきた…

（あゝ、オレなりに無い頭捻った。お前はオレが出す火炎に紛れて

来い。)

「アトウール…っ!!」

確かに名案だが、作戦が意味する結果は……プリームムは目を見開きアトウールを見る。

(そんな顔してもしかやあねえだろ?)

まあ、生み出されて2年はアレだが、今のオレの全ては次の『オレ』の糧になる。

それにいい加減目眩ましを張る余裕が無くなってきた…最後は死ぬほどキツイのブチかましてやるうぜ。な?)

プリームムの肩に乗せられていたアトウールの手が、話し終わると同時に一度だけ…力強く揉んだ。

その手からは、何よりもこの局面を(一所)何が在ろうと打開(懸命)する意思が流れ込んで来た。

「分かった…(不甲斐ない僕を許せ。)」

だから迷いの螺旋に捕らわれていたプリームムは吹っ切ることができた。

そして、最後になるに違い無い次の攻撃…自分も持てる全てを賭け

ると決心する。

「……最期の会話は堪能したかね。  
では、決着を付けるとしよう…往くぞ。」

既に勝ち揺るぎないという風に、肩で風切り大股で向かって来るヘルマン。

「うるせえジジイ!!  
大人しく殴られやがれあああ!!」

対するアトウールは義足の炎を噴射、加速。

拘束が解除されたと同時にある魔法を遅延化させ、一気にヘルマンとの間を詰めたが…

「期待はずれ、がっかりだな…石と化せ!!」

「ぐおオオ……う」

ほんの少し もう半歩踏みだしていれば捨て身の拳を当てることが

出来たが石と化してしまった。

「ヘルマアアアンツツ!!」

そしてアトウールが残した炎に紛れて接近したプリームムが突撃！  
アトウールと同じくギリギリまで肉迫したが…

「その程度の捨て身かツツ… 『悪魔アツパー』!!」

「 イイイ!?! 」

ヘルマンの強烈な左アツパーがプリームムの腹部に炸裂……  
形容できない声のような鳴き声を響かせると、2つのブロックに別れた…

「……………」

まだビクビクと痙攣して、口を動かしている事からかろつじて息のあるプリームム。

そんなプリームムに対して一切の興味を失ったヘルマンの目は冷たい。

「私が若い頃に駆け抜けた魔界の戦場。  
その程度の捨て身は下策の下策ッッ！！恥と知れイ！！」

「……………」

「才能だけならなかかった。」

「……………」

「さらばだ。」

「……………」

ヘルマンが召喚主の助けに向かおうと踵を返したその時、死んだ筈の使い魔の水が寄り集まり…像を成す。

成した存在はプリームムに瓜二つ。  
ヘルマンは全てを得心し。

死ぬ間に目的を果たす為だけに最低限の意識を焼き付けたのだと  
……………

完璧で無いとはいえ、技術、才能、執念が己の予想を遙かに上回った獲物が再び現れた。

「ほお……素晴らしい！」

いやはや前言撤回だ。キミは素晴らしい！

咄嗟に敵の身体を依り代に戦う執念！！」

ヘルマンは躍る心を抑えつけることを止めた。

『……………』

まるで歌劇の俳優にでもなったように大袈裟なまでに腕を広げ、遺跡の入口にまで轟けとばかりに高らかに謳う。

「見事！本当に見事だ、が……それだけに惜しいッッ！！」

『……………』

「その才能！辺境の地で無に帰す……フハハハハ！！  
最高だア……今度こそ冥府へ行けイイイイ！！」

また1つ稀代の才能を消す喜びを味わえると突進するヘルマンは知らない。

自分の背後で石化したまま立ち尽くして居るアトウールの表面が赤熱しているのを…

そして今度こそ抹消する為、悪魔パンチを放とうとした時にそれは訪れた。

「ツツ！！」

炎の上位精霊の完全召喚だと！？

むおお！？離せ！！私に纏わりつくな！！」

アトウール最後の秘策にして最大の大技…炎の上位精霊を召喚、使役するその名も炎帝召喚。

更にプリームムの残滓が乗り移った水魔が流体の体を活かして拘束する。

その結果……

「グオアアアアアアアア！？」

猛威を振るっていたヘルマンだったが、振りほどくこと叶わず…そのまま一気に焼き尽くされ壮絶な最期を遂げたのだった……

こうして戦闘は終わったが勝者も敗者も存在しない。  
戦闘の影響で魔物も原生生物も居ない無音の空間が広がる。

そして暫し後、最深部へ通じるその空間を一陣の紅き風が抜けて行った。

舞台は再び最深部…

あれからどれだけの時間が過ぎたのか…

魔剣と魔槍の吹雪や拘束雷撃、無類無敵の魔法具で創り出した多様な武器、2人の魔法使いと魔物退治の魔剣士の五人が全力で動きを止めて攻撃し続けた。

ギルガメッシュ、紅き翼の面々はダメージだけで無く、スタミナも尽きかけ…正に満身創痍という状態まで追い詰められている。

それに対して古代人は未だ健在！

むしろ、超再生生物としてのデタラメなまでの差がギリギリと効いている。



【クククク…まだまだ我等には余力が有る！！  
体が完全に馴染んだことで力も時間も満ちた…  
さあ、この世から退場する時間だツツ！『クイック・タイム』！！】

そのスペルに気付いた時には全てが遅すぎた…

詠春の雷撃、ギルガメツシュの斬撃、ラカンの投擲、ゼクトとアル  
ビレオの魔法は届く筈も無く……最深部の間は、灰色の世界に塗り  
つぶされて時は止まる。

ゆっくりと攻撃を払いのけながら道を開けると、主人格のフォルネ  
ウス型の顔が歪む。

【ふうう、1人落とせば終わり……だが、最も手こずらせてくれたジ  
ジイ…貴様からだ！死ねイ！！】

そして時は動き出す……

「なんと!？」

既に古代人の触手は目の前まで迫っている！

範囲魔法を構成しては間に合わない！！

全てを避けきるのは出力の落ちた感卦法では不可能！！

万事休す…

「…！！（く、無念だ）」

ゼクト自身も諦めたその時だった…

『千の雷』キーリブル・アストラペー！！！！！！

『七条大槍無音拳』！！

それは誰も予想しなかった介入。

ゼクトに殺到する触手を横から消し飛ばす雷最大魔法！

そしてワンテンポ遅れた形で七条の極太のレーザーのような拳撃が古代人の体を深く、深く抉る！！

古代人は絶対不変の勝利というビジョンが音を立てて崩れた動揺から、選抜部隊は得も言われぬ高揚感を燃え上がらせるように動きを止めた。

「マジかよ！やってくれたな！！だが…一体全体誰なんだ？」

ギルガメッシュはまだ分からない。

だが紅き翼の面々は違つらしい。

「全く……」

「バカヤロウが」

「おお……！」

「…やっと来たか」

魔法と拳闘とかけ離れた特徴的なスキルを見て誰だかすぐに理解した。

最も手の掛かる仲間にして紅き翼のポイントゲッター、斬り込み隊長のあの男！

そしてこの広い世界に散らばっていた仲間達を巡り合わせ、数は少ないが時には作戦を共に遂行し、時には自身の経験と知識から次の行動を示してくれた陰日向に活躍する漢！！！！

【チィ……我等の邪魔をする者は誰だツッ！！】

古代人が怒りの形相で不意打ちの魔法を使った者が居る最深部入口……立ち込める粉塵の向こうに潜む者を睨み付ける。

最高にデタラメで、ピンチの時には最高に頼りになるヤツ等……

「ナギ・スプリングフィールド様だ！

肉達磨が調子ブツ扱いてんじゃねえぞゴラァ！！」

気合い十分！今までに無い魔力の循環で髪を逆立たせ、啖呵を吐くナギ。

【貴ッ様アアアア！！】

「俺も忘れてもらっちゃ困るぜ？」

吸っていた煙草を吐き捨て足で揉み消しながら気怠げに語るガトウ  
!!

欠けていたピースは揃った。

「うじゃうじゃ鬱陶しい! 『千の雷』キーリブル・アストラペー!!!!!!」

疲労していない状態にして、怒りのエネルギーで跳ね上がったナギの魔法の威力は凄まじかった!

【 つ…!?! 】

殺到する触手を消し飛ばして古代人達を追い詰めるほどに凄まじかった。

ナギが鬱憤を晴らすように特攻しているのを余所に、ガトウはガトウで上着の内ポケットに忍ばせてきた回復剤を渡した。

「よし、仕切り直しじゃ!!」

止まっていた時間は再び動き出す。

だが、今までとは決定的に違う点がある。

ナギが来たことで火力が上がった?それともガトウの参戦で手数が一気に増えた?

どれも当たりだがそれでは足し算…少しばかり足りない。  
それは認め合った者達が起こす超反応だ！！

【よくも猪口才な真似をしてくれたな！！  
こんのくそつたれの雑種がああああ！！】

触手、地獄の火炎弾、全力の渦潮、荒れ狂う大地の力を総動員させてねじ伏せようとする古代人は初めて焦りを感じている。

正確には風向きが変わった、と…

【たかが2人増えた所で何が出来るツツ！！】

そう、たかが2人…だがこの2人の雑種共が現れてから動きが変わったツツ

多腕の鎧武者が駆けずり回っていた前とは明らかに違う。

赤毛のガキが纏わりついて気を向ければ、刀を振り回すメガネの雑種と浅黒い肌の雑種が手甲を填めて殴り込んでくる…

あの鬱陶しいジジイは仲間も死ぬクラスの魔法をバンバン撃ち込ん  
でくるッッ!!

だが、巻き込まれてはいない!

コイツ等、バトルスタイルから長短所まで把握してるなッッ!?  
ダメージが再生スピードを上回ってきている。  
触手に回すエネルギーなどもう無い!!

これ以上は奴らの思い通りにはさせられんッッ

【我等が背負ってるモノは貴様等如きの背負ってるそれとは比べ物  
にならないのだッッ  
負けられん!絶対に負けられんのだああああ】

必ず我等は勝つ!!勝たねばならんのだ!

ナギは戦いながら思い起こす…『強さ』って何なんだ?

強いとは？とにかくラカンのおっさんみたいに強靱な心と体の力が  
そうなのか？

戦争の軍みてえに仲間が大勢いればいいのか？

魔法やら不可思議な能力をメチャクチャ使えればいいのか？癩だが  
…グレートブリッジ戦のあの野郎みてえに全てが突き抜けてるのが  
強さなのか？

正直、色々考えたが答えは分からねえ。

つーか、そこまで人生を送ってねーし、一生を戦いに捧げる覚悟も  
まだ無い。

けれど戦争で経験を積んでほんの微か、毛ほどに、薄靄を掴む程度  
に理解できたかもしれない。

「師匠…」

俺は好き勝手出来る、どこまでも我を通せるのが強さだと思ってた。  
これは今も変わらねえが、その先の大事な事が見えてきた！！

【我等が背負ってるモノは貴様等如きの背負ってるそれとは比べ物  
にならないのだツツ

負けられん！絶対に負けられんのだああああ】



「ああ」！？ふざけてんじやねえぞオラア！！  
俺は好き勝手やって望むままに生きんだツツ！！  
テメエみてえなワケ分かんねー奴に俺は…世界は負けねえ！！！！」

此処に高速船で来た際にお互いに抱いている憎しみは消えないだろうし、とても心が通じ合っているとは思えないけれど共に立ち向かう人間の姿があった。

ひっきりなしに迫る敵を倒し、守り、手を貸して生き延びる為の戦いが…絶対に『生きる』という意志があった。

絆だとか友情だとかも俺にはまだ…ハッキリとは分からんねえ。けどもしかしたら…『強さ』つつうのはこういう 光景とか、1人が到達出来ねえ次元のことを言うのかも知れない。

【もう良いツツ！！貴様は目障りだ！！  
渾身の技で葬り去ってやるツツ 『メール死神高速ブラックジャック』  
！！】

今までの散発的な使い方でも十二分に殺傷力を誇っている範囲、単体技、生命力の刈り取りを狙う魔技。

それを一体の対象を完全に抹消する為…  
この男を殺せば勢いが、風向きが…己の力を信じて…  
力が行き渡った完全体であり再生に回していたエネルギーも一時的にカットして…やっと制御可能に、やっと実現可能な最強の合体技！

4体の古代人が前に突き出した腕から放たれた渾身の一撃…ライフメーカーが放ったあの太く、大きく、全てを破壊し尽くす何よりも強く、何よりも美しく、何よりも慈悲深く残酷な光の一撃と肩を並べた…！

だが、それは全身全霊の『力』が込められてたから到達出来る次元ではない。

スローモーションで光が一直線に向かって来るのがナギには見える。そして皮膚にも、全身全霊を込めた一撃だからこそ…ナギ1人だけが感じ取れた何かがあった。

まだ攻撃の本命は喰らってない…バリバリと鼓膜を揺さぶり、腸まで震わすような音が鳴り響いて、それは段々と大きくなり…頭蓋を割るような暴音へ変貌し、不思議な光景が飛び込んできた。

仲間を、世界を救った7人の英雄。  
だが、あまりにヒトからかけ離れ、身も心も魔獣に堕ちた英雄を…  
切り捨てた。

その際に味わった良心の呵責…

膨大だが無力過ぎる仲間を率いて新天地を…遙か昔からさまよってきた。

自分達は何万もの願いや希望を乗せた存在……  
だから仲間内にも見せない苦悩を吹き飛ばす為、いつか追放した英雄の力に縋ったこと。

そして自分達は生きるために力を得たが、代償は大きかった。  
舌を嚙んでその痛みで離れゆく正気の糸を保つも、飲まれて消えるのは時間の問題だと……気を許せば、すぐさま意識を失いそうになる恐怖。

尤も……そんな情け無いことは語らないが、4人はそれぞれに『コイツだけには劣らない』という捻くれた理屈だが確かに乗り越えてきた事実。

古代人が見てきた景色や想いが流れ込んでいるからこそ土壇場で限界を突破し、半人神の力に匹敵するほどの一撃を撃てた。

そしてナギは考える。

所謂ラスボスのコイツ等にも譲れねえ正義があった……  
先が見えない、終わりが無いかも分からない荒野を先頭でひたすら進み続けた勇気があった……

『正義』 っつのは得体の知れないバケモノか？

『英雄』 っつのは本当に俺が考えるような存在か！？

頭が悪リイ俺にはさっぱり分からねえ……

だが部屋の奥…古代人達も巻き込まないように戦っていたゲートには、何故かアリカが居る。

世界がどうか、正義やら英雄もピンと来ない。

『惚れた女』…自分でもバカだと思いが、戦う理由なんてモンはこれだけで十分だ。

大層なお題目も俺には背負いきれねえしな。

「 ツツ!？」

!?

!!」

おいおい、師匠…さっきから頭がガンガンして痛てエし、何言ってるか分かんねえぜ？

俺は死ぬ気はさらさら無い。

ただ、腕の一本二本はくれてやる。この戦いを終わらせる気でぶちかましてやるぜツツ

「『百重千重と（ヘカトインタキス・カイ）重なりて（キーリアキス・

）

アストラフサト

キーリブル・アストラバー

走れよ稲妻…千の雷』……!!」

「おら…アリカ起きろ！ぼけつと寝てんな。」

部屋の隅…ゲートの近くに寝転がされているアリカを、つま先で小突いて起こすナギ。

「うう、ここは… ナギ!？」

その両腕はどうしたのだ!!」

「ああ…？コイツか。」

魔法ブツ放したら肘の先まで吹き飛んだ。」

「はあ!？」

ナギの両腕は止血用に布でギチギチに締め付けられ、肘から先はキレイサツパリ消えている為に無様なバンザイポーズ。

アリカは簡潔な答えが気に入らないらしく言葉では表さないが、顔と目は欠片も納得していなかった。

だから、色々と端折りながらだがナギは説明した。

この負傷は代償：一時は我を通すと単独で動き、攻撃を凌ぐ一撃を放った一連の代償。

結局：両者痛み分けの引き分け。

だが自身の狙い通りにその魔法が戦いを決定付けたこと。

全霊の一撃を放った後に生じた隙に紅き翼の攻撃が集中。

最後はギルガメッシュという鎧武者が『ベルクウエニス刃』…神をも切り裂く回転刃斧を召喚して突貫。

肉塊に成り果てても同朋達の為に戦い抜いた古代人達の最期は、無惨にもバラバラに切り刻まれて、恐ろしい断末魔を轟かせて息絶えたこと。

大体の流れを語り、古代人達の秘密だけは己の胸に仕舞い込んだ。

「そうか、やっと戦いは終わったか…」

最後に見た時に比べて若干やつれた印象は有るが、それだけで魅力が損なわれる事は無い…むしろ、この最悪な二年を越えたアリカは美しくなったとナギは思う。

「あゝ、まあ『この』戦いは終わったな。  
後はバレンヌ帝国の奴らが帰ってくるのを待つだけだ。」

戦いが終わったことでラカンや詠春はへたり込み、アルビレオは気絶。  
ゼクトとギルガメッシュの2人は立ったままゲートを見つめてアイツ等が帰ってくるのを待っている。

「はあ…腕を治すか、新しい義手を造るか分からねえが半端無くもどかしいぜ。」

「… ウェスペルティアの城の奥に魔法薬が有る筈だ。  
それなら手足の10本くらい容易く生やすだろうな。  
それは補償するから安心しろ…何より、お前には恩が有るからな。」

「そんじゃま、よろしく頼むわ。」

S a ・ G a 6 7 (後書き)

『ベルクウエニスの刃』

ミンサガの特殊な斧の技。

元ネタは言うまでもなく神殺しチェーンソ。

『神はバラバラに……』は、めでたく公式化しました。

『魔剣、魔槍………』

ラカンは創り出すタイプで、ギルガメッシュは保有する物呼び出すタイプのアーティファクト。

ん？王の財宝？気のせいですよって。

因みにギルガメッシュのコンセプトはラカンの逆。  
武器が最高、拳闘が得意………まあ、その気になれば両方イける口  
マサガ2のイーストガード型の戦士。

『ヘルマン……』

ちよろつと調べただけで、山のように出て来た鬼性能！  
永久石化に水を媒介にワープ、手加減の遠当てが西洋魔法でも強い



術に匹敵する威力のチート紳士。

ぶっちゃけ、原作デユナミスより強いんじゃないの？  
皆さんはどう考えますか？

『古代人……』

彼等もまた正義でした。

北斗の拳的には強敵。立場が違えば……

『スカイア……』

適性は風。だけど風自体が弱いから火に変えるのは私だけですか？

『清廉な……』

ザガフロの清流、濁流剣です。

私は何故か濁流剣を覚えたことが有りません。

『シャッタースタッフ』

ロマサガ系

半端無くお世話になりました。  
杖一本が消えますが、全体完全回復おいしいです！

『雲身・払車剣』

ミンサガ版：

敵を複数攻撃、それなりに消費も少ない方かと思えばかなり使い勝手のいい剣技。  
お世話になりました。

『ガトウさん』

実はガトウさんってとんでもなく強いんですね。  
何で最終決戦に参加しなかったの？頭数が多いから犠牲になったの？

『ナギ』

今回が難産になった最大の理由。  
半級戦犯でありながら、英雄の資格者：

まず、コイツを参戦させるかから考えて：  
次にどうやって？ナギって頑固だろ 如何にコイツの無軌道で、自身を貫く生活を表したモンかと常に悩まされました。

嗚呼…次は倅のネギ助だ。

一応はアリカとくつつけれりけどさ…どっちからも行けるけど、正直悩む。

そんなこんなでか古代人戦終了！次は七英雄達のターン！  
聡明な読者さんの事です。もしかしたら敵の正体は分かっちゃまっ  
ているかもね？

次で戦いは当分終わり！麻帆良はもう少しだけ待ってね？

S a ・ G a 6 8 (前書き)

ハイ、今回も長いんです。

作品始めたばかりの時は書けなくて死にそうだったのに、最近は何  
でか長くなってしまっんです。

ネタとシリアスの構成がマジメに上手く成りたい…(´・`・´)

では本編をどうぞ！

墓守人の宮殿…最深部。

先ほどまで技、魔法、果ては命…皆が持てる全てを賭けて戦った最深部の間。

内部には衝撃で発生した地割れ、魔法の熱で溶けだし未だに熱を放つマグマ状態の壁…無事な所など何処にも見当たらず、その激しさを雄弁に訴えている。

一寸先も見えない闇の上に架けられた綱をひたすら渡るように…いつ誰かが倒されても不思議で無い戦いだっただ。

それでも幾つもの偶然と仲間達の機転に助けられた結果…泥臭くてギリギリだが紅き翼とギルガメッシュの妨害部隊は、強大な古代人達に打ち勝った。

その紅き翼の面々はそこらの岩に腰掛けたり、アリカを励まし励まされと…ひとまず己達に課せられた仕事を片付けた余韻に浸っていた。

そして暫くの時間が経った…

それまでウンともスンともしなかった装置が光り出し、起動。ゲートの奥から待ちわびていた仲間達が帰ってきた。

だが…

アスナとライフメーカーは意識が無いらしく、ジーンが抱っこにおんぶという感じで連れられており…そのジーンも全身に裂傷、火傷、凍傷を負っており片腕は肘から先が消滅、と半死人状態。

エビス、ユカリ、シエルミーもジーン比べればマシという程度に酷い。

その程度は、今まで七英雄としての矜持から人前では決して晒さなかつた満身創痍の姿…

それを隠す余裕も無いように歩いている…

ノエルに至っては、歩く力すら無いようでは何故か幻術で大人に化けたエヴァと、チャチャゼロに支えられて…ずるずると引き摺られている有り様。

確かに彼らは勝者であるが、その様子はあまりに酷く痛ましくて…手放して喜べる雰囲気では無かつた。

そして、この場の半数を占める紅き翼の面々…彼らはグレードブリッジで味わった超威力の気弾の使い手が、誰だが分かってない。

それでも彼らが牽制用に撃った気弾で、ラカンやナギを吹き飛ばしたという事実揺るぎない。

もつと言えば：自分達をほぼ1人で圧倒したあのノエルが限りなく死人に近い状態で目の前に居る。

それも、1人は自分達のサポートで残したとはいえ6人が本気で戦った筈だ。

つまり：単体が複数かは分からないが、それほどの戦力に匹敵する『何か』が存在した：

いつもなら、労いの言葉の一つや軽いジョークを言つて奮起させる良い意味で『おちゃらけた』紅き翼の面々も戦慄を覚え：

アリカも妹が五体満足であるが：意識が無いため、気が気で無い。

だから双方共にこの状況で、掛ける言葉が見つからない。

言いよぶの無い重い空気に包まれる最深部の間は久しく、誰も一言も発し無かった。

そんな中で一番最初に声を発したのは、やはりと言うべきか。

少しは体を休めて余裕も有る七英雄の1人：ギルガメッシュだった。

「おお〜！！！気ン持ちいいぐらいボロんカスにされてるじゃねーか。

特にノエルなんか…茹で上がったマカロニみてえにへにゃんへにゃだな！

年だと思ったら、いつでも隠居しても良いんだぜ？」

まだ余裕が出ただけで、厳しい事には変わりない。

現に…彼の身を護っていた鎧も砕け散り、身体もさんざんに痛めつけられた状態。

だが仕込み杖を呼び出して『どっこらせ』と近寄る。

その際に、仲間だからこそ言える軽い憎まれ口も忘れない辺りが、この男らしいと言えばらしい所だ。

だから、言われっぱなしでは堪らないとノエルもワザと『イヤらしく』言い返す。

「このバカ戯け。

そんなに隠居させたいならしてやる。

だが、分身魔法と時間停止に回復魔法…その他諸々のも極めるよ！」

「うへへへ、魔法とお役所仕事はマジ勘弁！

ぶつちやけ、俺…詠唱出来ねえし！！

うん…やっぱ働け！少しでも俺達が楽出きるように末永く働いてくれよ…！」



結果が分かっただけに放った言葉だけにおどけた調子で応えると『ナイチンゲール』で最も重傷なジーンから回復させる。

また…空いた手で後ろで立ち尽くしていたガトウやゼクト指名して、応急手当を手伝わせた。

「このヤロー……まあ、いいや…もう疲れて疲れて体はへとへと、意識クラクラ…赤毛が見えるが知らん。ホント限界だから…ちょい、寝るわ…」

そして最後にギルガメッシュから回復を施されたノエルは、とうとう意識を手放した。

その頃には七英雄の面々もギリギリ自力で歩けるくらいには回復。気絶したアスナはアリカたっての希望で彼女の背中へ…

ようやく世界を賭けた一連の戦いが終わった。

「そんじゃま、バレン又帝国に帰るとすつか！おら！いつまでも立ったまま寝てねえでライフメーカーを担ぎやがれ！その体は飾りか？ジャック・ラカン。」

「お、おう！ワリイ」

こうして魔法世界史上一番長い1日が終わったが、バレンヌ帝国へと向かう戦艦の中で……

「なあなあ！向こうにはどんなヤツが居たんだ？  
教えてくれよオ〜。ノエル〜〜！」

(うるっせえなあ〜)

戦艦の医務室に絶対安静と紅き翼も纏めてベッドに固定された戦士達。

ノエルは運悪くギルガメッシュの隣に……

当然、逃げ場の無ければ身動き1つ取れない状態。

しかも『これジーンとかの迷惑になるんじゃないか？』と、思うレベルの音量。

そんな調子で、しつこくせがむこの男を黙らす為に、事の些末を次々語り出す。

話しはギルガメッシュを除いた六戦士達とアスナ、ライフメーカーがゲートの向こう……アビスの果てに渡った時に遡る。

入って早々にライフメーカーから打ち明けられたように、過剰なまでの浄化システム…『死食』の前兆が起きた。

アスナとライフメーカーが特殊な結界に取り込まれたと同時に、『アレ』が現れた。

600年で溜まりに溜まった負の念の結晶はみるみるうちに人型に…。

そして真っ白い人外の皮膚、背中から伸びた突起物とごてごてした異形の王冠らしきモノ…

仕上げに漆黒のボロを纏い、血のように赤い手足、そして光の無い目で此方を見下ろす存在。

こんなインパクト満載のビジュアルを見間違える筈は無い。

それはまさしく『破壊するもの』

それにいつか画面越しにも見て、作り物だと理解しながらも感じた圧倒的な存在感とプレッシャー。

ふと横を見ればユカリやエビス達の顔も強張っていて、単体で立ち

向かう事など不可能だと思ひ知らされる。

それでも遙か昔の魔王時代のライフメーカーは、東世界に開いたゲートから乗り込んでタイムン張ったんだよね……  
うん、間違い無くチートはコイツの為に有る言葉だわ。

これまで訪れた死食の時は、黄昏の姫御子と名前を変えた運命の子を犠牲に、世界の存続を決定して来たらしい。

だが今回は違う！

（この化け物を倒せば、こんなシステムを消せるように変革出来る！だから、私達が抑えている間に倒せ！！）

結界の中からライフメーカーの声が聞こえてくる。

戦う力の無いアスナは別として、ライフメーカーも今回は世界中から生の力を集めて奴を抑え込む。

そして全てが終わった暁には新しい世界を再生すると決心。  
今までは秘密裏に行われていた儀式にも協力を求めた。

しかも相手は超ド級の化け物。

ヒトが振るう破壊では無く、好き勝手に動き回る破壊の権化。

古代人達が無闇に世界をいじくり回したから、怨念も相まってより

強化されている。

コイツは元祖運命の子にして、神と成った今の魔王にとっても最高にヤバい存在というのは変わりないわな。

「よっしゃ、お前等！…このふざけた化け物…ブツ潰すぜツツ  
『シャドウサーバント』…！」

其処からの俺は分身達と人海戦術…。

神酒も前日に魔力酔いするぐらい飲んだ。  
だから昔に比べて改善されてるとはいえ、未だに大量の魔力を消費する『クイツクタイム』も道中で使わせて貰った。

そんで、このノエル…貴様が死ぬまで袋叩きを止めん！

それくらいの気で…油断も慢心も一切しないで戦う。

そして仲間達も一斉に動き出す。

ジーンの『龍神烈火拳』

ユカリの『ファイアストーム』

魔王から借りた斧を構えたエビスと、断罪の剣を創り出したエヴァの合体攻撃

シエルミーンが放つ全力の『召雷』と稲妻キックなどの体術：忘れてはならないのが、俺以外でエリクサーをバンバン使える数少ない存在。

普段は周りへの被害を考えて自重していた技、魔法のフルコース。絶え間無い攻撃を全方位から浴びせて、一切のアクションを取らせないつもりで拘束。

途中で形態変化する時もあったが、そんな隙を見逃す俺達じゃない。

逆に攻勢を強めて、一方的にフルボッコし続けた。

それに攻撃が飛んできてても妖精光でブーストした俺達にはスロー過ぎたし、金剛、イージスと各種魔法盾でガツチガチの防護壁を張って全部避けさせて貰ったさ。

「まあ、早い話し俺達が圧倒してたってワケだな。」

「何だよ…俺達なんて初っ端からヤバかったぜ。意外に楽勝っぽいじゃねえか!」

「お前よオ…疲れてるからマジで寝たいのに、わざわざ話してやってんだぞ？」

あんま文句ばっか言ってるよと石化凝視すっぞ?」

言いながらジロリと隣で寝かされているギルを睨んでやる。

「あゝ、ワリイワリイ。氣イ付けるから機嫌治して続けてくんない。だから石化だけは止せて!な!？」

「はあ…」

歩き回らないように縛り付けられながら、あたふた慌てるギル。ビビるんなら最初から黙って聞いてるよ…本っ当に、この悪たれ坊主は…頼むから早く中身も大人に成ってくれ。

戦闘は俺達が絶え間なく攻撃するから、破壊するものは必然的に身動きが取れない。

終始、戦況を支配しているのは俺達。

もしかしたら『このまま最後までイケるか？ならギルの援護もできるかも知れんな』なんて考えたが甘かった。

流星は魔王ライフメーカーが恐れる存在にして、ラスボス…。

古代人も含めたそこの化け物とは1つ、2つどころじゃない…十段飛ばしぐらい格が違った。

好き勝手に攻撃を叩き込まれる状況に業を煮やしたのか、ボロボロになった獣魔の翼を羽ばたかせて空間全体を巻き込んだ暗黒の障気。『アビスの風』を発動。

逃げ場無しの範囲技は覚悟していた。

だがよオ…まさか『シャドウサーバント』の分身や、補助技や魔法の一切合切を打ち消す効果まで有るなんて思わなかった。

やっぱ、（原作で使ってた技や魔法から）ある程度予想した攻撃手段を使ってきたけど…いざ現場リアルに来てみると、微妙に勝手が違うんだ。

それまでは冷気、火炎、雷撃の諸々をシャットアウトするバレンヌ帝国や、完全なる世界が有する現段階最強の装備と魔法盾でガツチ



ガチに守りを固めたのは言ったな？

其処からはそれまでの流れが嘘みたいにひっくり返された。

それとアビスの風だったな。

魔法盾が無くなったからか、空間全体攻撃だからかは不明だ。防ぐどころか、ペンペラペンの障子みたいに呆気なく貫かれる防具。

そして破壊するものは、あっという間に『トータルエクリプス』

『闇の翼』 『明王拳』と1挙動で繋げた。

「まあ、この一連の流れが体勢を直す僅かな隙に起きた事だったから半端じゃない強さが分かるだろ？」

アレは恐ろしい力だった。

真面目な調子で語ったからギルも大人しく耳を傾けていた。

「こっちの古代人つつう奴等も一瞬で4攻撃…

しかも装備が全く通じなかった苦労は、分かるゼノエル…」

予想はしてたが、古代人も4体同時攻撃をしてきたか…如何に大変

だったかは、原作をプレイした俺なら良く分かるぜ。

だが、俺の話しにはまだまだ続きがある…むしろここまで話して折り返し地点だ。

「此処からが地獄の始まりだったわな」

思い出すのも嫌だけど、ここまで話したんだ。最後まで続けてやらあ。」

「おう、待ってました!!!イヨ、大将!」

「ああ　!? 医務室では静かにな?ん?」

「……………ハイ……」

体勢を立て直して、また補助技から魔法を使おうとした時…上空には赤紫の気味悪い光を発する太陽が燦々と姿を表した。

分かり易く例えるなら、皆既日蝕のような太陽が浮かんで、足場もはつきりしない異常な空間。

破壊するものも、怒りの感情を手に入れたように…今までの無表情から鬼のような形相へガラッと変化していた。

そして赤黒い気を進らせる腕を振り上げて殴りつける『明王拳』を使う破壊するもの。

まあ、明王拳のターゲットがアビスの風を受けた際、一番近場に転がされていたエヴァだったこと…それだけが不幸中の幸いであり、唯一の救いだっただ。

恐ろしいほどの熱と魔力を孕んだ奴の魔拳が炸裂した瞬間、ホントに一瞬で…エヴァがガードに使った絶対零度を誇る断罪の剣が蒸発。

結果…エヴァも左手首を残して一瞬で消滅した。だが逆に言えば左手首が残ってくれた。

コレが尋常の者なら間違い無く即死状態だったろう。だがエヴァは幸か不幸かヘラスの龍樹とタメ張る最強種の一角…『真祖の吸血鬼』だ。

自慢の不死性からあつという間に手首から腕、腕から胴体と…再生を果たして戦闘続行。

これで並の魔法や技では太刀打ち不可……つか、当たれば即死の魔拳持ちだと理解した。

コレばかりは、魂と状態の焼き付けにして死んでも回復する魔法……リヴァイヴアが解除されないのを祈りながら、全員に施して凌いだ。

だが、エヴァは幻術なんて張る余裕無いから、最後まですっぱんぼんで戦って貰った……

仕方無いな。

「だから中途半端な幻術で、ほぼ半裸なワケだったか……まあ、幻を見て嬉しく何とも無エがな。

あゝあ、もしエヴァが年頃の女だったらなあゝ。」

「ちよ！？何バカな事言ってるんだ！

今は疲れ果てて寝てるから良いけど、聞かれてみる……マリオットで逆エビにされるぞ。」

「ンなこたあ気にすんじゃねえよ！ハッハッハッハ！」

声を絞りながらだが豪快に笑い飛ばしているギル。

だが、ギル 俺 ……？…？…？…？…右側からとんでもないプレッシャーを感じる。

誰よりも接近して隙を誘い出し、その数だけ繰り返された消滅と再生…疲れきつてぐーすか寝てるから大丈夫かなあ…なんて思ったのが間違いだった。

寝てても半分意識が有る真祖の吸血鬼…怖いね。  
ギルの運命は決まったけど、俺は？

「ハイハイ、知くらない。俺は何も知らね！  
さてと、話してもいよいよヤバくなった辺りからだったなあ…」

(う、うう……うあ……)

(ノエル、早くしろ！  
体が幼すぎるアスナへの負担が予想以上に大きい。もう、そいつを抑えきれん!!)

何処からか今にも消えそうなアスナの声が響いた後に、ライフメーカーの切羽詰まった声が続いてきた。

いよいよコイツを抑えつける余裕が無くなって来たらしい。  
裏返せばそれだけ必死に抑えつけてもまだこの理不尽な戦闘力が…

「そうは言ってもねえ…この野郎、すんげえ強いんだぜ？」

シャドーサーバントで手数を増やしてシエルミーとエリクサー、そしてリヴァイヴァを多用。

時にはクイツクタイムで危機を避けながら渡り合ってた…

前半戦みたく攻めの一本槍じゃあダメだ。

回復重視で立ち回ってたが、破壊するもの…マジ半端無いわ。

アビスの地相の最大の特徴は、『その世界に在らざる者は居るだけで生命力の消耗し、死者に代表されるその世界の者達には味方する』というある種、最強の暗黒空間。

コイツ自体も強酸、明王拳、針を使って経絡秘孔へのピンポイントノッキング、降り注ぐ雷：果ては霊力の糸で縛り付いたり、魔鏡から生み出した俺達の分身をけしかけてと多彩な攻撃パターン。油断すれば巨大な手で握り潰され、頭から地面に叩きつけられる。

どれもが即死確定の威力を持った攻撃…

そしてバカみたいにデカイ翼を生やして縦横無尽にビュンビュン飛び回る。

只、速く飛び回るだけなら楽だったが急スピードから有り得ない急旋回、急加速、急停止も可能なこの野郎…

受けたダメージも腕の一本二本なんてレベルじゃ無い…

皆がマリオみたいに死んで、生き返って、また死んでを何回もルーブした。

俺だって肉片すら残らない酷い死に様も経験させられたし、軽く5、6回は殺されてる。

『無明剣』、『タイガーブレイク』で挟み撃ちを仕掛けたエビスとジーン…

しかし、奴の振り回した鉤爪で何処その水鳥拳を喰らったみたくバラバラの細切れに殺され、不死鳥の力で元通りに蘇った。

流星は破壊するものだな…その分野ならエキスパートだ。

「こっちは死ぬ気でやってんのに、まだピンピンしてやがる。来い！！」『銀の籠手』

「ホンマ…こんなメツタメタにされるとへこみますわあ…」『シャツ

「タースタッフ……！」

ジーンは再びアーティファクトを呼び出し、右手には籠手というよりギプスに近いモノを装着。

エビスは状況から惜しみ無くリバティスタッフを犠牲に、仲間全員を回復。

新しくリヴァイヴァを補填するために急いで近寄ってきた2人は冗談っぽく言うが、余裕が無いのがアリアリと伝わって来る。

そして2人と入れ替わるように、ユカリとエヴァの連携魔法が炸裂……ようやく片翼と腕の一部を吹き飛ばせた。

「……！！！」

「……………ぐううううう！？」

今までの相手は誰もが生きてるが故に……ダメージを受ければ痛がるし、程度の差は有れども必ず怯む。

それは仮初めの命である、分体古代人達でさえそうだった。



だが、コイツは違う。  
生きるとか死ぬという問題じゃない。

自分がどれだけ破壊されようが、世界を終わらせる本能しか無いから痛みも感じない…だから急所に打ち込もうが反応が無いから、隙が圧倒的に少ない。

攻撃を直撃させられたが耳を塞ごうが頭の中に入り込み、頭蓋から身体の末端へ伝播…関節から千切れ果てるような強烈な破壊の咆哮『ハウリング』を発して、逆に此方を怯ませる。

そして、バランスを失った巨体からは想像できない…未だにワケ分からん速さで動き回って、戦い続ける破壊するもの。

「こんな時にギルが居てくれたら、かなり楽になったが無い物ねだりをしても仕方無かった。

まあ、オールラウンダーだからこそセクトのサポートと、古代人達の相手を頼んだしな。

チクシヨウ…あの赤毛がもっと動かし易い人間ならツツ!!」

「ば、ばか野郎。不意打ち気味に褒めるんじゃないやねえよ!？」

おま、照れるだろって!」

（うっん、戦場では頼りになるんだから普段からも『バシッ』と決めてくれたら…人間に換算したら二十歳だから仕方無いかなあ…）

ライフメーカーの声からも焦りが感じられた。  
だから時間が無いのも十分分かる。

エヴァは無限の再生力から常に張り付きっぱなし…ついに俺達はエヴァごと殺す気で最大火力で攻撃、そして反撃されて死んで蘇ると  
いう流れを繰り返す。

それだけやってやっと攻め勝っている状態。

だから対抗手段も無いことは無いし、勝ち目は十分有る。  
だが、このままのペースだとアスナは力尽きて死ぬ。

メリットは、運命の子が消えるから『破壊するもの』も一気に弱体化：  
出力の落ちた奴を相手にするのは楽になるだろう…

デメリットは後味の悪さと。  
例え勝っても、アリカは心労で跡を追うように死ぬ…それも間違い  
無く。

そうなれば、次回の儀式に必要な運命の子を産み出す血脈が潰えて

…今度こそ世界は破壊し尽くされる。

うーん…ぼけぼけしてると、未来ではどっちみち殺されるわなあ。

「 ……！！ ……ッ！！！！」

依然として破壊するものは元気いっぱい。  
追い詰めてるが終わりが見えない……

「 ……」

まだ実用化には問題が山盛りで、副作用で何が起きるか予測も付かないけど仕方無いわなあ。

ぶっつけ本番でやるしかない！！

「お前等アアアアア！俺も腹括るぞオオオ！！何度も死に上がりの  
とこ悪リイが時間稼ぎ頼むッ！！  
発動するまで絶対に殺されるなよオオオオオオ！！」

俺は遠く距離を取り、叫ぶように言葉を発した。

「このバカ殿野郎め、テメエの技を食らいやがれ『明王拳』！！」

「エビス、合わせるわよ！」

「はいな！」

『シヴァ・トライアングル』！！

あの2人は息を合わせた合体攻撃。

「いい加減にしつこいから、うんざりしてきたの…エヴァ、私達もやるわよ『クリムゾンフレア』」

「ふん、良かろう！凍てつかせる『吹雪』！！」

『必殺・反作用ボム3』

仲間達は誰一人として返事はせずとも行動で示す。

エヴァだけは術を放った瞬間、鉤爪で三枚に卸されたが落とされた首はニヤリと笑っていた。

アイツ等が動きを抑えつける…なら後は、俺が結果を出すだけだ！

「はあああああ……………」

光に匹敵する加速で瞬きほどの時間が緩やかに…5秒ほどに延ばす  
『クイツクタイム』…

過ぎ去った時間を強く夢想、膨大な魔力で『その時』を再現してあらゆる事象と結果を無に帰す魔法『タイムリープ』…

『時』を司る魔法は数在れど、チートの俺でさえ2種類しか使えない…というより発動と同時に、身体が耐えきれず崩壊する。

神さえも欺き、触れた者は大きな恩恵を引き換えにそれ以上の反動が帰ってくる禁断の術法が『時』。

その中でも最高峰の効力を持ち、クイツクタイムなど同系統の術を遥かに超えた超難度魔法が存在する…

その魔法はシゲン立会の下、行われた10回の試行中8回不発、1回無事に発動、そして最後の1回は身体が引きちぎられてリヴァイヴアで復活した…実用不可能のイカレた魔法。

本当ならこんな博打は打ちたく無かったが、クイツクタイムの超加速は常に発動気味の『アビスの風』で即解除…

自分なりに頭を捻くり回したが、これしか方法が見当たらなかった。

その魔法は『タイムリープ』の応用で空間全体に時間延長を施した上に、『クイックタイム』の超加速による時間の先取りの重ね掛けというムチャクチャな……完全二重化時間停止魔法『オーヴアドライブ』（超過負荷）……

発動しようと取り掛かった瞬間に頭の天辺から足の爪先まで血管を通して……例えるなら、家庭用の水道管ほどの放水容量しか耐えられない体に、ダム放流レベルの激しすぎる魔力が行き渡り、循環させる心臓は

「今にも『パンツ！』と呆気なく破裂しそつだ。頼むからムチャな事は今すぐ止めてくれ……！」  
と鼓動を打ちながらも情け無く訴え続ける。

うんうん、悲しいけどコレしか方法は無いのよね……ちつとは根性見せねえかクソツタレツツ……！

ブチブチと音がした瞬間、目の奥の血管が切れたか……視界が赤一色に染まる。

それと同時に腕や足の肉が裂けて血を撒き散らしたのが分かる……

ここまでは20%の完成パターンも同じ。

発動にはまだまだ遠い…

もう少し、身体と気力の限界を超えた先で到達する無我の境地。そこで感覚を研ぎ澄まして、研ぎ澄まして………やっと発動するッッ！！

最後の切り札『オーヴァドライブ』

「ふう…発動しただけで身体がボロボロか。」

止まった世界の中、エヴァのマリオットで身動きを封じられた状態で四方からユカリの魔法、エビスの斬撃、ジーン、シエルミーの拳撃を味わわされ吼えている破壊するもの。

「もう時間も魔力もスツカラカんだ…頼むからこれで終わってくれ

『ヴァンダライズ』

『ヴァンダライズ』

『ヴァンダライズ』

『ヴァンダライズ』

『ヴァンダライズ』

『ヴァンダライズ』 ツッ!」

大一番では常に腰からぶら下がり、苦楽を共にして来た相棒『ノエルの剣』。

この身に残された最後の力を掻き集め、渾身の力で放つ。

放たれた幾つもの太刀筋はまさしくヴァンダライズ（憂慮なき破壊）  
!!

そして…時は動き出す。

『!？」

『————!？」

しぶとく戦い続けた『破壊するもの』の体がブレ始め、例えようの無い断末魔を轟かせながら闇に溶け込み消えた。

「う……げばあ!？」

「ノエル!？大丈夫か」



そして戦いが終わった瞬間から『ふっ』と気が抜けたら膝から崩れ落ちて、物凄い量の血を吐いたらしい。

「そっからは、血イもゲボゲボ吐いて大変だったわなあ。

急いで寄って来てくれたシエルミーは生命の水を、不得手なエヴァも背中をさすって吐き出すようにしてくれたから、腹ン中が血でパンパンにならなかった…」

「……………」

「おい、ギル？」

「ZZZ…ZZZ…ZZZ…」

「この野郎め……はあ、余計に疲れた。

まだ バレン又まで遠い…寝よ……」

最低限の処置を施されたから死ぬことは無いだろう…無理矢理起こされ、話しをした疲れからか、俺は他の仲間と同じく泥のように眠りに就いた。

S a ・ G a 6 8 (後書き)

『オーヴァドライブ』

チートオブチートの代表術法。

「コイツはヤバい香りがプンプンするぜエエエエ」ってくらいヤバ  
い。

ラスボス 主人公「オーヴァ……」 ちよ、おま！？ あたたたた  
って感じにヤバい約束された勝利の術法。

けど、調子ブツ扱いて使うとJ、WPが0になる仕様です。  
コレくらいの調整は仕方ないね。

『ヴァンダライズ』

色々調べて『ヴァンダリズム』(vandalism、破壊主義)  
ってのが有ったから、元ネタはこれかな？

他にも同じように付けられたら技や魔法は幾らでも有るだよね。

ついでにエフェクトを分かり易く例えるなら……九頭龍閃のような斬  
撃。

名前もロマサガっぽくてカッコいいツスね！

適当に撃っても結構連携に繋がったりするナイスな奴。

『銀の籠手』

ジーンのアートイファクト

銀の手＋妖魔の小手的な特殊な設定で、ぶん殴り特化型。  
籠手って表記したのは厨二心から。

因みに妖魔の小手は、封印したモンスターの力をパラメータボーナスとして得たりしますが、この作品では殴る得意技のラーニングとイジりました。

後々もこの設定は使ってあげたいなあ〜と企んでいます。

『反作用ボム』

聡明な読者様なら『ああん！？何で？』と思ったかも知れません。

ハイ、あの作品から持ってきました…あの時代の切れ切れだったスクウェア、カムバックプリーズ！

『破壊するもの』

ロマサガ3部作中最弱の呼び声高く、ラスボス（笑）なんて言われる可哀想な奴。

でも考えていただきたい…

アビスの風は防御無視の全体技

各種属性の攻撃を揃えた用意周到さ

地相をアビスに変えて、これでもかと攻める姿勢。

『ついうっかり』光の翼を使われて、回復されちゃう。

倒した際には暴走 全宇宙破壊 サラ達が一晩どころか一瞬で創造し直してくれました（、・、、）

ちよつとドジな所に萌えを感じませんか？

ダメですか（、、）

そんなこんなで戦争終了了了！！

次回からは残された問題の後片付けとか、色んな取り決めだとかそんな感じの展開かなあ…

うんうん、大分原作から離れたね。

え？全然変わって無いじゃないかデコ助？

大丈夫大丈夫！ガラツと変わってる筈です。

それを伝えられたら良いなあ…それでは次回もお楽しみに…

誤字脱字の報告と感想待ってます。

ま…たね…！

S a ・ G a 6 9 (前書き)

メガロメセンブリアをフルボッコにしる派の方からしたら、気に食わない展開かもしれません。

そんなこんなでお片付け編その1

『破壊するもの』をブツ飛ばしてやろうと本気出したら、テメエの身体もボロんカスにした…あの世界変革の日から3日が経った。

国レベルの争いはひとまず無くなった。これがいつまでも続けばいいのだが……未来は誰も分からない。

それでも今は間違い無く平和だと断言出来る。

だからこそ…無風状態に近い今こそ各国の溝を埋めねばならない。

完全中立国として生まれ変わったウェスペルティアに神話の代から存在するが…決して地図上に表記されず、王族とライフメーカーしか知らない空島がある。

その空島にヘラス帝国、メセンブリーナ連合、バレンヌ帝国に完全なる世界とアリアドネーのビッグゲームが一堂に会している。

ヘラス帝国からはトーマ帝、次期皇帝候補の血族5名、それを警護する近衛騎士数十名。

メセンブリーナ連合からは真人間のまま生き残ったメガロメセンブ

リア元老院、各国代表、ジャン・ジャック・リカードを始めとして軍人が50名。

我等がバレンヌ帝国からは現皇帝、次期皇帝候補のレオンなど有力者、SPも兼ねて俺とエヴァにシゲン。

完全なる世界はデュナミスという青年とライフメーカーの2人のみ。あくまで調整役：裏方の面が割れては仕方がないため厳選したらしい。

忘れてならないのがこの交渉の席を用意し、進行役を名乗り出たアリカとガードマンとして紅き翼、一時は治めていたモウトク。

勢力図の一角を担い、権力とは結び付かない第三者にアリアドネー。新学園長、騎士総長、書記を任されたセラスという娘：

サラツと紹介したが、そうそうたるメンツが揃った。

因みに：世界全体を巻き込んだ戦争は、旧世界でも2回ほど勃発した。だが、こっちの戦争はスケールが違う。

死人の数も膨大で関係者もあまりに多い。

だから再びこんな戦争を繰り返さない為に：後世の批判覚悟で、各

国の決意表明も兼ねて全世界放映中！！

この『提案』についてメガロのように聡い国は承諾した。

しかし、どんな組織にも『愛すべきお馬鹿ちゃん』は存在する。  
案の定という、なんというかで渋ったが…

『え？反対するんですか？なら戦争ですね！  
焼きの原にしちやいますよ？

いいんですか？あつという間ですよ？  
急には止まりませんよ？イキますね！！』

一言で纏めたらこんな感じだが分厚い論文みたいな文章で遠回り、  
遠回りして記述。

3日待つと各国に伝えたところ即日快諾してくれた。

バレンヌ帝国は、ヤクザ外交も相手と場合によってはしますが何か？

さて、統治者から1平民まで関わること……

最初に決める事と言ったら世界というパイを、どのように再分配するか。

我等は事前に北の龍山山脈、メガロが存在する大陸の西海岸一帯と  
漁場、ウエスペルタティアの墓守人の宮殿から半径100キロ圏と  
領地については控え目。



連合各国に駐在部隊員を置く事を伝えてある。

当然、世界の半分を支配下に置いて直接統治するべきだと主張した  
武闘派の重臣も居た。

だがしかし、歴史は語っている…

『人も国も肥大し過ぎて末端から腐る』

彼の超帝国ローマも強大な武力で支配地を増やし、肥大しすぎたが  
故に黄金期の力を維持できず…

その最期は惨めなものだ。

栄光に彩られた国威は地に墮ち、力を付けた地方から飲まれて数々  
の逸話を残して消えた。

それに、この魔法世界の歴史はかなり歪だ。

強大な力を誇る国は遙か昔から栄え続けており、脆弱な国はすぐに  
淘汰されてきた…

ローマのようなケースは存在しなかった。

それに『リスクを犯さないことは、成長しないという最大のリスクでもある』とある将棋士は言った。

重臣から飛び出てきた征服論：十分理解は出来る。

だからこそ確実な平和は守りたい。

足元を更に堅固なモノに。

連合各国には『抑止力』と『最後の警告』の意味を込めて、大使館設立と駐在員の派遣許可を取り付ければ良いので無いか？

そして、敗戦国の彼等から全てを奪い去るのは…あのメガロメセンブリアのやり方と同じではないか？

自分も素人ながら一言口出ししたら、シゲンも賛成らしく鶴の一声で終了。

後は本職の方々が立派な案に昇華。

この場で再び意思を記した文書を配った。

連合側の人間は一樣に苦虫を噛み締めたような顔をしながらも、文書の隅々まで目を通し…

要求を突っぱねる事も出来ない為、次々と署名していく。

それもそうだろう。

戦勝国の要求としてはかなり甘々で、過去の慣例からも破格の条件。

しかもシゲン達は『命令』でなく強制力の弱い『お願い』としてのなのだから……

「ふむ…連合各国の皆様は納得されたようですが、本当によろしいですね?。」

アリカの言葉に頷き、意思を表示する連合の人間。

人の手を渡り歩き一周してきた文書には、一国の例外無く署名と血判がされていた。

ウチの皇帝も円満に片付き満足気にしている。

そしてこの空間に、ガリガリと硬筆を一心不乱に走らす音が響く。

会場全体を見回し、参加者の顔も鮮明に捉える映写機、小さな咳払いも逃さない録音機も複数用意されているが…アナログな手段はいつまでも大事だ。

止まない硬筆の音から、セラスという娘の真面目な性分が伝わってきた。

その後のヘラス帝国の要求も似たようなモノで、大陸の東海岸一帯と漁場に落ち着いて、円満に終わった。

途中……

「正義の魔法使い（マギステル・マギ）の活動と指導は……」

「ハイ、彼らの存在自体は素晴らしいとバレンヌ帝国も認識しています。」

正義の魔法使い（マギステル・マギ）については以前と変わらずお願いします。

ただし…最善の魔法使いと名を改めて下さい。

正義というのは変幻自在ですからね。」

大戦の黒幕にして異界からの侵略者…古代人にも『譲れない正義』つてのは存在した。

これを期に改名してもらおう。これは初代ボクオーンが目指した理想の1つでもあるのだから。

当然、あの男の能力、記憶、遺志を継承したシゲンはスツパリと答えてくれた。

「バレン又固有の『術法』というスキルは独占するのですか？  
世界平和の為に広めていただけだと思います。」

「…そうですね。世界平和は我等も望むところです。」

医師団には幾つかの『契約』の後、回復術法だけ伝授します。

同盟国であるヘラス帝国も例外ではありません。

重ねて言いますが回復術法のみです。」

うーん、本当は攻撃術法も教えたって良いけど…強制契約で裏切らない、むやみに広げない、命を賭けた忠誠を誓った後にバレン又国民に帰化するが絶対条件だからなあ…ちよいと厳しい！残念！

アリアドネーでもウィンドカッターくらいなら教えてるんだから、  
それで我慢してな！

その後もヘラス、バレン又の両帝国へ何個か連合側から問答は続き、  
シゲンとヘラスの文官が丁寧に答えた。

かなり長時間の会談も終わりに近づき、円満に終わるかと思われた。  
だが世の中…そうは問屋が卸さない！

最後の最後で、ドデカい一発が落とされた。

「バレン又帝国も今は大義が有るが…時が経てば欲望のままに暴走  
した以前の連合のように成り果てるのでは？」

これには両帝国、アリアドネー、ウェスペルタティアは勿論のこと  
…連合側の人間も一気に血の気が引いたらしく、その質問を投げか  
けた人間に視線が集中。

その時になって己が犯した失態に気付き、極限の緊張から過呼吸に  
なつた頃にシゲンが回答しようとしたが皇帝が手で制し…

「貴殿の疑問はもつともだ。

だがバレン又は揺るがん！

先人の遺志と理想は天地を砕く剛拳、魔法も跳ね退け、脈々と受け  
継がれ続けている。

これは村と呼ばれた頃から治めた偉大な初代王…バリーから何1つ  
変わらない。

そして、貴殿の申したような国に堕ちた時は…ノエル殿を始めとし  
た七英雄の者達が国を終わらせる。

バレン又帝国を背負う者は身分の差など関係無い。

それだけの覚悟が無ければ名乗れんよ。」

「う…」

別段、声を張るわけでも険しい顔で言うでもなくどこまでも凜と、  
毅然と、バレン又という巨星の主に対応しい態度、オーラを発して  
答えた。

それは会場全体を包み込みヘラス、アリアドネー、連合各国の参加者を震え上がらせると同時に全世界の人間にハッキリ伝わった宣言。

そして一波乱あったが無事に会談兼条約締結はつつがなく終了。

身動き1つしないで立ちっぱなしってキツイわあ〜。  
まあ、1時間に一回のクイックタイムで瞬間ストレッチが出来たら、他の人に比べたらかなりマシだけど……

「ああ〜疲れたわい。

戦争も終わつたし、ジジイはこれで引退したいのですが…ダメですか？ノエル様。」

安楽イスに座り、俺に肩を揉ませながら皇帝は語る。

「ん、肩も凝りに凝ってカッチカチだなあ。

皇帝辞めたければ、次代を指名したら辞めてもイインじゃないの？  
実際、お前さんは戦争もそうだけど福祉やら経済にも力を入れた…  
やりきつたしな。」

「んじゃ、レオン1択で。」

「その心は？」

「ジジイの直感。

は…皇帝を辞めたら、隠居ジジイになって毎日ぐうたらしたい。」

「ちゃちゃちゃつと伝承してしまえば終わりだしな…どつかのお伽話みたいに寝こけて死ぬなよ？」

「ちよ、肩揉まれただけで死にませんよ。  
もうちつと戦争方面を片付けたら勇退…ふー、」

「山もあれば谷も、嵐の時もあれば嵐の時もあったが…まあ、この60年以上ホントに良く頑張ったさ。  
お前もまだまだ120歳。  
平均寿命も40年くらいたっぷり残ってる。  
嫌われるくらい大往生してから逝け。」

肩をモミモミしながら話しを続ける。  
俺が肩を揉む相手なんてそうは居ない。

戦時下のウエスペルティアで遭遇したマクギルと、気になる事はいろいろ有るからなあ。

いつになったら、完全な一市民になれるのか…なれないかもしれんね。



S a ・ G a 6 9 ( 後書き )

皇帝は伝承法についてはぼかしましたが、ハッキリと宣言しました。

んまあ、戦争と条約締結はセットですしね。

ちよつとした表1/時間がある方専用(前書き)

ラカンの強さ表、年表の無断拝借、改変

赤松健作品総合研究所 『魔法先生ネギま!研究所』様

後述: 研究所様

URL 『http://www2u.biglobe.ne.jp/  
p/crown/negima/』

流石に今回のようなケースは、載せなければならぬと判断致しました。

研究所様の魅力は取り扱っている情報の広さ、膨大さ、そして綿密でいてスツと読めること。

私は一見の価値は十二分にアリだと思います。

以上、盗作予防線でした。

これだけやれば大丈夫だよな？

## ちょっとした表1 / 時間がある方専用

なんてこと無い年表：あくまで時間のある人用

【】は原作だけの設定。

【紀元前617年前

魔法世界が造られる？ 原作267話】

魔法世界暦0年

ライフメーカー / 魔王

破壊するものに敗れて流れ着いた空間。

運命の子に備えられたら生の力で魔法世界を創り出す。

最悪の場合を避ける為に生け贄用の半クローン『黄昏の姫御子』を創り出し、始祖の血を引くと血筋を保たせる。

それから大体600年周期で破壊するものに捧げて魔法世界を維持する。

1400年頃

エヴァンジェリン、10歳の誕生日に吸血鬼に…

問答無用で化け物認定 殺されるのコンボで、生きる為に世界を彷徨

徨う宿命を背負う。原作109話

ほぼ同時期の1380年頃

ウエスペルティアの端に存在するド田舎の森にノエルが飛ばされ、ボクオーンと運命的に出逢う。

翌年

メガ口潰しとマシな世界に変革すると2人で決意、とにかく夜逃げ。紆余曲折の末：バリー達の村に落ち延び、根を張る。  
初代ダンダーグ、ワグナスと出逢う。

1400年代

1400年

集落が都市国家へ 『バレンヌ』の始まり。

同年

「蛇の道は蛇」

捕まえた人攫いは、死ぬか強制契約の末に真人間として生きるか選択させ：労働力と民草を増やす。

ケルベラスもそうだが、刑務所は金と場所の無駄遣い。罪人には強制契約で死ぬか生きるか迫る：強制契約書のコストは高いが、効果は確実 費用対効果から、このスタイルの走りがバレンヌで広まる。

初代クジンシー登場。ノエルの人を見る目や価値観に大きな影響を与えた。

1410年代

ボクオーンとバリーに嵌められて新種の鉱石を求めて鉱山へ。  
地下にはモール族とターム(蟻)がいた。

枷が外れたボクオーンは、試作の水陸空戦艦を発明。

同時期：メガロに目を付けられ、ある国を介してちよっかいを出された。

その国は武力、意思表示の為にサラ地。

1430年頃

都市国家バレンヌからバレンヌ帝国と改名。  
元の都市を首都と定めアヴァロンと命名。

同時期にダンダーグとワグナスが自分の道場を開く。

そこからの300年

円満に全部族と同盟、平定。

ケルベラスなど連合やヘラスの勢力を追い払い、大陸掌握：

ボクオーンが設立した大学兼研究所を2つに分ける。

旧世界の1500年頃からは魔女狩りが過激化：業を煮やしたメガロが本腰を入れて介入を始める。

古代人組到着。世界の調査を開始する。

そんな300年

1720年頃から

ケルベラス溪谷の谷底でアウナス型の古代人と遭遇：もしかしたら程度の疑念を持つ。

シゲン（生前）が伝承法の裏を搔いて、病死する前に人形へ意識を移す禁術を極秘に開発。

1730年頃

ヘラス帝国へ派遣した特使が人攫いに拉致される。  
紆余曲折あって、アングラな闘士をしていたイカ女のスピーエを拾う。

1740年頃

正義の魔法使いに追い詰められ、メガロの西海岸から身投げ 土左衛門状態で、バレンヌ帝国の東海岸側「ヤウダ」に漂着した永遠の美ロリ…エヴァ登場。

紆余曲折有った後、ノエルの家族になる。

1750年頃

ライフメーカー登場。

シゲンとうとう死亡…以降はメンテナス以外は、不眠不休で動ける人形シゲンが「バレンヌの変態」として君臨。

シゲンは戦力となるボクオーンとしてエヴァを指名、あまりに弱い自分の状態に悩んでいたエヴァとバツティングして伝承法は成立。

ボクオーン・エヴァというチートの完成。

1752年～1760年頃までの出来事

旅立った先の龍山山脈でビューネイ型古代人撃破。

古代人の餌食…人っ子1人いないのを好機と、勝手にバレンヌから

開拓団を呼ぶ。

次のヘラス帝国で皇女のお守りをしていたゲオルグさんに会う。

武闘会で、アラケスⅡダンダーグ型の古代人と仕留めようと企むが半分失敗…武闘会としては成功。

失敗は古代人の趣向の問題。

最も格闘してた三代目ダンダーグの戸愚呂を襲い、返り討ち…

なお、上記の武闘会に若ゼクト出場、ノエルと知り合う。

フォルネウス型は地方の国を支配した際に旧世界を知り、動き出す。

1800年代

連合の半分をフォルネウス型が支配下に…

旧世界へも足を運び、住みやすくする為に産業革命など促す。

連合側が、独特なスキルと世界でも稀な霊地『世界樹』持ちの日本に目を向け始める。

バレンヌ帝国はチート魔法球の生産 材木、鉱物、魔石、魔術的素材資源の獲得 魔法球の生産ループで国力を付ける。



シゲンは手狭になった研究所から独立。  
枷が外れていよいよ歯止めが効かなくなる。

1890年頃

江戸時代の貿易地、長崎から侵入した魔法使い。関東へと進出し、  
麻帆良学園創設。  
原作8話

【1903年頃 エヴァンジェリン、日本を訪問。合気柔術を習う。  
原作107】

この小説には関係無いあくまでも原作時間。

1960年代

アリアドネーの超ハイテク・スクラップマシン『メタル・アルカイ  
ザー』（ブラック）を体よく処分する為に押し付けられたノエルは、  
発明家のヒラガに押し付けた。

1963年（ヘラス皇暦978年）

ラカン、帝国の少年奴隷剣闘士としてデビュー。原作243話

1970年代

ブラックのテクノロジ―とヒラガのマッドな部分が合わさり、エヴァが依頼した廃スペック人形完成。

全長150cm、…ノエルとエヴァの性格を混ぜ合わせて、良いところ4割…悪いところ6割の限りなく人間に近いコツペリア！

『チャチャゼロ』/値段100万Dpが新しく家族になったが、借金返済が始まった。

原作で100万Dpとは…エリクサー的なお薬と同等。

10年は遊んで暮らせる金額。

因みにラカンを雇う場合の費用は…嘘かホントか1,000万Dp  
(はぁ〜と)

……………お分かり頂けたらどうか？

ゴルゴやブラック・ジャックが鼻くそに見えるレベルのぼったくり。

93年辺りで登場するキングボンビーくらいヤバいね。

ラカン「俺はヘラスお抱えの傭兵。1000万Dpなんて、ちょっと考えりゃ分かんたろ？」

1978年

ナギ(10)「まほら武道会」に出没。

全ての大人の出場者のハートに木っ端微塵、再起不能レベルの重傷を与えて優勝した割に、満足できず魔法世界へ… 原作88話

原作も半分くらいはこんな感じ

1981年

ヘラス、バレンヌ両帝国と古代人・メセンブリーナ連合の…原作でいう「大分烈戦争」が開戦。

ナギ(13)、気紛れにメセンブリーナ連合の側に付く。

コウメイ、シゲンに弄ばれた末に、真相が記されたファイルを渡されたガトウは連合を離反。

『完全なる世界』の下部組織…レジスタンス『悠久の風』に加入。

右も左も分からずふらふらしていた詠春と、それを眺めてニヤニヤしていたアルビレオをスカウト。

【ヘラス帝国のオスティア回復作戦時…アスナは加勢に来た「紅き翼」のナギ・アルビレオ・詠春と出会う。原作169】

ゼクトはライフメーカーに命じられ、時間稼ぎの捨て石要員『紅き翼』に相応しい力を持った者をスカウト開始。

七英雄は基本バラバラに派遣、好きなように動いて要所要所で勝つ。

アリカ：父に諫言をした際、本性を理解：玉座の間で始末。  
自身が国のトップに成り代わる。

1982年

ラカン：帝国から「紅き翼」が本当に連合に付いたら抹殺しろと命令される。

バカを装って何度か戦い、脳天気なナギを味方にして仲間に加わるとぼけたキャラを演じながらも、監視を始める。

同年？

ナギ（14）

戦場で魔法をブツぱする様子から『魔法ハンパ無い！or味方も巻き込む酷さ』と連合から「千の呪文の男」と皮肉混じりに名付けられる。

ヘラス帝国を裏切った獅子身中の虫、サイフリートを七英雄が王宮で始末。

トーマ帝…ヘタレから覚醒。

ナギ…連合にホイホイ乗せられてグレートブリッジ攻防戦に参加を決意。

詠春…連合の中枢を叩く機会を窺っている。

ゼクトとラカン…は侵攻ポイントリーク。

七英雄が初めて集結、フルボッコ。ナギ…初めての敗北！

同年？

作業員ガトウとトーマスが仕事に見つけたお土産『スーパー・タカミチ君』確保。

ライフメーカーの命令を受けたゼクトが「紅き翼」を動かし、アスナを救出。

『紅き翼』…王族拉致の容疑で国際指名テロリストに、手引きしたアリカはアスナの身代わりに独房に監禁される。

1982年 6月22日（火）

世界樹が22年に一度の発現をする。 79

1983年

ガトウに渡りをつけて貰い『悠久の風』の庇護下に入った紅き翼。

アリアドネー攻防戦

アラケスⅡダンダーグ型の古代人が自身を打ち負かしたベアの力を認めて企みを告白。

少し遅れて援軍に紅き翼到着。アウナス型古代人から黒幕を理解。アルビレオのチート・アーティファクトで始末。

3日後……

ノエル、紅き翼、ライフメーカーの会談で協力関係をナギにアピール。

その裏でアリカ アスナ、アスナ アリカの極秘替え玉実行。

後日…海底宮でフォルネウス型撃破…

替え玉アスナが獅子身中の虫、ギャロンに拉致される。

1983年 9月27日(火)

替え玉の真相、アリカを切り捨てる作戦にナギ反発。

愛…故に苦しみ、カや正義に悩む。

1983年 9月28日(水)

最終決戦前日…

1983年 9月29日(木)

バレンヌ、ヘラスの両帝国、「紅き翼」、連合の真人間、アリアドネー、「完全なる世界」が決起。  
敵の本拠地にして、世界の調整地に通じるゲート「墓守り人の宮殿」に攻め込む。

プリームム隊：ヘルマンと使い魔を相手に討ち死  
紅き翼（-2）+ギル：古代人本体に勝利、本気の古代人に追い詰められるが、ガトウがナギを連れて加勢：辛くも勝利。

MVPはガトウさん。

その裏：アビスの果て

古代人達の破壊行為で生じた負の力的な感じで強化された『破壊するもの』

七英雄は半死半生で勝利、運命の子であるライフメーカーとアスナが世界を再構築。

世界を滅ぼすシステム『死食』

回避する為に生み出された『黄昏の姫御子』の宿命に終止符を打つ！

1983年 9月30日（金）

とりあえずの停戦合意

1ヶ月後

ウエスペルタティアのとある浮島。

正当な連合のトップ、ヘラス、バレンヌ帝国で全世界の人々に真の停戦合意と幾らかの取り決め。

今ここ！

ちよつと変更したラカンの強さ表

数値は基本的に遊戯王ルールです。

しかし、それで結果が確定された強さではありません。

立ち回りによつては、格上の相手にも十二分に勝てる可能性もある設定です。

例 電腦世界と仮定：千雨対全盛期セラス 千雨さんパネエ！って感じです。

80000 本気の真・破壊するもの（地相とかも全部ひっくりめて）

50000 古代人本体、本気ライフメーカー

230000〜380000、530000〜 七英雄（大戦終了）主人



公並びに七英雄をそれぞれ単体で表した力。  
最弱はエビス…クジンシーエ

?????クラス

13000 ナギ(大戦終了時)

SA 10000~12000 ラカンやら紅き翼の皆さん個人の  
力(大戦終了時)

10000~20000 古代人単体

9000 プリムムとかコウメイ、シゲンみたいな完全なる世界  
とバレンヌ帝国の一級エリート達

8000 原作リョウメンスクナノカミ

5000~16666 ヘルマンと愉快的な仲間達

AAA 6000 フェイト・シリーズ(数値はあくまでも数値)

3000～5000 名前持ちのバレンヌ帝国の皆さん。

ベアとかキャットとかのそこそこエリート

3000 カゲタロウ

2800 鬼神兵WW（大戦期）

2200 闇の魔法・術式兵装のネギ（ラカンから覚えたて？）

2000 原作高畑・T・タカミチ（本気が怪しい）

2000？ フェイト・パーティの魔道師

1500 イージス艦 基準不明点

1500？ 月詠

1100 闇モードのネギ

1000 それなりに鍛え続けて免許皆伝、指導できるくらいのパ  
レンヌ帝国民

AA 700 新ネギの基礎体力

650 竜種（非魔法）

500 魔法世界に来た頃のネギ

- A
- 300 麻帆良学園 魔法先生（平均）
- 本国魔法騎士団団員（平均）
- 高位（笑）と呼ばれる魔法使いの皆様方
- B
- C
- D
- 200 本気の旧世界達人
- 100 戦車、魔法学校卒業生
- 30～50 旧世界達人（気未使用）
- 2 魔法使い（平均的魔法世界人）
- 1 長谷川千雨
- 0.5 ネコ
- 0 鼻くそ

強さが分かり難い人の為に格ゲー風表

破壊するもの

ラスボスの先：隠しボス  
やられ硬直0 反撃、特定の技で微量回復、コンボの初手攻撃を跳ね返す鬼畜剛体、全画面技、ガー不の接近必殺、異常な攻撃力と手数、酷いライフ設定。

古代人本体

前転、全ての攻撃に無敵モーション持ち、お手軽コンボ、よくわからん殺し持ち、投げ範囲異常、硬直の無いダルシムワープ、1回負ける 本気出す典型

本気のライフメーカー

ゲージ30本でMAXからスタート、超火力、ゲージの回収速度異常、攻めでも守りでも強いパワーキャラ、待たないガー不の砲台にして楔。

ノエル

ゲージ3本MAXからスタート  
ゲージ高速自動回収、高速モーション、

ぶっぱ、波動昇竜キャラ

ひどいカウンター持ち、優秀なガードクラッシュ

ゲージが残ってるうちはリジエレクション、一撃持ち、

ゲーセン 台パン 使用禁止の筆頭。

コンボ補正無しでKOF火力を発揮しながら、闘う無限コンボ持ち

こんな感じに酷い……

オーヴァドライブを使ってきたら瀕死。

七英雄の皆様方

飛び道具、牽制、必殺技の全てがギリギリ家庭版に出せるキャラ。

中ボスの1人、ゲージと体力の微量回復、無駄に広い攻撃範囲と手数  
の速さ、リジエレクション

ナギ（大戦終了）

良くいる波動昇竜キャラ、主人公的にバランスの良い調整、瀕死で  
ガー不の全画面技、紛れもない強キャラ

原作エヴァ この小説のエヴァの戦力差

裸のゾーマ 闇の衣、常に3回行動ゾーマ

どうして式典つてのはこう…1つに纏めてやらないんだ？

あの全世界放映の中で条約の一部を結んだ終戦記念日から1月後の今日。

まゝたウエスペルタイアに…今回はオスティアに程近い浮き島で、世界が望む『英雄』を知らしめる為に仕込んだ式典。そこにバレンヌ帝国の武官代表として出席している俺。

ごきげんよう！ノエルです。

『彼らこそ魔法世界崩壊の危機を救った史上最高の英雄！！  
紅き翼の戦士だアアアアア！！』

『ウオオオオオオオ！！！！』

司会者のマイクパフォーマンスが拡声器を通して響き渡り、会場に詰め掛けた観衆と映像が届けられた先にいる民衆からは歓声が上が

まあ、わざわざズラす理屈は分かってるよ？

けどさあ〜

もうかれこれ2時間は座りっぱなしでケツは痛いし、クソみたいな司会が引つ張るから無駄に式典が長い。

七英雄の存在はバレンヌ帝国の文官、武官全会一致で秘匿すべき存在だと決定。

まあ、バレバレな部分もあるけども…核みたいなさ。

『ウチさあ こんな武力持ってんだよね〜』って意味を臭わせて、他国のトップが脅威だと感じてくれれば、金の掛からない牽制になるんだと。

餅は餅屋、政治は政治家ですわ。

うん、俺なんかには任せたらとりあえずブツ飛ばしてから考える軍事体制になっちまうしな。

だから客として出席しろって皇帝から勅命が飛んできたのに…他の奴らは仕事だったり、バックレたりして捕まらなかったんだとさ。

ホントは俺も出たくなかったけどさあ…七英雄の代表だとさ。体の良い生け贄にしか聞こえんよ！

「あゝ、早く終わってくんねえかあ…」

昼間っから花火やら号砲がバンバンと音を鳴らす。

オーケストラやら奏者達は、己の仕事である演奏をしている。

ぼかぼか陽気の秋空に何が悲しくてこんな場所で拘束されなければならないのか……

どうせムダに使うなら、縁側で座布団敷いてお昼寝したい。

そんな事を考えながらステージを眺める。

丁度、ラカンが片腕を掲げて『グッ！』とガッツポーズをして民衆を沸かせている。

なるほど…剣、拳奴隷時代から培ったパフォーマンスはなかなか見事だ。

これは試合での魅せ方や組み立てが巧みだという証明か。



ゼクト、詠春もぎこちなくでは有るが、手を振ったりと笑顔を見せたりと精一杯の愛想を振りまいている。

うんうん、式典の趣旨をよく理解しての行動：全く結構なことだ。

それに比べてアルビレオという男：仲間の影にこそこそと隠れる不様な姿を晒している。

しかもローブを纏って人相が割れないようにする徹底ぶり。

これはあくまでも俺個人の印象だが：何が面白いのか基本的にニヤニヤしてたり、好き好んで作戦を立案してたらしいから根暗っぽいと思ってたしな。

まあ、案の定の情け無い姿を全世界の皆様方に観て貰ってる。

だが、これがキャラクターを立てる為の計算だったら：ハンパ無いな。

そして赤毛のガキ：ナギ・スプリングフィールド。

コイツは、決戦の日からちいっとばかり人間が変わった。

まず…考え無しに噛みついてきた狂犬然りとしたバトル・マニアから卒業していた。

戦争が終結した暁には、必ず俺に決闘を申し込んでくると思ってた。しかし、一度バレンヌ帝国に来た時は図書館で読書、後はアリカの傍で警護と大人しいモンだった。

「コイツに関してはサツパリ分からん。」

こうして世界が望む英雄を知らしめる為の式典の終了は、その後も2時間座りっぱなしにされた状態のまま迎えた。

何にしても良い目眩ましとして、これからも目立って貰おう。

我慢大会という名の式典から3日後……何人も入って来ないように、鍵を掛けた自室にて。

『本は読む者を宇宙の果て、深海の底…異世界にも誘う』

この偉大な言葉をご存知だろうか？

これは想像力さえあれば、地球の裏側にだって行けるといいう意味だ。

しかし、この世界は魔法世界。

『バレンヌの変態』シゲンの暴走がまた1つ、全世界の野郎共の希望を叶えた！！

それも今まで誰も考えつかないほど技術の無駄遣いで…

バレンヌ帝国を語る上で切っても切れない魔法球。

その原理はよく分からんが：ボトルシップ的なミニチュア+適切な魔法陣Ⅱ中に入って活動出来る不思議な世界を構築。

その技術の応用で『読者の意識だけを小説の世界に引き込む』という魔法の小説。

過去…誰もが一度は思い付いて無駄に高いコストと、デタラメなほど高い技術を知り諦めてきた代物。

不眠不休で動ける人形シゲンが魔法球の新しい製造技術を発明。

然るべき機関の審査を通って認可…魔法の本は採算が取れるレベルと認定され、その気になれば商品展開出来るようになったらしい。

こんな話しをしているのもチャチャゼロの借金返済の為に情け無いぐらい清貧な生活を送っている我が家。

そしてかなりの庶民派な感覚を持っていることから、こつそりと魔法の小説の試作品を渡されたからだ。

その試作品…記念すべき第一作は魔法世界版『人魚姫』。

『はあ！？人魚姫か…』なんて侮ることなかれ！！

旧世界のアレはかなりマイルドなアレンジを加えられた物。

本場の魔法世界版『人魚姫』はイロイロと凄いんだから！

そんな只でさえ刺激が強い作品に、特別な仕掛けを施したスペシャルなブツを渡された俺は、特別な存在だと思えます。

まあ、ちよつとばかり話しの内容を語るなら主人公は男。

ある日、旅の途中に立ち寄った湖の傍に存在する小さな村。

その酒場でなんとも美しい踊り子を見つけて一目惚れし……

ざっくり言つと始まりはこんな感じ。

飾っておいても意味ないし、シゲンからはモニタリングも兼ねてる  
と伝えられたから早速読ませて貰ったが……

「ふー、」

なかなかの戦闘力だった。

ざっと600年を生き、古今東西のあらゆるジャンルを制覇（自称）  
したこの俺を余韻に浸らせるなんて…凄いで！シゲンさん！

けど、これはあまりにも危険な悪魔の技術。  
麻薬よりもよっぽど恐ろしい代物だ。

特に青少年なんか手に入れたら…お猿がリアル猿になっちゃうじ  
やないか！

まあ…洗脳につつてつけつていう真面目な理由も有るけどな。

「何にしても『人魚姫』…キミは存在すら許されん異端の存在だ。だが、イイ夢見させて貰ったぜ…あばよ。」

読み終えた直後だが泣く泣く庭で焼却処分。

解析される危険性を考えれば転売も出来ないしな…

ついでに要らないゴミも一斗缶で纏めて処分することにした。

嗚呼…悲恋、そして純情派の2大属性が合わさった名作よ…G O O  
d - b y e、安らかにお炊き上げ。

「…オヤジ、なんで涙ぐんでんだ？」

「チャチャゼロか…見りゃ分かんたろ？  
煙りが目に染みてんだよ。」

「…ふーん、そういうことにしてやるぜ。」

チャチャゼロ…

最近は関節部分がより精巧に、表情のバリエーションも増えています  
ます人間に近づいたコッペリア。

ところで、ヒラガは何を目指しているのだろうか。

そのうちに生体オナホール・茶々百式とか開発しちゃうの？  
ブラックの技術の無駄遣いじゃね？

やっぱ、『強者は強者を知る…類は友を呼ぶ』みたいにヒラガも変態なんだろうなあ。

あのシゲンが親友だと公言するくらいだし。

「なあ、チャチャゼロ。

お前はいつまでそんな所で突っ立ってんだ？」

トングで一斗缶の中身を『つつん』しながら背後のチャチャゼロに尋ねる。

「別に急ぐ必要無いから見てたけど、マスターが呼んでるぜ。来客だとき。ゼクトとか言ってた。」

「ふーん、ゼクトが来たか。

つか、雨戸にもたれ掛かるな。お前の重量が掛かってバカになるだろうが！

直すのはいつも俺なんだぞ！！」

「えへへへ、この通り反省してるから許して！オヤジ。」

「……………」

チャチャゼロってばさ、いつもは口が悪いのにこつこつ時だけ女の子アピールをして許されようとするんだからさあ…どつかしてるぜ。

「もういいや…怒る気も失せたよ。『ファイアボール』」

八つ当たりにも、いつまでものろのろと燃えていた中身を一斗缶ごと燃やし尽くす。

「なあオヤジ、思い出の品だったんじゃないのか？

さっきまでゆっくり燃やしてたのに、いきなりよオ…」

「ゴミはゴミ。ゴミに愛着持ち始めたら片付かないだろ？ほれ、さっさとお客さんを追い返すぞ。」

「へいへい…」

「バカ。何拗ねてんだ。

お前はブツ壊れたくらいじゃ捨てねえよ。」



「オ、オヤジ〜〜!」

「ちょ、ちょちょよ!?!乗っかかってくんない。バカみたいに重たいって!」

「えへへへ〜」

ホント、女つてのは魔性の生き物ですわ。

「つかさあ、ゼクト。

俺達さ、病み上がりどころか死に上がりなんだけど。そのチビ助は何者だ?」

「頼むから穏便に…威圧感を抑えてくれないかな?ほら、タカミチも怯えてるだろ?」

ダメージジーンズならぬダメージローブ…  
普段のライフメーカースタイルのゼクト。

ゼクトは、七五三みたいなスーツを改造したオシャレスーツが定番だろ?

急に偉ぶって貰っても反応に……  
身長が足りないからずるずる地面を引き摺って歩くモンだから汚いと二重の意味で困る。

「……………」

しかも明らかに『ワケ有りなんです』って感じのチビ助を連れてくるのもなんか嫌だ。

平穩が手をブンブン振って遠ざかる幻影が見えたのは……間違いであって欲しい。

「昔からの付き合いだ。聞くだけ聞いてみようかね。」

「この子はタカミチ…ガトウ達が保護したんだけど、生い立ちと体質的にも特殊な子だね。」

「あゝもう分かった。どうせメガ口の残党やらが狙ってるから、いつかのアスナみたいに保護しろって事だろ？」

「そうなんだよ！魔法、旧世界を問わず、要人を任せて一番信頼出来るのはノエル…キミなんだ。」

「……………分かってるとは思うが、俺はまどろっこしいセリフ回しが  
大ッ嫌いだ。  
要件は単刀直入かつ簡潔に述べろよ。」

「タカミチの養育と旧世界のある場所に行って欲しい。頼む！」

「だが、断る。」

「え？」

「まず第一に、俺はバレンヌ帝国を離れたくない。  
その二に、今の我が家にはタカミチ少年を養う余裕も理由も無い。」

「そんな…」

「まだ理由は有る。  
『完全なる世界』は、チビ助一人匿え無いほどシヨボい組織じゃない  
いだろ？ん？」

とりあえず、エヴァの淹れたお茶で喉を潤す。

うん、ウマい。

目の前のゼクトは顔面蒼白…っと、タカミチ少年はゼクトの雰囲気から状況を察している。

どうやってゼクトが巻き返しを図るのか…ぼーっと待っていたらエヴァから念話が飛んできた。

「（ノエル、そこまでやる必要は無いんじゃないか？）」

「（それが有るんだわな。）

ライフメーカーから敢えて厳しくしろって言われたんだわ。死んだブリームムの代わりの交渉人にしたんだとさ）」

「（ふ〜ん……で、結局ゼクトの依頼は引き受けるのか？

私はノエルに付いていくだけだから、どちらでも良いんだぞ？）」

このエヴァっ子は…俺がどうするか分かって言ってるもんな。

「（最終的には引き受ける。）

それなりにヤバい理由も有るみたいだしな。

だから只のイジワルだな。」

「（はあ……………あまりやりすぎるなよ？）」

ホント、エヴァっ子は優しいですわ。

俺？外面が良いんですが何か？

ぼちぼちイジワル再開とイキますかな。

「にらめっこに付き合っただけ暇じゃない。

俺にも用事があるんだわな…失礼させてもらっぞ。」

わざとゆっくりと席を立ち、退室しようとしたが……

「頼む！この通り土下座でも何でもするから引き受けて欲しい！」

土下座のゼクト、オロオロするタカミチ少年、ジト目で俺を見つめるエヴァ……………うーん、やりすぎたのかな？

「ハイハイ…分かったって。

色々とやる事が有るからすぐには無理だけど、引き受けてやんよ。」

『イギリスなどのヨーロッパ、アメリカ、果てはイスタンブールにまで旧連合の支部は存在する。キミにはイギリスはウェールズと日本の関東魔法協会へ行つて欲しい。』

特に関東魔法協会の要所：麻帆良の世界樹を警備して欲しい。』

ゼクトの話しはこんな感じだった。

まさか愛しのバレンヌから引き離されるなんて…逆に、会えない時間が想いを育むと考えればアリかな？

それと麻帆良に生えてる世界樹とかいうドデカイ御神木。

元々は霊地の象徴だったのを魔法使い達が弄り回した結果…どういう原理で願望を叶えるかワケ分からんけど、何十年周期かで発動する願望器に成り果てたんだと。

大事なのは、願いの代償に負のパワー的な…よく分からんのが蓄積されて、ゼクト曰わく『マジでヤバイ』らしい。

因みについて最近も発動したらしい。

しかし、麻帆良の責任者が『向こう30年間…次回の発動まで、麻帆良を平穩無事にしてくれ』なんて機転を利かせたらしい。

デカいっっちゃデカいけど、ギリで許される世界樹の使い方だわな。

コレがバレンヌや、魔法世界自体の消滅なんて叶える力が有ったら

……そんな訳で、次の願いの『世界樹の消滅』を叶える為に出張します。

「お〜い、準備出来たかエヴァ〜？」

「もう少し待ってくれ！」

皇帝から許可は取り付けたし、道場も弟子達が引き継いでくれる。流石に2人では抑えきれないから、何人が連れて行く許可も降りた。

「よし！お待たせだ。食糧調達用の魔法球も持ったし大丈夫だ！」

「やっとかよ…マスターは準備がトロいのが欠点だな。」

「な、なんだとお！？私の従者のクセにいい。」

「あ〜もう、うるっさい！タカミチを見るー！」

「え？僕ですか！？」

「タカミチ少年でも大人しく出来るんだ…次は張り手な？」

「……………」

「そんじゃま、皆さん…ケジメを付けるぞ。せーの」

「……………行つて来ます!!!」

次の世界樹の発動は2012年…30年ばかりバレンヌと離れるが、ちやちやつとウェールズの視察を済ませて、現代日本を楽しむとするかね。



## S a ・ G a 7 0 (後書き)

『人魚姫』

ロマサガ2のとあるイベントから拝借。

人魚薬を三回服用したら、魚人になります。  
二回までは大丈夫。

『駆け引き』

ロマサガ3のトレードから

席を立つは相手に焦らせる技なんじゃないかな？  
作者は無条件降伏に思えて、使った試しは有りません。

プレッシャーは時代の風…オーラで圧倒するチート技です。

『世界樹』

麻帆良「世界樹と言っても過言で無い巨木。  
次回の発動年を2012年に改変したのには、ちゃんと理由が有ります。

と言っわけで、ぼちぼち麻帆良にお邪魔します。

……… 30人の魅力的な美少女達を、私が表現出来るか不安で堪らない。

それでは誤字脱字の報告、感想待ってます。

イギリス…牧歌的よりド田舎という言葉がしっくりするウェールズ。

そのウェールズに存在する都市を離れ、山奥の隠れ里を経て…旧連合イギリス支部メルディアナ魔法学校は存在する。

正直な感想は学校っていうより、広大な敷地を保有している城ってレベル…

立派な菜園や花壇、地下室や秘密の部屋、ムダに凝った造りは、某カリオストロか、ホグワーツっぽい感じ。

『バレンヌ帝国大学よりデカいって何なの』と思ったのは俺だけでなく、エヴァもだったようだ。

そんなメルディアナ魔法学校。

耳当たりが良い綺麗な言葉で表すなら『世間から距離を取り、相互不干渉という形』

…俗世から離れて精神を鍛える為に建っている。

穿った言い方をするなら『誰の邪魔も助けも入らない幽玄の地で、子供に調教をする』…色々な意味で、設備と環境が申し分なく揃った最高の場所。

だから俺達はアポ無しで…早い話し、飾らない普段からの実態を視察する為に抜き打ちで、こっそりと『お邪魔』している。

無論、タカミチ少年は最寄りの村のお宿でチャチャゼロとお留守番。俺とエヴァは、朝御飯をしっかりと頂いてから出発。

学校近郊まで来たら、誰にも気付かれないように霧隠れを使ってmission start。

気を付ける事も、廊下で人にぶつからないようにする。

授業中に何が起ころうと干渉しない。

そして午前の授業が終了、生徒や職員同様に、俺達も休憩を取る。

(ノエル：コレが終わったら、ヨーロッパ観光がしたいなあ)

普段は真面目なエヴァさんが、急に寄り道をしたと言ってきた。

(うーん、イタリアはメシがウマイ。フランスはメシがウマイし、西ドイツもメシがウマイ！何処に行くか迷うな。)

(そ、それだったらさ 私の故郷がある…え〜っとフランスだったかな？

うん！フランスに行かないか？)

(んーOK。あそこは芸術の都らしいからオ・サ・レな国だぞう?)

(コラ、変な顔をするなあ〜!)

辺りに人は居ないが、声でバレるなんてダメじゃないか。もう!)

(まあまあまあ。そんな怒んなって。ほれ、笑いたくなるぞ〜笑いたくなつぞ〜?)

(コラ、くすぐるなって!もう知らない!)

(ありや?怒つちやったの?)

けど、優しいから許しちゃうんだわなあ。エヴァさん:ノエルのこと、今なら空いてますよ?)

(えへへへ〜)

広場の岩に腰掛けて念話を使い、お喋りという名のブレイク・タイム兼昼飯を摘みながら、次の目的地を決定。

そんな感じで午後の部もバシツと気合いを入れて、1日じっくり見て回ったが、授業内容自体はさして問題は無かった。

大まかに分類するなら

『魔法の射手』：良くある最弱クラスの魔法から始める実技授業。

『各種のポーションの作成、取り扱い』：最も身近な存在として役立つ方法

『罪を憎んで人を憎まず忘却魔法』：まあ、まあまあ、分からん事も無い。

『魔法バレしないように活動する方法』：……え？バレるのが嫌なら、魔法を使わなければ良いんじゃない？

こんな感じの授業と国、数、社、理の一般教養だった。

魔法の射手については、メルディアナ魔法学校が在るイギリスは、銃社会の西欧諸国……  
必要っちゃ必要だし、俺も『ウインドカッター』などの初級術法を、自衛手段として教えるからお互い様だ。

卒業した魔法生徒の多くが将来何らかのNGO団体に所属し、暴徒鎮圧や紛争地帯で……

または、町医者や占い師：全く能力を活かさず、一般企業に就職する者もいる現状を考えれば、このカリキュラムは十分納得は出来る。

それに、生徒達の腹ン中は分からないが、大半が真面目に授業を受けていた。

問題点があるとすれば、教師や大人達の態度だった。

教鞭を取る者という自負や意気込みが有るのは分かる。

だが、半数以上があまりにも選民意識が高過ぎる！

言葉や行動の節々から漂っており、毒や薬の区別無く吸収するチビ助には悪影響だわな。

他にも、図書室の禁足地…閲覧禁止のエリアに通じる監視が甘過ぎる！

俺達の目の前を堂々とチビ助が横切り、侵入していたのだから昨日、今日の問題では無い。

司書さん……………チヨイと自分が任された仕事への自覚と、責任が足りないな。

レモンティーなんて飲みながら悠長に、仕事してる場合じゃ無いぜ？

それと校長先生よオ……………監督者でありながら誰よりも職務怠慢！

ついでにジジイの癖に年甲斐も無く、若いネエちゃんを秘書と称して従者にするたあ…メチャ許せんなあ？  
職権乱用も適用。叩けばまだまだ埃は出てきそうだ。

今回の視察…俺の主観で判断しないように、ゼクトから渡されたチエックリストで、甘々に採点しても30点代…気持ちいいくらいに不合格だ！

さして、心臓が止まるほど怖い目に遭わせてやんよ…メルディアナ魔法学校！

Side 年甲斐も無いジジイ

『コン、コン』

「校長先生…！聞きたい事があるんです」

はて？もう夕暮れ時で子供は居ない筈。だが、勢いよくノックされた後、子供の声が聞こえてきた…  
まあ、どの学年にもやんちゃ坊主やお転婆な子は居るからのオ。

「入っただい。」



「は〜い……失礼させてもらうぞ。ジジイ！」

「ぬお！？」

部屋に入ってからも俯きがちで扉を閉めず、どうしたのかと身を乗り出した瞬間……恐ろしいプレッシャーを発した少女！

「校長先生！！」

すぐさまワシの従者が、暴徒を制圧しようとしたが……

「やかましい！秘書の分際でさえするな。」

「く、身体が……貴様、何をしたッッ」

「ふう、これだから若い女は困る……敢えて言うなら、大人しくしてたほうが良いぞ？」

「何だと？私を嘗めるな！」

「……自分の腕、肩、首が順番に、バラバラのミンチになる様は見たく無いだろ？ん？」

次は無い…命が惜しくばピクリともするな！呼吸以外は許さんぞ！」

「ひいいい…」

どれだけの才能が有れば実現出来るのか…いや、魔法薬がアーティファクトで姿を変えてるやもしれん。目に映る姿が正体かはこの際どうでも良い。

秘書の両腕と首には、魔力の糸が絡み付き、既に10本の指先からは極少量の…紙で指を切った程度の出血をしている。

糸を辿った先の主は勿論、謎の少女。

「女。貴様は愉快的なマネをせず、黙って見ていれば良い。それでも私は、好き好んで女子供は手は掛けん『甘ちゃん』なのだよ…連れはどうするか分からんがな？」

此方を見下し、ニヤニヤと嗤いを浮かべて…秘書の身体を動かし、魔法媒体を放棄させる少女。

だが…『連れ』じゃと!?

この暴徒と同格か、それ以上の力を持つ仲間が居ると言うのか!？そして、これだけの事を仕出かしておいて甘ちゃんだと!？

「それはどういう訳じゃ！貴様等、生徒や職員にまで手を出したのか!?!」

「さあな。アンタらの態度次第じゃそれもアリ…かな？  
此方としては、穩便に事を済ませたいんだけどよオ。念話なんて使  
われたら…どうすっかなあ。」

「「!？」」

何の前触れも無くワシの背後に男が現れ、双肩に手が置かれていた。  
そして、じわじわと男の手に込められる力が増し、肩から耐え難い  
激痛が発信され、体中を駆け巡る。

しかも口振りからして、かなりの極悪非道…ムシケラを踏み潰すよ  
うに、楽しんでヒトを殺す様子がハッキリと浮かんできた。

だが…

目の前には、理解不能なプレッシャーを発する恐ろしい少女。  
背後には、理解不能な魔法を使いこなす男…間違い無くアサシクタ  
イプ。

両者共に裏の世界の住人…それも、魔法世界でもトップクラスか。

「分かった…降参じゃよ。」

頼むから…生徒達に手荒な真似はしないで欲しい。」

最早、隙を見てどうこうの話では無い。  
従者の命と自身の命だけなら、犠牲にして抵抗出来た。  
しかし敵の全容が見えんし、通信1つで生徒が家族諸共……既に  
完膚なきまでに追い詰められている。

「ふ…この老いぼれの命が望みか？ワシに差し出せるモノなら全て  
をくれてやろう！」

「マス…校長先生！！！」

「キミはまだ若い。」

新しいマスターがきつと現れる筈じゃ。生きてくれ。」

「う、うう……はい」

「うむ…待たせたの。」

「構わねえよ。オラ！ぼさつとしてねえで来賓用の椅子に座れ。」

「わ、分かりました…」

「ん、その泣いてる女も大人しくしてるなら、ジイさんの隣に  
座っても良いぞ？」

「はい…分かりました。」

「よしよし、そんじゃま自己紹介だ。

俺はアンタらの新しいボスだ…お分かりかな？」

「……………」

「返事は無しか…まあいいや。

俺達は、バレン又帝国からの使者兼視察団の一員だ。

さっきまで女を縛っていた、この子もそうだ。」

「「へ？」

「もう一度言ってやる。俺達は、バレン又帝国からの使者兼視察団の一員だ。」

「そ、それならそうと、早く言っ頂ければもてなしも出来たものを…さっきの登場は心臓に悪すぎますぞ。」

「ハハハ、それについては許せ。

それと、もてなしは不要だ…既に視察は勝手に済ませたからな。」

「「……………ええええええええ！？」

も、もうダメじゃ。

目の前でドツキリ大成功なんて笑っておる男と少女は、ヒトの皮を被った悪魔じゃ！

今日1日：この逢魔が時に寿命が一気に削られた気分じゃ。  
チクショウウめ。

「あのジジイの慌てっぷりは見事だったな。」

「本当だわな。告白して、『はわわわ』って感じのリアクションした時間が最高だったな！」

「ふふふ…笑わせるな！アレは反則だ。伸ばし放題のヒゲを振り回しながら、おろおろする様は不様だった！」

結局、脅かすだけ脅かして……

『次回からも、いつ抜き打ち検査があるか分からないが、次からは今回のような報告無しに、本国へ評定を送る。』  
と、釘を刺した。

ぬるぬるの甘々なお裁きに聞こえるが、割とシャレにならない。

ある日、いきなり社長や会長が見にきて、ボロんカス言われて、最悪リストラなんてシャレにならんでしょ？

指導要点はハッキリと伝えたから、これからのメルディアナ魔法学校の成長に期待ですわ。

因みに、襲撃を掛けた時『私の命だけは助けてくれ〜』的な発言をしていたら……………

まあ、終わったことをいつまでもごちゃごちゃ言っても仕方無いしな。

今はメルディアナ魔法学校を出発。

お手を繋いでゆっくりのんびり歩きながら、チャチャゼロとタカミチ少年が待っているお宿に帰っている最中だが……………

「なあ、ノエル……………」

「ん、どしたん？エヴァ。」

「本当はな……………故郷に行くのは怖いんだ。」

「……………」

「今も時々だが昔の場面や、父上や母上が夢に現れる……………」

「ふんふん。」

「けど、もう600歳だ。」

「いい加減過去を振り払い、前に進まなくてはな。」

「……………別にさ、無理してまで振り切る必要は無いんじゃないか？」

「なんでそんな事言うんだ！」

「まあまあ、落ち着きなつて。そりゃ、普通の人間としての一生は取り上げられたし、人生の半分は禄でも無い目に遭ったわな。」

「……」

「けどよオ…俺にも逢えたし、チャチャゼロにも逢えただろ？」

「…うん」

「押し付けがましいし、エヴァにはエヴァの価値観が有るのは分かるけどさ、イイ思い出も悪い思い出もエヴァのルーツなんだ。だからさ、無理に急ぐ必要は無いと思うぞ。」

「けど…」

「そんな事言ったら俺なんて、500年前から国潰したりしてるんだぞ？エヴァと比べたらドブと清水くらいで…エヴァが綺麗すぎて一緒に暮らせなくなるだろ？」

「………」

「まあ、アレだな。」

「なんだかんだで、300年くらい連れ添った仲だろ？ちいっとは俺のこと頼れっつて！な！！」

「ノエル…ありがとう。」



それでもエヴァは、面と向かって言うのが恥ずかしいのか、ごによごによと呟いたつもりらしいが…チート・イヤーは完璧に捕らえておりましたから！残念！！

「ん？何か言ったか？」

丁度、子供状態だからおんぶして欲しいのか？」

けど、知らん振りをしてあげるのも大事。

うん…それよりダメージの大きいおんぶを思いついちゃったんだ。やるしかないね

「むう…この人でなし！」

「フハハ！サーセン！」

お詫びにお前のような幼女はおんぶしてくれるわあ！

そしてエヴァは、そこで寝ておるが良いわあ！！」

「あ！ちよ…もう！！」

そんな感じでゆっくりのんびり…再び話しをしながら帰る。

ところで……晩飯はまたフィッシュ・アンド・チップス的なオカズと、有り合わせの洋食のフルコースなのかな？

民宿だから仕方無いけど…ちょっとバリエーションが無いね。

和食が恋しい…

S a ・ G a 7 1 (後書き)

『メルディアナ魔法学校』

ナギが5、6歳でドロップアウトし、ネギが首席スキップで卒業した学校。

原作ではちよろつと出るくらいですが山奥、教会チックな卒業式、広い廊下……明らかにデカそう!!!

ていうか、ある程度の知識は有るから4科目はやるとして、体育とかやるのかな？

ホウキの練習ですか？特定が難しいね。

それと……ネギ助は出して欲しいですか？

別に出さなくても小説は続けられるのですが、ちょいとしたアンケート。

『校長先生』

某指輪物語のガンダルフ的な人のヒゲがかなり伸びて、穏やかな顔付きで人格者＋赤松先生風に書き直し〃校長先生

作者が見た時はこんな印象。

そしてネギの祖父。近衛近右衛門の友人で、立派な魔法使い（マギステル・マギ）らしいです。

だったら余所のチビを見る前に、テメエのガキの世話をしろとね……

因みに従者かどうかは不明ですが、若くて美人の姉ちゃんを親しい様子で傍に置いてる描写は有りました。

ハンパないプレイボーイなのか、むつつりジジイと補完するかは人それぞれ。

なお、本場のイギリス食について作者は実際に食べたことは有りません。  
あんなに扱き下ろされるほどマズいかは不明。

という訳で、今回はイギリス…メルディアナ編と見せかけてエヴァさん回。

麻帆良で女の子を書くときの練習です。

おフランスの旅行編は入れて欲しいですか？  
普通に麻帆良に突撃してもイイですか？

それでは、誤字脱字の報告と感想待ってまゝです！

フランス旅行は半分満足って感じだった。

フランスはエヴァの故郷らしい。

色々調べようとしたが……まず、正確な出生地から分からなかった。

エヴァは貴族サンだったようだから苗字は、地名や城の名から取っていた筈！

そこで、図書館に籠もって調べたが成果無し……

戦争中のゴタゴタしていた時期に疎開した先でエヴァは吸血鬼にされた。だから親父さんとお袋さんの、その後の足取りは勿論、墓が在るのかすらも判明しなかった。

エヴァは『父上は、やはり戦場で散ったか……』なんて言っていたが、そんなことは無い筈だ。

当時の戦争は戦える人間が居ない。

というのも、領地の農民なんぞ使っても意味が無いし、労働者が減れば取り立てれる税も減る。

だから必然的に傭兵をスカウト 数も少ないし、金もバカにならない貴重品 一騎打ちなどの代表戦で勝負を決めるのが慣例だった。

徹底的に『バチバチ』やり合う現在の戦争も、ナポレオンの兵法革

命で兵士が簡単に調達出来るようになってからだ。  
昔にそんな真似したら、勝っても負けても領地を潰す羽目になるし  
な。

仮に、戦争を生き延びたとしても…正義の魔法使いの食指からは逃  
げ切れなかっただろう。

どちらにせよ親父さん達の運命は決まっていたのかも知れない。

そうそう。

フランスもそうだが、ヨーロッパには多くの教会…カタコンベとい  
う地下墓地が存在する。

まあ、日本とは違って、ドクロを壁や天井に嵌め込んでるだけ。  
墓地なんて名ばかりのゴミ捨て場みたいな印象だ。

だから、淡い希望で足を運んだ俺達に容赦ない洗礼…誰が誰なのか  
サッパリ分からなかった。

しかも居るだけで、死人が手招きしてるみたいで気味が悪い。

当然、エヴァや俺が求めるモノに関しても、何の収穫も無かったぜ。  
ノートルダム寺院のコンチキショウ！！

こうして…拙い手段だがやれるだけの事は尽くした。

1日しか余裕が無いんだから仕方無いかも知れない。

今は適当なカフェテリアに入り、休憩中…

「ふう、踏ん切りどころか、逆に調べれば調べるほど…もやもやが溜まってしまったな。

ん、此処のエスプレッソ美味しいな」

「そうだなあ エヴァには悪いが、手掛かりが1つつも見当たらねえのは流石に無いわ。

うーん、本場のシュークリーム…ウマ〜。タカミチもなんか腹に入れるよ。」

「ハイ！だったら、此処（上）からココ（下）の商品食べてみたいです！」

「どらどら…」

タカミチ少年は、メニューのスイーツゾーンの天辺を指差して、下まで指を滑らした。

「…砂糖の食い過ぎは、虫歯になるから駄目。ケーキは2つ、3つにしとけ。」

「…はい。じゃあ、ショートケーキと……」

「はあ、次…頑張ろうぜ？エヴァ。」

「ああ……」

エヴァは目に見えて落ち込んでる。

凱旋門もエッフェル塔も行かずに、本の虫だったんだ。

旅行で来たのに自分に付き合っただけで貰って成果無しは、そりゃ落胆するわな。

「……………」

それにしても、ここまで痕跡をキレイに消せるのか？

メガロは当時の旧世界において、それほどの勢力を持っていたなんて有り得るのか？

「あ！このタルトって食べ物美味しい！フィッシュ・アンド・チツプスより美味しいや。」

うーん……考えても分からんことばかり。

本国の人間に、メガロの情報を洗い出して貰うか。

「ノエルさん！タルトのおかわりしても良いですか？」

「だからさあ、食べ過ぎはダメつつつてんだろ？タカミチ」

エヴァと俺は、それぞれ別種の『もやもや』をお土産にフランス旅行は終了…

という訳で最終目的地…麻帆良が存在する『日本』にやってきた！

けどさ……

俺は端から見ると、日に焼けてイイ感じの肌の色、逆立った短髪の総白髪…荒事担当だったから、目つきがチヨイと悪い。

そして、麻帆良シティに直行しようと考えていたから『パリッ』とスーツで決めていた。

まあ、何が言いたいかって言うとき……入国審査で止められた。

タカミチ少年はアジア風で、日本人みたいな醤油顔。

エヴァは化けるのが面倒いからって、エヴァっ子…文字通り、お人



形さんみたい可愛いお嬢さま。

そのケースの中身は何だ？貴様は誘拐犯か？マフィアの構成員かと  
因縁付けられて、空港で拘束されちったぜ。

財布だけじゃいけないんですか？全ての人間がトランクを持っていないと、納得出来ないんですか？

パスポートも有るんですが…え？調べさせる？写真もですか…

結局、誤認拘束した癖にペコリともしないで、逆に偉そうな態度で  
注意されて解放…

クソツタレ！600年生きてきたけど初めての経験、初めての辱め  
だ。

まだ初体験が残ってたなんて…チクシヨウめ！

空港はサッサと跡にした。

その際に、どういつ訳か麻帆良へ直通の電車が整備されていた。  
空港から直通だぜ？

正気の沙汰と思えないが利便性はある。

確かに時間短縮にもなるし便利だが、それは止した。

『人混みがちやごちやして嫌だ』  
なんてふざけた理由じゃない。

電車は最初から最後まで、人の往来が激しい…  
襲われた時なんて、パニックで暴走した人の波で身動きが取れない。

タクシーだったら…『クイック・タイム』で運転手を抱えて、車外に逃げたらハイ、終わり。

そういう理屈で、麻帆良に向かってタクシーで移動中…

「ほら、その…アレだ。もうすぐで麻帆良シティだぞ？  
いい加減、普通のノエルに戻ってくれないか？」

「えー、マジムカついてんすけど〜。  
これで麻帆良で因縁付けられたら、やっちゃってイイツスか？  
やっちゃってもイイツスよね！エヴァさん！」

「ノエル、もういい加減にチンプラみたいな喋りかたは止める。私も怒るぞ？弁当でも食べてる。」

「はいはい、なんていうか理不尽過ぎて泣ける……」

「（チャチャゼロを影の倉庫にしまっていて良かった…出してたら、もっと悲惨な目に遭ったな）」

「あゝ！ノエルさん！大きい橋ですよ！」

「んんん？」

タカミチが指差した先には、麻帆良全体をぐるっと囲うように流れる川に、たった一本だけ掛けられたら大きな橋。

遠くには、客を乗せて外周を回る遊覧船がのんびりと運航しているのも見えた。

「タカミチ少年、アレは『麻帆良・ビッグブリッジ』と呼ばれていてな。

年に1回は決闘騒ぎが起きるらしいぞ。」

「ええ〜！？そんなんですか！？」

「ウ・ソ〜！ハッハッハッハ！！」

「うううう……」

「どうだ悔しいかあ？」

純粹無垢なタカミチに、コミュニケーションという名の悪戯を仕掛ける。

家に来た当初はじいっとしており、会話にもなかなか入ってこなかったタカミチ。

だが、ヨーロッパ旅行を通して俺のいい加減具合に慣れ、打ち解けてくれたかな？

そうだったら色々と楽になるんだけどなあ

わしゃわしゃとタカミチを弄くり回していた時、隣で窓から、麻帆良大橋を眺めていたエヴァが呟いた。

「それにしてもこの橋を渡るか、船で渡して貰うか、飛んでいくかしか麻帆良に通じるルートが無いとはな。」

「そんなシリアスになっても仕方無えべさ。

来た時には、こんなメチャクチャな造りになってんだから。

そこはこれから話し合う地元の権力者の皆様方と、ウマ〜く折り合

い付けて貰うしか無いだろ？」

「そつだな。」

だが、こんなふざけた造りはあまりに時代遅れだろ！

最悪の事態が起きた時、民衆はどこから逃げるんだ！！」

「まあまあ落ち着きなさいって。」

そうならないようにするのが俺達の仕事だろ？

一応、話しは通してあるがな……………お、タカミチはチャチャゼロと待機な？」

「え〜、分かりました。」

「聞き分けが良くて、大変よろしい。」

あ、運転手さん…分かってると思いますが、オフレコでお願いしますね？

うっかり口を滑らしたら……ね？」

「魔法のバレンヌ帝国からはるばる…ようこそ来て下さいましたの。」

「いえいえ、コレも我等が仰せつかった仕事の1つですから。」

麻帆良の最高権力者とされる男：『関東魔法協会会長』近衛近右衛門は女子校エリアの学園長も兼任している。

よく『穢れ無き乙女のうんたらかんたら』的な話を聞く。  
それは『何物にも染まっていない』という神秘性が魔法やら、おまじないの類と上手く噛み合う…っぽい。

取りあえずブン殴る派の俺とは、別畑過ぎて詳しい事は分からん。  
とにかく土地柄もあるのか、魔法の適性が高い子が多いんだと。

それと麻帆良というか連合日本支部は、戦争終盤に本国の勝利でなく、麻帆良の安寧を世界樹に願った。

だから本国からは裏切り者扱いされ、内輪でも随分揉め……その時に鷹派の魔法使いと、本国直属の兵士を一掃したらしい。

そんな訳で、今も連合の残党による襲撃が、毎夜ひっきりなしに来ると報告にある。

昼間でも気が抜けん、夜は交代制で24時間ぶっ通しで厳戒警備体制。

そう考えれば、かなりえげつない事もしているから半分は自業自得

だが……首領が女子校エリアに居る理屈も分からんことも無い。侵入者に目を光らせてるんじゃないの？

きつとそうだよな……うん、色眼鏡で見るのはダメだしな。別におかしな点は無いです。

学園長自らが警護をしていると思えば、大丈夫！

ちょっとした疑問とトリップは、この程度にしておこうか。

学園長室に入った時から、なんか魔法使いの皆様方がエライ睨んでくるし、目の前の机で直前まで事務でもしてたのか近衛は机を挟んでいる。

俺達は来賓用のソファー的な椅子に腰掛けている。

これは暗に『俺達はいざとなれば徹底抗戦！』という意思表示なのか！？

おかげで今度はエヴァが、イライラしてきてる。

あと逆光のせいじゃなければ近衛……ちょっと個性的な頭をしているように見える。

なんか術具的なモノでも埋め込んでるのか！？

色んな意味で、楽長室の空気が最悪です。

交渉相手が俺達だから、別に大したこと無いけどさ。  
普段はどうしてるんだ？

「それでは…皆様方にも職務が有るのを考慮し、単刀直入に申し上げます。」

「あ、別に予定は有りませんぞ？のう、皆の衆よ。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

打ち合わせでもしたように、一斉に頷く魔法使いという名の野次馬。

「ふおっふおっふおっふおっふお。」

そして満足そうにヒゲを梳きながら、ふがふが笑っているロケット・ヘッド。

うぜえ…ハンパ無くうぜえ…お前はどこのバルタン星人だと…  
つか、社交辞令に魔心を込めて返してくるな！

けどさ、年長者らしく余裕を見せるのも必要だよな？  
のんびり型の俺も、『ウィンドカツ…』くらいまで言いそうになっ  
たが我慢ですわ。



平和的解決には、相手への思い遣りが大切だしな。

「え、単刀直入に申し上げます。

我々の要求は世界樹近辺一帯を所有地として頂戴したい。

そして次の世界樹発動に、あの神木を消し去る願いをしたいのです。

」

「ふおっふおっ…ぶふお！？げほ、げほげっほげほ…おええ」

「……………」

ジジイは割とマジで咽せこみ、顔をサルのように真っ赤つか。

下っ端の魔法使い達の中に、どれだけの麻帆良出身者が居るかは不明だが…急にギスギスした空気を醸し出して来た。

けどさ、そんなに驚くような事か？頭に来るようなモンか？

近衛だって世界樹の危険性を十二分に理解しているからこそ、土壇場であんな願いの使い方をしたんだろ？

反対に魔法使い達は、危険性を十二分に理解しているからこそ、命懸けの警備をしてるんじゃないのか？

コレが『土地のシンボルだから…』なんて考えでいるなら死んだ方がいいな。

そのシンボルは、神木の形をした時限爆弾なんだからな。

「……急に咳き込んで如何されましたか？」

「いやいや…世界樹近郊には、既に市民が暮らしておりますのう。」

頬を掻きながら苦しい言い訳…いや、捉え方によっては真面目な話しに聞こえる。

しかし俺には、問答を繰り返して露骨な論点のすり替え。または、此方が譲歩するように促す近衛。

「世界樹の危険性は、あなた方も把握している筈です。最悪の事態が起きてからでは、全て遅いのですよ？」

まだまだお前が欲しがるような、エサはやらない。  
あちら側が無理をふっかけて来るなら、こちらはどこまで正論を通すだけだ。

「いや…お待ち下され。世界樹広場には、魔法先生を重点的に配置しておりますじゃ。」

「重要度を理解されてるなら話しが早い。  
警備が麻帆良所属の魔法使いから、バレンヌ帝国の腕利きに変わるだけです。」

「じゃがのう〜…人員配置を弄るうにも、どこもかしこもバランスが取れとるから…」

「そうでしょうか？  
麻帆良には、古今東西あらゆる場所、ジャンルを問わずに貴重な書物をかき集めた『図書館島』なる施設が在りますね。」

「仰る通り存在しますが……」

近衛の顔が一瞬だけ曇る。

「我等は此処に来る前に、イギリスのメルディアナ魔法学校を抜き打ちで視察しました。予想通りと言うべきか、予想以上か…禁書を納めた間の警備や監視が緩すぎでした。」

行つてて良かったメルディアナ！  
差し込むカードが一手増えた。

「確かにメルディアナ魔法学校の校長は、生徒に対してちと甘い所がありましたからな。  
しかし、儂らは違いますぞ？」

「そう仮定しても、司書が多くても何の問題も無い筈です。  
また、深部に潜れば潜るほどに蔵書のレア度が上がるらしいですね。うつつけの守護獣と、地下での暮らしにも慣れている亜人の部下を派遣しましょう。」  
「どうでしょうか？」

それもウチの中堅クラスの弟子でも苦戦する守護獣っていうか、魔獣。  
そして、地下暮らしに定評のあるモール族。

図書館島は不思議なダンジョンと化しているから、ピッタリかも知れんね。

「それはまた、細やかなお気遣い感謝致しますれば……………」

「学園長！そんな命令を引き受ける必要は有りませんぞ！！」

「ランボルギーニ君！余計な口を挟むでないわッッ」

「ですが！！」

「黙らんか。儂を本気で怒らすでないぞ？」

黒人かね…俺の日焼けってレベルじゃない肌の黒さ。

そして腫れぼったい唇に一際ゴツツい体格を誇るドレッドヘアー。

「……………出過ぎた真似を致しました…使者殿、どうかお許し下さい。」

「……………」

他にも金髪、茶髪と青眼、やら……………エライバラエティーに富んだ職員達ですわ。

けどさ、土下座するくらいなら……………なんだかなあ。

まあ、数揃えれば一割はアカン子が存在する。  
まさか、こんな大事な場所で口出しして来るおバカが居るなんてヤ  
バいだろ。

ついでに、近衛の部下を纏められているか怪しい……方針転換！話し  
合いなんてしてたら日が暮れるな。

「ふう…このままでは埒があきませんね。ここに我々が、旧メガロ  
メセンブリアのデータから絞り出し、  
世界樹に対する資料が纏められた資料が有ります。」

「ふうむ……」

渡した資料を手を取った近衛。

先ほどまでのしよぼしよぼした目つきや、覇気の欠片も無いふざけ  
た耄碌ジジイ然りとした風は無い。

ページの隅々にまで目を通し、捲る様子は真剣そのもの。

「……………」

やはり此方を若い見た目で判断して、なあなあにやり過ぎそうとしていたようだな。

流石は裏の組織を仕切る狸ジジイ…汚いな、流石汚い！

けど、別に交渉の場面だと汚くないんだよなあ……世の中、ホントどうかしてるぜ！

「近衛長老。まだまだ資料の続きが残っているようですが…いい加減にご決断下さい。

我等バレンヌは、武力行使で、麻帆良ごと世界樹を消し去っても良いのです。」

悩む老人に圧力を掛けて、一気にこの交渉ごっこの幕を降ろしに掛かる。

「ついでにこの部屋に居る奴らに告げる！

1人でも攻撃してみる…貴様等、連帯責任で首ポロリだぞお？」

そしてエヴァも空気を読んで、周りに圧力を掛ける。

うーん…ナイス阿吽の呼吸コンビネーション！

魔法使いからメンチ切られてるがスルー。

こんだけやれば、ランボルギーニ君も口出ししないだろ。

後はジジイが頷くだけで、この場は解決。

「しかし……もうちいっただけ、緩めていただけませんか？」

頷くかと思ったら、まさかの催促だった。

この状況でこんな真似するなんて、ホントいい根性してるじゃないの。

「仕方有りませんね…世界樹近郊一帯から、世界樹の傍に団地を工面してもらいます。」

これ以上はまかり通りませんよ？」

そして……

「ふおっふおっふおっふお…これならば良いでしょう。」

「では、この書状に目を通して…私は納得いきません学園長！」  
「……………」

ランボルギーニ……お前は何なの？

怖いもの知らずって言うか、最早バカだな。



「エヴァ、適当に痛めつける…痛めつけるだけだぞ？」

「お安い御用だ…というより既に全員が私のマリオット。では、連帯責任だなあ。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

流石に首チヨンパはしないが、荒縄で締め付けられてるようなダメージを受けてるんだろなあ。

ただ、女性職員を見えない魔力の縄が締め付けていると妄想したら……同情はしないが、胸がアツイ！

「ん、流石は俺の相棒だ。

では取り直して近衛長老…よく読んでから調印して下さい。」

「うむ…」

こうして…最後に一悶着有ったが、土地の権力者への交渉はサクッと終了。

いや、やっと交渉という名の、下っ端魔法使いへ露骨なアピールが終わった。

ホントだったらもつと平和的に済ましたかった。まあ、ベストとは  
言えないがベターってところかな。

さて、住居も手に入ったから仲間を呼ぶかね。

## S a ・ G a 7 2 (後書き)

『近衛近右衛門』

巨大学園都市「麻帆良学園」の学園長さん。

原作では、麻帆良は埼玉県に存在するとあります。

学園内で兵器の開発が行われおり、ある程度の軍事力を保有している可能性から経済的、軍事的、諸々の面において下手な小国を上回る巨大な勢力を上回る。

きっと日本政府ともズブズブなんじゃないかな？

そして魔法界においても、超有名人であるらしい原作タカミチよりも、実力的には上だとされている。

魔法界における学園長の立ち位置や、権力は推して知るべし………ある意味では国家元首的な存在？  
首相？お前がご機嫌伺いに来いよ！！

そんな近衛さんですが、『実際は何歳さ？』、『あの瓢箪みたいな頭なんだよ！』、『なして関西と仲悪いん？』とネタの宝箱や〜

だけど未来の為に、日本という地域のだけではなく、もっと広い世界に目を向けよう…そう考えて出てきたのではないでしょうか。

そしてその結果、呪術協会の人々には裏切り者のような扱いを受けてしまったのではないかと想像すると………近衛さん可哀相(´・`・´)

・、)

まあ、本人も基本的に動かないし、赤松神も動かさないから…これからもネタの宝庫なのは確かですね。

世界樹の名前は「蟠桃」はんとう？・ばんとう？」「と言いつつ正しいです。

『ランボルギーニ』

まあ…よくネタにされるガンドルフィーニの親というオリキャラ。原作まで20年もあるんだから仕方無かったんです…

因みに、原作ガンドルフィーニさんは、激し過ぎるパワーインフレの中…ナイフ、ハンドガン？マグナム？と魔法を駆使して頑張る漢。性格も、扱き下ろされるほど悪い人じゃないです。ちよつと熱血マン過ぎて、最後に損する人。

誤字脱字の報告、感想待ってます。

麻帆良入りと同時に、交渉の真似事を済ましてから近衛右衛門から工面させた住居。

それは、出来立てほやほやピッカピカの高級感溢れるマンション。正直、予想以上のモノだったさ……エヴァは外観を見て『ほう……』とうっとり。

タカミチが中身の広さとキレイな床に興奮して、これまたはしゃいじゃって大満足だった。

バレンヌにある俺の実家がボロくて悪かったな！

何はともあれ旧世界に於ける確固たる拠点は手に入ったのだ。次はバレンヌ帝国から腕利きの召集、麻帆良の魔法使いと軋轢を起こさないように部隊を編成する事だ。

旧世界でも取り分け魔法使い共が我が物顔で闊歩している麻帆良の土地柄だが、旧世界：魔法は極力秘匿せねばならない面倒な事情を考慮して刃物、射撃を得意な者であること。

現地スタッフの魔法使い達は秘匿なんて気にせず行使しているが、バカス力魔法を撃つ真似はしない。

近衛右衛門達に付け入らせるような隙を見せる気はサラサラ無いし、こっちは『天下のバレンヌ帝国』つつう看板背負ってるからな。

そして最も重要な事……向こう30年という長丁場で世界樹を守る部隊は、違和感なく街に溶け込む必要がある。

その為の絶対条件『亜人の特徴が無い亜人or普通の人間』を満たしているか。

ネコ、キツネに代表される獣耳と尻尾や龍人、悪魔のように特殊な瞳…厳密には虹彩の持ち主は如何なる実力者も基本的にカット！変装に無駄なエネルギーや気を使つては、本職の警備で足を掬われるリスクが段違いに高まる。

まあ、図書館島の下層を守護するモール族はその限りでは無いが。

こうして本国へメッセージを送つてから各部屋に最低限の家具を揃えながら過ごすこと幾日……

秋も深まり、いよいよ冬かと感じるほど肌寒いある日にとつとつ来た。

マンションの駐車場に『ずらーっ』と集まった人数…300。

内訳はツイー・リン（智鈴）など大草原を住処とする遊牧の民。

そしてジュウベエが率いるヤウダ所属、侍の剣客集団で丁度半数ずつ。

前者はその生活スタイルから人間の中でも特別目が良い部族であり、弓や銃の扱いも手慣れている為にマンションからの狙撃要員も担当して欲しいから。

後者は刀に限らず大概の武器は扱い、そこらの石ころも踊る凶器に早変わり！徒手空拳にも優れた接近戦のプロフェッショナル。おそらくはこの麻帆良に於ける主力部隊として活躍してくれるだろう。

そして弓や刀、銃も外觀が同じならどんなハイテク兵器も時代相応に見えるため……得物の管理も容易いのも両者の大きな強み。

更に時差が無い魔法球の中にもモール族が50人！

全員が種族の特徴として手先も器用だから、図書館島のダンジョン内にそれとなくトラップを仕込んだり叡智の魔獣『スフィンクス』の飼育もお手の物。彼ら曰わく『タイムと比べたらスフィンクスなんて猫みたいなモノ』らしい。

早い話し…タワシみたいなずんぐりむつくりの見た目に似合わず、事務能力や管理能力がバツグン！！

ついでに麻帆良の軍事研が『電磁砲』の開発に成功、量産品が何本か持っているらしい。

キチガイ地味な技術力は認めるが没収！図書館島で新たに司書として働く奴らに支給しようかね。

これで外部の侵入者に奪われたり、内部の人間にちよるまかされるリスクもぐつと減る筈だ。

こうして仲間も揃い、マンションの部屋割りもスムーズに決まった。

次は部下と麻帆良スタッフが上手くかみ合うようなor邪魔にならない配置や作戦を考え始めたが……………

「うん、perfect!」

ツイー・リン達が来てから1日…

家の中で缶詰め状態になりながら、これから部隊をどのように展開させるかを…自室兼物置で考え続け、完成した達成感を味わいながら伸びをする。

「何をニヤニヤしてるんですか？ついに頭がオカシク成り果てましたか？というか、さっさとこんな案件片付けてくれないか？」

「……………違っつてツイー・リン。今回の案なら大丈夫なんじゃないでしょうか。」

「ちょっと見てみ？ほね。」

頭を捻くり回して絞り出したアイデアが書かれたレポートを渡す。

「ウムム！これは……………」

「どせ？」



「ノエルさん…こんな全然ダメ。ダメダメだよ!!  
鳥目の者は狙撃の時どうする力。きつと使い物にならないし、マズル・フラッシュですぐにバレてしまうヨ!!  
少なくともワタシの地元では、獲物を狩るとき通用しないネ。」

なん……だと………(・・)?

「そんな目くじら立てて怒らんと……」

「甘い甘い…クレープに蜂蜜かけるより甘すぎだよ!…この糞碌ジ  
ジイ!」

「(、；、；、)」

「泣いたフリなんてしても許さんネ。

中学生の方がまだマシな脳みそしてるヨ……明日の朝、エヴァさんと見に来るからそれまでに完成させとくようにナ!!」

「あ、ちよつ待……行ってしまった。

あんなに強くドアを閉めなくても良いんじゃない?」

朝から晩まで缶詰め状態のまま机に向かい続けた結果、俺の1日はこうして終わった。

翌日……エヴァとツイー・リンという名の鬼が振りかざした情け容赦無い言葉のナイフによって、再びメタメタにされた。

拳げ句、結局はコイツ等2人が俺のアイデアを改良して完成。いろいろと残っている取り決めに詰めるため、彼女達は近衛右衛門の元へ赴いた。

その後……

割と深刻な心のダメージを負わされ、へこんでいた俺を見かねたジユウベエが、さっそく見つけた酒屋で不器用ながら誘い出してくれたのは別の話し。

S a ・ G a 7 3 (後書き)

「ツイー・リン」

ロマサガ3のパーティーキャラ

ビジュアルは黒髪を一本に纏め、遊牧民風の衣装に身を包んだ女性。要するにアジアン・ビューティー。

誰もが必ず一度はパーティーに組み込まれる強制イベントを経験して、彼女と付き合っただけは。

その時の作者は『何だこの女！メチャクチャ弱っちいじゃねえか！』と弓キャラが嫌いになりました。

ロマサガ3は弓が意外と外れやすく、直後のダンジョンのボス戦でも活躍し辛いです。

しかし、やり込めば強キャラらしいです。

因みにパーティーに入りたい理由は『東方だけでなく、世界を見たい』という可愛い理由。

彼女の願いを叶えてあげるか、うつせえバーカ(「。。」)と断るかはアナタ次第。

『ジユウベエ』

ロマサガ2 / 初代イーストガード

彼の名を聞いて松田優作がすぐに浮かんだ方は、あの名作のファン。鬼武者2の主人公カッコ良すぎですわ！

さて、イーストガードの性能はかなり強い方。

武器を振らせても良し、素手で戦わせても良しとジユウベエに限らず基本全員が優秀なアタッカータイプ。

けど手順を間違えるとジユウベエは勿論、イーストガード自体が歴史から消滅してしまいます。

作者は初プレイ時に消滅しました。

因みに、ステータス最強のソウジの元ネタは沖田総司。

ゲーム内でも一回殺されたら終わりのスペランカーという虚弱体質っぷりを再現。

そして元ネタの人は、新撰組の制服であるあの服が『ださい、目立つ』と大ツツ嫌いで、1、2回くらいしか着用せず。

次第に『総司の言う通りじゃね？』か返り血で汚れ過ぎ！洗濯面

W倒W W』と他の剣士もバタバタ着なくなり、早い時期で廃止になったそうです。

S a ・ G a 7 4 (前書き)

現在のタカミチ君は、原作開始時のネギ助と同レベルという設定。

基本的に、吾天と吾飯を混ぜた感じの子供をイメージしています。

あ、どうも初めまして高畑・T・タカミチです。いつ、どんな風に生まれたのかは分からないのですが、ガトウさんやトーマス兄さんに助けられて、今はノエルさんのお世話になっています。

あと…僕は悪い奴らに狙われるかもしれない。

それと寿命がかなり長いようだとかトウさん達から教えられました。なので、自衛手段を身に付ける必要が有るんです。

だから自分なりに魔法球の中で練習してるんですが、今日はノエルさんの息抜きも兼ねて付き合っただけです。

「ヨッシャ！タカミチさつき教えた通り、あの大岩に向かってやってみ。」

「ハイ……はああ、てやあ！」

ブンブン…ブン

「あつれ〜？おっかしいなあ？」

「手刀状態で指先まで、こつ…気を巡らせるんだ……あとは腕の振り方がおかしい。」

見とけよ……………素早く打つー!」

ノエルさんはゆっくりと気を纏わす様子を見せてから、『ビュンビュン…ビュン!』と空を斬る音を発しながら一気に腕を振るった! それも何が何だがさっぱり見えないほどのスピードで。

しかし、肝心の岩を見たのに何の変化も無かった。

「…ノエルさんだって不発じゃないですか。」

「まあまあ、そんな風に口尖らしてまで文句言うなって。

お楽しみはこれからさあ〜ほれ、そこに転がってる石ころをアレに投げてみな。」

「つたくも〜、飛んでけー!」

カツン…ゴロゴロ!

「おお〜!あんなに大きかった岩がバラバラになってる!すっげー

!」



「ふう……（\*、\*）  
今のがタカミチが目指す無音拳って技の亜種……『ソニック・ブーム』  
だ。

あとは居合い拳だったか？」

今日のノエルさんはかなり機嫌がイイみたいだ。もしかしたら……  
アドバイスを貰えるかも！

「ハイ！こつポケットを鞘にして『ビュバツ』てやる感じの技です  
！」

「うーん……居合いやら抜刀型の技はなあ……アレなんだよなあ。」

「え……どうしたんですか？」

「抜刀つつうのはまず得物が納まってる状態から、抜く時の加速が  
大事なワケだわな。」

「そりゃそうですよ。『居合い拳』なんですから。」

「まあ初手に使うのも……ギリギリでアリだ。

ぶっちゃけるとさ……使い所がかなり厳しいと思うぞ？」

「そんなあ~~~~」

「…ガトウつてのはポケットに入れてたのか？」

「あ！そういえばあんまり突っ込んでなかったや。」

「ん…とりあえず『ソニック・ブーム』を極めて、音を置き去りにするぐらいの突き、払いを手に入れような？そうすりゃ溜めの要らない居合い拳…音速拳が打てるんだぜ？」

「おーーーーー！！すっげー！！」

「（おお、ちよろいちよろい！）」

「じゃあ頑張りますね！はああ……………ハッ」

ノエルさんが見せてくれたように集中、気を張り巡らしてから…新しい岩目掛けて思い切り腕を振った。

そして……

「ノエルさん…岩に 傷が付きました！見て下さいよ！」

「（エッ？）・・・？何それ）……………まだまだ甘い形になったな。

」

「エへへ、頭撫でないで下さいよあ〜。こしょぶつたいじゃないですかあ。」

うん！ノエルさんとやると、やっぱり手応えを感じるし…やる気が  
出ちゃうな。

ようし！今日は『そにつくぶーむ』を頑張るぞ！！

一心不乱に、しっかりと試行錯誤しながら技を反復し、身体の叩き  
込むタカミチ。

タカミチは6歳…もうすぐ7歳に足を掛けるくらいだが、いつか必  
ず巣立ちの時が来る。

エヴァもいつまでも匿うわけにはいかないと考えていた。

まあ、ガキの頃から俺達みたいな裏の稼業一本で絞っちまうんじゃないかって、堅気として生きる道も用意してやるのがオトナの甲斐だしな。

だから自衛手段も兼ねて始めた稽古だがパネエ…マジでタカミチ半端ねえ。

物覚えが良いっていうのも大いに関係してるが素直で直向き（ひたむき）な性分。ちょっとアドバイスをしたらすぐに理解して、ついさっきの動きを修正するとか……もうね、普通の成長スピードと比べ物にならない。

つーか、お前はどこのイチローだとね……反則すぎじゃね？ってレベル。

他にも言いたいことは色々あるけども、一言で言うなら『かなり天才に近い』ってやつだわな。

それと『居合い拳』か…アレにはホント、久しぶりにド肝抜かれたわ。

まさかあんな発想をするなんて……子供はすげえ。

俺もそうだけど、武術をかじったことのある人間にはまず間違いなくあんな発想は出来ん。

タカミチには言わなかったけど、動体視力の良い相手や同格クラスには通じんぜ？

ていうか本国の兵士から見たら、ポケットに手を突っ込んでる姿が

隙を晒してるようにしか見えんよ。  
ポケットも普通の後ろ向きに作るんじゃないで、前向きに作るのも問題…欠点だらけだわな。

けど、向上心がある証拠だから全く問題無し。

今いちピンと来ない弟子を育てるのも面白いが、物覚えも良く、努力家な弟子はよっぽど面白い。  
しかも住み込みの内弟子ともなると……どこまで引き上げてやれるか心踊る！

適当な岩に腰掛けてそんなことを考えながら、ぼんやりとタカミチの稽古風景を眺めていると、背後から声が掛けられた。

(本体よオ。オイッス、オイッス！)

「おお〜！分身よオ。オイッス、オイッス〜！〜んで、今日のトレジャーはどんな感じよ？」

麻帆良で売ってる食材を食わないことも無いが…あらゆる物価が高いから、今んとこ無職の俺達にはキツイ。

早いとこ近衛右衛門に生活手当を出させんと……まあ、近いうちにどうにかしよう。

(今日は『ワニゲータ』と『マンドレーク』、中でも目玉は『バジリスク』だぜ〜)

「分身、s……ナイス収穫！早速血とハラワタ抜きすんべ。丸焼き、親子丼、ステーキ…野菜サラダ、肉詰め、ビビンバ…何でも作れる。上手くいけば近所にお裾分けも出来る！」

(だろ？もつと誉めてくれてもイイのよ？)

「ちょっと褒めただけで調子乗んなバーカ。口を動かす暇が有るなら手エ動かせや。」

(へいへい、分身使いの荒い本体だ。俺達…今度生まれ変わった時は、リリースたんみたいな美少女の分身に成るんだ。)

「このスカタン共が…」

シゲン達作り出し、教えてくれた『改良型シャドウ・サーバント』。

性能もビジュアルも従来型の真つ黒くろ助からガラツと変わった。攻撃を受けない限り消えず、命令を出せばそれなりに成果を上げる『そっくりさん』を生み出す術に進化した。

うん、便利なのは確かだけどよオ…俺って端から見たらこんなウザつたい性格してんのか？

この際それは置いてこう。

初代ボクオーン…サバイバルスキルを教えてくださいありがとうございます。

おかげで今日もオカズに困らんよ。

(ところで本体さあ、タカミチって暫くはここら辺の平原でやるんだよな？)

「そりゃそうだろ。いきなり山やら密林に突っ込んだら、揉みくちやにされてオシマイだ。

とりあえず…ここらでステップ・アップしてからだわな。」

首筋を裂いて逆さまにしたワニゲーターを木に括り付けながら答える。

バジリスクを見れば、既に分身の手によってブロック肉にされている。

うん、クーラーボックスに押し込んでエヴァに冷凍して貰おう。

そんなこんなで作業も一段落。

今お天道さんがどこら辺にいるか空を見上げたら……

「……もうすぐ夕方、日暮れかね。

魔法球ン中にいると時間の感覚が狂うんだよな……」

寿命の消耗と、深刻な時差ボケ。

この2点が時間を引き延ばした改造魔法球のデメリットなんだが……仕方無いわな。

表も丁度夕方ぐらいだったから、帰るにはイイ按配だな

「オ〜イ！タカミチ〜？熱中すんのは良いがもうそろそろ時間だ。ウチに帰んぞ〜い。」

「オ〜イ！タカミチ〜？熱中すんのは良いがもうそろそろ時間だ。ウチに帰んぞ〜い。」

え？もうそんな時間になっちゃったのかなあ……

けどノエルさんがそう言うんだから……そうなのかな。

「じゃあ……ノエルさん、今日の成果を試させて下さい！」



「エエー、しょうがないなあー一回ぼつきりだからな？」

「ありがとうございます！」

ノエルさんがむにやむにやと呪文を唱え始める。

その間に、僕の数少ない強化手段である『集気法』もあらかじめ掛けたから準備万端。

「そんじゃま、『エレメンタル（火）』：出て来いやあ。」

『もつと熱くなれよオオオオ！！』

「うわ！？だいぶ離れてるのに…凄いい熱波だ！これじゃ近寄れない。」

ふわふわと浮かびながら火の粉を撒き散らしているモノ…

「つまり、今日教わった『ソニック・ブーム』や『気弾』で距離を取って鬨えという意味ですね？」

「自分で考え、創意工夫して闘えタカミチ。」

腕を組み、ただ一言告げたノエルさん…うん、やっぱりそういう事だったんですね！

確信した僕は構えをとり火の精霊に向き合う。

『どうも初めまして。今日のバトルのテーマは『本気！』』

本気になれば自分が変わる！本気になれば全てが変わる！！

さあ、本気になって頑張っていきましょう！』

「ハイ！行きます！」

「よし…始めイッツ…！」

『ハハ、心も！体も！スカ〜イブルウ！』

「くそ、想像以上に動きが速い。」

タカミチは、開幕と同時にソニック・ブームを放った。

燃え盛る火のエレメンタルを、遠距離主体の戦法で倒そうという発想は正しい。

けど、タカミチには悪いが風船にマスクを被せただけのシヨボい風貌からは想像も出来ないほど、エレメンタル達は素速いんだわな。加えて、気分屋なエレメンタルは独自のリズムで動くもんだから、まさしく乱調子！

攻撃を悉く（ことごと）避けられ、逆に熱波を浴びせられたり手加減された火球を投げつけられたりと…只今タカミチ絶賛苦戦中。

ぶつちやけると火の奴は……とにかく強い。

まあ…雷やら風だとかのエレメンタルに比べたらマシだが強いことには変わらない。

その主な原因は身体を構成する主成分が『超高熱の火の塊』ということと、タカミチが翻弄されているようにトリッキーな動きと攻撃パターンから。

対処法も『火なんだから、水の術法をぶっかけりゃ余裕ww』なんて甘っちょろいモンじゃない。

生半可な水量では瞬く間に蒸発…そして熱湯の蒸気が発生、運が悪いと水蒸気爆発で酷いザマになる。

そんなワケで余計にやりにくくなるのは必死。

そのため小手先に頼っても無意味…必要な物は純然な力。

なにより火のエレメンタルは、酸素が無くなるうが燃え続ける不思議生命体だし、たとえ許容量を越えるダメージを受けて消えても還るだけ。

次に呼び出した時には元気一杯の姿で現れ、快く胸を貸してくれる。

バレンヌで道場をやった頃から生徒や弟子達の力を計ったり、腕試しでお世話になってきた。

だから俺は勝手にエレメンタル師匠と呼んでおり、今回は初心者タカミチ最初の壁としてお出で頂いた。

さて、もう片方…火のエレメンタルが暑苦しいという理由は挑一手前の気遣いや、アドバイス。

無論、皮肉を言ってからかうなど一切の邪心を込めているワケでは無いし、対戦した部下も理解している。

だが……

『おい、たるんでんじゃないか？ぬるま湯になんか浸かってんじゃないか？』  
『ねえよー！』

「うるさい！弛んでなんかいないやい！」

『ああ？当てるの無理だと思ったんじゃないか？  
できないと思ってるんじゃないですか！？でもね、信じればもっと  
すごいことが起きるぞー！』

タカミチが全力を込めて放った攻撃をひよいひよいと避け続け、アドバイス…もとい、そのうざったい程の熱さを遺憾なく発揮している。

嫌ンなるくらいに…よくこれだけ口が回るなというくらいのマシンガン・トークで言うモンだから嫌われている。

「うううう…これでも食らえ！」

ありやりや…終始避けられ、その都度言われるアドバイスにタカミチは半泣き状態。  
やけっぱちになって真っ正面から気弾撃ちまっただよ。

『本番で力を出せねえのか！？  
練習をいつも本気、本番のつもりでやってないからだろ！』

「うわあ！？」

タカミチが間違いなく全力で放った気弾だったが、エレメンタルの打ち返して来た『ファイア・ボール』でかき消された。

そして勢いを落とさずそのまま飛んでいき返り討ち…まあ、手加減していたようでタカミチに直撃することは無く、手前の地面に着

弾。

タカミチは、発生した衝撃波によって尻餅をつかされただけで、無事だったが……

『諦めんなよ…諦めんなよ、お前!!』

どうしてそこでやめるんだ!?!そこで!!

もう少し頑張ってみてみるよ!』

「ぼ、僕は…僕は…うう、うううう……」

尻餅をついたまま下を向き、半べそ状態で立ち上がる様子はない。まあ、始めたばかりだからこれが普通か。

「タカミチを戦意喪失と見なし、この試合…終了とする。」

「……………」

『……………100回叩くと壊れる壁があったとする。でもみんな何回叩けば壊れるかわからないから、90回まで来ていても途中であきらめてしまう……諦めたらなんの意味も無いよね?。』

周りのこと思えよ?応援してる人たちのこと思ってみろって。ずっとやってみろ!必ず目標を達成できるから!

『Never give up!』

戦闘終了を告げた際、エレメンタル師匠（火）は一度、俺の方を見た。

そして再びタカミチに向き合うとアドバイス……激励の言葉を残して還っていった。

最初から最後まで相変わらずのテンションと、スタンスだった。

それにしても呼び出したのが、手加減するくらいの分別がある火の精霊で良かった。

これがエレメンタル師匠（土）だったら……手加減を知らないから岩の弾丸、槍の掃射で、タカミチは一瞬にしてぺしゃんこだったろうなあ……

こうしてタカミチの我が儘から始まった腕試しは終わった。時間すればあつという間の闘いだっただ。

それでも日も沈みかけ、もうすぐ夜を迎える原っぱにはノエルとタカミチで2人つきり……

依然としてタカミチは下を向き、泣いているが先程とは違う。

えんえんと子供がするような泣き方では無く、中学生あたりからするような……悔しさを噛み締める嗚咽、そして地面に付いていた手は堅く握り締められている。

「……………」

そしてこの時のタカミチは、手も足も出なかった悔しさも、多いに噛みしめていた。

だがそれ以上に過去の自分が申し込んだ願いを悔いていた。

いつもは稽古の大部分を我流で行っているから、ノエルが丸1日付きつきりで見てくれるのが嬉しかった。

だから、ノエルに成長してる自分を見せたかった。

しかし結果は惨敗。調子に乗ってみつともない姿を晒してしまった……本当なら今もすぐに立ち上がって、少しでも無事な様子を見せて挽回しなければならぬ。

これも頭では理解しているが、ノエルがどんな顔をしているのか……この声色とノエルの性分なら、そんな事は無いことも薄々感じている。

しかし万が一……落胆や諦めの表情を浮かべていたらと考えたら、顔を上げることすら出来なかった。

ノエルはそんなタカミチのすぐ傍まで近寄り、腰を下ろして胡座を掻き話し始める。

「『エリクサー』……これで万事大丈夫だ。



破れた服は…どうでもなるから、まあ気にすんな。

ところでタカミチ…火のエレメンタルは強かっただろ？初めて手玉に取られた気分はどうだ？ん？」

「!?!」

「ハツハツハ！エレメンタル師匠にいきなり勝てるとは、欠片も思っぢやいなかつたさ。

っ！か、ぶっぢやけると間違ひなく負けると確信してた。」

「くっ……」

ノエルがあっけらかんと言った言葉は、タカミチの頑張りや意気込み…なによりもノエルに対するあらゆる思いをぶち壊すには十分な威力を持っていた。

それを承知でノエルは語り続ける。

「まあ、何にせよ当面の目標は、エレメンタル師匠をブツ飛ばす事だな。」

「…じゃあノエルさん…僕はどこまで強くなれば良いんですか!?!  
僕はバカじゃない！悪い奴らと戦ったって、いなくならないじゃな

いのですか！

それに僕は、ガトウさんみたいなパンチは撃てないし、トーマスさんみたいに魔法を鍛えるどころか扱うことすら出来ない！！

ずっと弱いまま狙われ続けて迷惑を掛けるなら、僕なんていっそのこと死んだ方がマシなんだ！！」

これはタカミチがガトウとトーマスの姿から…そしてある日訪ねてきたゼクトに引き取られ、その日のうちにノエルに引き渡された。

その時の会話はしつかり聞いていたし、剣呑な空気からもなんとなく察していた。

そして『存在するだけで迷惑が掛かる…だけど、この人達に迷惑を掛けたくない』というジレンマに悩み、拙い解決策として、世間一般で認識されている『イイ子』を演じ続けてきた。

それはタカミチさえも意識していない『嫌われたくない、愛されたい』という想いがあったのも確かだった。

そして今日…とうとうタカミチは、素の自分をノエルにさらけ出した。

「タカミチ…俺は、いつまでお前がイイ子ちゃんんでいるかとヒヤヒヤしてたんだが…やっと腹の中のモン吐き出してくれたな。」

「あ…」

タカミチは今度こそ怒鳴りつけられると覚悟した。

しかし実際にされた事は、ノエルの手が優しく頭に乗せられただけ。

「世の中にや、ワケ分からんぐらい強い奴らがウジャウジャ居る。

俺やエヴァでそいつ等から守ってやる事は出来る。

だがな…何でも出来るワケじゃないんだわ。それは分かるな？」

「……………」

「……………後手後手でいる以上、用意周到な奴らに裏を搔かれる時もある……………だから強くなれ。」

最後に自分を守ってやれるのは、自分しかいねんだ。」

「けど……………」

「強くなれタカミチ！！」

オメエの好きなように生きていなら強くなるしかねえんだ。

オメエが望なら、どんだけでも力になってやらあ。俺達は『家族』だろ？」

「本当に…僕が 家族になっても良いんですか！？」

「つーかさ、今更じゃね？  
お前がゼクトに連れられて、初めてウチに来た日から、俺はそう思  
ってたぞ。」

「ノエルさん……」

紆余曲折有ったが、今日この日、この瞬間から本当の意味でタカミ  
チは家族という物を手に入れることが出来た。

だがノエルは……

「（ふっ 師匠スキルの高い俺に隙は無かった。）よし……今日のタ  
カミチは頑張ってたから、ウチ帰って腹一杯メシ食うべ！  
んで、風呂入ってサツパリすっか！  
まあ……その後は寝るんだわな。」

「むう……頭を撫でないで下さいよお こしよぶったいじゃないで  
すかあ」

言ったことに嘘偽りは無い。  
しかし、これがタカミチの為とはいえ、上手いこと話しをすり替え  
て若干ごまかしていた。

ノエルも最初の百年辺りで『無闇に腹を割っても意味は無いんだな  
あ』と気付かされた。

実際にほぼ真実という推測と、理詰めで対応してもタカミチが潰れると考えたからこそ、この対処をしたのだ。

「H A H A H A H A ! お前が立つまで撫でるのを止めん。もつと言えばこしょぶりもする!」

「はいはい、立ちました、立ちましたよ。だからいい加減に止めて下さいよ〜」

「もう、ちいっただけ続くんじゃないよ。」

「ちよっとな…もう〜」

撫で繰り返されてるタカミチも口ではぶー垂れているが、まんざらではない様子で身を任せている。

何はともあれ…ノエル一家に引き取られてから、一番嬉しい日になったのは確かである。

「何だ?この料理は…」

家族団欒のメシ時に、一体何をぶー垂れてるのかね。  
このエヴァっ子は。

「俺特製ワニとバジリスク肉のつみれをぶっこんだ野菜タップリ鍋。」

「それは見れば分かるわ！！  
私が言ってるのは脇にあるコップに注がれてる『ドロドロした緑の液体』の事だ！」

「はあ……俺特製レモン汁混合版マンドレイクのスペシャル青汁。  
飲んだ瞬間から死ぬほど身体にイイ。」

「おええええ……  
こんなモノを美味しい料理の横に並べるな……メシが不味くなるだろ。」

この野郎 お前が偏食ばかりしてるから、氣イ使って献立考えてや  
つたのに……カチンと来た。

「じゃ、エヴァは晩飯抜きな。  
今日の晩飯は、食前酒ならぬ食前マンドレイクを飲まんと言わせん。  
今決めた。」

「ちよ、ちよい待て!?!」

「うええ…すごく、草の味でした。」

「よっしゃよっしゃ、タカミチ早よ鍋食え!! つみれにポン酢を絡めてロン中浄化しろ」

タカミチはホンマ、イイ子だわあ。

もうね、つみれを多めによそってやりたくなる可愛さがある。

「ほうあ…ほくほくで美味しいですう〜うん、白菜も…箸が止まらない…うんまあい」

気合いを入れて作った料理を喜ばれると嬉しいさ〜 (^ ^)

「くっそ〜…なあなあノエルう、青汁は勘弁して貰えないか?」

「……じゃあ、自慢のワイナリー解体な。」

「な!?! あ、青汁とワイナリーの何が繋がるんだ! 私でも怒るぞ!」

「フーかき、エヴァ1人で金の遣い過ぎ。

一本、〇〇万のワインって何さ？もつと言ったらお前何もしないでゴロゴロ、飯食っちゃゴロゴロ…お前はお城のお姫様じゃないんだぞ？」

「うぐ」

「働かざる者食つべからず。無駄使いをする者に掛ける情けは有らず。とにかく今日はメシ抜きな？」

「え、ノエルさん。エヴァさんが可哀相じゃないですか。」

「タ…タカミチ「タカミチ…家族だからこそ、厳しくしねえといけない時があるんだわ。」

「家族なら仕方ないですね。」

「そんなあ（、；、；、；）」

なんかエヴァが半泣きでアピールしてるけど関係無いな。



「ん〜！ポーノ。（うんまああい）」

それより…タカミチの問題だ。

本国だったら学園にぶち込んで、人付き合いやら色々勉強させるつもりだった。

けど、ここは旧世界の麻帆良だし、どうすっかなあ…麻帆良、麻帆良…

はあ、ご飯が美味くてお腹は幸せだけど、問題が山積みで頭が痛い。

因みに肉とマンドレイクは、近所の皆様にもお裾分け。

後日、お返しを貰った時に皆が『美味しかった』と口を揃えていた。うん…生態系を崩さない程度に留めつつ、これからも乱獲しようかね。

S a ・ G a 7 4 (後書き)

『マンド레이크』

ロマサガ2では植物系の初期モンスター…マンド레이크。でっかい豆やら種に目を付けて、手足が生えた存在。茶から始まり、緑、赤の順で全3種類が登場。

作者は最初『へへ、クリボ○の親戚だな。雑魚め』なんて思ってた。事実、茶色の彼はまあまあ弱いです。

しかし、全体催眠 一緒にいるモンスター無双 ループ ( ; ; ; )

ロマサガ2に弱つちい敵はいません。皆が一芸を持っていると、緑の彼に思い知らされました。

人を見た目で判断しては失礼という典型例です。

『バジリスクさん』

ロマサガ2/トカゲ系の強キャラ

青いコモドオオトカゲに何故か鶏みたいなとさかをくつつけられた  
ビジュアル。

しかし悪名高い『石化凝視』というスキルの持ち主に名を連ねる御  
方。

基本的に防衛不能のチート技。

作者は会いたくない敵の1人に認定しています。

固定的で登場する時も有るなど、『さん』という敬称を付けずには  
いられない。

なお作者は、ワニ肉は食べたことは有りませんが、蛇と亀の肉は食  
べたことがあります…まあ、鳥と変わりませんでした。  
だからワニも美味いんじゃないかなあ〜と思います。

『エレメンタル』

ミンサガのそれぞれの術法からなんとなく登場。

ホントは風船みたいな奴が出てきて、助太刀してくれる…けど弱い。  
一度しか使いませんでした。

『師匠』

ロマサガを始め、あらゆるゲームに登場する敵キャラながら、親しみと尊敬の念を込めて呼ばれる存在。

未熟なプレイヤーは、道場の弟子（雑魚）に門前払い。仮に辿り着いても強力なパワーを見せつける。

しかし幾たびか、拳で語りあったプレイヤーからは…

『あの御方がいたからクリア出来ました！』

『師匠のおかげでヒロインを落とせました。』

『正直、ラスボス（笑）より強い印象を受けました』

『閃きオイシイです。』

『隠しボスに向けてスパーリングお願いします！』

などなど、全国から様々な感謝の言葉が寄せられています。

類似品に『○○先生』という御方が存在。

日夜、日本に限らずワールドワイドに活躍中。

今もどこかで初心者をお熱血指導しておられる。

それでは誤字脱字の報告、感想待ってまゝです。

S a ・ G a 7 5 (前書き)

全然話しと関係無いですが、ダウンタウンDX・SP恒例の『私服』  
…『私服』衣装額チエツク。

叶恭子、美香のゴージャス姉妹の衣装がヤバかった。

両者、黒でビシッと決めてた…それは良い。

妹は一枚羽織ったのを脱ぐと、チクビを隠しただけのダイヤが散りばめられた飾りとドレス。

姉は上は…まあ、ギリギリ普通なんですけど、腰から下はすっけすけの衣装に、前と後ろの部分だけを隠した衣装。

無論、億単位のジュエリー！。

作者、あんな衣装は二次元だけだと思っただけですが…セレブは、凡人の出来ない事をサラッとやるんですね。

以上、ひよっとこの戯れ言でした。

例によって、今日も今日とてハッピーエンドを目指すため、タカミチ少年を無情に扱き上げるノエル in 草原エリア。

「なあ、タカミチ。『学校』って奴に行ってみたいか？」

タカミチからしたら、分身には馬車馬のように働かせ、自分はこのんびりとしているようにしか見えないノエルが、急に話を振った。

「え？学校って…僕は無理ですよ。他の子供達に迷惑が…」

「ふっふっふ…諸々の問題を全部丸っと解決しつつ、上手いことやっていける策…我にアリ！」

「あう…ノエルさん、それは分かりましたが、まだやるんですか？」

「勿論ツスよ！気弾は詠唱が出来ないタカミチの生命線じゃん。極限まで凝縮した気弾50発を、ひたすら空に撃つ…3セットな。」

「（ひひひ…）、殺される。」

これじゃ悪い奴と戦う前に、修行中に気力を削られて殺されてしま  
うううう！！」

「大丈夫！死にそうって言う元気が残ってるうちは、なんくるない  
さあ。」

「（な、なんくるないさ？）……どうして僕の考えてる事が分かっ  
たんですか？」

「だって顔に書いてあるし。頑張れ！ポーカーフェイスは大事なス  
キルだべ？」

「ぐううう……」

「大丈夫、大丈夫！一本集中！一本集中！ヤバくなったら回復  
すっからガ・ン・バ！  
ほい、残り45本！」

結局、1セット終了につき3分の休憩を挟みながらだが、タカミチ  
は最後までこの修行を見事やりおとし、疲れを抜くため大の字で寝  
転んでいる。

太陽は燦々と照らし、風は優しくそよぎ、労るようにくすぐる。



(うーん、本体の様子はどうなのかねえ。)

実はタカミチの前に居るノエルは分身。

『シャドウ・サーバント』で分身を呼び出した瞬間、『クイック・タイム』で入れ替わっていた。

何故こんな面倒な真似をするのか？

タカミチ達が居る草原エリアの入り口から、だいぶ進んだ先…其処に本体のノエルは居る。

その理由は…

『オーヴァー・ドライ…ぶべあ!?!』

最強難度の術法『オーヴァー・ドライブ』…今度こそ会得したり！と気を抜いた瞬間、どこぞの吸血鬼の最期のように股から頭の天辺まで亀裂が走り『グシャツ!!』となった。

まあ、その直後にあらかじめ仕込んでおいた『リヴァイヴァ』で何事も無かったかのように復活。

念のため腕を捻ったりして違和感が無いか確かめ、あらかた終えろと手近な岩に腰を下ろす。

「ふう、また失敗かあ。

今のはだいたいイイ線行ってたのに…惜つしいなあ」

早い話し、ノエル自身も修行をしていたのだ。

その理由も『これは最悪の最悪を見越して動く必要が有るわな』と、世界樹が絡んだ至極真面目なモノ。

1日おきにコウメイの改良版術法が部下によって届けられ、ノエルも辛抱強く続けているが…如何せん、チートの身体と能力を『与えられた』ノエル。

素のスペックは平々凡々、良くもなければ悪くもない。

改良のテーマは『どうしても集中して発動するという『溜め』を無くしつつ、最大限の効果を！』だが…どこまでも普通の青年という事もあって『破壊するもの』戦よりはマシになったが、なかなか上手く行かない。

当然、動きを止める隙は残ったまま。

『もういつそのことタカミチに教えて、逆に教えて貰えば…ってダメじゃん！』

こんな考えがふと浮かぶほど、地味々にノエルは追い込まれていた。

そして分身ノエルは：半死人のように寝転がってるタカミチに、『生命の水』を掛けていた。

タカミチのライフは日々、ギリギリの所まで削られていた。

ノエルがバレンヌで道場をやっていた頃：数多くの弟子や生徒を育てた。

しかし、タカミチくらいの初心者にこれほどハードなメニューは課さなかった。

人数が多過ぎて1人1人にまで手が回らず、どうしても画一的なメニューにせざるを得なかったからだ。

しかし、現在のノエルはタカミチに課している。それは専属トレーナーという立場や、タカミチの背負った宿命も大いに関係しているが……

とある日：外食で焼き肉屋を食らい尽くして帰宅。

タカミチが大好きなアニメやバラエティーなどの、お子ちゃまゴールデンタイムも終了。

22時も回り、タカミチは寝つき大人の時間に交わされた会話。

「エヴァってさ、タカミチの稽古してやらないのか？」

ワンカップ大関を一本、ウメツシュを二本空けたホロ酔いノエル。

「ほあ〜？タカミチ〜？

私の出番はもつと先い〜。殺す気の乱取りやら組み手…実戦的稽古だよ〜！

ノエルううは、私と組み手〜えへへ。」

対して、ワインの瓶が2本…

推定10歳のロリな身体のキャパシティを明らかに越えたアルコールで、完全に出来上がった…というより、向こう側にいつちゃつてる。

会話のキャッチボールも時々オカシイ。

初代ボクオーン、2代目ボクオーンの本体シゲンも、草葉の陰からエヴァを見て呆れ果てているに違いない。

「お前よオ…まあ、いいや。

ほれ、今日の晩酌はオシマイ。夜の洗濯するからちやつちやか風呂入ってくれ。」

「はぁぁい。」

「あーもう、着替え持って行けよ。」

「ん~~~~」

完全幼児退行したエヴァはよちよち…それはもう見事な千鳥足で風呂へ向かった。

その後ろ姿をぼんやりと見送っていたノエルだったが、酔った勢いからか彼も大概アホな事を考えた。

『あんの野郎め、面倒臭がりやがった。

いつか必ずギャフンと言わせてやる…タカミチがな!』

この時、この瞬間からきっかけはどうあれ『タカミチ・パーフェクト・ソルジャー・プロジェクト』…T・P・S・Pは密かに始動。

ネーミングセンスは…まあ、なんていうか そっとしておこう。

略称もゲーム機っぽいとか、どっかの殺戮マシンみたいなんて言うてはいけない。

ほろ酔いとはいえ、ボケた酔っ払いが付けた名前と略称だ。

少なくともその時の本人は自画自賛していたのだから…重ねて述べ

るがそっとしておっじ。

「ぜえ、ぜえ…どうですか、ノエルさん！」

「良くやったな！タカミチ！  
今はゆ〜っくり休め。すぐに甘〜いフルーツもいできてやるから、  
それ食ってまたストレッチな。」

「ハイ！」

「あ、エレメンタル師匠！ありがとうございます！」

『君、イキイキしてるぞ！！』

当たり前だが最後まで礼を尽くすタカミチに一声掛け、エレメンタル（火）は今日も還った。

長年、海千山千の数多の人間を指導して身に付けた経験、勘、引き出しの全てをノエルは総動員。  
タカミチが耐えうるギリギリ…ホントにギリギリの負荷が掛かるメニユーを前日に作成。

身体で覚えさせつつ、特殊な体質を利用した高速超回復で強化！！

まずは第一段階：『死ぬほど基礎を鍛える』が順調に進行していると、ノエルは大きな手応えを感じて、内心ほくそ笑み：竜種が好んで食べる『ドラゴンフルーツ』を幾つか抱えながら、次のプランを練っている。

これは全くの余談だが、どういう訳かタカミチはドラゴン・フルーツ然り：竜種が好んで食べる穀物や、果物、肉が好物だ。

そこから『実はタカミチって、竜種をこね回した試験管ベビーじゃね？』なんてノエルは当たりを付けてるが、半分正解。600まで重ねた年の功は無駄では無かった。

さて、幸か不幸か：タカミチは自身の性能を極限まで高めてもらえる師匠。そして、付きつきりで：余人の邪魔、余人の助けも入らない武芸者にとっては夢の彼方にしか存在しない環境：

超大富豪なら幾らでも金を積み、ヘラスなどの命が掛かった世界なら殺してでも奪う事例が起きるほどの場所を、無条件で手に入れた。

今の彼はさっぱり理解していなくとも、直に理解する時が来る…まあ、それは別の話だ。

今回、学校へ行くことを提案したのは…

『勉強は教える事が出来ても、人付き合いは揉まれて学習するしかねえよな。』

『…か、息抜きも必要…あまり根詰めると潰れる。』

と、期待以上に頑張っているご褒美半分、勉強半分とノエルなりに決断したからだ。

その後は、いつまでも子供特有の柔らかさを維持し続ける為のストレッチを入念に行い、ノエルから血抜き、山の歩き方、水が湧く場所など…いつぞやボクオーンに教わったサバイバル・スキルを教わって帰宅。

チャチャゼロによる家庭教育を施され、タカミチの1日は終わった。

しかし、ノエルの1日はそう簡単には終わらない。

タカミチはハッキリとは主張しなかったが、提案した時の反応と口振りから判断して…学校に通うことを望んでいるのは確定的に明らか！

『だったらやってやるうじゃん！』と、アルコールを入れさせながら素面のエヴァを引き連れ、麻帆良の首魁…近衛近衛右衛門邸に真夜中突撃を敢行した。



「コノえもん！夜分遅く失礼するぞ。」

「な、なんじゃい。変なニュアンスで呼ぶでない。」

「まあまあ、そんな堅いこと言わんと。」

あ、これお土産な。

バレンヌ帝国の名酒、ラ・アヴァロン…俗に言う『皇帝液』だ。」

「ほほう…これはなんとも…して、用事は何じゃ？」

若干、不機嫌だった近衛右衛門の顔はほころび、エヴァは仰天している。

『皇帝液』の通称通りラ・アヴァロンは、バレンヌ帝国の皇帝や近しい者、他には蔵人しか口にする事が叶わない秘蔵の一品。

別に酒が好きでもないノエルも価値は理解しているが、興味が無い…というより安舌だからよく分からない。

だから黄金色のお菓子ならぬ名酒作戦に踏み切ったが、とりあえずは成功したようだ。

「ん、コノえもん。実は子供を2人ほど…小学校に編入させたい

んだわ。」

「ふお？どうしてまたそのような話しを？

差し支えなくば事情を話して貰えませぬか？」

「……この空間、この屋敷の録音を切って、耳に付けた魔道具を解除してからな。」

「むむ…屋敷どころか、装飾品までバレておったか。」

「（この腐れ狸ジジイが…）」

『テヘヘ』なんて笑ってすましながら、手を降り魔法を解除。勿論イヤリングもノエルとエヴァが停止しているの確認。

「さて、この話し他言無用で頼む。実はな…」

本題であるタカミチの現状、背負った宿命を包み隠さず説明。そして無理は承知だが、通して欲しいと平身低頭願い出た。

話しの間は目を閉じ、静かに聞いていた近衛右衛門だったが、ふと漏らした。

「ふむ…木を隠すなら森という訳かの。」

「俺にはゼクトの考えてる事は分からん。

だが、タカミチのボディ・ガード兼他の児童の安全を考えた方法がある。

それが2人目の児童役…エヴァだ。」

「なあ!?!」

「ほう…なかなかどうして、思い切った采配じゃ。」

「ちよ、ちよい待て!

どうしてチャチャゼロでなく、私が子供に混じらねばならんのだ!」

てつきりチャチャゼロが行くと考えていたエヴァには、全くの寝耳に水。

憤慨してノエルに食ってかかるが、対する連れ合いが己に向ける目はどこまで冷ややかで……戦場の敵対者に向けるべきモノ。

さつきから自分の考えの斜め上を行くりアルに、再びエヴァがたじろいでいると、ノエルは簡潔に述べた。

「チャチャゼロは洗濯の取り込みから、ホコリ一つ無い完璧な掃除

…家のことを全てやってくれている。」

「ぐう…」

ノエルの口撃。

エヴァのハート（マスターとしてのプライド的な意味で）にダメージ。

「タカミチは自分の出来ることをしている。」

「ぐぬぬ…」

ノエルに連続口撃。

エヴァのハート（タカミチと比べられた情けなさ的な意味）は大ダメージを受けた。

「お前はアル中で、毎日ニート生活をしている。」

「はうわ!?!」

ノエルの連続口撃!

エヴァのハート（現実に直面させられた的な意味）に会心の一撃!

「子供以下とは、情け無い。」

第三者、近衛右衛門の正常な言葉が、しぶとくも持ちこたえていたエヴァを粉碎。

「もう…止めてよう……」

エヴァは半泣きでノエルを見つめている。  
救済策（計算通り）を実行しますか？

はい

いいえ。

「エヴァ…人はやり直せる。」

学校に行けば、不規則な生活は改善される。

料理、洗濯、掃除、裁縫とあらゆるスキルが手にはいるんだ！」

「で、でも…」

「はあ、頼りがいのある家庭的なお母さんなエヴァが見たかった

けど、仕方無いなあ…」

この言葉を聞いたエヴァに電流が走った！

世界樹を片付け、バレンヌ帝国に帰った私達。

「ふんふん。」

ノエルは元通り、道場で生徒を指導。

私は家の掃除、選択、服に無頓着な奴の為に作り…夕食の用意をして帰りを待つのだ。

「うっい、帰ったぞー。」

「1日お疲れ様だ。もうすぐ出来るから、待ってるんだぞ。」

優しく、労るように出迎える。そして夕食では…

「ほれ、あーんだ。」

「ん〜、うまうま。エヴァの肉じゃがは、めっちゃ美味しいなあ。俺からもお返しのあ〜んだ。」

「あ〜ん。」

そのままお風呂に………そんなもって、夜は………

「うえへへへ…（コレはチャンス！！ノエルを、メロメロにさせるチャンスではないかああ！！）」

「仕方無いな。そんじゃま、代わりに俺が「待て待て…よし、ノエルがそこまで言うなら、私は頑張るぞ！良き妻と成るために！」…  
…あっそう？近衛右衛門、聞いたな？」

「このジジイの耳にも、しかと聞こえたぞい。」

「んじゃ、明日は…キツイから、冬休み明けから編入ってことでよろしく頼むわ。」

「うむ、それだけの猶予があれば根回しも十分じゃな。

よろしい、では帰りは珍走団に気を付けるのじゃぞ。並みの人間は魔法世界人と違って、脆い。」

お主が手加減しても脱臼するやもしれぬからの。」

「うーす、お疲れさん。家、帰って寝るぞ。エヴァ。」

「あーくん、待ってよノエル！」

「やれやれ『バレン又帝国のノエル』…とんだ甘ちゃんじゃわい。」

2人が帰路に着き、書齋に居るのは己だけになった儂は、さっそく必要書類を漁りながらこぼす。

というのもアポイント無しで、屋敷に無理矢理乗り込んだようにエヴァ殿は感じていたかも知れないが…全てのシナリオは、事前の打ち合わせで決まっておった。

まあ、世界樹が存在する以上、タカミチ君が居ようが居まいが学校等の公共施設は占拠されるリスクは有る。

だから話しを持ちかけられた時、取り立てて反対する理由も無く、2つ返事で了承した。

同時に、ちょっとしたイタズラで『どうしてそこまでやるのじゃ？』と尋ねた際の返事が、また意外じゃったわい。



『なんつうか、アレだ。』

親心つつうか、ジジイ心がくすぐられてよオ。お前もヒトの子なら…家族がいたなら分かるだろ?』

「……………」

『家族』…なんとも懐かしい言葉、暖かい場所。

思えば、人の世の為、道の為と関東に潜る際、京都に置いてきた妻と娘には何一つ残してやれなかった…

昔話はこちらまでにしようかの。

資料には『剛にして熾烈、悪鬼羅刹の体現者』なんて記されておったが、どうせ戦場でしかデータを採れなかったんじゃない。

何にしてもあの甘さを儂は気に入った。

きつと現場の魔法先生からは、ごちゃごちゃ文句を言われるじゃろうが『バレンヌ帝国の方々との融和策』とでも言えば、終わりじゃろうな。

はあ…親心、ジジイ心か。

早よ、婿殿達は孫を見せてくれんかの。

娘の嫁入りに出れなかったから、せめて孫の嫁入りには絶対に出てやるわい！

それまでは長生きしてやるんじやい！！

孫と戯れる自分を夢想し、ノエルから一応の礼を込めて贈られたラ・アヴァロンを、うっとり見つめる近衛右衛門であった。

## S a ・ G a 7 5 (後書き)

### 『皇帝液』

ロマサガ2で、皇帝だけが使用可能の最高クラスに位置する回復アイテムとして登場。

入手経路はアリを倒したドロップ、怪蛇からのドロップ…所謂、強キャラからの贈り物。

子供ながらに『ぶっちゃけ、どんな精製してるの?』と考えさせられる一品。

けど、他の回復アイテムが腐るほど有るし、ばっちいから、正直使う機会は有っても使いたく無いです。

数多ある倉庫の肥やしの一つ。

私達の住むリアル・ワールドでは、夜の生活を助ける相棒…『皇帝倫液』として存在しています。

S a · G a 番外編 i n 麻帆良 1

バレンヌ帝国大学。

大学と言う割に初等部から存在しており、意外にも入学するのは容易い。

その代わりに中学、高校と進学する際は、例外無くあらゆるテストをパスする必要がある…裾野は広く構え、怠け者をふるい落とす方式を採用している。

その為、大学を卒業する頃には30代という者が珍しくない。

寿命の長い亜人は気が長いのだ。

しかし、何事にも例外と異端が存在する。

その最難関をスキップに継ぐスキップで、とうとう齢10にして突破した才媛が現れたのだ。

彼女の名はツイー・リン（智鈴）。

草原の魔女と呼ばれるバイ・メイ・ニヤンの血を継ぐ少女も、今は

二十歳。

『天才ロリ』という属性を確立した少女は『クール女史』と呼ばれる一角の人物へと成長。

まあ…人間換算年齢は未だに10代であり、本質はとんでもないじやじゃ馬だ。

そして、その才媛が、どういうワケか麻帆良に居る。

まあ、原因の大半はノエルに有り、ノエルに原因を作らせたのはゼクトだが…彼女にそんなことは関係無い。

「はあ……麻帆良は窮屈、人も密集してるから空気が汚いし馬で遠乗りなんて夢のまた夢。

いい加減、環境に殺されそうヨ。」

そう、彼女に警備員という舞台は狭すぎるのだ。

日々、己が錆びついて真綿で首を絞め殺されてると感じており、旧世界での暮らしは苦痛でしかない。

「仕方無いネ…ノエルさんにでも、ちょっかい出しに行くカ。」

まず朝メシを食べ、パジャマから動きやすく汚れても構わない格好

に。

そして財布や貴重品をひつつかみ出動。  
マンション上階にある自宅からエレベーター、1階のノエル宅へ移動。

「ちわゝ、勝手にお邪魔するネ。」

そのまま、いつぞや文章の推敲を見に来た際、『勝手に拝借した』  
鍵で作った合い鍵を使い、華麗に不法侵入。

その様子に躊躇いは無い。

それは週3で侵入するから…というより、初日からそんな物は無かった。

才媛は些細なことは気にしないのである。

さて、玄関の先にあるリビング。そのテーブルには、ワインの瓶が何本も並んでいるのが見える。

「んお？ ツイー・リンかあ？」

瓶の壁に囲まれるように酔いつぶれていたエヴァが、半分寝こけた調子で声を掛けてきた。

「(う、酒臭い 髪もぼさぼさで汚い。まるでダメな幼女…マダヨ  
だ。)

……もう8時ヨ、エヴァさん。」

「ええ？ ツイー・リンか…私は寝てたのかあ？」

「…その様子から察するに、もしかして今まで その体勢で寝てた  
力？」

痕が出来て、おでこが真っ赤つかだヨ。」

「ういーつく…ワイナリーに残ってるワインだ…今すぐ、全部持っ  
て来い！ 私任意地でも売らんぞ！ 全部飲み干してや……………」

「…ほら、バケツ置いとくヨ。」

「うぶ、

」

墮落し続けるエヴァを見てなかった事に…

後ろから聞こえるビチャビチャという音もスルー。

カオスな茶の間を後にすると次は和室…新聞を発見とタカミチを発  
見。

「む、タカミチ君おはようネ！」

「ふももふん。」

「お、ツイー・リン。おはようさん！」

「何言ってるか分からんヨ。」

「タカミチ君、口の中を片付けてから喋るネ。」

「ちよ……」

小さな飯台で遅めの朝食を味わっているタカミチ。

その真つ正面に腰を下ろして新聞を読み出す。

「さて、今日の魔法世界新聞は…ほう、身体に魔法を刻み込んだ人体実験で死人が出た、カ。」

「バカだね…素人が扱えるような、半端なテクノロジーじゃないヨ。本当、バカは死ななきゃ治らんネ！」



「お〜い。」

「む、スクランブル・エッグに味塩コシヨウは……アリだね！」

「もういいや……」

こんな感じで、タカミチの食卓に並んだオカズを摘みながら、一面から始まり、二面、三面とわざと汚く、かさばるように、ひとしきり読み進める。そして、タカミチに番組欄を見せてからマジックで塗り潰すのも忘れない！！

なお、ツイー・リンは自宅に、専用のパソコンを所有している。こんな真似をするのは当然、ノエルへの嫌がらせに他ならない。

才媛はムダは極力省き、ひと手間は惜しまないのである。実際に塗り潰してる時、隣から声が聞こえてきたが、右から左へ受け流した。

「さて、ノエルさんへの嫌がらせもいい加減に厭きてきたネ。」

「あのさあ、本人目の前にして言っちゃおう？」

普通は言わないモンじゃね？俺、本国じゃ結構なお偉いさんだべ？」

「あれ？居たのか？」

ノエルさんそっくりの自立式ハンガーだと思ってたヨ。  
威張りたいたなら、もっと存在感出してみろって話だネ！」

「……俺、お前、嫌い。」

「ふん、ジジイが拗ねるな。目が腐る！」

「（チックシヨー！このジャリ公めえええ！）」

「それと、もういい加減に研究やらせて貰いたいヨ！  
それが無理なら私は帰るネ！」

何てこと無いツイー・リンの毒舌が響くだけで、平和な1日だったが、この一言で空気は一変する。

「お前 その言葉本気で言ってるのか？」

ノエルがそれまでのおちゃらけた雰囲気捨て去り、真面目な態度で対応したからだ。

鋭い眼光は最早メンチの領域。

並みの者なら失神確定の威力を秘めた凝視であり、『舐めたこと言

うモンじゃ無いぜ?』と口ほどに語っている。

タカミチは依然としてご飯をパクついているが、オロオロする事は無くなった。

毎日の稽古で肝っ玉が据わってきたからであり、おかわりの玉子かけご飯に突入した。

「私はくだらない嘘が大嫌いネ。

警備なんて肉体労働は、兵隊にさせれば良いのヨ!」

肌を刺すような緊張感と凶悪な力に晒されながらも、ツイー・リンの意思は固かった。

そこでノエルは考える。

ツイー・リンを麻帆良の研究機関に割り込ますか?

データを搾取されるリスクが有るし、手が付けられなくなるから却下。

じゃあ、物置にただ場所を確保する為の安価な魔法球を渡すか?

.....それが一番マシかも知れん。

冷静に考えたら、それしか無い。

思案してから決断まで5秒。

ツイー・リンの目的について考えるべきであったが、エヴァが使い物にならない以上は、読心術も不可能。時代は天才:ツイー・リン

を選んだのだ。

「ふう…分かったよ。今度魔法球をくれてやるから、好きなだけ研究しろ。」

その代わり、成果の提出義務が生じるが構わんな？」

「誰にモノ言ってる力？」

その程度の対価、死に至る退屈に比べたら遥かにマシだね。」

「分かった…（まあ、国に言った場合は、早くても春に審議が終わる……気イ利かせて、シゲンに借りようかな？）」

結局その日のツイー・リンは、ノエルに同伴。

食料庫型魔法球の中で農、果樹園の手入れ、久しぶりに目一杯走り回りながらの狩猟でストレスを発散していった。

S a ・ G a 7 6 (前書き)

アンケートにご協力頂いた読者神さま、この場で改めて言わせて下さい。

『アリガトウゴザイマシタアア!』

皆さんのおかげで方針が決まりましたぞ!

『ナギ?あんまり必要じゃなくね?

ネギ?そんな奴居たっけ?あ、暴力表現は作者の文才に期待。』

というアンケート結果になりました。  
もう一度言わせて下さい。

『アリガトウゴザイマシタアア!』

ノエルの日誌。

現在：1989年、平成元年4月20日。

麻帆良に来たのが83年の終わりだったから切り捨てたとしても、駐在6年：とつとつ、世紀末の始まりである90年代も目前に迫ってきた。

世界樹は真面目に警備し続けており、現状はと言えば全く異常無し！

毎年、秋には盛大に落葉を生産してくれるもんだから、町内会と我等のマンション主催で掃除を行う回数が半端じゃなく多い。

近場の麻帆良市民：特に気怠げなマダム達は

『世界樹だか何だか知らないけど、枝切れ！！』

市は、もっと手入れしろコンチクショー！

おかげでウチの庭が葉っぱだらけになるじゃないのよ（#。 。 ）  
なんて、大体のマダム達が世界樹に良い印象を持っていない。

奥さん、もう20年ばかして世界樹は消えるから：待ってな！

そしてバレンヌ帝国の格闘最強種族：モール族が警備する図書館島という名の不思議なダンジョン。

入口は地上の正式な場所のみ！水中から穴を掘り、侵入を試みるという奇策を使った侵入者がいたが：悠長に掘つてもところを難なく撃退。

モール族の代表曰わく『湖に浮かぶ島だから時間は掛かったけど、掘られないように硬い岩盤に作り替えた』らしい。

え！？この短期間で？何それ…怖い。

仮に外部の警備システムをかくぐり、地下のフロアに侵入して来れたとしても…『スフィンクス』達が立ちほだかる。

可愛く言えば「謎かけ」、「とんち」を一匹につき一問出すだけだが……カイジや、零クラスのイヤらしいレベル。

間違えたらば、魂を抜かれて即死亡。

もし、無視して振り切ろうとしたら『死人ゴケ』で抹殺という鬼畜っぷり。

予め『リヴァイヴァ』を施してから、警備責任者として俺とエヴァの2人が代表して突破を試みたが…失敗。

うん…一回死にました。

収穫は、ボクオーンの賢さも必要だけど、頭の回転の方が必要だと理解した。

因みに…日中のスフィンクス達は、モール族の飼育係に本を読ませてもらって、クイズに更なる捻りを加えたり、仲間うちで作成しているらしい。

そんな訳であんまりにも鉄壁な守りが敷かれた図書館島！

外部や表層に麻帆良スタッフを配置する必要が減ったので一昨年…新年度恒例の再編成にも余裕が出来た。

やったね！学校や市民を守る為に割く頭数が増えたよ。

そんな訳で一部の教師の評価では『出来』がイイとされる中学生、高校生から構成される魔法生徒は廃止して貰った。なんか現場の麻帆良スタッフからは、やんややんや言われたが理詰めで黙らせた。

正直、いきなりガキを戦場に駆り出すのもおかしい話だ…ぶっちゃけさ、どんだけ出来が良かったって、教師個人のフィルターを通した評価。

本人達は実態の無い高評価でエリート意識は高いが、戦場ではシャバッ気にまみれた素人同然。

腕がもげたらパニック、仲間が負傷した際に噴出した血が顔にかかってもパニック…そうなれば、味方に誤射するアホが確実に出て来る。

彼らには正規の訓練過程を終了後に、警備スタッフになる道を示した。

図書館島の余剰分と学徒が減った分で±0になってしまった。

それでも夜、麻帆良大橋に配置される魔法教師やら兵隊は以前よりも増加。

学徒を動員していた時のムラッ気と、隙が無くなったセキュリティシステムは実質パワー・アップ！

未だに経験がどうだとか喧しいことを言うスタッフも居るから、気が向いたら魔法球に招待してやろう。

勿論、その際には一切の責任を此方に向けないと誓約させてからだ…そうなれば、たとえ死んだとしても俺達の負担は減って良いこと尽くだ！



さて…話が脱線していた。

警備体制…侵入者の話だったか。

まあ、侵入者も命懸けで挑むのだから無策、同じやり口を続けるほどバカじゃない。

転移符やらゲートを使うから、今はまだ月別の侵入者の数は劇的に減っていないが…緩やかな下降線を辿っている。

これでツイー・リンに結界を造らせれば尚、良い。  
ていうか、上司命令で造らせる。

改めて書き起こすと、自分も結構引つ掻き回していると自覚せざるを得ない。

仕方無いっちゃ仕方無いが、現地スタッフは平和ボケし過ぎてるしなあ……今のところ、ゼクトから任された本業『世界樹の防衛』は、しつこいようだが上手く行ってる。

此処からは全くの余談であるが、何だかんだで俺は通貨の獲得に成功。

部下達も短時間で儲ける何かしらの手段を確立。

手っ取り早く、スロットの目押しで泡銭を手に入れる者もいる。

また、麻帆良の市民もオカシな身体能力をしている者が多いからか、ちよっとやそつとではバレないと判断。

旧世界全てが麻帆良のような土地ではなく、此処は極めて稀なケースだと理解しているが…これからも公私共にデータを集めようと思う。

世の中、何が役に立つのか分からないのだから。

近衛邸…

城と神社の一步手前、分かりやすく言えばかなり上等な武家屋敷で祠も完備された…昭和ヤクザの大親分が住んでるっぽい純和風建築。

「最近、身体の調子はどうよ？」コノえもん。」

「おかげさんで一時期に比べたら、だいぶ楽が出来るようになった。それに、ちと金は掛かるが良い整体師も見つけたからすこぶる良好じゃ！」  
「これからも宜しく頼みますぞ？」

「1時間…10万な。」

「酷い！あれだけ夜…身体を許したのに！」

「気持ちワリイな…20万にすつぞ？」

「そう怒るでない。ちょっとしたお茶目じゃ。ところで…タカミチ君の調子はどうかね。」

「あゝ、もう中学生だ。最近は色気づいて、女まで作りやがった。」

「ふおっふおっふお…子供は『あっ!!』ちゅう間に成長するのう。」

6年も有れば、幾分か人は打ち解けることが出来る。

ノエルと近衛右衛門はタカミチの入学以来、公私共に急速に親交を深めた。

というのも…ノエルが気前よく名酒を譲った太っ腹な点と、幾度か話すうちに『あれ？実はノエルって軍人のわりに話が分かる奴じゃね？』と近衛右衛門が歩み寄って来たのが大きい。

ノエルの印象も根性くそ悪い妖怪ジジイから、ちょっと鬱陶しいジジイくらいには改善された。

今日も近衛右衛門を末永く働かせる為の点検…もとい、孫の挙式まで生き延びたいとゴネた爺さんの整体する為に訪れたのだ。

今日のような整体以外にも時間が空いた近衛右衛門が、ふらっと晩飯を食いに来るほど仲が良い。

近衛右衛門は豚や牛、鶏よりも猪や馬、野鴨などのワイルドな食材を摂取した方が身体の調子が良いと好んでいる。

無論、数に入っていない飛び込みの為に有料。

本音を言うと、こればかりはノエルも迷惑している。

「……1時間だ。起きろや。おら！」

「ふご！？いつの間にか寝ておった……それでは10万じゃな。」

ノエルは滅菌用アルコールで手を除菌、近衛右衛門は財布から諭吉さんを取り出す。

これがいつもの流れだが、今日は違った。

「のう、ノエル殿。もしも…西と東の2大協会が和解出来たらどうなると思うか？」

諭吉を取り出しながら、ノエルに話しを振る。

「うーん…無理だろ。」

お前自身が積極的に動いてる訳でも無いしな。

けど、実現したら…楽が出来るかも知れんなあ。」

「実は、あと一步で出来るかも知れないのじゃよ。」

「ふん。まあ、頑張んな。」

「それが一筋縄でいくほど甘い話しじゃ無いんじゃよ……悪いが、協力してくれん？」

「は、はあ……!?」

関東魔法協会の首魁：近衛近衛右衛門は強かに、新たな一手を打つ。まずは協定、行く行くは統合を目指す。その過程で『権力者闘争』が勃発するのは避けられない。

新たな軋轢が生まれるのを承知の上で、明治から2つに割れた日本を1つに戻すため。

この決断は千里の一步：しかしながら大きな一步でもある。

誰かが踏み出さねば成らぬと理解しているからこそ、近衛右衛門は暗躍する。

## S a ・ G a 7 6 (後書き)

『ソニック・ブーム』

初代ロマサガ1

今更の解説。

格ゲーでお馴染みの某軍人の得意技を当時のスクウェアがオマージュした結果、搭載された格闘技です。

いつかのMr・カラテみたいに作者が悪のりした訳じゃ無いですよ？

それと、待ちタカミチ…アリだと思えます！

原作のタカミチさんも待ちキャラだしね！

また、ロマサガ1に限らず、S a ・ G a シリーズには他にもオマー・ジュという名のパクリ技が幾つか存在します。

『スフィンクス』

ロマサガ1〜サガフロまで一通り出演したモンスター。

作品ごとに獣だったり、妖精だったり、鳥だったりとスタッフに弄ばれた可哀相な子。

因みに謎かけは『スフィンクス・リドル』という名前で、サガフロ

から登場。

効果は即死……名前のセンスも抜群で効果もバツチリ！

流石はスフィンクスさんやでえ〜

元ネタのスフィンクスは遙か昔に番を殺されたり、イギリス人が鼻の頭を的に射撃をして砕かれたり、やっぱり可哀相な子。

次からは京都編…やったね！詠春さんが登場するね！

ついでに作者の頑張り次第で嫁さん、ばぶばぶ言ってる赤サン状態の木乃香が見られるかも知れないですね。

困った時、ビジネスの移動時などに頼れるJR。

8時丁度のごによごによで〜私は、私は麻帆良から…旅立ちます  
〜。

今の俺は新幹線の指定席に居る。無論、窓際を手配させた。

持ち物はアタツシユ・ケースと車中、向こうで飲み食いする為の食料を詰め込んだ旅行鞆。

アタツシユケースの中身は、近衛右衛門から託された私的、公的文書。

つまり俺は、東西の仲を取り持つキューピット役を任命された訳だ。ぶっちゃけ、面倒っちいけど…警備やらで後々、楽になるんなら仕方無いわなあ。

可能なら日帰りを希望するけど厳しいかなあ…

京都の市内ド真ん中ではなく、外れ…慣れないスーツと革靴でひいこら言いながら山を登った先に関西呪術協会の本部は存在する。

如何にも『京都！日本ナメんなよ！』って感じの威圧感を感じさせる『城』が建っていた。

「よつこそお出でくださいました。

ささ、ぼさっとしとらんとお入り下さい。」



わざわざ、巫女さんがニコニコ出迎えてくれたから『うわあ、可愛いわあ』なんて勝手に癒されてたら、次の瞬間：凄い冷めた口調で言われた。

こ、これが本場・京都の一見さんお断りシステムなのか？  
俺ってば、曲がりなりとも大使つすよ？しかも中立の立場！！  
その気になれば、こんな城の1つや2つ：京都ごと跡形も消せるッ  
スよ！

末端の貧弱一般構成員がこんな態度取るなんて：なんか、西の体質と新しく据えられた長の程度が知れたな。

とにかく初めての場所を歩くわけだし、相手にも都合の悪い場所もあるだろうから、巫女の案内は必要だ。

途中、行く先々で巫女や武士然りと刀までフル装備の奴らと出会った。

いや、なんか全員に睨まれたりすれ違いざまに鼻で笑われちった。いい加減、堪忍袋の緒もプツンしそうだけど我慢ですわ。うん。

とにもかくにも、文書を渡して幾つかの旨を預かって麻帆良のお家に帰ろうかね。

「はは、これはノエル殿ではありませんか。貴方とは式典以来…久しぶりです。」

「お久しぶりです。近衛総裁。」

関西呪術協会の長は意外や意外。

まさかの青山：今は近衛だが、刀を振り回すくらいしか能が無さそうな詠春が務めてるなんてノエルは考えてもいなかった。

とりあえず、それっぽい言葉遣いをしているが『え？え？何でコイツが長なの？チャンバラしか能の無い小僧なんじゃないの？』って感じに扱き下ろしてる。

そして公文書は引き渡され、ノエルの仕事はこれで終了した訳だ。

東西友好協定について詠春個人は、魔法世界を目の当たりにしたからか近衛右衛門の考えに賛同：長老衆や幹部達が居るから確約は出来ないが、努力するとは言っていた。

同時に、近衛右衛門がしたためた私的な文書も手渡した。

その時に眉間に皺を作り、苦い顔をしていた為：先行きは不安。

立ち消えになる可能性も大いに有り得るが…それは関係者無い。とにかく帰りたいノエルはサッサと帰り支度を始めたのだが…

「まあまあ、一度はやり合って、最後には共闘した間柄なんですからここから先は、堅いこと扱きでいきましょーや。」

「……………（えええええ？まだ話す事が有んの？）」

「…ノエル殿にも立場という物が有るから、仕方有りませんか…すみません、昔を思い出して浮ついてしまいました。」

露骨に嫌な顔をしたノエルだったが…それに気付いた詠春からはいよいよ覇気、気力が抜け落ちた……ように見えた。

「（まあ、コイツの話しに付き合ってもバチは当たらんか。）しゃあ無いなあ…少しだったら付き合ってやるよ。」

「おお！有り難うございます。」

5年前は元気はつらつ爽やか青年だった詠春。

それが社会の荒波に揉まれて、けっちゃんけちゃんにされたボロ雑巾みたいにくたびれ始めてるなんて…

頬も痩けはじめ、体から覇気が消えるなんて、時間の経過も有るが…職務にかなり苦しめられてるのが、ひしひすと伝わって来る。

しかもこの5年間、腹を割って話せる相手がいないっばい…

しかもノエルが提案を承諾してくれた時の詠春の顔と言ったら、本気で嬉しかったのか蕾が開いたみたいに笑っちゃって…流石のノエ

ルも哀れ過ぎて涙を誘う。

「急に涙ぐんで…どうされましたか？ノエル殿？」

「バカ野郎！泣いてなんかいねえよ。

これはウミガメの産卵と一緒にだ！竜人の特徴だ！」

「はいはい、そうしておきましょうか。」

やんわりとノエルの屁理屈を受け流した詠春は、やはりどことなく嬉しそうだった。

流石に長の間でお喋りは許されないから場所を変えた。

新たな場所は、『城』内部に存在する近衛詠春の領域に移動。

「やっぱ、世代を重ねると洗練されてくのかよ…新世代組はいつも親世代よりも覚えが良いんだわ。

俺は、バレンヌの将来が楽しみなんだ！魔法世界の悪習を消してくれるかもつつう期待もひつくるめてな。」

2人は座布団を敷き、飯台を挟んで話しをする。

鞆から取り出した水筒のお茶を飲む俺は、完全無欠の素面。  
山の天然水で淹れた麦茶、美味しいです。

「ふう…超大国でありながら、挙党一致を実現出来るなんて羨ましいですね。」

私なんて、この小さな島国の1組織を纏めるのにも苦労してますよ。

┌

対する詠春は、まだ日暮れから間もないのにお銚子を一本空けた。  
酒が回ったというより、気分酔ってる感じで相づちを打ち、激しく語ってくれた。

詠春から語られた話しは、大戦の終結後に開かれた平和式典が終わり…京都に帰ってきた所から始まった。

まずは今の役職である『関西呪術協会総裁』に就く。  
その直前に、封印してた化け物が復活。

暴れる前に速攻で黙らせた功績がデカいらしい。  
何はともあれ『正当』な長に就任。魔法世界での見聞、経験を考慮して旧態依然とする組織の改革に着手したこと。

改革の障害は大きい。先代の執行部と現役続投している幹部の反対  
：メンツや因縁を付けられては失敗。身内：実のオヤジも利権やら  
メンツの為、敵に回つたらしい。

ならばと、力で使役する関係だった式神のモデル：妖怪達を対話で  
纏めあげ、京の都を守る。

実績を積もうと考えているが難航：攻撃の要である鬼が『ぺちゃく  
ちやじゃかあしいわ！男だったら腕っ節見せてみいや！』と反対  
してるんだと。

じゃあ、完膚無きまでにぼてくり回せば良くない？

どうせ弱っちい奴が使役術を覚えても、いざ実践でベビー・サタン  
みたいに不発じゃ困る：今まで通りの契約方法で良いんじゃないの？  
まあ、長は詠春だから好きなようにやれば良いけど……：見当違いだ  
る。

そんで、大戦の翌年：同門の女剣士と十番勝負をして念願の圧勝を  
もぎ取つたらしい。

これで文句無し最強神鳴流剣士に成つたんだとさ。

ハイハイ、良かったね！。

後は…3月の中旬に娘が産まれた。

嫁さんに似て凄く可愛い。なんだかんだで幸せなんだと何故かのろ  
けられた。

これまで聞いてて、色々と言いたい事は有るが……

「詠春よオ。さつきから聞かせて貰ってたけど、自分の派閥を作ったり側近でも何でも良いから『コイツこそ己の右腕！』って言うる奴は居ないのか？」

「え！？」

「一通り聞いて感じたんだが、あまりに自分自身が動きすぎていて……人を使った話しが極端に少ない。」

「長が怠けていては下の者に示しが付きませんかからね。」

「お前さあ……別に長だから何でもやる必要は無い。」

「フーか、下っ端に全部やらせろって訳じゃないけどよオ……何で鬼達と交渉する一発目からボスが出向くんだけ？」

「お前、メガネ掛けるけど本当はバカだろ。」

「……………」

「改革なんて1人でどうにか出来る訳ないだろ。」

「今からでも期待の若手でも何でも自分側に引っ張りこめば良いだろ。」

うが。

なんつつか詰めが甘いつていうか、見通しが甘いつつつか…とにかく甘過ぎるわ！

糞の役にも立たないジジイ共なんぞ幽閉してしまえば良かろうが！」

「それがそも行かないのですよ…」

「もう今度は何だよー！！」

仲間も居ないから寄り合いでも押し切られる。

武力は充実してるが、肝心の求心力と采配が壊滅的。

俺があゝ言えば、こつ言う詠春には若干うんざりし始めてきた。

「やはり脈々と受け継がれて来た伝統が在りますからね。

それでも、辛抱強く語り掛けてはいるのですが…」

「もうさ、改革諦めれば？」

ダメな物はダメって理解してるのに、伝統なんて言って割り切るんだからやるだけ無駄。無駄！

たったの5年で覇気が失せるくらいだから、無謀としか言いようが無い。」

「しかし、西と東が力を1つに合わせねばならない事態が、いつかは訪れるかも知れませんか！」



この改革と連携協定は必要なのです！」

「そんだけ必死に成れるんなら、ジジイ共の影響力を削ぐような取り決めを新しく作れば良いじゃないか。

因縁を付けるだけの反対者なぞ殺してしまえ。

それが嫌なら『化け物の封印の管理を怠った世代が喚くな！』くらいに一喝する度胸も無いのか？」

「つて…あれ？なんで酒が入ってない俺の方が声を荒らげてるワケ？  
なんで詠春の方が冷静なワケ？  
なんか、色々と釈然とせん…」

「やはり、それしか道は無いのでしょうか。」

「考えりゃ沢山出るけど、俺は知らん。

ぶっちゃけ、京都がどうなるうが知ったこっちゃ無い。

俺の言葉を聞き流すか、参考にするかはお前次第だ。

まあ、やれる所まで頑張んな。」

『早くせんと、泥が溜まって腐った沼みたいに成り果てても知らんぞ？』

まあ、十分腐った…手遅れ感はあるけどな。』

コレが関西呪術協会に対する俺のイメージだ。

今は世界樹にちよつかい出して来ないから良いが、これがふざけた真似をするようになったら…最悪、後腐れ無くスッキリさせるしか無いわな。

それも、そこそこ手間が掛かる。

そんな選択肢は選びたくないから、詠春の働きにほんのりと期待しよう。

「ノエル殿、今日は私の我が儘に付き合っていただき、有り難うございました。」

「別に好き勝手言っただけだから礼なんて要らんから頭上げろよ。むしろ、意地くそ悪い言い方ばかりで悪かったねえ。久しぶりに会ったお前が抜け殻みたいで、意志が有るのか疑問だったからな…そんなじゃ、ぼちぼち帰らせてもらっわ。」

空のペットボトルとジャーキーやサラミが入ってた袋…ゴミを纏めて鞆に突っ込み、いざ帰ろうと立ち上がった。

「……もう夜ですから、どうぞ泊まって行って下さい。夜は町に通じる山道、竹林はお化けの運動会場です。まだまだ話したい事は有りますからね。」

そうだった…お化けうんぬんは知らんが帰りの山道は砂利道ゴロゴロ口、街灯なんて無いから革靴で歩くのは余計にしんどい。

ていうかどんだけ溜まってるんだ詠春!?

昼過ぎから1時間は仕事、3時から5時間話し続けて今は8時だぜ？  
まだ残ってるとか、話し相手に飢えすぎだろ！

夜中に詠春の話しを聞き続けるのもしんどいけど…妖怪をブツ飛ばしながら山道に行くよりはまだマシかな？

「そこまで引き留められちゃ、無碍に断るわけにもイカンだろ。  
じゃあ、今日は厄介になります。」

「はいはい、分かりました。おい、桜さん。」

「ハ〜イ。詠春さん。」

目を離せば散ってしまいそうな野花…そんな印象を受ける着物姿の  
女性が赤ん坊を抱えてやってきた。

「お、おい…」

「私の家内で近衛桜です。」

「初めまして近衛桜です。詠春の話しに付き合わせてしまって申し訳有りません…」

「いや、その…まあ…どうも、ノエルです。」

「この子は私達の愛娘…近衛木之香です。それで、此処からが本当に話したかった事なのです！！！」

「だあだあ、だだあだあぶ〜」

家族が揃い、紹介も済んだところで詠春の面構えが変わった。どうやら詠春からしたら、関西呪術協会は家族に比べたら大したことは無いらしい。

「ま、無理矢理とは言え乗せられたら船だ。今度の問題は何なんだ？お前こそ腹割って話せよ。」

「実はですね…」

「私達夫婦はまだほんの一部ですが人の汚さや、この稼業のえぐさも見て来ました。」

だからこの子には、出来ることなら裏稼業とは無縁の…普通のあり

ふれた生活を送ってもらいたい。

秘匿して育てようと考えていたのですが……義父からの手紙には『ノエル殿は私達夫婦と同じ悩みを抱える先輩』だと記されています。」

「どうか私達夫婦に知恵を分けて下さい。どうか……どうかお願いします！」

詠春、桜の2人が土下座。

娘の木之香は、室内の空気と両親のただならぬ雰囲気を感じてオロオロしてるし……もうカオス。

「うーん………」

近衛右衛門め！最初からこれも目的だったな。  
相変わらず、憎らしいほどに人の動かし方を心得たジジイだ。

それにしても『極東1の魔力保有者』近衛木之香ねえ。

やんごとない血統の近衛一族の本家と現場叩き上げの青山の血が合わさり最強に見える……

近衛右衛門の血を継ぐ桜が産んだ娘。

産まれる時に母・桜から呪力Ⅱ魔力を吸い上げた娘。

極東1なんて言われても『ピコーン』と来なかったが、詠春の例えで氷解した。

『赤毛のナギ・スプリングフィールドが25 meterプールだとしたら場合…木之香はそれと同等か、ひよつとしたら琵琶湖クラス  
の差が有るのかも知れない!』

はい…『ピコーン』と来ました。

超一級の魔力タンクですね?分かります。

俺が外道なら千人くらいの犠牲を払ってでも手に入れるな。

うん…こんな都合のイイ永久機関を放っとく訳ないわ。

「……なあ、詠春、桜さん。

ハッキリ言って欲しいか?

それとも耳に優しい綺麗な言葉で言っ  
て欲しいか…どっちが良いんだ?

「私達の腹は決まっています!」

答えたのは嫁さんの桜だったが、2人はやはり真剣そのもの。だつたら遠慮無くブツた斬ってやろう。

「結論から言うとそんなの無理!絶対に無理だから!」

「……………」 「やはり……………」

「守りながら育てるなんて、甘チャンのお前には無理だ。  
『守る』ということは代わりに矢面に立つ事と同義だろ？」

最低でも二倍の働きが要求されるし、被庇護者が子供なら更にハ  
ド！

当然、詠春が策略なりで死ぬリスクも常に倍プッシュ！ついでに魔  
力すつからかんの桜も片付ければパーフェクト。

晴れて、下手人は義理の親として木之香をせしめるわけだ。」

「……………待って下さい。そんな事は既に考えています！」

「もし仮に無事、成人しても一緒だ。

本人に免疫力が欠片も無いんだから、下手人からしたら攻略は容易  
い。

外に出さない籠の鳥にしても一緒だ。じわじわお前達を消してから  
行動すれば良いんだからな。」

「では、私達は一体どうすれば……………」

いよいよ頭を抱える詠春。桜も静かに涙を流している。

親つてのは極力、我が子には幸せに成ってもらいたいと思うモンだ。

自分達が人生で経験した負の道を、娘には辿って欲しく無い。

守るといふ事も理解していたが、俺に現実を突きつけられた。

籠の鳥にするのなんて夢のまた夢。

そりゃ、覇気も無くなるし身体に異常も出るわ。

まさか、こんな隠し玉が残ってたなんて……もし力の無い俺が当事者だったら……どうしているのだろうか。

「…殺す気で力を身に付けさせるか……いつそのこと心中するか。それとも一か八かで東に落ち延びるかの3択、か…」

「「！！！」」

木之香も空気を察して泣くのを我慢しているが、終わりは近い。赤ん坊には悪影響だから、もういい加減に締めに入るう。

「ウチのチビは6歳の時から居るが、元気に育って中学生だ。無論、何処へ行くにも護衛を付けるし、俺も行く。

引き取つてすぐに最悪の場合を考えて、鬼のような稽古を積ませた。近衛右衛門のお膝元つつうのも関係してるが、万事良好だ。

うだうだ悩んでも変わらない。ここで決めちまえよ。」



「詠春さん、私はどんな選択でもついて行きます。」

桜は腹を決めたらしく、未だに頭を抱える詠春に穏やかな口調で宣言した。

「……………私は……………」

かなりの時間を掛けて考え続けた詠春が出した結論、選択肢は……………

……………

S a ・ G a 7 7 (後書き)

『近衛桜』

作者の考えたオリキャラ。

名前だけなら戦争編の最後辺りに登場。

木之香 何でこんな名前なん？ワケわかめ。

夫は春で、娘は木、か……………真ん中に入るワード…春、木…春の  
木

『ピコーン！』 桜だあ！

こんな感じで爆誕！

因みに若詠春さんは、某・極死な魔眼所有ののび太に刀装備で身長  
アップ、大人にさせた感じ。

もうなんか…後付けで、『あ、あのキャラっぽい性格でいいや。母  
親が不明つつうか死んだ？のも似てるし！  
やべえ…俺ってば天才だわ！』

こんな感じでキャラ付けまで一分くらいで終わったキャラクター。

頑張る詠春さんへのご褒美で、生存ルートを採用しました。  
ところで、なして原作では居らんの？不思議…

『近衛木之香』

初めての原作キャラクターにして、一発変換出来ない名前…その1

原作者公認の高級魔力タンク娘。

他にも天然？、突っ込みハンマー、レズっ気、巫女たん、家庭的なスキル…かなりの戦闘力持ち。

今回は近衛右衛門のジジ・バカが発揮されてノエルが送り込まれました。

所詮、同盟なんてついでです！

原作の両協会の仲は『なんとなく気恥ずかしい』という2人の長が抱える理由で、ネギ助が来るまでほったらかしにしてたらしいです。

ところで、近衛が存在するなら一条とか、他の撰家も存在するのかな？

作者にゃあ、分からねえや。



S a · G a 7 8 (前書き)

久しぶりにマガジンを読んで、やっとネギが企んだ代替案を知りました。

うん、ネタバレをする気は無いけどさ…

超さんは『魔法世界が2012年に崩壊』って言ってたんだよ？

そんな悠長な手段じゃ間に合わないよ？

バカなの？死ぬの？脳みそが梅干しなの？あ、中身はネギなのかな？

ていうか、なんでまだクシヤミで脱がすの？千雨さんに申し訳無いと思わないの？ホントは確信犯じゃないの？

それと、卒業試験の設定はどこに行ったの？

英雄サマの権力でもみ消したのかな？

流石は、スプリングフィールド…圧力による証拠の隠蔽はお家芸だね！

こんな感じに、ゆっくりイラストと来た作者の戯れ言でした。

「だあだあ！」

「詠春さん……」

「私のことは気にせず、義父さんのもとへ行きなさい。  
なぐに、心機一転…新しい気持ちでやり直すだけさ。」

「ここは京都駅…」

上機嫌な木之香を抱いた桜は、詠春の身を心配し…詠春はそれを笑い飛ばし、逆に自分達のこれからを考えるように言い聞かせる。

会うことはおろか、電話で声を聞くことすら叶わなくなる夫婦はそのまま暫く見つめ合い別れを惜しむ。

しかし、時間には何人も平等だ。

「桜さん、時間だ。」

もうすぐ新幹線が来る頃合いだ。  
改札を抜けなければ、新幹線に間に合わなくなる。

「さあ行きなさい。離れても、俺の心は2人の傍に在るから！」

「…詠春さん、私と木之香も一緒です！離れていても心は……」

「（信じられん…コイツ等、ホントに二十歳を越えた大人か！？こんな人が沢山いる場所で堂々と……うーん、若いねえ。）」

天下の往来で、赤ん坊を抱いた若者がキスをして別れる……なんか俺が引き離れたみたいで、謎の罪悪感を感じる。

時は、今朝に遡る。

（うう、涼しい。夏の山は虫が湧くのを差し引いても、涼しいから我慢出来る…冬じゃなくて良かったわ）

「ノエル殿、道が決まりました。」

「ほう……」

朝餉を頂いた直後。

愛想の欠片も見当たらない巫女が配膳台を片付ける為に退出……詠春一家と俺以外の人気が消えた時、詠春が話し掛けてきた。

「桜と木之香を義父さんの下へお願いします。」

私は此処に残り、次代の神鳴流を担う若者を育成します。」

「詠春…それはつまり……」

「長が自らの家族を差し出す訳にはいきませんから、引退するしかありませんね。」

「そう、か……」

「気に病むことはありません。」

長の立場など…2人の安全と比べたら、安い物ですよ。

それに剣一筋で生きてきた者に、政は無理だと痛感しました。だから、在るべき場所に戻るだけです。」

「分かった。ところで…電話とかは無いか？」



「勿論、有りますよ?」

「よしよし! 詠春は嫁さんに説明して、山を下る準備を済ませてくれ。抜け出す場面を巫女やら下っ端に見られたら、面倒なことになりそうだからな。」

「分かりました。」

詠春は部屋の奥に引っ込んだ。

少ない時間だが家族水入らず…: 氣イ聞かせてやったんだから、俺の用事が済むまで好きなだけ話すが良いさ。

そして俺は黒電話のダイヤルをぐるぐる回して、近衛右衛門邸に電話。

まあ、どうせ急いだって下っ端構成員達は既に雑用なりを始めてるから関係無い。

割とのんびり…: 中立の使者である俺への対応、詠春の様子。無事に麻帆良に着いた後の脅しと手配を兼ねた報告を済ました。

その後もゆっくりのんびり…: 桜さんは木之香を背負って、必要最低限の荷物は俺の旅行鞆に詰め込んだのを確認したら出発。

基本的に長自らが来賓を見送ることなんてあり得ないが、半分お飾

りの長：詠春が居なくなろうと組織に支障をきたす恐れは無しと判断され、すんなりと抜け出すことが出来たが、これは余りにも皮肉が効いてるとしか言いようが無い。

これが朝の出来事。

先ほど新幹線に乗り込み、ふざけた妨害も無くゆったりと座席に座れている。

ただ：別れ際の詠春は、やはり寂しいそうだった。

しかし、たかだか24、5の若造だと昨日までは甘く見ていたが…この一晩で、ほとんどの問題を片付ける選択肢を思い付くとは…なかなかやるじゃないか。正直、見直した。

遙か昔：魔法世界に来て5、6年の自分を、よくよく思い出して詠春と比べてみたが…：当時の俺は良くも悪くもヘタレ野郎。

当然、こんな包容力やら魅力、決断力なんて持ち合わせて無かった。ボクオーン達がいてくれたから、何とかやっていた状態だった。

それを省み、改めて比べると、曲がりなりにも血も涙も無い大組織の長をアイツの凄さを痛感させられる。

これからは、間違っても『甘ちゃんのヘタレ野郎』なんて思うことすら出来んな。

「あの、詠春さんは…」

「奥さん、これからどうなるか…残してきた旦那がどうなるか…色々不安なのも分かる。」

「だからこそ、詠春を信じてやんなさい。」

「…これが、最善の選択肢だったんですね。」

「……奥さん。新幹線が埼玉に着いたら、近衛右衛門が手配した車が駅前待っています。」

そこからは麻帆良に一直線。近衛右衛門がいる限りは西の組織も手荒な真似は出来ない筈です。」

「本当に、何から何までありがとうございます…」

「礼なんて要りませんよ。」

詠春が腹を括ったから、俺も手伝ってやるだけの話しですから。」

それっきり埼玉に着くまで社内に於いて、桜さんと会話をする事は無かった。

桜さんは窓際の席だから、時速200キロ越えの速度で延々と流れる景色を木之香に見せたりして時間を潰したし、俺は俺で…万が一を考えると行きのように、摘みを食べる事も叶わず、ひたすら座り

続けて早く着いてくれと願っていた。

「長殿：これが何を意味しているか承知の上の行動ですか？」

静かな口調だが、威圧的に問い掛ける初老の男性。

「承知も何も…何を目くじら立てる必要が有るのか？」

ただ単に私の嫁がただ1人の肉親であり、私の義理の父でもある人に木之香の様子を見せに行っただけですが？」

柳に風と、男性から飛ばされた圧力を受け流して淡々と述べる詠春。

関西呪術協会には外部勢力の対応を始めとした、あらゆる議論が交わされる…昔ながらの畳張りで、扉も障子などでは無く、音を消すために真綿を詰められ、消音処理が施された分厚い襖で仕切られた場所で行われる『寄り合い』がたびたび開かれる。

今回はそれぞれの名家を治める長や幹部が扇状に座布団を敷き、陣取る。

対するは、離れた場所に座布団1つ…詠春が全員の視線を一身に集

め、槍玉にあげられている。

今回の開催理由は『長の乱心』と称した弾劾裁判。

『まるで人質を差し出した』と言う者が大半で詠春も幾度となく回答し続け、進展しない議論に業を煮やした者が『青山は、東の近衛と通じておる』と言い放った。

こうなれば、詠春の処分どころでは無い。

其処からは、やれ『近衛こそ恥知らずだ』、やれ『実力の無い一族は、権力に縋って見苦しい』だの内輪の差し合いへと変化。

詠春はその様子を何か言うでもなく、黙って見つめていたが：

「静まらんかッッ！！今は身内同士で恥を晒す時では無い！」

今まで、ろくすっぽ会話に入らなかった老人が見かねて場を一喝。その声は外には漏れなかったものの、天井や壁をビリビリと震わすほどの一喝。

それまで騒いでいた者達が一斉に黙りこくる。

『やっと相應しい空気になった』それを確認した老人は詠春に尋ねる。

「単刀直入に申し上げます。

この始末…どう着けるおつもりか？」

老人…青山の長であり、詠春の父でもある男は鋭い目で問う。

「そうですね…皆さんがお望みなら腹を切りましょう。」

それに対しても淡々と答える詠春。

「では、先ず長には引退してもらいましょう。

そして本来ならば、切腹でも生ぬるいところですが…最強の剣士を  
みすみす自害させるのは惜しい。

そこで…人里からは永久追放。

使役妖怪の里で死ぬまで過ごし、有事の際には最前線で死んで頂き  
しましょう。」

「……………」

「皆の衆、他に意見は有るか？」

「……………」

本当なら、ここで詠春を謀殺…  
先祖は神鳴流の始祖を冠し、現代も強い影響力を持つ『青山』の力を多少なりとも削ぎ落としたかったが、足の引っ張り合いで機を逃した。

その気になれば今からでも可能だが、それは後々に影を落とす。それが全員の共通意識…だから、今更になって別の意見など言えない。

「ふむ、沈黙は肯定と受け取る。  
では、次代の長を決める。」

既に先ほどまでの議題と、弾劾裁判の決着など参加者はどうでも良いのだ。  
取り逃した機会を掴み取るように、再び争いが始まる。

（詠春：いつまで居るつもりだ？目障りだ。疾く失せる。）

そんな声が聞こえてきそうな冷たい目を向ける父に、詠春は座礼を  
すると静かに部屋から退出した。

桜さんと木之香の母子が、ノエルと共に麻帆良入りした翌日：近衛右衛門は、ノエルから西に漂う空気と友好関係実現への手応えを報告させた。

また翌日、今度は実の娘：桜から見た『長としての詠春』、『詠春という人間』としての様子を聞き出した。

そして情報の裏を取る為に、素早く使い魔を西に飛ばした結果：殺されてはいなかったが、鳥人族の里の外れに造られた簡素な庵で、飼い殺しにされているのを確認するとさっそく食指を伸ばした。

其処からは、まあ、関西の近衛一族に根回し。

新たな西の長に近衛右衛門が編み出した秘技が記された伝書。

他にも幾多のカードと引き換えに、頼みに頼み込んだ結果：義理の息子である詠春は『東の情報を一切漏らさず、刃を向けない』：かなりキツイ条件が記された誓約書に署名。

幾つかの手順を踏んだ後：五体満足、キレイな身体で東に移籍することができた。

そして1ヶ月後：めでたく近衛夫婦は再会出来た。しかし、どういう訳か鳥族の赤ん坊という瘤つき。



普段はおっとりしている桜さんも、これには流石に驚かされ、勢い余って黒化しそうだった。

だがしかし…：しかしながら、そこは生真面目な詠春が日頃から稼いできた好感度の賜物か…

誠心誠意、真摯に説明することによって無事に誤解は氷解、その場で円満に解決。

改めて仲を深めた夫婦は、その鳥人族の赤ん坊… 『桜咲刹那』という娘を、自分達の子供として育てると決めた。

こうして、近衛右衛門が企んだ東西軟化政策から始まった一連の騒動は、両者にも亀裂を生み…：東西冷戦状態に逆戻り。というより、以前よりも悪化させただけの痛み分けて終了。

敢えて収穫を述べるならば、『元』西の最強剣士たる詠春を正当な取引で手に入れたことだ。

これで現場のスタッフとの兼ね合いという問題が有るものの、防衛戦に使うことが可能になった。

それと東の長である近衛右衛門が、孫と愛娘と…：ついでに義理の息子に囲まれて、プライベートに於いて得をしただけ。

まさに、ノエルの無駄使い…：ここに極まると言ったところか。

それでもポテンシャルを秘めた人材を手に入れたのは大きい。  
どんなに頑丈で、どんなに精緻な動きを可能にした兵器が現れても  
…人でなければ踏み込めない領域が在るのだから。

(只今、電話に出ることが出来ません。『ピー』と鳴ったらメッセージを残して下さい。)

『プー—』

『儂じゃ、近衛右衛門じゃ。』

お主がマツサージを引き受けてくれなくなったら、身体の節々が痛くて調子が悪いんじゃない。

それに雑用に付き合ってくれる者もおらん…頼むから来てくれんか？』

留守電にまた新たなメッセージが残された。

一日一本！昼間の決まった時間に掛けられる近衛右衛門からの電話。

「嫌です。」

台所で今夜のオカズである、かぼちゃを煮ていたノエルは呟く。

東西で密かに取引が交わされてから1月：

ノエルは近衛右衛門からの再三の呼び出しを全力でシカトしていた。

呼び出しをシカトする理由は無論：西に飛ばされた帰りに、想定外の仕事を押しつけられた嫌がらせに他ならない。

世の中：カタギの渡世でも信用、信頼が重要視される。ノエルや近衛右衛門が生きる裏のシノギでの重要度は推して知るべし！

大甘な仕置きとして、張り手一発で済ませても良かったが、相手の近衛右衛門はとうに還暦を越えたジジイ。

いくらノエルが加減したとは言え、『うっかり』が起きかねない。

本音をぶつちやけるなら『録音消すのも手間だが：自分から顔出すのも負けたみたいで気に食わんな。』

ジジイが詫びの1つでも入れない以上、こうなったら意地でも行かんぞ！』というのがノエルの心境。

しかし、肝心の近衛右衛門がいつまでも折れないし、自分が折れたら：一度が二度に、二度有ることが三度と際限が無くなる。

だから特別な用事でもない場合、部下および詠春経由で話しを聞くという形で面会遮絶を断行中。

そんなノエルの生活パターンだが…昼はのんびり趣味と実益を兼ねた1狩り。  
晩飯が済んだらタカミチの夜稽古、真夜中から明朝まで警備員…エヴァはタカミチの警護。

ようやく朝が来たら、中の1日が現実世界では1時間の魔法球で、たっぷり睡眠…起きたらチャチャゼロと一緒に朝食や、タカミチやエヴァを送り出す準備というサイクル。

限りなくグレーゾーンだが、規則正しい生活を送っている。

『ピン…ポーン』

「はいはい、今すぐ出ますよつと…はい、どちら様ですか？」

『詠春です。』

インターフォンから聞こえてくのは詠春の声。

「おー、詠春か！ちよつと待つとれ。」

今のコマは昼間…時間を弄って無い武者修行用の魔法球で一狩りする時間。

今日も時間通りに来た詠春を好ましく思い、ノエルは玄関を開けた。

「…で、調子はどうよ？」

「全盛期…古代人と戦った頃の動きには、まだまだ遠いです…」

「そうか…」

寿命が短い…低スペックの人間用に想定された、時間経過無改造の武者修行魔法球内部。

遠出をして、狩りをする傍ら、詠春がどれほどのモノか…適当な竜を焚きつけて確認していた。

こんな事をする理由は、詠春を身請けする時に結ばれた『西の情報は一切漏らさず、刃を向けない』という約定が関係している。

一見、『長として知り得た情報の一切を漏らすな』と錯覚を受けるが…あの西が、飛び抜けた力を持つ剣士であり元・長を、幾つかの見返りとその程度の約束だけで手放す訳が無い。

結論を言うなら…詠春は、詠春たるアイデンティティ…『神鳴流』を振るう自由さえも剥奪された。

『東の情報を一切漏らさず、刃を向けない』……関西呪術協会は、主力である神鳴流を極めた存在を野坊主にする事を許さなかったのだ。

現在の詠春は、剣術の冴えは失われていないものの、如何せん…羽を奪われた鷹。

神鳴流が使えない以上…パワーダウンは避けようが無かった。

この事実を知る者は、ノエル、近衛右衛門、桜…この3人だけだ。

だから少しでも力を取り戻す為、詠春は出稽古に来ている。

「そんじゃま、教えた技の練度を高めな。ただし、ガキみたいにながむしやら一直線は禁止だ。

無理して超回復なんて期待するなよ？最悪、身体を傷めるだけだから、急がず慌てず脳みそ使えよ。」

本当の戦場から離れて久しいが、まだまだ第一線で戦える身体能力を詠春は持っている…そして、生来の性分から、今回、義理の父である近衛右衛門から受けた恩も感じている。

だからこそ、遅れを取り戻さんとオーバー・ワークをするのは目に見えていた。

理由はどうあれ受け持った者の1人だ。  
毎度、しつこいくらいにノエルは釘を刺す。

「分かっています。」

詠春は力任せにブンブン刀を振り回す風でもなく、一本、一本を身体に覚え込ませるように、じつくりと素振りをしている。

それでも斬空閃の代替技：ノエルと詠春が話し合い、似たような系統だからと授け、授けられた『音速剣』。  
日に日に練度を高め、バレンヌ帝国兵とも剣術という、限定された土俵での勝負なら…：イイ線に食い込めるかも知れない。

いつも通り分身を展開、血抜きをしつつ、詠春のを眺めるノエルは考える。

（まあ…何だかんだ、裏の世界を刀一本でのし上がった男だ。  
土台作りが出来てたとはいえ、1月でここまで化けるか…うーん、  
タカミチとかち合わせてみようかねえ。）

中学一年生のタカミチ…6年間1日の休みも無く、ノエルから鬼の扱きを受けていた彼は伊達じゃない。

集中してから放っていた『ソニック・ブーム』は、溜め動作不要…両手で撃ち出せるように進化。

他には、気弾くらいしか遠距離技を持っていないが、スタンド（立った状態）での接近戦は…手加減抜き、本気の火のエレメンタル師匠を唸らせる段階。

その為、最近の火のエレメンタル師匠はスパリングトレーナー。昔は稽古の締めめに、ヒーヒー言いながら戦っていたことを思い返すと、分かりやすいだろう。

まあ…相変わらず【体外】に撃ち出す類の魔法はサツパリだが、【体内】で有り余っている魔力が勿体無い。タカミチの強さを見て、とうとう稽古に参加せざるを得なくなったエヴァが考え出した魔力運用理論。

やたら面倒な理論だったが、効用は十二分。今では膂力、治癒力、対魔力に変換して有効活用している。

ただし、その実力を知る者は極々一部。



まあ、現段階でもある程度の雑魚なら、真っ正面という条件下なら撃退可能な力を入れた。

それでもまだ中学生…身体の成長によって起きる骨格の変化、筋肉の増加で引き起こされる弊害も有るが、それ以上に効用が大きい。つまり、タカミチの伸びしろは、まだまだたっぷり残っている未恐ろしい優良株なのだ。

「（それは追い追いやるとしても…）」

詠春…胸貸してやるから一丁、模擬戦やってみないか？」

「実戦の勘を思い出す良い稽古ですね。

半殺しにするくらいの気持ちでお願いします。」

「いや、幾ら俺でもそんな真似しないから…」

「詠春…ま、ぼちぼち時間だ。

今日の山籠もりはここらで切り上げようや。な？」

安物の数打ち生産の刀を杖代わりに、膝を付くのを踏ん張る詠春にノエルは言う。

「そうですか。陽も暮れかかってきてますから仕方有りませんね。今日も稽古に付き合っ頂き有り難う御座います。」

「ん、お疲れ様だ…で、娘2人はどうするんだ？もしかして、このまま無知で、身を守る最低限の行動すら不可能になるように育てるのか？」

「……………」

「…ほつたらかして育てるにしても、此処は西にいた頃に比べたらマシかも知れん。まあ…桜さんと、よく話し合いな。」

「はい……………」

「それともう一つ。」

俺が育ててる似た境遇のチビに胸エ貸してやってくれないか？」

「え？良いですけど…」

「よしよし！そんなじゃま、一週間後で大丈夫だな？」

その頃のタカミチ少年……  
麻帆良中学校：男女共学、文武両道を掲げる学校だが……事情を考慮され、部活には所属していない為、下校中。

「う、急に寒気が……」

「え？風邪気味なの？」

「……………」

「多分、風邪気味っていうより……虫の知らせ？」

「……………何それ。私の気遣い返せ」

「ハハハ、ゴメンって。」

「……………」

「それより、あのハゲ坊主……また、文句言ってきたんだよ！」  
「スカートの丈が短すぎる」って……」

「ランボルギーニ先生だろ？  
無駄ないちやもんを付けてくる訳じゃないから、しずなが悪いんだ  
ろ……」

「……………」

隣を歩く魔法生徒…小学生の時から何かと気が合い、最近めでたく  
彼女となった女性徒。

『源しずな』と、いちやこらしながら下校中。

エヴァはつかず離れず…地域の方から見たら、同じ中学の生徒だが  
あの2人とは何の関わりも無いだろうと思わせる…そんな距離を取  
って下校中。

別に学校がつまらないという訳でも無い。

やはり、普通の生徒とは違う立ち居振る舞いから、入学早々に先輩  
方をメロメロに…同年の男女から良くも悪くも人気爆発。

それなりにエンジョイしているが……

『クソ！この猿め、私に見せつけて！！』

私だってホントは…ノエルといちやこらしたいんだぞー！！

ノエルにはもつと…大人扱いして欲しいんだ！（´；；；、）『

ほぼ毎日見せつけられる強制イベントに打ちのめされている。  
今日も頭はホット！身体…というか、表情は能面のようにクールな  
エヴァだった。

S a ・ G a 7 9 (後書き)

『桜咲刹那』

人気投票3回制覇という、ネギま！切つての人気キャラ。まあ、神鳴流・妖怪とのハーフだったり、百合子だったりでかなりのポテンシャルを秘めてるから当然かも知れないね。

うん…人生波瀾万丈を地で行ってる薄幸チャンバラ少女。

因みに、斬魔剣？式の太刀もその気になれば打てるし、鳥人族の翼解放状態だと、麻帆良四天王最強。黒髪と瞳は、アルビノを隠す為、定期的に染色、毎日カラコンだそうです。

あと、作者のSSに登場する刹那は、詠春さん達が愛情を込めて育てるから、原作みたいにうじうじしません。木之香への対応も百合 家族になります。してみせます！だって、ハッピーな方が良いでしょう？

『源しずな』

よく分からん立ち位置の原作キャラクター！。

魔法を行使してないけど、魔法先生側っばい。

第一話にして音もなくドアから入室 気付かず振り向いたネギ助が、おっぱいに溺れるラッキースケベを演出 Ⅱ 部屋の『真ん中辺りに立っていた』ネギの背後に『気付かれること無く悠々と』移動？

ぶっちゃけ、無音、気配遮断くらいはマスターしてるんじゃない？  
作者はただ者では無い…きっと強キャラだと思えます。

ふう…ちよつと詠春さんには、不幸を味わって貰おうと考えたけど、  
やっぱりダメだったよ……

だって、作者は何処までも凡人の思考なのに、ネジが3本くらい足りない変態と、身骨すり減らして渡り合う詠春さんが好きだから…  
鼻直しちゃった。

その代わりに、ペナルティーも与えちゃった！世の中、万事順調  
なんて有り得ないからね！

本音は、刹那救済のついでにどうやったなら納得出来る形で、東に身  
柄を移せるか…これくらいしか思い付かなかったんです。

けど、後悔も反省も………流石に、批判コメントが多かったらする

かも知れない(・・・)



## S a ・ G a 8 0 (前書き)

作者の戯れ言…

FF零式…順調な滑り出しで、イイ感じの売り上げが狙えるらしいね。

ロマサガは、携帯のアプリで2がリメイクされてるよ。

逆に言ったら、携帯のアプリに移植という形でしかリメイクされなかったよ

(…)

なして秘宝伝とかは、リメイクされたのにロマサガはダメなん？

バカの1つ覚えみたいにFFシリーズは作るのに、なしてロマサガ

… S a ・ G a は新作はおるかスピンオフすら作ってくれんの？

もうロマサガに限らず、『 S a ・ G a 』シリーズは終わったコンテンツ…終わコンなん？

早くしてくれんと…作者を含めた…只でさえ寡兵の S a ・ G a 軍隊は…全滅してしまうよ…

(…)



例によって世界樹広場にて…

近衛右衛門は、関東魔法協会所属の有力者と、現場の魔法使い達…  
そしてノエルとエヴァを喚び集めた。

「……………」

「……………」

「…今日から儂らの一員として、麻帆良の警備を担う近衛詠春じゃ。  
皆が心配しているような事が起きることは無いから、安心して欲しい。」

「未だ若輩者の身で、至らぬ所が有るでしょうが身命を賭して臨む  
所存です。」

御指導御鞭撻…どうかよろしくお願い致します。」

目的はノエルの下でみっちり修行を積み、ある程度の戦闘力と勘  
を取り戻した詠春…彼をいよいよ披露すること。

かつては旧メガロメセンブリア。

現在は世界樹を消し去るまでの期限付きとはいえ、バレンヌ帝国が

支配する麻帆良で暮らす人間だ。

流石に古代人や七英雄などの最重要機密は知らずとも、当然『紅き翼』：英雄の1人だというネームバリユーは効果絶大。

例え、青山から近衛に変わっていようと、全世界放送をされた式典でバツチリ映像に残った顔だ。

この場にいる全員が彼を理解している。

そして今現在も、その栄光に胡座を掻かず凜とした佇まいに好意を抱く者も少なくない。

だが、そこは組織のサガか…

欠点が見当たらない人間でさえ、万人に好かれることは叶わない。

ましてや、後ろ暗い過去の総合商社たる詠春に対して反感を抱く者が現れるのも道理。だからこそ、ノエルとエヴァを呼んだ甲斐があるって物だ。

「さて、人除けの結界も張ったことじゃし、バレンヌ帝国の兵隊に詠春がどこまでやれるか観てみようかの！」

「うーい、バレンヌ帝国のノエルっす。」

「関東魔法協会所属：近衛詠春。行くぞ！！」

これから同僚になるギャラリー達に、詠春の力を見せて信頼を、または変な気を起こさないように力を見せ付ける為に演武をするだけ。

まあ、当人にとっては事前に打ち合わせた通りに動くだけの準備運動。

立ち合いは強く…お互い駆け寄り、打ち合いからの鏢競り合い。後は流れて…高速で動き回りながら、適当に幾度か得物を打ち合ってから元の場所に戻る。

要は…ギャラリーからはヤムチャ視点。  
所々で発生する斬撃音を聞き、アスファルトが剥げるのを視認出来ただけ。

『うむむ、コレが英雄と謳われる人間の闘いか…手加減されてるとはいえ、バレン又帝国のアイツ強くな？』

『ほああ…速すぎて、強すぎて…参考にならない。  
けど、滅多に見れないモノ見ちゃったなあ！』

こんな感じで圧倒された者が多数派。

元・西の長だと嫌悪していた少数派も、流石に色々考えを改めねばなるまいと強く思わせて、手合わせという名の演武は終了した。

「いやはや、やはりバレンヌ帝国固有の術法による強化の威力は恐ろしいですな。」

「はい…正直、全盛時に勝るとも劣らない速さが出せるなんて、思ってもいませんでした。」

「だろ？男は度胸！何でもやってみるモンさ！」

近衛邸にて…

一仕事やり終えた妖怪ジジイと化け物、そして真人間は演武を振り返りながら酒を飲み交わす。

というのも、ノエルの扱きを受けたといえどもそんな短期間で、錆び付いた身体が超スピードで動ける身体に成るだろうか？

否！流石の詠春でも不可能だ！

では何故動けたか？

『妖精光』、『覚醒印』やらでメチャクチャにブーストしたから。

ノエルとしては『この演武で箔が付けば御の字だよなあ』くらいに考えて施したただだったが……それ以上の効果を得た。  
結果 all right だ。

「ところで…バレンヌの術法を、ちいつとばかり教えてくれん？」

和やかな雰囲気で、桜さんの用意したツマミを食いながら酒を楽しんでいたが、いきなり近衛右衛門が酔った勢いで無茶な要求をする。

「幾らタカミチの学校生活で、ちよくちよく都合付けてくれるコノえもんの頼みでもダメな物はダメ！」

「ぐろう…このケチんぼ！」

「つーか、酔ったフリすんなよな。」

「あゝあゝ！耳が遠くて聞こえん。  
頭がガンガン痛いわい。」

なおも酔ったフリを続ける近衛右衛門。

面の皮が厚いというか、神経が図太いというか……

そして、この下りはちよくちよく起こるのかノエルも気にせず手酌をしている。

「ははは……」

これには詠春も渴いた愛想笑いをするしかなかった。

一方……こちらは酒を飲んでる男衆を除いたノエル、近衛ファミリー

「「だあ、だだあ！」」

「はあ〜、刹那と木之香は可愛いなあ。」

エヴァはエヴァで適当なぬいぐるみに目を付け、魔力の糸で動かしてチビ達をあやしている。

いつもなら動かないぬいぐるみが、自分達の周りで踊り出したりと……赤ん坊組はきゃっきゃきゃっきゃ喜んで、ハイハイをして追いか



ける。

『マリオネット』の平和的有効活用…チビの様子を見てうつとりしていた。

そしてこちら…隙を持って余したタカミチを見た桜さんが、好きなだけ晩飯を振る舞おうした所。

「タカミチ君、お代わりは要らない？」

「あ、いいんですか？頂きます！」

「オメエよオ、人ノ家の飯だ。そこら辺…よく弁えるよ？」

「チャチャゼロさん、別に良いんですよ。  
今日は詠春さんの就職祝いなんですから。」

「桜、ダメな物はダメだ！  
コイツの食欲をそこらの中坊と一緒にしちゃ泣きを見るぜ？  
一度メシを食い始めると、馬みてえな量を平らげるんだぜ？」

「あらあら、まあまあ！」

ノエル一家に引き取られてから竜、怪鳥、野獣、霊草の類を食べ続けてきたタカミチだ。

そして只今、食い盛りの育ち盛り真っ盛り！

魔法球の生物も、血やワタを抜いたその日のうちに食べられる訳もない…おかげでノエル家の食費は毎月マッハ！

だからこそ…チャチャゼロは桜に迷惑を掛けないか冷や冷やしており、警告もした。

「すいませ〜ん、お代わり頂きます。」

タカミチを見れば、既にお代わりのご飯をよそっている。

「ほら見る！もう丼一杯を平らげやがった…！  
オラ！タカミチ、程度を考えやがれ！」

「え〜、桜さんも良いって言うてるんだからイイじゃんか。  
チャチャゼロはうるっさいな。」

「まあまあ、2人ともそんなに怒らないで。

どうせお父様が貯め込んでるお金から食費を出してるから大丈夫ですよ。」

「（うわあ、可愛い顔してなかなかえげつねえ）

……じゃあ、食費浮かせて貰うわ。」

結局、大いに飲み、大いに食って子供の時間は終了。

だが、珍しくベロンベロンになったノエルを引き摺って帰るワケにも行かず、近衛邸で一泊が決定。

詠春の就職祝いを建て前にした男達の酒宴は、夜遅くまで続いた。

S a ・ G a 8 0 (後書き)

『覚醒印』

ミンサガに登場する術法。

どう頑張っても死に技としか言えない… フォローの仕様がない。

発動時に光の紋章が浮かび上がって……… 終わり。

きっと何かしらの効果は有るはずだけど、不明。

術を使っても、武器で殴っても、素手で殴っても効果が出ているのかサツパリわけわかめ！

敢えて使い道を挙げるなら合成術の材料にするしか道が無いっぽい。やっぱりフォローの仕様が無いよう。

さて… 此処からは時間を飛ばしていきますね。

S a ・ G a 8 1 (前書き)

今回は、唐突に時間が飛んでいます。

内容は『明日菜、麻帆良の地に立つ!』です。

只今1996年……7年も経てば世の中、大なり小なり色々と有るさ。

とりあえず、身近な所から語っていこうか。

タカミチがめでたく社会人になった…

テメエの人生だ。

テメエの好きなことをやれば良いと、基本的に放つたらかしにしていたが『教師』なんて難儀な稼業を選ぶなんて……考え直すように諭したが、無駄だった。

とにかく、過ぎてしまったことは仕方無い。近衛右衛門も一枚噛んでるのか、あれよあれよと教育実習も完了。

麻帆良小学校に赴任、ビシバシ教鞭を振るう事が決まっている。

同時に自立したいと願い出たから許可。

とりあえず社員というか、独身というか…とにかく寮に引っ越した。ただ、案の定というか…腹を空かせているのだろう。

今でも時々『修行』と称して魔法球の中で狩りには参加。

散々食い荒らして、お土産にはデッカいタッパーにオカズを詰め込んで帰って行く。

まあ、本当に自立出来ているのかは疑問だが、タカミチは元気。ついでに、しずなちゃんとの仲も続いている。

ただ、半分通い妻のような真似をさせている…らしい。

情報のソースは近衛右衛門だから怪しい。

これはデマだと信じよう。ウチのタカミチがそんな軟派野郎なハズが無い！

もし俺が知ったら、自分は半殺しで済ます気は無いとタカミチも理解している筈だし。

次は詠春一家の近況だ。

詠春と桜さんが、愛情込めて育てているおかげで、刹那、木之香のチビ2人は病気を患うことも無く真っ直ぐに成長。

それと夫婦で話し合って……自衛、殲滅手段は必要だという結論に辿り着いた。

今は、身体の成長を妨げない程度のメニューと頻度を組んだ上で、俺が魔法球を携えて近衛邸へ…

やはり『集気法』、『魔法の射手』くらいの負荷が緩い技法、術法で土台作り。

うん、子供にムリをさせるのは、やっぱりご法度だわな。

そんな感じで、急がず焦らず、じっくりと…城を建てるような感覚で気長に鍛えている。

敢えて適性を当てはめるなら、上の刹那は術法の行使よりも武術タイプ。

下の木之香は殴り合いや得物の行使よりも魔術タイプ。

2人一組で行動したら、見事に前衛と後衛が分かれて、バランスが良いかなあ…なんて考えている。

それと、詠春本人のリハビリも忘れていない。

少ない時間を有効活用するため、分身と手分けして並行作業。

無理させないように監視しつつ修行のパートナーとして付き合ってきた。

その効果が現れたのかな？

本人曰わく『錆び付いていた身体も存分にほぐれ、全盛時に追い付いた。』  
『

うん、サラツと言ったが『全盛時に追い付いた。』らしい…因みに、現在の詠春は男盛りの30代。

全盛期は10年以上も前の大戦中。

それも、気力モリモリ…花の20代だぞ？



6年のブランクというハードルも存在した。

それを乗り越えて、其処まで復調、パワー・アップするなんて……  
詠春さんマジパネエ！

野暮かも知れないが、今度、とっておきの贈り物を贈ろう。

え〜と、後は……ツイー・リングがとうとう防衛システムを完成してくれやがった！

真夜中から一定時間稼働。

麻帆良大橋から内部に向かつて、侵入する者：魔力反応やらでシステムの網に引っ掛かったバカを、無差別にムニヤムニヤする素敵ユニット。

魔法のゲートや転移符でショートカットをしようなんていう横着者は、結界でシャットアウト！  
無論、ムニヤムニヤされる運命を辿る。

要は、警備システムが頑張ってくれるから俺達がだいぶ楽が出来るようになった。

まあ、機械なんだから偶にはメンテナンスを行うさ。

その時、大拳して押し寄せてくるようになった……それだけだ。

その時は、スタッフ総出でボッコボコにした後……尋問、雇い主まで

ゴニョゴニョする作業をするだけの簡単なお仕事。

「科学万能の世界…いや、イイ世の中になったモンだな。」

「全く以て科学万歳だ！」

大ボカやらかしてバレそうになっても、UFOやらのせいになれば  
終わり。

これまでのように神経をすり減らしてまで、秘匿に力を入れる必要  
が無くなったしな。」

「ホントだよな。」

お！エヴァ、その土管の左っ側に緑キノコが有るぞ。」

「なにい！？どうしてもつと早く言ってくれなかったんだ。」

くそ！パッケンフラワーは出て来るな！ファイア・ボールを喰らえ  
！！」

現在のエヴァは学業から解放された状態。

その過程で料理研究会、茶道…家庭スキルをバリバリ身に付けた彼  
女に、隙は無かった。

料理、掃除、洗濯をちゃっっちゃか済ませ、今はお昼過ぎ…のんびり  
とした時間で、仲良くゲームなんて興じている。

人生全てが上手く回ってるように感じるが…とろろがどっかい！その間は問屋が卸さない！

「ただいま」

「オ、イ、今帰ったぜ！」

玄関から元気な声が響いてきた。

「ちょ！？手元が狂う。

ちょ、太…陽……だと？またしても私を苦しめるかッッ！！太陽め！！」

天から襲いかかってきた太陽にトドメを刺され、最後のヒゲ親父が乙ったエヴァは放っておくとしてだ…

声の主の一人は、小学生タイプのボディに換装したチャチャゼロ。

さて、もう一人の声の主だが…

「なんで返事してくんないのノエル！」

「ハイハイ、私が悪うございました。  
お帰りなさいませ。お嬢様。」

「……態度が気に入らない。  
それに様付けなんて止めてよね。」

「ハイハイ……手洗いうがいしてから文句言いな。」

「むう……！」

「……いつまでもガキだねえ。ちっと便所行ってくるわ。待っとれよ？エヴァ」

「ほ……う、ゆっくりして来いよ。」

ニヤリと笑ったエヴァが気になったが……悪さはしないだろうと考え直し、席を離れた。

遡ること3ヶ月前……

タカミチが出て行って、流石に大人1人居なくなると部屋が広くなるなあ〜なんて、だらだらしていた昼下がりに：ライフ・メーカーが訪ねてきた。

「まあ、そういう訳でアスナ姫の後見人になって貰いたい。」

「……………」

「よろしくお願いします。」

『ぺこちゃん』といった具合に頭を下げ、お願いする娘こそ、魔法世界史上初の永世中立国として新しく歩み始めたウエスペルタイア王国：天下の王女殿下！！  
アスナ・うんたらかんたら・なんとかかんとか！御本人だ！

「オヤジイ、それにマスターはどうするよ？」

「そりゃ…なあ？」

「追い返したって、後見人が変わるだけで解決にならんだろ。」

「私としても、その悩みは他人ごとじゃないからな。  
結局、引き受けるしか無いんじゃないか？」

「まあ、オレとしても2人の決定には逆らえないからよ。」

ライフ・メーカーの言い分は、こうだ。

『古代人との最終決戦…破壊するものを抑える時に魔力を極限まで消費したアスナ。』

それがアスナに与えたダメージが酷い。

現にアスナの身体は成長していない…が、解決策が存在する！

それは、世界樹が年がら年中撒き散らす、膨大な量の魔力を浴び続ければ回復…成長するようになる！』

ちよつと回復する理屈がワケ分からんけど、アスナが酷工状況だったのは理解した。

それと姉貴のアリカのことだ…まゝた、自分のふがいなさに落ち込んでる画が浮かぶ。

だが、それ以上に非道いのは…俺達の義理と人情に訴えて丸め込もうと考えているライフ・メーカーだ！

俺個人としては、ほぼ戦友扱いしているアスナの為…

エヴァ個人としては、真祖に弄り、造り変えられた10歳から、死

ぬまで時間が止まったままという現実。

それに伴い、どんなに手を伸ばしても、掴めない夢が有るのも手伝つて、アスナに感情移入…

「大丈夫だ。既に麻帆良の権力者達は丸め込んだ。

反抗的な人間も、そんな事を考え付かないように『処理』した。だから面倒な手続き方面は、安心して欲しい。」

悩む俺達を見て、面倒な諸々の手続き方面は片付けたと豪語するラ  
イフ・メーカー。

アスナも、チャチャゼロを弄ってたり…マイペースに時間を潰している。

弄り回されているチャチャゼロは、無言で助けてアピールしてるし

……

「はぁ……やっぱ、お前は魔王だよ。」

「ほう！私から見たらお前の方がよっぽど魔王だが…お褒めに預かり光荣だ。」

ド直球の嫌みも華麗にスルー。

それどころか、逆に投げ返してくる神経の凶太さで、いよいよ呆れさせられた。

もうさ、いつそのことトラブル・メーカーに改名しろとさえ言いたくなる。

「なあノエル…やっぱり引き受けないか？」

「それしか無いわなあ。

逆に目の届く範囲をうるちよろしてくれてた方が、よっぽどマシだわな。」

結局、アスナ…もとい明日菜を引き取ることになったでござるの巻。

そこで、学校に通わせるワケだが当然、問題が発生する。

一番起きそうな事は、『力尽くの拉致』。

やはり四六時中張りついても、違和感が無いボディー・ガードは必要だ。

だが、再びエヴァに学生生活をさせるのも酷な話しだからと、チャチャゼロが立候補してくれた。

細かいトコにも気が付いてくれるチャチャゼロは、ホントに良い子やでえ〜

取り敢えず、登下校時のボディー・ガードは決まった。

そして、ムダに魔法の適性を持つ生徒が多い…良くも悪くも当たり



年だったから、1クラスに召集。

急遽、タカミチが副担任としてクラスに入った…ということは、後で知った。

「ん？俺の弟さんの残機が減つとる。  
エヴァよオ…やってくれたな？」

トイレから帰ってきたら、微妙に数字が変わってた。  
ていうか、10機くらい減ってた。

「…知らない。  
勝手に弟の残機が減って、兄貴の残機が増えただけの話だ。」

「……………」  
復活したヒゲ親父を操り、ステージを進めるエヴァのわき腹を突っ  
つく

「あう、止める！集中出来んだろ…って、また死んだじゃないか！  
！」

画面内のちっちゃいオッサンが、空飛ぶ亀に抱きついているのが見えた。

「プププ……ざまあ！！」

人が見とらんところで横着するから、そうなるんだ。それと…命の取り立てが残ってるからな！」

「ええ！？そんな殺生ではないか。

わ、私の残機は後…3だぞ。」

「甘いな。ギリギリまで取り立てるから、3回ゲームオーバーしろ。」

「ちくせう…ノエルの鬼！悪魔！」

「フハハハ！！」

今は悪魔が微笑む時代…世紀末なんだよオ！！」

「ねえねえ、私もやりたいなあ〜」

「あ、そう？明日菜もやりたいなら仕方無いな。」

『ブチ』

「ああ！？セーブがまだだったのにいゝゝ  
なんでカセット抜いちゃったのおおおお！？」

電源を落としたのは何てこと無い…横着したエヴァに対するお仕置きだ。

次からは真面目に、一面からやり直せや！

「……そんじゃま、別のやんべ。  
4人プレイの出来る奴にな。」

現在は、コレといった問題も起きる事無く平穩に過ごしている。  
とにかく…これからも厄介事が起きないと良いなあ。  
まあ、麻帆良だから無理だと分かっているけど…俺には祈らずには  
いられない。

S a ・ G a 8 1 (後書き)

『魔法の射手』

ネギま!で、どんなモブ・キャラでも扱えるしよぼい魔法。

どれくらいしよぼいん?って聞かれたら、最初期のネギ助が主力とするくらいしよぼい。

けど、コミックスの1コマでは…一番弱っちくて、スタンダードっていう前置きが有るけど、エヴァが風系の古代上位魔法の1つに挙げられてるんスよ?

そう考えると、イギリスのなんとか学校……全生徒に授けるんだから、意外にヤバい学校ですね。

ゲームは1日1時間！だけど、大人は1時間以上良いのよ？  
という訳で、今日も今日とてゲーム。

別に出不精って訳じゃない。

家の外に出るとなると『年齢を重ねたような』外見を繕う手間が掛かる。

気を遣ってくれたのか、霊地である麻帆良の魔力を使って、認識障害を行使すれば良いと言った現地人スタッフもいた。

けど、流石にヤバいдар。

それは、身体の警報機である痛みが消えるのと同じだ。

最悪の事態が起きた時『うわぁ！キレイな花火だな』なんて呆けて、逃げなかつたら…市民は全滅だ。

無論…実行はせず、気持ちだけ頂いた。

体を動かすくらいなら、魔法球で十分だ。

だから、エヴァも積極的に外に出ようとはしない。  
買い物や学校行事、本業か副業をする時だけだ。

そんな訳で、学校から帰って来た明日菜と仲良くプレイ中。

「ねえねえ、どうしてノエル達も世界を救ったのに、詠春達みたいに有名じゃないの〜？」

ふと、何気ない調子で明日菜が聞いてきた。

そして内容は、どんな子供でも必ず1回は考えつく矛盾。

『純粹だからこそ、納得出来ない』といった感じか…どれ、真面目に答えようか。

きつとこの回答が、明日菜の価値観に影響を与えるのが見えているから。

「英雄とか有名人は、いつも人に付きまとわれたり……利用されて使い潰されるから。」

「でもさ、ノエル達も頑張ったじゃん！」

頑張った人達に何にも無いなんて、やっぱりおかしいよ!」

「そつだな。」

世の中、努力と相対する報いが無いとキツツイわな。

けど、時と場合によっては逆効果になることも有るんだ。

明日菜だって、『世界を救った黄昏の姫御子』じゃなくて『一般人』だから、こうして普通に暮らせてるんだべ？

英雄になってたら多分……パンダかコアラみたいな生活かなあ。

毎日毎日、『アスナ王女に会いたいいいい!』って奴らが行列で来

るんだ。」

あまりリアルな表現は自重した。

こんな子供に、権力闘争なんて言っても理解出来んだろ。ていうか、分かって欲しくも無い。

しかも中途半端に覚えて、前の話しが頭から吹っ飛んだら何の意味も無い。

「う〜〜ん……なんか、ムスカシイね。」

「そうなんだわなあ。世の中って目立たず、争わず……普通に普通に居るだけでもムスカシイんだよオ………あ、ヤバい！」

「フフン、もう爆弾で挟んじゃったから遅いよ。

お前の命は持つて後、3秒………って奴だよ！」

『＼(^O^)/によわあ!?!』

明日菜が、丁度セリフを言い終えた瞬間……テレビ画面内で、俺が操っていた白ボンが爆弾をもろに受けて消し炭になって消えてしまった……

また負けてしまった……明日菜ってば、強すぎる……!!

「まあ、言いたい事は普通が一番！  
普通に生きるだけでも結構、必死にならないとムリって話した。分  
かった人〜」

「ハーーーイ！」

「ん、元気があってよろしい。

メシが出来るまで時間有るから、ちゃっっちゃか宿題片付けてきな。」

「ハ〜イ。」

聞き分けの良い明日菜だが：やっぱり、難しかったかな？  
まあ、『なんとなく』でも俺の伝えたかったことは感じ取ってくれ  
た筈だ。

ただ：成長して、大人になった時を考えると……姉貴のアリカが女  
王だから権力闘争は無いとはいえ、窮屈な生活になるのは想像に難  
くない。

「まあ、たかだか軍人崩れが思案しても意味ないか：  
さて、こつちもぼちぼち準備するかね。」

明日菜は、タカミチの使っていた部屋で勉強。



チャチャゼロは、魔法球の中でストレス解消を兼ねた狩猟。俺は、テレビが置いてある茶の間でゲームをした。では、エヴァはどこに居るのか？

「Z Z Z、Z Z Z、Z Z Z、Z Z Z…」

彼女は寝室でシエスタ…惰眠を貪っている。別にやる事やってるから良いけど。

「ほれ、起きろ〜。エヴァ起きろよ〜。

晩メシの準備してくれるんじゃないのか？」

優しくめに頭を『ぺちぺち』と叩いて、起きてくれるように促す。

「んにゃあ！？今、何時だ？」

「大体、5時くらい。」

「ふむ、なら仕方無いな

（それにしても後、1分…いや、10秒待ってくればイイ所だったのになあ…）」

只今…真夜中。

警備から戻って来たノエルとエヴァの両人は、布団の中。

「エヴァ…もしもだぞ？」

もしもバレンヌ帝国が、俺達を切り捨てる時が来たら…エヴァはどうする？」

弱気なノエルから投げかけられた、考えもしなかった言葉…

「ん〜」

エヴァは初代ボクオーンから受け継いだ記憶を掘り返しながら、ぼんやりと思索する。

バレンヌ帝国も出発点は先住民の寄り合い…ただの集落。

土着の獣人は、定期的に『狩り』に来た無法者によって住処を奪われ、親しい者を奪われ、殺されて…

大陸中央に位置する黎明期の帝国は無法者達から自衛する為、閉め出すという大義名分で飾って四方に散らばる村々と手を結び、時には飲み込んだ事もあった。

その過程で仲間と認め、助け会い、中には異種族の者と恋に落ちて結ばれた者も現れるのも、また道理だった。土着の獣人しか存在しない大陸に、最も脆い人間が生きているのもそうだ。

『人間扱いされたい』、『野党から足を洗いたい』…他の大陸から渡って来た人間にも帝国は、一度だけチャンスを与え、受け入れて来た。

そうやって集落は村へ、村は要塞都市へ、要塞都市は大陸を纏め上げて帝国へと成り上がり…建国から、ざっと数えて600年が経った。

遡れば…獣人の家系は、たったの8〜9世代。

獣人に比べて寿命が短い人間でも少なく見積もっても倍くらい。

歴史だけという限定した条件で世界から見れば…まだまだ浅いと、見下すことも出来る国は幾らでも存在する。

だが、バレン又帝国の人達は大事なことを当たり前のように知っている。人間だろうと、異種族だろうと、結局のところは腰を据えて付き合う『心』が肝要だと…

積み重ねてきたモノは尊く、世界中の人間に胸を張って誇れる。事実、バレン又帝国には根が穩やかな人達が大勢居る。

だから、一晩で国を滅ぼせる力を持つ自分や、七英雄の面々が追わ

れること無く…依然、バレンヌ帝国で平穏な暮らしを送れている。そしてエヴァ自身にとっても300年以上、逃げ回らず、堂々と市民権を主張して平穏に過ごした…そして、ノエルに初めて出会った大事な場所だ。

そんな未来は未永くお呼びじゃないが、最初の300年…己が体験してきた暗黒時代で、人の汚さはイヤと言うほど思い知らされた。

死ぬ気で反抗すれば、勝利とは行かずともそれなりのダメージを与えられるという自負と自信は有る。

それでもだ…

「とりあえずは、お前とチャチャゼロを連れて逃げるな。」

「そつだよな…そりゃ逃げるよな。」

「まあ、他の七英雄の奴らも大概凶太いから、勝手にどうにかするだろう。」

な〜に、放浪記が始まるだけさ…ただ、少しばかり寂しいかも知れんがな。」

エヴァの選択は【逃げ】の1択。

一般人の犠牲を出してまで抵抗する気はサラサラ無かった。

余裕があれば魔法球を幾つか持ち出して脱出。それ以降は、その中にひっそりと住めば穏やかに暮らせるとさえ考えている。

「…で、何故こんな質問をしてきたんだ？」

「…昏間、明日菜に聞かれたんだ。」

『どうしてノエル達…七英雄も頑張ってたのに、ご褒美が無いの？』  
つてな。」

「ほほう、それはそれは…ふふ、子供らしい可愛い質問じゃないか。ノエルも、そうは思わんか？」

「そりゃ、可愛いさ。」

邪気は無いのに、悪人っぽい笑い方になってしまっエヴァ。  
そんなエヴァにノエルは言う。

「…何て言うか、いつの間にか七英雄なんて呼ばれだして、最初は調子乗ってたけどダメだな。100年も生きてると、イヤでも見えてきた。」

やっぱ、マジ物の『英雄』なんて因果な存在には成りたくないな。  
今の鉄砲玉、便利屋、道場主で十分だ。」

「何でだ？言わせたい奴らには、好きなだけ言わせておけば良いじゃないか。」

「それを言ったら身も蓋も無いじゃないか。」

「皇帝にバリーの意志が継がれる限りは重用される。だから心配は要らんよ。」

此処で話しのオチが付いて、やっと寝るかとした時…

「そういえば…今日、明日菜の学校で授業参観が有るな。」

「もう、いい加減に眠いんだ。私は寝る…」

「……悪かったな。」

魔法世界の超大国が庇護する英雄2人は、どこまでも普通を望む。

ノエルは世界樹を片付けて帰国した時、自分達の居場所が残っていることを願う…



ノエルとエヴァは、それなりに歳を重ねたようにごまかして参観。

（詠春さん、詠春さん！見て下さい。

ほら、このちゃんとせつちゃんが上手に吹いてますよ！）

（本当だね。）

無論、近衛のおしどり夫婦も参観。

娘達の様子を見た母親は、わたわたと喜びながら隣の夫に報告。

その夫は口数も少なく、立っているだけだが…温かい眼差しで見つめている。

だが、授業参観は親だけの物ではない。

（あ、ノエルとエヴァだ！

せっかく来てくれたんだから、イイとこ見せなきゃ！）

明日菜は、セオリー通りに教科書書き込み型でじっくりと…

「流石、せつちゃんや。

授業前にヤマ張った場所がぴったり出てきた。」



「しゅー！ちゃんと集中しないとダメだよ。このちゃん。」

近衛姉妹は、2人で事前にヤマを張って楽譜に書き込み、ゆとりを持って練習中。

他の子供達も基本的に同じような様子で、多かれ少なかれ親を気にしている。  
しかし、中には度が過ぎる子も一人や二人は当たり前前のように出て来る。

「あん？裕奈、さっきからキョロキョロしてどうしたんだ？」

問題児筆頭のチャチャゼロこと…茶々はリコーダーの分解、ピカピカに磨く点検にも飽き始めて周りを見回した時に、ある女生徒が目に入った。

「あ、茶々ちゃん。

お父さんかお母さんのどちらかが来てないか見てるの。」

明石裕奈…オヤジは大学に勤める大先生。母親は…表向きはキャリアウーマンとして、バリバリ働いている。  
裕奈は知らないが、兩人ともに魔法関係者。

妻に関しては、旧世界ではちょっとした有名人。

そこまで思い出し、チャチャゼロは語る。

「お前よオ、初めて見た裕奈がキョロキョロしてるトコよりも、練習してるトコの方が…裕奈の母ちゃん達からしたら嬉しいんじゃない？」

「…だけど……」

「御託は良いからさっさと練習しとけて。」

「こういうのは、気付かないうちに來てるもんだから。」

「う、うん…分かったよ。」

これまでも幾度か、自分の親達だけは參觀に間に合わなかった思  
い出がある裕奈だが、俯きながら応えると練習を再開した。

（ま、心配しなくても今日は來るんだぜ？）

生ぬるい目で裕奈を見つめるチャチャゼロの背後に忍び寄る影…

「え〜と、茶々ちゃんはどうして練習しないのかな？」

「チツチ！甘いぜ先生。」

オレはコレくらい朝飯前つてワケよ。そうしたら、音の通りを良くするために点検する以外無いだろ？」

困惑する教師に向かって、人差し指を立ててニヒルに屁理屈をゴネた。

言うまでもなくこの瞬間、チャチャゼロの出席評価はゼロになった。

「ハイ。それでは発表してもらいま〜す。」

教師の号令でピアノに近い…逆出席者順に1人ずつで発表。

やはり緊張からか…練習では上手く出来ていた子も、必ずどこかで失敗。

それに親達は一喜一憂するわけだ。

「うう〜、ミスっちゃった。」

「まあまあ、1カ所だけだから大丈夫だって。せつちゃん。」

「なんで練習しなかった茶々が出来て、私が失敗するわけ？」

「そんなこと言われても出来ちまうから仕方無いだろ……」

そして終わった生徒達は、好き勝手におしゃべりをする。

それは親達が発表を見届けると、基本的に帰って行くから。

用心深い者は、お母さんネットワークの存在を考慮して、次の授業が始まるまで猫を被るのである。

そして最後の1人……

名簿番号の一番若い少女、明石裕奈の番も終わったが……

(……やっぱり、今日も来てくれなかった。)

ある程度は覚悟していたが、心の何処かでは『もしかしたら今日こそは来てくれるんじゃないか?』……こんな淡い期待も抱いていた。だが、教室を見回しても何処にも姿は見えなかった。これはなかなか堪える。

「起立了、礼!」

「……ありがとうございます。」

そのままクラスに帰ろうとした時……

「裕奈！よく出来てたじゃん！」

「え……お母さん？」

音楽室から出た生徒達は揃って『誰？このオバサン』となったが、裕奈の只ならぬ雰囲気を見かねて子供なりに察してか……ちゃちゃを入れる者は現れない。

皆、手近な友達と話しをしながら教室に帰って行った。後に残るは、明石親子のみ。

「急に仕事の『打ち合わせ』が『キャンセル』になったの。それから……もう、会社から車を飛ばしてダッシュで来たんだけど……遅くなっちゃって、ごめんね？」

手を合わせて謝る母親。

「……お母さん、私のリコーダー聴いててくれたの？」

「当たり前っしょ！上手いことカッコウ吹けてたよ！教室の外に居たお母さんにも聞こえてきたよ。」

「!!!」

（私から見えなかっただけで、ちゃんと来てくれてたんだ!）」

「ん〜？足に縋り付いちゃって…裕奈は甘えんぼさんだねえ。」

ほら、次の授業に遅れるからもう行きな。お母さんも次こそは始めから来るからさ。」

「うん分かった!じゃあね、お母さん。」

この日、親が初めて授業参観に来てくれたのが嬉しくて、裕奈は学校が終わるまでルンルン気分だったとさ。

S a ・ G a 8 2 (後書き)

『明石夕子』

元気娘：明石裕奈の母親。名前は明石夕子。

原作では既に故人であり、回想やら昔語りでしか登場しない。

職業については【麻帆良学園から】メガロメセンブリアに派遣されたエージェントだった。

因みに：裕奈が5歳の頃、海外旅行中に事故で亡くなったことになっているが、正しくは魔法世界本国政府の任務中に殉職。ついでに「元気は最強、元気が最優先」と原作の裕奈に格言を残した。

私の拙作では旧メガロメセンブリアが消滅。

両帝国監視の下で、新生メガロメセンブリアとして復興しているの  
で、それに伴い：死亡フラグをへし折りました。

S a ・ G a 番外編：英雄達 紅き翼 の現在

世界を2つに割り、それを操っていた黒幕が企んだ陰謀の布石：大分裂戦争から10年以上の月日が流れた。

しかし、戦争の全てが公に知らしめられた訳ではない。

黒幕たる古代人の存在は勿論、ライフメーカー率いる『完全なる世界』のメンバーは流浪の傭兵部隊と発表。

現在、表向きは悠久の風所属の傭兵部隊として、旧メガロメセンブリーナ領の大陸にて勃発する小競り合いに介入している。

また、『破壊するもの』を打ち倒した七英雄の存在も、歴史の表舞台には上がらない。

知っているのはヘラス帝国の将校と、旧連合の生き残りのみ…ひっそりと語り継がれるに止まる。

それでは、世界から讃えられる英雄…『紅き翼』のメンバー達の現在はどうしているのか？

S i d e ジャック・ラカン

ヘラス帝国は戦勝国だけあって理不尽な暴動も起きず、至って平和なもの。



戦争が終わってすぐ、懐ホクホク状態の帝国から報酬は払われた。戦争開始時に結んだ契約は『紅き翼の監視と最悪の場合は始末する』……これぞざつと1,000万Dp。額だけ見れば、とんでもねえ額だ。

だがよ…Dpなんて、『旧連合』の国が健在の時に世界通貨として扱われてただけだ。だから復興中とはいえ、くそみそな状態ばかりの国が揃ってる新生連合の通貨に、わざわざ世界が合わせると思うか？

有り得んって！常識的に有り得ん！

今の時代、世界通貨はヘラス帝国のオーラムだ！そんなこんなで、気の利いた皇帝によってオーラムで払われた。まあ、もしDpのままだったらバレンヌ帝国に鞍替えしてたな。

何にしても金は確かに頂いた、が……自由に使える金は無い。

ぶつちやけ支払われた瞬間は『1,000万ピア！つと使うか？』なんて考えたが止めた。

10万オーラムで幾つか事業を起こしたが、鳴かず飛ばずでさつぱり。

今は一周して、コロツセオを一望出来る特等席にいる。そこからは大会の優勝者が表彰台の上の立ち、客から万雷の喝采を浴びているが見える。

ぼちぼちオレの出番か。

「よーし、よし。今回のツヴァイク・トーナメントも出場者諸君のおかげで大成功だ。

ほーれ、毎度恒例！テオドラ第3皇女の顔が彫られたありがたいメダル…5万オーラムだ！」

つまり今のオレは傭兵でありながら、大会をぶち上げるプロモーター様ってワケだ。

大会出場者の大半は奴隷闘士。残りは街の腕自慢やら武芸者、モグリの野郎共。

奴隷が準決勝まで勝ち残った場合は、国預かりの解放奴隷として召し上げられるのが決まってる。

だから闘士のモチベーションも、ケチな大会に出る時の比じゃない。まあ、末は兵士になるのが必然的に決まるが、デッド・オア・ライブで端金を掴まされる毎日を強制される奴隷よかマシだわな。

そんで優勝賞金の1割…5000オーラムは国が出してくれる。

オレは大会のアガリから幾らか…大体3から4万オーラムが懐に入る寸法だ。

足りない分は傭兵稼業でどうにかするか、別パターンで捻出するだ

けだ。

「さて、めでたくチャンピオンになった訳だが：50000オーラム払って、エキシビジョンマッチに挑むかい？」

「勿論だ！50000ぽっちでアンタの胸を借りれるなら安いモンだぜ。」

「イイ度胸だ。一時間後にエキシビジョン・マッチを執り行っぜ！」

足りない分は英雄のネームバリューで稼がせて貰っている。別にカツアゲをしてる訳じゃないから構ねえだろ？

なんにしても、オレはご機嫌にやってるぜ。

S i d e      ゼクト

空はゼクトの心情を表すように真っ黒の曇り空。しかも、世界でも最大級の活火山という土地特有の硫黄臭と、サウナのように蒸し暑い空間。

それだけでもウンザリするのに、此処に赴いた原因達がバチバチに睨み合っている。

言うまでもなく場の雰囲気は悪い。

それがゼクトにウンザリしろと促す。

「あのさ、ゲッコ族、サラマンダーも元を辿れば同種の祖を持つ者同士じゃないか。

それがどうしてごつも、いがみ合っただ？」

「この火ときゃげ共はいきなり乗り込んで来たと思っただら、俺らの石版を持ち去ってきゃざん（火山）に投げきよんだんだぎゃ！  
アレは1万金の商談ぎゃ纏まってたんだぎゃ！」

口角から泡を飛ばし、拳を石舞台に叩きつけてと…感情も露わに己の言い分を訴えるオオトカゲの亜人…ゲッコ族。

ゼクトに対して怒っている訳では無いのだが、喋る度にチラつく牙と迫力満点の主張が、ゼクトのストレスをプッシュする。

「……………はあ、じゃあ、サラマンダーの長さんの言い分を聞かせてくれ。」

「うむ。あの石版には存在してはならない邪法が記されており、我

らの父祖が熔岩地帯に封印した物だ。

しかしこのバカ共は、わざわざ熔岩を冷え固まらせて拾うと、麓の露天で売りさばこうとしてたのだ！

父祖の過失は子孫の我らが取り返さねばなるまい。

なればこそ、今度こそ手が届かない火山の中に投げ込んだのだ。」

「にゃ、にゃにおう！？きよの良い子ぶりっこの火ときやげめえええ！」

「それと私の名は『火ときやげ』などでは無い。  
ガルンガンという名が有る。」

ゲッコ族の様子に対して、落ち着いて淡々と語る火蜥蜴の亜人…壮年のサラマンダー。

蜥蜴というよりも竜寄りのタイプで、ゲッコ族よりも一回り大柄。

熔岩の熱さえも遮断する鱗は鮮やかな朱色。

尻尾もゴムのように柔軟性と、岩をも砕く破壊力を持つのはゲッコ族と同じだが…ビッシリと逆立った竜鱗は獲物の体をズタズタに引き裂く凶器。

当然、身体能力もサラマンダーに分がある。

だが、手を出さないように自制する為に組まれた腕が時々ピクピクと動いている。やはり、ハラワタが煮えくり返っている。

幸い沸点も高いようだが、達した時の状況を鎮めることになるのは自分…ゼクトは鬱になる。

「……双方の主張を聞くに、サラマンダーに明確な落ち度は無いね。今回はゲツコ族が悪いよ。」

「ごめんなさる……」

当事者同士の態度を見て、言い分を聞いての判断。常識的に考えて、当然の帰結。

納得がいかないゲツコ族の男だが、腕っ節で押し通そうにも無理がある。

体格も一回り大柄で昔ながらの生活を営むサラマンダー族に立ち向かうのは、ライトフェザー級の選手が全盛期のマイクタイソンに立ち向かうくらいに覚悟がいる。

加えて腕っ節だけの脳筋でもない。自在に火の術法を操るもんだから余計、勝ち目が無い。

重ねて述べるが納得はしていない。だが、実力差が自重させていた。

こんな具合に現在のゼクトは、戦後処理中にフラツと消えたライフ・メーカーに代わり…2代目ライフ・メーカーとして部下達に仕立て上げられ、体よく僻地に飛ばされて問題を解決したりと…パシラれている。

今日は南南西のコムルーン諸島まで出張。

昨日は北にある龍山山脈で、エンシェント・ドラゴン相手に取り引きと……なかなか扱き使われている。

だが、無理矢理に引き継がされたとはいえ立派な組織のドンに就任したのだ。

ちんちくりんなボデイで頑張っている。

なお、今日の仕事も本当ならアシスタントも傍に居るはずだが、今は不在。

厄介事の匂いを感じ取ると消える。

ついさっきまで一緒にいたのに、今日も逃げられていた。

「じゃあ、この問題は解決したって事で……」

「ちよ、ちよっと待つぎゃ！」

あの石版を拾うのに掛かった経費だけでも立派な屋敷が建てられるんだぎゃ！

仲間達とカンパしたぎゃ、骨折り損で終わったらオレらには圧倒的借金が残る！そしたら、この世の終わり！この身は破滅！

恨んでやる！！一族全員で枕元に立って睡眠不足にしてやるぎゃ！」

ふざけたアシスタントを見つけ出し、拳骨を落とそうと纏めに入っただけクトにゲッコ族が絶る。

盗つ人猛々しいとは、こういう事が…開き直りも加減というモノがある。

「あのさあ……」

「いや、待たれよゼクト殿。」

「ガルンガン？」

「貴様がどうなるかと知らんが、家族に罪は有るまい。サラマンダー族に伝わる、ちょっととした魔道具を渡そう。それを借金返済に充てるなり好きにしろ。今回は手を打て。」

「ええええ！？」

「おほ！」

サラマンダーの長から思いがけない提案が飛び出した。熔岩の中をザブザブと水浴びする感覚で歩き回り、ワイルドな生活を営む秘境の種族・サラマンダー族が所蔵する魔道具だ。

幸い封印の石版は彼らの忌み地とされる場所に放置されていた。だからこそ簡単に持ち帰れることが可能だった。逆を言えば、サラ



マンダーの集落には近寄るのも命懸け！

だがこれは僥倖。苦もなく希少な魔道具を手に入れることが出来る願っても無い幸運！

「（ゴネ得！ゴネ得！！ゴネ得ッツ！！

『ちよつとした』という前置きぎやあつたとしても、サラマンダー族のドえらい魔道具に変わりないわ！

石版の損失は、コイツの売上で補填するだぎや！（……………仕方無いぎや。ウチらは、もうそれで良いぎや。

だが、前金で半額頂戴してしまつてるんだぎやね！返そうにも、居場所が分きやらないんだぎや！」

頭の中で皮算用。内心はホクホクだが、表面上は渋々と…ゲッコ族の男も取り引きに応じた。

それにしてもこのゲッコ族、まさに銭ゲバである。

「分かつた分かつた…もうボクが探して、金を返すから良いよ。で、客の名前は何て言うんだい？」

「ん〜、確きや…『ウェイ・クビン』ときゃ名乗つてた気ぎやするぎや！

しかも包帯ぐるぐる巻きの根暗な男だったから、よく覚えとる。後は知らん。後始末は頼んだ。」

出し渋りはせずに情報をポンポン吐くと、岩がゴロゴロ転がる不自由な足場を風のように走り抜けて麓の港町へとゲッコ族は帰って行った。

「……解決したか。  
ならば私は集落に戻るとしよう。」

「待ってくれ。魔道具を提供してくれなかったら、今も話し合いが続いていた。  
けど大丈夫なのかい？歴史のある魔道具なんだろう？」

「なあに、たかが火の精霊の加護で熔岩の上も難なく進めるだけの『石船』だ。  
島から持ち出せば精霊との契約が切れて、ゴミになるだけだ。  
それに……『完全なる世界』には昔に受けた恩がある。  
困った時は声を掛ける…協力しよう。では、また会おう。」

別れの挨拶もそこそこに。  
サラマンダー族の長、ガルンガンはゼクトに見送られ、集落の在る溶岩地帯へと消えていった。

「僕もあんな頼れるオーラをいつか手に入れて……」

「やつふー！ゼクトさん終わりましたか？」

「……………フェイト。僕が頑張ってる時に油売って…どこをほつつき歩いてたんだ。このバカ！給料泥棒！」

「痛！叩かないで下さいよ。」

それより、現地人のスカウトに成功しましたよ。」

「バカ！このバカちゃんが！！！」

「痛、痛た！そんな怒らないで下さいよ〜」

不在だったふざけたアシスタントこそ、戦後最初の『人形』…プロジエクト・フェイトシリーズの初号機。ゼクトそっくりのフェイト君だ。

見分け方は、若干眠たそうな目をしてカジュアルな雰囲気を漂わしている方。

一言で言うと……………チャラッ気がある方がフェイト…それだけ。

真のライフ・メーカーが作っただけあって、スペックは高いが…発揮する方面を間違えてる感は否めない。

「ハアハア…クソ！お前なんか、再調整してやるからな。」

「まあまあ、そんな物騒なこと言わないでさ。  
それよりこの子だけど、先祖返りしちゃって親も手に負えないって聞いたんで、引き取っちゃいました。  
ほら、あの人が今日からキミのボスだよ。  
ささ、挨拶しちゃって！」

「初めまして、焰と言います。  
分からないことばかりですが、ガンバります！これからよろしくお願ひします。」

フェイトの後ろからおずおずと現れ、拙い口調で自己紹介する幼女。  
それをニマニマと見つめるフェイト。

「……………もう良いよ。なんか疲れた。  
一度本部に帰ってから、次の仕事に出掛ける。内容は隠者の搜索だ。」

「了解、了解。」

本部に帰ったら『また幼児を連れてきたんですか！？』って怒られちゃうなあ…なんて考えながら帰還。  
ゼクトに足りないモノはそう！！求心力的な意味合いではなく、抑え込む的な意味合いで圧倒的にカリスマ性が足りない。

Side アルビレオ・イマ

「ふもっふ！ふもっふ！ふもっ…ふう」

「うーん、イイ線イってるんですがちょっと違いますね。  
正しくは『ふんもっふ』です。」

「もっええわ。」

「「ありがとうございます」」

酒場の酔っ払い相手に繰り広げられた弾き語りとマジック、そして漫才。

ギターケースには気持ちばかりのオーラムが投げ込まれ、披露していたコンビは回収してからサッサと酒場を後にした。

「よおよお、あのボケ役。ちいっとアルビレオ・イマに似てなかったか？」

最前列で見ていた1人の酔っ払いがツレに話し掛ける。

「お前よオ！英雄サマがこんなみみっちいバーで営業なんてするかあ？

酒の飲みすぎだっつうの！！」

「おっかしいなあ。」

「うーん、見間違えたかあ？けどよオ……」

「へへ…それよりポーカーを打たねえか？」

「面白れえ、やってやるうじゃねえか！」

酒場の酔っ払い達は今日も平和だった。

さて、酒場を後にした2人組はと言えば……

「さてさて、今日の稼ぎはなかなかでしたね。

100オーラムも貰えたんですから！」

「ううう…納得いかない！どうしてアタシの弾き語りより、アンタとのマジックと漫才の方が受けるのよ！」

「まあまあまあ、美人な白薔薇さんの弾き語りで掴みはバツチリ！次に（客から見たらチラリも有る）インパクトたつぷりのマジックでドーンと引き込んだら、（ちよつとエツチい）漫才で終わり…完璧じゃないですか。」

「だからそれがムカつくのよ！」

「うーん、乙女の心は複雑ですねえ。」

ブンスカぶんぶんと文句を言ってるのが白薔薇という女性。

顔の造りも良く、旅の疲れなんて見当たらない美しさ…ぱつと見は深窓の令嬢か、小公女にしか見えないがとんだお転婆姫。

正体は、壺に封印されていた悪魔。

その悪魔っ娘をイジって楽しんでいる変態こそ大戦の英雄が1人…アルビレオ・イマその人。

式典の時にフードで顔をすっぽり覆い隠してでも、世界中に知れ渡るのを避けたかった理由は『世界中の面白いモノを自由に見れなくなる』……好奇心を満たすことの方が優先順位が上。アルビレオにとってのライフワークは暇つぶしだからだ。

だから、英雄になったのはホントたまたま偶然の積み重ね。

『ん？何やらオモシロそうないがしますね』 『うは！このナギ  
つて少年オモシロ！』 『最終決戦か、引き際を誤ったかなあ』  
『うわー、英雄？ナニソレ？自由が無くなるのは嫌だああ！』

本当だったら式典前に転移して逃げたかったが、バレンヌ帝国と完全なる世界…ノエルとライフ・メーカー…2人の化け物に追われるのが怖くてイヤイヤ出席。

こうしてテレビを通して式典を見た茶の間では『英雄なのに顔を隠すなんて…謙虚！憧れちゃうなあ』とほっこり。  
こんな感じのアイドル的な英雄に相成ったのである。

現在、効果は緩いが恒久的に効く幻術で顔を弄り、旅先の縁で見つけたパートナーと共にあっちへふらふら、こっちへふらふらと自由気ままな風来坊。

ある時は酒場で出会ったふとつちよ青髭の商人と意気投合。

一緒に遺跡に潜って、白薔薇を閉じ込めていた壺のアーティファクトを手に入れた。

因みに青髭の商人は金ぴかの宝箱型オルゴールを発見していた。

またある時は麻帆良の図書館島にこっそり蔵書を増やすというアホな真似をした結果、半殺しの目に遭って逃げ帰ってきたり、と……貯金なんて無いし、行き当たりばったりだがアルビレオ的にはハッピーな毎日を送ってる。



「白薔薇さん、白薔薇さん。」

「あゝ、？何よ？」

「さっきの酒場でオモシロそうなネタを仕入れたんです。なんでも、天下を荒らし回った大海賊の財宝が隠された洞窟ですが…イキますよね？」

「嫌よ。アンタがニヤけてる時は、大概が厄介事じゃないのよ。」

「そうですね…使いたく無かったのですが、正直じゃないなら仕方ありませんね。アデアット。」

「ず、ずるいわよ！？」

「ふむふむ、口では反対してても…本音は行ってみたいとありますねえ」

「ぐう…この悪魔め。」

「ハッハッハ！私が悪魔？これは愉快だ。」

なら、私が知ってるあの人は死神ですね。  
まあ、とりあえず行ってから考えましょう。大概の事はなんとか  
りますから。」

「はあ、もう好きにすれば。どっちみち私はアンタから離れられ  
ないんだから。」

明日は明日の風が吹くさ！今日も今日とてノープランを楽しむアル  
ビレオ・イマと振り回される使い魔の白薔薇だった。

Side ナギ・スプリングフィールド

「はあああ！」

飛び交う斬撃、魔法！！

「くそつたれが！これでも喰らえや『雷の斧』！！」

魔法の射手で弾幕を張り、一気に懐へ潜り込んでの雷の斧：大戦時  
にナギが好んで使っていた瞬殺コンボ。

並みの魔法使いでは頻繁に行き出来ない魔法だが、有り余る魔力を  
持ち、拳打に纏わすコントロールを修得したナギだからこそ可能な

コンボ。

相手は剣を引く途中、振り抜くまでには幾つかの行程が必要。腕を振りかぶり、ぶっ放した瞬間に『やった』と直感したが…

「甘い！」

予想に反して、伸ばしきった剣は専守のために引かれず…手首のスナップで操り、大剣の腹でナギの拳打は『パリィ』（弾き返し）された！！

「うお！？ヤバ…」

逸らされた己のストレート…ガードなんて間に合わない、瞬動による離脱の隙を与えてくれるほど柔な相手じゃないのは理解している。そのまま為す術なく相手の得物…大剣が鈍い光を発しながら、己の腹に吸い込まれるのをスローモーションで眺めて……其処でナギの意識は刈り取られた。

「おい、起きんか。いつまでも寝転けておるでない。」

「つつつつつつ!!」

大剣の一撃を見舞われた部分をピンポイントにつま先で蹴られた痛み、気絶していた無防備な顔にキンキンに冷やした水をぶっかけられたシヨックでナギは覚醒した。

「101戦50勝51敗……これが今のお前の記録だ。ナギよ。」

「何だよ……やっぱ負けたか……!」  
「しかもキレイに決められちゃった。」

「……それだけ腹から声を出しても平気な様子だから心配要らんな。」

ナギを叩き起こし、立ち去った者はアリカ・アナルキア・エンテオ  
フユシア。

「いや、流石に危なかった。」

「もしもあの時、とっさに身体が反応してなかったら沈んでたのは俺  
だった。」

ほら、いつまでも寝転がってる訳にもいかんだろ。手をとれ。」

「おう、ワリイな。」

未だに寝転がってるナギに手を差し伸べた存在こそ、先の闘いに於いてナギを沈めた男。

名はヴィクトール。

バレンヌ帝国当代皇帝レオンの長男にして、武芸百般に通じる猛者。もしもナギにジャック級のタフネスがあれば持ちこたえたが、詮無きこと。

今回でまた一方、先に行かれた事実は覆せない。

さて、大戦が終わってからの十年余り…ナギは何を見て、何を経験したのか。

まず、古代人との戦いで浮かび上がった疑問…『正義』について理解…解消する為にアリアドネーの門を叩き、毛嫌いしていた学門に入った。

其処である程度の社会的常識、人としての常識に目覚め…過去が無性に恥ずかしくなった。

正直…『サウザンド・マスター』が千の呪文の男ではなく、千の（雷の）呪文（を何発も撃てるバグキャラ）の男…として伝わっていたのが救いだっただ。

というより、常識的に考えて千も魔法は無かった。

まさに不幸中の幸いであった。

ともかくにも、ナギは遅れを取り戻すため幽鬼のように昼夜を問わず勉強に励み、たったの3年…速攻で卒業。

その後は『悠久の風』に所属して非戦闘員の保護と暴動鎮圧を主に受け持ち7年。

そこに至ってもナギは『正義』について明確な答えを得るに至らなかった。

ただ、取り組む疑問と求める答えが哲学的思想の先に横たわっている不確かなモノ故に決めあぐねていた。

そんな時、ウエスペルタティアで開かれた平和式典にてアリカ女王と再開。

そのままスカウトされる形で騎士団に入団。

同時期、アリカ女王は結婚した……政略結婚などではなく、ヴィクトールとの恋愛結婚だ。

ナギが10年もほったらかしにしていた間に、アリカ女王は幾度かバレンヌ帝国を訪れ、その時にヴィクトールが見初めたのが始まり。

初期はナギとの気持ちに揺れていたアリカ女王も、ヴィクトールからの熱烈なラブコールに絆ほたされて決意……結果、ヴィクトールはバレンヌ帝国の市民権を失うことを厭わず、アリカ女王と国民もやんややんやと歓迎して円満に終了。

とはいえ…アリカ女王は政治に関わることは無い。  
国の象徴として友好関係を結んだり、やはり支援したりと世界を飛び回っている。  
その為の騎士団だ。

必然的にヴィクトールも婿王だが、騎士団の長という立場に落ち着いている。

そして、己等の腕が錆び付かないように模擬戦を開いて……今のナギに追いつく訳だ。

「フーかよ、あそこで流し斬りは無いだろ。  
下手すりゃ、身体が真っ二つになるじゃねえか！」

「スマンな。気が付いたら、日頃から使い込んでた技を身体が勝手に放っていた。いや、模擬戦用に刃を潰した剣で本当に良かった。」

「クソ…あゝ、あばらがガンガン痛いぜ。ホントに集気法なんて効くのかよ。こんなだったら戦いの歌でも変わらないじゃねえか。」

「ナギは分かかってないな。  
戦いの歌は身体強化のみ。集気法は緩い身体強化と身体の再生だ。」

「へいへい、私の練度が足りやせんでした。どうも悪うござんした。」

現在のナギはアリカ女王、ヴィクトール王付きの近衛騎士団に所属する1人の団員だ。

アリカ女王とは気心が知れた友人であり、ヴィクトールにしても学級委員と愚連隊が仲良く連むような間柄。

毎日、易々と気を抜けるような瞬間も無く引き絞られているがそれも心地良い。

最近、故郷のウェールズを飛び出してから手紙の一つもいれなかった養父…スタンを気に掛けることも多くなった。

もしかして口酸っぱく『正義』を説き続けていたのは……今は、気持ちの整理も出来ている。

今度の正月辺りに顔でも出しに行くかと考えて、ヴィクトールと並んでアリカの下へ歩き出した。

ナギ・スプリングフィールド。6歳にして故郷を飛び出して以来、自ら戦いを望み…修羅道の入口に進み掛けるも良縁の巡り合わせと奇妙な体験、冒険を経て人として成長し、抜け出した英雄。

稀代の悪たれ坊主も今は、日常の尊さを噛みしめつつ充実した日々を送っている。



S a ・ G a 番外編：英雄達 紅き翼 の現在（後書き）

『ヴィクトール』

ロマサガ2…フラグの人

スタート時にプレイするレオン帝の長男。  
武に秀でており、才能は2世代くらい先取りしてるくらい凄い人。  
だからこそイベントという名の生贄に選ばれました。

最も信頼する技は『流し斬り』…相手の腕力を下げる追加効果を発  
揮するナイスな技。

因みに内部データに記されてるパラメータは、チート。

腕力は脅威の27、残りの魔力や素早さも全て25……ハンパねえ。

他のキャラを見ても最高が25

すごいよ！流石は金ぴかのお兄さんンンン！！

けど、死ななきゃストーリーは進まない。

幾多のストーリーを経ても死亡。バグを使っても死に、チートを駆  
使して切り抜けたとしても…唯の一度も生き残ることは出来ない。  
身体はきつとフラグで出来ていた。

【アンリミテッド・フラグ・ワークス】（フラグ乙）

『白薔薇』

サガフロのサブキャラ

正式名称は白薔薇姫。

とある主人公に深く関わる女性であり、最初から最後まで良い人。その活躍っぷりで作者からは、明らかに主人公と同格かヒロインにしか見えない。

つかスクエニ：サガフロのリメイク出してくれんかなあ。プレステは無事に点くけど、メモリーカードが無いんだよなあ。

とにかく、S a ・ G a シリーズには珍しい心根から優しい良い人。

『サラマンダー』

ロマサガ2

火山の中で生き、何があっても故郷の火山から離れるつもりは無いヒトカゲ。

伝わりやすいイメージはリオレウスを竜人にした感じで、名前の由来は世界各国の火山。

火属性は無効にする特性から重宝される。剛毅で一本筋の通った無骨な武人肌という理由で、ロマサガ2に登場する獣人でも屈指の人氣を誇るんじゃないかなあ〜と作者は思います。

『ゲツコ族』

ロマサガ1、ミンサガ

集団で拉致されて売りさばかれそうになったり、ワケの分からん古文書を一万金でぼったくってきたり、人間の友達が欲しくてうるうるしたり、（か）行が（きゃ）行になったりと…良くも悪くも可愛い奴ら。

仲間に出来るゲツコ族の人はやたらとイイ声で喋ります…トカゲの分際で！

『ツヴァイク・トーナメント』

ロマサガ3…イベント

ツヴァイクにて開催される武闘会。  
出場者はゴブリンス、ドラゴンス、魔法使いズ、領主お抱えの騎士団員やら…よく分からない出場者。  
優勝者には領主のオッサンの顔が彫られたありがたいメダルが貰える

S a ・ G a 8 3 (前書き)

いやはや…もうそろそろ100万に届いたかな？と、何ヶ月振りにアクセスを見たら…120万アクセスでござりましたでござるの巻。

ヒヤッホー！と嬉しい反面、 時期を逸してしまいました(´・`・`  
)

何はともあれめでたいですね！ありがとうございます(\*^ ^\*)  
この小説の3割はS a ・ G a への愛、4割はネギま！…残りは読者  
様で構成されております。

P S ・ S a ・ G a 小説がN O S が増えたら良いなあ。

エヴァが珍しく1人で用意した晩メシをちやぶ台囲んで家族団欒、おいしく味わいながら…茶の間の一角に鎮座しているブラウン管・テレビの電源を入れる。

『ゴーマンナサイヨ、ゴーマンナサイヨー!』

「んん!?!」

たった今、映されたのはバラエティー、ドラマ、勿論サスペンスでもなく唯のCM。

内容は筋骨逞しい外人が、飛脚のようにやかんを担ぎながら人波を掻き分け走りつづける……最後にインスタント・ラーメンの類だと判明するユニークなCM。

「……ノエル、急に箸を茶碗に置いたままぼんやりテレビを眺めてるけど……私の料理は口に合わなかったか?」

隣に座っているエヴァは不安顔を隠せず、俺に尋ねてきた。

「今、CM見てるから……」

「そ、そうか。すまなかった。」

集中している所に割り込まれ、おざなりに答えてしまった。

CMが終わってから悪いと思い直し、再び箸を持ってから気付いた。

「……………（もきゅもきゅ、もきゅもきゅ）」

明日菜から批判めいた眼差しが送られているのを…うん、テレビに集中してたから、さっぱり気付かなかった。

これはフォローしろって意味か？

「うん、エヴァ。サンマも新鮮でハラワタも食えるくらい美味しいわ〜！

肉汁も野菜ベースのスープにちよっぴりゴマ油が仕事してて美味いわ〜！」

「…………ノエルってさ、女心を欠片も理解してないよね。」

「うっ……………」

「明日菜、人の悪口を言うな。」

「けど、エヴァは…」

「私とノエルの仲は、これくらいで揺れるような浅いモノじゃない。」

「…分かった。」

「……………」

なんか…晩メシの時間を台無しにして、色々とスイマセンでした。

さっきの失態を返上するべく、ノエルはせつせと食器洗いで。ちやつちやか皿を洗うノエルの背後には、キレイに洗われた食器をせつせと棚に戻す作業をしているエヴァ。

なお、台所と茶の間は典型的な市営団地の構造上、普通のアパートよりは広い。しかし、一本道で繋がっており、襖を開けっ放しにするとほぼ合体する状態。

「それで…日頃は行儀にうるさいノエルが、どうしてあんな真似をしたんだ？」

「初めて見るCMだったから…ちいっと、ばかし見とれとった。次からはこんな真似はせんよ。」

「ふ〜ん…まあ、それくらいで私は怒りはせんよ。ただ、見ていて不安になるのだけは覚えておいてくれ。」

「…ホント、ごめんな？」

ノエルは最近…ふとした拍子にぼんやりとする事が増えた。

その時に考えている事は決まって『あ！そういえば、もうじき2010年になっちまうんだよな』ということ。

夕食にテレビを点けた際、偶然に流れていたCMもノエルの記憶の底に沈んだ幾千、幾万のピースの中の1つ。

在りし日の『昔』を思い出させるには十分過ぎる力を持っていた。

そう。最近、悩みという訳では無いが『昔の未来に追い付き、追い越す。』という現象に何か、こう…感慨深いモノを感じてしまうようになっていった。

全く、ノエルは贅沢な人間である。



そしてざっと思い返せば後5、6年でテロが起きて…戦争が起きて…その気になれば未来変革も可能かも知れないが、ひよっとしたら起きない可能性も有る。

知識も有るし、力も持っているがどうにも出来ない現状も、なんだか酷くもどかしく感じる。

あのCMの外国人も…まあ、こんなことを考えてもキリが無い。

「なあ、エヴァ…」

「ん？どうしたんだ？」

振り返ることなく話しかける。

「もしも…もしもの話しだぞ？」

例えば、今のエヴァが未来から昔に戻ったなら…自身とは何の関係も無いけど、きつと来るであろう災厄を『歴史として』既に知っているだろ？」

「そりゃそうだろ。」

「その時…エヴァだったら災厄に介入し、より良い未来にねじ曲げるか？」

それともほったらかしにして、利益が出るように立ち回るか？」

暫しの沈黙。台所には水の流れる音と食器が触れ合った時の乾いた音だけが響き…エヴァは答える。

「災厄もそうだが、金儲けなんぞ知ったことか。私は何のアクションも起こさんよ。」

「ほほう、して…その心は？」

「考えてみる。『今』の私の知っていた歴史が、最善だったかも知れないという可能性を考慮すると、どうも介入する気にはなれんよ。」

「へえ〜……エヴァは流石に賢いなあ。座布団三枚あげたい気分だわ。」

「ほい、最後の一枚ツス。お願い致します姫。」

「うむ、皿洗い…真に大儀であった。」

さて、褒美に炎のチャレンジャーを見る権利を与えよう。」

こんな感じで大概の事はすぐに仲直りする2人。

「ヒヤッハー！これが出来たら百万円だァァ！」

ノエルはノエルでエヴァの機嫌を直せたのも嬉しいが、謎かけにより得た答えも大きかった。

エヴァに面と向かって『自分は未来人なんだ！』と言えないから機転を利かし、ネタっぽく聞いたのだが……その答えはある種の真理を射ていた。

それにより、完全……とはいかないものの、抱えていたモヤモヤをだいぶスツキリさせる事が出来た。

そして『この番組は見逃すわけにはいかない』と、すぐさま茶の間へ行くノエル。

（それに、だ……へたに弄り回すと、ノエルに会えた歴史も変わるかも知れんだろう？）

エヴァはエヴァで……流石に恥ずかしくて言えなかった言葉を心の中にしまい込んで、煎餅とお茶を携えてノエルと仲良く2人っきりのテレビを楽しむ。

「ちよつと胡座を掻け。」

「え〜？もう面倒臭いからヤダ。」

「この薄情者。せつかく丸く収まった話しを蒸し返されたいのか？」

「ハイハイ、胡座掻きますよ。どこらせつと…どつぞ。」

「よしよし！ガキの身体もデメリットばかりでは無いな。」

明日菜がチャチャゼロが同じ空間にいない時に限り…昼間の有閑タイムと夜、この僅かな時間だけ、エヴァはデレる。

今のように特等席に座ったり、髪を梳かせたりと…遠慮はしない。

「あ、良いこと考えた。」

今年の麻帆良祭の出し物は、イライラ棒にせん？」

「え〜、今年もUMC（ウルティ麻帆良）で十分。」

ていうか、儲けで貰えるアガリを考えたら、それしか無いでしょ？。

「

「……大学の奴らが出してくれんかなあ。」

俺も一回くらいイライラ棒やってみてエエ。」

「このかつち、せつちゃん、おはよー！」

「まあ、今日も1日よろしく頼んまあな。」

「はい、明日菜と茶々もおはようさん。」

ノエルのぶっきらぼう事件から一晩空けた次の日…いつも通り、麻帆良中央小学校に登校した2人。  
さっそく同じクラスの近衛ツインズを見つけると寄っていく。

「ねえね、聞いてよ！」

昨日さ、エヴァが一生懸命料理作ったのにウチの家長ったら…食べ  
てすぐにテレビ付けたんだよ！」

「え？（明日菜のいつてる意味がさっぱり分かんないよ。）  
このちゃんは、分かった？」

言いたい事は正しく伝えよう。  
残念ながら真面目…少し融通の利かない性分の刹那には、大事な所  
だけでなく半分以上が伝わらなかった。

「うん…つまり、ノエルさんがよそ事してエヴァさんが傷ついたって事やるか？」

「そうそう！しかもね！エヴァが心配になって話し掛けたら『テレビ見とるだろ！』って相手にしないのよ！コレって旦那様としてどう思う！？」

興奮気味の明日菜の口は止まらない。

木之香だけでも通じたのが分かると、息つく暇なく喋り続ける。

明日菜、チャチャゼロを送り出したノエル家。

午前中はサッサと家事を終わらせるに限ると、手分けして作業中。分身は分身で、マンション周りの清掃。

「は、はつくしよ〜い！！うい〜、くそつたねが。」

掃除機をかけていたノエルが突然、くしゃみ！

喻え、風が吹き荒ぶ真冬のロンギット海に投げ出されても風邪をひかなかった…健康が一番の取り柄だと胸を張るノエルには大変珍しい事だ。

「オ〜イ！昨日の風呂上がりも、パンツ一丁のままうろろ、秋口なのに寝る時もタオルケットの一枚も被らんかったからだろ。自業自得だな。」

エヴァはといえば、洗面所や風呂場を掃除すると共にへばりついた長髪をティッシュで取り除きながら、声を上げる。

「うーん、そうかな？もしかして誰か噂してんじゃね？」

「ばーか！掃除機が終わったら、トイレ掃除だからな。」

「へ〜い……」

渦中の人物であるノエルの感は当たっているが、小学校にいないからどうしようも無い。

風評被害はこうして広がっていくのだ。

そして学校では……

朝のホームルームが終わってから設定されている僅かな自由時間。

女3人寄れば姦しい…それは小学校低学年でも変わりない。  
あれだけ話しをしていたのに、再び同じ話題で会話を始めていた。  
おかげで、ノエルの株はとんでもないスピードで、暴落していた。

「…でさ、旦那様にするならどんな人がイイ？」

落とすところまで落とさなかった所で、チビっ子版ガールズトークの定番：『将来、どんな人と結婚したい？』が、明日菜の口から飛び出した。

「そつやなあ。ノエルさんみたいなヒトは、旦那さんとして見られへんわあ〜。」

せつちゃんはどう思っとるん？」

「ん〜、私は別に可もなく不可もなくってカンジかな。」

「いやいや、ノエルさんって稽古してる時とかメツチャ怖い所あるし…やっぱ旦那さんにするなら、お父様みたいな人がええなあ。」

「お父さんかあ…」

この年で結婚後の生活を逞しく妄想する木之香。そして理想とする男性像は、最も身近な異性…実の父である詠春さん。



その理由はまず第一に、文武両道。次に娘だからこそ辛口に評価しても頼れる存在。トドメは優しく、渋くってカッコ良くて……母・桜が毎日のように甘えているのを幼心に羨ましく思ったからだ。しかし、そんな神スペックな男は野生に存在しない。早くも夢見るユメコ…木之香結婚へのイエローランプが点滅している。

対する刹那はリアリスト…背伸びしたガキンチョ。『きっと世の中にあんな人、いないだろうなあ』と、ぼんやりと理解している。これも身近な異性…近衛右衛門の墮落っぷりを幼少から見させられてきたから……やはり、同じ環境で育った姉妹と言えども違いが現れる。

「けどさ、このちゃん。

ウチらのお父さんも、ナイター中継見てる時は『ごろん』って寝転がってるし、たまにはそんな時もあるよ？

それにノエルさんが叱る時は、このちゃんがふざけたり、手を抜いてる時じゃん。そんな事言っちゃダメ！」

「せつちゃんってば、まゝたお姉ちゃん風吹かせて…いけずう。」

「はあ、アンタら2人は仲イイねえ〜」

『キーンコーンカーンコーン…』

「ハイ、時間だ。席に着くんだよ。」

担任の退職間近だが、経験に裏打ちされた指導力を持つ初老の黒人男性：ランボルギーニが、慌ただしくしている生徒にスイッチの切り替えを促しながら入室。

「あ、先生やわ。また次の放課に話ししよな。」

「（うーん…もしかして、昨日のノエルみたいな事をする男の人って珍しく無いのかな？）」

「で、明日菜…気になってたことは解決したか？」

「チャ…茶々。今は放つといて…」

「へっへっへっへっへー！」

明日菜も明日菜で朝からモヤモヤしていたが若干スッキリ。とにかく、授業に集中することに決めた。

「（ふ）む…学生の頃は分からなかったけど、こうして教師の視点から見るとランボルギーニ先生の凄さが分かるなあ。」

目立たないように後ろの戸から入室したタカミチは、ランボルギーニの危なげない進行を見て嘆息する。

今は副担任に甘んじているが、いつかは担任として生徒の成長に携わりたいと考えている彼は、たまに教壇に立たせて貰った日はアドバイスを受けたりと…日々、これ勉強の毎日を送っている。教師になるのはゴールではない。只のスタートラインであり、やっとな歩き始めたばかりだからだ。

何はともあれ、馬肥ゆる秋…麻帆良は今日も平和である。

『カミサマの悪戯で飛ばされた転生者は歴史を辿り、辿り着いた通  
過点は過去の『今』…その時、彼らは何を考えるのか……』

よくある転生、不老長寿テンプレートは作者のSSに限らず、数多  
く見受けられます。

そして、正義感溢れる主人公も数多く存在するのに、葛藤する彼ら  
はいません。

きつと『展開としてのテンポ』を優先して、描写はされないのだと  
邪推します。

さて…皆さんが我が作品の主人公『ノエル』のような力と知識…弱  
者の言い訳が出来ない、力の責任を負って…天災でなく人災が訪れ  
たらどうしますか？

世界改変に乗り出しますか？関係無いと放っておきますか？

それとも株や戦争…喻え、犠牲になる者が溢れようと、己に利益  
が出るならそれで良し割り切り、上手く立ち回りますか？

ちょっと哲学者みたいことをほざいてしまいましたね。

とにもかくにも、今回のテーマはいつか書きたかった内容でした。

因みに、冒頭のCMに出ていた外国人は分かるかなあ？

きつと20代以上の方ならば、なんとなく『あゝ、この人か。うん  
うん』となる筈の人物です。

小学生だった作者も成人しましたが、その筋では今でもこの人が一番好きです。

S a ・ G a 8 4 (前書き)

前回の『ゴメンナサイヨ』というCMネタの外人は、アンディ・フグさんでした。

麻帆良に来た日、適当な柱に立たせて刻んだ線と比べたら、バッチりだった。

随分と胡散臭かったが、ライフ・メーカーの言った通りに明日菜の身体は成長を始めた。

それからも大した病気や怪我、襲撃にも見舞われず、のんびりと過ごし、時は流れて…2002年。

明日菜とチャチャゼロは小学校を卒業。近衛右衛門の都合で私立の女子中等部へ進学。

「ふう…なんだか部屋が広くなったな。」

「そりゃ子供が消えたらこんなもんだろ。

ンまあ…静かになってまったわな。」

ぽかぽか日が射し込み、温かな板間の上をゴロゴロと寝転び、会話をする。

明日菜は進学と同時に2人は家を出て、学校がこしらえた女子寮に入寮した。

だから最も身近なボディガード役のチャチャゼロも付いていった。

まあ…長ったらしく語ったが、要するに家から賑わいが消えたわけだ。

そして今時、自前で寮まで構える麻帆良の女子中等部。

表向きは『親元から離れ、心身ともに自立を促し、集団生活を営むことで自律と思いやりの心を育む』という立派な建て前を掲げている。

結構、その取り組みは大変結構だ。

だが、その実態は成長目覚ましい鮮度ピチピチ、上質な素材である生徒達を手元に集め、管理する為の環境だ。

そして突っ込んだ話しをすると…魔法への適性を顕現してしまったチビ達を預かり、ゆっくりと性分を見極め、それを御することが可能になるように育てるか…

それとも普通に生きていくだけなら、全くムダな魔法の適性を消去魔法を施し、適性を消し去るかを選別するというおっかない面も併せ持っている。

従って…旧世界でも有数のアウトゾーンたる麻帆良でも、俺達バレンヌのスタッフが介入する以前から地元の魔法使いは警備に力を



入れていた。

具体的には、関西出身の近衛右衛門が改良した『ネズミ取り』が仕掛けられていたり…堅固な警備を敷いてある。

だから『安全』という面だけを見れば、裏切り者でも湧かない限り、とんでもない化け物でも現れない限りは心配無用だとも理解している。

「はあ…やっぱり心配だよ〜」

「んな事言ったってしゃあ無いだろ…ゴロゴロすんなくて。

つかさ、やること無いしヒマだから魔法球ん中で体、動かさん？」

「……だな。私も改良した術法やら開発したスキルの確認もしたいしな。」

「お〜！！ちやつかり器用なことしとっただな。

けど俺もパワーアップしたんだべ？もうね、すんごいよ？それくらいパワーアップしてるんさ〜」

「ほう、デカイ口を叩いてくれるじゃないか。では、手合わせ願おうか。」

ノエルが零した『パワーアップ』…幾つかのテクニクに当たりが付いているエヴァは、強気な笑みとセリフで挑発する。

「…お互い手加減無用のガチンコだ。そこんとこ誤解するなよ？」

対するノエルは、エヴァが隠し持つカードがさっぱり分からない。だからこそ、プライドが高い彼女の心をくすぐるような前置きを発し、余力が残っているうちに使わせようと揺さぶりをかけた。

「フ…私だって初な『ねんね』じゃないんだ。それくらいは理解してる。」

それより貴様こそ、うっかりリヴァイヴァが切れて死なないようにしろよ？」

「上等…エヴァこそ命の貯蔵は十分なんだろうな？開始早々に決着が着いて、拍子抜けさせてくれるなよ？」

「クツクツク…そんなことは、闘えば分かるさ。  
さあ、私の渴きを消してくれ！」

長年、人に混じり穏やかに暮らすため、抑圧してきた『真祖の吸血鬼』としての性が露わになるのを感じながら、エヴァは高らかにノエルに言い放った。

それは幼く、姿形からは脅威を感じさせないが、まるで一流の舞台女優を前にしたようで…もしその場に尋常の者が居合わせたなら、一瞬にして心奪われてしまうほどに可憐で、艶やかなオーラに引きつけられ、体が無意識に平伏す…そんな支配者としてのカリスマを

発している。

それほどの強烈なオーラを一身に浴びるノエルは、黙りこくったまままでピクリとも動かず、ジッとエヴァの瞳を見つめていた。

「（お？流石のノエルも今度こそ私の魅力にコロリと来たか？）私の目を見つめる…」

「エ、エヴァ〜（、、）」

苦節300年。会心のカリスマ（厨二）と同時に魅了の魔眼をぶつけることにエヴァは成功した。

「（この悩殺コンボは、レジスト出来まい。もはやコイツの心は私のモノだ！）」

修行だとか手合わせの流れなんか地平の彼方に吹き飛び、これからの生活を夢想してニマニマするエヴァだが、現実はそう甘くは無い。

「……………なんか飽きた。」

「は？え！？ちよ、何を…言ってるんだ？」

「『さあ、私の渴きを消してくれ！』…プププ、何だソレWWW  
こっぴどかしいセリフを大真面目にWWW」

「ちよ、ちよつと待て。せつかく私がノってたのに、そんなこと言  
ったら身も蓋も無いじゃないか。」

「似合わんモンは似合わないつつうの。  
エヴァはカツコイイ系じゃなくて、カワイイ系…頑張っても小悪魔  
(笑) だわな。」

真祖なんてゴツツイ肩書き捨てて、愛されガールにしろってWWW」

「もういい…そこまでだ。」

それ以上は、私のハートがズタズタになる。それでも威厳を醸し出  
すのに必死なんだ！」

「今更、威厳とかWWWWWW」

「ぐきぎぎ…（コンニャロウめ、『マリオット』で恥ずかしポーズをさせて憤死させてやる…!）」

一方、件の麻帆良女子中等部では……

「いや〜、小学校から6年…中学でも4人揃って同じクラスって、なんかええなあ〜。」

木之香は、ざわざわと騒がしいクラスメイトを眺めつつ、今年も誰一人欠ける事無く過ごせる喜びを感じている。

「ホントね。（まあ、あのノエルやエヴァがこんな事まで口出しするワケ無いから、きつと近衛右衛門さんがテコ入れしたんだと思うけどね…）」

明日菜の直感はほぼ当たっていた。  
今年度は異常なまでの当たり年で、魔術協会もクラス分け以前の段階である『通例通り女子寮に住まわせる人間を選抜する』所から、かなり難儀させられた。

そこに加えて『魔法世界最古の王国にして初めての永世中立国の女王』…明日菜の存在によって問題はより複雑、難解になった。

だから『リスクは分散させるべきだ！！昼間からも大橋に検問所を設けるべきだ』声を荒らげる者も多かった。

こんな感じでリスク管理を主な議題に『あくでもない、こゝでもない』と協会の派閥を問わず、マジで徹夜に続く徹夜で議論。

まあ、一歩間違つて彼女の身に何か有つた日には……物理的に自分達のクビが飛ばされる恐れが有るのだから、過剰なまでに神経を尖らせる羽目になるのも当然っちゃ当然の成り行きだった。

そうしてアイデアが三周ぐらい回り回つて、今の状態……例年通りの方法に加えて、昼間から広い校内の清掃や、諸々の事務作業をする大多数の『オツサン、オバサン』に紛れて哨戒している魔法使いの数を大幅に増員、詠春も配置する徹底振りで足元の守りを固めてやり過ぎすしか有るまいと決着。

だから、決して『孫娘と仲イイから一緒に良いや〜』なんて安直な考えで、近衛右衛門がテコ入れした訳では無い。

「それにしても随分とバラエティー豊かな面子が揃ったモノですね。」

「バーカ！麻帆良だから普通だろ？刹那はもうちつと面白エことが言えねえのか？そんな風じゃ、クラスの奴らに喰われちまうぜ？」

「そこまで言わなくても…流石に酷過ぎるよ。」

刹那が新たな話題を降ったが、チャチャゼロに速攻で終了させられた。

だが、聞けば明日菜達が所属するA組からS組までの24クラス総勢で737名らしい。

そして明日菜達4人組が、これから卒業まで過ごすクラスメイトは取り分けキャラクターというか、個性的な面々なのかも知れない…

……

頭にお団子ヘアという中華娘。

褐色、長身、黒髪の…クールな雰囲気から年上のように感じる…女。うん、女の子ではなく女としか言いようが無い。

糸目で『じざる、じざる』言いながら飄々と歩いてる娘。

そしてネタかと疑いたくなる、ぐるぐる巻き眼鏡を掛けて人の輪から離れ、ポツンとしている娘。

目許まで隠すほどの前髪はつつんヘアで、本を抱える少女。

極めつけは『お前らホントは小学校低学年だろ！』と突っ込みたくなる要素を、これでもかと兼ね備えた双子…他にも沢山…挙げれ

ばキリが無い。

よくもまあ、これほど珍問屋のようなメンバーが集まったものだと、刹那にいたっては、感慨すら覚えるほどの光景。

「けどな、せつちゃんはキャラ立つとるから大丈夫やよ?」

「……………え?何言ってるの。このちゃん。」

「まあ、そう言われりゃ刹那はキャラを確立してるわね。」

「明日菜まで何言ってるん?ウチは普通!全然ノーマルだよ!」

自分は至って普通の存在だと考えている刹那は、2人の不意打ちにわたわたと慌てて否定するが……

「刹那よオ……、そいつは大事に抱えてる木刀をどうにかしてから  
言いやがれ。」

「そんなあ~~~~~」



チャチャゼロは刹那の肩に手を置き、皮肉たつぷりにトドメを刺し……刹那の悲哀が込められた嘆きが上がった。

「龍宮 真名。実家は、学園都市内にある「龍宮神社」。  
もし御利益が欲しければ、沢山のお賽銭を入れから参拝して欲しい。  
あと……私はよく間違われるが、みんなと同じ年だから……気軽に声を掛けて欲しい。」

パチパチパチパチ。

ホームルーム終了後……担任教師・高畑タカミチの計らいで、まずは自己紹介コーナーが始まっている。

「それじゃあ次、名簿番号19番……」

「ハイ、私の名前は超 鈴音だよ。」

パツと見はチャイナ娘だけど、そんなことは無い。だけど「超包子」チャオパオスって言う屋台で、肉まんとか売ってるから食べに来て欲しいネ！  
それじゃ、3年間仲良くして欲しいヨ！」

パチパチパチパチ

「（超 鈴音、ね…）」

それぞれの自己紹介を聞きながら進行するタカミチは考える。

『超 鈴音という娘の行動、発言の一挙一動に細心の注意を払って欲しい。』

何しろどれだけ調べ上げてもどこで生まれ、どこから来て、何を考え、隠しているのか…過去はおろか、人物像すら掴めておらん。

アスナ姫とは正反対の意味で、くれぐれも…監視の目を曇らすで無いぞ。』

今日の朝、何事かと呼び出されて…いつも余裕を崩さない近衛右衛門から、険しい顔で伝えられていたからだ。

「（彼女が自発的に語ったようにまずは屋台を開いた。

そこから武術研究会に入会、何処からか巨額の資金を入手。

最新の活動では、大学の工学部に出入り…件の資金を投入。ロボッ

トを開発している、か………」

狙いは世界樹か？それともアスナ姫か？」

そして、中学生の枠を大きく逸脱した能力についても近衛右衛門はタカミチに伝えていた。

何しろ自分自身が旧連合が行った実験で誕生した存在だと、タカミチは理解している。

その事から約20年前、大戦時に使用された急拵えの技術で自分を作り出せた…そこから超鈴音の正体は人造生命じゃないかと、深読みまでしている。

何しろ、このタイミングで現れた彼女の過去は一切合切が不明なのだ。

この子がより高性能化された存在だと仮定しても、何ら不自然な点はない。

「（とにかく、この子は要注意人物だな。俺の考えが杞憂なら良いのだが……………」

そんな担任教師の思いを余所にスムーズに進行、終了。その日は午前中だけという事もあり、そこで解散した。

こうして生徒、教師に限らず全ての関係者にとって前途多難な中学校生活は始まったのである。

S a ・ G a 8 4 (後書き)

私の拙作のエヴァは、原作と比べたらかなりのほほんとした存在です。

別に600年間、殺し合いを続けてきたワケじゃないですし、30年ぐらいは普通に穏やかに暮らしてましたからね。

ぶっちゃけ、カリスマなんて期待してはいけません。頑張ってもカリスマ(笑)ですよ？

そしてキング・クリムゾンで原作期の一年前に突入……主に木之香などのキャラクターが使う方言や、口調が難しいツスわ。

展開よりも、それが頭を悩ます……

はあ、三河弁なら名古屋弁のキャラクターが登場してたらだいぶ楽なのに……

麻帆良学園の名物といえは何か？

世界樹……麻帆良学園都市の市民にとっては日常風景の一部。  
東京タワー的な扱いだ、場所によっては葉っぱが鬱陶しかったり  
日照を左右するため嫌われ者でもある。

図書館島……図書館？いいえ、隠れん坊島の間違いです。  
ぶっちゃけ、蔵書が多すぎて管理責任者の司書長でも目的の一冊を  
探すのに苦労する施設。

だから普通の市民にとっては馴染みが無く……毛だらけの地底人を  
見たと噂される始末で、最近は大カップルが肝試しを目的に訪れる  
プチ・ホラースポット。  
まあ名物っちゃん名物。別に無かったとしても、大丈夫なレベル。

そして正直に打ち明けるなら、麻帆良の人間にとって愛され、必要  
とされ……本当の名物とされるモノは別に有る！

毎年6月！！いよいよ暑くなり、夏が始まる季節に市内全体を巻き  
込み開催される一大行事！

天下の麻帆良祭だ！！

陽気でお祭り気質……ぶつちゃけ、ちよつと頭がアカン人達が揃う麻帆良。

そして企業にとっては商品、サービスを内外に広く認識してもらい、デツカく稼ぐ事も十分狙える機会でもある。

だから市民に限らず、企業にとっても……たかが学園祭と軽んじる人は存在せず、この祭りは麻帆良に無くてはならないイベントだと認識される真の名物だ。

最近……部活、ストリートを問わず厳密なルールの下で競い合うチビっ子格闘大会と、金網に囲まれた広いリングで闘う大人版武闘会の2部構成で、ノエルが近衛右衛門に持ち掛けて始まった『UMC』。

基準は不明だが学内で選抜されたバンドが共演する『まほロック』……など、従来のような生徒が自由な商品、サービスを決めて、客が楽しむというレベルの学園祭では無くなっている。

むしろ、古き良き学生の出店クオリティから昇華され、『普通に店出せば?』というクオリティにまでなっている。

ふむ、どうしてこうなった？近衛右衛門にもさっぱり分からない…  
だが、そこがイイ！！！！

とにもかくにも、今年も麻帆良祭が始まった。

当然、明日菜達のクラスも『絆を深める』的なテーマで参加している。

1 - A の出し物は教室の中で開かれている『The・かふえ〜』。

その過程ではチャイナ服を着て、超の出してる屋台を丸々パクツちまおうという不屈きな案も飛び出したが、いいんちよ…雪広あやか  
の常識的抵抗で断念。

代わりに雪広家が屋敷で雇っているメイドの服を借りて、『The・かふえ〜』と相成ったのである。

「あははは、見てよ！これは笑いが止まらないにや」

一斗缶の中にドツチャリ詰まった売り上げを覗き込み、打ち上げのことを夢想して下品に笑う少女…明石裕奈。

「ホントだね。けど、お客さんが見てるから止めようね？」

「ぶーぶー！」

そんな現金な裕奈をやりわりとたしなめ、仕事に復帰するように促す少女の名は、大河内アキラ。

お転婆で、やんちゃな面子が大部分を占める2 - Aに於ける穩健派。

口数少なく、影から支える気質から数少ない心の清涼剤担当の希少種であり、本人は恥ずかしがっているが『メイド』が最も似合うと称された生徒の1人。

そんな彼女達の活躍もあり何の支障も無く店は回転していたが、かなりの数の人間が入り出すのだ。

問題の1つや2つは起きてしまう……それが接客や商品に何の落ち度が無かったとしてもだ。

「(アニキ…あのガキが言うにはどうやら、この店はかなり繁盛してるみたいツスよ!)」

がたいの良い男に、パンチパーマに紫のシャツ…昭和臭いチンピラ風の子分が囁きかける。

「(よし、小遣い稼ぎだな。やれ。)」



「（ウツス！）……あー！？オレのサンドウィッチに埃が引つかかってるぞオ……！」

「その嬢ちゃんちょっとこっち来いやあ！」

周囲の客の迷惑も顧みず、怒鳴り散らして裕奈を呼び立てる。

「この店は客にゴミが付いたモンを出すのかオラァ！どう落とし前着けてくれんだあ？あぁゝ！？とろとろしてんじゃねえぞゴラァ！」

「ひい……」

「黙らねえか！ウェイトレスや他のお客さんが縮こまってるじゃねえか！」

「急かさなくても来てくれんだから待ちやがれ。」

こういう時に限って、刹那や龍宮などの武道四天王は皆、午前中のローテーションで働いていて、今は自由時間により不在。

完璧超人の超は自身の屋台、大学の研究発表を掛け持っており、終盤しか来てくれない。

今いるメンバーは自分も含めて、武術どころか護身の心得も無い者ばかり。

しかもそれを見越した兄貴分は、敢えて子分を自重させて『話し合い』へ持ち込もうと企んでいる。

「え、どうしよう…どうしよう、どうすれば良いの？アキラ……」

「…私に任せて。裕奈は大人の人を連れてきて。」

「うん…」

うろたえる裕奈を落ち着かせ、毅然とした態度でアキラは向かう。

「すみませんでしたお客様。只今、替えの商品をお持ちいたします。」

「ああん？そういう問題じゃねえんだよ。」

「ウエイトレスさんよオー、替わりを出してハイ、終わりってワケには行かないんじゃないかい？

『誠意』つつつうを見せてくれないか？」

兄貴は人差し指と親指で作った輪っかをアキラに見せ、自分達の望みをストレートに示す。

「で、ですが……」

「まあ、よオーく考えな。ここで丸く収めるか、客足が遠のけちまうか……賢くなりなよ？何も根こそぎって気は無いさ。『気持ち』で良いんだよ……気・持・ち、な？  
これなら別段、悪い条件じゃあ無いだろ？」

「おうおうメイドの嬢ちゃん。兄貴は一度キレたちまったら、周りも切り裂くジャック・ナイフの異名を持つんだぜ？  
大人しく言つとおりにした方がイイと思うぜエ？」

ニヤニヤと下衆な笑みを浮かべて子分は警告する。  
客は当然ながらサツサと用事と勘定を済まして退出。助けてくれる存在は現れず、頼める相手もない。

アキラは追い込まれていたが……

「やっぱりダメです……お客様の望む対応は出来かねます。」

やはり答えはNO…午前中の人達が頑張った分を考えると、アキラはそんな提案を承諾するワケには行かなかった。

「…そんなじゃま、幾らか痛めつけられねえと分からんみたいだな。コイツでも食らえや!!」

「あ…」

しびれを切らした兄貴の固く握られた拳が、アキラ目掛けて振るわれる。

「（もう駄目だ…怖い!）」

あきらは恐怖から目を閉じ、体を固くして備えていたが、痛みと衝撃がいつまでも来ない。

何事かと恐る恐る薄目を開けてみると……

「イデ、イデデデデ…!は、離しやがれ!」

「俺の生徒に何してくれてるんだ?」

タカミチが暴漢の手を捻り、合気の要領で床に這い蹲らせていた。しかも子分のチンピラは、既に気絶しており無力化されている。

「アキラ、遅くなってゴメン！」

「あ、裕奈。助かった」

そこで緊張の糸が切れたアキラは足からも力が抜け、ぺたんとその場に座り込んでしまった。

往生際が悪く、最後までじたばたと抵抗していた暴漢も、タカミチが耳元で一言、二言囁くとすぐに陥落。顔を真っ青にして『デスメガネ、デスメガネ、デスメガネ…』と讒言を繰り返して、子分共々…『何処か』へと連れて行かれた。

結局、タカミチの登場でトラブルはすぐさま収束…

カフェも通常運転に戻り、次のローテーションへの引き継ぎも終わり、裕奈とあきはぶらぶらと出店を歩き回っている。

「いや〜危なかったにゃー。」

裕奈は、祭りと言えば綿菓子だと考えてアメリカン・サイズな綿菓

子を購入。それを頬張りながら話す。

「うん。」

アキラはアキラで、とんでもなくデカイフランクフルトを食べながら付き合う。

「それにしてもタカミチ先生カッコ良かったなあ…たまたま居たから伝えたら、すぐに飛んでいって大活躍だよ？」

「そうだね。」

「タカミチ先生…カッコ良かったよね？」

「???…うん。」

「いつもパリッとスーツを着てるし、清潔感も漂わせてる…今日みたいな咄嗟の時に見せてくれる強い所。」

「どっしたの?」

「いや、いい人だなあーってさ。」

「……タカミチ先生は、しずなさんの彼氏だよ？」

「問題はそこなんだよ！はあ、なんだかなあ」

さつきまでぼんやりしていたと思ったら、急に落ち込み溜め息を吐く裕奈。

「横恋慕、ダメ絶対。」

その様子から半分本気だと察し、釘を刺すアキラ。

「どっかに、タカミチ先生よりいい人居ないかにゃー……」

どういう理屈かは不明だが、助けられたアキラは平気で、呼びに行つた裕奈が淡い恋心を抱いたようだ。

……ファザコンちつくな気質がある裕奈だが、幾ら何でも身持ちの堅いタカミチ相手では無理だろう。  
ほのかな恋心の先行きは暗い。

所変わって、ノエルとエヴァが特等席で子供の部・決勝戦を観戦するUMC（ウルティ麻帆良）の会場……

リング上には武闘着に身を包んだ少女が立っており、ピクリとも動かず倒れ伏している青年がいる。  
崩拳から流れるように顎へと掌底を決められたからだ。

「……………っ!!」

近寄った審判はすぐさま×マークを作り、担架で運び出すようにサインを送る…この瞬間、決勝戦と言うには余りにも呆気なく、開始から終始圧倒的な差を見せつけた少女のKO勝利が決まった。

「麻帆良に集まる男は、強いと聞いてたのに…」

武闘着に身を包んだ少女…古 菲は、ポツリと零す。

古 菲は武の名家…古家の1人娘だ。

しかし親としては、武門の跡取りとなる男子が欲しかったが、娘しか授からなかったのだから仕方無い。



それから両親は娘にしこたま武術を仕込み、実際…古 菲は天稟も有って師である両親の教えを良く吸収した。

そして、父が経験した大会で最も熾烈だった『まほら武道会』が催された異国の地…麻帆良で、最低でも己よりも強い男子を探しだし、夫として迎えると言い聞かされ、送り出された。

麻帆良に来てからは語学に重きを置き、その他の勉強はそこそこに頑張つて過ごし、友人も出来たと…充実している。

だが本分の『婿探し活動』の一環として道場、部活動を問わず、強い男子を求めて荒らし回つたが成果はナシ…逆に、毎日弱つちい男の相手をするのに辟易としていた。

心情としては、またつまらん相手を倒してしまったアル…という感じだ。

だから、初めて出場したUMCこそは、まだ見ぬ良人が対戦者として現れ、自分を叩き伏せてくれると、乙女心にちよっぴり期待していた。

だが現実には、柳のようにしなやかな動きで受け流して防御し、蜂のように鋭く刺すような中国拳法による攻めで、あれよあれよと勝ち

進んで……優勝してしまった。

古 菲からしたら、嬉しいような悲しいような……複雑な気分だろう。

「おい、ノエル……来年度からの大会の賑わいは危ういかも知れんな。

」

「そうだねえ。こんだけ好き勝手やって優勝する奴が出たら、来年はイイとしても……再来年からは見る側にとってマンネリ化するわな。

」

最初から最後まで、黙って観戦していたエヴァとノエルが古 菲に向ける眼差しは厳しい。

大概の力の差なら喩え、成長中だとしても次回には不思議と埋まるもんだが……如何せん、大人と子供ほどの力の差は、普通の選手が追いつき追い越すのは厳しい感がある。

きっと来年も圧勝の無双状態で勝ち進み、決勝戦もそのまま終了するのが目に見えている。

すなわち古 菲が複数年に渡って、1強状態で君臨する可能性が有

り得るのだ。

これがプロの興行ならスターとして大会を盛り上げることも出来た…しかし、UMC子供の部は『少年少女が全力を尽くして闘う』様子が魅力の大半だ。

例えば、甲子園で同じ高校が5年も10年も複数年の春夏連覇をしたと仮定して…最初は心躍るが、一気に楽しみが失せる。むしろ、それが当然だと感覚がマヒしてしまう。

古 菲の出現はそういうレベルだ。

そうなればUMCに厭きた人々の足は遠退き、客の入りも疎ら(まばら)に…最悪、大会自体が消滅しかねない。

「いいか？あの娘が来年も出場してきたら、躊躇せず大人の部に割り込ませるんだ。」

「エヴァよオ、それは流石にあざと過ぎるだろ……」

「ではどうするのだ？」

自然のまま放っておけば、働かなくても小遣いが稼げるイベントが消えるのだぞ？」

「それくらいちゃんとかつとるって。」

エヴァの口調自体は激しく無くとも、視線には危機感の欠片も無いノエルに対する呆れや怒りが含まれている。

エヴァとしては自堕落な生活が惜しい訳では無く、ノエルに甘える時間が減るのが嫌なのだ。

「取り敢えずプランを言ってみる。」

「丹誠込めて当て馬を用意する。  
なあくに、今大会に出たので目を付けた奴らがいるんだ。」

「ふん、見せてみる。」

ノエルは、大会参加者の顔写真と、経歴が記載されたエントリーシートを数枚エヴァに寄越す。

「どっよっ。」

エヴァがあらかた目を通したと見て、ノエルは自信たっぷりに尋ねる。

「漢玉、3D柔術、烈空掌：何だコレは？」

「俺の見立てだが、コイツ等は我流の変則版とはいえ、気弾に烈風撃、柔術のガキはそれ以上の必殺技に辿り着きそうな奴だ。しかも豪徳寺 薫つつうりーゼント少年の流派を見てみるって。」

「：喧嘩殺法……未羅苦流 究極闘技：だと？」

「：控え中も会話を交わす仲だ。この豪徳寺に限らず2人もストリート・ファイトをやつとる可能性は十分だ。あんな技をパンピーのチンピラが食らったら最悪、死ぬぜ？ そうなりや加害者、被害者の両人にとっても酷いだろ。」

「それで？」

「だから今のうちに監視も兼ねて、ちいっとだけ鍛えるんだ。」

「（確かに、近衛右衛門の協力を取り付ける約定の一つに『一般人の脅威に成りうる人材のスカウト、もしくは封印』の項にも違反は無い……だが）

そんな不確かな希望的推測で、来年の開催までに間に合うのか？」

「まあ、そこら辺は任しときんよ！」

ノエルは既に、生かさず殺さずの育成プランを練り上げているらしい。

「……もう好きにしろ。私は知らん。」

こうなれば明確な解答を以て反論しない限り、余計に頑固になるノエルの気質を理解してるエヴァは、考えることを放棄……リング上で行われている表彰式を眺めることにした。

「さて、今年の優勝者は初出場！初の女性！ピカピカの中学1年生  
！！！！

この初物尽くしを成し遂げたのは、なんと可愛らしいお嬢さんだ！  
さて、今の気分はどうだい？」

司会者はその場で考えた口上を述べ、古 菲にマイクを差し出した。

『力を発揮出来た』、『一步間違えば、負けているのは自分だったかも知れない』…そんな使い古されたセリフが来ると観客は予想し、

帰り支度をしていたが、現実常に想像の斜め上。

「私は、来年まで王座に居座る気はさらさら無いアル。だから、腕に覚えのある奴は明日から掛かって来るアル！」

「ええええええ！？」

「へえ、えらく剛毅な子だなあ。」

「褐色、ロリだああ！うわよう、よつよい。毎日殴られに行こうぜ？うひゃっほい！」

飛び出した言葉は、いつでも挑戦しろと煽るような宣言。

その度胸を真面目に讃え、倒す算段を巡らす者。  
ブツ飛んだ現実を受け入れられない変態さんと、ただ驚くしか無い一般人が合わさり、会場は一気にカオス空間へ……

「ノエル…あのガキはバカなのか？」

「バカつつつか、アカン子っしょ？」

この調子だと今日の帰りにでも早速、闇討ちされるんじゃないかね？だからって助ける義理も無いから、あのガキがどうなるのが知らん

けどな。

まあ、あれだけ調子に乗ってるんだから痛い目見た方が良いだろな。

「

エヴァとノエルも、この宣言には呆れ果てるしか無かった。

「試合が終わったばかりなのに、古 菲ちゃんはやる気マンマンっぽいじゃん。」

けど、そこら辺はUMC大会運営委員会は責任持てないし持つ気はナツスイングだから……路地裏でも河川敷でも、何処でも自己責任で好きなだけやっちゃって「ちょーだい！」

そんじゃま、来年の大会でまた会おうぜ！」

最後の最後でぐだぐだになったが、大会に於ける子供の部は終了。

そして、明日の朝から夜まで繰り広げられる大人の部は、メジャーな総合ルール：外周はよりスリリングな展開にする為に金網と…スタッフ総出の準備が始まった。

その日の夜……一般人はおろか、麻帆良の魔法使いも知らない地下区画。

当然、地価だから電気など通っていない筈の無い場所だ。しかし、



この場所には所狭しと計器やパーツ、金型の製造機の類が存在し、稼働しているという不可思議な空間。

そんな空間に、誰もが場違いだと認識する存在：麻帆良女子中の制服を着た少女が2人。

「超、とうとうこの時が来たんですね。」

「そう…記念すべき瞬間ネ。」

「ただ、今日という日を迎えたのも…葉加瀬が協力してくれたからだよ。」

「私は超が『金、場所、倫理を問わない研究所と技術をタダで用意する』って言ったから協力しただけです。」

「そう言えばそんなことも言った記憶が…とにかく、協力してくれてありがとうだよ。」

和やかに会話をする2人の視線の先には、台に固定され、幾つもの配線が繋がれた女性型のロボット…ガイノイドがある。

これは、2人の天才少女が技術の粋を集めて生み出した、初号機にして実験機であり最高傑作となる一体。

「さて、画竜点睛を欠く訳にはいかないから、大事な大事なチップも埋め込んだから準備は万端。  
葉加瀬、景気良くレバーを引いてヨ。」

「OK牧場！さあ、イイ子だから起きてよね！」

ガチャコン！

「う…あ、あ…此処は？」

「ひゃあ！やった！やったよ超！！！」

「そつみたいネ…ところで調子はどうヨ？」

「お前は…それに俺は確かに、あの時に…」

起動したばかりの為か、ぼんやりとしているがアンドロイドは少女達…取り分け、超を凝視している。

「私と超がアンタのマスターってワ・ケ。」

「何だと？」

「取り敢えず、ロボット三原則は叩き込んだからバカな真似はさせないネ。」

「それと名前は機械仕掛けの魔法人形…『絡繰 茶々丸』だからね。」

「……………」

「ふむふむ、何やら不満げだネ。よろしい…質問すると良いネ。」

「そうさせてもらおう。オイ！そのお、お…ぐう…マスター葉加瀬、今は西暦何年だ？」

「ええと、2002年だよ。」

「…………ツツ！！本当に2002年か！？日韓サッカーワールドカップは開催してる2002年なのか！？」

「…ハイハイ、無駄なお喋りはここまで。スリープモードにするヨ。」

「

そして超は無抵抗な絡線の電源を落とす。

「超、今のは何だったの？何かスゴく必死だったけど……」

「アレは私の茶目っ気ヨ。ビックリした力？」

「もう！あゝあ、次はどんなマツスイーンを造ろっかな」

「大丈夫ネ、葉加瀬。

すぐにもっとスゴい作品の製作に取り掛かる事になるヨ。」

「ヤッホーイ！！じゃあ地上の空気を吸いがてら、遊んでくるね！」

葉加瀬は一仕事やり遂げた充実感に包まれ、次の大作に取り組む英気を養うために仄暗い空気が漂う地下研究所から出て行く。

「さて……起きて貰おうカ。」

超は、葉加瀬を示す移動する点が外に言ったのを確認すると、再び絡線の電源を入れる。

「……………」

「そんなに睨まないで欲しいネ。可愛く整えたお顔が台無しヨ？ほら、スマイル、スマイル」

「お前は今年より幾年か前に到着した筈だ…何をしていたんだ？まさか使命を忘れたのでは無いよな？」

「大丈夫…実際に麻帆良を肌で感じて、ちょっと計画に修正を加えただけネ。」

「……………」

「勿論、ノエルはどうかする。けど、それだけじゃ足りない。万全を期す為には色々と準備が必要って訳…お分かりカ？」

「何が言いたい…」

「コレから一年は下準備ヨ。」

お前の量産機を幾つか用意して備える…決起する日を待つ。

そして、来年の春にでもお前には簡単なお遣いをして貰うヨ。

全ては私の…皆の望む未来を掴むために、ネ。」

「どうやら使命は忘れていないようだな。了解したぞ、マスター・超。」

どうなるか分からないが、お前の計画に付き合ってやる。」

「うむうむ！改めてよろしく頼むネ。絡繰 茶々丸。」

賑やかなお祭りの喧騒の影で、麻帆良の支配者である近衛右衛門も存在を知らない地下研究所にて…

息を殺すようにひっそりと、パートナーの葉加瀬でさえも知らない超と絡繰…2人の計画は始動した。

S a ・ G a 8 5 (後書き)

『麻帆良一般人四天王』

豪徳寺、山下、中村ともう1人：大豪院ポチとかいうふざけた名前の青年が集まった仲良し4人組で構成されたカマセ。

しかも大豪院に限っては、『赤松さんに技の設定を貰えなかった』から普通に中国拳法を使って、予定調和の如くアルに瞬殺。その後はコマの都合からか、1人だけ描かれぬ不幸っぷり。だから作者もスルーしてあげました。

だけど4人揃って、本戦に出場出来た実力者なんですよ？カマセと言えど、そこだけは誤解無きように……

「……………ていう感じで一件落着き!」

「……………ええええー!?」

「(あちゃー、タカミチの野郎。仕方が無いとはいえ、遂にやつちまったか。)」

「くつそー!まさかアタシがスクープをみすみす逃してたなんて…へこむなあ。」

(逆に居合わせなかったから、脚色出来のは有り難い。さあして、早速使わせてもらおうと。)」

麻帆良祭は、今年も大盛況のうちに幕を閉じた。  
そして2-Aの売上もガンガン伸び、今は手に入れた利益を丸々使って、生徒だけで打ち上げパーティーを開催。

その中で、誰かがネタの1つとして始めたタカミチの武勇伝……最初は小さなグループだったのが、いつしか大きな輪になりクラス全体を巻き込んだ。

そして、あの場に居た全員が諦めたアキラのピンチに、颯爽とタカ



ミチが現れて鮮やかに解決。  
すぐさま去っていく勇姿の下りになると、ピーチクパーチク…活躍  
に尾ひれも付けて、キヤーキヤーと騒ぎ出す。

おかげで人気と信頼は、うなぎ登りの滝登り。

教師として独り立ちして日の浅いタカミチにとって、これは得難い  
収穫だ。

それでも2・Aには、強い奴と見れば挑まずにはいられない……通  
称『私より強い奴に会いにくい症候群』という日常生活に多大な影  
響を与える恐ろしい精神病の重度罹患者が、遺憾ながら何名か在籍  
している。

「やはり拙者の読み通り、高畑先生はただ者ではござらんな。古  
もそうは思わないか？」

普段は糸目の瞳が見開き、獲物を見つけた野獣のように奥の瞳が爛  
々と光る長瀬楓。

「ちょっとした時、無意識に現れる歩法や身のこなしから怪しんで  
いたアル。刹那はどうアルか？」

一方、消化不良とは言えUMCでさんざん野郎共を相手にしたから  
か、落ち着いた様子の古 菲。

「さ、さあ〜？タカミチ先生が凄く強いなんて…チョット予想外だなー。」

「（あかん！せっちゃんつてば目が泳いどるし、思いっきり墓穴掘つとるわ。不器用にも限度が有るえ？）」

木之香が頭を痛めるほどに、刹那の反応は不自然。いよいよ、この2人も確信して、タカミチの所に急襲を掛けるかと考え出した矢先…

「古、長瀬、バカな真似は止めとけ。」

「むう…龍宮アルか。」

古、長瀬、刹那と並んで2-Aが誇る武闘派最後の1人…見かねた龍宮真名は会話に飛び込み、続けて喋る。

「私達がこうやって騒いでる今も、タカミチ先生は『仕事中心』だ。それを承知で行くとなれば、お前達の目指す武人以前に人として問題が有るんじゃないか？」

常にクールな立ち居振る舞いと年不相応なモデル体系もあって、暴

走しがちな2 - A武闘派四天王のブレーキ担当の龍宮。

木刀を常に携帯。そして本人は否定していても、手には稽古により出来たタコとゴツゴツと堅くなった皮で覆われた手をしている。

こんな理由とちやかすのが好きな2 - Aメンバーの企みによって、いつの間にか古 菲、長瀬楓と同じく武闘派認定されて…ほぼ毎日ブンブン振り回される刹那の救世主。

龍宮以外にこの2人を止めることが可能な人物は、親しみを込めて『ちづ姉さん』と呼ばれる那波 千鶴だけ。

龍宮真名は、常識、武力、美貌やスタイルも兼ね備えたハイ・スペック人間という訳だ。

そんな彼女が凍てつく眼差しを送り、諫める。

「……拙者、そこまで落ちぶれてはござらん。」

「私も礼儀作法は叩き込まれてるから、自重できるアル。」

さっきの勢いはどこへやら。手の平を返したように『イイ子ちゃん宣言』をする問題児2人。

「分かってくれれば良いんだ。」

「けど腕試ししたいでござる〜う」

「私もホントは闘いたいアル……」

まあ、自重は出来ても未練はたらたら。

そんな時、一般人代表の刹那の動きが光る。

「じゃ、約束を取り付けてからテストで良い点を取ったりして、タカミチ先生の悩みのタネを減らすんだよ！

そうしたら手合わせしてくれるんじゃない？あ、でもタカミチ先生がツヨカッタラネー」

「おお！それでござる！刹那！！早速、今日…やっぱり明日から勉強を頑張るでござる。」

「古 も明日から勉強を頑張るアル！」

調子の良い古 菲なんかは、龍宮に敬礼までして見逃して貰おうとしている。

何はともあれ、これにて一件落着。  
バカ・レンジャーと呼ばれる少女達は、ちよっぴり賢くなるが…それはまた別の話し。

その週の土日

「ふんふんふん、ふんふん」

拙者は、世界樹に程近い裏山へ毎週訪れる。その間、寮には帰らず満足するまでぶっ通しのプチ・山籠もり。  
忍者はいつ如何なる時も浮き世を忍ぶ存在で在らねばな。

まあ、最初はどうか人知れず…忍びの業を修練する環境を求めて、辿り着いた場所だった。  
しかし、2週目にある人物に出逢った。

「あ、お師匠様！」

「……………ニンニン。」

艶やか黒の長髪を邪魔にならないよう一房に纏め、動きやすそうな

武道着で身を包んだ女性。

拙者と同じく女忍者：クノイチ！

そして拙者が知る誰よりも素早く、力強く、ただ見つめられるだけで体中に鳥肌が立った程に凜とした空気を持つ人で……行くと必ず会えるものだから、その度に恐れ多くも胸を貸して貰っている。

「拙者、今日も頑張りまする！」

「…ん」

まずはストレッチでござると…入念に身体をほぐす。

そしてクナイ、手裏剣を切り株や木に投擲、命中精度を高める。

我等クノイチは非力故にこういう技術を伸ばさねばならぬのでござる！

そうやって拙者が身体を動かしている間、お師匠様は野鳥を追い掛けたたり、山菜を持参した籠に入れたりと山歩きを楽しんでいる。

ふむ、やはりお師匠様クラスになると、柔軟1つも相手が居ない隙に済みますのでござるな

「ではお師匠様、行きますぞ！」

「ん、揉んであげる。」

其処からは手合わせでござるよ。毎週末の楽しみの一つがコレ。

拙者は初っ端から『多重分身』を行使、皮一枚…チョン避けを続けるお師匠様を攻め続ける。

お師匠様は山菜が大好きだ。だから地形にダメージは与ない…ギリギリ加減出来る猛攻を繰り出してるつもりだ。それでもお師匠様は、ちよろちよると逃げ回るだけ。

たまに振り返っても、拙者の虚を突くだけ。身構え、受けの体勢になつた隙にサツサと逃げる。基本的に反撃はされない。手裏剣やクナイを木の棒で逸らされてと…こんなリアル鬼ごっこはかなりの長時間続くのでござるよ。

「も、もうムリ。分身手裏剣の投げ過ぎて手足がパンパン、動けな  
いでござる。」

「ニンニン」

疲労困憊、ベッタリと汗をかき、疲れきった長瀬。

対するマスター・クノイチは汗一つ流しておらず、呼吸も全く乱れていない。

戦術を変えて挑んでも覆せない毎度の結末。コレがお師匠様と、今の自分の地力の差なのかと長瀬に思い知らせる。

「情けは無用！さあ師匠。今日も一思いにやって欲しいでござるよ。」

「ん、死して屍拾う者無し。」

ドベチ！！！！

「ぐふ、無念……」

大層なセリフを吐いてるが、実際は何て事無いただのデコピン。まあ、長瀬は軽い脳震盪でダウン。

デコピンをかました張本人。謎のマスター・クノイチは、立ち去った…筈だった。いつもなら、既に消えている筈だった。

しかし長瀬の意識が戻り、動けるようになって顔を上げると何故か



待っていた。

「お、お師匠様！もしや拙者のことを認めてくださったか！？」

「……………」(ふるふる)

「そんなあ〜〜〜」

「そんなことより分身……」

「え？今、何と仰られたでござるか？」

長瀬のイメージするお師匠様は、里一番の実力者達すらも霞む強さと気高さを兼ね備えた己が理想の忍びそのままの人。  
だが分身の術は、程度の差こそ有れど他の忍びの里にも存在する筈だ。

「(もしや、我流で極めた御方か？それとも追っ手さえも振り切った歴戦の抜け忍でござるか！?)」

…ホントに分身の術を教えて欲しいのでござるか？」

「……………分身の術法、教えて欲しい。」

代わりに私はずっと速くなれる歩法を教える。」

「（術法？忍術と違うでござるか？ふむ、よく分らん。）  
拙者も、お師匠様から秘技を直々に教授していただけるなら、この程度はお安い御用でござるよ。」

「ん、じゃあ早く立つ。時間が勿体無い。」

「え！？ちょ、待つ……………」

「……………お前は物覚えが悪い。」

「面目（めいめん）ぢやらん……………」

私が求めたのは、『ござる』が使う変則『シャドウ・サーバント』。最初は気紛れに始めた手合わせだった……………だが、技量や基礎能力も低い癖に『シャドウ・サーバント』だけは、まさかの超・達人級。

何せ、あのインチキ魔力を誇るノエルさんでさえ規格内の6体が限界……………しかし、この『ござる』はかなりの精度という前提で、6体を遥かに越える10体。最近はそれを何度も顕現し、縦横無尽に走らせたりと自由自在に操る。

コレには何かタネが隠されてるに違いない。

この術法は是が非でも修得したい。叶えば一気に戦術が広がる。

そしてあまり魔力保有量が多くない者にとって夢の『超・省工ネ、ハイスペックなシャドウ・サーバント』が手に入るかもしれない垂涎の術法。

そう考えて手合わせを続けて最悪、半殺しにしても必ず吐かせて盗み取るうと決意。

それから幾度か模擬戦を繰り返した。しかし、サッパリ理解不能…  
いっそのこと、教えを請うた。

勿論、交換条件は忘れない。断られる可能性も大いに有り得た私の  
お願いは、意外な程すんなり承諾された。  
良かった…半殺しにする未来が回避出来た。

そして、いざ教わってみれば、随分とすんなり会得。

実際に5人に増えるくらいなら容易く行える程度にはモノにしてみ  
せた。

どうやら、術法とは全く別畑。魔力を使わないスキルに分類される  
モノらしかった。

こんな事に気付かないなんて、固定観念に捕らわれていた証拠だ。  
自身の甘さを痛感する。不覚……

対する『しづる』への見返りに、私が伝えた1里を風のように駆け

抜ける縮地の法と、空中でも移動可能になる虚空瞬動。だが、結果は芳しく無い。

あのスキルが出来て、どうしてもこのスキルが出来ないのか不明。才能が有るのか、それとも無いのか…理解に苦しむ。

そして聞けば、旧世界忍者の常識は、『ひっそりと隠れて移動する』作戦中は始終見つからないように遂行する。

旧世界忍者の志は、かなりの高次元に在るようだ。

しかし私達、魔法世界忍者は隠密能力以上に『敵陣の中を風のように移動し続ける』…例え探知されても、敵方のトラップやアーティファクトさえも完封する神速のアクションが求められる。

ややこしいが、気配と姿を消す『霧隠れ』も万能じゃない。昔ながらの原型を留めたままの術法なんだから、いい加減に術法研究所は改良するべきだと思う。

ん？脱線してた。うん、これも『ござる』が悪い。そうしよう。

とにかくコレが異文化体験？所変われば品変わるという事？なんか違う気がする。うん、きつと違うけど知らない。

そして『ござる』は、全く上達しないままダッシュの往復をしてるだけだった。

だから、私達にとって常識の概念を伝えた時に異文化故に馴染みが無かったからか…鳩が豆鉄砲食らったような顔をしていたのは、ユークだった。

そんな感じで『ござる』の奮闘もむなしく、かなり時間を掛けた癖に修得には至らなかった。

「日が暮れた……要反復練習。」

「ひいひい…分かりましたでござる。」

疲れきり意気消沈しているが、『ござる』も一応はキツカケを掴んだ。

というより、私の気が済まないから身体に叩き込んで掴ませた。

「それにしても、流石はお師匠様！教えられて瞬く間にモノにするとは…拙者程度の忍びでは、背中どころか影すらも見えん。」

コイツの言う褒め言葉には、悪意が無い。

だから……

「そんなこと言われると照れる……」

そんなこと言われて懐かれると、可愛がりをしたくなるから止めて欲しい。

「今日は帰る。」

「御指導有り難う御座いました！」

「……………ん、」

まあ、コレからも気が向いたら手合わせをしてあげよう。  
別におバカな妹分が気になるって訳じゃない。世界樹周辺に生える山菜は美味しいから、あくまで取りに行くついでだと言いついで聞かせておく。

ピンポーン……………

「……………」

ピポピポピポンピ、ピポピポピポピポン…

「うるっさいな！…っってお前かよ。何よ？」

「ん、山菜が沢山取れたから、あなたにもちよっただけお裾分け。」

「それだけか？」

「それだけじゃない。取って置きがあるけど、ここでは言わない。秘密。」

「…もういいや、丁度メシ時だからお前も食ってけ。」

「かたじけない。」

とある忍び装束の女性がその夜、取って置きの秘密を公開して、マシヨンの管理人と連れ合いを目ん玉飛び出るほど驚かせるのは全くの余談。

S a ・ G a 8 6 (後書き)

『長瀬楓』

甲賀忍軍中忍なんて設定もあるさらし愛好家クノイチ。

クラスメイトには、バレバレなのに認めたがらない頑固系おバカであり、なかなかのバトルジャンキー糸目でクラスでもかなりのボインなごさるの人。

古 菲には古 菲なりに闘う理由もあるけど、長瀬には見当たらない。

スケベ心を隠せずに近寄る奴は、糸目笑顔で脳天チヨップ！

龍山山脈で遭遇した竜種の群れは、必殺忍法で屠殺！

後ろから近寄ってくる奴は、身の丈も程もある巨大手裏剣でバツサリ！

そして自分より格上だろうと挑まずにはいられない。

命が在るだけでもラッキーな人生はっぱ隊。  
分身の命は、108式まで有るぞー！オ！



『忍者』

携帯アプリ・ロマサガ2

要課金ダンジョンのクリア

イーストガードの女性版。適性は体術方面でイーストガードと同じく素早さと腕力が、そこから辺の男キャラよりもよっぽど高い不思議。

猿人やゴリラさんの類なのかな？竜の穴の格闘家よりも数値だけ見たら優秀とか、もうね…

ぶっちゃけ、シティシーフの上位互換キャラ。

魅力的な性能とビジュアルだけど、課金システムがねえ〜〜

S a ・ G a 8 7 (前書き)

若干、残酷描写アリ  
やんわりと表現しました。

とつくの昔に日付が変わった夜中。

明日は休日だからと羽目を外しすぎたキャリアウーマンが1人で歩いている。

幾ら21世紀だと言えども、ちと不用心が過ぎる。

「（あれ？何となくだけど、ここって通ったような気がする。」

諭え用心していても不幸は降りかかってくるのだ。

酒を飲んで気分が良く、ガードが甘い今の状態を見逃す筈が無い。

「女、此方を向け。」

「え？」

女性は自分でも何故、振り向いたかは分からない。だが、それが当然だと無意識に選択。

振り返った先に立っていた声の主は、絶世の貴公子という印象。

「ふむ、目当ての姫では無いが…女よ、貴様は私の眼鏡に適った。貴様には我が寵姫の1人となる資格が有る。この意味が分かるな？」

「はい……………」

「格別の榮譽をくれてやろう 受け取るが良い。」

女性が最後に見たのは、射抜かんばかりに鋭い視線を飛ばす貴公子の鳶色をした美しい瞳だった。

麻帆良市の中心地にある閑静な住宅街から、ほど近い場所にある桜並木通り。

春には夜桜を見ようと街灯も多目に設置されており、昼間にはペットの散歩道やジョギングコースに採用する市民もいる憩いの場所。だから取り立てて問題の無い大通りというのが、全市民共通の認識だった。

それがまさか、最近、麻帆良市を騒がす事件の舞台になるとは……

『桜並木通りの怪人事件』

事件の概要は仕事帰りだろうか…若い婦女子を狙った卑劣な犯行。よくある通り魔犯罪と似ているが、この事件にはあまりに不審、不

可思議な点が山積している。

まず、発見される被害者に有って然るべき、暴力を振るわれたり乱暴を受けた形跡は無い。

被害者に着衣の乱れも無く昏睡した状態で明朝、通りかかった通行人が発見している。

そして、そのまますぐ病院に担ぎ込まれるが覚醒しない。病院側もあらゆる手段を講じたが為す術無くそのまま衰弱し……………

義憤に燃える捜査員は現場に何度も赴き、付近の住民や通行人に聞き込み…誰も不審な人影を目撃した者はいない。幾度となく舞台となった桜通りにも遺留品は無い。

そして被害者の交遊関係や経歴、事件前の行動を洗い出しても、不審な点は存在せず…恨みからの犯行という線も無く、場当たり的にターゲットを選んだと証明された意外に成果ナシ、手掛かりナシの手詰まり状態。

姿形、犯行目的、手口の一切が不明だからこそ警察からも『怪人事件』と囁かれるようになった。

かくして迅速に発足した捜査本部だったが事件解決に何の進展も無く、ただ、時間だけが過ぎて行くばかり…そんな警察を嘲笑うように怪人は暗躍し、被害者は出続けた。

麻帆良は魔法使いのホームグラウンドだ。時には連携して取り掛かる場合も有るが、警察とは独立した形で操作を行う部署が、関東魔法協会には設けられている。

「長。やはり今回の事件は……」

「そうじゃ。奇っ怪な手口と被害者の様子から、皆が思うとるよう  
に下手人は尋常の者では無い。儂らと同じく、魔法の領域を住処と  
している者に違い有るまいて。」

麻帆良女子中名物、近衛右衛門がいる学園長室に選ばれた者達だけ  
で行われる朝の定例職員会議。  
普段はただの顔合わせだが、今日は違う。

「注目すべきはツイー・リン殿が開発、設置した防衛システムと哨  
戒を容易くすり抜けて来るといふ点じゃ。  
アレの性能は設置前後の撃退人数と、遭遇件数を比べれば明らか。  
そしてアスナ姫の留学が決まって以来、より一層警備には力を入れ  
てきた。」

「……………」

魔法使い達の顔が険しくなる。

「それでも此度の事件は防げなかった。

諸君を貶めるつもりは無い……知らず知らず、機械の性能を過信して付け入る隙を与えたのは、長たる儂もじゃからな……」

学園長室に詰め掛けた面々を前にした近衛右衛門は、顎髭を撫でながら事実を認める旨を語る。

その口調は淡々としているが、普段のような飄々とした風は無い……

「此処からマスター・ピースの一角に位置するアーティファクトのオーナー、もしくは強力な隠密能力を持つ使い魔の可能性が有る。」

「どうやって炙り出しますか？今、我らがこうしている間もこの麻帆良の地に潜伏しておるか……それともその都度、外部から侵入してくるのか……」

「敵の姿形が明らかなら、西の陰陽術も使えたんじゃが………覚醒しない被害者の人権を土足で荒らすことになるが、事件直前から最後の瞬間までを追体験させてもらう。」

「そんな！？あまりに危険すぎます！」

たまらず1人が発し、全員がざわめく。  
夢を覗き、追体験する類の魔法は、確かに怪人の情報も手に入る利点がある。その反面、限りなく意識が同調してしまい、術者も倒れる危険が付き纏う。

「それでも誰かがやらねばなるまい。

何より、朝のうちに行えば対策の一つも練れるやも知れんしの……  
儂の身に何か起きたとしても、情報だけは残す。

最悪、バレン又帝国のノエル殿を頼れ。では葛葉君、早速行くとするかの。」

身を案ずる言葉も近衛右衛門は無言を言わず押し通し、関西から来た神鳴流剣士を伴い病院へ向かった。

「ねえねえ、明日菜は桜並木通りの怪人事件のこと気にならない？」

「バカじゃない？アンタ、自分が何言ってるか分かってんの？朝倉。」

学校での1日が終わり、寮の自室でチャチャゼロとのんびりしていた明日菜の下に来たクラスメイト。朝倉は、目を輝かせて開口一番に問うた。

その内容にげんなりした明日菜だったが、口調を強めにして即座に



返答する。

「まあまあ、そんなカツカしなさんなつて。

もしも、この事件の手掛かりを私達が掴んだ所を想像してごらんよ  
！」

「……………」

「私と明日菜が組めば大丈夫だつて。  
ね？まずは話だけでもさせてよ。」

言うだけ言うと承諾を取らずにそのまま、ズカズカと踏み込んでしまつた。

「（これは長丁場になるかもね）」

この朝倉というクラス・メイトは明日菜と違う小学校に通っていたが、その頃から有名だった。

生来の噂好きであり、噂の真偽を己の耳や眼で確認せねば、どうにも腹の虫の収まりが付かないという困った性分の持ち主。しかもどんなアンテナを張ってるのか…異常な量のネタをいつも仕入れてい

る。

それ故に良くある学校の怪談話から始まり、友人関係、流行りの雑貨屋や飲食店：中学に入ってから、他人の恋バナまでも噂として扱うようになった。

風の噂では、朝倉が原因で密かに付き合い合っていた関係、慕っていた相手を言いふらされて泣きを見た女生徒が、もう現れたらしい。

その癖、好きな物の1つは『人情話』と公言しているモンだから、全く笑えないジョークだ。

逆に所属する麻帆良新聞部からはトラブルメーカー、面白オカシク記事を書き立てる能力、スクープが絡むと情の欠片さえも母胎に置き忘れたような天然型冷血人間：報道人として必要な能力も経験以外は揃っている為に、二重の意味を込めてエースと呼ばれている。

今回、明日菜の部屋に訪れたのも朝倉の記者根性と、スクープを嗅ぎ取る嗅覚が今回の事件のきな臭さを感知した、と……話しを要約するところなる。

「……朝倉。いつも生徒一番で動くタカミチが『暫くは夜歩きはするな』って再三繰り返した忠告を破るって訳？」

「別にそうじゃないけどさ」

明日菜が朝倉を見る視線はどこまでも冷ややか。だが、イライラが募っている。

しかもチャチャゼロはベッドの上から一度だけ朝倉の顔を見たつきり。我関せずを貫き通している。

「じゃあ何考えてんのよ！」

「スクープ、事実究明に必要とあらば火の中、水の中！この朝倉和美の勢いは何人にも止めてくれなさい！！！」

明日菜の意見も朝倉には屁の突っ張り。狂言回しのような節まで付けて答える態度にとうとう明日菜もキレた。

「あっそ！もうアタシなんか知らない。

これ以上話しをしてると手が出そう！さあ、私が我慢してるうちにさっさと自室に帰ってちょうだい。」

「（あちやー、やっちゃったか）

あはは…ごめん、明日菜。今日は大人しく退散するね。」

朝倉はいそいそと去っていくのを見届けた明日菜は、戸に鍵を掛けた。

「まったく！何なのアイツ！人が親切に言ってるのにあの態度…腹が立って仕方ないわ！  
茶々はどうなの？」

ベッドの上で寝転んでいたチャチャゼロが、顔を出す。

「フーかよオ…アイツ、ほったらかしにしてると死ぬかも知れんぜ  
？」

「え……」

まるでコンビニに行くと言つような軽いノリで吐かれたセリフと内容のギャップに明日菜は一瞬言葉を飲んだ。

「なんつーか、アイツの顔に良くない相が出たからな。」

「じゃあ何で茶々も止めなかったのよ！」

明日菜が声を荒らげる。

「静かにしねえか！やいのやいのうるっせえ。  
昔っからバカは死ななきゃ治らねーんだ！

どのみち遅かれ早かれアイツはこうなった。明日菜もいつそのこと、犬猫が車にひかれたとも思っつて、さっさと割り切れや!!」

「……………」

チャチャゼロの言ってることは『極端な』という前置きが付くが、ある意味では正論だ。

事実、朝倉は喉元過ぎれば忘れるタイプで危なっかしい目に遭っつても、次のスクープの匂いを嗅ぎ取る同じようなことを繰り返してきつた。

だからノエルやエヴァから『君子危うきに近寄らず』と口酸っぱく教えられた明日菜には、チャチャゼロの言い分が理解出来る。実際、自分の心の中の半分：大人の部分は、チャチャゼロに言われた瞬間ストンと納得した。

だが、今の明日菜は身体だけが大人。精神はまだまだ子供のままだ。明日からの寝付きや後味の悪さ、そして友情：青臭い理想の真つ只中にある多感な年頃でもあった。

「チャチャゼロ：やっぱりアイツ止めようよ。」

「却下。」

「何だよ！人の生き死にが左右されるかも知れないのよ！」

「バーロー、朝倉1人の命とテメエの命じゃ釣り合わねーんだっつうの！！お前が死ねばノエルやエヴァ、ついでに近衛右衛門がどうなるか分かんたらー！！」

「うっ……」

「いい加減、大人に成れよ…な？」

「じゃあどうすれば良いのよ…もう、分かんない。」

「オイオイ、こんな事で泣くなよ。不本意だが、こっつい場合も想定してオレが居るわけだ。」

「じゃあ……」

「気に食わねえが、オレがアイツを止めんだよ！だからお前は風呂入って宿題して寝とけ。」

「あー、かったりいったら無いぜ。」

寝間着から外行きの装いに着替えて短刀を腰に差したチャチャゼロ  
は、窓から下を覗いて巡回が居ないと見るや、飛び降り…夜闇に包  
まれた麻帆良の街へ向かった。

S a ・ G a 8 7 (後書き)

『朝倉和美』

好きな物：大スクープ、人情話、相棒であるカメラ。

嫌いな物：巨悪。

所属は報道部（突撃班）。「まほら新聞」記者。  
通称「麻帆良パラッチ」

カメラは常備。世界的なスクープを探している。  
だからスクープのためなら、変装もするし、体も張っちゃう。  
実際スクープ欲しさに、修学旅行編でネギのむにゃむにゃに突撃したり、麻帆良祭編でもスクープ欲しさから超と結託して「まほら武道会」で司会をした。

魔法世界編では、持ち前の行動力とアーティファクトの相性も有つてか…情報役としてメンバーの危機を救ったり、何だかんだでネギま！には欠かせない存在。



S a ・ G a 8 8 (前書き)

ちよつとバタバタするので、来週一杯は更新が無理っぽいです。

「ぬぐん：これが夜の桜並木通り、か。  
イイじゃない！ぐるっと回って来たけどムード満点。  
如何にも『出そう』な感じ。私は嫌いじゃないですよっと。」

明日菜にあれ程キツク言われた朝倉の姿は、怪人事件の舞台となっている桜並木通りの出口にあった。

朝倉のセンサーは『今日、必ずスクープが撮れる！』そんな電波を受信していた。

この勘的中率は高い…行かないという選択肢は有り得ない。

それに現場で激写せずとも、報道部のビデオカメラを片っ端から拝借して、こつそりと回しておけば準備をしてO・K…果報は寝て待てば良いんだ。

『私ってば、ホントに頭が良いわ〜』

そうと決まれば、持ち前のバイタリテイで即行動！！  
桜並木通りの入口に着いてから、茂みや木の枝などめぼしい場所に手早く設置。

こんなことを1人で全て行って、ちょっとした達成感を感じている始末。

カメラは明日の朝にでも回収しようという魂胆であり、既にスクープを手に入れて皆から………そんな未来予想図を描いてる。その辺りが全くダメダメだ。

「キミ！こんな時間にこんな場所で何してるの！！！」

「やば！見つかった！！！」

囷でもって下手人を誘き出そうという作戦で、キャリア・ウーマン然りとした装いで見回りをしていた葛葉刀子が、朝倉を見つけたのだ。

「逃げるが勝ちね！」

「こ、コラー！待ちなさー！ーい！！！」

「待てって言われて待つ奴がいるもんですか！」

見つかっただけでもアウト！！この上、捕まえられたら新聞部の活動にも影響を及ぼしてしまうかも知れない！

朝倉は、脇目も振らず元来た道を逆走…桜並木通りの方へと走る。

葛葉刀子も魔法の秘匿以前に、作戦続行への影響と無駄な犠牲者が出るリスクを消すために追う！

「……………」

通りには自分達以外、誰も居なくなつたと思われた。しかし、それを見つめる人影があつたのを2人は知らない。

「ハア、ハア、ハア…はあく、やっと振り切れたか。あー、しんどかった。」

あれから桜並木通りの中をぐるぐるぐるぐる走り回つた。そして、やっとこさ自分を追う影が消えたのを確認…安堵した瞬間に忘れていた疲れがドツと降りかかってくる。

同時に幾らか冷静に周りを見回す余裕が湧いてきて…そこでハッと気付いた。

「……………初秋の夜に霧？しかも急に空気もひんやりするなんて…嘘、こんなの絶対におかしい……………」

追っ手から逃げる…この一点にさっきまでは全力を振り絞っていたから何も感じなかった。

だが周りを見回すと、無かった筈の霧が立ち込めており、先も見えない。また、こんな夜でも律儀に仕事をしている街灯の明かりを霧がぼんやりと眩ませている。

余裕を取り戻して冷静になればなる程、この夜道がとんでもなく不気味で恐ろしい空間に感じられて……

「（ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！  
こんなこと普通なら有り得ない！  
何か分かんないけど、絶対にヤバいつて！）」

顔から血の気が引き、心臓が早鐘を打つように暴れている。

『それなりに場数は踏んでる。今日もサクツと片付けれる』……そんな無根拠な自信で自分を取り繕い、侵してはならない領域に入り込んで来た朝倉もここに来て、とうとう身の危険を感じざるを得なくなつた。

「とにかく、此処から離れなくっちゃ……」

「待て、その娘。」

「!?!」

もしも止まらずに足を動かし続けていれば…

止まってしまった時にももしも振り返らなかつたら…

そんな仮定も意味は無い。今の自分は何故か分からないが止まるのが当然であり、振り返るのも当たり前前の行動のように一瞬錯覚し…やってしまったのだ。

視線の先には、文章で書き上げ、他人に伝えようと試みても、およそ全ての言葉が陳腐な表現に成り下がり、どんな文豪も己の力不足を自覚させられて筆を折る…

彫刻や絵画で余人に訴えようとしても、完成して何かが違う!こんな普遍的な美しさではなく、もっと魔的で、地平の彼方のギャップを感じて…芸術家は自身に絶望する。

それくらいにどこまでも妖艶で

そこに立っている居住まいが優雅で

見たことが無いほど浮き世離れしてて

魂が凍るほど美しい…

そう感覚的、直感的に理解させられる程の絶世の貴公子が居た。

「娘よ、名は何というのだ？」

「あ、ああ、ああうあ…」

言ったら何かが終わる気がする。だから喋りたくない主の意思に口は逆らおうとしたが…幸か不幸か、余りの圧倒的存在感によるプレッシャーを当てられたら影響で口が回らず、ハッキリとした言葉にならなかった。

「ふふ、私とお前の間にある生物としての差を無意識に感じたか。普段なら、私の問い掛けに答えん…このような不遜な真似は許さん。だが、感度の良いじゃじゃ馬娘は別だ。声が出ぬなら首を振れ。良いな？」

「……………」(コクコク)

朝倉は言われた通りに頷く。

「では私の目を見る。」

「……………」

貴公子の鳶色の瞳が一瞬、光ったような…同時に身体からは余分な力が抜け、朝倉の目はトロンと虚ろになる。

「『選ばせてやる。』」

私の下に来て寵姫となり、永遠の命を謳歌するか？それとも……前者なら首を縦に振れ。」

時間は暫し遡る

朝倉を追いかけていた葛葉刀子は…

「お前が桜並木通りの怪人か!!」

「それを教えてやったらどうしてくれるんだ？  
いつまでも来ないなら、私から行くぞ。」



「くッッ！」

「女だてらに拳法、刀剣術までも嗜むか。だがしかし、まだ手緩い。」

街路灯は折れ、敷石も所々が砕かれて…戦闘の激しさを如実に物語る。

「（この男……分かっていただけ強いッッ）」

一度、体勢を立て直そうと距離を取る。

今の刀子は両手握り……それも、神鳴流の奥義も惜しみなく使っていた。

対する男は、片手で大剣を握っている……打ち合い、鏝迫り合いでも片手で対処していた。

「（足止めか？それともなぶり殺しにするつもりか？  
奴の底が見えない。）」

「どうした？お前はまだまだこんな程度じゃないだろ？」

深い霧と夜の闇に紛れて姿が見えない男が、何処からともなく語りかける。

「（かくなる上は乾坤一擲…次の一撃に全てを賭ける。）」

「この期に於いて一か八かで後の先を狙うとは…どうやら次の一撃に全てを賭ける覚悟か。」

お前も武人の端くれなら背中への傷は恥ずかしからう。

私も正面からの挑み、打ち破った上で幕を下ろしてやる。」

男は納刀したまま動かない刀子の目論見も見破った上で、受けて立とうと歩みを進めてくる。

あと二歩…

男は大剣の握りを両手に変える。

あと二歩…

瞬き一つせず待ち構えている刀子の頬を汗が伝う。

最後の一步…

ほんの5メートルくらいの距離に男が踏み込んだ瞬間…

「（今だ！今しかない！）」

刀子、逆転の望みを賭け…全ての力を込めた抜刀は、生涯最高の冴え。

決まれば何人も沈み込む脛打ち！

「チイツッ！！」

これまで幾度も剣を打ち合った相手が切り札で、まさかの掟破りの脛打ちを使ってくるとは想定外。一瞬だがそれはこの局面では致命的…面食らって反応が遅れた。

「……………」

そして刀子は決まったと思った。それも完璧に…

だが…

剣を地面突き立て凌いだ男は、衝撃をもちに受け止めた形になったが無傷。

脛打ちの効果が強いて挙げるなら、腹で衝撃を受けた剣の刃に罅を入れた点のみ…

「まさか脛打ちとは…失望したぞ。」

男が刀子と戦う羽目になったのは、朝倉の相手をする主から邪魔者を近付けるなど命じられたからだだった。

だが、戦っているうちに状況ごとに見せる多くの技。己に追い詰められると巧みに距離を取る能力。

何より、遙か格上の自分に正面きって向かってくる高潔な精神。

何時しか刀子の一挙一動に心が躍り始め…とうとう最後の一撃に全てを賭けると理解した時、どんな奥義、起死回生の切り返しをするのかを期待した。

それだけにまさか小細工の中でも下下…脛打ちなんぞを使ってくるとは、最悪のケースで完全に裏を掻かれた。

勝手に期待していた己が愚かなのは理解している。それでも落胆は大きく、罅が入った剣がまるで自身の心の有り様を映しているよう

で、堪らなく残念だった。

「……………」

その刀子は全ての力を出し切っており、膝を屈せぬように耐えるだけでも精一杯。  
戦う力は勿論、逃げる力も残されていない。

「俺は力の差を知りながらも、正面から戦いを挑むお前の気概を気に入っていた。

それだけに残念でならん…己自身で晩節を汚すとは！  
もういい、せめて一瞬で楽にしてやる。」

最早、光り輝いていた玉石は、路傍に転がる石と成り果てた。  
ときめきが消えた男は再び歩き出す…無防備な刀子を相手に、今度こそ幕を下ろす為。

「では、さらばだ。極東の国の女剣士。」

「（皆さん、すみません。）」

今にも刃が振り下ろされんとした時…

「足元がお留守だぜ？」

「何だとおおお！？」

男の足元の闇が揺らいだと思ったら、突如として現れた少女が空間を切り裂き…その勢いのまま股下から左胸までをバツサリ！！

虚を突いたとは言え刀子が苦戦した謎の男を、昇り斬りで一刀の下に始末してしまった。

「ン、ン〜！勝って兜の緒を締めろ…コイツは名言だぜエ。

」つか、自分より強いと分かってる奴に正面から挑むかバーカ。」

男の遺体を蹴っ飛ばし、パーツが離れ離れになっても動き出さない…完璧に殺しきったことを確認する。

そして短刀を振り下ろして、べったりと付いた血を払いながら零した。

口調や振る舞いも男性というか、どちらかと言うとオヤジ。

更にこんな惨状を作ったのに何の違和感も無く、不思議と堂に入ってる。

この少女こそ朝倉を連れ戻す為に徘徊し、並木通りで2人の騒動を影から眺めていたチャチャゼロ。

「アナタは…此処は危険なのを理解してるの!？」

現実に戻ってきた刀子だが、言いたいことがごちゃ混ぜになり、こんな頓珍漢な質問をする。

「そんなこと聞くのか?いよいよテンパってるな。それよりアンタこそピンチって感じだろ。」

「な、何を言ってるの!まだ女生徒が…私が行かないと……」

面と向かってハッキリ言われると、諭え正しいことであろうと反抗したくなるのが人情、人の常というモノだ。

刀子もその例に漏れず、歩けなれば這えば良いと考えて、ジタバタしながら移動を始める。

「まあまあ、気力だけのアンタが行っても無駄だつづの!今はオレが傍に居てやつから、ゆっくりしろや。」

(それにしても朝倉の野郎…今日の落とし前はいつか必ずキツチリ付けて貰うぜ。)

チャチャゼロは刀子を押さえ込みながら溜め息を吐いた。

そして場面は再び、朝倉が怪人に襲われていた所では…

「貴様等、私が誰か知つての狼藉か？」

用済みとなり、転がされている朝倉。

その傍に立っている怪人はどこまでも不遜な態度を崩さない。

「うるっせえ！！この野郎！

お前が巷のギャルを誑かしてる『桜並木通りの怪人』だろ！オラ！」

「……………」

チャチャゼロに朝倉のことを任せた明日菜だが、もしかしたら彼女1人では、手に負えない事態に遭遇するかも知れない…そう考えたら急に不安になってきた。

だから彼女が寮を出て早い段階で、携帯からノエル達に連絡を入れた。



だから、この2人がこの場に居る。

「O・K、O・K。何も言っな！」

駆けつけた現場には立ち尽くす変態と、あっぱぱぱになって寝転がされてるガキ……こりゃ現行犯逮捕だな。エヴァも黙っとらんで、ガツンと言ったれ！」

ノエルはさっさと解決してやるうと、初っ端から喧嘩腰の臨戦態勢。

「……………」

「エヴァ……さっきから黙りこくって、どうしたん？」

「ノエル、ちょっと待ってる。」

だが、エヴァは冷え切った眼差しで怪人を見つめている。

「……そうか。」

これにはノエルもこの怪人とエヴァとの間に何かを感じ取り、今は

集中させてやることにする。

「娘…『エヴァ』と呼ばれていたな。」

「……………」

「ふむ、よもやエヴァンジェリンという名前で在るまいな？」

「黙れ、軽々しく呼ぶな。」

エヴァは例えよつもの無いもやもやした気持ちを押さえ込んで、静かに言い放つ。

「そうか、名を知られてなお私の支配下に入らぬ娘、か…  
やっと見つけることが出来た。」

怪人はエヴァの反応から何かを得心したらしい。

「エヴァンジェリン、私の名は『オルロワージュ』！  
全てを魅力し、支配する魅惑の君！！お前を生み出した親だ！」

「マジかよ……この男がオルロワージュ。」

「……………」

まさか並木通りの怪人とエヴァの間に、こんな因縁が有るとは。ノエルは絶句し、エヴァはオルロワージュと対面した時からざわめいていた感情の理由を理解した。

「（エヴァ…コイツはヤバい。一気に畳むぞ。）」

隣のエヴァに契約カードで念話を飛ばした。

「いや、それには及ばん。」

「エヴァ……………」

「ノエルもアレの独り言を聞いてて、私とアレの間に結ばれた因縁を感じたたる？」

「だが……………」

魔法使いの戦いは、何が起きるか分からない。それも遙か古代に失われた魔法の使い手にして創造主相手なら尚更だ。

「この因縁だけは、私の手で断ち切らねばならん…頼む。」

ノエルは考える。

(エヴァのオルロワージュに対する認識は、彼女から聞いた話しによると親戚と結託して城に勤めていたメイドまでも手に掛け、自身を吸血鬼に変化させた存在。過去の清算、汚点の消滅…エヴァの気持ちも分からんでもない。)

正直、エヴァの心情を理解しているだけに存分に戦わせてやりたい気持ちは大きい。

(それでもまだ……)

『古代人』、『破壊するもの』…どれも原作の大ボスであり、この世界で打ち倒した相手。だが、どちらも予想を遥かに越えた強さを誇っていた。

このオルロワージュも例に漏れず、単騎で挑んで容易く勝てる存在ではないのをノエルは経験上、理解しているつもりだ。

しかも速攻で倒せず、時間を掛ければ掛ける程、それに比例して厳しくなる相手だということも……ノエルが覚えている原作ではそうだった。

『博打は避ける！冷徹なまでに勝ちにこだわれ！』

理性は強く訴えており、それが決断を苦しめる。

「エヴァ…覚悟は出来てるんだな？」

故に、ノエルはエヴァに尋ねた。

長年付き合ってきた仲だが、これは自分が侵してはならないエヴァの聖域。

気を遣って聞いてくれたが、その実、俺にそれを決める権利は無い。だから今一度、考え直してくれ、と…

「ああ、委細承知の上だ。」

「（意思是固いか）…ガキは見てやるから、存分にやってこい！」

「すまん…」

エヴァは短く応え、オルロワージュの懐目掛けて、瞬動で潜り込む。

「闘いは避けられぬか。」

オルロワージュは背後に漂う虚空から

鎧に身を包んだ戦乙女。

限りなく獣に近い娘、

王冠を被り、所々に黒い霧むらが掛かった女性

3体の寵姫を呼び出し、迎撃を始めた。

オルロワージュは一般的に魔界と呼ばれる場所で生きてきた。

幼い頃から己が望み、一度でも力を振るえば全てを手に入れることが可能。

口を開かずとも、視線を送らずとも…自分の存在を感じとった者達は、例外なく頭を垂れ、平伏した。

事実、己の領域に城を作り上げて君臨し続ける、生まれつきの絶対強者だった。

いつしか見た目麗しく、万人の心を捕らえて離さない『魅惑の君』と謳われるようになり、勢力は揺るぎない盤石なものへ…貢ぎ物も贈られて来るようになった。

並の悪魔が喉から手を伸ばしても手に入らない力、地位…ありとあらゆる全てを手に入れ、羨望の眼差しが送られていた。

だがオルロワージュは、この景色に何の面白みも感じない。

『嗚呼、私の住む世界には、唯の1人として対等な存在がない。』

悪魔は世界に現れ、心臓が始まった瞬間から最低限の強さと上限が決まっている…正確には、劇的な成長や進化が望めない種族。

意見を求めても、誰もが私の怒りを買うのを恐れて口を閉ざす。

会話に交じろうとすれば、空気を壊してしまう。

ならば、常識を無視して高みに登ろうとする傾き者…闘士ならばと赴いた。

それも鍛えたところで勝てないことを理解している部下は萎縮…

散々、目を逸らしてきた現実……数多くの部下を抱えていようと、  
どうしようも無い程に孤立しているのに気付かされた。

何時しかオルロワージュの望みは物でも、力でも、知識でも無い。  
もっとありふれた下らないもの。

時には語らい、時にはぶつかり合い、時に支える関係。

上手く言葉に出来ないが常に自分と共に在りながら、思い通りにな  
らない存在……人間の言葉で表現するならば『伴侶』に近い存在を  
心から欲していた。

ある時、戯れに呼び出した下級悪魔が異界の話をした。

『人間の欲は際限なく、性質も下衆から聖人まで多種多様…格上相  
手にも噛み付く愚かしい生き物』

下級だからこそ呼び出され、使役されていた部下の実体験に基づく  
語り。



『力の差を感じようとも、私と対等で在ろうとする存在が居るのかも知れん。』

この異界に生きる住人…まだ見ぬ人間が、自身の渴望を満たしてくれる。そんな可能性と希望を見いだしフラツと異界…エヴァがまだ人間として生きていた頃の中世フランスに降り立った。

無論、呼び出せる契約者が存在しないから自前の魔力…制限時間付きの訪問だ。

寸暇を惜しみ、王族、貴族、騎士、農民のべつまくなしに接触した。

「うざったい羽虫が！消えろ！『氷爆』！！」

『……………！！！？』

「ほう！なかなかどうして、楽しませてくれるじゃないか。」

戦乙女の寵姫は、風の刃で牽制する性質からエヴァの怒りを買い、絶対零度の氷爆で粉碎された。

3体いるうちの手駒を失っただけのオルロワージュに、危機感はない。

「それ、次の寵姫だ。」

「また羽虫か…打ち止めになるまで砕くのみ！」

次々に補充される寵姫を、エヴァは消し続ける。

朝倉を担ぎ、離れた場所から戦いを見守るノエル。その気になれば、契約カードの念話で助言も出来る…だがしない。

勝ち負けの問題ではなく、プライド同士の衝突だと理解しているノエルには、手に汗握りながら最後まで見守ることしか許されない。

「…あ、あれ？イケメンは？」

「ああ”？勝つてに目エ覚ますな。『ナツプ』！！」

「うげ…ZZZ、ZZZ、ZZZ」

(序盤で追い詰めなくてもいい…一撃で倒す気でやれ！エヴァ。)

オルロワージュはフランス中を歩き回った。

だが何処も魔界と変わりなく、何かアクションを起こす前に何人も平伏した。

まあ、人の何倍も力持ちで何倍も魔力を備える悪魔が白旗を振る存在に、ちっばけな人間が抗えないのも当然だった。

いよいよ人間界で過ごす最後の日、たまたま目に入った手近な城：エヴァの親戚が治める城で夜を明かそうと考え、訪ねた。

するとどうだ。

いきなり騎士が襲って来た。慌てず騒がず、触れることなく返り討ち…

その後も騎士、メイド、魔法使い…刃向かう者は皆殺し。遂には錯乱した城主をも始末。

そのまま寢室を探して歩きまわっていると見つけた広間。

其処には流し込んだ魔力、作動の要である構成、全てが中途半端で稚拙な魔法陣と、誰かの手記。

そしてその中心には、血を抜かれて息絶えた娘。

この時、オルロワージュは考え付いた。

『対等となる存在が居なくば己の一部を分け与え、近しい存在を創ればよい。』

自身の一部を与えて生還した存在は、悪魔にも皆無。強すぎる力に

器が耐えきれず内側から崩壊するからだ。

この前例が在るから無駄だと分かりきっていた。だが、こんな真似をしようと思うたのは、生きること疲れきったオルロワージュの気紛れか…それは本人にも分からない。

とにかく1から弄り、作り直した魔法陣に悪魔の中でも一際強大な己の血を媒介に試した転生の秘術。はやる心を抑えて明朝まで待てども娘は動かなかった。

「分かりきっていたことを…まるで幼子だな。」

失望したオルロワージュは魔界に帰った。だが彼にもう少し時間が許されていれば…

「う、うう…え？血が…私が殺した？ああ…ああ…嘘…嫌ああ！  
！」

あと、もう一刻の猶予が許されていれば彼の望みは叶っただろう。分け与えた量がほんの一部故に、まだまだ脆弱な力しか持たないが、確かに己の知識と力…直前の記憶を受け継いだ理想の寵姫を手に入れる願いが叶っただろう。

2人の運命はすれ違うことは有っても、交わることは無かったのだ。

エヴァがオルロワージュを憎む理由…

薄ぼんやりと霞掛かった『記憶』の中にある、自身を吸血鬼にする為だけに無抵抗なメイドまで殺した映像。

その癖、のうのうと己は生きている。その傲慢さが、エヴァには許せなかった。だからこそ、過去の清算を込めて地獄に叩き落とすと決めた。

だが実際には少し違う。受け継いだ記憶にあるオルロワージュが、殺しをしたのは事実だが人が虫を払ったのと同じく防衛しただけ。それを魔法陣の作成に転用しただけなのだ。

此処でも2人は致命的なすれ違いを演じる。

「エヴァ、その程度では私は殺せんぞ？」

何体もの寵姫の召喚を繰り返しも息は乱れず、汗一つかかない涼しげなオルロワージュ。

「黙れ！貴様が私の名を口にするなあああ！！！」

瞬時に傷は治るとはいえ、打ち崩せないエヴァ。

千日手の状況に見えるが、その果てに待つのは魔力量の差による負け。

この結末から打開する為に、全てを強制気体化させて無に帰す術式『断罪の剣』を握り締め、エヴァはオルロワージュに飛びかかる。

「何と！寵姫の囲いを易々と突破しただと！？」

「その腕貰ったぞ！！」

事実上、周囲への被害を最小限に留めて行使出来る断罪の剣。これを見切られたらエヴァは勝てない。だからどれだけ傷が深かろうとも省みず、特攻。  
オルロワージュの腕を切り落とす！

「~~~~ツツツツ!?再生しないだと!？」

「まだまだ!!」

うろたえる隙を逃さず、断罪の剣で残った腕をも落とす。

「鳥籠の中の小鳥だと思っていたが…爪を隠した鷹だったか。」

バランスを失ったオルロワージュは膝を付き、エヴァを見上げる。

「フン、貴様に用意されていた道は死への一直線だけだ。」

「まあ待て……聞かせてくれ。」

お前は私に創り変えられてからの600年、幸せだったか？それとも不幸だったか？」

素っ頓狂な質問にエヴァも目を丸くして驚き、チラッとノエルを見る。

また中途半端に意識が戻った朝倉に、腹が立ったのか拳骨を落として『ナツプ』で寝かしていた。

アイツらしいと言えはらしいが、締まりの無い連れ合いだと改めて思う。

「幸か不幸だったかは、死ぬ間際に決める主義だ。」

「ふふふ、それには私も同感だ。」

それにしても、まさか女の手に掛かって死ぬ羽目になるとは…痛み

が無ければ、夢だと思えるたのにな。」

「……………」

「最期にこれだけは遺そう…エヴァンジェリンよ、災厄の影は既に間近まで迫っているぞ。」

「遺言はそれだけか。」

生涯を通して孤高の存在。最強故にありふれた幸福を渴望した男、オルロワージュ。

最後は己を恐れず立ち向かう…それも遙か昔の気紛れが生み出した奇跡の存在…『血を分けた』娘にして最愛の姫の手によって逝った。

「オラ！キリキリ便所掃除しやがれ！」

「へい…」

動きが悪い朝倉に、チャチャゼロの怒号が飛ぶ。

「（カメラの映像も全部真っ黒だし壊れたから弁償！



バシたから2万字の反省文の提出に半年間毎日、寮全部の便所掃除の罰…しかも頭はたんこぶだらけ。くっそ〜、やってらんないよ!!」

「やる気有んのかテメエ!!」

調子扱いてると使用済みの『どっぽん』投げんぞオラ!

「わ、分かったって!ちゃんとやるから!ね、ね、ね?」

「チツ……………次は、警告無しで投げるからな」

「(監視員の茶々ちゃんが怖くてサボれないのが辛い。)(」

朝倉はあれから関東魔法協会御用達の病院に担ぎ込まれて経過観察の後、学校に復帰…の前に親御さん呼び出された。

両親も自分達の躰が足りなかったと猛省したが、せつかく寮生活をさせるのだからこの際、厳しく教育して欲しいと丸投げ。この子にして、この両親在りか…

とにかく言質を取った学園により、朝倉は罰を受けている。

「こんなペースじゃ日が暮れるぜ！早くしろ。」

「（いつか必ず復活してやるんだから！）」

1日も早く、真人間に更正してくれるのを願うばかりである。

桜並木通りの怪人事件……その原因を絶ったノエル達は、秋の陽向  
でのんびり過ごしていた。

「ノエル、ありがとうな。」

「んんん？」

「だって、私を信じて手出ししなかったらどう？」

「んんん……」

「照れるなっ……！このこのこの……！！  
そんな頑固者にはボディープレスだあ……」

「ちょ、ウザい……」

じゃれついてくるエヴァの相手をしながら、あの日…エヴァとオルロワージュの戦いを振り返る。

「（オルロワージュは本当の力を出してない。

それどころかエヴァとの戦いを楽しむ為に手を抜いてたとさえ錯覚する…）」

攻めていたのはエヴァだけであり、龍姫の行動も防御と迎撃に徹している。

本体のオルロワージュ自体も幾度となく付け入る隙が巡ってきたにも関わらず徹頭徹尾、攻撃をしなかった。

「（オルロワージュ。お前、本当は……）」

「どうしたのん？ノエルは何を考えてるだあ」

寝転がってるノエルにエヴァの好きにさせてたが、さっきまで乗っかってるだけだと思っただら、今度は子供のようにぐりぐりと身体を押し付け始めた。

「（……これ以上は下衆の勘ぐりか。）」

別に！っーか、くねくねくね気持ち悪いからどいてくれませんか？

ついでに、日差しを遮らんで欲しいんすけどぉ〜」

頭を切り替えたノエルは、鬱陶しくて堪らないと敢えて気だるげな口調と動作でエヴァを退ける。

「私も日差しに当たりたいんだじよ〜」

「じゃあ俺は十分暖かくなったから、散歩がてら銀杏拾いに行くわ。お前はそこでずっとゆっくりしとけ！」

「あゝん、ノエルの意地悪う〜」

早口に言い終わるやいなや急いで外に出て行くノエル。ノエルを追うエヴァも太陽の光が差す下へと向かった。

## Sa・Ga88(後書き)

『バックスタップ』、『失礼剣』

前者は影に潜み敵の後ろからジャンプしながら斬りつける。極々たまに、敵を一撃で倒したりもするけど技の命中率と攻撃力自体は高くない。

後者は相手に背後を見せたり、敗北宣言などで油断を誘ってから、剣を振るい攻撃する技。敵に回避されにくいけど攻撃力自体が半端無く低いのが特徴。完全にバックスタップの下位互換技。

今回、チャチャゼロに使わせたのは『バックスタップ』でした。

『オルロワージュ』

Sa・Gaフロンティア  
アセルス編・ラスボス

RPGシナリオライター生田美和さんの悪夢に現れた神秘的な青年。この時の体験を基に、そっくりそのまま産み出されたキャラクター。

発売から10年以上も経った今もなお、強さだけでなく生き様やカリスマ性、シナリオの秀逸さをより一層引き立て、愛されるラスボス…

その誕生には生田さんも説明出来ない、摩訶不思議な体験があった。うーん、ロマンシングを感じますね！

#### LevelScript

サガ・フロンティア〜アセルス編〜回顧録・その2

(shoda-miwa.cocolog-nifty.com/blog/2011/02/post-a3d4.html)より

オルロワージュ、ボンソワール！なんつつてね！  
フランスみたいな洒落た名前もセンスの塊！

紹介に戻りますが流行りの撫でポ、ニコポなんぞ生温い！  
『この女、寄越せ！』をマスターした最強のハーレムマスター。  
『針の城』という城に君臨し続ける強力な妖魔。

アセルス編が始まる元凶。

分かり易く伝えるなら

つべー、馬車で女ひき殺しちまった。

あ、血イ入れて妖魔にしてみんべ！

ちょっとチャラいけど、アセルスはこんな感じで拉致られて始まる。

彼を見てると不老不死、魅力チートな主人公が迎える終焉の1つなのかなあと考えさせられています。

生まれたら腹一杯生きて、往生…一生を完走。

未来永劫、最後の終わりが来ないのに走り続ける宿命なんて…難儀な存在ですね。

S a ・ G a 8 9 (前書き)

山奥、陸の孤島で一週間ぶっ通しで研修。  
もうね…しんどかったよ。

とにかくお待たせしてゴメンナサイ。



冬将軍が天下統一し、家から出るのも億劫…それでも一年中で一際忙しくなる為に出ざるを得ない…そんな師走、12月。

よく分からない障壁が張られている麻帆良であろうと、冬将軍が放つ大寒波の矛先から逃れることは能わず!!  
寧ろ、例年以上に寒いらしくて、雪もド力盛りが予想されるから、喜ぶのは子供とクリスマスで出歩くカップルだけである。

「エヴァ〜今年も、もうすぐで終わりだなあ〜」

「本当だにゃ〜」

「ふ〜、ここから動きたくない。エヴァ!みかん、ちょっとみかん取って。」

「ん〜〜、みかん達…こっち来いやあ。」

だからノエル達は基本的に外出していない。買い物は『シャドウ・サーバント』でチャツチャと済ませるし、運動不足の解消は魔法球。今だって唯の一度でも威力を味わえば何人も抗えない、宇宙最強の暖房器具であるKO・TA・TSUでぬくぬく。

エヴァは『マリオット』に使う魔力の糸を伸ばし、離れた所に置いてあるみかんが入ったダンボールを引き寄せる。

「あ、ついでにゴミ箱とチラシ。」

「ノエルは昔っから物臭だなあ」

やってやる変わりに、みかん剥いて食べさせるんだぞ！」

「O・K、O・K！早よやって。」

「はいはい…」

続けざまにリクエスト通りにゴミ箱とチラシを引き寄せる。

「（これで緑茶が揃えば完璧だけど…分身出して準備させるのも、めんどっちいから要らね。）」

みかんの皮を剥き剥き…

「うーん…みかん甘酸っぱくてウマウマ」

ほれ、お前にも食わしたるから早よ口開ける。」

「あ〜ん…トレビア〜ん！」

普段から『マリオット』、『シャドウ・サーバント』を日常の至るシーンで活用するノエル、エヴァの2人。

無駄に洗練されたスキルの無駄遣いだと言わざるを得ない。

「ところでさあ…もうすぐ新年ってことは、冬休みってことだろ？明日菜とチャチャゼロは寮から帰ってくるのかねえ？」

テレビを見ながらノエルは言う。

「どつちでもイイじゃないか。次！次のみかん！」

「はいはい、分かりました。」

夏休みのお盆や、冬休み期間中の年末年始…麻帆良女子の寮からは  
人気が消える。

それは1-Aメンバーも同じ。

各々の家族の下へ帰省するのだが『いいんちよ』、『ちづ姉』の実  
家…超巨大企業クラスにもなると、黒塗りのベンツが毎回お迎えに

来る者もいる。

その時に外部の人間を臨時管理人として雇う訳にはいかない。娘っ子達だけにするのも常識的に考えてアウトだ。

「タカミチのように男だったらまだ楽だった。女の子を育てるってだけでも面倒なのに、どうしてこども厄介事は舞い込んでくれるかなあ。」

防衛システムも整い、麻帆良に来た当時と比べてグンと楽になった。

今…ノエルの気懸かりは、昨今の魔法ネタを題材にしたファンタジー作品の増加に比例し、魔法に対してボケた認識を抱いた者達が増えてきたこと。

特に怖いモノ見たさで世界樹に接触しようとするガキを、押さえ込むことを除けばそれぐらいであった。

明日菜、長瀬などの武闘派…1-Aメンバーの一部が寮の広場に屯<sup>たむろ</sup>し、ぐだぐだとお喋りに花を咲かせていた。

「古 は残留組？」

そうしていると、ペットボトルに残ってる清涼飲料水を飲んでいた

明日菜から帰省ネタが飛び出し、古 に振られる。

「実家に帰るの、面倒アルからな。」

「楓も？」

「拙者も右に同じく。」

強い相手には取り敢えず挑んでから考える無鉄砲な気質、苦手な科目の補習授業を受ける時も大概一緒な2人は、大親友の間柄。今だって『仲間だイエーイ！』なんて言いながら、長瀬と古 はハ イタッチをしている。

「ということは帰省組とで大体、半々ぐらいね。」

「そういう明日菜は里親さんの元に帰省しないんでござるか？」

「まあねー！『夫婦2人つきり』に水を差すのも野暮ってモンでしょ？」

明日菜も一時はノエルが待つマンションに帰ろうかと考えた、が…すぐにエヴァの事を思い出して辞めた。

自分とチャチャゼロが居なくなつた今…エヴァは全力で甘え、ノエルは何だかんだ言いながらも相手をしているビジョンが浮かんだからだ。

別に帰省しなくて困ることも無いから、ゆっくりのんびり2人つきりを味わわせてやろうという魂胆だ。

麻帆良女子中等部の基本理念は『自調自考』…全て己で調べ、考えて判断する。

明日菜は、この一年間でほんの少しだが大人になっていた。

その後も他愛もない話しに花を咲かせたが宴もたけなわ…そろそろ解散しようかという空気が漂い始めた時、ついさっき便所掃除が終わったらしく疲れきつた朝倉が現れた。

「あ…」

「うわ…」

「アンタは冬休み、帰省するの？」

古や長瀬に話し掛けた時のような爽やかな風ではなく、もっと嫌らしく…ニマニマ笑いを浮かべながら、明日菜は尋ねる。

「……今年中は帰って来るな！反省してろだつてさ！！  
まあ、過去に犯した過ちを真摯に受け止めて反省中ってことよ。  
それじゃ、アタシは自室で謹慎するわ。」

朝倉は自販機から目当てのジュースを取り出して、サッサと帰って行った。

「朝倉は変わったでござるな」

「確かに。」

何があつたのかはサッパリだけでも、最近は付き合いが悪くなったアルな。」

朝倉は桜並木通りの一件でキツいお灸を据えられてからは、愛用のカメラ片手に出歩く事もめつきり減ったし、仲間内で遊びに行く事も控えるようになった。

その態度を大人しく反省していると捉えるかは人それぞれ。

だが本当にそれだけで『麻帆良のパパラッチ』………転んでもタダでは起きない朝倉和美という女が、真人間への道を歩むというのか？

明日菜には甚だ疑問である。

「さてさて、期末テストが控えてるから拙者は勉強するでござる。そんな訳で…ドロンさせてもらおうかな。」

「むむ、楓が勉強するなら私もやらねばなるまいアル！…それじゃ、また明日アル！」

「は〜い、おやすみ。」

1人抜け、2人抜けて…明日菜だけが残された。

「お目当ての買ってきたよ〜」

「おう！帰ってきたか。」

朝倉が自室に帰れば、女子寮には似つかわしくない渋い声が出迎える。

声の主は勿論、ルーム・メイトの少女などではなく新たに迎え入れた…というより、この部屋に迷い込んできた住人のものだ。

「くう〜！この一杯の為に今日も1日走り回って来た苦労があるってモンだい。」



アルミ缶の中を一気に飲み干した声の主の性別は男、それもどことなくオヤジ臭い。

だが、人ではない。ぬらりひよんでも無いし、もっと別の一見チャームングに見える風貌の小動物。

「毎度毎度、よく飽きずに飲んでまあ……アルジャーノンはその味が好きだねえ。」

ネズミらしく水挿しから飲まず、ダイレクトに一気に飲みます。

「けど代わりに情報をくれてやってるだろ？」

持ちつ持たれつ……お互い最小限の労力で望みの物を手に入れてんだから、固いことは言いつこ無しだぜ。」

ジュースを飲み干し、カモフラージュ用の住居として朝倉に用意させたケージ内の草を敷き詰められた一角……そこに寝転がりながら喋る存在の名は、魔法オコジヨの『アルジャーノン』。

「それにしてもアルジャーノンが来てからは大助かりだよ。おかげでスクープが唸って仕方ないしね。」

「それくらいで満足なのか？オレはまだ全力の半分も出してないんだぜ？」

「ええ〜！！？これで全開の半分…スゴい。」

ネズミの分際で見事なドヤ顔を決めるアルジャーノンに、朝倉の期待も高まる。

だが世の中、タダで物事を引き受ける奴は居ない。

「あゝあ、フグのからあげクンを腹一杯食いてエな。」

「……フグ、かあ。」

適当な草を紙に包み、即席のタバコで一服しながら無駄に大きな独り言をアルジャーノンは言う。

「（うゝん、フグの唐揚げくらいならスーパーのお惣菜コーナーに売ってる…ジュースも懐が痛いけどこれも必要経費かな。）  
仕方ないわね。明後日ね。」

「お！賢いじゃないか。それでこそオレっちを雇う器が在るってもんだぜ。」

まあ期待してな。オレは昼よりも夜の方がパワフルなんだからよ。」

「ハイハイ、そーですか。」

わしゃわしゃと喜びの可愛いアピールをするアルジャーノンが無視した朝倉は、早速パソコンを立ち上げて自分のブログを更新する準備を始める。

「アルジャーノン。今日の成果はどんな感じだった？」

「今日仕入れてきたネタはな……………」

ここから『麻帆良のパパラッチ』…もと『麻帆良のブン屋』の本領発揮だ。

このアルジャーノンはマスコットキャラ的な風貌に似合わず、なかなかの曲者である。

生来の頭の切れと対象の欲望を見抜き、応えるという小憎らしいスキルを活かし、幾人もの魔法使いのパートナーとして鳴らしてきたオコジョ妖精。

最後に付いていた魔法使いが裏世界でへマをして逮捕。

アルジャーノンも連帯責任で刑務所にぶち込まれて以来、永らくシヤバとは疎遠だったが模範囚として仮釈放されたその日から麻帆良を目指した。

そして見つけた。自分は賢いと思ってるつもりだが端から見たらそんな事は無い……並の人間以上に賢いと自負するアルジャーノンからしたら、思い通りに動かすくらい雑作もない寄生相手。朝倉和美に目を付けたのだ。

そのやり口は巧妙だった。

テキトーな野良猫を挑発して無抵抗のまま暫く受ける…そして、あたかも命からがら逃げ延びた満身創痍を装って朝倉に接触。

一時だけでも構わないから助けてくれと頼み込んで応急手当て、魔法で一気に治癒。

そこからは口八丁手八丁のセールス・トーク開始。

朝倉のほとぼりが冷めるまでは色々と不自由をしている事を聞き出すと、自ら麻帆良市内を散歩がてら、うるついで噂や事件の情報を収集すると名乗り出た。

流石の朝倉もポツと出のワケ分からん生物を信用する道理も無いから遠慮したが『助けてくれた恩に報いたい』と熱心に口説く。

『治癒の魔法を見てただろ？オレの能力はアレだけじゃない。念写でオレっちが見たモノを写真に焼き付けれるのさ！結果的にスクープが増えるぞ？』

あゝ、今ならタダ働きの滅私奉公だ。

ん？まだ遠慮してんのかい？器がデカいねえ〜奥ゆかしいねえ…オレっち、姐さんのこと気に入らしたぜ。

じゃあ、こうしやしょうか…持ちつ持たれつ、オレっちを雇うんでさあ。

まあ、本格的に雇うか雇わないかは、次の契約更新でいいですね？』

流石に色々と胡散臭い存在だから、その日は追い出した。

それでもアルジャーノンは日々、通い詰めて『きつと朝倉が望むであらう』ネタを甲斐甲斐しく提供した。

そして、そのどれもが朝倉のメガネに叶う逸品ばかりだったし、中には使うのを躊躇うほどドギツイネタも紛れ込んでいた。

こうして合理的な共生関係は完成した。

「ん？アルジャーノン？ニマニマしてるけど、どうかしたの？」

「ああ、？ちよつとした『ネタ』の扱い方を決め兼ねただけだ。」

「ふん。」

（どうせ、いつものスケベ自慢やら美鼠を引っかけてきた程度のオヤジ・ネタっしょ。）

至極どうでもよさそうな内容だと判断した朝倉は、止まっていた作業を再開して手慣れた動きでキーボードを叩き始める。

無償提供していた頃の甲斐甲斐しい姿。

本契約を結んだ頃から取り繕わなくなり、口調も全く違う素の態度。

思い返せばガラツと変わった。

『だけど50：50…お互い対等な関係に変わったんだもんね』

新聞を書くだけの賢さと、まだまだ子供の青臭さを持ち合わせているが故に朝倉は気付かない。

「（それにしてもチヨロかったな。

欲しがってるモノを示してやれば、すぐに住処とメシが手に入る…  
…これだから人間を利用してやんのは止められねえ。

故郷の奴等もバカだぜ。何でオコジヨ妖精だからって魔法使いに仕えて、サポートしてんだ？

人間がオレ達を利用するなら、オレ達が利用してもイイじゃねえか。  
朝倉：オレはお前からケツの毛まで筆り取ってやるぜ。」

自分が引き入れた存在は剽軽者でドスケベな親父然りとした風を装



S a ・ G a 8 9 (後書き)

『アルジャーノン』

ロマサガ3・イベントボス

例のイベント… 『私が町長です』 で登場するボス。

野ネズミを率いて町つつうか、村を恐怖のどん底に叩き落とした教授謹製の天才ネズミ。

まあ、倒すにはアルジャーノンを燻し出すイベントアイテムが必要ですが、全体攻撃でチャチャッと始末する事も可能らしいです。  
作者は様式美を守る人間だから試した事は有りません。

( ・ ^ O ^ ・ ) 『オレっちと契約して魔法少女(奴隷)になってよ』

アルベール・カモミール？彼はひよつとこキヤスティングの犠牲になったんや……………

全然話は変わるけど、朝倉和美… 当分は名前すら使っ気は無かったのに、終わってみれば何故かガッツリ登場してるなんて…………… 恐ろしい娘！



誤字脱字を見つけ、気が向いた方は報告下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1610t/>

---

紅き翼？七英雄じゃろがいッ！

2011年12月12日23時51分発行